兵庫県文化財調査報告　第270冊

神戸市兵庫区

兵庫津遺跡Ⅱ

（浜崎・七宮地区の調査）

一般国道２号共同溝整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

〔本 文 編〕

２００４年３月
兵庫県教育委員会

兵庫県文化財調査報告　第270冊

神戸市兵庫区

兵庫津遺跡Ⅱ

（浜崎・七宮地区の調査）

一般国道２号共同溝整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

〔本 文 編〕

２００４年３月
兵庫県教育委員会

18区　SX81　石組遺構（東から）

西幸寺門前の18区　SX81（南から）

作業風景

302

土製煮炊具　鉄鍋形Ⅲ B類

795

土製煮炊具　鉄かぶと形Ⅰ類

716

土製煮炊具　羽釜形B系列Ⅰ類

1139

瓦質土器鉢

1600

備前焼擂鉢Ⅲ A類

126

備前焼擂鉢Ⅳ A類

132

備前焼鳶口壺

727

備前焼鉢

1065

丹波焼甕Ⅳ類

1194

丹波焼壺Ⅰ類

127

瀬戸・美濃系陶器　鉄釉水滴

144

瀬戸・美濃系陶器　天目茶碗

145

瀬戸・美濃系陶器　灰釉皿

820

中国製　天目茶碗

1585

龍泉窯系青磁皿

兵庫津遺跡出土銅製品

※a・bは兵庫津遺跡Ⅰ（西出地区調査）出土の遺物であり、本報告では掲載していない。

例　　言

1．本書は一般国道２号共同溝整備事業に伴い、平成８・９・10年度に調査を実施した神戸市兵庫区兵庫町１丁目～東柳原町１丁目に所在する兵庫津遺跡浜崎地区、及び兵庫区七宮町1丁目に所在する兵庫津遺跡七宮地区の発掘調査報告書である。（調査区の所在地、調査期間、担当者などの詳細については第Ⅰ章「はじめに」を参照）

2．過去、兵庫県教育委員会が発行した兵庫津遺跡関連の調査報告書には、兵庫県文化財調査報告　第243冊『兵庫津遺跡Ⅰ（西出地区の調査）－一般国道２号共同溝整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－』2002年があり、本書はそれに続く地区のものであるため、書名を『兵庫津遺跡Ⅱ（浜崎・七宮地区の調査）－一般国道２号共同溝整備事業に伴う発掘調査報告書－』とした。

3．発掘調査については、建設省近畿地方建設局の、また整理事業については国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。

4．整理作業は平成11年度～15年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

5．遺構の実測は、調査員が行った。遺構の製図および遺物の実測・製図は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所嘱託員が行った。

6．写真は、遺構を調査員が撮影し、遺物については株式会社イーストマンに撮影を委託した。

7．本書に使用した方位は国土座標Ⅴ系を基準とし、標高は大阪湾平均海水準（Ｏ．Ｐ）を使用した。

8．本書の執筆は遺構に関しては、埋蔵文化財調査事務所　深江英憲及び各調査区の担当者が執筆し、文責は各調査区の末尾に明記している。また、遺物については、埋蔵文化財調査事務所、池田正男、岡田章一、菱田淳子、深江英憲、池田征弘、松岡千寿及び兵庫県県民生活部芸術文化課の長谷川 眞が分担し、文責は目次に明記した。

9．本書の編集は岡田、菱田、深江が行った。

10．出土品並びに写真、図面類は埋蔵文化財調査事務所に保管している。

11．発掘調査および出土品整理に際しては、下記の機関並びに個人から御指導、御教示を得た。ここに、貴機関名並びに御芳名を記して深甚の謝意を表する。

大手前大学史学研究所、関西近世考古学研究会、財団法人竹中大工道具館、備前焼研究会
兵庫県立歴史博物館、兵庫津学習会、兵庫津研究会、日本中世土器研究会、歴史資料ネットワーク
秋枝　芳、伊藤　晃、伊野近富、大国正美、小栗栖健二、工楽善通、佐藤公保、鋤柄俊夫
楢崎彰一、乗岡　実、橋本久和、藤澤良祐、藤田明良、間壁葭子、松井良祐、百瀬正恒
森嶋康夫、森村健一、山本博利、渡邊　晶

本文目次

Ⅰ．はじめに …… 1
1．調査に至る経緯 ……岡田章一…… 1
2．共同溝整備事業に伴う発掘調査の経過と体制 ……岡田…… 2
3．整理作業の経過と体制 ……深江英憲…… 5
Ⅱ．遺跡をとりまく環境 …… 8
1．兵庫津の沿革 ……岡田…… 8
2．発掘調査の成果 ……岡田・松岡千寿……13
3．小結 ……岡田……21
Ⅲ．遺　構 ……24
1．浜崎地区 ……24
（1）確認調査 ……深江……24
（2）全面調査 ……深江他……24
2．七宮地区 ……深江他……56
（1）確認調査 ……深江……56
（2）全面調査 ……深江他……58
Ⅳ　遺　物 ……61
1．浜崎地区 ……61
A．古代の遺物 ……深江……61
B．中・近世の遺物 ……61
1　土器・陶磁器 ……61
（1）土師器・土師質土器 ……長谷川　眞……61
（2）瓦器・瓦質土器 ……岡田……68
（3）土製煮炊具 ……長谷川……69
（4）須恵器 ……池田征弘……81
（5）陶器 ……85
①　備前 ……松岡……85
②　丹波 ……長谷川……87
③　常滑 ……岡田……92
④　瀬戸・美濃 ……岡田……92
⑤　肥前 ……岡田……97
⑥　京・信楽 ……岡田……97
⑦　堺・明石 ……岡田……98
⑧　舞子・明石 ……岡田……98
⑨　産地不明の陶器 ……岡田……98
（6）磁器 ……岡田……99

① 中国製 ……岡田…… 99
② 肥前系磁器 ……岡田……102
③ 瀬戸・美濃系磁器 ……岡田……105
④ 三田系磁器 ……岡田……105
⑤ 産地不明の磁器 ……岡田……105
2 土製品 ……岡田……108
3 瓦 ……岡田……109
4 石製品 ……岡田……109
5 金属製品 ……池田正男・深江……110
6 木器・木製品 ……菱田淳子……117
2．七宮地区 ……118
A．近世・近代の遺物 ……118
1 土器・陶磁器 ……118
（1）土師器 ……岡田……118
（2）瓦質土器 ……岡田……118
（3）無釉陶器 ……岡田……118
（4）施釉陶器 ……岡田……120
（5）磁器 ……岡田……122
2 土製品 ……岡田……127
3 瓦 ……岡田……128
4 ガラス製品 ……岡田……128
5 石製品 ……岡田……128
6 金属製品 ……池田・深江……128
7 木器・木製品 ……菱田……130
Ⅴ．遺構と遺物の検討 ……133
1．兵庫津の町割と発掘調査成果 ……深江……133
2．時期設定と土器・陶磁器組成の変遷 ……岡田……139
3．土器組成の変遷からみた中世兵庫津の物流と交易 ……岡田・長谷川・松岡……167
Ⅵ．終わりに ……岡田……176

巻頭図版

図版1 18区SX81 石組み遺構（東から）
図版2 上：西幸寺門前の18区SX81（南から）
下：作業風景
図版3 兵庫津遺跡出土土器①
図版4 兵庫津遺跡出土土器②
図版5 兵庫津遺跡出土土器③
図版6 兵庫津遺跡出土銅製品

挿図目次

第１図　兵庫津遺跡と周辺の主要遺跡分布図……14
第２図　兵庫津遺跡の調査地点……15
第３図　土師器皿分類表（１）……67
第４図　土師器皿分類表（２）……68
第５図　土製煮炊具分類表（１）……75
第６図　土製煮炊具分類表（２）……76
第７図　土製煮炊具分類表（３）……77
第８図　土製煮炊具分類表（４）……78
第９図　土製煮炊具分類表（５）……79
第10図　土製煮炊具分類表（６）……80
第11図　東播系須恵器鉢分類表（１）……83
第12図　東播系須恵器鉢分類表（２）……84
第13図　備前焼分類表（１）……88
第14図　備前焼分類表（２）……89
第15図　備前焼分類表（３）……90
第16図　丹波焼分類表（１）……93
第17図　丹波焼分類表（２）……94
第18図　丹波焼分類表（３）……95
第19図　兵庫津の町割と本調査成果の対応図……134
第20図　土器・陶磁器編年表（１）……146
第21図　土器・陶磁器編年表（２）……147
第22図　土器・陶磁器編年表（３）……148
第23図　土器・陶磁器編年表（４）……149
第24図　土器・陶磁器編年表（５）……150
第25図　土器・陶磁器編年表（６）……151
第26図　土器・陶磁器編年表（７）……152
第27図　土器・陶磁器編年表（８）……153
第28図　土器・陶磁器編年表（９）……154
第29図　土器・陶磁器編年表（10）……155
第30図　土器・陶磁器編年表（11）……156
第31図　土器・陶磁器編年表（12）……157
第32図　土器・陶磁器編年表（13）……158
第33図　土器・陶磁器編年表（14）……159
第34図　土器・陶磁器編年表（15）……160
第35図　土器・陶磁器編年表（16）……161

第36図　土器・陶磁器編年表（17）……162
第37図　土器・陶磁器編年表（18）……163
第38図　土器・陶磁器編年表（19）……164
第39図　土器・陶磁器編年表（20）……165
第40図　土器・陶磁器編年表（21）……166

表目次

第１表　兵庫津関連年表（１）……9
第２表　兵庫津関連年表（２）……10
第３表　兵庫津遺跡の調査地点と周辺の主要遺跡……16
第４表　土師器皿分類表（１）……65
第５表　土師器皿分類表（２）……66
第６表　土製煮炊具分類表……74
第７表　東播系須恵器捏鉢の形式別出土傾向……82
第８表　兵庫津遺跡（浜崎地区）出土遺物観察表……180～236
第９表　兵庫津遺跡（七宮地区）出土遺物観察表……237～244
第10表　金属器属性表（１）釘……245～250
第11表　金属器属性表（２）鏃……251
第12表　金属器属性表（３）煙管……251

図　版　目　次

図版１　浜崎・七宮地区確認調査トレンチ・グリッド位置図①
図版２　浜崎・七宮地区確認調査トレンチ・グリッド位置図②
図版３　浜崎・七宮地区確認調査トレンチ・グリッド位置図③
図版４　浜崎地区主要グリッド断面図
図版５　浜崎・七宮地区全面調査区位置図
図版６　浜崎地区主要調査区断面図

浜崎地区（遺構）

図版７　２区遺構配置図・平面図
図版８　３・４区遺構配置図
図版９　５区遺構配置図
図版10　６区遺構配置図
図版11　７区遺構配置図
図版12　７区遺構平面図
図版13　８区遺構配置図・平面図
図版14　９区遺構配置図
図版15　10区遺構配置図
図版16　11区遺構配置図①
図版17　11区遺構配置図②・平面図
図版18　12区遺構配置図
図版19　13区遺構配置図①
図版20　13区遺構配置図②
図版21　13区遺構平面図
図版22　14区遺構配置図
図版23　14区第Ⅰ面遺構平面図
図版24　14区第Ⅱ面遺構平面図
図版25　15区遺構配置図①
図版26　15区遺構配置図②
図版27　15区遺構平面図①
図版28　15区遺構平面図②
図版29　16区遺構配置図
図版30　16区遺構平面図
図版31　17区遺構配置図
図版32　17区遺構平面図
図版33　18区遺構配置図①
図版34　18区遺構配置図②
図版35　18区遺構配置図③－１
図版36　18区遺構配置図③－２・断面図
図版37　18区遺構配置図④
図版38　18区第Ⅰ・Ⅱ－上面遺構平面図
図版39　18区第Ⅱ－中面遺構平面図
図版40　18区第Ⅲ面遺構平面図
図版41　19区遺構配置図
図版42　19区遺構平面図
図版43　20区遺構配置図・平面図
図版44　21区遺構配置図
図版45　22区遺構配置図
図版46　23区遺構配置図・平面図
図版47　24区遺構配置図・平面図
図版48　25区遺構配置図・平面図
図版49　26区遺構配置図①
図版50　26区遺構配置図②
図版51　26区Ⅱ面遺構平面図
図版52　27区遺構配置図
図版53　27区遺構平面図
図版54　28区遺構配置図
図版55　28区遺構平面図①
図版56　28区遺構平面図②
図版57　29区遺構配置図①
図版58　29区遺構配置図②
図版59　29区遺構平面図
図版60　30区遺構配置図
図版61　30区遺構平面図
図版62　31区遺構配置図・平面図
図版63　32区遺構配置図①
図版64　32区遺構配置図②
図版65　32区遺構配置図③
図版66　32区遺構配置図④
図版67　32区遺構平面図①
図版68　32区遺構平面図②

図版69　33区遺構配置図①
図版70　33区遺構配置図②
図版71　33区遺構平面図
図版72　34区遺構配置図①
図版73　34区遺構配置図②
図版74　35区遺構配置図・平面図
図版75　36区遺構配置図
図版76　37区遺構配置図・平面図
図版77　38区遺構配置図①
図版78　38区遺構配置図②
図版79　38区遺構平面図
図版80　39区遺構配置図
七宮地区（遺構）
図版81　北トレンチ平面図・立面図・断面図
図版82　南トレンチ平面図・断面図
図版83　東地区石垣平面図・立面図・断面図・築造工程模式図
図版84　西地区石垣平面図・断面図
図版85　西地区石垣立面図・断面図
浜崎地区（遺物）
図版86　1・2区出土遺物
図版87　2・3区出土遺物
図版88　3区出土遺物
図版89　4区出土遺物
図版90　7区出土遺物
8区出土遺物①
図版91　8区出土遺物②
9区出土遺物①
図版92　9区出土遺物②
図版93　9区出土遺物③
図版94　10区出土遺物
11区出土遺物①
図版95　11区出土遺物②
図版96　11区出土遺物③
12区出土遺物
図版97　13区出土遺物①
図版98　13区出土遺物②
図版99　13区出土遺物③
図版100　13区出土遺物④
図版101　13区出土遺物⑤
図版102　13・14区出土遺物①
図版103　13・14区出土遺物②
図版104　13・14区出土遺物③
図版105　13・14区出土遺物④
図版106　13・14区出土遺物⑤
14区出土遺物①
図版107　14区出土遺物②
図版108　14区出土遺物③
図版109　14区出土遺物④
図版110　14区出土遺物⑤
15区出土遺物
16区出土遺物①
図版111　16区出土遺物②
図版112　17区出土遺物
18区出土遺物①
図版113　18区出土遺物②
図版114　18区出土遺物③
図版115　18区出土遺物④
図版116　19区出土遺物
20区出土遺物
図版117　21区出土遺物
図版118　22区出土遺物①
図版119　22区出土遺物②
図版120　22区出土遺物③
図版121　23区出土遺物①
図版122　23区出土遺物②
24区出土遺物①
図版123　24区出土遺物②
25区出土遺物①
図版124　25区出土遺物②
26区出土遺物①
図版125　26区出土遺物②
図版126　26区出土遺物③
図版127　26区出土遺物④
図版128　26区出土遺物⑤
図版129　26区出土遺物⑥

図版130　27区出土遺物①
図版131　27区出土遺物②
図版132　27区出土遺物③
　　28区出土遺物①
図版133　28区出土遺物②
図版134　29区出土遺物①
図版135　29区出土遺物②
図版136　30区出土遺物
図版137　31区出土遺物①
図版138　31区出土遺物②
図版139　32区出土遺物①
図版140　32区出土遺物②
図版141　32区出土遺物③
　　33区出土遺物①
図版142　33区出土遺物②
図版143　33区出土遺物③
図版144　33区出土遺物④
　　34区出土遺物①
図版145　34区出土遺物②
図版146　35区出土遺物
　　36区出土遺物
　　37区出土遺物
図版147　38区出土遺物①
図版148　38区出土遺物②
図版149　38区出土遺物③
図版150　38区出土遺物④
図版151　38区出土遺物⑤
図版152　38区出土遺物⑥
図版153　38区出土遺物⑦
図版154　38区出土遺物⑧
図版155　38区出土遺物⑨
　　39区出土遺物①
図版156　39区出土遺物②
図版157　39区出土遺物③
図版158　金属器①
図版159　金属器②
図版160　金属器③
図版161　金属器④
図版162　金属器⑤
図版163　金属器⑥
図版164　金属器⑦
図版165　金属器⑧
図版166　金属器⑨
図版167　金属器⑩
図版168　金属器⑪
図版169　金属器⑫
図版170　金属器⑬
図版171　金属器⑭
図版172　金属器⑮
図版173　金属器⑯
図版174　金属器⑰
図版175　金属器⑱
図版176　金属器⑲
図版177　金属器⑳
図版178　銅銭①
図版179　銅銭②
図版180　銅銭③
図版181　銅銭④
図版182　銅銭⑤
図版183　木器①
図版184　木器②
図版185　木器③
七宮地区（遺物）
図版186　土器・陶磁器①
図版187　土器・陶磁器②
図版188　土器・陶磁器③
図版189　土器・陶磁器④
図版190　土器・陶磁器⑤
図版191　土器・陶磁器⑥
図版192　土器・陶磁器⑦
図版193　土器・陶磁器⑧
図版194　土器・陶磁器⑨
図版195　土器・陶磁器⑩
図版196　土器・陶磁器⑪
図版197　金属器①
図版198　銅銭①

図版199　銅銭②
図版200　銅銭③
図版201　木器①（北トレンチ・東地区）
図版202　木器②（北トレンチ・西地区）
図版203　木器③（西地区）
図版204　木器④（西地区）
図版205　木器⑤（西地区）

写真図版目次

浜崎地区（遺構）

図版１　①調査前全景（東から）
②調査前全景（西から）
③１区遺構検出状況（東から）
④１区遺構検出状況（北から）
⑤２区遺構検出状況（東から）
⑥２区遺構検出状況（西から）
⑦２区SK01遺物出土状況
⑧２区SX01検出状況（南から）
図版２　①３区SX01検出状況（西から）
②３区SX01検出状況（東から）
③４区遺構検出状況（北から）
④４区SX01（東から）
⑤５区Ⅰ面遺構検出状況（北から）
⑥５区Ⅰ面土器出土状況
⑦５区Ⅱ面遺構検出状況（北から）
図版３　①６区東側遺構検出状況（北から）
②６区中央遺構検出状況（北から）
③６区西側遺構検出状況（北から）
④６区畝状遺構断面（北から）
⑤７区Ⅰ面SK01（北から）
⑥７区Ⅱ面SK03（西から）
⑦８区Ⅰ面遺構検出状況（北から）
⑧８区Ⅰ面SK02（西から）
図版４　①８区Ⅲ面SX01検出状況（北から）
②８区Ⅱ面包含層遺物出土状況
③９区Ⅱ面遺構検出状況（北から）
④９区Ⅲ面遺構検出状況（北から）
⑤９区Ⅰ面SE01（北から）
⑥９区Ⅲ面土器出土状況（西から）
⑦10区遺構検出状況（東から）
⑧10区SX02，SK04・17（南から）
図版５　①10区SK16（東から）
②10区SX02鏡出土状況
③11区Ⅰ面遺構検出状況（東から）
④11区Ⅰ面SK01（南から）
⑤11区Ⅰ面土器出土状況（北から）
⑥11区Ⅱ面遺構検出状況（東から）
⑦11区Ⅲ面遺構検出状況（西から）
⑧11区Ⅲ面SX12（南から）
図版６　①11区Ⅲ面SX07（南から）
②11区畦西壁断面（西から）
③11区Ⅳ面遺構検出状況（西から）
④11区Ⅳ面SX12（西から）
⑤12区遺構検出状況（西から）
⑥12区SE01,SX01（北から）
⑦12区SE02,SK03・05（北から）
⑧12区SE01（上から）
図版７　①12区SE02（上から）
②12区南側サブトレンチ土器出土状況
③13区Ⅰ面SD13石垣上段（東から）
④13区Ⅱ面SD13石垣下段（東から）
⑤13区Ⅰ面石列（南から）
⑥13区Ⅱ面遺構検出状況（東から）
⑦13区Ⅱ面SK54（北から）
⑧13区Ⅲ面遺構検出状況（西から）
図版８　①13区Ⅲ面SE18（南から）
②13区Ⅲ面SK56断面（東から）
③13区Ⅳ面遺構検出状況（西から）
④13区Ⅳ面SK49土器検出状況

⑤14区Ⅰ面SD04（北から）
⑥14区Ⅰ面SE02（南から）
⑦14区Ⅱ面東側遺構検出状況（西から）
⑧14区Ⅱ面SE19（東から）
図版9　①14区Ⅱ面SE23（北から）
②14区Ⅱ面SD10土器出土状況（北から）
③15区Ⅰ面遺構検出状況（東から）
④15区Ⅰ面SK06（西から）
⑤15区Ⅰ面SK07（西から）
⑥15区Ⅱ面SX01（南から）
⑦15区Ⅲ面遺構検出状況（東から）
⑧15区Ⅲ面SB01（東から）
図版10　①15区Ⅲ面遺構検出状況（西から）
②15区Ⅲ面SX02（北から）
③15区Ⅲ面SX05（西から）
④15区Ⅲ面SX06（南から）
⑤16区東側遺構検出状況1（北から）
⑥16区東側遺構検出状況2（北から）
⑦16区SK14土器出土状況（北から）
図版11　①17区東側遺構検出状況（南から）
②17区中央遺構検出状況（北から）
③17区西側遺構検出状況（南から）
④18区Ⅰ面遺構検出状況（東から）
⑤18区Ⅰ面西側遺構検出状況（西から）
⑥18区Ⅱ－上面遺構検出状況（西から）
⑦18区Ⅱ－上面SK64（東から）
図版12　①18区Ⅱ－上面SK65（南から）
②18区Ⅱ－中面遺構検出状況（東から）
③18区Ⅱ－中面SK74（東から）
④18区Ⅱ－中面SK75（東から）
⑤18区Ⅱ－中面SK77（南から）
⑥18区Ⅱ－中面SK77土器出土状況
⑦18区土層断面1
⑧18区土層断面2
図版13　①18区Ⅱ－下面SX81石組（南から）
②18区Ⅱ－下面SX81石組（東から）
③18区Ⅱ－下面SX81石組北辺（北から）
④18区Ⅱ－下面SX81石組北辺（東から）
⑤18区Ⅱ－下面SX81石組西辺（西から）
⑥18区Ⅱ－下面SX81石組内下段
（西から）
⑦18区Ⅱ－下面SX81石組西南隅
（東から）
⑧18区Ⅱ－下面SX81石組内下段東側
（東から）
図版14　①18区Ⅱ－下面SX81石組状況（南から）
②18区Ⅱ－下面SX81石組状況（南西隅）
③18区Ⅱ－下面SX81石組内部除去
（東から）
④18区Ⅲ面遺構検出状況（東から）
⑤18区Ⅲ面遺構検出状況（南から）
⑥18区Ⅲ面SE80・100（東から）
⑦18区Ⅲ面SK101（北から）
⑧18区Ⅲ面SK101土器出土状況
図版15　①19区Ⅰ面東側遺構検出状況（南から）
②19区Ⅰ面中央遺構検出状況（北から）
③19区Ⅰ面西側遺構検出状況（北から）
④19区Ⅰ面SK01（南から）
⑤20区東側遺構検出状況（北から）
⑥20区中央遺構検出状況（北から）
⑦20区西側遺構検出状況（北から）
図版16　①21区東側遺構検出状況（北から）
②21区西側遺構検出状況（北から）
③21区SK05土器出土状況（西から）
④22区東側遺構検出状況（北から）
⑤22区中央1遺構検出状況（北から）
⑥22区中央2遺構検出状況（北から）
⑦22区西側遺構検出状況（北から）
図版17　①23区東側遺構検出状況（北から）
②23区中央1遺構検出状況（北から）
③23区中央2遺構検出状況（北から）
④23区中央3遺構検出状況（北から）
⑤23区西側遺構検出状況（北から）
⑥23区SK04断面（北から）
⑦23区SK18土器出土状況（北から）
⑧23区SK19土器出土状況

図版18　①24区東側遺構検出状況（北から）
②24区中央遺構検出状況（北から）
③24区西側遺構検出状況（北から）
④24区SX01（西から）
⑤25区Ⅱ面東側遺構検出状況（北から）
⑥25区Ⅱ面西側遺構検出状況（北から）
⑦25区Ⅱ面SK11内土器出土状況（東から）
⑧25区Ⅱ面SD01土器出土状況
図版19　①26区Ⅰ面東側遺構検出状況（北から）
②26区Ⅰ面中央1遺構検出状況（北から）
③26区Ⅰ面中央2遺構検出状況（北から）
④26区Ⅱ面東側遺構検出状況（北から）
⑤26区Ⅱ面中央1遺構検出状況（北から）
⑥26区Ⅱ面中央2遺構検出状況（北から）
⑦26区Ⅱ面西側遺構検出状況（北から）
⑧26区Ⅱ面SK39土器出土状況（南から）
図版20　①26区Ⅱ面SK44土器出土状況（東から）
②26区Ⅱ面SD04土器出土状況（北から）
③27区Ⅰ面東側遺構検出状況（北から）
④27区Ⅰ面中央遺構検出状況（北から）
⑤27区Ⅰ面SK03（西から）
⑥27区Ⅱ面東側遺構検出状況（北から）
⑦27区Ⅱ面中央遺構検出状況（北から）
⑧27区Ⅱ面西側遺構検出状況（北から）
図版21　①27区Ⅱ面SK09土器出土状況（東から）
②27区Ⅱ面SK19土器出土状況
③28区東側遺構検出状況（北から）
④28区中央1遺構検出状況（北から）
⑤28区中央2遺構検出状況（北から）
⑥28区西側遺構検出状況（北から）
⑦28区SX01（南から）
⑧28区SX01石組（南から）
図版22　①28区SX01掘方（西から）
②28区SE01（南から）
③29区Ⅰ面遺構検出状況（東から）
④29区Ⅰ面SE04（北から）
⑤29区Ⅱ面遺構検出状況（東から）
⑥29区Ⅱ面SE108・109（北から）
⑦29区Ⅱ面SE109（北から）
図版23　①29区Ⅱ面SE108（北から）
②29区Ⅱ面SE108取り上げ状況
③29区Ⅱ面SE108井戸枠組み合わせ
状況1
④29区Ⅱ面SE108井戸枠組み合わせ
状況2
⑤30区Ⅱ面東側遺構検出状況（南から）
⑥30区Ⅱ面西側遺構検出状況（南から）
⑦30区Ⅰ面SK03（西から）
図版24　①31区Ⅱ面東側遺構検出状況（北から）
②31区Ⅱ面中央遺構検出状況（北から）
③31区Ⅱ面西側遺構検出状況（北から）
④31区Ⅱ面SX04（東から）
⑤32区Ⅰ面遺構検出状況（東から）
⑥32区Ⅰ面SE01（北から）
⑦32区Ⅰ面SK02（西から）
⑧32区Ⅰ面SK03（北から）
図版25　①32区Ⅱ面遺構検出状況（東から）
②32区Ⅱ面SX01（西から）
③32区Ⅱ面SE03断面（北から）
④32区Ⅲ面遺構検出状況（東から）
⑤32区Ⅲ面SX02（東から）
⑥32区、面遺構検出状況（東から）
⑦32区、面SK20～22付近（北から）
図版26　①33区Ⅰ面東側遺構検出状況
（北から）
②33区Ⅰ面中央1遺構検出状況
（北から）
③33区Ⅰ面中央2遺構検出状況
（北から）
④33区Ⅰ面西側遺構検出状況（北から）
⑤33区Ⅱ面SD03（西から）
⑥34区Ⅱ面遺構検出状況（東から）
⑦34区Ⅱ面遺構検出状況（西から）
図版27　①35区東側遺構検出状況（南から）
②35区西側遺構検出状況（北から）
③36区遺構検出状況（北から）

④36区SK01及び土層断面（東から）
⑤37区東側遺構検出状況（南から）
⑥37区西側遺構検出状況（南から）
⑦37区SK03（西から）
図版28　①38区Ⅰ面遺構検出状況（西から）
②38区Ⅰ面SK01（北から）
③38区Ⅱ面遺構検出状況（西から）
④38区Ⅱ面SE01（西から）
⑤39区SK01付近（北から）
⑥39区SK07付近（北から）
⑦39区SK07断面（東から）
七宮地区（遺構）
図版29　①調査区全景（南から）
②調査区全景（東から）
③北トレンチ西石垣（東から）
④北トレンチ西石垣（北から）
⑤北トレンチ東側杭・胴木（西から）
⑥南トレンチ石垣検出作業状況
⑦南トレンチ石垣（東から）
⑧南トレンチ石垣裏込め断面（北から）
図版30　①東地区調査区全景（東から）
②東地区石垣検出状況
③東地区新石垣裏込め状況（東から）
④東地区古石垣・新石垣根石検出状況（東から）
⑤東地区古石垣根石・胴木（西から）
⑥東地区新石垣・土留め板検出状況（西から）
⑦東地区新石垣胴木（南から）
⑧東地区新石垣（南から）
図版31　①東地区石垣実測状況
②東地区石垣完掘状況（西から）
③西地区調査区全景（北から）
④西地区作業状況
⑤西地区石垣裏込め状況（北から）
⑥西地区石垣（東から）
⑦西地区石垣根石（北から）
⑧西地区北壁断面（南から）
浜崎地区（遺物）
図版32　1区出土遺物　2区出土遺物①
図版33　2区出土遺物②
図版34　2区出土遺物③　3区出土遺物①
図版35　3区出土遺物②
図版36　3区出土遺物③
図版37　3区出土遺物④　4区出土遺物①
図版38　4区出土遺物②　7区出土遺物①
図版39　7区出土遺物②　8区出土遺物
9区出土遺物①
図版40　9区出土遺物②
図版41　9区出土遺物③　10区出土遺物①
図版42　10区出土遺物②　11区出土遺物①
図版43　11区出土遺物②　12区出土遺物
13区出土遺物①
図版44　13区出土遺物②
図版45　13区出土遺物③
図版46　13・14区出土遺物①
図版47　13・14区出土遺物②
図版48　13・14区出土遺物③
図版49　13・14区出土遺物④
14区出土遺物①
図版50　14区出土遺物②
図版51　14区出土遺物③
図版52　14区出土遺物④　15区出土遺物
16区出土遺物①
図版53　16区出土遺物②　18区出土遺物①
図版54　18区出土遺物②
図版55　18区出土遺物③
図版56　18区出土遺物④
図版57　18区出土遺物⑤　19区出土遺物①
図版58　19区出土遺物②　20区出土遺物
21区出土遺物①
図版59　21区出土遺物②　22区出土遺物①
図版60　22区出土遺物②
図版61　22区出土遺物③　23区出土遺物①
図版62　23区出土遺物②
図版63　24区出土遺物①

図版64　24区出土遺物②　25区出土遺物①
図版65　25区出土遺物②　26区出土遺物①
図版66　26区出土遺物②
図版67　26区出土遺物③　27区出土遺物①
図版68　27区出土遺物②
図版69　27区出土遺物③
図版70　27区出土遺物④　28区出土遺物
図版71　29区出土遺物　30区出土遺物
　　31区出土遺物①
図版72　31区出土遺物②
図版73　31区出土遺物③　32区出土遺物①
図版74　32区出土遺物②
図版75　32区出土遺物③　33区出土遺物①
図版76　33区出土遺物②　34区出土遺物①
図版77　34区出土遺物②　36区出土遺物
図版78　37区出土遺物　38区出土遺物①
図版79　38区出土遺物②
図版80　38区出土遺物③
図版81　38区出土遺物④
図版82　38区出土遺物⑤
図版83　38区出土遺物⑥
図版84　38区出土遺物⑦
図版85　38区出土遺物⑧　39区出土遺物①
図版86　39区出土遺物②
図版87　39区出土遺物③
図版88　39区出土遺物④
図版89　土器・陶磁器①
図版90　土器・陶磁器②
図版91　土器・陶磁器③
図版92　土器・陶磁器④
図版93　土器・陶磁器⑤
図版94　土器・陶磁器⑥
図版95　土器・陶磁器⑦
図版96　土器・陶磁器⑧
図版97　土器・陶磁器⑨
図版98　土器・陶磁器⑩
図版99　土器・陶磁器⑪
図版100　土器・陶磁器⑫
図版101　土器・陶磁器⑬
図版102　土器・陶磁器⑭
図版103　土器・陶磁器⑮
図版104　土器・陶磁器⑯
図版105　土器・陶磁器⑰
図版106　土器・陶磁器⑱
図版107　土器・陶磁器⑲
図版108　土器・陶磁器⑳
図版109　土器・陶磁器㉑
図版110　土器・陶磁器㉒
図版111　土器・陶磁器㉓
図版112　土器・陶磁器㉔
図版113　土器・陶磁器㉕
図版114　土器・陶磁器㉖
図版115　土器・陶磁器㉗
図版116　土器・陶磁器㉘
図版117　土器・陶磁器㉙
図版118　土器・陶磁器㉚
図版119　土器・陶磁器㉛
図版120　土器・陶磁器㉜
図版121　土器・陶磁器㉝
図版122　土器・陶磁器㉞
図版123　土器・陶磁器㉟
図版124　土器・陶磁器㊱
図版125　土器・陶磁器㊲
図版126　土器・陶磁器㊳
図版127　土器・陶磁器㊴
図版128　土器・陶磁器㊵
図版129　土器・陶磁器㊶
図版130　土器・陶磁器㊷
図版131　土器・陶磁器㊸
図版132　土器・陶磁器㊹
図版133　土器・陶磁器㊺
図版134　土器・陶磁器㊻
図版135　土器・陶磁器㊼
図版136　土器・陶磁器㊽
図版137　土器・陶磁器㊾
図版138　土器・陶磁器㊿

図版139　土器・陶磁器㊶
図版140　土器・陶磁器㊷
図版141　土器・陶磁器㊸
図版142　土器・陶磁器㊹
図版143　土器・陶磁器㊺
図版144　土器・陶磁器㊻
図版145　土器・陶磁器㊼
図版146　土器・陶磁器㊽
図版147　土器・陶磁器㊾
図版148　土器・陶磁器㊿
図版149　土器・陶磁器(61)
図版150　土器・陶磁器(62)
図版151　土器・陶磁器(63)
図版152　土器・陶磁器(64)
図版153　土器・陶磁器・土製品①
図版154　土製品②
図版155　土製品③
図版156　土製品④・瓦①
図版157　瓦②
図版158　瓦③・石製品①
図版159　石製品②
図版160　金属器①
図版161　金属器②
図版162　金属器③
図版163　金属器④
図版164　金属器⑤
図版165　金属器⑥
図版166　金属器⑦
図版167　金属器⑧
図版168　金属器⑨
図版169　金属器⑩
図版170　銅銭①
図版171　銅銭②
図版172　銅銭③
図版173　銅銭④
図版174　銅銭⑤
図版175　木器①
図版176　木器②
図版177　木器③
七宮地区（遺物）
図版178　土器・陶磁器①
図版179　土器・陶磁器②
図版180　土器・陶磁器③
図版181　土器・陶磁器④
図版182　土器・陶磁器⑤
図版183　土器・陶磁器⑥
図版184　土器・陶磁器⑦
図版185　土器・陶磁器⑧
図版186　土器・陶磁器⑨
図版187　土器・陶磁器⑩
図版188　土器・陶磁器⑪
図版189　土器・陶磁器⑫
図版190　土器・陶磁器⑬
図版191　土器・陶磁器⑭
図版192　土器・陶磁器⑮
図版193　土器・陶磁器⑯
図版194　土器・陶磁器⑰
図版195　土器・陶磁器⑱
図版196　土器・陶磁器⑲
図版197　金属器①
図版198　銅銭①
図版199　銅銭②
図版200　木器①
図版201　木器②
図版202　木器③
図版203　木器④
図版204　木器⑤
図版205　木器⑥

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

兵庫津は古代には、大輪田泊と呼ばれ、少なくとも奈良時代にはすでに存在していたことが、文献の記載より窺われる。その後、この港は平安時代末期の平清盛の経ヶ島の築造を経て、中世には兵庫津とよばれるようになり、瀬戸内航路の中継基地あるいは博多と並ぶ日宋・日明貿易の中心地として大いに発展することになる。

15世紀中頃の記録である『兵庫北関入舩納帳』には文安２年（1445）に兵庫津に入港した船数・積載品目・船籍所在地などが克明に記載され、中世の物流・交易を考える上で、稀有の貴重な史料として注目されてきた。

その後、兵庫津は応仁・文明の大乱を契機として起こる摂津国内の混乱などが原因で、海外貿易の中心地の地位は堺に奪われ、また、瀬戸内航路の中継基地としての役割も一時的に喪失するとされてきた。天正８年（1580）、織田信長の摂津侵攻に伴って、信長の家臣池田信輝によってこの地に兵庫城が築かれると、兵庫津はその城下町として復興し、近世都市としての歩みを始めることになる。江戸時代に入ると兵庫津は摂津国尼崎藩領となり、再び港町としての繁栄を取り戻す。藩領時代の兵庫津の様子を今に伝える資料には、元禄６年（1693）に成立した『元禄兵庫津絵図』がある。そこには港町の規模・範囲だけではなく、道路、街区など町割りを構成する施設、船入江などの港湾施設、鍛冶屋町、大工町など住人の職種を表した町名、また古くは『兵庫北関入船納帳』の時期にまで遡る町名の記載、町の周囲を巡る水路など様々な情報が詳細に記載されており、近世の兵庫津研究に欠かせない貴重な資料となっている。

明和８年（1771）、兵庫津は尼崎藩領から天領に組み入れられ、以後、慶応４年（1868）の開港に至るまで、瀬戸内航路の中継基地として、また、当時の経済の中心地大坂とを結ぶ「兵庫船」の発着基地として、物流・交易の中心地としての地位を保ち続ける。

この時期の状況を伝えるものには、文献では有名な『岡方文書』が、また、絵図には『文久兵庫津絵図』などがある。このように兵庫津は奈良時代以来、実態の不分明な空白期を挟みながら、古代から中世・近世にかけて連綿としてその機能を維持し続けてきた重要な港湾都市であった。

このような、歴史的意義をもつ兵庫津に対して、現在、『元禄兵庫津絵図』に描かれた範囲内は「兵庫津遺跡」として周知の遺跡に登録され、神戸市教育委員会が発行する遺跡分布図に掲載されている。

この範囲内で現状変更を伴う調査が行われる際には確認調査、全面調査が、また、軽微なものについても工事立会などが必要とされ、昭和63年度に実施された大手前女子大学による調査を嚆矢として、平成15年度までの間に、数十次にわたって、神戸市教育委員会、兵庫県教育委員会などによって調査が実施されてきた。

これら一連の兵庫津遺跡関連の調査は、主に国、公社・公団、県が工事主体のものについては、県教育委員会が、また、その他の神戸市、民間が事業主体のものについては、神戸市教育委員会が調査主体となって調査を実施してきた。

兵庫県教育委員会では上記の区分に従い、旧建設省が事業主体となり、実施した一般国道２号共同溝整備事業に伴う発掘調査について平成６年度から10年度にかけて11次にわたって調査を実施してきた。

一般国道２号共同溝整備事業は国道２号線の路肩部分に電気・ガス・水道・電話回線などを１括して埋設するもので、調査地点が交通量の多い幹線道路である現国道であることから、調査の実施にあたっては旧建設省との間で協議が重ねられ調査の実施にこぎつけたものである。また、平成７年１月に発生した阪神・淡路大震災の後、震災以前にもまして、共同溝の必要性は高まり、整備事業の早期完成が求められることになった。こ

のため、調査は通常調査から震災復興調査へと変わり、他府県より派遣された支援職員も加わり、平成10年度まで継続されることになった。共同溝整備事業伴う兵庫津遺跡の調査の経過は以下の通りである。

２．共同溝整備事業に伴う発掘調査の経過と体制

１．平成６年度

遺跡調査番号　940243
調査の種類　　確認調査
調査期間　　平成６年６月29日・７月15日
調査担当者　　岡崎正雄
調査面積
調査概要　　兵庫区西出町２丁目において実施されたもので、各工区ごとに施工順に幅約１ｍのガイドウオール付設部分を確認トレンチとする工事立会の形で行った。調査の結果、近世後半の遺構面の存在が確認された。調査結果は『兵庫津遺跡　Ⅰ』に所収。

遺跡調査番号　940244
調査の種類　　全面調査
調査期間　　平成６年９月19日～11月２日
調査担当者　　岡崎正雄
調査面積　　370㎡
調査概要　　上記の940243番の確認調査結果に基づいて行われたもので、西出地区Ⅰ区と呼称される調査区である。調査の結果、17世紀から19世紀後半にかけての水田、井戸、土坑、溝、建物、柱穴などの遺構が検出され、『元禄兵庫津絵図』に描かれた湊川の惣門の北東部における近世後半の町の拡張を示す資料を提供した。調査結果は『兵庫津遺跡　Ⅰ』に所収。

２．平成8年度

遺跡調査番号　960189
調査の種類　　確認調査
調査期間　　平成８年６月29日～８月28日
調査担当者　　渡辺　昇　鐵　英記　大西貴夫
調査面積　　168㎡
調査概要　　浜崎地区で実施したもので、調査の結果、近世の遺構面、包含層に加えて、中世の遺構面、包含層が検出された。調査結果は本報告書に所収。

遺跡調査番号　960233
調査の種類　　確認調査
調査期間　　平成８年６月29日～８月28日
調査担当者　　兼康保明　片岡貴英
調査面積　　191㎡

調査概要　　平成6年度に実施した940243番の全面調査区の北側の隣接地について確認調査を実施したもので、調査の結果、江戸時代後期の包含層及びその上面で石垣、石囲い遺構などを検出した。

調査結果は『兵庫津遺跡　Ⅰ』に所収。

遺跡調査番号　960311

調査の種類　　全面調査

調査期間　　平成8年11月20日～11月30日

調査担当者　　鐵　英記　兼康保明

調査面積　　75㎡

調査概要　　上記の960189番の調査結果に基づいて全面調査を実施したもので、本報告書では浜崎地区38区と呼称している。江戸時代後期を中心とした遺構群を検出した他、中世の廃棄土坑なども検出されている。

調査結果は本報告書に所収。

遺跡調査番号　960442

調査の種類　　全面調査

調査期間　　平成9年2月17日～3月19日

調査担当者　　鐵　英記　菊地逸夫　神野　信　半澤幹夫　大川勝宏

調査面積　　507㎡

調査概要　　調査番号960189番の確認調査結果に基づいて全面調査を実施したもので、本報告書では浜崎地区1～39区と呼称している。調査では近代・近世の遺構・遺物に加えて中世の遺構・遺物も若干ではあるが検出された。調査は5地区に分けて実施され、北東から南西に向かって9区・11区・13区・14区・39区と呼称している。各区ごとの概要は以下の通りである。

9区　ここでは、近世～中世にかけての整地面が3面検出されている。第2整地面では土坑状の落ち込みが2基、第3整地面では8基検出され、いずれも深さ20cm程度で機能は不明である。出土遺物は主に整地土層中より出土しており、近世の陶磁器類のほか、銅銭などが出土している。

11区　ここは絵図などから、西国街道に隣接する調査区と考えられるが、攪乱により道路面は検出されていない。検出された主な遺構には石組井戸、石敷道路、石敷の溜池状遺構などが検出され、石敷道路からは天文年製銘の青花皿が出土している。

13区　ここでは、土坑、柱穴、石組井戸、素掘り井戸などの遺構が検出され、出土遺物には近世の陶磁器類のほか、中世の土師器皿、東播系須恵器、中国製の白磁、青磁などがある。

14区　近世～近代の瓦積井戸、中世～近世の土坑、柱穴、井戸などの遺構が検出されている。また、出土遺物には近世の陶磁器類のほか、中世の土師器皿、東播系須恵器、中国製の白磁、青磁などがある。また、瓦器椀は遺構には伴わないが、13世紀前半代にまで遡るものが含まれている。

39区　ここでは、近世の土器廃棄土坑がまとまって14基検出されている。また、遊離遺物ではあるが、布留式併行期の古式土師器壷が出土している。

上記のようにこの調査では近世の遺構・遺物に加えて、部分的にではあるが中世の遺構・遺物が検出され、中には13世紀前半代のものも含まれていることが明らかになった。さらに、検出遺構には西国街道のような大道ではないが、町屋を区画する石敷道路がある。

調査結果は本報告書に所収。

遺跡調査番号　960450
調査の種類　　全面調査
調査期間　　平成９年１月７日～２月27日
調査担当者　　兼康保明　中山浩彦
調査面積　　738㎡
調査概要　　調査番号960233番の確認調査結果に基づいて全面調査を実施したもので、平成6年度に全面調査を実施した調査番号940244番の調査区の北側隣接地に相当する。『兵庫津遺跡　Ⅰ』では、西出地区Ｃ～Ｇ区と呼称している。この調査地点は17世紀後半の兵庫津の状況を克明に描いた『元禄兵庫津絵図』では兵庫津の北端にある方形の入江（内海）のさらに北側に位置し、町の内外を区画する湊川の惣門から見ると、北東の郊外にあたり、17世紀後半代には兵庫津の町の外にあたっていたことが分かる。調査の結果、江戸時代後半の造成地、造成に伴う石垣、造成地に建設された建物、井戸、石組遺構などが検出された。また、出土遺物には、土師器皿に透明釉を施したいわゆる柿釉の灯明皿、丹波焼擂鉢、堺・明石産擂鉢、肥前系、瀬戸・美濃系の染付磁器などがあり、概ね18世紀後半～19世紀前半代のものが大部分を占めている。これらの結果から、当該地点は17世紀後半代までは兵庫津の町の域外にあったが、18世紀の後半以降、町が郊外に拡大するに従って、町屋がこの辺りにまで進出して来る状況を示す好資料を提示した。

調査結果は『兵庫津遺跡　Ⅰ』に所収。

３．平成９年度

遺跡調査番号　970050
調査の種類　　全面調査
調査期間　　平成９年４月14日～８月６日
調査担当者　　岡田章一　渋谷　格　鈴木　卓　三輪晃三　横田　明　藤井　整　中山浩彦
　　丸杉俊一郎　石崎善久　深江英憲　重藤輝行　奈良康正
調査面積　　3600㎡
調査概要　　調査番号960189番の確認調査結果に基づいて全面調査を実施したもので、本報告書では浜崎地区１～39区と呼称している。このうち、38区は平成８年度963011番の調査で、また９区、11区、13区、14区、39区については同年度960442番の調査ですでに調査を実施しており、970050番の調査ではそれらの地区を除く、１～37区すなわち浜崎地区の大部分が対象地となり、共同溝整備に伴う調査の中では最大規模のものとなった。

調査の結果、中世の町場に伴うと考えられる町屋群が『元禄兵庫津絵図』に描かれた範囲の北西部で北東から南西方向にほぼ280ｍの範囲内に密集した形で検出され、従来からの調査で指摘されてきた中世の兵庫津の町場が初めて一定のまとまりをもって姿を現した。検出された主な遺構には溝、掘立柱建物をはじめとして、井戸、建物を囲む柵列、炉跡、土器廃棄土坑などがあり、その中から土師器皿・鍋・羽釜、東播系須恵器鉢・甕、備前焼擂鉢・甕、丹波焼甕・壷、常滑焼甕、瀬戸・美濃焼天目碗・水滴・灰釉皿、中国製天目碗、白磁碗・皿、青磁碗・皿などの遺物が大量に出土した。

また、このほか、港町にふさわしい倉庫の基礎と考えられる石組の建物基礎などが検出されて、中世の兵庫

津の町場の実態が考古学的に実証されることになった。

調査結果は本報告書に所収。

遺跡調査番号　970218
調査の種類　　確認調査
調査期間　　平成９年７月15日
調査担当者　　種定淳介
調査面積　　24㎡
調査概要　　兵庫区七宮町で実施されたもので、兵庫津の入江の存在が期待されたが、入江に伴う施設の確認には至らなかった。調査結果は本報告書に所収。

遺跡調査番号　970393
調査の種類　　確認調査
調査期間　　平成９年12月９日～12月12日
調査担当者　　水口富夫
調査面積　　21.5㎡
調査概要　　兵庫区七宮町で実施されたもので、兵庫津の北端に存在する内海に伴う船入江の存在が確認された。調査結果は本報告書に所収。

４．平成10年度

遺跡調査番号　980088
調査の種類　　全面調査
調査期間　　平成10年６月４日～６月17日
調査担当者　　小川良太　水口富夫　深江英憲
調査面積　　52㎡
調査概要　　上記の970393番の確認調査結果に基づいて全面調査を実施したもので、江戸中期以降に整備された船入江に伴う石垣が検出された。石垣は新旧二つの石垣が東西方向に二列に並んで存在している。新石垣は高さ約2mで６段分が確認された。最下段には根石が敷かれ、根石の下には船材と推定される板材が上下２段に据えられ、板材の全面には約80cm間隔で杭が打ち込まれていた。旧石垣は新石垣の裏側に存在し、５段分が存在していた。位置関係、層序から考えて旧石垣は何らかの理由によって機能しなくなり、新石垣が築かれたものと推定される。絵図の記載及び出土遺物から旧石垣が江戸時代中期に築かれ、新石垣は明治８～15年に修築されたと考えられる。また、最終的に船入江が埋め立てられるのは、明治33年の入江小学校の開校時期と考えられる。調査結果は本報告書に所収。

３．整理作業の経過と体制

先述したように、共同溝整備事業に伴う兵庫津遺跡の調査は大きく、西出地区、浜崎地区、七宮地区の３地区に区分される。整理作業にあたっては、これら３地区から出土した遺物が膨大な量に達したため、整理事業の契約にあって、地区を西出地区と浜崎・七宮地区に二分し、調査が先行して行われた西出地区については平

成10年度～13年度に、また浜崎・七宮地区については平成11年度～15年度に実施することになった。なお、西出地区の成果については、『兵庫津遺跡　Ⅰ』として、平成13年度に報告書を刊行している。

浜崎・七宮地区の各年度の作業内容及び体制は以下の通りである。

平成11年度の整理作業

遺物の水洗い作業については、全面調査時に現場事務所で行った。従って、平成11年度には、ネーミング、接合・補強の各作業を埋蔵文化財調査事務所で実施した。

整理担当職員	整理普及班	主　　査	岡田章一
	調査第１班	主　　査	鐵　英記
	調査第３班	技術職員	深江英憲

平成12年度の整理作業

平成11年度に引き続き、土器・陶磁器、木製品の実測作業を埋蔵文化財調査事務所で実施した。

整理担当職員	整理普及班	主　　査	岡田章一
	同	主　　任	深江英憲

平成13年度の整理作業

平成12年度に引き続き、土器・陶磁器の実測、復元、木製品の保存処理の各作業を埋蔵文化財調査事務所で実施した。

整理担当職員	整理普及班	主　　査	岡田章一
	同	主　　任	深江英憲
	同	主　　査	中村　弘（木製品保存処理担当）

平成14年度の整理作業

平成13年度に引き続き、写真撮影、写真整理、遺構図補正、土器・陶磁器、木製品のトレース、金属製品の保存処理の各作業を埋蔵文化財調査事務所で実施した。

整理担当職員	調査第３班	主　　査	岡田章一
	整理保存班	主　　任	深江英憲
	同	主　　査	加古千恵子（金属製品保存処理担当）

平成15年度の整理作業

平成14年度に引き続き、金属製品の実測・トレース・レイアウトの各作業を埋蔵文化財調査事務所で実施し、報告書を印刷・刊行した。

整理担当職員	調査第２班	主　査	岡田章一
	調査第１班	主　査	鐵　英記
	整理保存班	主　査	深江英憲

また、平成11年度～15年度の長きにわたり、多くの非常勤嘱託員が整理作業に携わった。整理作業を担当した嘱託員は以下の通りである。

整理担当嘱託員

池田悦子　石井三保　家光和子　伊藤ミネ子　今村聡美　江口初美
岡田祥子　奥野政子　小野潤子　香川フジ子　川上啓子　川上緑
川村由紀　岸野奈津子　衣笠雅美　木村淑子　蔵幾子　栗山美奈
小林俊子　佐伯純子　佐々木誓子　島田留里　島村順子　鈴木まき子
大仁克子　高野佐智子　多賀直子　友久伸子　長川加奈子　中西睦子
西岡敬子　西口由紀　西野純子　西村美緒　長谷川洋子　早川有紀
板東明子　平松ゆり　藤井光代　前川悦子　前田千栄子　松本嘉子
眞子ふさゑ・三島重美　溝上くみ　宮田麻子　宮野正子　村上京子
八木和子　渡辺二三代　渡辺正子　（敬称略五十音順）

Ⅱ　遺跡をとりまく環境

兵庫津遺跡の沿革及び既往の発掘調査の成果については、2001年に発刊した『兵庫津遺跡　Ⅰ』でその概要については、既に述べている（兵庫県教育委員会　2001）。

しかし、兵庫津遺跡に関しては、2001・2002年度の第26次・第31次調査で、兵庫津の町場の範囲を考える上で重要であると指摘した真光寺の調査が実施され（阿部　2003）、また、2003年度の第32次調査では、2001年度の時点では、その実態が不明であるとした奈良時代の大輪田泊に比定される遺構・遺物が検出されるなど、その後の調査で重要な発見が相継いで行われた（阿部　2003）。

また、12世紀後半に行われた平清盛の大輪田泊の大改修についても、泊そのものに関しては特記すべき調査は行われていないものの、兵庫津遺跡の北に存在する楠・荒田町遺跡における2003年度の調査で、平氏一門に関連すると考えられる屋敷地を囲む二重の溝と櫓と推定される掘立柱建物跡が検出されるなど、重要な発見がなされ、いわゆる福原京の実態が漸く明らかになりつつある（岡田　2004）。

また、今回の調査の出土品整理通じて、従来言われてきた、中世兵庫津の衰亡期が応仁・文明の大乱を契機とした15世紀後半代に求められるのではなく、細川氏の摂津支配が崩壊する16世紀前半以降に求められる可能性が高くなっている。

ここでは、上記のような、兵庫津遺跡に関する状況の変化を考慮して、『兵庫津遺跡　Ⅰ』に記した内容と多くは重複するが、改めて、兵庫津の沿革及び既往の発掘調査の成果について述べることにする。

1．兵庫津の沿革

兵庫津は古代には大輪田泊とよばれ、古代から中世・近世を通じて瀬戸内航路の中継基地あるいは、日宋・日明貿易の中心地として繁栄を続けた重要な港湾都市であった。

大輪田泊がいつ造られたかについては、それを示す確実な文献は存在しない。しかし、平安時代後期に成立した奈良時代の高僧行基の伝記である『行基年譜』に、行基が大輪田船息を改修したと記されていることや、万葉集巻六　田辺福麻呂の歌に「浜清み　浦美しみ　神代より千船の泊つる　大和太浜」とあることなどから、少なくとも奈良時代には、すでに存在していたことがわかる。

大輪田泊の名が史書に現れるのは『日本後紀』弘仁３年（812）の改修記事が最初である。このことから、少なくとも９世紀前半には大輪田泊が国家管理の下、瀬戸内航路の地方港として存在していたことが文献の上で確認できる。

大輪田泊の改修記事は弘仁３（812）年以降、たびたび史書に現れる。古代の港は河口に位置し、また外海に直接面するのではなく、干潟状の低湿地に存在していたと考えられる。従って、川が運び込む土砂によって、自然堤防が形成され、入江が形成されると同時に港が埋まり、水位が浅くなるため、しばしば改修作業が必要となる。

六国史に港の改修記事がたびたび現れるのは、このような事情によるのであろう。しかし、大輪田泊に関する改修記事は、10世紀中葉の『日本紀略』天暦元年（947）の記事を最後に史書には現れなくなくなる。

このことは、律令国家の衰退とともに、港の維持管理が国家管理のもとからはずされたことを意味し、必ずしもこの時期以降の港の存在を否定するものではないが、10世紀以降の大輪田泊の実態については、文献の上からは窺い知れない。

年　　号	記　　事
天平14年（747）	法隆寺の所有地の四至表示に「弥奈刀（みなと）川」が見える。
	＊僧　行基が「大輪田船息（ふなすえ）」を整備したとの伝承あり。
弘仁３年（812）	港の修復のため臨時に大輪田船瀬使がおかれる
	＊以後947年まで船瀬使や摂津国司による修造記事が散見される。
承和３年（836）	入唐使の船、大輪田泊で暴風雨に遭う。遣唐使は寛平６年（894）廃止。
延喜14年（914）	三善清行、意見封事12カ条を奉り、大輪田泊修復を建言。
	＊この頃　河尻（尼崎）や室津などと共に「五泊」に数えられる。
応保２年（1162）	平清盛が家司の藤原能盛に八部（やたべ）郡の検注（土地調査）を命じる。
嘉応１年（1169）	清盛が太政大臣を辞し、京都から福原へ移る。この年から和田浜で千僧供養。
嘉応２年（1170）	後白河法皇たちが、宋人を見るため、清盛の福原山荘を訪問する。
承安２年（1172）	宋より後白河や清盛宛の国書等が届く。両者は翌年、宋に返書等を送る。
承安３年（1173）	大輪田泊　第１次大改修（平家一門の事業としての経ノ島の築島）→1175完成。
治承４年（1180）	大輪田泊　第２次大改修（国営事業として人夫・資材を大徴発）開始。
	新都移転を宣言。安徳天皇等福原に移り和田京造営を開始→半年後中止。
寿永３年（1184）	福原に駐留する平家軍を源氏軍が急襲して破る。（一ノ谷合戦）
建久７年（1196）	東大寺再建の大勧進僧重源、大輪田泊等の改修に着手。
	＊「延慶本　平家物語」によれば、地元住人や船人等も港を整備し、陸続きになった経ノ島は次第に広くなり家数を増していったと云う。
承元１年（1207）	浄土宗の法然、配流の途中に　兵庫に立ち寄り説教する。
弘安８年（1285）	律宗の叡尊が兵庫を訪れ、住人遊女等に授戒し、石塔の供養に臨む。
	亀山上皇が湾岸御幸の一環として兵庫島を訪問する。
	＊随行した公家の日記に「数百艘の船をこの入海に繋ぐ」とある。
弘安９年（1286）	讃岐の善通寺修復のため兵庫で艘別銭を徴収することを朝廷が決定。
正応２年（1289）	時宗の一遍の臨終にのぞむため兵庫の観音堂に人々が群集する。
正安２年（1300）	この頃、兵庫に禅宗の福厳寺を創建させる。開祖＝約翁徳倹と弟子の柏岩可禅
徳治２年（1307）	神崎（尼崎）に唐船が入港。
	京都の八坂法観寺造営のため兵庫・神崎・渡辺３港で商船から目銭を徴収。
延慶１年（1308）	伏見上皇が寺の用途に充てるため兵庫嶋の升米等を東大寺に与える。
応長１年（1311）	東大寺の関所を阿波の商人と兵庫島鋳物師辻子の問丸たちが襲撃。
	＊この頃東大寺関所が「地船」に課税しないよう福原庄商人たちが訴える。
正和４年（1315）	淀川から摂津灘にかけての水運業者など約百名が東大寺の関所を襲撃。
正慶１年（1332）	兵庫島の東西両地頭　預所　土民　遊女などが東大寺と共に入港船をめぐるトラブルで守護代を幕府に訴える。
延元１年（1336）	湊川合戦。室町幕府成立。
暦応１年（1338）	東大寺が兵庫の北関で興福寺が南関で徴税する権利を室町幕府が認める。
文和１年（1354）	福厳寺で仏燈国師（約翁徳倹）の語録を中国式の木版印刷で出版。
延文１年（1356）	経ノ島の延福寺に兵庫の住人讃阿が銅銭を鋳潰した大鐘を寄進。
永徳２年（1383）	細川頼元、摂津守護に補任される。
明徳２年（1391）	将軍義満、兵庫で明船見物。以後、兵庫津を拠点に日明貿易盛んに。
明徳３年（1392）	この頃福原の住人が板宿の禅昌寺（禅宗）の堂舎を整備する。

第１表　兵庫津関連年表（1）

応永８年(1401)	足利義満、明に使節を派遣し国交を結ぶ。翌年、来日した明使を兵庫で迎える。
	＊ 兵庫は将軍の代官や土蔵が置かれ、遣明船の発着地として港も整備される。
	朝鮮や琉球の船も入港。在日外国人も居住。福厳寺は来日使節の宿所に。
	滞在した朝鮮使は、街並を「高低の板屋は蜂屯（巣）のごとし」と描写。
	貿易品は問丸の倉庫や寺院にも保管。兵庫の商人も勘合貿易に参加。
嘉吉２年(1442)	細川勝元、摂津守護に補任される。
文安２年(1445)	この年の『兵庫北関入船納帳』が現存。年間の入港船大小２千隻を越える。
	＊ 兵庫の問丸40名、廻船商人（船主・船頭）120名前後が登場。
応仁１年(1467)	応仁・文明の乱始まる。　兵庫は主戦場の一つとなり荒廃する。
	＊ 戦乱終了後、町は復興するが貿易の中心は堺に移り、往時の繁栄回復せず？。
永正４年(1507)	細川政元、薬師寺長忠らによって謀殺される。
永正17年(1520)	細川澄元、阿波勝瑞城で没する。
大永５年(1525)	細川高国、出家する。
享禄４年(1531)	細川高国、摂津尼崎で自殺する。
永禄11年(1568)	織田信長、摂津に進攻する。
天正６年(1578)	荒木村重が織田信長から離反。荒木側の花熊城を包囲した信長方の軍勢兵庫も攻撃。
天正７年(1579)	本願寺側から雑賀孫一らが花熊城救援のため兵庫に上陸する。
天正８年(1580)	池田信輝らが荒木側の花熊城を攻略。兵庫の町も焼亡する。
天正９年(1581)	池田信輝が兵庫城を築城。都賀堤構築など町の近世的整備を進める。
慶長１年(1596)	文禄慶長の大地震　復興半ばの兵庫津は再び破壊的被害をうける。
慶長５年(1600)	関ヶ原の戦い。３年後、江戸幕府開く。
慶長12年(1607)	朝鮮通信使、兵庫に立ち寄る。（以後11回）
寛永10年(1633)	最初の鎖国令。～1639、数次にわたり強化。
宝永８年(1711)	兵庫津の人口２万人を超え、家数も3000以上に。
明和６年(1769)	兵庫津、尼崎藩領から幕府直轄領（天領）に。
寛政11年(1799)	高田屋嘉兵衛、エトロフ島航路を開く。この頃、北前船全盛期。
文化９年(1812)	嘉兵衛、ロシア軍艦に捕われ、カムチャツカに連行。
嘉永６年(1853)	ペリー、浦賀に来航。翌年、日米和親条約（神奈川条約）調印。
安政５年(1858)	日米修好通商条約調印。相次いで列強と締結。（安政五ヵ国条約）
安政６年(1859)	横浜・長崎・函館開港。兵庫開港は朝廷の反対強く、延期要請へ。
元治１年(1864)	幕臣・勝海舟、神戸に海軍操練所開設。一年足らずで廃止。
慶応１年(1865)	四国連合艦隊９隻が兵庫沖に現れ、幕府に早期開港を迫る。
慶応２年(1866)	“兵庫こぼて”、米価暴騰に怒った民衆の打ち壊し拡大。
慶応３年(1867)	兵庫居留地を神戸村に決定。兵庫開港勅許。“ええじゃないか”踊り流行。
慶応４年(1868)	１月１日（旧暦で慶応３年12月７日）、神戸港で開港式。
	維新政府、神戸で外国代表に王政復古を通告。領事館開設相次ぎ、外国人居留地の建設・競売進む。
	神戸事件発生。
	第一次兵庫県発足。兵庫城跡の庁舎は４ヵ月で坂本村に移転。
明治４年(1871)	廃藩置県。第二次兵庫県。明治９年の第三次兵庫県でほぼ現県域に。
明治７年(1874)	神戸―大阪間鉄道開設。兵庫・豊岡・名東県で地租改正に着手。
明治12年(1879)	兵庫県会開設。県財政の三部経済制（明治14年～明治15年）で運営に長年苦慮。
	兵庫・神戸・坂本村が合併、神戸区に。神戸市制施行は明治22年。
明治32年(1899)	７月17日、神戸外国人居留地返還。12月、兵庫運河全通。

第２表　兵庫津関連年表（2）（藤田　2000掲載の年表に加筆、補正）

大輪田泊が再び歴史の表舞台に登場するのは、平安時代末期の平清盛による承安年間（1171～74）及び治承3年（1180）の2度にわたる大改修である。

平氏は清盛の父忠盛の代から、安芸、播磨の国司を歴任し、日宋貿易によって巨万の富を蓄えたとされている。清盛は保元・平治の乱に勝利を得、朝廷内での実権を手中にすると、従来より一門の山荘があったこの地に着目し、宋船の大輪田泊への直接の入港を図った。経ヶ島と呼ばれる人工の埠頭が築かれ、この地は日宋貿易の拠点として大いに発展することになる。

しかし、平氏の栄華は長く続かず、治承4年（1181）の以仁王の挙兵を契機に源頼朝・木曽義仲などの挙兵が相継ぎ、源平の争乱の中で、治承3年に始まる2度目の改修は中断を余儀なくされる。

平氏の滅亡後、この港は東大寺の復興に尽力した俊乗坊重源によって改修される。

藤田明良氏によれば、鎌倉時代に入ると、法然、一遍、叡尊などの高僧がこの地を訪れ、布教活動を行うようになり、その様子を描いた絵巻などには、多種多様の姿をした人々とともに大小の建物が描かれ、多くの人が集まり住む町場が形成されていったとされている。

さらに、藤田氏は、当時この港町は「兵庫島」と呼ばれ、その確実な初現は『実躬卿記』弘安8年（1285）の亀山上皇の訪問記事であるとし、同記にはまた、繋留されている船が数百隻にも上るとの記載があると述べている（藤田　2000）。

このように、港に町場が形成され、港が活況を呈するようになると、朝廷・幕府は港に関を設け、升米、置石などの名で、入港する船から税を徴収し、それを港の維持管理費に充てるようになる。

その後、元寇の際、敵国降伏の祈祷にあたった大社寺に対して、その恩賞として、関銭の徴収権が寄進されるようになり、ついに鎌倉時代末期の延慶元年（1308）に、伏見院より、東大寺に兵庫島升米・置石の寄進が行われ、東大寺による関料の徴収が開始される。

時代はやや下るが、15世紀中葉の文安2年（1445）の記録である『兵庫北関入船納帳』は東大寺領摂津兵庫北関の関銭賦課の記録帳簿であり、その内容は(1)船籍所在地、(2)積載品目、(3)その数量、(4)関銭、(5)関銭の納入日、(6)船頭名、(7)問丸名などである（今谷　1981）。

このような史料は世界史的に見ても、同時代史料では、当時北ドイツにあったハンザ同盟の中心都市リューベックに残る史料と並んで他に例を見ないものであり、中世の物流・交易を考える上で稀有の貴重な史料となっている。

さらに、藤田氏によれば、この時期は京都や鎌倉などの中世都市に特徴的な辻子（ずし）と呼ばれる街区の中央を走る大路から派生した小路の形成が行われた時期であり、辻子に住むものも少なくなく、応長元年（1311）には東大寺の関所に敵対した問丸の住所として「鋳物師辻子」の名が見られると言う（藤田　2000）。

室町時代に入ると幕府は東大寺に加え、興福寺にも関銭徴収権を与え、関銭徴収権はこの南都の二大寺に固定されるようになる。

また、一方、三代将軍足利義満により、日明貿易が再開され、兵庫津は遣明船の発着基地としての機能も併せ持つようになり、博多と並ぶ対中国貿易の中心地として大いに発展することになる。

以後、応仁・文明の大乱の勃発まで、遣明船の発着に際し将軍の兵庫下向の記事が度々文献に現れる。

藤田氏は中国貿易における寺院特に禅宗寺院の重要性について言及し、たとえば、兵庫区門口町の福厳寺は、室町時代には来日した中国使節との交渉の場や宿舎にもなり、外来文化の発信や外交の窓口など、国際交流センターの役割を果たしていたとされている（藤田　2000）。

このように、瀬戸内航路の中継基地、勘合貿易の拠点として繁栄を誇った兵庫津も、応仁元年（1467）に、

幕府を支える有力守護の一つであった畠山氏の内訌をきっかけに勃発した応仁・文明の大乱の兵火に罹り荒廃し、乱の終了後、町は復興するものの、国際貿易港としての地位は堺に奪われ、この時期を契機に以後衰亡に向かうとされてきた。

しかし、後述するように、今回の出土品整理を通して、15世紀後半代における兵庫津の衰退は認められず、むしろ、兵庫津の衰退は16世紀前半から後半代の時期に顕著となることが明らかとなっている。

ここでは、このことに関連すると考えられる摂津における守護細川氏の消長について触れておきたい。

摂津は鎌倉時代後半には北条氏が守護に補任されるが、南北朝期から室町時代前半には赤松氏などが、相継いで守護に補任されるものの、分郡守護が存在するなど、その支配体制は複雑であったとされている（今谷1983）。

永徳2年（1383）細川頼元が守護に補任されて以降、細川管領家が摂津守護職を世襲して行く（福田　1985）。しかし、頼元の入国当初は、守護の支配権はその半国にしか及ばず、以後細川氏は摂津における支配権の強化に努め、細川勝元が摂津守護となる嘉吉2年（1442）頃には、その支配権は有馬郡を除く摂津全域に及ぶようになるとされている（今谷　1983）。

細川氏による摂津支配は、以後、応仁・文明の大乱を経て、勝元の子政元の代にも継続される。政元には実子がなく、政元が家臣に謀殺されると細川氏ではその後継をめぐって養子の澄之と澄元の間で争いが生じる。この後継争いは、曲折を経て、最終的には、永承4年（1507）の澄元の死によって、和泉守護家出身の細川高国の勝利に帰する。

細川氏の摂津支配が急速に崩壊して行くのは高国が出家する大永5年（1525）以降とされている（杉山1965）。

以後、摂津は阿波の三好氏の侵攻などによって混迷を深め、再び安定を取り戻すのは織田信長による永禄11年（1568）の摂津侵攻以降となる。

天正8年（1580）、織田信長の家臣であった池田信輝によって兵庫城が築城され、新たに都賀堤が造られ、兵庫津はその城下町、近世都市として再出発する。

慶長元年（1580）に発生した慶長の大地震によって、兵庫津は再び壊滅的な被害を被るが、江戸時代に入ると摂津国尼崎藩領となり、港町としての機能を回復する。

明和8年（1796）には天領となり、以後、幕末の開港を迎えるまで、兵庫津は瀬戸内航路の中継基地として、また、天下の台所と呼ばれた当時の経済の中心地大坂と兵庫を結ぶ兵庫船の発着基地として繁栄を続ける。

近世の兵庫津の実態を窺わせる資料には、文書では有名な岡方文書があり、また、元禄年間の町の様子を克明に描写した『元禄兵庫津絵図』をはじめとして、『摂津花隈城絵図』、『文久兵庫津絵図』などの絵図も複数存在し、近世の兵庫津を語る上で欠かせない貴重な資料となっている。

兵庫津に大きな転機が訪れるのは幕末の慶応4年（1868）の開港である。開港に伴ない、瀬戸内航路の中継基地であった兵庫津はかつての国際貿易港として、新たに躍動を始める。

明治に入ると、山陽鉄道が敷設され、船入江は埋め立てられ、新たに兵庫運河が開鑿されて、兵庫津は近代的な港湾都市へと変貌を遂げることになる。

2．発掘調査の成果

上記のように、中世から近世にかけて繁栄した兵庫津に関しては、中世には有名な『兵庫北関入舩納帳』、近世では『岡方文書』などの文書資料、『一遍上人絵伝』などの絵画資料、『元禄兵庫津絵図』などの絵図資料など、その実態の一端を窺わせる貴重な資料が豊富に残り、中世・近世の経済史、交通史を研究する上で貴重なフィールドとして、研究者の注目を集めてきた。

しかし、発掘調査を伴なう考古学的アプローチからの実態解明については、同様の性格をもつ博多、堺などと比べると遅れていると言わざるをえない。

現在、『元禄兵庫津絵図』に描かれた範囲内は兵庫津遺跡として周知の遺跡に登録され、神戸市教育委員会が発行する遺跡分布図に掲載されている。この範囲内で現状変更を伴う工事が行われる際には確認調査、全面調査が、また、軽微な工事についても工事立会などが必要とされ、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会などによって発掘調査が実施されている。

このような兵庫津関連の発掘調査は昭和63年度に実施された大手前女子大学による調査（藤井　藤本　1993）を嚆矢として、現在まで数十次にわたって行われている。

しかし、遺跡が市街地に位置し、調査面積が小規模なものが多いこと、阪神・淡路大震災に伴う復興調査では、掘削深度が地下の遺構に影響を与える範囲内に留められ、最終遺構面まで調査されたものが少ないこと、各年度の調査成果については現在整理中のものが大部分で、正報告が発行されているものがほとんどなく、概報、年報、現地説明会資料、講演会資料などでその成果の一部が発表されるに留まっていることなどから、遺跡の全容を推定するには資料不足の感は否めない。

発掘調査のデータに関しては上記のような状況にあり、これをもって兵庫津遺跡の実態解明に迫るのはいささか大胆ではあるが、ここでは実態解明へのアプローチの初歩的段階として、手元にある資料をもとに、ここ10年来の発掘調査の成果から何が分かり、何が課題とされているのかについて、時期を(1)清盛以前の大輪田泊、(2)清盛の大輪田泊の大改修、(3)中世の兵庫津、(4)近世の兵庫津、(5)近代以降の兵庫津の５時期に区分し、その概要について触れたい。

(1)　清盛以前の大輪田泊

第１図は現在の兵庫津遺跡の範囲とその周辺に存在する遺跡を兵庫県教育委員会発行の遺跡分布図から拾い出したものである。この中で、現在の兵庫津遺跡に近接し、大輪田泊築造に先行する奈良時代以前の遺跡としては、大開遺跡、上沢遺跡、楠・荒田町遺跡、宇治川南遺跡などがあり、いずれも縄文時代～古墳時代の遺跡である。

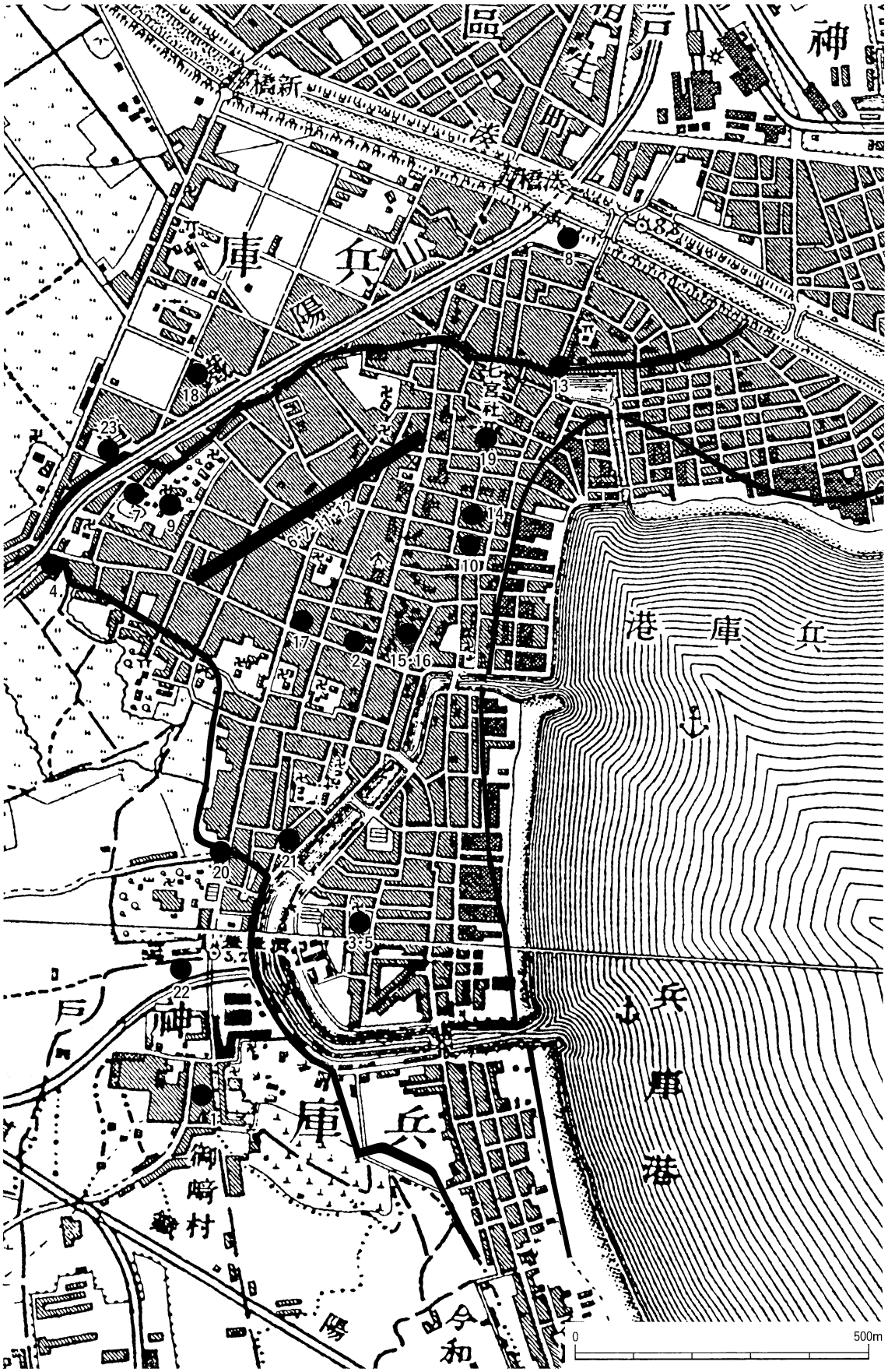
しかし、これらの遺跡はいずれも、現在の兵庫津遺跡の範囲外に位置し、兵庫津遺跡の範囲内では、奈良時代以前の遺構・遺物は発見されていない。

続く奈良時代の遺跡は兵庫津遺跡の周辺での調査例は数少ないが、北側に近接する遺跡としては先に触れた上沢遺跡がある。ここでは、掘立柱建物群が検出されており、この時期の中心的集落と考えられている（神戸市教育委員会　1999）。

先に述べたように、文献の記載からは間接的にではあるが、すでに奈良時代には大輪田泊の存在が窺われ、『行基年譜』には行基が摂津国兎原郡宇治郷の大輪田船息を修築したとの記載がある。しかし、それが現在のどの地点に比定されるかについては定説はない。

足利健亮氏は『元禄兵庫津絵図』に記載された逆瀬川町付近に奈良時代の古湊川の旧河道が存在していたと

第１図　兵庫津遺跡と周辺の主要遺跡分布図（太線内は兵庫津遺跡の範囲）



第２図　兵庫津遺跡の調査地点（大日本帝国参謀本部陸軍測量局　明治18年測量図に加算）
（太線は『元禄兵庫津絵図』に描かれた町場の範囲）

番号	調査年度	名前	調査主体	所在地	近代	近世	中世	古代	原始	備考	文献
1	昭和63年度	兵庫津遺跡	大手前女子大学	兵庫区御崎本町	○	○	○	△	△	第４遺構面で須佐入江の汀線検出。	1
2	平成２年度	兵庫津遺跡	神戸市教育委員会	兵庫区西中町1丁目		○	○				2
3	平成３年度	兵庫津遺跡	神戸市教育委員会	兵庫区中ノ島2丁目（阿弥陀寺）		○				阿弥陀寺創建時（1271年）の遺構は検出されず。	
4	平成６年度	兵庫津遺跡	神戸市教育委員会	兵庫区西柳原6～７丁目		○					
5	平成７年度	兵庫津遺跡	神戸市教育委員会	兵庫区中ノ島2丁目（阿弥陀寺）		○				撹乱が多く、工事影響深度が近世の包含層に到達せず。	
6	平成８年度	兵庫津遺跡（１）	兵庫県教育委員会	兵庫区西宮内町1丁目		○	○				3
7	平成８年度	兵庫津遺跡（２）	兵庫県教育委員会	兵庫区西宮内町～三川口町		○	○	△	△	近世の道路状遺構検出。	3
8	平成８年度	兵庫津遺跡（３）	兵庫県教育委員会	兵庫区西出町2丁目		○					3
9	平成８年度	兵庫津遺跡	神戸市教育委員会	兵庫区門口町5丁目		△	△				4
10	平成８年度	兵庫津遺跡	神戸市教育委員会	兵庫区鍛冶屋町		○				鍛冶工房検出。	4
11	平成８年度	兵庫津遺跡	神戸市教育委員会	兵庫区西柳原町～兵庫町１丁目		○	○	○			
12	平成９年度	兵庫津遺跡	兵庫県教育委員会	兵庫区兵庫町１丁目～東柳原町１丁目	○	○	○				5・6
13	平成10年度	兵庫津遺跡	兵庫県教育委員会	兵庫区西出町2丁目～兵庫町1丁目		○				江戸中期以降の「船入江」検出。	7
14	平成10年度	兵庫津遺跡（第15次）	神戸市教育委員会	兵庫区七宮町２丁目		○	○			「宝永の大火」の焼土面検出。	8・9
15	平成10年度	兵庫津遺跡（第17次）	神戸市教育委員会	兵庫区本町１丁目		○					8
16	平成11年度	兵庫津遺跡（第18次）	神戸市教育委員会	兵庫区本町１丁目		○					
17	平成11年度	兵庫津遺跡（第19次）	神戸市教育委員会	兵庫区本町２丁目	△	○				近世の道路状遺構検出。	
18	平成11年度	兵庫津遺跡（第22次）	神戸市教育委員会	兵庫区三川口町		○				水田検出。	
19	平成11年度	兵庫津遺跡（第22次）	神戸市教育委員会	兵庫区七宮町２丁目	○	○	○			海抜－30cmで中世の遺構面検出。	
20	平成13年度	兵庫津遺跡（第26次）	神戸市教育委員会	兵庫区切戸町	○	○	○	△		真光寺旧境内地を巡る壕を検出。	24
21	平成14年度	兵庫津遺跡（第31次）	神戸市教育委員会	兵庫区切戸町		○	○			14世紀後半、15世紀初頭、近世後半の遺構を検出。	24
22	平成15年度	兵庫津遺跡（第32次）	神戸市教育委員会	兵庫区芦原通1丁目				○		８世紀後半に掘削され、10世紀まで機能していた溝を検出し、奈良時代までさかのぼる遺構と遺物が確認された。	24
23	平成11年度	三川口遺跡	神戸市教育委員会	兵庫区三川口町		○				水田検出。	10
101	平成４・６年度	塚本遺跡	神戸市教育委員会	兵庫区塚本６丁目他		○	○		○	弥生前中期の土坑・溝を検出。	11·12
102	昭和61～平成８年度	大開遺跡	神戸市教育委員会	兵庫区大開通		○	○		○	弥生前中期の土坑・溝を検出。	11·13·14
103	平成元年～平成10年度	上沢遺跡（第21次他）	神戸市教育委員会	兵庫区上沢通			○	○	○	縄文晩期～弥生前期、古墳時代、飛鳥時代、平安～中世の集落。	8·14～18
104	昭和58年～平成９年度	湊川遺跡	神戸市教育委員会	兵庫区下沢通		△	△	△	○	６世紀末～７世紀竪穴住居７棟、６世紀中頃の掘立柱建物５棟を検出。	17·20·22
105	平成10年度	兵庫松本遺跡	神戸市教育委員会	兵庫区松本通			○		○	弥生時代後期～古墳時代前期前半の掘立柱建物を検出。	8
106	昭和53年度～平成４年度	楠・荒田町遺跡	神戸市教育委員会	兵庫区荒田町			○	○	○	縄文後期の土坑、弥生時代の住居址。方形週溝墓、中世の集落。	11·12·14·18～20
107	昭和61年度	雪御所遺跡	神戸市教育委員会	兵庫区雪御所町		○	△			近世以降の石垣を検出。	20
108	平成10年度	祇園遺跡	神戸市教育委員会	兵庫区上祇園町				○	○	平安時代末の庭園遺構と弥生後期～古墳時代初頭の竪穴住居を検出。	8·12·21
109	昭和58年度	宇治川南遺跡	神戸市教育委員会	中央区橘通		○	○	△	○	縄文早期～晩期の土器出土。平安時代の柱穴と溝を検出。	22
110	平成12年度	下山手遺跡（第３次調査他）	神戸市教育委員会	中央区下山手					○	弥生時代後期～古墳時代後期の掘立柱建物を検出。	23

第３表　兵庫津遺跡の調査地点と周辺の主要遺跡

し、このラインが兎原郡と雄伴郡の境にあたり、大輪田泊が兎原郡にあったとする説は成立するとされている（足利　1999）。

しかし、発掘調査の成果からは、逆瀬川町付近からは、奈良時代の旧河道、集落などの遺跡は発見されておらず、清盛以前の大輪田泊に関しては、位置、存在とも確認されていなかった。

このような中で、神戸市教育委員会が2003年度に実施した第32次調査（第３表　22）では、初めて兵庫津遺跡の範囲内で奈良時代にまで遡る遺構・遺物が発見され、奈良時代の大輪田泊の存在、位置を考える上で重要な成果をもたらした。調査では、８世紀後半の須恵器の杯、９世紀～10世紀代のものと見られる須恵器の杯蓋を伴なう溝が２条検出されている。

この溝の性格については、建物を区画する溝、堤体の一部或いは排水施設などの可能性が考えられている。

また、溝の北側ではピットが検出されており、これらの結果から、ここには、奈良時代から平安時代にかけて築造された掘立柱建物や塀、柵が存在した可能性が高いと考えられている（阿部　2003）。この調査は現在整理中で、詳細の検討は整理作業の終了を待たなければならないが、奈良時代の大輪田泊の存在、位置に関して、この付近にそれが存在した可能性を強く示唆するものとして重要な調査と言えよう。

(2)　平清盛の大輪田泊の大改修

平清盛による承安年間（12世紀後半）の経ヶ島の築造は歴史上広く知られており、清盛が工事を急ぐあまり西に沈む夕日を呼び戻したというエピソードは、広く人口に膾炙している。

平氏とこの地との関係は平氏がその別邸をこの地の北側にある福原・平野に構えたことから生じ、清盛が遷都を強行したいわゆる福原京と並んで、その実態解明への調査が積み重ねられてきた。

福原京に関しては、1981年度以来、その推定地とされる楠・荒田町遺跡を中心に調査が行われ、1981年度の調査では大型掘立柱建物と二重の堀が、また、その北側に位置する祇園遺跡では庭園とそれに伴なう池が検出され、その中から大量の京都系土師器皿や吉州窯系の玳玻盞が出土し、平氏一門に関連する邸宅跡と考えられている（須藤　1999、神戸市教育委員会　1998、富山　2000）。

さらに、2003年度に行われた楠・荒田町遺跡の調査では、1981年に発見された二重堀が東西約39mにわたって延びることが確認され、また、その北側で、１辺が約１mの大きな掘形をもつ、基底部に礎盤石を置いた２間×３間の建物が検出されている。いずれも、出土した遺物から福原京の時期と重なる時期の遺構とされており、調査地の西にある荒田八幡神社が清盛の弟頼盛の邸宅跡と伝えられていることなどから平氏一門の邸宅跡の可能性が極めて高いものと考えられている（岡田　2004）。

このように、清盛が神戸の地で行った２大事業すなわち福原遷都と大輪泊の改修のうち、前者については、近年の調査で断片的にではあるが、漸くその一端が明らかになりつつある。

一方、この章のテーマである大輪田泊については、今回報告する平成９年度の調査を始めとして、現在までの調査成果からは、遺物については白磁碗、青磁碗、京都系土師器皿などを中心に12世紀後半代にまで遡る遺物の出土が見られ、遺構についても、断片的に土抗、ピットなどが検出されているが、港湾施設あるいは集落など、清盛が改修した時期の港に伴う確かな遺構は現在まだ確認されていない。

平清盛の大輪田泊の改修は、後の兵庫津隆盛の魁をなすものと考えられ、また、平氏政権の経済的基盤となったものである。楠・荒田町遺跡、祇園遺跡などで漸く、この時期の遺構・遺物が検出され、いわゆる福原京の実態が解明されつつある現在、同時に存在したと考えられる大輪田泊の実態解明の端緒が発見されるのも、そう遠くないものと考えられる。

(3) 中世の兵庫津

先に述べたように、藤田明良氏によれば、鎌倉時代以降、陸続きとなった経ヶ島を中心に町場が形成されはじめ、当時この港町は兵庫島と呼ばれていたとされる（藤田　2000）。

考古学的にも、この時期になると部分的にではあるが、その実態が明らかになってくる。

今回報告する兵庫県教育委員会による平成9年度調査（第3表　12）は、中世の町屋群がまとまった形で検出され、町場の存在が明らかとなった最初の調査となった。

ここでは、第Ⅲ章以下で詳述するように、中世の町場に伴なうと考えられる町屋群が『元禄兵庫津絵図』に描かれた範囲の北西部で、北東から南西方向にほぼ280mの範囲内で密集した形で検出され、中世兵庫津の町場の一部が初めてその姿を現した。

また、溝、掘立柱建物群の他に、井戸、建物を囲む柵列、炉跡、土器廃棄土抗などが見つかり、その中から、土師器皿、土製煮炊具、東播系須恵器鉢・甕、備前焼擂鉢・甕、丹波焼甕、瀬戸・美濃系陶器碗・皿・天目茶碗・水滴、中国製の天目茶碗、白磁碗・皿・四耳壺、青磁碗・皿、青花磁器碗・皿などの遺物がおびただしく出土した。

またこの他、港町にふさわしい倉庫の基礎と考えられる石組の建物基礎などが検出されて、中世の兵庫津の存在が考古学的に実証されることになった。

このように、今回報告する平成9年度調査では、町屋の存在、その存続時期、町場内の施設などについては、ある程度明らかになったが、調査範囲が幅6m、長さ600mと言う細長い範囲に限定されたため、町屋によって構成される町場の細かい地割構造を明らかにするには至らなかった。

その後、平成10年度に神戸市教育委員会によって実施された第15次調査（第3表　14）で、この点については、ある程度解明されることになった。

この調査では近世から中世の13世紀後半代にまで遡る町屋群及び遺構面が検出され、16世紀後半代にはすでに後の元禄絵図に描かれたものと一致する短冊型地割が存在するが、それ以前の15世紀後半から16世紀前半の時期の地割は、それとは構造を異にすることが明らかになった。その結果、16世紀段階で、近世に継続する地割が形作られたことが実証された（内藤　2000）。

それでは、13世紀後半には形成され、16世紀代にその地割構造を変えて近世に継続して行く中世の兵庫津の町場の範囲はどの程度の規模が想定されるのであろうか。

この問題を考えるには、中世の兵庫津の南に存在した内海、すなわち須佐入江がどの範囲にまで入り込んでいたかを検討する必要がある。

発掘調査で、当時の汀線が確認されたものとしては、昭和63年度に大手前女子大学よって調査された第3表(1)の調査がある。また、旧稿（兵庫県教育委員会　2001）では、一遍入寂の地として知られる真光寺の位置に着目し、鎌倉時代後半に成立したとされる『一遍上人絵伝』に描かれた真光寺の周辺に波頭が描かれてことから（小松　1988）、当時の兵庫津の南端を現在の真光寺周辺と想定していた。

しかし、2002年度以降、真光寺及びその南の兵庫区切戸町一帯で行われた調査の結果、真光寺の南でも中世の遺跡が存在することが確認されている（安部　2003）。

また、『一遍上人絵伝』に描かれている波頭も必ずしも海を表したものではなく、西方極楽浄土にある池を観念的に表現したものであるとの指摘もなされている。

これらのことから、必ずしも、真光寺が兵庫津の南端であったとは言えず、鎌倉時代後半には、現在の真光寺周辺が兵庫津の一つの中核をなす地域を形成していたことが窺われる。また、北限は神戸市教育委員会によ

る第15次調査（第３表　14）で、少なくとも13世紀代にまで遡る遺構が見つかっており、この付近にまで生活の場が及んでいたことが分かる（内藤　2000）。

海岸部に面した東限については、15世紀中葉の『兵庫北関入船納帳』にその名が現れ、元禄絵図に海に面して描かれている嶋上町付近に求められよう。

西限については、明確ではないが、第３表　23の調査で、この付近は中世段階では水田であったことが分かっており、少なくとも町場の範囲はここまで及んでいなかったことが分かる。

以上をまとめると、中世の兵庫津は、第15次調査地点を北限とし、現在の真光寺付近を南の中核として、近世の兵庫津の範囲内のやや狭い範囲に存在していたことが想定される。

いずれにせよ、中世の兵庫津を考える上で真光寺の存在は重要な鍵になるものと考えられる。真光寺に限らず、中世の兵庫津の構成要素としての寺院の存在は藤田明良氏が指摘されるように、港の機能、構成を考える上で極めて重要である。

今後の調査では、これら寺院の位置の確認、その建物配置、存続時期、出土遺物の検討などが課題として残されている。

(4)　近世の兵庫津

近世の兵庫津については、これまでたびたび引用した『元禄兵庫津絵図』が残されており、港町の規模、範囲だけではなく、道路、街区など町割を構成する施設、船入江などの港湾施設、鍛冶屋町、大工町などの住人の職種を表した町名、また古くは『兵庫北関入船納帳』の時期にまで遡る町名の記載、町の周囲を巡る水路など様々な情報が詳細に記録されている。

また同時に、発掘調査のデータも、中世に比べると格段に多くなり、町場の規模のみならず、町屋の構造に至るまでの細かいデータも部分的にではあるが着実に蓄積されつつある。

特に、先にも触れた神戸市教育委員会による第15次調査の調査結果は、遺構の残りが良好であったこと、調査面積が約400㎡と比較的規模が大きかったことなどから、町屋の全容が解明され、近世の兵庫津の町場の構造を考える上で貴重な資料を提供した。

まず、元禄絵図に描かれた町がいつごろ成立したかについては、先にも触れたように、16世紀の後半代には元禄絵図と一致する地割が形成されていることから、部分的にではあるが、近世の兵庫津は16世紀後半、すなわち天正８年（1580）の兵庫城の築城とそれに伴う城下町の整備によって成立したことが推定できる。

また、慶長元年（1580）の慶長の大地震の痕跡も検出されており、その後も地割は変わることなく復興している。

町屋については16世紀後半から18世紀代に至る町屋が宝永の大火によると考えられる焼土層を挟んで４面にわたって検出されているが、その構造はいずれも街路に取り付く礎石建物で構成される町屋で、街区は短冊形地割を呈し、元禄兵庫津絵図に描かれた地割と一致している。

町屋の内部は建物の片側に一列に数部屋を設ける縦長の構造で、町屋の裏手には、ゴミ穴などの遺構が存在するなどの各時期に共通した特徴がある。

町屋の規模に関しては、間口は２～３間と一定であるものの、奥行きは、織豊期では５～６間、江戸中期では７間と時代が下るにつれて奥行きが長くなって行く傾向を示している。

このように、街路を挟んで両側に間口の狭い町屋が軒を連ねると言う『元禄兵庫津絵図』に見られる近世の兵庫津の景観は兵庫城の築城とそれに伴なう城下町の整備の行われた天正年間まで遡り、それを踏襲する形で

近世の町場が形成されていったことが明らかになった（内藤　2000）。

また、兵庫津絵図には鍛冶屋町、大工町などそこに住む住人の職種を示す地名が記載され、それが現在も地名として残っている例が少なくないが、そのことを示す調査事例として、神戸市教育委員会が平成８年度に実施した第３表⑽の調査がある。

この調査では２間×２間の礎石建物、鍛冶炉と考えられる石組遺構などが検出され、先端に鉄滓の付着した鞴の羽口が大量に出土した。これらは出土遺物から17世紀代の鍛冶工房と考えられている。

この付近一帯は、元禄絵図に描かれた鍛冶屋町に相当し、現在も鍛冶屋町の地名が残っている。

この調査結果は元禄絵図の精度の高さを証明したのみならず、それが現地名にまで残っていることを示すものとして貴重な資料を提供した（神戸市教育委員会　1999）。

港町の中枢である港湾施設に関しては、今回報告する兵庫県教育委員会が平成10年度に実施した第３表⒀の調査がある。

この調査では第Ⅲ章以下で詳述する船入江の石垣が検出されている。石垣は新旧2時期あり、いずれも元禄絵図に描かれていないことから、元禄年間以降、すなわち江戸時代中期以降に築造され、その後改修が行われたことが分かる。

港町を構成する施設として、中世の項でもその重要性を指摘した寺院関連の調査事例としては、平成３年度と平成７年度にいずれも神戸市教育委員会によって実施された阿弥陀寺の調査（第３表　3・5）と真光寺の調査（第３表　20・21）がある。

阿弥陀寺の調査では寺の創建時とされる文永８年（1271）にまで遡る時期の遺構は検出されず、基盤層から近世の石組が検出されたのみであった。この結果、阿弥陀寺は近世以降、現在地に移転した可能性が高い。

また、中世の兵庫津の範囲を考える上で、その重要性を指摘した真光寺については、2001・2002年度年度に、神戸市教育委員会によって調査が実施され（第26次・第31次調査　第３表　20・21）、江戸時代の真光寺の旧境内地を巡る堀、町屋、河道などが検出されている。

この調査では掘削深度の関係から、中世面の調査は行われていないが、近世面の下に中世面があることは確認されており、近世から中世の真光寺の規模、配置、周辺の町屋との関係を知る上で、重要な成果をもたらした（阿部　2003）。

その他、元禄以降、江戸時代後半の町場の拡大の状況を示すものとして、兵庫県教育委員会が平成８年度に実施した西出地区の調査（第３表　8）がある。この調査では、兵庫津の町の内外を区画する湊川の惣門の北東の郊外にあたる地点が調査され、18世紀後半以降、この地点が造成され、文久年間以降に町場に組み入れられて行く町場の拡大の状況を示すものとして注目される調査である（兵庫県教育委員会　2001）。

このように、近世の兵庫津に関連する調査結果は、現況は大いに改変され、往時を偲ぶ縁もないが、地下には、まだ遺構・遺物が数多く保存されており、豊富に残る絵図、文献などとともに、当時の町並み、景観を復元できる可能性が高いことを裏付けている。

⑸　近代以降の兵庫津

兵庫津に大きな変化をもたらしたのは幕末の慶応４年（1868）の開港である。開港に伴い、瀬戸内航路の中継基地であった兵庫津は、かつての国際貿易港としての地位を回復し新たな活動を開始する。

明治に入ると山陽鉄道が敷設され、船入江は埋め立てられ、新に兵庫運河が開鑿されて、兵庫津の景観は大

きく変貌を遂げる。

この時期についての調査事例は乏しいが、今回報告する七宮地区の調査(第3表　13)では明治8年から15年以降に築造された船入江の石垣が発見されている。この石垣は明治26年の兵庫船渠会社による埋め立てを初めとして、区有財産造成を目的として次々に行われた埋め立てにより、明治35年には完全に埋め立てられている。

この調査結果からは、この「船入江」に江戸時代後半に石垣が構築され、「船入江」として整備された後も、明治の初期に大規模な改修がなお加えられていたことが明らかとなった。

神戸港の開港に伴い、中世以来続く兵庫港の機能は神戸港へと移ると一般には理解されているが、この調査事例からは、兵庫新川・運河などの整備によって、船入江の機能が停止する明治中期まで、この地が重要な港湾施設としての役割を担っていたことが推測される。

3．小結

以上、概観してきたように、古代以来、近代まで、断絶期はふくむものの、連綿として繁栄してきた大輪輪泊・兵庫津に関して、ここ20年来の調査成果によって、断片的ではあるものの、文献からは窺い知れなかった実態が漸く明らかになりつつある。

まず、近世の兵庫津については、『元禄兵庫津絵図』に描かれた町並みが発掘調査によって徐々に明らかになりつつある。

特に、神戸市教育委員会の第15次調査の成果からは、16世紀代から18世紀代にわたる町屋が宝永の大火によると考えられる焼土層を挟んで4面にわたって検出され、それは絵図に描かれた地割と一致すると言う成果が得られ、また、元禄絵図に描かれた町の成立が16世紀後半の兵庫城の築城期にまで遡る可能性が示唆されている。

しかし、中世にまで遡ると、今回報告する浜崎地区をはじめ、近年、中世兵庫津の調査事例は増加しつつあるが、近世に比べると、まだその数は少なく、調査地点も限られている。

その結果、中世の町場の存在は確認され、存続時期についてもある程度推定されるようになってはいるが、その構造、町場の変遷、港湾施設の実態、寺院の位置と構造など解明すべき課題は山積している。

中世の兵庫津繁栄の端緒となったと考えられる平清盛の大輪田泊の大改修は、いわゆる福原遷都と並んで、この地における重要な歴史的事象である。福原京関連の調査に関しては、祇園遺跡、楠・荒田町遺跡の調査などによって、近年漸くその一部が明らかになりつつある。

一方、平氏政権の経済的基盤を支えたとされる大輪田泊については、現在、この時期の遺構・遺物が僅かに散見される程度で、その実態はほとんど不明であるといわざるをえない。しかし、祇園遺跡、楠・荒田町遺跡の調査などによって、平氏関連の邸宅と考えられる居住地の存在が確実視されるに至った現在、それと並ぶ大輪田泊の実態が解明される日も遠からず訪れるものと考えられる。

清盛以前の大輪田泊については、『日本後記』天暦元年（947）の改修記事を最後に、その実態については、文献上からも、考古学的にも全く窺い知れなかった。

このような状況下で、2003年度に神戸市教育委員会の第32次調査で、奈良時代から平安時代前期の遺構・遺物が、初めて兵庫津遺跡内で発見されたことは、清盛以前の大輪田泊の実態解明を行う上で画期的な成果もたらしたものと言えよう。

この調査はまだ終了したばかりで、詳細は整理報告書の刊行を待たなければならいが、少なくとも、8世紀から10世紀代の施設が兵庫津遺跡内に存在したことは確実であり、それは、文献の記載ともほぼ一致し、古代

の泊の調査事例としても唯一のものと考えられ、今後の調査の進展が待たれる。

このように、断絶期を挟み、また、断片的ではあり、更には時代により精粗の差があるとは言え、古代から近世へと継続する大輪泊から兵庫津の実態解明は、近年の調査成果から、着実に進行していると言えよう。

引用・参考文献

(1) 兵庫県教育委員会　2001　『兵庫津遺跡　Ⅰ』

(2) 阿部　功　2003　「近年における兵庫津遺跡の発掘調査成果から」　『第１回　兵庫津学習会発表資料』神戸市教育委員会

(3) 岡田章一　2004　「楠・荒田町遺跡の調査成果について」　『緊急シンポジウム　平家と福原京の時代～　楠・荒田町遺跡の評価をめぐって～』発表資料　兵庫県教育委員会

(4) 藤田明良　2000　「中世における港町兵庫のあゆみ」　『歴史と神戸』第39巻第２号　神戸史学会

(5) 今谷　明　1981　「瀬戸内制海権の推移と入船納帳」　『兵庫北関入船納帳』　中央公論美術出版

(6) 福田豊彦　1985　「守護」　『国史大辞典』７　吉川弘文館

(7) 今谷　明　1983　「摂津の国の守護」　『兵庫県　大百科事典』　神戸新聞出版センター

(8) 杉山　博　1965　『戦国大名』　日本の歴史11　中央公論社

(9) 兵庫県　1978　『兵庫県史』第３巻

(10) 藤井直正　藤本史子　1993　『ひょうご津　兵庫津遺跡調査概報』　大手前女子大学史学研究所

(11) 神戸市教育委員会　1999　「上沢遺跡　第３次調査」　『平成八年度　神戸市埋蔵文化財年報』

(12) 足利健亮　1999　「清盛時代の大輪田泊と福原、和田京」　『歴史の中の神戸と平家』　神戸新聞出版総合センター

(13) 須藤　宏　1999　「地中から語る清盛の時代」　『歴史の中の神戸と平家』　神戸新聞出版総合センター

(14) 神戸市教育委員会　1998　「祇園遺跡　第３次調査」　『平成七年度　神戸市埋蔵文化財年報』

(15) 富山直人　2000　『祇園遺跡　第５次調査発掘調査報告書』　神戸市教育委員会

(16) 岡田章一　2000　「兵庫津遺跡の調査」　『歴史と神戸』第39巻第２号　神戸史学会

(17) 内藤俊哉　2000　「中世の兵庫津の町並み」　『歴史と神戸』第39巻第２号　神戸史学会

(18) 小松茂美　1988　「一遍上人絵伝　解説」　『日本の絵巻』20　中央公論社

(19) 神戸市教育委員会　1999　「兵庫津遺跡」　『平成８年度　神戸市埋蔵文化財年報』

第１表　参考文献

1　『ひょうご津　兵庫津遺跡発掘調査概報』　1993　大手前女子大学史学研究室

2　『平成二年度神戸市埋蔵文化財年報』　1993　神戸市教育委員会

3　『平成８年度　年報』　1997　兵庫県教育委員会

4　『平成八年度神戸市埋蔵文化財年報』　1999　神戸市教育委員会

5　『平成９年度　年報』　1998　兵庫県教育委員会

6　岡田章一　「兵庫津遺跡の調査」『歴史と神戸』第39巻２号　2000　神戸史学会

7　『平成10年度　年報』　1999　兵庫県教育委員会

8　『平成十年度神戸市埋蔵文化財年報』　2000　神戸市教育委員会

9　内藤俊哉　「中世兵庫津の町並み」『歴史と神戸』第39巻２号　2000　神戸史学会

10　『平成11年度　年報』　2000　兵庫県教育委員会
11　『平成四年度神戸市埋蔵文化財年報』　1995　神戸市教育委員会
12　『平成六年度神戸市埋蔵文化財年報』　1997　神戸市教育委員会
13　『大開遺跡発掘調査報告書』　1993　神戸市教育委員会
14　『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』　1992　神戸市教育委員会
15　『上沢遺跡発掘調査報告書』　1995　神戸市教育委員会
16　『平成七年度神戸市埋蔵文化財年報』　1998　神戸市教育委員会
17　『平成九年度神戸市埋蔵文化財年報』　2000　神戸市教育委員会
18　『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』　1980　神戸市教育委員会
19　『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』　1985　神戸市教育委員会
20　『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』　1986　神戸市教育委員会
21　『祇園遺跡第５次発掘調査報告書』　2000　神戸市教育委員会
22　『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』　1983　神戸市教育委員会
23　『平成12年度神戸市埋蔵文化財年報』　2003　神戸市教育委員会
24　「近年における兵庫津遺跡の発掘調査から」　『第１回兵庫津学習会資料』　2003　神戸市教育委員会

Ⅲ．遺　構

１．浜崎地区

（１）確認調査

確認調査は、平成８年６月29日～平成８年８月28日に、隣接する西出地区の確認調査（遺跡調査番号：960233）と同時併行で実施した。

浜崎地区の確認調査：遺跡調査番号960189（図版１～４）

確認調査は、当初幅約１ｍのガイドウォールを付設する布掘り部分を調査する予定であったが、布掘り予定部分において埋設管が存在し、地表下３ｍ近くにわたって攪乱を受けている事が判明したため、建設省（当時）との協議の結果、浜崎地区では２×３ｍの試掘坑（グリッド）を28箇所設定して、掘削を行う事とした（調査面積168㎡）。

確認調査の結果、１～28グリッド（以下Ｇと呼称）の内、１Ｇ～25Ｇにおいては、一部に攪乱が認められるものの、連続する近世の遺構面及び包含層を確認した。また、10Ｇ・15Ｇ～25Ｇでは、中世遺構面及び包含層を確認した。

出土遺物は、５Ｇで鉄製釘（Ｍ１）、18Ｇで真鍮製煙管の吸口（M371）、22Ｇから寛永通寶（M580・581）を図化している。

（２）全面調査

・概要（図版５　写真図版１）

兵庫津遺跡（浜崎地区）の全面調査は、平成８年度の調査（遺跡調査番号960311：調査面積75㎡及び調査番号960442：調査面積507㎡）、平成９年度の調査（調査番号970050：調査面積3600㎡）の３度の調査を実施している。調査区割については、前述の通り１区～39区で設定しているが、本体工事工程と発掘調査工程との調整上、各調査区を単独で、あるいは複数の調査区を連続で調査するなど、「虫食い」状に調査しているため、調査区毎で遺構面数や調査区境をまたがる遺構の形状・規模等にばらつきがある。本来ならば遺構面及び遺構名称、遺構番号等を統一的に示すべきところであるが、設定が非常に困難なので、各調査区で完結させることとした。また、各調査区の遺構番号は、報告書掲載遺物が出土した遺構を中心に明示しているが、その呼称については可能な限り調査時のものを流用し、重複するものについては新規番号に振り替えた。このため、遺構番号の記載にはばらつきや欠番が生じている事をご容赦願いたい。

以下、調査区順に記述を行うが、各調査区図版中に記載している番号（例：№65＋11．00ｍ等）は、本体工事計画図面に使用されているステーションナンバーで、№○は20ｍピッチで表示され、東から西へ数字が大きくなり、＋○．○ｍは№○間の20ｍを刻んだ延長である。

１区の調査（写真図版１）

調査区はほぼ全域にわたって近現代の攪乱があり、ベースである砂層にも影響が及んでいる。遺構は砂層上で列状の石組みを確認したが、図化には至らなかった。また、床面上は若干の湧水を伴っており、以下の層での遺物も確認出来なかった。遺物は、包含層から17世紀代の土師器の焙烙（１・２）を図化している。また、宋銭（M469）、寛永通寶（M500）等の銅銭も出土しているが、他の遺物等の状況から18世紀前半以降と考え

られる。（深江英憲）

2区の調査（図版7　写真図版1）

調査区のほぼ全域に石列（SX02）を確認した。SX02は、方形区画を意識しているようで、ベースである砂層直上に暗青灰色粘質土の整地土を敷き、人頭大及び拳大の礫を使い分けて配置している。石列区画内外では、他にSK01、SX01・03を検出した。

SK01は直径約70cm、深さ10cm弱の円形を呈する。土坑内からは多量の土師製土錘が集積して出土した。

SX01は長軸約60cm、短軸約40cmの不定楕円形を呈する土坑内に完形の蛸壺を埋設したものである。また、SX03はほぼ完形の蛸壺を石組内に設置したものである。

遺物は、SK01から土師製土錘（5～21）、SX01から蛸壺（3）、SX03から蛸壺（4）、ピット内から18世紀前半の陶器碗（22）を図化している。その他、建物整地層中から17世紀前半の陶器（23・24）、包含層中から19世紀前半の土師器の小皿・陶器・染付磁器・土製品等（25～52）を図化している。また、真鍮製煙管の雁首（M372）、寛永通寶（M493・490・494・519・521）も出土している。

遺構の時期は、遺物の出土状況から18世紀前半以降と考えられる。（深江）

3区の調査（図版8　写真図版2）

1区・2区と同様に、ベースとなる黄灰色砂直上を暗青灰色粘質土で整地している。本地区では、方形の石組状遺構（SX01）を検出した。石組は、人頭大の礫を北面に配置し、東面と西面側にやや小振りの礫を南北方向に並列させているが、上部に数段の石積みがあったらしく、東側ではそれが崩落している状況を示している。石組の性格については、削平等の影響もあり不明だが、「集水枡」のような導水施設の一部ではないかと考えられる。遺構内からは、所謂「くらわんか茶碗」が出土しているが、図化には至っていない。

遺物は包含層から土師器皿（53～64）、土師器焙烙（65・66）、瓦質土器火鉢（67）、陶器類（68～75）、白磁（76）、染付磁器類（77～88）、土製品（89～97）を図化している。また、真鍮製煙管の吸口（M373）、寛永通寶（M505）も出土している。

遺構の時期は、出土遺物の状況から18世紀前半～後半と考えられる。（深江）

4区の調査（図版8　写真図版2）

前地区までに見られた暗青灰色粘質土の整地土が、あまり明確に確認できない。また、ベースとなる黄灰色砂の堆積の標高が若干高くなる傾向にあり、包含層における出土遺物の状況も非常にバリエーションがあることから、近現代の攪乱の影響を非常に強く受けているものと考えられる。

遺構は、調査区東側で大小の溝を検出したが、ほぼ東西南北の方向に沿うものの、規格性に乏しく明確な遺構にはなりにくい。また、調査区中央では石列（SX01）を検出した。石列は、人頭大と拳大の礫からなり、その中程で丹波焼きの大甕を立位で埋設しており、雪隠状の遺構とも考えられる。

遺物は包含層から土師器皿（98・99）、土師器焙烙（100～103）、土師器壺（104）、陶器類（105～112）、染付磁器（113～115）、土製品（116・117）を図化している。また、SX01内の埋設甕埋土内から銅製矢立（M374）、包含層から用途不明の真鍮製板（M375）等も出土している。

遺構の時期は、出土遺物等の状況から19世紀前半頃まで下る可能性がある。（深江）

5区の調査（図版9　写真図版2）

本調査区では遺構面を3面確認したが、淡緑灰色シルトを基盤とする第Ⅰ面は攪乱が激しく、遺構は幅約3mの流路1条・土坑1基・ピット2基を検出するのみであった。遺構の状況については図示していないが、僅かな出土遺物の状況から近現代に近い時期と想定される。

第Ⅱ面は調査区西半部上層に黒褐色シルトを基盤とする遺構面（第Ⅱa面）とその下層遺構面（第Ⅱb面）を確認した。第Ⅱa面は、耕作痕と考えられる鋤溝5条・土坑1基・ピット3基を検出した。鋤溝はほぼ東西方向に延びている。遺物は陶磁器類・土師器皿等が出土したが図化していないが、その状況から遺構の時期は19世紀後半と考えられる。

第Ⅱb面は、溝1条・鋤溝3条・ピット5基を検出した。鋤溝はほぼ東西方向に延びるが、やや北に振れている。出土遺物が僅少で図化もしていないが、18世紀後半～19世紀前半と捉えている。

また、攪乱層からは寛永通寶（M499）が出土している。（丸杉俊一郎・深江）

6区の調査（図版10　写真図版3）

本調査区は、調査区中央部～西半部にある既存の埋設管により、東隣の5区第Ⅰ～第Ⅱa面に相当する層まで攪乱を受けており、5区第Ⅱb面に対応する遺構面（6区第Ⅱ面）より調査を行った。

第Ⅱ面は5区と同様の遺構が見られ、鋤溝9条・土坑1基・ピット1基を検出した。鋤溝はほぼ東西方向に延びるが、やや北に振れるものもある。遺物は図化していないが、18世紀後半～19世紀前半と捉えられる。

第Ⅲ面は茶褐色粘質土を基盤層とする。遺構は第Ⅱ面の状況とは異なり鋤溝が畝状に密集しており、耕作地の様相を呈している。また、鋤溝の方向も南北方向と一変している事が注意され、鋤溝の間を東西に延びる部分には断面観察から畦畔状の高まりが確認できる。遺物は僅少で図化に至ってないが、18世紀前半と考えられる。

第Ⅳ面は暗茶褐色粘質土を基盤層とする。遺構は第Ⅲ面と大差はないが、鋤溝の密度が若干疎らになる。鋤溝間を区画する畦畔状の高まりは確認されていないが、鋤溝の区画部を境に北側が深さ10cm、南側が深さ30cmと、その形状・規模等で明確に様相を異にしている。遺物は僅少で図化に至っていないが、17世紀代と考えられる。（丸杉・深江）

7区の調査（図版11・12　写真図版3）

調査区全体には上層堆積として、第2次世界大戦のものと見られる煉瓦や瓦等を含む焼土層が厚く堆積した。その下層から3面の整地層を確認し、2面の遺構面を調査した。

第Ⅰ面は黒褐色粗砂混じり粘質土を基盤とし、遺構は土坑2基（SK01・02）を検出した。その内SK01は、恐らく長方形プランになると考えられるが、南辺の壁面に10～20cm大の礫が並べて貼り付けられており、性格は不明である。

第Ⅱ面は緑灰色砂を基盤とし、遺構は土坑2基（SK04・05）、井戸1基（SE03）を検出した。SE03の方形プランを呈する石組は、井戸枠内及び遺構の西側へ崩壊しており、枠内からは下駄（W1）・漆器（W7・W8）等の木製品、土師器が出土した。遺物の状況から遺構は16世紀後半と考えられる。また、第Ⅱ面の基盤層中から15世紀代の土師器の皿・鍋、瓦質の羽釜・鍋、備前焼擂鉢、施釉陶器水滴、青磁碗等（118～128）が出土したため、さらに下層の遺構の存在が想定されたが、湧水が激しく検出には至らなかった。

出土遺物はこの他に包含層中から近世の土師器皿（129）、土製品（130）を図化している。また、上部包含

層から銅製蝶番（M376）も出土している。（鈴木　卓・深江）

8区の調査（図版13　写真図版3～4）

本調査区はⅠ～Ⅲの遺構面を確認している。第Ⅰ面は井戸と考えられる土坑1基（SK01）、土坑2基（SK02・03）を検出した。各遺構については以下の通りである。

・SK01　一辺約1.6mの隅丸方形堀方内に直径約1.0mの円形土坑を持ち、円形土坑内埋土は黒褐色粗砂混じり粘質土である。ただし、湧水のため完掘しておらず、井戸枠についても不明である。

・SK02　SK01に切られ、掘方全体の形状は不明である。底面には直径約0.9mの円形板材が確認でき、桶の底板と考えられる。底板の直上には焼土塊や炭化材等を多量に含んでおり、埋め桶として使用した後に廃棄土坑として利用したものと思われる。遺物は用途不明の鉄製品（M351）、寛永通寶（M515）を図化している。

・SK03　掘方は一辺約1.1mの隅丸方形で、掘方のほぼ中央に黒褐色粗砂混じり粘質土が直径約0.7mの円柱状に堆積しており、桶の痕跡とも考えられる。遺物は土師器焙烙（131）を図化している。

遺構出土の遺物から時期は17世紀代と考えられる。

第Ⅱ面は中世の包含層であるが、明確な遺構は確認できなかった。第Ⅲ面への落ち際に堆積した層からは瀬戸天目茶碗（144）、施釉陶器皿（145）の他に土師器の鍋、備前焼甕、青磁碗、石製硯等（136～143）、下駄（W2～W4）・箸（W10～12）・容器類（W13）等の木製品が出土した。出土遺物から16世紀後半と考えられる。

第Ⅲ面は石敷遺構2基（SX01・02）、土坑1基（SK05）を検出した。石敷遺構は、検出段階では既に第Ⅰ面の下層で確認していたが、第Ⅲ面にも遺構が及ぶことから、敢えて第Ⅲ面の遺構としてまとめた。

・SX01・02　直径約10～20cmの礫を雑に敷いている。特にSX01は石敷きが南方向に若干落ちながら続いているようで、池状の遺構あるいは築地の基礎等の可能性も考えられるが、不明である。

・SK05　掘方は長軸約1.0m×短軸約0.8mの楕円形を呈し、埋土はオリーブ黒色砂である。遺構内には礫石を多量に含んでいる。遺物は備前焼壺（132）、青磁碗（133・134）、石製硯（135）を図化している。

遺構出土遺物から、時期は16世紀前半と考えられる。また、上層包含層からは18世紀後半の丹波焼火鉢（146）を図化しており、この地区の最終埋没時期を示すものと思われる。（渋谷　格・深江）

9区の調査（図版14　写真図版4）

本調査区東端は現代の下水埋設管に伴う掘り込みがあるほか、何らかの工事に伴う鋼矢板がそのまま残存するなど、極めて新しい攪乱で面が乱されている。また、西側でも近代の攪乱層の他、第2次世界大戦時まで使用されていた平瓦積みの井戸（SE01）の掘方が認められる。本報告では、近世以前に遡ると考えられる比較的残存状況の良好な3面の遺構面を図示した。

第Ⅰ面は近現代の井戸（SE01）の掘方及び平瓦積みの井戸枠が残存する。また、調査区東側で土坑1基（SK01）を検出した。遺物はSK01内から17世紀前半と考えられる無釉陶器擂鉢（147）を図化している。遺構の時期は、下層遺構と隣接地区の状況を踏まえると18世紀以降が妥当と考える。

第Ⅱ面は土坑2基（SK02・03）を検出した。2基の土坑は共に深さ約20cmを測る。遺物はSK02から土師器皿（148）、SK03から土製品（149）を図化している。遺構の時期は明確でないが、17世紀前半から遡らない時期と考えられる。

第Ⅲ面は土坑8基（SK06～11）を検出した。8基の土坑は共に深さ約20cmを測る。遺物はSK05から施釉陶

器皿（150）、SK07から土師器皿（151）、SK08から施釉陶器皿（152・153）、SK10から土師器皿（154・155）、土師器鍋（156）、施釉陶器皿（157）、土製品（158～160）、陶器製面子（161）、SK11から土師器皿（162）、施釉陶器椀（163）を図化している。遺構の時期は17世紀前半代と考えられる。

また、この他の出土遺物としては、包含層から土師器皿、土師器羽釜、瓦質土器火鉢、備前焼甕・擂鉢、丹波焼擂鉢、唐津焼皿、白磁、染付磁器、瓦、土製品等（164～205）を、さらに宋銭（M523・540・548）、明銭（M553）、寛永通寶（M557・560・561・569・571・575・576・578）、不明銅製品（M377）を図化しており、中世～近世前半の遺物が混在している。（鐵　英記・深江）

10区の調査（図版15　写真図版４～５）

本調査区では上層堆積（Ⅰ層）において４面の整地面を確認したが、明確な遺構を確認できなかったため、下層堆積（Ⅱ層）における黒褐色粗砂を基盤とする遺構面１面について調査を行った。

検出した遺構は井戸２基（SE01・02）、土坑17基（SK01～17）、不明溝状遺構１基（SX02）、不明竪穴状遺構１基（SX01）、ピット２基（P01・02）である。以下、主要な遺構について述べる。

・SE01　掘方は直径約1.7ｍの不定円形を呈し、直径約0.5ｍの円形の木枠を伴う。掘方からは16世紀後半の染付け碗が１点出土したが、図化していない。

・SK07　掘方は長軸約1.1ｍ、短軸約0.8ｍの不定楕円形を呈する。遺物は埋土内から真鍮製煙管の雁首（M378）が出土している。

・SK16　掘方は長軸約1.3m、短軸0.7ｍの不定楕円形を呈する。遺構内からは炉床・鉄滓、鞴の羽口、被熱した丸石が多量に出土しており、隣接地にあったとみられる鍛冶炉を廃棄した土坑と考えられる。

・SX02　調査区内で確認できた掘方は長さ約4.8m、最大幅約0.8ｍを測り、細長い溝状を呈する。遺物は土師器皿（206）、備前焼擂鉢（207）、青磁碗（208）、染付磁器皿（209）を図化している。また、埋土上層からは直径約6.0㎝の小型銅製和鏡（M379）が出土した。遺構の時期は出土遺物から16世紀後半と考えられる。

また、その他の出土遺物としては、包含層から土師器皿、瓦質土器羽釜、土師器鍋、備前焼壺等（210～213）を図化しており、いずれも16世紀後半代のもと考えられ、さらに宋銭（M461）も出土した。（中山浩彦・深江）

11区の調査（図版16・17　写真図版５・６）

本調査区は『元禄兵庫津絵図』等の絵図や地割から旧西国街道に隣接する部分で、調査区東半部は旧西国街道にあたると想定されたが、現代の水道管及び電話線埋設坑等による攪乱を受け、街道の道路面は確認できなかった。調査区西側は上層（Ⅰ層）・中層（Ⅱ層）・下層（Ⅲ層）が確認でき、Ⅰ層における整地層４面とⅢ層上面の１面からそれぞれ計５面の遺構面を検出した。Ⅱ層については上下２層を確認したが、明確な遺構は検出できなかった。また、Ⅰ層における第Ⅰ面については、時期的にも新しいものであるため、図示せず記述のみとした。従って、Ⅰ層における３面（第Ⅱ面～Ⅳ面）とⅢ層上面の１面（第Ⅴ面）について図示している。

第Ⅰ面は第２次世界大戦の神戸大空襲による焼土塊・炭化物を含んだ土坑を検出したが、空襲時瓦礫を埋めたものと考えられる。調査区端では煉瓦造りの井戸を検出したが、覆土には多量の焼土塊が含まれており、当該期に廃棄されたものと考えられる。時期は下層遺構の状況も踏まえると、限りなく現代に近い時期と言えよう。

第Ⅱ面は昭和13年の阪神大水害時の洪水砂にパックされた面である。遺構は僅かに溝状遺構（SD05）を検出した。遺物は丹波焼壺（224）を図化している。時期は不明だが、遺構面の埋没状況を考えると近世以前に遡ることはないと考える。

第Ⅲ面は礎石立建物の可能性が考えられる配石遺構（SX01）を、東端部において西国街道に平行する小規模な溝状遺構（SD06）を、西端部では土坑（SK01）を検出した。また、調査区東端南壁付近では、19世紀代の平瓦（216）の下部に人頭大の石を組んだ遺構（SX10）を検出した。遺物はSK01から土師器鍋（220）、青磁碗（221）が出土し、いずれも15世紀代だが、混入と考えられる。遺構の時期は19世紀代と考えて大差ないと考える。

第Ⅳ面は調査区南東端で石組の井戸（SE11）と礫敷遺構（SX07）を、北西端で石組の溜め池と考えられる遺構（SX12）を検出した。またSE11・SX07とSX12との間には円礫が直線的に並んだ部分が見られ、両遺構をつなぐ水路状遺構の存在が想定される。遺物はSX07から土師器皿（214）、「天文」銘の染付磁器八角皿（215）、真鍮製水滴（M380）を、SX12から土師器皿（217）、備前焼擂鉢（218）、土錘（219）、宋銭（M525～538・542・543・545・547）、明銭（M550～552・554～556）、寛永通寶（M558）を図化している。また、図化していないが、「文明16年３月16日」銘の一石五輪搭（空輪・風輪が欠損している。地輪接地部から火輪上部までの高さ48.0cm、幅は21.0cmを測る。）も出土している。遺構の時期は出土遺物からSX07が16世紀後半、SX12が15世紀代の時期にあてられるが、特にSX12は遺構の床面が第Ⅴ面にまで及んでいることを考慮すれば、遺構面としては16世紀後半とする方が妥当であろう。

第Ⅴ面は土坑・ピットを検出している。北西隅にはSX12の床面部が残存する。遺物はSK13から土師器皿（222）、白磁皿（223）、SK17から鉄釘（M2）、P23から鉄釘（M3）を図化している。遺構の時期は出土遺物から14世紀代以降と考えられる。

この他、包含層から土師器皿・羽釜・鍋、備前焼皿、美濃焼系皿、丹波焼盤、瓦器碗、瓦質土器火鉢、備前焼擂鉢・鉢・甕、白磁碗、青磁皿・碗・鉢、染付磁器杯、土製品、硯、瓦等（225～281）を図化している。その内、Ⅰ層（上層）出土のもの（239～240）は17世紀代、Ⅱ・Ⅲ層（中・下層）出土のもの（241～281）は16世紀後半のものを図化している。また、宋銭（M522・524・544・549）、寛永通寶（M567・570・577）も出土した。（半澤幹雄・深江）

12区の調査（図版18　写真図版６・７）

本調査区ではⅠ層（近世）において２面の整地層が調査区東側のみで確認できたが、明確な遺構を検出するには至らなかった。このため、Ⅱ層（中世）中において明瞭に遺構を確認できた灰色粗砂の遺構面について調査を行った。

遺構は井戸２基（SE01・02）、土坑４基（SK02～05）、竪穴状遺構１基（SX01）を検出した。以下、主要な遺構について述べる。

・SE01　掘方は長軸約2.5m、短軸（推定）1.7mの不定楕円形で、僅かに残存する木枠は直径約0.8mを測る円形を呈する。遺構西側をSX01に切られる。遺物は掘方から寛永通寶（M495）が出土している。

・SE02　掘方は一辺約2.3mの隅丸方形を基本として西側部分が大きく張り出す形を呈する。僅かに残存する木枠は直径約0.8mを測る円形を呈する。遺構西側をSK03に切られるが、一連の遺構の可能性も考えられる。遺物は土師器皿（282）を図化している。

・SK04　東隣の11区で検出したSX12と同一の遺構と考えられる。11区との状況から遺構の形状は方形を呈すると想定され、溜め池状の遺構と考えられる。遺物は鉄釘（M4）が出土している。

・SX01　掘方は一辺約2.2mの隅丸方形を呈する。遺構東壁付近で焼土が認められたが、性格については不明である。

この他の出土遺物は、本遺構面までの包含層から16世紀代の白磁皿（304）、14世紀代の土師器鍋（302・303）を図化している。また、遺構面を形成していた灰色粗砂下層から12世紀後半～13世紀前半の土師器皿（283～301）が出土した。

遺構面下での遺物のまとまった出土については、下層での遺構の存在も期待されたが、明確な遺構に伴うものとは認められなかった。（中山・深江）

13区の調査（図版19～21　写真図版７・８）

本調査区ではⅠ層（近世～近代）で２面（第Ⅰ～Ⅱ面）、Ⅱ層（中世包含層）で２面（第Ⅱ面の一部～第Ⅲ面）、Ⅲ層（中世）で１面（第Ⅳ面）の遺構面を確認した。ただし、実態としては一つの面で複数時期の遺構を平行して調査しているため、遺構が重複、あるいは逆転して図示したものもある。

第Ⅰ面は調査区東端で東西方向に走る石組の溝（SD13）を検出した。石組の一部は近現代の攪乱で破壊されているが、溝に直行する木樋を伴う溝が残存している（第Ⅱ面に図示）。また、中央部では石列状の遺構を、西側では土坑を密集した状況で検出した。遺物はSD13から土師器皿（349～351）、施釉陶器入子（352）、備前焼擂鉢（353・354）、備前焼壺（355）、丹波焼擂鉢（356～358）、丹波焼甕（359）、施釉陶器皿・椀・壺（360～368）、土師器燭台（369）、青磁碗・皿（370・371）、染付磁器皿・碗・油壺（372～376）、土製品（377・378）、鉄釘（M5～9・344）、用途不明鉄製品（M352）、寛永通寶（M573）を図化している。また、SK08から施釉陶器椀（314）が出土している。遺構の時期は18世紀前半と考えられる。

第Ⅱ面ではSD13に平行する溝（SD14等）や、西側においてそれに直行する溝（SD71）を検出している。その他、土坑状遺構（SD16、SK54・73等）を検出した。遺物はSD14から土師器皿（315）、SD16から土師器焙烙（379）、SK54から備前焼甕（325）、丹波焼擂鉢（326）、SK73から施釉陶器擂鉢（332）、施釉陶器椀（333）、SD71から施釉陶器椀（380・381）、染付磁器皿（382）、真鍮製煙管の雁首（M381）を図化している。遺構の時期は出土遺物の状況から17世紀代と捉えられる。

第Ⅲ面では土坑（SK56等）、ピットの他、SD13と方向をほぼ同じくする溝、石組の井戸（SE18）を検出した。その他、被熱して炭を含む箇所を持つ方形区画（SX24）も検出している（第Ⅱ面に図示）。遺物はSE18から瓦質土器火鉢（305）、備前焼擂鉢（306・307）、備前焼甕（308）、常滑焼甕（309）、白磁碗（310）、青磁碗（311）、染付磁器碗（312）、施釉陶器皿（313）、SX24から宋銭（M546）を図化している。遺構の時期は遺構出土遺物（SE18）に15世紀前半のものがあるが、第Ⅱ面とさほど離れていないものと考える。

第Ⅳ面は土坑（SK31・35・49・50・62・65・76～78等）・ピット（P27・28・34等）の他、溝（SD38）、素掘りあるいは曲物を井戸枠としたと思われる井戸（SE36・51）を検出した。この内P27・28・34は根石を伴うもので、建物として復元できる（SB01）。SB01は検出できた部分で１間×１間であるが、南側調査区外へ延びる可能性がある。遺構の性格は、施設の丁度中心を南北に走る溝及び土坑があることから導水施設の覆屋の様なものを想定している。遺物はSK31から土師器皿（316）、SK35から土師器皿（317・318）、瓦器椀（319）、SK49から土師器皿（320～324）、SK62から青磁皿（330）、SK65から施釉陶器皿（331）、SK76から土師器皿（334）、土師器焙烙（335）、施釉陶器皿（336）、無釉陶器壺（337）施釉陶器椀（338）、染付磁器碗（339）、SK77から土師器皿（340～342）、青磁碗（343）、土製面子（344）、軒丸瓦（345）、鉄釘（M10～13）、SK78から土師器皿（346～348）を図化している。遺構の時期は、遺構出土遺物（SK77）に14世紀代のものが見られるが、16世紀後半～17世紀前半と考えられる。

この他の出土遺物は、包含層から土師器皿・椀・蛸壺・羽釜・鍋、瓦器椀・皿、須恵器椀・鉢、備前焼擂

鉢・甕・壺、施釉陶器皿・椀、白磁皿、青磁皿・碗、青白磁合子、無釉陶器壺、石製茶臼、染付磁器碗、土製面子、丸瓦等（383～461）、宋銭（M541）、寛永通寶（M562・565・566・568・579）を図化しており、16世紀後半～17世紀前半と考えられるものである。また、本地区の包含層遺物は、一部について西隣の14地区包含層出土遺物とまとめている（462～593）。遺物の種類等には若干のバリエーションがあるもの、ほぼ同様の遺物を図化している。時期的にも大半が16世紀後半～17世紀前半のものだが、下層包含層（第３層）のもの（508～557）は、15世紀代を下限とする土器群である。（神野　信・深江）

14区の調査（図版22～24　写真図版８・９）

本地区ではⅠ層（近世～）において遺構面を２面確認した。ただし、２面目（第Ⅱ面）については、同時期の面が東側のみに残存し、溝状の落ち込み（SD10）より以西は、露頭したⅢ層（中世）の遺構である。本報告では同一面に図示している。

第Ⅰ面では木枠備えた井戸（SE01）と平瓦積みの枠を持つ井戸（SE02）の２基を検出した。SE01には煉瓦・焼土等が埋土に含まれており、第２次世界大戦前後まで使用されていたと考えられる。また、調査区中央付近では、東西方向に短く走る礫混じりの溝（SD03）と、東隣の13区SD13に対応して南北方向に走る石組の溝（SD04）を、そして土坑（SK22）を検出した。遺物はSE01から備前焼徳利（594）、SE02から施釉陶器椀（595）、「兵吉」銘刻印を持つ平瓦（596）、井戸瓦（597）、SK22から土師器皿（634・635）、鉄釘（M15）、SD04から土師器皿（643～648）、土師器焙烙（649～651）、瓦器皿（652）、備前焼甕（653）、施釉陶器椀（654）、青磁皿（655）、軒丸瓦（656）、寛永通寶（M564）を図化している。遺構の時期は、遺構出土遺物（SD04）に17世紀前半のものがあるものの、下層遺構の状況を踏まえると18世紀後半以降が妥当と考える。

第Ⅱ面では調査区東側で曲物を井戸枠とした井戸（SE19）、土坑（SK06・07・12）を検出した。また、溝状の落ち込み（SD10）以西では木枠を持つ井戸（SE23）、土坑（SK29・32・33・35・37）を検出した。遺物はSE19から丹波焼擂鉢（598）、施釉陶器皿（599）、青花磁器碗（600）、SE23から土師器皿（601～605）、瓦質土器羽釜（606）、須恵器鉢（607・608）、備前焼甕（609・610）、施釉陶器花瓶（611）、鉄釘（M14）、SK06から土師器皿（612～629）、土師器鍋（630）、丹波焼擂鉢（631）、SK07から備前焼擂鉢（632）、SK12から施釉陶器皿（633）、SK29から土師器皿（636・637）、須恵器鉢（638）、施釉陶器皿（639）、鉄釘（M16）、真鍮製煙管の羅宇（M382）、寛永通寶（M559・563・572・574）、SK32から鉄釘（M17）、SK33から鉄釘（M18）、SK35から土師器皿（640）、土師器碗（641）、鉄釘（M19～25）、SK37から土師器皿（642）、SD10から土師器皿（657～659）、土師器鍋（660）、瓦器椀（661・662・664～666）、瓦器皿（663）、須恵器鉢（667）、須恵器甕（668）、備前焼擂鉢（669）を図化している。遺構の時期は、SK06・12から17世紀前半の遺物が出土している。ただし、SK29から18世紀前半の遺物が出土していることから、遺構面毎での遺物の取り上げに問題がなければ、面としては後者の時期と認識する他なかろう。

この他の出土遺物は、上層（１層）の包含層から土師器皿、備前焼擂鉢・甕、丹波焼擂鉢、施釉陶器擂鉢・皿・椀、青磁皿、瓦等（670～691）、鉄釘（M383・386）、銅線・真鍮製煙管等（M383～386）が出土しており、19世紀代のものである。それ以下の包含層は前述の通り13区のものと一括しており、16世紀後半～17世紀前半を中心とする遺物である。（菊地逸夫・深江）

15区の調査（図版25～28　写真図版９・10）

本調査区では、現代～中世に至る遺構面を調査した。基本的な層序は、①近現代盛土層、②近世整地土層

（第Ⅰ面）、③近世包含層、④近世整地土層（第Ⅱ面）、⑤中世包含層、⑥Ⅲ層（中世遺構面：第Ⅲ面）の順であり、計3面の遺構面を確認した。

第Ⅰ面では調査区中央部において厚さ約4㎝の粘土を叩き締めたような状況で確認できたが、東部西部においては、削平のため確認できなかった。遺構は中央部付近において土坑2基（SK06・07）を検出した。SK06は直径約0.6mの不定円形を呈し、土坑内に近世瓦を置き、粘質土で埋め込んだ後に叩き締めるという構造を持つ。SK07も同様の状況を呈しているが、特にSK06については瓦中央部にやや窪みがあることから、根石の基礎構造ではないかと考えられる。また、西部では土坑数基（SK05等）を、東部では第2次世界大戦時に生じた廃材などを投棄したと考えられる、多量の焼土に混じりの瓦・煉瓦等を含む土坑2基（SK01・02）の他に、土坑数基（SK03・04）を検出した。遺物はSK01から鉄釘（M26～30）、銅製刀の切羽（M387）、SK02から鉄釘（M31～38）、SK03から鉄釘（M39・40）、真鍮製煙管雁首（M388）、SK04から鉄釘（M41・42）、真鍮製煙管雁首の肩付き（M389）、SK05から鉄釘（M58～60）、SK07から鉄釘（M61～63）が出土している。遺構の時期は限りなく近現代に近いものであろう。

第Ⅱ面では不明石組み遺構（SX01）、ピット、土坑（SK10・13等）を検出した。この内SK10からは一石五輪搭が出土したが、同遺構面の遺構外では一石五輪搭の台石と考えられる方形切石を据えられた状況で検出している。また、SX01は自然石・瓦を乱雑に積んでおり、当初墓の可能性も考えられたが、下部において土坑等の遺構も確認できず、火葬骨・骨片も出土しなかったので、遺構の性格は不明である。遺物はSX01から用途不明の銅板（M391）、SK10から鉄釘（M64～67）、SK13から鉄釘（M43）を図化するのみである。遺構の時期は近世のどの辺りに位置づけできるか不明である。

第Ⅲ面では多数の土坑や石・瓦組の遺構を検出した。また、調査区内は中央部分から東側へ一段下がっている。これは後述する掘立柱建物（SB01）・柵（SA01）等の施設の区画に伴うものと考えられる。

石・瓦組遺構は、石材を用いて組んだ大型方形区画（SX05）に瓦を用いて組んだ小型方形区画（SX02）がとりつく構造のものである。SX05に使用された石材の中には熱を受けて赤変したものが多く認められた。また、SX05の大型区画を構成する東辺には土師器鍋（693）を伴う石組（SX04）を検出した。SX02は瓦を主体に組んだ区画内に瓦を敷き詰め、さらに礫・瓦等を詰め込んでいた。また、SX02とSX05との接合部分には比較的大型の石材が使用されていた。この石・瓦組遺構については、被熱した石が多いことから、竈の可能性が考えられる。

調査区東端では根石を伴うピット5基（SK28・29・31・32・58）で復元される建物（SB01）を検出した。大部分が調査区外であるが、南北1間以上、東西2間以上の総柱と考えられ、主軸はほぼ磁北にとっている。また、調査区中央部では、SB01に平行する柵列（SA01）を、さらにその西側で柵列（SA02）を検出した。前者は約5間分、後者は約3間分のピット列を確認したが、さらに南北へ延びることが想定される。

SA01の東側に隣接する部分では土坑状の遺構（SD01）を検出した。SD01は当初大きな溝状遺構として調査していたが、結果的に土坑となったものである。遺構の大部分が調査区外のため全容は不明である。南側に段を有すが、湧水が激しく完掘までに至らなかった。

以上、検出した建物・柵列は当地における屋敷地の存在を裏付ける遺構である。また、調査地からは図化に至らなかったものの、瓦が多量に出土していることから、検出した施設も含めて瓦葺き建物の存在を想定させるものである。

出土遺物はSX02から備前焼鉢（692）、SX04から土師器鍋（693）、SK16から鉄釘（M44・68）、SK18から備前焼甕（694）、SK23から鉄釘（M69）、SK29から鉄釘（M45）、SK36から鉄釘（M70・71）、SK39から鉄釘

(M46)、SK43から用途不明の鉄製品（M353)、SK46から鉄釘（M47)、SK48から鉄釘（M72)、SK49から鉄釘（M48)、SK51から宋銭（M484)、SK56から鉄釘（M73)、SK58から鉄釘（M49・50)、SD01から土師器皿(695～697)、青磁碗（698)、鉄釘（M51～57）を図化している。遺構の時期は出土遺物から14世紀代～16世紀前半と考えられる。ただし、SK18出土土器（694）は17世紀前半のものであり、上面遺構が残存したものと考える。

この他の出土遺物は、土師器皿・坏身、施釉陶器椀・皿・盤、白磁皿、青磁碗等（699～711)、16世紀前半のものを多く図化している。また、不明銅製品（M390)、唐銭（M414)、宋銭（M416・453・467・468・470・474・482・486）も出土している。(石崎善久・深江)

16区の調査（図版29・30　写真図版10)

本調査区ではベース層である淡黄白色砂層の直上において１面の遺構面を調査した。調査区内は中央部付近が最も高く、東西方向へ向かって徐々に下っている。また、調査区西側は戦災に伴う廃棄土坑により大きく攪乱を受けている。

遺構は井戸１基（SK14)、土坑19基、ピット18基、溝１条（SD01）等を検出した。この内、出土遺物を図化した土坑は５基（SK02・06・09・13・15)、ピット１基（P01）である。土坑・ピットは不定形のもが多く、底に根石と考えられる石材を据えたもの等も散見できた。また、調査区北東側ではSK14を検出した。SK14は底部を打ち欠いた５個体の土師器羽釜（713～717）が、縦に積み重なった状態で出土しており、井戸枠として転用したことが看取される。また、井戸枠内の埋土は、ベース土とほぼ同質の砂が均一に堆積しており、一気に埋没したものと考えられる。遺物はSK02から鉄釘（M75)、SK06から鉄釘（M76)、SK09から鉄釘（M77)、SK13から土師器皿（712)、SK14から井戸枠となった土師器羽釜（713～717)、P01から鉄釘（M74）を図化している。遺構の時期は出土遺物から14世紀代前半と考えられる。(奈良康正・深江)

17区の調査（図版31・32　写真図版11)

本調査区でも東隣の16区と同様、ベースである淡黄白色砂層の直上において遺構が確認できた。調査区内は東から西へと緩やかに下がる傾斜をとる。遺構は土坑20基、ピット９基、溝状遺構１条（SX01）等を検出した。特に西半部の遺構群は非常に密集度が高く、切り合いが激しい状況であった。この内、出土遺物を図化した土坑は６基（SK01～03・13・14・16)、ピットは２基（P07・08）である。遺構の埋土は、概ね黒褐色を呈するが、SX01とSK01では炭化物と赤色粒子を含んでおり、比較的堅く締まっている。また、調査区中央部で検出したSX01は、南北で攪乱を受けているため全容は不明だが、東西幅約1.7m、南北検出長約3.1mで、段を成した東側の最深部で、深さ約0.5mを測る。遺物はSK01から青磁皿（719)、SK02から鉄釘（M78)、SK03から鉄釘（M79)、SK13から鉄釘（M80)、SK14から鉄釘（M81)、SK16から鉄釘・鉄製目鎹（M82)、P07から鉄釘（M84)、P08から鉄釘（M85)、SX01から備前焼擂鉢（718)、鉄釘（M83）を図化している。遺構の時期は、遺構出土土器（SX01）で15世紀代の遺物が見られるが、調査段階では同一遺構から18世紀代の遺物が多く出土している状況を踏まえて、18世紀代とした。(奈良・深江)

18区の調査（図版33～40　写真図版11～14)

本調査区は現在「浄土真宗本願寺派」に属する「西幸寺」の門前にあたる。『元禄兵庫津絵図』においては寺町の一角にあたり、現在でもすぐ東側に極楽寺、済鱗寺等古くからの寺院が残る。また、地形的にはベース

となる砂堆が良好な状態で残存し、東から西へ傾斜している。

本調査区の遺構面等を含めた基本的な層序は以下の通りである（図版６参照）。

①盛土：近世以降の盛土で、厚さ１ｍにおよぶ。近世・近代の陶磁器類や戦災の廃棄物を含む。

②Ⅰ層：調査区全体に広がる砂層で、上面では粘質土の整地層が部分的に残り、不定形土坑・ピット・溝等を検出している。（第Ⅰ面：近世～）

③Ⅱ－２層：調査区西側で検出したパサパサの褐色土で、炭・土器を多く包含している。（中世包含層）

④Ⅱ－３層：調査区東側で検出した暗オリーブ褐色粘質土で、上面では近世の遺構群を形成する遺構面となる。（第Ⅱ－上面）

⑤Ⅱ－８層：土器を多量に包含するオリーブ褐色粘質土で、上面において近世遺構群を形成する遺構面となる。（第Ⅱ－中面）また、後述する石組み基壇状遺構（SX81）を形成する遺構面ともなる。（第Ⅱ－下面）

⑥Ⅲ層：ベースとなる砂堆層で、浅黄橙色砂である。上面では13世紀～14世紀代の遺構群を形成する遺構面となる。（第Ⅲ面）

以下、各遺構面の状況について述べる。

第Ⅰ面では方形及び不定形の土坑（SK08・11、SX07・10）、溝、ピット等を検出した。遺物はSK08から寛永通寶（M504・492）、SX10から寛永通寶（M516）、SK11から寛永通寶（M506・471）、SX07から施釉陶器皿（720）を図化している。遺構の時期は、遺構出土遺物（SX07）で15世紀代のものが出土しているが混入であり、近代以降と考えられる。

第Ⅱ－上面では、不定形土坑６基、溝１基、ピット８基を検出した。この内、出土遺物を図化した遺構は、土坑（SK56・57・60・64・65）である。調査区東側の遺構は埋土が黄褐色砂で、西側の遺構も黄褐色砂だが、若干汚れた感じの砂が混じっている。また、SK65は炭を多量に含む褐色砂質土を埋土としているが、このような埋土の質の差は、遺構の性格や細かい時期の違いを反映している可能性が考えられる。遺物はSK56から鉄釘（M86）、SK57から寛永通寶（M501）、SK60から宋銭（M440）、SK65から鉄釘（M87）、宋銭（M444）が出土している。その他、図化には至っていないが、硯片・瓦等が出土しており、寺院関連の施設の存在が想定される。遺構の時期は明確ではないが、調査時の状況から18世紀代と考えられる。

第Ⅱ－中面では方形土坑２基、不定形土坑６基を検出した。この内、出土遺物を図化した遺構は、方形土坑（SK77）、不定形土坑（SK74・78）である。いずれの埋土も暗褐色～黒褐色砂質土と均質であり、ある時期に一度に埋められたものと考えられる。本遺構面で特筆すべきはSK77である。SK77は調査区東端で検出し、不定な隅丸方形を呈する。遺構は部分的にしか検出できなかったが、検出長南北約2.0m、東西約3.2m、深さ約0.8mを測る。埋土内からは、多量の土器群が出土しており、出土状況から一括廃棄されたと考えられる。また、埋土も周辺の遺構と同じ状況を示しており、一度に埋められたものと考えられる。遺物はSK74から土師器皿（734・735）、鉄釘（M88・89）、SK78から土師器皿（823）、鉄釘（M95～98）、宋銭（M427）、SK77から土師器皿（736～785）、土師器羽釜（786）、瓦質土器羽釜（787～792）、土師器鍋（793～798）、瓦質土器風炉（799）、須恵器鉢（800）、須恵器蓋（801）、備前焼擂鉢（802）、施釉陶器椀（803～805・820）、施釉陶器皿（806）、白磁碗（807～809）、白磁皿（810・811）、青磁碗（812・813・816・817）、青磁皿・杯（814・815）、青磁盤（818・819・821）、石鍋（822）、鉄釘（M90～94）を図化している。遺構の時期は出土遺物の一括性も重視すると15世紀代と考えられる。

第Ⅱ－下面は中面と同じ整地土をベースとするが、中面の遺構群よりも時期的にやや先行する遺構群である。遺構は外周を方形に大石で画して、内側に小石を敷き詰めた石組遺構（SX81）を検出した。

SX81は調査区のほぼ中央部で検出した。遺構の北側と南側は、それぞれ現代のヒューム管等の攪乱と工事用のH鋼矢板で破壊及び寸断されており、全形は確認できなかったが、残存する2箇所のコーナーに対応する2角の存在を想定すると、東西約8.5m、南北約7.5mの長方形の石組が復元できる。この石組は、数10cm大の大きな石で長方形の枠を造り、その枠内に小石やバラスを敷き詰めたものである。枠内の小石敷も、およそ1m程度の幅をもって規則的に敷かれたらしく、方向も統一され、石の間に筋目を確認した。さらに小石を取り除くと、下部から基礎の代わりに敷いたと思われる大振りの石敷を確認した。上記のことから、石組の構築時に大石、小石、バラスの順に敷き詰めたことが伺え、バラス上には遺構廃絶後と考えられる褐色砂質土及び暗褐色粘質土が堆積し、多量の遺物の他、焼けた瓦等も出土しており、火災により焼失した可能性も考えられる。

ここで、調査段階の知見から石組構築手順について模式化すると、以下のようになる（図版36　SX01断面模式図参照）。

①人頭大の石を3列（2列）で方形に並べて石組みの外枠を設定する。

②大きめの石を枠の内側に方向を揃えて並べて、基礎にする。（3層に対応）

③小石を基礎の上に方向を揃えて丁寧に敷き詰める。（2層に対応）

④バラスをその上に敷いて（1層に対応）、枠石をもう1段のせる。

これらは一連の作業として実施されたと考えられるが、特に③の工程では、小石を一定方向に並べるというばかりでなく、1m程度の間隔で隙間を空けるという単位に従って石が敷かれているということである。これは恐らく篭もしくは袋等の有機質のものに詰めて石を並べたものとも想定され、極めて丁寧な造りと言える。

遺構の性格については、町屋のほぼ中心にあり、非常にしっかりした基壇を持つことから倉庫の様な施設と想定される。

遺物はSX81から土師器皿（721～725）、瓦質土器羽釜（726）、備前焼鉢（727）、施釉陶器卸皿（728）、白磁碗（729）、土錘（730・731 ）、鉄釘（M99～106）、鉄製楔（M345）、ボルト・ナット（M354）、宋銭（M431・488）を図化している。遺構の時期は上部からの混入遺物を除けば、出土遺物から16世紀前半と位置づけられる。

第Ⅲ面はⅢ層（浅黄橙色砂層）をベースとする遺構面である。遺構は石組み井戸2基（SE80・100）、土坑、不定形土坑、ピットを検出した。この内、出土遺物を図化した遺構は、土坑（SK101・109・120）、不定形土坑（SX102）、ピット（P113・121）である。遺構は砂層上のためか、浅く形状が不定のものが多い。上面遺構のSX81の外形線に相当する部分では、浅い窪み上の落ち込みを確認した（SX102）が、SX81の構築の際に目印代わりにしたものか、石の重みで沈下してできたものか判別し難い。遺物はSK101から土師器皿（824～829）、SK109から青磁碗（830）、SK120から鉄釘（M107・108）、P113から土師器皿（831）、P121から鉄釘（M109・110）、SX102から土師器皿（732）、須恵器鉢（733）を図化している。遺構の時期は出土遺物から14世紀代と考えられる。

この他の出土遺物は、①Ⅲ層直上の包含層（Ⅱ－13層）から土師器皿・杯、瓦質土器羽釜、施釉陶器椀・盤、白磁皿、青磁碗等（832～842）、宋銭（M417・441・442・450・455・465・483・485）、②中世包含層（Ⅱ－2面下層・上層）から土師器皿、瓦器椀、須恵器鉢、備前焼擂鉢、施釉陶器卸皿、青白磁合子、土製面子、石鍋、砥石等（843～867）、③第Ⅱ－上面整地層（Ⅱ－3層）から土師器皿、白磁皿、染付磁器皿等（868～877）を図化している。包含層等出土遺物それぞれの時期は、①が14世紀代、②が15世紀代、③が16世紀代を中心とするものである。また、Ⅰ層直上包含層からは宋銭（M481・497）が出土した（横田　明・深江）

19区の調査（図版41・42　写真図版15）

本調査区では、東半部において明茶褐色の整地土層を確認し、18世紀後半～19世紀代の遺物が包含することを確認した。しかし、明確な遺構を検出できなかったため、下層面まで掘り下げ、２面の遺構面を検出した。図版では、この２面を図示している。

第Ⅰ面では石組の井戸（SE01）の他、主に土坑・ピットを密集した状態で検出した。この内、出土遺物を図化した遺構は井戸（SE01）、土坑（SK06・11～13）である。ピットについては、根石を持つものも散見され、何らかの建物に関わるものと考えられる。遺物はSE01から染付磁器碗（878）、SK06から土師器焙烙（879）、SK07から鉄釘（M111）、SK11から青磁碗（881）、鉄釘（M114）、SK12から鉄釘（M112・113・115）、SK13から土師器皿（882～886）、瓦質土器羽釜（887）、土師器鍋（888・889）、須恵器鉢（890・891）、丹波焼擂鉢（892）、青磁碗（893・894）を図化している。遺構の時期は、SK01及びSK06についてはそれぞれ18世紀後半、17世紀前半の遺物が出土しているが、これはむしろ検出が困難であった上面遺構の可能性があり、比較的まとまった出土状況を示すSK13の遺物を支持して、面としては15世紀代とするのが妥当と考える。

第Ⅱ面では、東半部において溝状の落ち込み（SD02）とそれを切る土坑（SK20）を検出した。SD02は図化には至っていないながら、13世紀代の遺物を確認できたが、湧水のために遺構の正確な検出はできなかった。遺物はSK20から鉄釘（M116）が出土した。遺構の時期は不明ながら第Ⅰ面にさほど遠くない時期ではないかと考えられる。

この他の出土遺物は、包含層から備前焼擂鉢（895）を図化している。（深江）

20区の調査（図版43　写真図版15）

本調査区では、南側を中心とする近現代の攪乱により、面として確認できた範囲は非常に限られた状況であった。遺構は溝の他、主に土坑とピットを部分的に密集した状況で検出し、ピットについては根石を持つものも確認できた。この内、出土遺物を図化した遺構は、土坑（SK02・07・09）、ピット（P06・31・38）、溝（SD02）である。SD02は南北方向を軸とする溝で、隣接地区で確認されている溝とも方向を同じくしていることから、町屋の区画か建物に伴う溝と考えられる。また、その周辺で検出したピット群の中でも、溝と軸を同じくするものが見られ、建物の一部となる可能性がある。遺物はSK02から鉄釘（M118・119）、SK07から青磁碗（880）、鉄釘（M120～123）、SK09から鉄釘（M124・125）、P06から青磁皿（897）、P31から鉄釘（M117）、P38から土師器皿（898）、SD02から石鍋（896）を図化している。遺構の時期は、出土遺物及び隣接地区の状況から15世紀代と考えられる。（深江）

21区の調査（図版44　写真図版16）

本調査区は東側及び中央部が激しく攪乱を受けている。攪乱の影響が強い中央部より東側は、溝SD01を境にして遺構がやや希薄になるようで、土坑３基、ピット３基、溝２条を検出するのみである。また、溝はSD01と東隣の20区SD02とが同方向を示しており、時期・性格共に関連性を持つものと考えられる。

本地区の遺構は西半部において高い密度で検出した。遺構は溝（SD01）の他、主に土坑とピットを検出した。また、ピットについては根石を持つものも確認できた。この内、出土遺物を図化した遺構は土坑（SK01～05・10）、ピット（P07）、溝（SD01）である。本調査区における遺構の配置は、前述の通りSD01を境として東西で遺構の様相が変わっている。西側における密集したピット群は根石を持つものもあり、建物に関連する遺構を想定できる。また、東側は土坑等が見られるものの希薄であり、区画の外側と想定され、あるいは道

路のような施設も考えることができよう。

遺物はSK01から白磁壺（899）、SK02から土師器皿（900・901）、備前焼甕（902）、SK03から鉄釘（M129）、SK04から土師器皿（903～907）、須恵器鉢（908）、SK05から土師器皿（909～920）、備前焼甕（921）、鉄釘（M130）、SK10から鉄釘（M131）、P07から鉄釘（M127・128）、SD01から鉄釘（M126）を図化している。遺構の時期は、遺構出土遺物（SK04・05）等の比較的一括性の高い遺物は14世紀代に位置づけられ、後出する土坑（SK02）出土遺物は15世紀代に位置づけられる。このことから、遺構面としての時期は14世紀代～15世紀代と考える。

この他の出土遺物は、包含層から土師器皿、須恵器鉢、備前擂鉢、施釉陶器椀、石鍋等（922～938）が出土しており、概ね15世紀前半を中心とする土器群である。（深江）

22区の調査（図版45　写真図版16）

本調査区は東隣の21区と接しており、前地区の溝（21区SD01）の延長の溝も検出している（22区SD01）。また、調査区西側では、その溝に直行する溝（SD02）を検出している。

本地区の遺構は丁度SD02を境に中央部より東側で集中し、主に土坑とピットを検出した。また、ピットについては根石を持つものも確認できた。この内、出土遺物を図化した遺構は、土坑（SK01～14）、ピット（P03・04・08）である。本調査区における遺構配置は前地区を上回る遺構の密集度の高さで、切り合いも多いことから、僅かな時期差で複数の遺構を形成していたことが分かる。特に、ピットは根石を持つものを主体として、建物の建て替え等が幾度にもわたって行われたことが伺える。また、その他の遺構で特筆すべきは土坑SK07である。SK07は調査区中央部で検出した長辺約1.8m、短辺約1.0mの不定な長方形を呈し、遺構埋没後に根石を持つピットに切られるなど、周辺の状況からみて本地区で最も古い遺構の一つと考えられ、出土遺物も非常に一括性が高い状況を示している。

遺物はSK01から鉄釘（M143）、SK02から土師器皿（939～942）、鉄釘（M144）、SK03から土師器皿（943・944）、土師器鍋（945・946）、須恵器鉢（947）、SK04から土師器皿（948）、SK05から土師器皿（949～958）、SK06から土師器皿（959～969）、土師器鍋（970）、SK07から土師器皿（971～992）、瓦質土器鍋（993・994）、瓦質土器火鉢（995）、須恵器鉢（996～999）、鉄釘（M142）、SK08から土師器皿（1000）、SK09から土師器皿（1001）、SK10から土師器皿（1002）、SK11から土師器皿（1003～1010）、土師器鍋（1011・1012）、青磁碗（1013・1014）、土製品（1015・1016）、須恵器鉢（1017）、鉄釘（M140・141）、SK12から青磁鉢（1018）、SK13から土師器皿（1019～1029）、備前焼擂鉢（1030～1032）、SK14から鉄釘（M133～139）、宋銭（M434・466）、P03・04から土師器皿（1033・1034）、P08から鉄釘（M132）を図化している。

遺構の時期は、遺構出土遺物中SK05～08・11等の大型土坑は14世紀代、その他の遺構については概ね15世紀代の土器群であり、14世紀～15世紀代と位置づけられる。

また、その他の出土遺物としては、包含層から土師器皿、須恵器鉢、常滑焼壺、青磁碗、土製品等（1035～1041）が出土しており、これも概ね14世紀代のものを中心とする土器群である。（深江）

23区の調査（図版46　写真図版17）

本調査区ではⅢ層（中世遺構面）において、中世～近世の遺構を検出したが、上部層での近世整地土層の確認はできなかった。また、遺構面Ⅲ層は西へ向かって僅かに傾斜している。

遺構は複雑な切り合い関係を有しており、溝（SD02）・不明遺構（SX01）の他、主に土坑とピットを検出

した。また、ピットについては根石を持つものも確認している。この内、出土土器を図化した遺構は、土坑（SK01・02・04～07・09～11・15～23）、溝（SD02）、不明遺構（SX01）である。以下、主要な遺構について述べる。

・SK02　調査区のほぼ中央部で検出した、長辺約2.8m、短辺約1.0mを測る長方形を呈する。遺構の性格については、当初墓の可能性もあったが、埋土の堆積状況が人為的な埋め戻し等によるものとは考えられず、不明である。遺物は鉄釘（M176）、唐銭（M412）、宋銭（M449・473・476）を図化している。その他、調査時には土師器皿、青磁碗等も出土したが、図化には至らなかった。

・SK04　調査区東側で検出した、直径約1.2mを測る円形を呈する。遺構内からは土壌化した木質を確認され、桶状の容器を埋設していたことが分かった。遺物は土師器皿（1048）を図化している。

・SK09　遺構は西側でSD02と切り合い関係にあるが、前後関係は判別できなかった。また、東側は調査区外におよんでいるために全容は不明であるが、検出規模南北約3.0m、東西約2.4mを測る不定形の大型土坑である。遺物は白磁皿（1052）、青磁碗（1053）、土製品（1054・1055）、鉄釘（M147～163）、鎌状鉄製品（M356）を図化している。

・SK10　遺構は西側をSK19に切られ、大部分が調査区外におよんでいるので全容は明確でないが、検出長約2.0mを一辺とする不定方形を呈すると考えられる。遺物は土師器皿（1056・1057）、瓦質土器鍋（1058）、瓦器椀（1059）、青磁碗（1060）、鉄釘（M181～186）、唐銭（M413）、宋銭（M415・418・419・422～424・428・435～438・443・448・451・454・456・458・460・464・472・475・477・478・480・489）、皇朝十二銭（M452）を図化している。

・SK18　遺構は直径約0.9mの円形土坑内に備前焼甕（1064）を据えた埋甕である。口縁部及び体部上半部が甕内部に落ち込んでいたことから、甕内部には一定期間空間があったものと考えられる。遺物はこの備前焼甕のみである。

・SK19　遺構はSK18の西側に位置し、長辺約0.9m、短辺約0.6mを測る隅丸長方形を呈する土坑内に、丹波焼甕（1065）を据えた埋甕である。土坑内は一部2段掘りとなっており、甕は底部が欠損している。また、甕内部は埋没後に石が2つ置かれていた。遺物は丹波焼甕（1065）の他、鉄釘（M180）が出土した。

・SD02　遺構はSK09の西側で切り合い関係にある。主軸を東西にとり、断面は「U」字状を呈する。遺物は鉄釘（M166・167）が出土している。また、この他土師器皿、黒色土器椀等も出土したが、図化には至らなかった。

・SX01　遺構は調査区東端で検出した。検出長南北約3.0m、東西約1.5mを測る不定形な落ち込みだが、大部分が調査区外におよぶため全容は不明である。遺物は土師器皿（1042・1043）、須恵器鉢（1044）、白磁碗（1045）、鉄釘（M164・165）を図化している。

以上の他、遺構出土の遺物は、SK01から土師器皿（1046・1047）、SK05から備前焼甕（1049・1050）、SK06から不明鉄製品（M355）、SK07から施釉陶器卸皿（1051）、鉄釘（M146）、SK11から瓦質土器鍋（1061）、SK12から鉄釘（M187）、SK15から鉄釘（M178）、SK16から土師器皿（1062）、SK17から瓦器椀（1063）、SK20から鉄釘（M145）、SK21から鉄釘（M168～172）、SK22から鉄釘（M177）、SK23から鉄釘（M173～175）を図化している。また、この他の出土遺物は、攪乱より鉄釘（M179）、寛永通寶（M502）を図化している。

遺構の時期は、出土遺物の内、15世紀代の遺物を含む遺構（SK05・07・18）を除いて、ほぼ14世紀代であり、隣接地区の状況も考慮すると14世紀～15世紀代と位置づけられる。（石崎・深江）

24区の調査（図版47　写真図版18）

本調査区では、中央部付近を近代以降の井戸の設置によって繰り返し攪乱を受けている。また、ベースである淡黄色砂層上において明確な整地層が確認できなかったため、淡黄色砂層をベースとする遺構面、１面について調査を行った。遺構は土坑10基、ピット14基、溝１条（SD01）、集石遺構１基（SX01）を検出した。この内、出土遺物を図化した遺構は、土坑（SK02・06・08）、ピット（P06）、溝（SD01）、集石遺構（SX01）である。

主要な遺構としては、土坑をSK02と集石遺構SX01がある。SK02は調査区中央部に位置し、直径約1.2mの円形を呈する。土坑内からは多量の土器が出土し、土師器皿（1066～1077）、瓦器椀（1078・1079）を図化しており、その他に鉄釘（M188）も出土している。集石遺構SX01は調査区西端で検出した。集石は一辺約1.3mのほぼ正方形を呈し、殆ど上下に重ならずに配置している。集石の下には直径約0.5m、深さ約0.2mのピットを検出した。遺構の性格は、建物の基礎ではないかと考える。遺物は鉄釘（M189）が出土している。また、SX01のすぐ北側では数基のピットが東西に並んでおり、杭列になるものと考える。

以上の他、遺構出土の遺物は、SK06から土師器皿（1080）、SK08から土師器皿（1081・1082）、須恵器鉢（1083）を図化している。また、この他の出土遺物は、包含層から水琴窟に転用された丹波焼甕（1084）、真鍮製煙管雁首（M393）が出土している。

遺構の時期は、遺構出土遺物の内、最も一括性の高いSK02の遺物が14世紀前半のものであり、隣接地区との関係からも当該時期に相当するものと考える。また、包含層出土の水琴窟転用甕は18世紀末以降のものである。（鈴木・深江）

25区の調査（図版48　写真図版18）

本調査区では、近代以降の攪乱を強く受けながら、２面の整地層において遺構面を確認した。

第Ⅰ面では、土坑３基、ピット10基を検出した。ピットについては根石を持つものも確認した。遺構は、東端で褐灰色砂質土、中央部から西側で礫混じりの黒褐色粘質土と異なる質の整地土上に形成されている。本遺構面は出土遺物も僅かで、図化にも至っていない。遺構の時期も不明である。

第Ⅱ面では、浅黄橙色砂層をベースとしており、土坑12基、ピット15基、溝１条を検出した。この内、出土遺物を図化した遺構は、土坑（SK04・11）、ピット（P06・11）、溝（SD01）である。

主要な遺構としては、土坑SK04・09・11がある。SK04は長軸約1.4m、短軸約0.9mの楕円形を呈するが、掘方が一段下がっているため、２基の土坑が重複しているものと考えられる。もう１基の土坑との前後関係は不明だが、最終堆積と考えられる土坑内の黒色粘質土層からは、土師器皿（1085～1090）等の多量の遺物がほぼ完形で出土した。また、SK11は調査区東側で検出した、検出南北長約2.5m、東西長約2.2mの大型土坑であるが、土坑の埋没後に直径約0.8mの円形土坑を設けている。この円形土坑は、SK04内埋土と同様の黒色粘質土を埋土としており、ほぼ完形の土師器皿（1091～1098）、須恵器鉢（1099）、常滑焼甕（1100）、鉄釘（M190）を図化している。SK09は一辺約1.0mの不定方形状を呈し、土坑内に集石が認められる。集石は平面的にこれ以上の広がらないと考えられるが、２段組であったらしいことが、調査区外の断面観察によって看取される。遺構の性格は不明だが、建物の基礎の可能性も考えられる。

また、その他の遺構出土遺物は、SD01から瓦質土器鍋（1101）、P06から土師器皿（1102・1103）、P11から土師器皿（1104・1105）を図化している。遺構の時期は、遺構出土の遺物の内、SK04及びSD01は14世紀代、SK11は15世紀前半に位置づけられ、隣接地区の状況とも合わせて14世紀～15世紀代が相当と考える。

その他の出土遺物としては、下層包含層（第３層）から土師器皿、備前焼甕、丹波焼甕、常滑焼甕等（1106～1112）、上層包含層（第１層）から土師器皿、備前焼擂鉢、無釉陶器甕等（1113～1119）が出土している。前者は13世紀後半、後者は14世紀代を主体とする土器群である。（鈴木・深江）

26区の調査（図版49～51　写真図版19・20）

本調査区は攪乱等の影響により、安定した整地層を確認できなかったが、２面の遺構面を検出し、調査を行った。

第Ⅰ面では、褐灰色粘質土をベースとする遺構面上において、土坑21基、ピット４基、溝３条を検出した。この内、出土遺物を図化した遺構は土坑（SK02・13・16・21）、溝（SD01・03）である。遺構は主に土坑が中心である。土坑は長辺約1.7m、短辺約1.4mを測る不定な長方形を呈するSK02、検出長約2.0m、幅約0.7mを測る細長の長方形を呈するSK13の他、その大半は直径0.7m程の円形土坑群であり、調査区中央部付近に集中している。これら同一規模の土坑の性格は不明ながら、同様のものと考えられる。また、溝SD01・03は幅約1.0mを測り、東西方向に延びている。SD01・03は調査時の状況から、下層遺構（第Ⅱ面）検出の溝（SD04・05）の埋没後に掘り直したものと考えられる。

遺物はSK02から土師器皿（1120）、寛永通寶（M507）、SK13から土師器皿（1121・1122）、瓦質土器羽釜（1126）、SK16から鉄釘（M192）、SK21から鉄釘（M193）、SD01から土師器皿（1165）、青磁碗（1166）、土製面子（1167・1168）、備前焼甕（1169）、用途不明の棒状鉄製品（M358）、SD03から土師器皿（1199～1202）、須恵器鉢（1203～1205）、常滑焼甕（1206）を図化している。

遺構の時期は、遺構出土遺物の内、SK13出土のものが15世紀代、SD01のものが14世紀代、SD03のものが14世紀後半～15世紀前半に位置づけられ、14世紀～15世紀代が妥当と考える。また、SK02からは寛永通寶が出土しているが、上層に存在した近世遺構の名残とも考えられる。

第Ⅱ面では、灰白色砂層をベースする遺構面上において土坑28基、ピット44基、溝２条を検出した。調査区中央部から東側では土坑及びピットが高い密度で分布し、西側では溝（SD04・05）が東西に伸びている。この遺構群の内、出土遺物を図化した遺構は、土坑（SK25・29・30・34・39・44・45・47）、溝（SD04）である。遺構は第Ⅰ面に比してピットを多く検出しているが、建物を復元するには至らなかった。

遺物はSK25から鉄釘（M194）、SK29から土師器皿（1123～1125）、瓦質土器火鉢（1127）、備前焼甕（1128）、白磁四耳壺（1129・1130）、鉄釘（M191）、鉄製鎌（M357）、SK30から常滑焼甕（1131）、SK34から鉄釘（M195）、SK39から土師器皿（1132～1137）、土師器鍋（1138）、鉄釘（M196）、SK40から銅製飾り金具（M394）、SK44から瓦質土器（1139）、SK45から土師器皿（1140～1149）、瓦質土器鍋（1150）、土師器鍋（1151・1152）、須恵器鉢（1153・1154・1156）、白磁碗（1155）、備前焼甕（1157）、青磁碗（1158）、鉄釘（M197）、SK47から土師器皿（1159～1161）、瓦器椀（1162）、須恵器鉢（1163）、丹波焼甕（1164）、SD04から土師器皿（1170～1177）、土師器鉢（1178）、瓦質土器羽釜（1179）、瓦器椀（1180～1182）、須恵器鉢（1183・1184）、須恵器甕（1185～1187）、備前焼甕（1188）、丹波焼甕（1189・1195）、丹波焼壺（1194）、青白磁梅瓶（1190）、土製面子（1191・1192）、石鍋（1193）、常滑焼甕（1196～1198）、鉄釘（M198）を図化している。

遺構の時期は、遺構出土遺物の内、SD04出土のものについて、備前焼Ⅱ期の甕が復元完形ながら良好な残存状況で出土した他、その他の遺物も非常に一括性の高い状態で出土しており、同遺構に当てられる13世紀後半～14世紀前半という年代がそのまま当該時期に反映するものと考える。

その他の出土遺物としては、包含層から土師器皿、瓦質土器羽釜・鍋、土師器鍋、須恵器鉢、備前焼擂鉢・

甕、丹波焼甕、青磁碗、土師器ミニチュア三足鍋、土錘、石鍋等（1207～1247）が出土しており、14世紀代の土器群と考えられる。また、銅製金具（M395）、宋銭（M446）、寛永通寶（M517）も出土した。（鈴木・深江）

27区の調査（図版52・53　写真図版20・21）

本調査区では、ベースとなる灰白色砂層が中央部で高く、西側へ向かって急激に落ち込んでおり、この落ち込みの範囲には灰色砂混じり粘質土が堆積している。この堆積層を除去すると湧水が激しく、それ以下の層が確認できなかった。調査区中央部以東においては、前述の堆積層上に黄灰色砂混じり粘質土の整地層が堆積しており、この整地層上において遺構面（第Ⅰ面）を、そしてベースとなる灰白色砂層上において遺構面（第Ⅱ面）を検出し、この2面について調査を行った。

第Ⅰ面では、井戸1基、土坑7基、ピット3基、不明遺構3基を検出した。この内、出土遺物を図化した遺構は、井戸（SK03）、土坑（SK04・05）、ピット（P01）である。主な遺構としては、井戸SK03がある。SK03は直径約1.7mを測る不定円形を呈する掘方内に石組をもつもので、現状で3～4段の石組を確認した。調査区中央部で東西に並ぶSX01・02は、残存する深さが約0.8mを測り、小児頭大の石によって埋められていた。また、調査区西端のSX03は西隣の28区SX01の掘方の一部と考えられる。

遺物はSK03から土師器皿（1252）、SK04から土師器皿（1253～1265）、須恵器鉢（1266）、SK05から土師器皿（1267）、瓦質土器火鉢（1268）、須恵器鉢（1269・1270）、P01から土師器皿（1322）、土錘（1323）、SX01から土師器皿（1248）、常滑焼甕（1249）、用途不明の鉄製品（M359）、SX02から土師器鍋（1250）、備前焼甕（1251）を図化している。

遺構の時期は、遺構出土遺物の内、SX02出土のものが15世紀後半～16世紀初頭、SK05出土のものが15世紀末～16世紀前半に位置づけられる。総じて15世紀後半～16世紀前半という時期が想定されるが、SK04のみ14世紀後半と古い時期になっている。これは、遺構掘削時に下層遺構（第Ⅱ面）の遺物を取り上げた可能性が考えられる。

第Ⅱ面では、井戸1基、土坑17基、ピット7基を検出した。この内、出土遺物を図化した遺構は、土坑（SK08・09・11・13・14・15・18・19・20・21・22・24）である。土坑は、掘方が方形状を呈するもの（SK17・22・24等）、不定形のもの（SK18）の他、大半は円形を呈するもので、SK19は円形プランの井戸と考えられる。また、隣接するSK20はSK19と同一遺構内にあったようで、掘方としては消滅している。遺物は、SK08から土師器皿（1271～1276）、須恵器鉢（1277）、備前焼甕（1278）、鉄釘（M199～203）、SK09から土師器皿（1279～1289）、SK11から土師器皿（1290～1299）、SK13から鉄釘（M204・205）、SK14から土師器皿（1300・1301）、備前焼甕（1302）、SK15から土師器皿（1303）、SK18から土師器皿（1304～1311）、SK19から土師器皿（1312）、染付磁器杯（1313）、下駄（W5・6）、漆椀（W9）、SK20から須恵器鉢（1314・1315）、施釉陶器椀（1316）、SK21から瓦器皿（1317）、須恵器鉢（1318）、鉄釘（M206・207）、SK22から鉄釘（M208）、SK24から土師器皿（1319）、備前焼擂鉢（1320・1321）、鉄釘（M209）を図化している。

遺構の時期は、遺構出土遺物の内、SK09・11・21・24出土ものが14世紀後半若しくは14世紀代、SK08・18出土のものが15世紀後半若しくは15世紀代に位置づけられる。総じて14世紀後半～15世紀代という時期が想定されるが、SK08・18については遺構の最終堆積、あるいは上面遺構の残存遺物の混入等の可能性も考えられる。また、SK19・20出土のものは17世紀初頭～前半の時期に位置づけられるが、これについては第Ⅰ面において検出できなかった上面遺構と理解する。

その他の出土遺物は、包含層から土師器皿・鍋、須恵器鉢、備前焼壺・甕、施釉陶器椀・皿、石鍋等（1324

～1347）が出土しており、16世紀代～17世紀前半の土器群である。（鈴木・深江）

28区の調査（図版54～56　写真図版21・22）

本調査区では、本体工事工程等の諸事情により、最終遺構面であるベース層（灰白色砂層）のみでの調査を余儀なくされた。そこで、近現代整地層、近世包含層・整地層は重機により除去し、中世の包含層は人力によって掘削し、最終的に標高約0.5m～0.6m部分で遺構面を検出したが、調査区東側の後述するSX01は、それよりもやや高い位置で検出した。遺構は、井戸２基、土坑12基、ピット22基、溝２条、石組遺構（SX01）である。この内、出土遺物を図化した遺構は、井戸（SE01・02）、土坑（SK01～04・08・10）、ピット（P01・14・17）、石組遺構（SX01）である。以下、主要な遺構について述べる。

・SE01　遺構は調査区中央部北壁側に位置する。土坑の掘方は一辺約2.4mを測る隅丸方形を呈すると考えられるが、攪乱により明確でない。井筒は直径約1.0mの円形土坑内に、板材を桶状に組み合わせたもので、２段分を検出した。上段は腐食が激しく、板材は殆ど残存していないが、直径0.7mである。下段は木材がそのまま残存しており、長さ45cm、幅10cm前後の板材を15枚組み合わせて、直径約0.6mの桶を作ったものである。遺物は埋土から土師器皿（1348）、備前焼擂鉢（1349）、井筒内から土師器皿（1350～1361）、備前焼甕（1362）、施釉陶器盤（1363）、掘方内から土師器皿（1364）を図化している。遺構の時期は、15世紀末～16世紀前半と考えられる。

・SE02　SE01の北東側に位置する。土坑の掘方は周辺が攪乱を受け、一部SE01に切られているが、直径約2.5mに復元でき、２段掘りである。井筒は曲物を転用しており、２段分を検出した。曲物自体は腐朽が激しく取り上げは不可能であったが、上段が高さ約23cm、直径約45cm、下段が高さ約20cm、直径約35cmであった。遺物は土師器皿（1365）、鉄釘（M212・213）、鉄製火箸（M360）を図化している。

・SK03　調査区西端に位置する。西側は隣接地区におよび、一部埋設管等の攪乱を受けており、SK01に切られる。掘方は本来長方形状を呈すると推測され、検出長約1.8mが残存し、深さは約0.3mである。上面には拳大～人頭大の自然石が堆積するが、下部に少ない。遺物は須恵器鉢（1367～1369）、備前焼甕（1370）、石鍋（1371）、鉄釘（M215・216）を図化している。遺構の時期は14世紀代である。

・SK10　調査区西側に位置し、土坑SK04、溝SD01等に切られる。掘方は長方形を呈し、長さ約3.2m、幅約2.2mを測る。床面は２段掘りになり、南側が深い。検出面からの深さは、上段が約0.2m、下段が約0.5mである。遺物は瓦器皿（1376）、鉄釘（M218・219）を図化している。

・SD01　調査区西端に位置し、調査区を越えて南へ延びる溝である。検出長約3.4m、幅約0.8m、深さ約0.2mを測り、底は平坦である。遺物は14世紀前後の遺物が出土したが図化には至らなかった。

・SX01　調査区東側に位置し、大型の土坑上部に石積みを設けた地下式倉庫と考えられる遺構である。全体の平面形は長方形を呈すると考えられるが、検出長北辺約4.5m、西辺約8.0mを測る。北辺は1.7mの溝を標高約－0.2mの深さまで掘り、精良な粘土を詰めた後、それを幅約0.9m掘り込んで粘土と砂層を互層に積み下部の壁を設けている。その上に人頭大の石を内側が面を成すように積んでいる。西辺は砂層を掘り、その斜面に直接粘土と砂層を互層に積んで下部の壁としている。その上に積んだ石は、攪乱を受け遺存状態が良くないが、本来は北辺と同様であったと推測される。床面の北西隅の下部では、北辺・西辺に平行する方向に据えた、高さ約0.14mの板材を検出し、砂層の土留めの役割を果たしていたものと思われる。土坑の床面は、この板材にほぼ一致するものと思われ、薄く黒褐色粘質土が堆積していた。従って、倉庫としての使用時には、板材は床面下に隠れていたものと考えられる。床面の標高は０m前後と低く、入念に土を積んだ壁は砂地の崩壊を防ぐ

と共に、防湿の役割を果たしたものと思われる。また、土坑内の埋土は大半が砂層であり、廃絶後になんらかの理由で短期間に埋没したものと考えられる。遺物は鉄釘（M220・346）を図化している。

その他の遺構出土遺物は、SK01から土師器皿（1366）、SK02から鉄釘（M214）、SK04から備前焼擂鉢（1372）、備前焼甕（1373～1375）、SK08から鉄釘（M217）、P01から鉄釘（M210）、P14から土師器皿（1377）、P17から鉄釘（M211）を図化している。

遺構の時期は、遺構出土遺物の内、SK03出土のものが14世紀後半、SK04出土のものが15世紀代と位置づけられ、14世紀後半～15世紀という時期があてられよう。また、SE01は15世紀後半～16世紀代に位置づけられるが、これは未検出の上面遺構と想定され、さらにSX01は江戸期の遺構と考えられる。この他の遺物としては、包含層から土師器皿、瓦質土器鍋、土師器鍋、須恵器鉢、備前焼甕、土製面子、土馬等（1378～1390）、14世紀代の遺物を中心として15世紀前半までの土器群を図化している。（重藤輝行・深江）

29区の調査（図版57～59　写真図版22・23）

本調査区では3面の遺構面を確認した。但し、2面目については上層（第Ⅰ面）遺構によって、その大半を失っており、内容の確認することができなかった。従って、本報告では1面目を第Ⅰ面、3面目を第Ⅱ面として報告することとする。また、本調査区は周辺調査区と同様に現代のヒューム管等の影響により、第Ⅰ面で南北両端が、第Ⅱ面で北端が破壊されている。

第Ⅰ面は井戸2基、大型土坑2基の他、不明の土坑数基を検出した。この内、出土遺物を図化した遺構は、井戸（SE04）、土坑（SK06・10・18・19）、不明土坑（SX01）である。以下、主要な遺構について述べる。

・SE04　調査区中央部に位置する石組の井戸である。取水部分はくり抜きの木材を縦2段に組み合わせた構造である。掘方は直径約2.4mを測る円形を呈し、井筒のくり抜き部分は直径約1.5m、石組上面からの深さは約1.1mで、石組との間は平瓦を挟んで安定させている。石組は上端部の直径が約2.0mで、調査時に検出した石組は3段のみだが、後世の削平等受けた形跡が認められず、石材を抜き取られたような痕跡も認められないことから、原状を保っているものと考えられる。井戸廃絶後は、直径3～5㎝程度の礫が石組部分から上部約20㎝まで敷き詰められ、その層以上は灰白色細砂が堆積していた。また、埋土中には包含層のブロック等を全く含んでいないことから、井戸廃絶に伴い周辺以外の土を使って人為的に埋められたものと考えられる。井戸は湧水点に達しており、完掘後は石組部分まで水を湛えていた。

遺物は土師器皿（1391・1392）、須恵器鉢（1393）、青磁杯（1394）、真鍮製煙管吸口（M396）、真鍮製煙管雁首の火皿（M397）を図化している。遺構の時期は、出土遺物について14世紀前半の位置づけがされるが、これは恐らく下層遺構等の遺物と考えられるため、周辺遺構の状況も踏まえて、16世紀代と考える。

・SK06　調査区東端に位置する。土坑は不定形で、東半分は東隣の調査区に広がり、南北両端は攪乱を受けている。土坑断面は浅い擂鉢状で、床面には被熱した痕跡がみられ、鉱滓状の固形物も貼り付いた状況で出土した。遺構の埋土には人頭大の礫が大量に混入していたが、礫はいずれも川原石で近隣に存在するものでないことから、遺構を廃棄する際に人為的に埋めたものと考えられる。

遺物は土師器皿（1410）、土師器鍋（1411～1414）、備前焼擂鉢（1415）、備前焼甕（1416）、青磁皿（1417）を図化している。遺構の時期は、出土遺物が15世紀前半代、あるいは16世紀後半代と位置づけられ、16世紀後半が相当と考える。

・SK10　調査区東側に位置し、SK06の西に隣接する。土坑は直径約4.0mを測る不定な円形を呈し、検出面からの深さは約1.0mにおよぶ。埋土の中層以下では多量の遺物が出土したが、出土状況から近世の廃棄土坑と

考えられる。遺物は土師器焙烙（1418）、石製硯（1419）を図化している。遺構の時期は、出土遺物から18世紀前半である。

・SX01　調査区西端に位置する。不定形な土坑で全容は不明である。遺物は備前焼擂鉢（1402）、鉄釘（M227・228）、寛永通寶（M503）を図化している。出土遺物には15世紀代のものもあるが、近世以降と考えられる。

その他の遺構出土遺物は、SK18から土製面子（1420）、SK19から鉄釘（M221）が出土している。

検出した各遺構は、時期的にばらつきが見られる。特に、SK10・SX01については上層遺構と判断され、遺構面としての中心は16世紀代と考える。

第Ⅱ面は井戸２基、大小の土坑数10基、不明土坑数基、ピット数基を検出した。ピットについては、根石を持つものも見られ建物に伴う可能性があるが明確でない。この内、出土遺物を図化した遺構は、井戸（SE108・SK109）、土坑（SK102・104・107・116・117・119）、不明土坑（SX118・126・128）、ピット（P138・141・147・149）である。以下、主要な遺構について述べる。

・SE108　調査区中央よりに位置する。掘方は井筒の東側から直径約3.5mに復元される円形土坑を検出しているが、隣接するSK109と切り合っており、検出時に明確に残存していたのは下段の井筒部分と取水部分の桶である。井筒は直径約0.8m、残存高約0.7mで、「C」字形にくり抜いた木を２つ組み合わせて釘で固定している。井筒の材は底面で最大約５cmの厚さを残す重厚なもので、釘の部分も目隠しした丁寧な造りであり、強度に難のある部分には補強用の材を組み合わせていたようである。また、この材の側面には部分的に井筒としての組み合わせとは関連しない臍が切られており、船材等何らかの用材を転用したものとも考えられる。なお、この井筒については発砲ウレタンによる取り上げを行ったが、原状での図化が困難であったため、遺構写真図版において復元写真のみ掲載することとした（報告番号：W66）。

取水部分の桶は井戸枠の中で倒壊した状況で検出した。井戸枠の板材は62～64cmで、部材の両端が完存したものも確認できたため、この深さは桶本来のサイズと考えられる。なお、この板材は残存状況の良好なものについて図化している（W15～19）。遺物は土師器皿（1395・1396）、須恵器鉢（1397）、備前焼擂鉢（1398）、備前焼甕（1399）、丹波焼甕（1400）、常滑焼甕（1401）、鉄釘（M223・224）を図化している。

遺構の時期は出土遺物から14世紀代に位置づけられるが、隣接するSK109との切り合い状況から15世紀代以降に下ることも考えられる。

・SK109　調査区中央よりに位置する井戸である。掘方は長軸約4.0mに復元される不定楕円形を呈する土坑と考えられるが、近接するSE108との切り合い等により不明であり、検出したのは取水部分の桶のみであった。桶は直径約65cm、残存高約50cmである。遺物は土師器皿（1426）、青磁碗（1427）、鉄製楔（M347）を図化している。

遺構の時期は、出土遺物から14世紀後半～15世紀代に位置づけられる。

その他の遺構出土遺物は、SK102から土師器皿（1421）、常滑焼甕（1422）、SK104から土師器皿（1423）、土師器鍋（1424・1425）、SK107から鉄釘（M222）、SK116から瓦質土器鍋（1428）、瓦器椀（1429）、須恵器鉢（1430）、鉄釘（M225）、宋銭（M487）、SK117から宋銭（M457）、SK119から鉄釘（M226）、SX110から鉄釘（M229）、SX118から青磁碗（1403）、土錘（1404）、鉄釘（M230・231）、SX125から土製面子（1405）、SX126から鉄釘（M232）、SX128から土師器皿（1406）、瓦質土器鍋（1407・1408）、備前焼甕（1409）、鉄釘（M233・234）、P138から宋銭（M463・479）、P141から宋銭（M439）、P147から土師器皿（1431）、瓦器椀（1432）、P149から鉄釘（M235）を図化している。

検出した各遺構は、出土遺物から15世紀前半～中頃と位置づけられるSK104、15世紀代に位置づけられるSK109の他は、概ね14世紀前半を中心としており、遺構面としての継続時期を表しているものと考えられる。

また、この他の出土遺物は、包含層から備前焼甕（1433・1434）、用途不明の鉄製品（M361）、銅製飾り金具（M398）、真鍮製煙管吸口（M399）、宋銭（M425・433・445・462）、寛永通寶（M508・518）が出土している。

さらに、調査時には古墳時代の土器片も出土したが図化には至っておらず、下層遺構の確認も調査の制約上できなかった。（藤井　整・深江）

30区の調査（図版60・61　写真図版23）

本調査区では黒色砂層をベースとする遺構面（第Ⅰ面）、浅黄橙色砂層をベースとする最終遺構面（第Ⅱ面）の2面の遺構面について調査を行った。

第Ⅰ面は埋甕土坑（SK03）、落ち込み状遺構（SX01）を検出した。SX01は調査区北東隅に位置する不定形な落ち込みである。遺物は鉄釘（M246）が出土している。SK03は調査区西側に位置し、長軸約1.7m、短軸約0.8mを測る楕円形を呈する土坑内に、丹波焼の甕を据え付けている。埋甕の底部付近外周には、甕の固定のために人頭大の石を置いている。遺物は埋甕に使用された丹波焼甕（1435）である。

遺構の時期は、SK03出土の丹波焼甕が13世紀中葉～14世紀前葉に位置づけられるが、これは前時期のものの転用と考えられ、これをもって遺構としての時期は決定し難い。また、これ以外の出土遺物がないため不明だが、下層遺構および隣接地区の状況を踏まえて、15世紀代が相当と考える。

第Ⅱ面は土坑・ピット・溝等で構成される遺構群を検出している。調査区東側の遺構群は全て黒色砂質土を埋土としており、西側の遺構群はオリーブ褐色砂質土を埋土とするものが多く、堆積状況が均質であることから、一時に埋没したと考えられる。また、土坑・ピットには根石を持つものがあり、建物に伴うものと考えられ、調査時において根石を伴う土坑・ピットの他、検出した石も含めた観察から、掘立柱建物を復元できる石の配列を確認した（SB01）。

SB01は桁行き3間以上、梁行き2間以上の掘立柱建物である。梁は南側と北側で柱間が異なり、南側は約0.6m、北側は約1.4mを測る。また、桁は凡そ1.25mと均一である。

その他、第Ⅱ面では西端において下層遺構SK61を検出した。

遺構出土の遺物で図化した遺物は、SK02から土師器皿（1436）、土師器鍋（1437）、SK10から用途不明の板状鉄製品（M362）、SK15から土師器皿（1438）、土師器鍋（1439）、SK19から鉄釘（M236）、SK21から鉄釘（M237）、SK24から鉄釘（M238・239）、SK26から鉄釘（M240）、SK27から鉄釘（M241）、SK29から土師器皿（1440）、鉄釘（M242）、SK30から鉄釘（M243）、用途不明の板状鉄製品（M363）、SK61から瓦器皿（1441）、土師器皿（1442・1443）、土師器竈（1444・1445）、鉄釘（M244・245）、SD20から土師器皿（1446）、瓦質土器火鉢（1447）、SD28から鉄釘（M247）、P34から土師器皿（1448）、P53から土師器皿（1449）である。

遺構の時期は、遺構出土遺物の内、SK15から12世紀中頃～13世紀中頃のものが出土しているが、SD20からは13世紀後半～14世紀前半のものが出土しており、遺構の埋没時期が想定される。また、SB01はSD02埋没後に根石を設けて掘立柱建物としていることから、少なくともSD02より後出する時期にも遺構が存在する事が窺え、遺構面としては14世紀代を中心とする時期が考えられる。（横田・深江）

31区の調査（図版62　写真図版24）

本調査区では東隣の30区と同様に黒色砂層をベースとする遺構面（第Ⅰ面）、浅黄橙色砂層をベースとする遺構面（第Ⅱ面）の２面の遺構面について調査を行った。

第Ⅰ面は溝（SD01・03）・不明遺構（SX02）を検出した。SD01は調査区東端に位置している。隣接するSD03と平行関係にあるため、便宜上溝としているが、不定形な土坑となる可能性がある。埋土はマンガン層を挟んで上層（暗褐色砂質土）と下層（褐色砂質土）に分かれており、埋没段階で若干の時間幅があったことが窺える。遺物はSD01から鉄釘（M250・251）、用途不明の板状鉄製品（M364）、SD03から土師器皿（1490）、須恵器鉢（1491）、白磁四耳壺（1492）、軒丸瓦（1493）、SX02から土師器皿（1450）、備前焼擂鉢（1451・1452）、備前焼甕（1453）、鉄釘（M248）を図化している。

遺構の時期は、SX02出土遺物が概ね15世紀代に位置づけられ、当該時期を示すものと考えられる。

第Ⅱ面は土坑・ピット・溝・不明遺構を検出した。この内、出土遺物を図化した遺構は、土坑（SK06・08・10・11・14・20・21・24～26・30・33・34）、溝（SD01・03・23）、不明遺構（SX04）である。ここで、調査区西側に位置するSX04は、直径約1.0mの円形を呈する盛土上に多量の土器が集積した遺構で、出土状況から一括投棄されたものと考えられるが、遺構自体は第Ⅱ面の遺構よりも後出するものと想定される。

第Ⅱ面の遺構群は、SX04の円形盛土を除去して検出した。部分的に根石と考えられる自然石が散見でき、調査時にはその石の配置状況から建物の復元を試みていたが、明確でなく本報告では図示に至らなかった。また、SK10・11は調査区中央部に位置していたが、調査段階で消滅している。出土遺物は遺構出土として図化しているが、遺構図中での図示はできなかった。

遺物はSK06から土師器鍋（1464）、SK08から土師器皿（1465・1467）、瓦器椀（1466・1468）、SK10から土師器皿（1469～1473）、瓦質土器羽釜（1474）、土師器鍋（1475）、SK11から瓦質土器羽釜（1476）、SK14から土師器皿（1477）、SK20から土師器皿（1478）、常滑焼甕（1479）、SK21から土師器皿（1480）、瓦質土器ミニチュア三足羽釜（1481）、SK24から土師器皿（1482）、SK25から青白磁合子（1483）、SK26から土師器皿（1484）、SK30から土師器皿（1485）、須恵器壺（1486）、SK33から土師器皿（1487）、SK34から須恵器鉢（1488・1501）、土師器皿（1498～1500）、鉄製刀子（M366）、SD01から土師器皿（1489）、SD23から土師器皿（1494・1495）、土師器鍋（1496）、瓦質土器鍋（1497）、SD33から用途不明の鉄製品（M365）、SX04から土師器皿（1454～1461）、土師器鍋（1462）、須恵器鉢（1463）、鉄釘（M249）を図化している。

遺構の時期は、前述したSX04の出土遺物については非常に一括性の高い資料で、15世紀前半に位置づけられるが、遺構の検出状況からむしろ第Ⅰ面の遺構の最下層遺物と考える方が自然のようである。また、その他の遺構では、SD23・SK34出土遺物中に13世紀代遺物が混じる等やや古い傾向も見られるが、遺構の位置が判然としなくなったSK10・11も含めて、概ね14世紀前半～14世紀後半と位置づけられることから、埋没時期が14世紀後半という認識で差し支えなかろう。

この他の出土遺物は、第Ⅱ面直上の包含層から土師器皿、瓦質土器羽釜、須恵器鉢、常滑焼甕等（1502～1514）、鉄製鏃（M252）が出土している。（横田・深江）

32区の調査（図版63～68　写真図版24・25）

本調査区では、調査初段階での土層観察に基づき、①近世包含層、②近世整地土、③中世包含層、④ベース層（最終遺構面）の基本堆積を確認し、中世包含層上面の近世遺構、最終遺構面である中世遺構面の２面について調査する予定であったが、調査が進行するに従って、整地と掘削を何度も繰り返している状況や、当初近

世包含層と目していた堆積の中間層においても中世遺構が存在する状況が明らかになり、結果的に4面の遺構面（第Ⅰa面・第Ⅰb面・第Ⅱ面・第Ⅲ面）について調査を行うこととなった。

第Ⅰa面は、灰褐色砂質シルトあるいは第2次世界大戦の空襲以後の整地層を除去した段階で検出した遺構面で、標高約1.2m～1.3mである。遺構は井戸2基、土坑4基、ピット16基、溝1条を検出した。この内、出土遺物を図化した遺構は井戸（SE01・02）、土坑（SK01～04）、ピット（P01）、溝（SD01）である。以下、主要な遺構について述べる。

・SE01　調査区西端に位置する瓦組の井戸で、北側の一部が埋設管により破壊されている。掘方の直径は約1.2m、井筒内の直径は約0.8mを測る。井筒に仕様した瓦は長さ25cm、幅約23cmの平瓦で、4段検出しているが、床面までの掘削には至らなかった。なお、井筒内には第2次世界大戦の空襲に伴う焼土や瓦が投棄されており、井戸の廃絶時期が窺われる。遺物は土錘（1515）、井戸瓦（1516）を図化している。

・SE02　調査区の中央部に位置し、北側を攪乱で破壊されている。井戸内には近世～近代の井戸瓦が落ち込んでおり、瓦積みの井戸であったことが窺われる。掘方の直径は約2.0m、井筒の直径は約0.7mに復元できる。また、埋土中には焼土等が含まれていないことから、SE01より先行するもので、少なくとも第2次世界大戦の空襲以前に廃絶したものと考えられる。遺物は13世紀前半の青磁碗（1517）を図化しているが混入である。

・SK01　調査区東側に位置し、直径約0.8mを測る円形を呈する。他の遺構に比して若干上位で検出しており、検出面からの深さは約0.2mである。遺構内からは土師器の皿が一括で出土している。遺物は土師器皿（1533・1534）、寛永通寶（M491）を図化している。遺構の時期は、出土遺物から17世紀中葉～18世紀前半と考えられる。

・SK02　調査区東側に位置し、SK01・03に切られる。土坑は長さ約0.7m、幅約0.5mの長方形を呈し、西側長辺には約0.3mの突出部を設けるが、先端をSK03に破壊されている。床面付近は灰褐色砂質シルトを埋土として、多量の炭を含んでおり、厨房関連の施設が想定される。遺物は土師器皿（1535）のみを図化しているが、出土遺物には18世紀以降に位置づけられる土師器鍋、施釉陶器等がみられ、遺構の時期を示すものと思われる。

・SK03　調査区東側に位置する。SK02を切り、南半部は攪乱によって破壊されているものの、1辺約0.5mを測る隅丸方形を呈すると考えられる。深さは検出面から約0.2mで、埋土下層には炭が堆積している。遺物は石製硯（1536）、環状銅製品（M400）、寛永通寶（M498・509・510・513）を図化しているが、出土遺物中には18世紀以降に位置づけられる施釉陶器等がみられ、遺構の時期を示すものと思われる。

・SK04　調査区東側に位置し、長軸約1.6m、短軸約1.4mを測る不定楕円形を呈する。深さは検出面から約0.7mである。埋土は黄褐色細砂が主体で、床面付近に人頭大の自然石を投棄している。遺物は17世紀前半に位置づけられる完形の染付磁器皿（1537）、寛永通寶（M496）を図化しており、遺構の時期も17世紀前半以降と想定される。

その他の遺構出土遺物は、P01から宋銭（M429）、SD01から土師器皿（1547）を図化している。

第Ⅰb面は、中世包含層である暗灰黄色細砂、黄灰色細砂上面において遺構検出することを目的とした面で、標高は約1.0～1.1mである。当初、近世遺構を予測した遺構面であったため、第Ⅰ面中の分類名にしているが、本来はやや古い時期という認識に立っている。遺構は井戸1基、土坑7基、不明落ち込み1基、ピット33基、溝1条である。この内、出土遺物を図化した遺構は、井戸（SE03）、土坑（SK05・06・07・10）、不明落ち込み（SX01）、ピット（P11・17・19・23・31）、溝（SD02）である。以下、主要な遺構について述べる。

・SE03　調査区中央部に位置する。上面では井筒の痕跡のような円形プランを検出したため、井戸として調査したが、井戸枠そのものも残存せず、井筒の検出もままならない状況であったことから、井戸との断定は難

しい。土坑は直径約1.0mの円形を呈する。遺物は15世紀前半の土師器皿（1518）を図化しており、遺構の時期を示すものと考えられる。

・SK05　調査区中央部のやや東よりに位置する。土坑は長軸約1.2m、短軸約0.8mを測る楕円形を呈し、検出面からの深さは約0.1mである。埋土は灰黄褐色砂質シルトである。遺物は鉄釘（M256）を図化している。

・SK06　調査区中央部のやや東よりに位置し、SK05に切られる。土坑は長軸約1.9m、短軸約1.3mを測る不定楕円形を呈する。検出面からの深さは約0.3mである。埋土は上層で灰褐色細砂、下層で灰黄色細砂である。遺物は土師器皿（1538～1540）、土製面子（1541）、鉄釘（M257）を図化している。

・SK07　調査区中央部のやや東よりに位置し、SK06に切られる。土坑は長軸約1.2m、短軸約1.0mを測る楕円形を呈すると考えられる。検出面からの深さは約0.5mである。埋土は上層で灰褐色砂質土、下層で炭混じりの黄灰色細砂である。遺物は鉄釘（M258～260）を図化している。

・SK10　調査区東端に位置し、北側を埋設管で破壊されている。土坑は検出長約2.1mを測る不定円形を呈すると考えられ、検出面からの深さは約0.7mである。また、土坑の上部中央には人頭大よりやや小さな自然石が列状に流れ込んだような状況で出土した。遺物は土師器皿（1542・1543）、備前焼擂鉢（1544）、備前焼甕（1545）、青磁碗（1546）、用途不明の筒状鉄製品（M367）を図化している。遺構の時期は、出土遺物から15世紀前半に位置づけられよう。

・SX01　調査区中央部に位置し、SK05～07の西側で検出した落ち込み状遺構である。遺構は北側が埋設管で破壊されており、全容は不明だが、東西幅約3.5m、南北検出長約2.0mである。床面は2段掘りになっており、上段は遺存状況の最も良好な部分で深さ約0.2m、上段の底面から下段の底面までの深さは約0.4mである。下段部分には人頭大から拳大の石が集積し、石の間から多量の遺物が出土した。遺物は土師器皿（1519～1522・1524）、備前焼皿（1523）、土師器鍋（1525～1530）、白磁皿（1531）、土製面子（1532）、鉄釘（M261～263）を図化している。遺構の時期は出土遺物から15世紀後半～16世紀初頭と考えられる。

・SD02　調査区東端から中央部の南側に位置し、東方向と南方向とにそれぞれ遺構が延びるようで、検出長は約7.0mを測る。幅は約0.4～0.7mであり、立ち上がりが垂直に近く、底部が平らで、断面は略方形を呈する。遺物は土師器皿（1548）、鉄釘（M264）を図化している。

その他の遺構出土遺物はP11から青白磁梅瓶（1549）、P17から土師器皿（1550）、須恵器鉢（1551）、鉄釘（M253・254）、P19から鉄釘（M255）、P23から土師器鍋（1552）、P31から白磁四耳壺（1553）、P32から石鍋（1554）を図化している。

本遺構面の時期は、ピット等から12世紀後半や13世紀代の遺物が出土しているが、概ね15世紀代を中心とする遺構群と考えられ、16世紀初頭までに埋没するものと考えられる。

第Ⅱ面は、ベースとなるにぶい黄橙色細砂の上面で検出し、標高は約0.8～1.0mである。本遺構面は、第Ⅲ面と検出面の性格自体に差はないが、ベースで上面検出した遺構中において埋土の色が第Ⅰb面に近いものを調査したものである。そのため、第Ⅰb面とは大きな時期差が認めらない。遺構は土坑6基、ピット84基、不明遺構1基を検出した。この内、出土遺物を図化した遺構は、土坑（SK11・12・14）、ピット（P48・50・54・59・68・69・75・94）、不明遺構（SX02）である。以下、主要な遺構について述べる。

・SK14　調査区西端に位置する。土坑は長さ約1.0m、最大幅約0.7mを測る隅丸台形状を呈し、検出面からの深さは約0.2mである。埋土は多量に炭を含んだ暗黄灰色砂質シルトで、多量の釘が出土した。遺物は鉄釘（M278～301）を図化している。

・SX02　調査区西側に位置する大型の土坑状遺構である。土坑の南側が調査上の問題から全掘できなかった

が、直径約3.6mの略円形に復元される。床面は2段掘りになっており、上段の深さは約0.4mである。また、下段は直径約2.6mの円形に復元され、深さは0.4mである。掘削は標高約0.1mまで行ったが、湧水のため全掘を断念した。遺構内は、主として下段の掘方上部ではぎっしり詰まった状態で拳大の石を検出し、さらに細砂・砂利の間層を挟んだ下層では人頭大の石と粘質土の堆積を確認した。また、上段の西側には一部に石の集積が見られる。遺物は鉄釘（M302・303）、鉄製鎹（M304）を図化するのみだが、遺構の下部から近世陶磁器が出土しており、本遺構面の遺構というより、むしろ第Ⅰa面から掘り込まれた遺構の残存と考えられる。

・ピット群　調査区東側で検出した多量のピット群である。その多くが根石をもつものであり、東西・南北方向に並ぶ傾向が看取される。このような状況から、これらのピット群は掘立柱建物に伴う柱穴と考えられるが、切り合いが激しい上に、調査区内に限られた範囲であるため、建物の復元には至らなかった。また、これらのピット群は、第Ⅰa面・第Ⅲ面の状況を考慮するならば、これよりも東側に広がる可能性が大きく、反対に西側へはさほど広がらないものと考えられる。遺物はP48から鉄釘（M265）、P50から鉄釘（M266）、P54から鉄釘（M267）、P59から鉄釘（M268）、P68から鉄釘（M270）、P69から鉄釘（M269）、P75から鉄釘（M271）、P94から鉄釘（M272）を図化している。

この他の遺構出土遺物は、SK11から鉄釘（M275・276）、SK12から鉄釘（M277）を図化している。

本遺構面の時期については、前述したように第Ⅰb面・第Ⅲ面、いずれにもさほどの時期差はないと考えられ、15世紀代を想定している。

第Ⅲ面は、第Ⅱ面のベース層であるにぶい黄橙色細砂を若干掘り下げて検出した遺構面であり、標高約0.7～0.8mである。本遺構面の遺構は、最終遺構面であるベース層を掘り込んでいる点で第Ⅱ面との差は殆どなく、調査時には実際にその多くが第Ⅱ面で見られた。ただし、第Ⅱ面の遺構より時期的に先行すると思われる埋土の遺構で構成されていることから、一つの遺構面として分離したものである。また、本遺構面では、調査工程上調査できなかった第Ⅱ面の一部の遺構と、第Ⅱ面からの深い落ち込みの一部（第Ⅱ面東部包含層）等も同時に調査しており、同一遺構面にあって若干の時期幅を持つ。遺構は土坑8基、ピット52基、溝1条を検出した。この内、出土遺物を図化した遺構は、土坑（SK17・21）、ピット（P122・136・141・144）である。以下、主要な遺構について述べる。

・SK20　調査区中央部に位置し、SK21を切る。南側は攪乱によって破壊されているが、長軸約1.4mの楕円形に復元される。検出面からの深さは約0.6mで、床面は船底状を呈する。

・SK21　調査区中央部に位置し、遺構の南側でSK20に切られ、北側でSK22を切る。遺構は最大幅約1.3m、検出長約1.0mを測る長方形状を呈する。床面は北側にテラスを持つ2段掘りを呈し、検出面からの深さは、テラス部までが約0.1m、床面までが0.3mである。埋土は褐灰色細砂を主体としている。また、埋土からは鉄釘（M306）の他、若干量の中世土器が出土しているが、図化には至っていない。

・SK22　調査区中央部に位置し、SK21に切られる。遺構は東辺約1.4m、西辺約1.0m、東西幅約1.3mを測る台形状を呈し、検出面からの深さは約0.2mである。埋土は灰色細砂を主体として、暗灰褐色粘土ブロックが少量混じる。また、埋土から若干量の中世土器が出土しているが、図化には至っていない。

・SK23　調査区東側に位置し、第Ⅱ面東部包含層より掘り込んでいる。西側をピットに切られるが、長軸約1.2m、短軸約1.1mの不定円形を呈し、検出面からの深さは約1.0mである。埋土は黄灰色細砂を主体として黄色細砂ブロックが少量混じる。

・SK24　調査区東側に位置する。南側ではSK23に切られ、北側では攪乱によって破壊されているため全容は不明だが、楕円形を呈するものと考えられる。検出長約1.1m、最大幅約1.2mを測り、検出面からの深さは0.1

mである。埋土は褐灰色細砂と灰黄色細砂である。

・P141　調査区東側の南壁付近に位置する。ピットと呼称したが、規模・形状から土坑に近い遺構と考えられる。遺構は長軸1.2m、短軸0.8mを測る楕円形を呈する。床面は2段掘りで、検出面からの深さは、上段で0.3m、下段で0.5mである。また、埋土からは鉄釘（M308）の他、中世土器が比較的まとまって出土したが、図化には至っていない。

この他の遺構出土遺物は、SK17から鉄釘（M305）、P122から鉄釘（M273）、P136から鉄釘（M307）、P140から鉄釘（M274）を図化している。

本遺構面の時期は、時期を決定しうる遺物が僅かで、図化にも至っていないが、周辺地区の状況を踏まえて14世紀代と想定される。

また、この他の出土遺物としては、第Ⅱ面東部包含層から宋銭（M432）、第Ⅱ面上包含層から宋銭（M421）、第Ⅰb面上包含層から土師器皿、青磁碗、土製面子、温石等（1555～1569）、宋銭（M420・447）、第Ⅰa面上包含層から用途不明の板状銅製品（M402）、真鍮製煙管吸口（M401・403）と雁首（M404）、宋銭（M426）、銅製引き手金具（M405）、攪乱から土師器製焙烙（1570・1571）、寛永通寶（M514）を図化している。

以上、本調査区の調査成果について述べたが、特筆すべき点について若干まとめておく。

本調査区では、14世紀代と考えられる第Ⅲ面の遺構密度は比較的少なく、掘立柱建物の柱穴と思われる根石を持つピット等も少ない。これに対して、15世紀を中心とすると考えられる第Ⅱ面では、東半部を中心として遺構密度が極めて高く、根石を持つピットも多く検出した。このような遺構密度の違いは、14世紀代において生活域の外縁部であった本地区周辺が、15世紀以降、都市の拡大に伴い新たに生活域となったことを示唆するものと考えられる。

また、前述したように第Ⅰb面は明らかに中世の整地土、あるいは包含層を掘り込んで遺構を形成している。さらに第Ⅱ面のピット群のいくつかの掘方埋土中には、整地面に由来すると思われる粘質土ブロックが含まれていた。従って、遅くとも15世紀には、本調査区周辺において客土を伴う大規模な整地が行われた可能性が指摘される。このことは、兵庫津の都市としての整備時期、あるいは整備過程、そして形成過程を窺わせるものと考えられる。（重藤・深江）

33区の調査（図版69～71　写真図版26）

本調査区では、当初最終遺構面のみでの調査を予定していたが、断面観察の結果から明瞭な間層を挟んで2面の遺構面を確認したため、2面の遺構面について調査を行った。

第Ⅰ面は近世包含層等を除去した、にぶい黄色細砂層上面で検出した遺構面である。ただし、このにぶい黄色細砂層は調査区西半部でのみ見られるもので、東半部では層位的に先行して堆積した中世包含層である灰色細砂層上面において遺構の検出を行った。標高は約1.1m～1.2mである。遺構は井戸2基、土坑18基、ピット60基、溝1条である。この内、出土遺物を図化した遺構は、井戸（SE02）、土坑（SK01～04・06・08・10～12・14・16～18）、ピット（P03～05・14・15・20・35）、溝（SD01）である。以下、主要な遺構について述べる。

・SE01　調査区中央部東よりの南壁付近に位置する。遺構は瓦積みの井戸であり掘方は円形を呈するものと考えられるが、井筒の大部分は調査区外にあるため詳細は不明である。時期は恐らく近代のものであろう。

・SE02　調査区東端の北壁付近に位置する。遺構は瓦積みの井戸で、掘方は直径約1.8mの円形を呈し、井筒は内径約0.8mである。床面は湧水が激しく確認するには至らなかった。遺物は井戸瓦（1572）を図化したの

みだが、井筒内からは第２次世界大戦の空襲によると思われる焼土、二次的な被熱により変形及び釉着した陶磁器が出土している。遺構の廃絶時期を示すものであることに加え、状況からみてSE01より後出する井戸と想定される。

・SK03　調査区西端に位置し、長軸約1.2m、短軸約0.9mを測る楕円形を呈する。床面は北側が深く掘り込まれて段を成す。検出面からの深さは、上段で約0.2m、下段で0.4mである。埋土は、上部に多量の炭が混じる灰黄褐色シルトが、下部に黄灰色細砂が堆積し、最下部に鉄分を多量に含んだ暗褐色細砂が堆積している。遺物は鉄釘（M312）を図化した他、相当量の中世土器が出土したが、図化には至っていない。

・SK04　調査区西端に位置する。遺構は西側をSK01に切られるが、楕円形を呈すと思われ、長軸約1.0m、短軸0.8mが残存する。検出面からの深さは約0.3mである。埋土は暗灰黄色細砂を主体とするが、下部に炭、黒色土ブロックの混入が目立つ。遺物は土師器皿（1574～1579・1612～1617）、須恵器鉢（1618）を図化している。

・SK08　調査区中央部西よりの北壁付近に位置する。遺構は北西側を埋設管により破壊されているものの、長楕円形に近い形状であったと推測され、長軸方向に約1.7m、最大幅約0.7mで、検出面からの深さは約0.4mである。埋土は小さな円礫を含む暗灰黄色細砂を主体としている。遺物は土師器鍋（1580）、鉄釘（M313・314）を図化した他、多量の中世土器が出土したが図化には至っていない。遺構の時期は、出土遺物から15世紀後半～16世紀前半に位置づけられるが、本遺構は調査段階で第Ⅱ面のSD03の埋土の一部の可能性を指摘しており、不明な点が多い。

・SK17　調査区東側南壁付近に位置する。遺構は北西側をSK12に切られ、南東側も調査区外にあるため全容は不明だが、楕円形を呈すと考えられ、東西長約2.1mを測る。床面は２段掘りであり、検出面からの深さは、上段で約0.3m、下段で0.6mである。下段の掘方内には拳大よりやや大きな石が多量に詰め込まれた状態で出土した。また、石の西側には２段程面を揃えて積み上げた部分も見られた。遺物は青磁皿（1585）を図化している。遺構の時期は、出土遺物から16世紀代に位置づけられる。

・SK18　調査区東端に位置する。遺構は西側をSE02に切られるため全容は不明であるが、現存長約2.1m、幅約1.4mを測る長方形状を呈し、検出面からの深さは約0.3mである。遺物は土師器皿（1586）、瓦質土器羽釜（1587）を図化している。遺構の時期は、出土遺物が15世紀代に位置づけられるものだが混入と考えられる。

・ピット群　本遺構面では60基のピットを検出している。これらのピットには２箇所の集中域が認められる。１箇所は調査区中央東より付近で、もう１箇所は西側である。前者は土坑等と複雑に切り合っており、性格を考えるには難がある。一方、後者のピット群は東西、あるいは南北方向に並ぶようにも見え、根石を持つものも多い。従って、復元はできないが建物が存在した可能性があると考えられる。なお、検出したピットの内、図化遺物が出土したP20は調査時に消滅した。遺物はP03から土師器皿（1620）、P04から須恵器鉢（1621）、常滑焼甕（1622）、鉄釘（M309）、P05から須恵器鉢（1623）、石鍋（1624）、鉄釘（M310）、P11から銅製蝶番（M407）、P14から土師器鍋（1625～1627）、P15から鉄釘（M311）、P20から瓦質土器火鉢（1628）、須恵器鉢（1629）、P35から土師器皿（1630～1632）、土製面子（1633）を図化している。

その他の遺構出土遺物は、SK01から土師器皿（1573）、SK02から板状銅製品（M406）、SK06から土師器皿（1619）、SK10から鉄釘（M315）、SK12から染付磁器碗（1581）、SK14から鉄釘（M316）、SK16から土師器皿（1582～1584）、鉄釘（M317）、SD01から鉄釘（M318・319）を図化している。

本遺構面の時期としては、遺構出土遺物からは13世紀～14世紀代の古いものから、17世紀～18世紀代の新しいものまで見られるが、遺構の切り合い関係を踏まえると、15世紀代～16世紀前半頃を中心とするのが妥当と

考える。

第Ⅱ面は、ベースとなる黄褐色粗砂層上面で検出した最終遺構面で、標高は約0.8～1.0mである。遺構は土坑2基、ピット26基、溝2条である。この内、出土遺物を図化した遺構は、溝（SD02・03）である。以下、主要な遺構について述べる。

・SD02　調査区中央部やや西より位置する東西方向の溝である。西側は調査区の中途で切れ、東側は調査区外へと続いており、検出長約4.0m、最大幅約1.3mを測る。床面は船底状を呈し、埋土は黄灰色粗砂である。遺物は鉄釘（M320）を図化した他、中世土器が出土しているが図化には至っていない。

・SD03　調査区中央部でSD02の北側に位置し、SD02とほぼ平行に走る東西方向の溝である。2つの溝は掘方間で約0.5m、遺構の中心間で約3.0mの距離がある。遺構は南北がさらに調査区外へ延びるため、検出長約5.0mを調査した。幅は上面で2.4～4.0mである。検出面からの深さ約0.6m付近では、溝の底部の土留めを意図したもの思われる垂直に立てた板材を検出した。板材は厚さ約1㎝、長さ約0.9～1.3mで、上端部の腐朽がひどく良好な部分で高さ約10㎝が遺存していたが、本来はさらに高いものであったと考えられる。板材は、溝の北側で3枚、南側で4枚を確認し、南北の間はほぼ1.7mと一定しており、平行に配置されたものと考えられる。板材の設置については、断面観察から、先ず板材を据えるための大きな掘方を掘り、板材設置後にその背後をベース層に近い黄褐色細砂で埋めたものと判断した。また、板材の内側の面からは、板材を留めるための直径約3㎝の杭を南側で2本、北側で1本検出した。さらに溝北側の法面中段には、板材とほぼ平行して石を並べている。この石も護岸を目的とした可能性があるが、溝内に落ち込んだ石を含めても法面全体を葺くには量的に難があるため護岸施設として機能したかは明確ではない。しかし、板材や石等のこのような状況は、砂地に掘削した溝をできるだけ長期間維持するための工夫であったと考えられる。溝の埋土は下部に粘質土が厚く堆積しており、一定期間水を湛えていたものと思われる。また、上部には褐灰色細砂や灰黄色細砂が約30㎝の厚さで堆積している。

遺物は土師器皿（1588・1589）、土師器鍋（1590～1592）、須恵器鉢（1593～1598）、須恵器甕（1599）、備前焼擂鉢（1600）、備前焼甕（1601～1605）、常滑焼甕（1606～1609）、石鍋（1610）、土製面子（1611）、鉄釘（M321・322）を図化している。

遺構の時期は、出土遺物中に13世紀代の古い遺物も含まれているが、概ね14世紀後半～15世紀前半頃に位置づけられよう。また、遺構面としての時期についても本遺構の時期をあてて問題ないと考える。

また、その他の出土遺物については、包含層から土師器皿、備前焼擂鉢、土錘・面子、石鍋等（1634～1643）、宋銭（M430・459）、寛永通寶（M511）である。

SD03は本遺跡の調査成果の中でも比較的大規模な遺構である。また、溝が底部に土留めの板を設置し、護岸のためのものか法面に石を配置する等の入念な土木工事を施していることも注目される。この溝は、その規模・造作からみて都市域の内外を画する等の重要な機能を持っていたものと思われる。さらに、注意すべきは第Ⅰ面においてSD03が存在していた位置付近に根石を持つピットが見られることである。これは、ある時期に都市域の内外を画していた溝であったSD03が、都市域の拡大に伴い居住域へと移行したことを物語るものとも考えられる。（重藤・深江）

34区の調査（図版72・73　写真図版26）

本調査区では、Ⅰ層（近世～近代の整地層）に相当する明確な層位が殆ど認められないが、2面の遺構面について調査を行った。第Ⅰ面は、第2次世界大戦に伴うと考えられる焼土面を含んだ整地層である。調査区西

半部を中心に煉瓦・瓦・陶磁器類を含む攪乱（廃棄土坑）が密集している。また、井戸枠に平瓦を使用した小型の井戸とコンクリートで円形の枠を作り、その上に平たい石を組み合わせて蓋をし、土管を差し込んだ井戸が認められ、第Ⅱ面にまで達している（第Ⅱ面で図示している）。遺構は前述のものの他、土坑・溝を検出した。この内、出土遺物を図化した遺構は、土坑（SK01・03）である。遺物はSK01から土師器皿（1644・1645）、SK03から土師器皿（1646）を図化している。遺構の時期は、出土遺物について16世紀代のものが見られるが、上層包含層（第１層）・下層包含層（第２層）および下層遺構の状況を踏まえると18世紀代まで下る可能性がある。

第Ⅱ面は土坑、ピット、溝を検出した。この内、出土遺物を図化した遺構は、土坑（SK06）である。遺物はSK06から土師器皿（1647～1649）を図化している。遺構の時期は、出土遺物からは想定が難しいが、下層包含層の出土遺物が15世紀後半頃までのものであり、当該時期にさほど遠くないものと考えられる。

包含層出土遺物は、第１層から土師器皿、備前焼擂鉢、施釉陶器碗・甕・鉢、白磁紅皿、染付磁器碗・皿、土製品、瓦等（1650～1671）、第２層から土師器皿、須恵器鉢、備前焼擂鉢・甕等（1672～1681）、鉄釘（M323）を図化している。包含層中の遺物の時期は古いものも見られるが、概ね第１層包含層で18世紀後半、第２層包含層で15世紀後半と考えられる。（鐵・深江）

35区の調査（図版74　写真図版27）

本調査区では、近現代の攪乱による影響部分が多く、遺構も希薄である。遺構面は、近現代の遺物を包含する層を除去した直下で１面確認し、中世包含層も殆ど残存していなかった。遺構は土坑２基、ピット９基である。この内、出土遺物を図化した遺構は土坑（SK01）である。以下、主要な遺構について述べる。

・SK01　調査区東端に位置する。遺構は南北を攪乱により破壊されているが、現存長約1.2m、幅約1.0mを測る長楕円形を呈するものと考えられ、検出面からの深さは約0.2mである。埋土は灰黄褐色砂質シルトを主体として、僅かに黄白色細砂が混入する。遺物は須恵器鉢（1682・1683）を図化している。遺構の時期は、出土遺物について14世紀後半の位置づけがされ、また調査段階での精査で近世遺物等を含まないことが確認されていることから、当該時期を示しているものと考えられる。

・SK02　調査区西端に位置する。遺構は長辺約1.1m、短辺約0.8mを測る隅丸方形を呈し、検出面からの深さは約0.3mである。埋土は褐灰色細砂で、底部に鉄分が沈殿する。遺物は図化に至っていないが、近世瓦・陶磁器等が出土しており、上層遺構の残存と見られる。

その他の遺構出土遺物は、P05から鉄釘（M324）を図化している。また、その他の出土遺物としては、包含層から土製面子、砥石、石鍋等（1684～1686）、寛永通寶（M512・520）が出土している。

遺構面としての時期は、遺構が希薄で遺物も少量なため不明な点が多いが、遺構面が14世紀～15世紀代の中世遺構を形成する最終遺構面であり、それ以下の層から遺物が見られないことから、SK01出土遺物の時期を支持して、14世紀後半と位置づけるのが妥当と考える（重藤・深江）。

36区の調査（図版75　写真図版27）

本調査区では、Ⅰ層（近世整地層）、Ⅱ層（中世包含層）に対応する層位が確認できなかった。近現代の瓦礫を除去した直下で、最終遺構面である黄灰色粗砂を確認したため、この１面について調査を行った。遺構は井戸と考えられる土坑（SE01）を検出した以外は近・現代の廃棄土坑であった。SE01は調査区西端に位置し、直径約1.2mを測る円形を呈する素堀の井戸と考えられる。埋土は淡茶褐色粗砂と灰白色砂である。時期は不

明である。

出土遺物としては、包含層から古墳時代の土師器高坏（1687）、14世紀後半～15世紀前半頃の青磁碗（1688）が出土している。

遺構面の時期については、中世遺構面という認識はできるものの、遺構が極めて希薄な状況であり、不明とせざるをえない。（渋谷・深江）

37区の調査（図版76　写真図版27）

本調査区ではベースとなる黄褐色細砂（最終遺構面）上の堆積土層において整地層及び包含層が見られず、近現代のしまりのない層が堆積するのみであったため、最終遺構面１面について調査を行った。遺構面の標高は約1.1～1.2mである。遺構は非常に希薄であるが、土坑４基、ピット８基を検出した。この内、出土遺物を図化した遺構は、土坑（SK01～04）、ピット（P04）である。以下、主要な遺構について述べる。

・SK01　調査区中央部やや東よりに位置する。遺構は直径約2.0mを測る不正円形を呈し、検出面からの深さは約0.3mである。また、床面西側には直径約0.6mの掘り込みがある。埋土は褐灰色砂質シルトである。遺物は土師器皿（1689・1692）、土師器焙烙（1690）、色絵磁器小碗（1691）を図化している。遺構の時期は、出土遺物から18世紀代と考えられる。

・SK02　調査区中央部やや東よりに位置する。遺構は西側をSK01に切られ、南側を攪乱により破壊されているが、長軸2.2m、短軸1.5mの楕円形を呈すと考えられる。検出面からの深さは約0.3mで、床面北側に直径約0.7mの円形ピットが掘り込まれる。埋土は褐灰色細砂を主体として、黄緑色粘土、暗褐色細砂が混入する。遺物は青磁碗（1693）を図化した他、調査時に少量の中世土器が出土したが図化には至っていない。遺構の時期は出土遺物も僅少で明確でないが、14世紀～15世紀代であろう。

・SK03　調査区西端に位置する。遺構は直径約1.9mの円形を呈すと考えられ、深さは湧水が激しいために完掘できなかった。埋土は褐灰色を主体として、中程に明黄褐色粗砂の間層が堆積する。遺物は鉄釘（M326・327）を図化した他、調査時に下層から少量ながら16世紀代の土器が出土しているが、図化には至っていない。遺構の時期は、出土遺物が僅少で明確でないが、少なくとも中世遺構であることは間違いなかろう。また、SK03の中央部を切って掘り込んでいるP08は、拳大の石を充填するもので、埋土内から近世瓦片が出土している。

・SK04　調査区西側に位置する。遺構は近世以降の遺構、及び攪乱によって大きく破壊されているが、直径約2.5mの円形を呈すと考えられ、深さは湧水が激しいために完掘できなかった。埋土は黄灰色細砂を主体とするが、黒褐色あるいは黄褐色粗砂が帯状に堆積する部分がある。遺物は石鍋（1694）、鉄釘（M328～334）を図化した他、少量ながら中世土器が出土しているが、図化には至っていない。遺構の時期は、出土遺物について14世紀後半の位置づけがされ、また調査時に近世以降の遺物を含まないことを確認しており、出土遺物が当該時期を示すものと考えられる。

その他の遺構出土遺物は、P04から備前焼甕（1695）、鉄釘（M325）が出土している。また、その他の遺物としては、包含層から古墳時代の小型丸底壺（1696）が出土している。

遺構面の時期としては、近世以降の遺構も見受けられるが、14世紀～15世紀代に位置づけられよう。また、本調査区を含めて周辺の調査区からは、僅かであるが古墳時代の遺物が包含層等から出土しており、最終遺構面である黄褐色砂層以下の層からも認められる。しかし、当該時期の遺構面が存在するとは考え難く、遺跡北側の高所から流れこんだものと考えられる。（重藤・深江）

38区の調査（図版77～79　写真図版28）

本調査区では、東半部に大きな攪乱があり、一部で拡幅前の国道２号線に沿った側溝の痕跡や、第２次世界大戦時のものと思われる焼土層が認められた。それらを除去して遺構面の検出を試みた結果、明黄褐色粗砂層をベースとする遺構面を２面検出した。遺構面の標高は第Ⅰ面で約1.7m、第Ⅱ面で約1.3mである。

第Ⅰ面は主に土坑を検出した。土坑は調査区中央部のSK08が方形状を呈する以外は、殆どが円形を基本とする不定形なもので、灰褐色粗砂及びシルトの埋土内に陶磁器類・瓦片・漆喰塊等が含まれる、所謂廃棄土坑である。この内、出土遺物を図化した遺構は、土坑（SK02～06・08～13）である。遺物はSK02から白磁仏具碗（1697）、SK03から瓦質土器火鉢（1698・1699）、備前焼徳利（1700）、白磁杯（1701）、染付磁器碗（1702・1703）、染付青磁（1704）、軒丸瓦（1705）、鉄釘（M335）、SK04から土師器皿（1706）、白磁碗（1707）、施釉陶器皿（1708）、灯籠形土製品（1709）、SK05から白磁紅皿（1710）、SK06から土師器皿（1711～1714）、施釉陶器皿（1715）、土師器燭台（1716）、土師器焙烙（1717～1719）、土製品（1720）、瓦質土器火鉢（1721）、無釉陶器擂鉢（1722・1723）、施釉陶器椀（1724）、施釉陶器鍋（1725）、青磁火入れ（1726）、染付磁器碗（1727～1733）、染付磁器杯（1734・1735）、染付磁器皿（1736～1741）、染付磁器徳利（1742）、鉄釘（M336）、鉤状鉄製品（M369）、不明鉄製品（M370）、銅製釘（M408）、SK08から鉄釘（M337）、SK09から染付青磁蓋（1743）、SK10から土師器小坏（1744）、染付磁器皿（1745）、SK11から施釉陶器椀（1746）、白磁皿（1747）、施釉陶器椀（1748・1749）、染付磁器碗（1750）、鉄釘（M338）、SK12から施釉陶器椀（1751）、染付磁器碗（1752）、鉄釘（M339）、鉄製楔（M348～350）、真鍮製煙管（M409）、SK13から土師器皿（1753・1754）、瓦質土器風炉（1755）、無釉陶器擂鉢（1756・1757）、染付磁器碗（1758～1762）、染付磁器杯（1763）、軒丸瓦（1764・1765）、丸瓦（1766）、石臼（1767）、鉄釘（M340・341）を図化している。

また、第Ⅱ面で検出し、遺物もその段階で取り上げた「瓦片廃棄土坑」については、第Ⅰ面の遺構の残存であり、土師器焙烙、施釉陶器鉢・碗・香炉、土製品、染付磁器鉢等（1772～1778）の遺物を図化している。時期は18世紀後半～19世紀前半頃に位置づけられよう。

遺構の時期は、出土遺物からは17世紀代のものもみられるが、18世紀後半～19世紀前半の遺物が確実に共伴しており、当該時期を示すものと考えられる。

第Ⅱ面は、第Ⅰ面から掘り込まれた廃棄土坑以外に、暗灰褐色粗砂を埋土とする石組井戸、土坑、ピットを検出した。この内、出土遺物を図化した遺構は、井戸（SE01）、土坑（SK14・16）である。

SE01は調査区中央部やや西よりの南壁付近に位置する。掘方は直径約1.4mを測る不正円形を呈し、人頭大の礫を積み上げて内径約0.5mの井戸枠としている。石積みは上部を上面の廃棄土坑に破壊されているが、現状で８段分が残存している。井戸枠内は基底部に曲物を据えて井筒にしているようだが、図化できなかった。

遺構出土遺物はSE01から鉄製鋏（M368）、SK14から土師器皿（1768）、SK16から無釉陶器鉢（1769）、丹波焼甕（1770）、染付磁器皿（1771）を図化している。

遺構の時期は、遺物が僅かであり不明だが上面の状況等から17世紀後半～18世紀代と考えられる。

また、その他の出土遺物としては、包含層から土師器皿、瓦質土器羽釜、備前焼鉢・徳利、丹波焼擂鉢・桶・壺・甕、施釉陶器火入れ・椀・杯・皿・蓋・燗徳利・壺、染付磁器碗・杯・皿・蓋・仏具碗・花瓶、白磁皿・紅皿、青磁火入れ、色絵磁器仏花瓶、土製品、軒丸瓦・桟瓦・井戸瓦等（1779～1863）、鉄釘（M342）が出土している。時期的には17世紀後半～18世紀代のもの、18世紀後半～19世紀前半のもの、さらに19世紀前半以降のものである。（鐵・深江）

39区（図版80　写真図版28）

本調査区では、Ⅰ層（近世整地層）に相当する層が殆ど認められず、焼土を含む瓦礫を除去した段階で、淡黄灰色粗砂をベースとする遺構面を検出した。本遺構面では瓦・陶磁器・壁土ブロックを含む大小の攪乱（廃棄土坑）が認められる。遺構は土坑14基を検出した。この内、出土遺物を図化した遺構は土坑（SK01・04・07・10・11・14）である。遺物はSK01から土師器焙烙（1864）、須恵器鉢（1865）、備前焼擂鉢（1866）、備前焼甕（1867・1868）、SK04から真鍮製煙管吸口（M410）、SK07から施釉陶器蓋（1869）、染付磁器碗（1870）、砥石（1871）、SK10から鉄釘（M343）、SK11から土師器皿（1872・1873）、土師器鍋（1874）、須恵器鉢（1875～1878）、常滑焼甕（1879）、須恵器筒形容器（1880）、土製品（1881）、SK14から染付磁器（1882）を図化している。

遺構の時期は、出土遺物についてSK01で16世紀末葉～17世紀前半、SK11で15世紀代と、中世及び近世の古い段階のものも見られるが、それ以外は18世紀代～19世紀代の遺構である。

その他の出土遺物としては、包含層から古墳時代の土師器小型丸底壺、土師器皿・秉燭・焙烙・焼塩壺、須恵器鉢、備前焼甕、無釉陶器擂鉢、施釉陶器椀・蓋、白磁紅皿、青磁皿・碗、染付磁器皿・碗・蓋・花瓶、陶胎染付皿、染付青磁蓋、軒丸瓦・平瓦、土製品等（1883～1915）、銅製取手金具（M411）を図化している。（鐵・深江）

2．七宮地区

（1）確認調査

七宮地区の確認調査は、平成9年度において2度実施している。

1次調査（遺跡調査番号：970218）は、七宮交差点を中心とする国道2号線を横断する形で、2.0×3.0mのグリッドを4箇所設定して調査を実施した（ⅠG～ⅣG：図版1）。調査対象地は、『元禄兵庫津絵図』に見られ、後の文久絵図では表れない「船入江」の存在が想定される部分にあたり、本体工事における事前の地質調査においても入江に伴う旧護岸の敷設構造物の存在が想定されていたため、確認調査での成果が期待された。しかし、調査の結果ではそうした入江の護岸施設は確認されず、生活の痕跡を示す遺構・遺物も極めて希薄であった。また、調査では包含層下で厚さ2.0m以上の粗砂層の堆積を確認し、これを元禄以降における舟入江の埋め立て工事に用いられた客土と想定したが、断定するには至らなかった。（種定淳介・深江）

2次調査（遺跡調査番号：970393）では、1次調査の「ⅣG」より東側において、本体工事に先立つガイウォールの工事施工中に石垣が発見され、その石垣状況を等の把握のために調査を実施した。調査区は2箇所の工事区域に限定され、北東側を「北トレンチ」（2.6×6.2m）、南西側を「南トレンチ」（1.8×3.0m）と呼称した。以下、調査成果について述べる。

北トレンチの調査（図版81　写真図版29）

本トレンチでは調査区の東西で石垣を検出した。石材は全て花崗岩である。

西側の石垣は、上から6石（高さ約1.7mで並列する）が整然と組まれた石積みとなっていて、縦目地の通りも顕著である。上から6石目と7石目では、7石目の石が約10cm前（東側）へ迫り出している。迫り出している石垣は、局地的なものではなくトレンチ幅全域にわたっており、石垣の孕みによって生じた段とは考え難く、6石目から上部が修築された結果と判断できる。石垣の7石目から下部については、湧水が激しく調査を断念せざるを得ず、少なくとも8石目まで石積みが存在することを確認したにすぎない。しかし、調査後に行

った重機による石垣撤去作業において、８石目が根石となることが確認され、根石が標高約－1.2ｍに位置することも推定できた。

東側の石垣は、本体工事中の損壊を受けていて、調査区の端で断面形を確認したにすぎないが、３石（高さ約1.0ｍ）が積まれており、最下段の石垣には根石を据えるための掘方が認められる。石垣は、西側の石垣とほぼ平行して構築されている。また、西側の上６石と比較すると花崗岩の色合いが異なっているものの、石積みの技法が酷似しており、構築時期にさほどの差がないものと判断される。

東西の石垣間に堆積する土層は、最下層が標高約－0.8ｍ以下の青灰色粗砂（11層）であり、この層からは遺物が殆ど出土しない。その上層には暗灰色粗砂（10層）が堆積する。10層には流動性堆積の痕跡が見られず、東側では胴木と杭が設けられている。この胴木と杭は、西側石垣の根石との高低差が約0.8ｍあり、石垣の構築に際して設置されたものでないことが看取される。胴木と杭の上層には、東から西へ向かって傾斜する黒褐色の埋め土（９層）があり、９層と西側石垣の間には粗砂とシルトの互層（７層・８層）が約0.4ｍにわたって堆積する。東側石垣の根石は９層上面を掘り込んで据えられており、胴木と杭は９層の埋め土に伴って設けられたものと考えられる。また、７層・８層はラミナ状に堆積しており、東西の石垣間がある時期に幅約4.0ｍの溝（水路）として機能していたことを窺わせる。

７層・８層からは19世紀前半以降の遺物（本文出土遺物観察表：北トレンチ堀内）が多量に出土した。また、石垣間の埋土は、７層上に焼土層（６層）と多量の黒褐色砂層（５層）が堆積し、道路舗装へと続く。

遺物は、主に７層・８層から無釉陶器土瓶・風炉・壺・甕、施釉陶器徳利・花瓶・灯明皿・秉燭、土師器燭台、白磁碗・杯・皿、染付磁器碗・杯・皿・蓋・花瓶、色絵磁器碗、土製品等（2001～2034）、鉄製鉋（M582）、そして箸（W20）、栓（W21）、漆器蓋（W22）、銅板装木製品（W23）等の木製品を図化している。
（†水口富夫・深江）

南トレンチの調査（図版82　写真図版29）

本トレンチでは、北トレンチで検出した西側石垣の延長と考えられる石垣を確認し、北トレンチで明確でなかった石垣の裏込めの状況が明らかとなった。なお、石垣は調査区が狭いために上から３石分までの調査に止まった。

石垣の裏込めは、石垣の石面から後ろ（西側）に幅約1.2ｍの範囲にあるが、石垣の天端石とほぼ同レベルにある裏込め、すなわち石垣を築くにあたって詰め入れた裏込めと、天端石のレベルよりも上に積まれた裏込めの二者が認められる。前者の拳大の裏込め石は本来の裏込めであるが、その上にある後者の一抱え程もある石（20㎝～50㎝）は、裏込めと位置づけられるか不明な点が多い。しかし、北トレンチの石垣の天端石が標高約0.8ｍであるのに対して、本トレンチのそれが標高約0.4ｍであることから考えると、本トレンチの天端石が１石分抜き取られた可能性もあり、後者のものはそれに伴う裏込めであったとも推定される。

裏込めの根切りから西側には、黄色粗砂（14層）が堆積しており、標高約0.3ｍにあるこの層以下が安定したベース層となる。また、そのベース上には２層の整地土（12層・13層）が堆積しており、石垣より西側での生活面の広がりが推定できる。この整地土は、道路若しくは町屋の存在を窺わせるものだが、整地土の最上層は攪乱を受けているため、最終面の高さは確定できない。

本トレンチの出土遺物については鉄釘（M583）図化しているのみだが、隣接する北トレンチで検出した石垣と一連の石垣を検出していることからも、同様の状況を示していると考えられ、出土遺物についても同様と考えるのが妥当と考える。（†水口・深江）

（2）全面調査

・概要

兵庫津遺跡（七宮地区）は、第1次確認調査（平成9月15日実施　遺跡調査番号：970218）・第2次確認調査（平成9年12月9日～12月12日実施　遺跡調査番号：970393）と2度にわたる確認調査を実施し、当該工事区域に「船入江」が存在することを明らかにした。しかし、確認調査の範囲が本工事に先立つガイドウォール工事に伴うものであったので、「船入江」西側にあたる本工事部分両脇1～2mの限られた範囲でしか検出できていない状況にあった。また、第2次確認調査後平成10年2月16日には、工事中に「船入江」北側の石垣が新たに発見されたが、湧水が激しく壁面崩落の危険があったために、石垣の位置確認と略測に止めた。

全面調査は、ガイドウォール工事完了に伴って、本線部分の掘削が可能となったため、建設省近畿地方建設局兵庫国道事務所（当時）からの再調査の依頼を受けて、調査を実施した。

調査は、前回の第2次確認調査の結果に基づいて、「船入江」石垣の存在する箇所に限定して調査区を設定し、平成10年2月に発見された石垣部分を「東地区」、第2次確認調査によって明らかとなった「船入江」西側の石垣部分を「西地区」とした。以下、各調査区の調査結果について述べる。

東地区の調査（図版83　写真図版30・31）

東地区では、新旧の石垣と入江側の調査を行った。

・新石垣

調査区中央側で検出した東西方向の石垣で、石垣の高さは約2.0mを測り、天地方向に6段の石積みが認められる。石垣の根石は、標高約－1.0mの部位にあたる。石垣を構成する石は全て花崗岩である。

石垣は、石積みの状況から見て二時期に分類が可能である。先ず、上3段の石垣については、被熱の痕跡が全く認められず、目地には漆喰を使用しており、入江側の石面も長方形に整っている。それに対して、下3段の内の上2段は、大規模な火災を被っており、表面の剥落が著しく、石積みの横目地の通りも一定しないことから時期差が窺える。また、最下段の根石のみに被熱痕跡が認められないのは、この部位が火災の際に水面下にあったものと推定できる。

新石垣の根石は、胴木によって沈下が防がれている。胴木は、厚さ約5㎝、幅約30㎝の板材が上にあり、その下にはさらに厚さ約8㎝、幅約40㎝の板材を継ぎ足している。これは上下共に船材の転用と考えられるが、一般に考えられる胴木とは異なっており、むしろ胴板という呼称が相当であろう。また、胴木の前面（南側）には、約0.8mの間隔で直径約9㎝、長さ約1.5mの杭が打ち込まれている。

新石垣の船入江側（南側）は厚く砂層が堆積する（図示せず）。その堆積層は、石垣の上3段目までは盛土層によって埋められ、さらに雨水管（鉄筋入りヒューム管）が石垣に沿って埋設されている。この影響で、石垣の西側部分は根石に至るまで除去されており、かろうじて杭と胴木が残存しているのみである。また、雨水管より下層は一定した堆積層が認められるが、それも石垣より南2.0mの範囲に限られており、それより以南は厚いコンクリートの基礎によって攪乱されている。

石垣前面（南側）の堆積層の内、安定した層位には焼土層及び暗青灰色細砂層が認められ、近世から近代に至る陶磁器や木製品、銅貨等が多量に出土している。特に、石垣の根石付近で出土した銅貨の塊は、巾着状の入れ物に入っていたらしく、合計三七銭九厘が一塊となって出土している。その内訳は二銭銅貨－明治10年8枚（M622～629）・明治13年7枚（M630～636）・明治14年1枚（M637）・明治15年1枚（M638）、一銭銅貨－明治8年1枚（M620）・明治13年1枚（M621）、半銭銅貨－明治8年2枚（M615・616）・明治10年1

枚（M619）、寛永通寶４枚（M597・604・613・614）である。銅貨については、これ以外に寛永通寶14枚（M598～602・605～612）、半銭銅貨－明治10年２枚（M617・618）が出土している。

また、出土遺物は、入江内焼土層から無釉陶器植木鉢・鉢・瓶、施釉陶器蓋・植木鉢、青磁植木鉢、染付磁器皿等（2041～2052）、入江内最下層から施釉陶器鉢、陶胎染付鉢、施釉陶器灯明皿・鍋、染付磁器皿等（2053～2060）の他、両層から真鍮製笄（M591）、銅製鋲（M592）、不明真鍮製金具（M593）、不明銅製金具（M594）、真鍮製煙管雁首（M595）、真鍮製達磨飾り（M596）、そして箸（W24・25）、栓（W26）、飲み口（W27）、櫛（W28）、墨書板材（W29）等の木製品を図化している。

出土遺物の内で陶磁器類については、概ね19世紀前半以降の位置づけがされる。また、最下層から出土した銅貨に明治15年鋳造のものがあり、少なくともそれよりも後に石垣の修築がされたことが窺える。

・古石垣

古石垣は、新石垣の裏側（北側）の約1.5m離れた場所に位置する。古石垣については、位置関係や層序等から何らかの事情で機能しなくなり、新たに石垣が築かれたものと考えられる。

石垣は合計５段の石積みが認められ、新石垣と平行して築かれており、東へ延びる部分は先行して本体工事（及びそれに伴う発掘調査）が行われた西出地区に打たれた矢板鋼によって損壊している。石垣は全て花崗岩で、石積みの形態は新石垣の下段と近似している。

石垣の最上段の石は火災により被熱しているが、その下の石積みにはそれが見られない。これは、古石垣の最上部の石と新石垣の下部の石が同時に被熱した、若しくは同一時期に露出していた可能性が考えられるのである。なお、最上段の石については、やや小振りであり、築造当時の天端石であったかどうかは不明である。周辺の状況から考えると、１～２石程度が崩落していると考えた方が妥当であろう。

石垣の根石の標高は、新石垣とほぼ同じ－1.0mに位置し、根石の下には「U」字形に抉りのある胴木が据えられており、これも船材を転用したものと考えられる。

さて、この古石垣と新石垣の関係だが、土層の堆積状況からみれば、古石垣が先に積まれて、その後に新石垣が築かれたのは間違いない。ただし、古石垣は青色粗砂（11層）に胴木を据えて石垣を築いているが、その上の青色粗砂＋黒灰色粗砂（10層）は石垣の前面（南側）に堆積したものであり、10層上面には新石垣の根石が据えられている。さらに、古石垣の前面には、直径約15cm、長さ約1.3mの杭を打ち、２段の土留め板を押さえとして整地土（４～９層）を詰め、これを裏込めとして新石垣を構築しており、古石垣構築過程で新石垣が一部拡張されていたことを物語っている。これは港湾施設の設備の充実を図る意味で、さらに深い入江が要求されたものと見られ、入江を狭くしてでも新たに石垣を構築する何らかの必要性が生じたものと推察される。

上記した新石垣と古石垣の状況は、前述したように新石垣の下３段が上段に比べて古石垣と近似する様相を示している中で、下３段にのみ裏込め石が存在していることも、そのことを裏付けている。また、新石垣の上３段の裏込めになっている焼土層（２・３層）は、古石垣の上部をも覆っていることは間違いなく、火災によって被害を被った後のある時期に大規模な改修工事が行われ、新石垣の上３段が積まれた可能性が想定できる。

その他、本地区出土遺物は、石垣の裏込め整地層（４～９層中）から施釉陶器灯明皿・秉燭・蓋、染付磁器碗・蓋等（2035～2040）、寛永通寶（M603）、包含層から染付磁器杯（2061）を図化している。

西地区の調査（図版84・85　写真図版31）

本地区は、２次確認調査において実施した２本のトレンチ（北・南トレンチ）の範囲の丁度中間に位置し、石垣と裏込め、入江内の調査を実施した。石垣は調査区東西方向の中央部分からやや西側で検出し、石材は全

て花崗岩である。

先の確認調査で確認したように、この石垣の下２段は石積みが異なっており、石面が約10～20cm前に迫り出している。これは、石垣の修築が行われたことを示しており、上４段が新しいことが分かる。石垣の根石は約－1.2m付近にあり、東地区に比べるとやや深い。石垣の表面は下２段の石が青灰色を示し、それより上の石が黄灰色を呈している。これは石積みの時期の違いに起因するとも考えられるが、下２段を境とした部位以下が水面下にあり、石垣の修築においてもそのことが考慮されたとも考えられよう。これは、石垣前面（東側）の土層において、下２段の土層が青灰色粗砂を主体とする堆積（４～11層）であるのに対して、それより上層は埋め土（１～３層）であることからも窺える。また、石垣の根石は、青灰色細砂＋黒灰色粗砂（12層）の上面に直接築かれており、胴木・杭は認められなかった。

本地区の出土遺物は、石垣前面（東側）入江内盛土から無釉陶器擂鉢、施釉陶器椀・杯・蓋・花瓶・徳利・鍋・土瓶・焜炉・焜炉蓋・灯明皿・秉燭、土師器燭台、青磁燭台、染付磁器碗・皿・御神酒徳利、染付青磁杯、瓦等（2062～2096）、不明銅製品（M590）、鉄製鋏（M588）、入江内焼土層から瓦質土器風炉・羽釜・蓋、施釉陶器甕・徳利・御神酒徳利・灯明皿・杯・鉢・擂鉢・蓋・鍋・土瓶・尿瓶・燭台・秉燭・ミニチュア壺、無釉陶器擂鉢・植木鉢・鉢、白磁碗・皿・ミニチュア紅皿、青磁角鉢、染付磁器碗・蓋・皿・合子蓋・油壺・花瓶・瓶・蕎麦猪口・鉢、色絵磁器碗、土師器皿・蛸壺、ガラス製酒杯、土製品、瓦、石製硯等（2097～2199）、銅製引き手金具（M589）、入江内整地層から施釉陶器灯明皿、白磁皿、青磁碗、染付青磁蓋、染付磁器碗等（2200～2204）、入江内最下層から土師器皿・燭台・秉燭、施釉陶器椀・ミニチュア鉢・蓋・鉢・御神酒徳利・秉燭、白磁皿、染付青磁碗、染付磁器碗・杯・皿・鉢・蓋・仏飯・仏具碗、色絵磁器碗、土製品、無釉陶器米俵形、木製釦、土製ミニチュア擂り粉木等（2205～2252）、銅製鋲（M584）、不明銅製品（M586）、真鍮製環状製品（M585）、真鍮製煙管吸口（M587）を図化している。また、石垣の下２段分に堆積した４～11層からは、墨書木札（木簡）（W30～34）、加工材（W35～37）、箸（W38～41）、杓子（W46～48）、飲み口（W49）、栓（W50・51）、円形底板（W52）、有孔円盤状板（W53）、箱状容器（W54・55）、曲物底板（W56）、板材（W57・58）、桶側板（W59）、桶把手状部材（W60）、桶蓋板（W61・62）、桶底板（W63）等の木製品が出土している。

以上、東地区・西地区（南北トレンチの成果含む）の調査では、「船入江」の北隅及び西隅の一部と考えられる石垣の存在が明らかとなった。本調査の成果は、現在道路下あるいは住宅地の下に眠る入江の痕跡を推測する際の、非常に重要な成果であったことは間違いなかろう。（†水口・深江）

Ⅳ　遺物

1．浜崎地区

A．古代の遺物

浜崎地区の出土遺物には、最終遺構面を形成する黄灰色砂以下の砂層を包含層とする土層、あるいは最終遺構面以上の包含層や攪乱層から、中世以前の遺物が僅かながら出土している。遺物は5世紀前半頃と考えられる土師器3点（1687・1696・1883）と7C代の土師器1点（702）である。出土状況から調査区外よりの流れ込みと考えられる。なお、個々の詳細は観察表にまとめている。

702は、15区包含層中出土の坏身である。口径12.8cm、器高3.1cm、底径9.6cm。

1687は、36区包含層中出土の高坏の坏部である。復元口径23.0cm。

1696は、37区包含層中出土の小型丸底壺である。復元口径7.45cm、復元器高5.55cm、復元腹径10.2cm。

1883は、39区包含層(攪乱層)中出土の小型丸底壺である。復元口径7.80cm、復元器高8.05cm、復元腹径7.80cm。

B．中・近世の遺物

1　土器・陶磁器

土器・陶磁器の種別としては、土師器・土師質土器、瓦器・瓦質土器、須恵器、陶器、磁器等がある。なお、鍋・釜等の煮炊具については、形態的に類似し、また、その系譜関係も同一と考えられる土師器及び瓦質土器を本報告では一括して土製煮炊具として扱うこととする。

(1)土師器・土師質土器

土師器・土師質土器の器種としては、皿・椀・壺・竈・灯明具・焼塩壺等がある。

①　皿

皿には、轆轤使用のもの(以下「轆轤土師器」と呼ぶ。)と轆轤未使用のもの(以下「非轆轤土師器」と呼ぶ。)がある。

轆轤土師器には、平底の底部から外傾する口縁部が直線的に立ち上がるもの(Ⅰ類)と、平底の小さな底部からやや外反気味の口縁部が立ち上がるもの(Ⅱ類)、平底の比較的大きな底部に短い口縁部を持つもの(Ⅲ類)、平底の底部から内湾気味の体部が立ちあがりそのまま丸く収まる口縁部に至るもの(Ⅳ類)、平底の小さな底部から外傾する口縁部が直線的に立ち上がるもの(Ⅴ類)がある。

Ⅰ類は、いわゆる須恵器小皿の形態を模倣したもので、底部切り離し技法には、糸切り手法のもの(284)とヘラ切り手法のもの(283・294・295)とがある。

Ⅱ類(1521)は、やや肥厚する口縁部の端部が丸く収まるもので、底部には糸切り痕が残る。

Ⅲ類には、口縁部が外反気味のもの(ⅢA類)と内湾気味に立ち上がる口縁部を持つもの(ⅢB類)とがある。ⅢA類には、口縁部が尖り気味のもの(25～30・32・33・54～57・162・164・435～441・564・582・583・647・700・1533)とやや肥厚気味のもの(31・99・129・155・162・349・350・580・675)とがあり、両者とも底部には糸切り痕が残る。ⅢB類には、尖り気味の口縁部を持つもの(59・165・383・637・644～646・648)と、体部から端部が丸く収まる口縁部にそのまま至るもの(34・98・151・210・351・636・674・1048・1534・1619・1689)、口縁端部が肥厚するものとがあり、前2者の底部切り離し技法は糸切り手法であるが、後1者の底部切り離し技法には糸切り手法のもの(58・60・61・581)とヘラ切り手法のもの(53・387)とがある。

Ⅳ類は、土師器皿に透明釉を施釉したいわゆる「柿釉皿」と呼称されているもので、底部に糸切り痕の残るも

の(35・62・63・1653・1654・1706・1711～1714・1784～1786・1884～1886)と外面の底部から体部下半にかけてヘラケズリによる整形が認められるもの(64・168)とがある。

Ⅴ類(1768)は、口縁端部が尖り気味のもので、底部には糸切り痕が残り、内面には透明釉が施釉され、いわゆる「柿釉皿」と呼称されている一群に含まれるものである。

これら轆轤土師器の皿は、Ⅰ類が12世紀後半～13世紀前半、Ⅱ類が14世紀後半～15世紀前半、Ⅲ類が17世紀中葉～18世紀前半、Ⅳ類・Ⅴ類が18世紀後半以降の所産と各々考えられる。

一方、非轆轤土師器の皿には、いわゆる「コースター形」を呈するもの(Ⅰ類)と、内湾気味に立ち上がる体部～口縁部を持つもの(Ⅱ類)、直線的に立ち上がる体部～口縁部を持つもの(Ⅲ類)、外反気味に立ち上がる体部～口縁部を持つもの(Ⅳ類)、いわゆる「ヘソ皿」の形態を呈するもの(Ⅴ類)、いわゆる「碗形」を呈するもの(Ⅵ類)がある。

いわゆる「コースター形」を呈するⅠ類には、口縁部が上方に立ち上がるもの(508)とやや内傾気味に立ち上がるもの(1438)とがある。

内湾気味に立ち上がる体部～口縁部を持つⅡ類には、内湾気味に立ち上がる体部からそのまま口縁部に至るもの(ⅡA類)と、口縁部に変化の認められるもの(ⅡB類)とがある。

内湾気味の体部～口縁部を持つⅡA類は、口縁部が上方に立ち上がるもの(ⅡA1類)と、内湾気味の口縁部が斜め上方に立ち上がるもの(ⅡA2類)、口縁部が直線的に斜め上方に緩やかに立ち上がるもの(ⅡA3類)、底部から「く」の字状に折れ曲がる短い口縁部を持つもの(ⅡA4類)、体部が底部から丸味をもって立ち上がるもの(ⅡA5類)とに分けられる。

ⅡA1類には、口縁端部が肥厚し内外面に端面を持つⅡA1a類(285・286・288・291・293・296・298・301・317・318等)と口縁端部が尖り気味に収まり外面にのみ端面を持つⅡA1b類(289・340・341・1170・1171・1173～1175・1177・1498等)とがある。ⅡA2類は、口縁端部が尖り気味に収まるが、口縁端部外面に若干ではあるが端面の認められるⅡA2a類(287・290・602・905・906・909・916・920・1067・1267・1391・1395・1448・1449・1471等)と端面の認められないⅡA2b類(510・512・513・515・531・972・977・978・988・990～992・1115・1121・1141・1208・1209・1211・1214・1215・1256・1262・1265・1508・1509・1588等)とに分けられる。また、口縁端部が丸く収まるⅡA3類には、口縁部が肥厚するⅡA3b類(737・772・785・1019～1021・1023・1024・1026・1304・1305・1308・1672等)と肥厚しないⅡA3a類(479・509・845～849・854・927・1108・1149・1379・1518・1519・1521・1543等)とがある。なお、ⅡA4類(388・389・391・392・943・963・965・1008・1009・1410等)は、平底で底部中央が厚い。また、ⅡA5類には、器壁が薄手で緩やかに口縁部が立ち上がるⅡA5a類(206等)と、口縁部は緩やかに立ち上がるが、器壁が厚いⅡA5b類(334・468等)、口縁部の立ち上がりがややきついⅡA5c類(36・643等)とがある。

ⅡB類は、内湾気味の口縁部を持つもの(ⅡB1類)と、直線的な口縁部を持つもの(ⅡB2類)、外反気味の口縁部を持つもの(ⅡB3類)とに分けられる。

ⅡB1類には、口縁部外面に肥厚の認められるⅡB1b類(516・603・605・904・915・918・919・1070・1075・1499等)と認められないⅡB1a類(342等)とがある。また、ⅡB2類は、口縁部が若干内湾気味で尖り気味の口縁端部を持つⅡB2a類(514・518・524・526・981～983・985・1113・1200・1201・1217・1257～1259・1291・1292・1490等)とほぼ直線的な口縁部で口縁端部が丸く収まるⅡB2b類(476・751・850・929・1142・1144・1146～1148・1455・1458等)とに分けられる。外反する口縁部を持つⅡB3類には、口縁端部が摘み上げられるⅡB3a類(746・754・775・779・1106等)と口縁端部が丸く収まるⅡB3b類(969・1274等)とがある。

体部～口縁部がほぼ直線的に立ち上がるⅢ類は、若干外反気味を呈する口縁部が斜め上方に立ち上がるもの

(ⅢA類)と、体部が直線的に斜め上方に緩やかに立ち上がるもの(ⅢB類)、底部から「く」の字状に折れ曲がる口縁部を持つもの(ⅢC類)、体部が低部から丸味をもって立ち上がるもの(ⅢD類)とに分けられる。

尖り気味に口縁端部が収まるⅢA類には、口縁端部外面に若干ではあるが端面の認められるⅢA1類(519・522・604・832・833・907・913・914・917・1066・1069・1116・1176・1392・1396・1446・1472・1473・1500等)と端面の認められないⅢA2類(520・521・527・973・984・1117・1207・1212・1219・1255・1260・1263・1264・1293・1294・1297・1299・1301・1406・1510・1512等)とがある。口縁部が肥厚するⅢB類は、口縁端部が尖り気味のⅢB1類(741・750・752・856・926・932～934・1140・1143・1145・1378・1456・1457・1459・1542・1586・1873等)と丸く収まるⅢB2類に分けられる。なお、ⅢB2類には、口縁端部が丸く収まるⅢB2a類(738・739・745・748・749・755・770・773・777・928・1022・1027・1029・1306・1310・1673等)と端部が摘み上げ気味のⅢB2b類(118・743・764・765・774・776・778・780・781・1311・1676等)とがある。また、平底で底部中央が厚いⅢC類は、口縁端部は尖り気味ではあるが丸く収まり、底部周縁部に明瞭な凹線状の凹みを持つⅢC1類(1005・1272・1341・1352・1354・1356・1364・1555・1557・1562～1564等)と持たないⅢC2類(385・390・393・944・968・1003・1007・1010・1348等)の両者がある。器壁の厚いⅢD類には、口縁部が緩やかに立ち上がるⅢD1類(214等)と立ち上がりのややきつい口縁部を持つⅢD2類(434等)とがある。

外反気味の体部～口縁部を持つⅣ類は、丸味を持った体部から口縁部が外反するもの(ⅣA類)と、底部から体部～口縁部が斜め上方に立ち上がるもの(ⅣB類)、底部～体部が緩やかに底部から立ち上がるもの(ⅣC類)、底部から「く」の字状に折れ曲がる口縁部を持つもの(ⅣD類)に分けられる。

端部が尖り気味の口縁部が外反するⅣA類には、口縁部の外反度の強いⅣA1類(299等)と短く外反するⅣA2類(292・1172等)とがある。また、体部～口縁部が肥厚するⅣB類は、尖り気味に口縁端部が収まるが、口縁端部外面に若干ではあるが端面の認められるⅣB1類(297・523・834・835・912・1068・1071～1074・1076・1077・1114・1123～1125・1469・1470等)と端面の認められず丸味を持つⅣB2類(282・300・511・525・530・601・971・974～976・979・980・986・987・1122・1199・1210・1213・1216・1218・1220・1253・1254・1261・1295・1296・1300・1502・1513・1514・1589等)とがある。口縁部が肥厚するⅣC類は、口縁端部が尖り気味のⅣC1類(477・736・742・753・756・758・851～853・855・857・930・1107・1460・1461・1674・1675・1677・1872等)と丸く収まるⅣC2類に分けられる。なお、ⅣC2類には、口縁端部が丸く収まるⅣC2a類(740・744・747・759・761・763・782～784・1025・1028・1307・1309等)と端部が摘み上げ気味のⅣC2b類(757・760・762・766～769・771等)とがある。また、基本的に平底で底部中央が厚いⅣD類は、口縁端部は尖り気味ではあるが丸く収まり、底部周縁部に明瞭な凹線状の凹みを持つⅣD1類(962・964・1004・1006・1271・1350・1351・1353・1355・1357・1358・1556・1558～1561等)と持たないⅣD2類(959・960・961・966・967・1273・1275・1276・1361等)の両者がある。

いわゆる「ヘソ皿」の形態を呈するⅤ類は、いわゆる「皿形」の形態を呈するⅤA類とやや深手でいわゆる「碗形」の形態を呈するⅤB類とに分けられる。ⅤA類には、口縁部が尖り気味に収まるⅤA1類(903・911等)と口縁部が丸く収まるⅤA2類(1165・1506・1507等)とがある。また、口縁部が肥厚するⅤB類には、口縁部外面に肥厚が著しく口縁部内面に端面を持つⅤB1類(843・844・922・1454等)と口縁部が内外面に肥厚するⅤB2類(1359・1360等)とがある。

いわゆる「碗形」を呈するⅥ類には、内湾気味の体部～口縁部が口縁端部で若干直立気味を呈するⅥA類(836・989等)と直線的に延びる体部～口縁部に丸く収まる口縁端部を持つⅥB類(931等)とがある。

これら非轆轤土師器の皿は、Ⅰ類・ⅡA1a類・ⅣA1類が12世紀中頃～13世紀中頃、ⅡA1b類・ⅡB1a類・ⅣA2類が13世紀後半、ⅡA2a類・ⅡB1b類・ⅢA1類・ⅣB1類・ⅤA1類が14世紀前半、ⅡA2b

類・ⅡＢ２ａ類・ⅢＡ２類・ⅣＢ２類・ＶＡ２類・ⅥＡ類が14世紀後半、ⅡＡ３ａ類・ⅡＢ２ｂ類・ⅢＢ１類・ⅣＣ１類・ＶＢ１類・ⅥＢ類が15世紀前半、ⅡＡ３ｂ類・ⅡＢ３ａ類・ⅢＢ２類・ⅣＣ２類・ＶＢ２類が15世紀後半、ⅡＡ４類・ⅡＢ３ｂ類・ⅢＣ類・ⅣＤ類が15世紀末葉～16世紀前葉、ⅡＡ５ａ類が16世紀世紀中葉～後半、ⅡＡ５ｂ類・ⅢＤ１類が16世紀末葉～17世紀前葉、ⅡＡ５ｃ類・ⅢＤ２類が17世紀中葉～後半の所産と各々考えられる。

なお、非轆轤土師器はいわゆる「京都系土師器」と一括して論じられることが多いが、胎土精錬度や色調・製作技法等から、「京都産」の土師器をかなり忠実に模倣したと想定できるものが存在する。器種別には、いわゆる「コースター形」を呈するⅠ類やいわゆる「ヘソ皿」の形態を呈するⅤ類に顕著に認められるが、時期的には、15世紀後半～16世紀前葉を中心に、各時期にわたって散見される。具体的には、15世紀後半及び15世紀末葉～16世紀前葉の所産と考えられるⅢ類・Ⅳ類に多数存在することが挙げられる。特に、15世紀後半に所属するⅢＢ２ｂ類・ⅣＣ２ｂ類及び15世紀末葉～16世紀前葉に所属するⅢＣ１類・ⅣＤ１類は、かなり忠実に「京都産」の土師器の形態を模倣したものと考えられる。

② 椀

椀には、いわゆる「吉備系土師器椀」と呼称されるもの(394・395)と、須恵器椀の模倣タイプのもの(641)とがある。前者は、底部から内湾気味の体部が外方に立ち上がり、口縁部端部は丸く収まり、断面三角形を呈する貼付高台を持つもので、14世紀代の所産と考えられえる。後者は、口縁部端部はやや尖り気味ではあるが丸味を持ち、底部には糸切り痕が残る。

③ 壺

壷は、いわゆる「蛸壺」形の形態を呈し、外傾する口縁部がいわゆる「玉縁状口縁」となるもの(3・4)と端面を持つもの(396)とがある。口縁部の形態が不明なもの(337)も含めて、成形等には轆轤を使用しており、底部には糸切り痕が残る。

④ 竈

竈には、直立する体部から端面を持つ口縁部が外反するもの(1444・1445)がある。

⑤ 灯明具

灯明具としては、灯明皿があり、碗形を呈するものと皿形を呈するものの両者がある。碗形を呈するものには、灯心立てを持つものと灯心立てを持たないもの(1744)とがあり、前者には円筒形の灯心立てを底部内面に貼り付けるもの(1887)と横桟形の灯心立てを口縁部に貼り付けるもの(1888)とがある。皿形を呈するものには、脚部の付くもの(1716)と付かないもの(1754)とがあり、両者とも体部内面に１箇所の抉りのある凸帯を持ち、透明釉の施釉が観察できる。

⑥ 焼塩壷

焼塩壷(1891)は、寸づまりのコップ状の形態を呈し、蓋受け部を持たないタイプのもので、円板状の底部に幅の広い粘土板を１枚巻きつけて作るいわゆる「板作り法」で作られている。

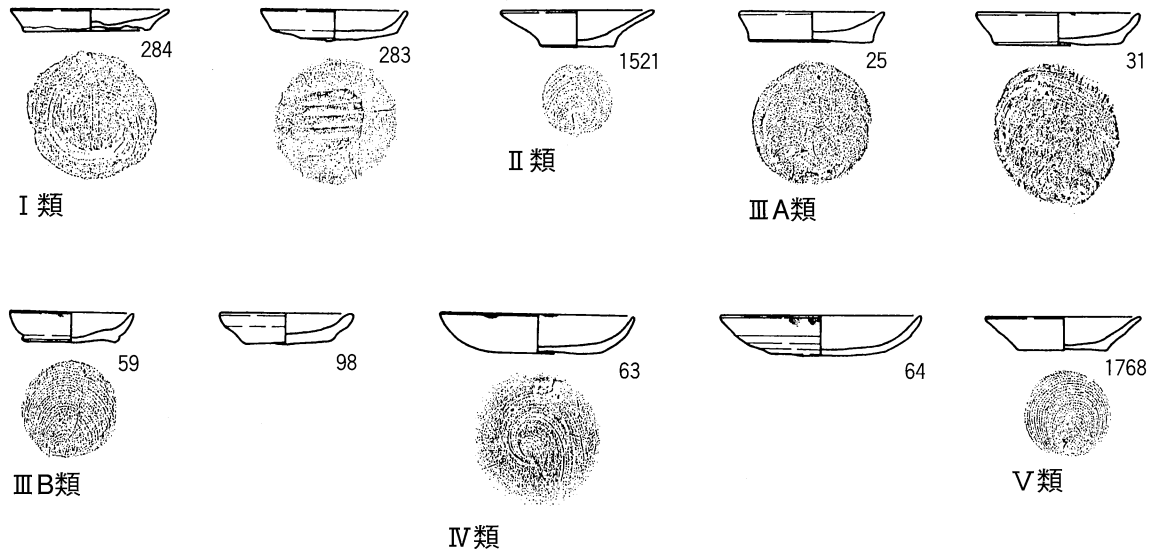
分類					出土遺物	所属時期
轆轤土師器	Ⅰ				283・284・294・295	12世紀後半～13世紀前半
	Ⅱ				1521	14世紀後半～15世紀前半
	Ⅲ	A			25・26・27・28・29・30・31・32・33・54・55・56・57・59・99・129・152・155・161・162・163・164・349・350・435・436・437・438・439・440・441・564・580・582・583・647・675・700・1533	17世紀中葉～18世紀前半
		B			34・53・58・59・60・61・98・151・165・210・351・383・387・581・636・637・644・645・646・648・674・1048・1534・1619・1689	
	Ⅳ				35・62・63・64・168・1653・1654・1706・1711・1712・1713・1714・1784・1785・1786・1884・1885・1886	18世紀後半以降以降
	Ⅴ				1768	
非轆轤土師器	Ⅰ				508・1438	12世紀中頃～13世紀中頃
	Ⅱ	A	1	a	285・286・288・291・293・296・298・301・317・318	12世紀中頃～13世紀中頃
				b	289・340・341・1170・1171・1173・1174・1175・1177・1498	13世紀後半
			2	a	287・290・602・905・906・909・916・920・1067・1267・1391・1395・1448・1449・1471	14世紀前半
				b	510・512・513・515・531・972・977・978・988・990・991・992・1115・1121・1141・1208・1209・1211・1214・1215・1256・1262・1265・1508・1509・1588	14世紀後半
			3	a	479・509・845・846・847・848・849・854・927・1108・1149・1379・1518・1519・1521・1543	15世紀前半
				b	737・772・785・1019・1020・1021・1023・1024・1026・1304・1305・1308・1672	15世紀後半
			4		388・389・391・392・943・963・965・1008・1009・1410	15世紀末葉～16世紀前葉
			5	a	206	16世紀中葉～後半
				b	334・468	16世紀末葉～17世紀前葉
				c	36・643	17世紀中葉～後半
		B	1	a	342	13世紀後半
				b	516・603・605・904・915・918・919・1070・1075・1499	14世紀前半
			2	a	514・518・524・526・981・982・983・985・1113・1200・1201・1217・1257・1258・1259・1291・1292・1490	14世紀後半
				b	476・751・850・929・1142・1144・1146・1147・1148・1455・1458	15世紀前半
			3	a	746・754・775・779・1106	15世紀後半
				b	969・1274	15世紀末葉～16世紀前葉

第4表　土師器皿分類表 (1)

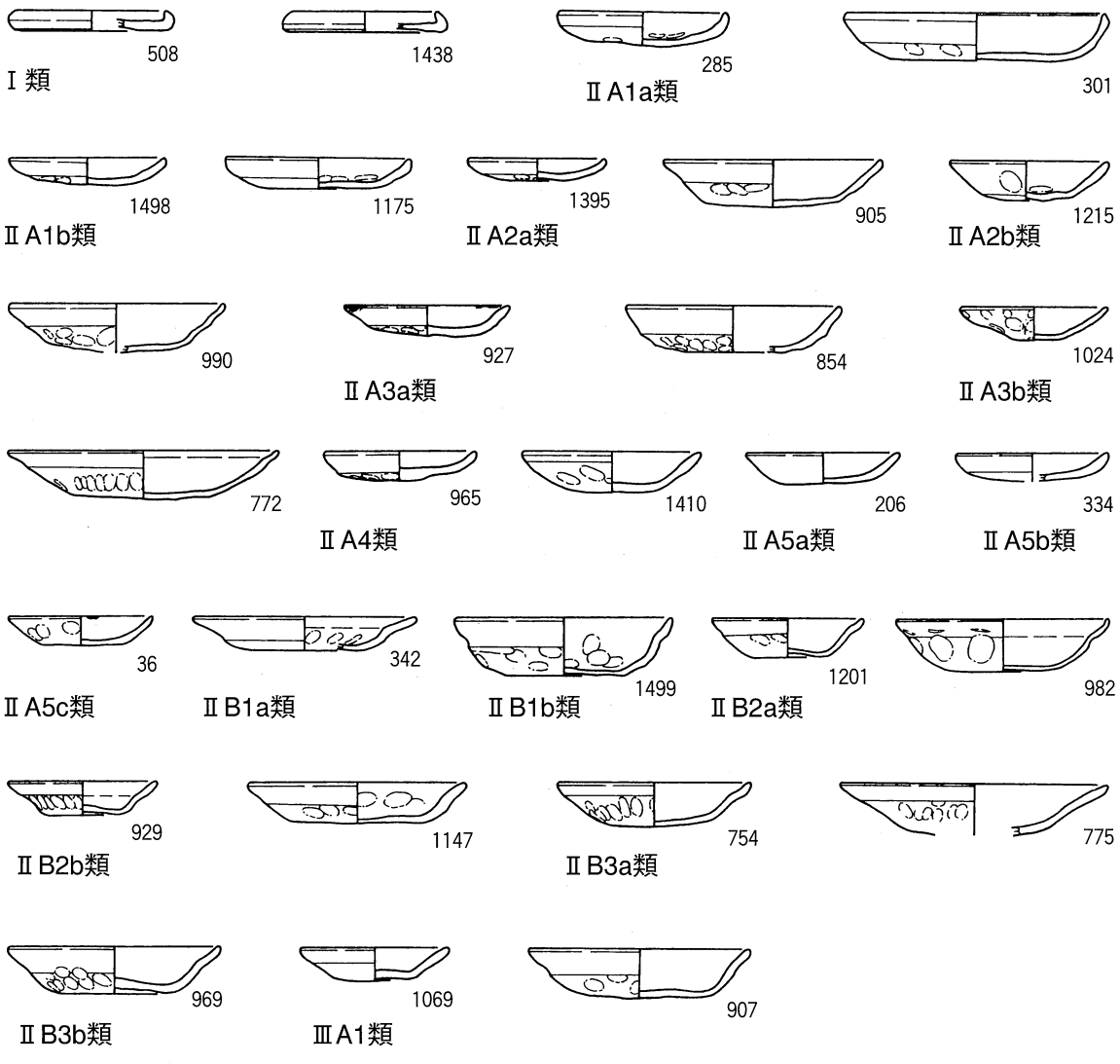
非轆轤土師器	Ⅲ	A	1		519・522・604・832・833・907・913・914・917・1066・1069・1116・1176・1392・1396・1446・1472・1473・1500	12世紀後半～13世紀前半 14世紀後半～15世紀前半
			2		520・521・527・973・984・1117・1207・1212・1219・1255・1260・1263・1264・1293・1294・1297・1298・1299・1301・1406・1510・1512	17世紀中葉～18世紀前半
		B	1		741・750・752・856・926・932・933・934・1140・1143・1145・1378・1456・1457・1459・1542・1586・1873	
			2	a	738・739・745・748・749・755・770・773・777・928・1022・1027・1029・1306・1310・1673	18世紀後半以降以降
				b	118・743・764・765・774・776・778・780・781・1311・1676	
		C	1		1005・1272・1341・1352・1354・1356・1364・1555・1557・1562・1563・1564	12世紀中頃～13世紀中頃
			2		385・390・393・944・968・1003・1007・1010・1348	12世紀中頃～13世紀中頃
		D	1		214	13世紀後半
			2		434	14世紀前半
	Ⅳ	A	1		299	12世紀中頃～13世紀中頃
			2		292・1172	14世紀後半
		B	1		297・523・834・835・912・1068・1071・1072・1073・1074・1076・1077・1114・1123・1124・1125・1469・1470	15世紀前半
			2		282・300・511・525・530・601・971・974・975・976・979・980・986・987・1122・1199・1210・1213・1216・1218・1220・1253・1254・1261・1295・1296・1300・1502・1513・1514・1589	15世紀後半
		C	1		477・736・742・753・756・758・851・852・853・855・857・930・1107・1460・1461・1674・1675・1677・1872	15世紀末葉～16世紀前葉
			2	a	740・744・747・759・761・763・782・783・784・1025・1028・1307・1309	16世紀中葉～後半
				b	757・760・762・766・767・768・769・771	16世紀末葉～17世紀前葉
		D	1		962・964・1004・1006・1271・1350・1351・1353・1355・1357・1358・1556・1558・1559・1560・1561	17世紀中葉～後半 13世紀後半
			2		959・960・961・966・967・1273・1275・1276・1361	14世紀前半
	Ⅴ	A	1		903・911	
			2		1165・1506・1507	14世紀後半
		B	1		843・844・922・1454	
			2		1359・1360	15世紀前半
	Ⅵ	A			836・989	15世紀後半
		B			931	15世紀末葉～16世紀前葉

第５表　　土師器皿分類表 (2)

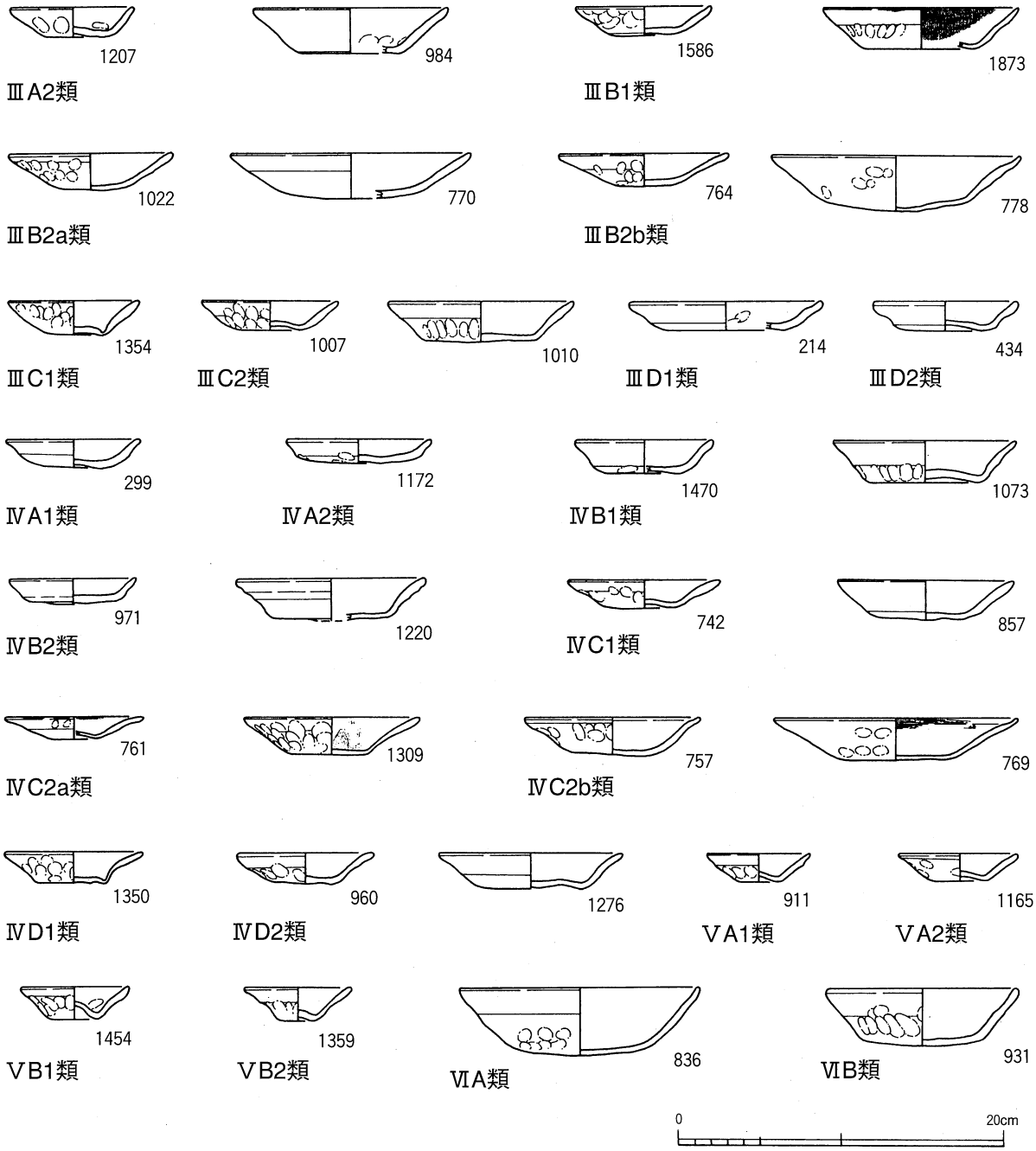
轆轤 土師器



非轆轤 土師器



第 3 図　土師器皿分類表 (1)



第4図　土師器皿分類表　(2)

(2) 瓦器・瓦質土器

瓦器･瓦質土器の器種には皿･椀･火舎がある。

① 皿

皿には底部および体部の形態から、平底で器壁は比較的薄く、底部と体部の界が明瞭なもの（Ⅰ類　384･403)、やや丸味を帯びた平底を呈し、体部は緩やかに斜め上方に延びるもの（Ⅱ類　537･652･663･1317･1441)、やや大型で器高が高く、底部と体部の界が不明瞭なもの(Ⅲ類　1376)、小型で器高が高く、体部は直線的に斜め上方に延びるもの(Ⅳ類　386)などがある。Ⅱ類の内面にはミガキ調整が施されるが、不定方向のもの(537･652)、平行ミガキのものなどがある。

② 椀

椀はいずれも和泉型瓦器椀の範疇で捉えうるもので、器高、高台の形態、調整技法などから、体部内面に粗いヘラミガキ調整を施し、断面三角形状の高台をもつ尾上分類Ⅱ－3期相当のもの(397)、体部内面に平行ミガキ、底部内面に格子目状ミガキを施し、断面三角形状の高台をもつⅢ－1期相当のもの(661・662)、体部内面に平行ミガキを施し、断面三角形状の高台をもつⅢ－2期相当のもの(536・665・666)、体部内面に粗い平行ミガキを施し、断面三角形状の低い高台をもつⅢ－3期相当のもの(243)、体部内面に平行ミガキを施し、断面三角形状の低い高台をもつⅣ－1期相当のもの(534・664)、断面半円形の退化した高台をもつⅣ－3期相当のもの(1078・1429)、高台がほぼ消滅するⅣ－4期相当のもの(1059・1063・1079・1162・1180・1181・1182・1468)、高台が消滅し、体部が丸底に近くなるⅣ－5期相当のもの(1432・1466)に分類できる。また、398はⅡ期相当、244・245・399・401・402・442・535・859・860はⅢ期相当、481・533はⅣ期相当のものと考えられる。また、年代的にはⅡ－3期が12世紀前半に、Ⅲ－1期が12世紀後半に、Ⅲ－2期が12世紀後半～13世紀前半に、Ⅲ－3期が13世紀前半に、Ⅳ－1期が13世紀中頃に、Ⅳ－3期が13世紀後半～14世紀初頭に、Ⅳ－4期が14世紀前半に、Ⅳ－5期が14世紀中頃にそれぞれ比定されている。

③ 火舎

火舎には14世紀前半に大和国で成立し、広域の流通圏をもつ奈良火鉢および近世のものがある。

奈良火鉢については、立石分類に従って記述する。995・1127・1447は口縁部を八角形の花形に成形し、体部に印花で菊花文を施す浅鉢Ⅰである。305・1628は体部は僅かに内彎し、体部外面に印花で菊花文を施文する浅鉢Ⅲである。246・1268は体部は内彎し、口縁部外面に2条の凸帯を貼り付ける浅鉢Ⅳである。浅鉢Ⅰは13世紀後半～14世紀前半、浅鉢Ⅲは14世紀中頃、浅鉢Ⅳは15世紀前半にそれぞれ比定されている。

この他、火舎には平底で体部は内彎気味に直上に延びるもの(67)、体部は直線的にほぼ直上に延び、側縁部は外反し、体部外面に型押しによる魚々子文、菊花文を施文する鋳造の鉄製火舎を模倣したもの(1698)、同じく鉄製の火舎を模倣し、体部外面に獅子頭状の把手を貼り付けるもの(1721)などがあり、共伴遺物から、67は18世紀前半代、1698・1721は18世紀後半代の時期がそれぞれ考えられる。

④ 風炉

風炉には、体部外面に型押しで幾何学文・剣頭文を施文する立石分類の風炉Ⅱに類似するもの(799)と、高い高台状の脚部をもち、脚部に透かしをもつもの(1755)とがある。799は15世紀前半代に比定され、1755は共伴遺物から18世紀後半～19世紀前半の時期が考えられる。

(3) 土製煮炊具

鍋・釜等の土製煮炊具については、今回報告する資料に関する分類・編年案が既に提示されている(岡田・長谷川2003)。本報告では、提示案に該当する部分については、それに準拠して報告する。

土製煮炊具は、その形態的特徴からみて、金属製品の鍋及び羽釜を各々摸倣した形態を持つ「鍋形」タイプ・「羽釜形」タイプのほか、古代以来の甕形土器から変化して成立したと考えられる「甕形」タイプのものがある。金属製品を摸倣したと考えられる形態を持つ鍋形タイプ及び羽釜形タイプの2タイプのうち、鍋形タイプには、「鉄鍋形」と「鉄かぶと形」とがあり、鉄鍋形には土師器と瓦質土器とがあるが、鉄かぶと形は土師器のみである。なお、鉄鍋形は、口縁部が体部から水平気味に外反し、屈曲して口縁部上端が直立気味に立ち上がる形態のいわゆる「L」字状口縁を持つ、五十川分類鍋A類(五十川1997)を模倣したと考えられるものである。また、鉄かぶと形は、鉄かぶとを伏せたような形態を呈し、成形に須恵器の成形技法の伝統を引くタタキ技法を用い、そのタタキ痕を器面に残すものである。

一方、羽釜形タイプには、直線的な体部に短い口縁部を持つ鉄製羽釜を祖形とする羽釜形:「A系列」と球形の体部に比較的長い口縁部を持つ鉄製羽釜を祖形とする羽釜形:「B系列」、羽釜形:B系列から派生・発生したと考えられる「播磨型」の3種類がある。羽釜形:A系列は瓦質土器のみであるが、羽釜形:B系列には土師器・瓦質土器の両者が存在し、成形に須恵器の成形技法の伝統を引くタタキ技法を用いる播磨型は土師器のみである。なお、この播磨型は、姫路市を中心とする播磨地域から15世紀後半代以降に和泉北部地域に移出したと考えられている一群のもので(十河 1996)、江戸時代以降に盛行する焙烙の祖形になるものである。

また、甕形タイプは、古代以来の甕形土器から変遷の追えるもので、球形の体部に「く」の字状に屈折する口縁部を持ち、鉄かぶと形や播磨型と同様、成形に須恵器の成形技法であるタタキを取り入れて成立したものである。なお、この甕形タイプは、東播磨地域から丹波地域を主な分布範囲とする、いわゆる「播丹型」と呼称されるものである。

① 鍋形タイプの土製煮炊具

ア 鍋形タイプ:鉄鍋形の土製煮炊具

鉄鍋形の土製煮炊具には、やや丸味を持った体部に内湾気味に外反する口縁部を持つもの(Ⅰ類)とほぼ直線的に直立して立ち上がる体部にいわゆる「L」字状の口縁部を持つもの(Ⅱ類)、外傾気味に立ち上がる体部に退化した「L」字状口縁を持つもの(Ⅲ類)とがある。これらの鉄鍋形の土製煮炊具は、いずれも体部外面に指オサエ痕が観察され、鉄鋳造技術による鉄鍋の摸倣品と考えるよりは、鍛造技術による鉄鍋の摸倣品と想定するほうが妥当と考えられる一群である。

Ⅰ類(1224・1225)は、土師器のみで瓦質土器は確認されていないが、体部内外面刷毛目調整の後、体部外面は指オサエが施されており、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。

Ⅱ類(1222・1380)は、瓦質土器のみで土師器は確認されていないが、体部内面のヘラナデ調整、体部外面の指オサエの後、口縁部内外面はヨコナデ調整されている。

Ⅲ類には、底部と体部との境界に明瞭な稜線を持つもの(ⅢA類)と底部と体部との境界の稜線が鈍くなるもの(ⅢB類)、底部と体部との境界の稜線が消滅し内湾する底部・体部を持つもの(ⅢC類)とがある。

ⅢA類は、口縁部端部が鋭角で、土師器・瓦質土器の両者が確認されている。土師器(303・1061)は、タタキ成形により成形され、底部～体部の内面は刷毛目調整・ヘラナデ調整、底部外面はヘラケズリの後ナデ調整され、さらに体部外面は指オサエが施され、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。一方、瓦質土器(993・1058・1428)は、底部～体部の内面はナデ調整・ヘラナデ調整・刷毛目調整され、底部～体部の外面は刷毛目調整の後、底部外面のナデ調整及び体部外面の指オサエとなり、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。

ⅢB類は、ややあまい口縁端部を持ち、土師器・瓦質土器の両者が確認されている。土師器(302)は、タタキ成形により成形され、底部～体部の内面はナデ調整、底部外面はナデ調整され、さらに体部外面は指オサエが施され、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。一方、瓦質土器(532・1101)は、底部～体部の内面はナデ調整・刷毛目調整、底部外面はナデ調整され、さらに体部外面は指オサエが施され、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。

ⅢC類(994・1150・1407・1408)は、口縁部の横方への張り出しが弱くなり、瓦質土器のみで土師器は確認されていない。底部～体部の内面はナデ調整、底部外面はヘラケズリの後ナデ調整され、さらに体部外面は指オサエが施され、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。

これら鍋形タイプ:鉄鍋形の土製煮炊具は、Ⅰ類が13世紀前半代、Ⅱ類が13世紀後半代、ⅢA類が14世紀前

半、ⅢB類が14世紀中頃を中心とする時期、ⅢC類が14世紀後半に各々比定されている。

イ　鍋形タイプ：鉄かぶと形の土製煮炊具

鉄かぶと形の土製煮炊具には、口縁部が内側に肥厚するもの(Ⅰ類)とほとんど口縁部が肥厚しないもの(Ⅱ類)、口縁部が外側に肥厚するもの(Ⅲ類)とがある。これらの鉄かぶと形の土製煮炊具は、いずれもタタキ成形により成形され、器面にタタキ痕を残す土師器で、鉄鍋形の土製煮炊具で認められた鍛造金属製品の摸倣から脱却し、独自の鍋形タイプを指向したものと理解できる。

Ⅰ類には、口縁部形状が断面三角形状のもの(156・793)や断面の三角形が丸味を持つもの(794・795)などがある。成形・整形・調整技法は、タタキ成形の後、内面に刷毛目調整を施し、その後ナデ調整により刷毛目痕を消すものも認められ、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。

Ⅱ類には、口縁部端部が丸味を持つもの(796・797)や角張るもの(119・121)などがある。成形・整形・調整技法は、タタキ成形の後、内面をナデ調整し、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。

Ⅲ類(120)は、口縁部を強くヨコナデ調整し凹ませるものであるが、他遺跡での出土事例では外側に口縁部を肥厚させるのみの例も存在する。成形・整形・調整技法は、Ⅱ類と同様で、タタキ成形の後、内面をナデ調整し、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。

これら鍋形タイプ:鉄かぶと形の土製煮炊具は、Ⅰ類が15世紀前半、Ⅱ類が15世紀中頃を中心とする時期、Ⅲ類が15世紀後半～16世紀初頭に各々比定されている。

②　羽釜形タイプの土製煮炊具

ア　羽釜形タイプ:A系列の土製煮炊具

直線的な体部に短い口縁部を持つ鉄製羽釜を祖形とするA系列の土製煮炊具には、ほぼ直線的に直立して立ち上がる体部に短い口縁部を持つもの(Ⅰ類)と外傾気味に立ち上がる体部にやや短い口縁部を持つもの(Ⅱ類)とがある。これらの羽釜形タイプ:A系列の土製煮炊具は、瓦質土器のみで土師器は確認されていないが、鍋形タイプ:鉄鍋形の土製煮炊具と同様、いずれも体部外面に指オサエ痕が観察され、鉄鋳造技術による鉄鍋の摸倣品と考えるよりは、鍛造技術による鉄鍋の摸倣品と想定するほうが妥当と考えられる一群である。

Ⅰ類(1223・1497)は、口縁部が体部からそのまま直線的にのび、鍔部は短く方形を呈する。成形・整形・調整技法は、体部内面はナデ調整、体部外面はヘラケズリの後指オサエが施され、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。

Ⅱ類には、底部と直線的にのびる体部との境界に明瞭な稜線を持ち口縁部が外傾するもの(ⅡA類)と底部と直線気味にのびる体部との境界の稜線が鈍くなると想定され、口縁部が直立するもの(ⅡB類)、底部と内湾する体部との境界の稜線が消滅し内湾する底部・体部を持つと想定され、口縁部が内傾するもの(ⅡC類)とがある。

ⅡA類(837)は、断面三角形の鍔部を持ち、成形・整形・調整技法は、底部～体部の内面は刷毛目調整の後ナデ調整され、底部～体部の外面は刷毛目調整の後、底部外面のナデ調整及び体部外面の指オサエとなり、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。ⅡB類(606・1474・1503)は、断面長方形の鍔部を持ち、成形・整形・調整技法は、体部内面は刷毛目調整の後ナデ調整され、体部外面はナデ調整の後指オサエとなり、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。ⅡC類(1476)は、断面長方形の鍔部を持ち、成形・整形・調整技法は、体部内面は刷毛目調整の後ナデ調整され、体部外面には指オサエが施され、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。

これら羽釜形タイプ:A系列の土製煮炊具は、Ⅰ類が13世紀後半代、ⅡA類が14世紀前半、ⅡB類が14世紀中頃を中心とする時期、ⅡC類が14世紀後半に各々比定されている。

イ　羽釜形タイプ：Ｂ系列の土製煮炊具

球形の体部に比較的長い口縁部を持つ鉄製羽釜を祖形とするＢ系列の土製煮炊具には、球形を呈する底部・体部に内湾・内傾する口縁部を持つもの（Ⅰ類）と内湾気味の体部に内湾・内傾気味の口縁部を持つもの（Ⅱ類）、内湾気味の体部に内湾・直立気味の口縁部を持つもの（Ⅲ類）とがある。なお、Ⅱ類・Ⅲ類の口縁部には、数条の条線が施されており、忠実に金属製品を摸倣しようとする意図が見られる。これらの羽釜形タイプ：Ｂ系列の土製煮炊具は、鍋形タイプ：鉄鍋形や羽釜形タイプ：Ａ系列の土製煮炊具とは異なり、いずれも体部外面の指オサエ痕は認められず、土師器では体部の最終調整は刷毛目調整が一般的であり、瓦質土器ではヘラケズリ整形のままであることが一般的であり、鉄鋳造技術による鉄鍋の摸倣品と想定できる一群である。

Ⅰ類（713～717）は、ほぼ横方に水平に長くのびる断面長方形の鍔部を持ち、土師器のみで瓦質土器は確認されていない。成形・整形・調整技法は、成形時の指オサエ痕が確認でき、成形後に内外面は刷毛目調整され、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。なお、Ⅰ類には、端部が丸く収まる鍔部を持つ一群（713・717）があり、Ⅰ類中ではより古相の様相を示す。

Ⅱ類には、断面方形の短い鍔部がやや上方に向いて付くもの（ⅡＡ類）と端部が鋭角な短い鍔部がやや内反気味にやや上方に向いて付くもの（ⅡＢ類）、端部が鋭角な短い鍔部がほぼ水平に外方にのびるもの（ⅡＣ類）とがある。特に、ⅡＢ類・ⅡＣ類は、鍔部が鋭角な端部を持つことから、金属製品の摸倣度の高い一群と言えよう。ⅡＡ類（1126・1179・1221）は、瓦質土器のみで土師器は確認されていない。成形・整形・調整技法は、内面の刷毛目調整の後底部内面はナデ調整が施され、底部～体部の外面は成形時の指オサエ痕を消すようにナデ調整され、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。なお、ミニチュア土器には、土師器（1244）及び瓦質土器（1481）がある。

ⅡＢ類（125・789・791）は、瓦質土器のみで土師器は確認されていなが、内面は刷毛目調整の後体部下半はヘラナデ調整され、体部外面はヘラケズリ整形で、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。また、ⅡＣ類（122・124・211・786・787・887・1587・1789）は、瓦質土器のみで土師器は確認されていなが、内面は刷毛目調整の後底部～体部下半はヘラナデ調整され、底部～体部の外面はヘラケズリ整形で、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。

Ⅲ類には、ほぼ水平にのびる短い鍔部の端部が丸く収まるもの（ⅢＡ類）と鍔部が二等辺三角形を呈するもの（ⅢＢ類）とがある。

ⅢＡ類（123・788・790・792）は、瓦質土器のみで土師器は確認されていないが、内面は刷毛目調整の後体部下半はヘラナデ調整・ナデ調整で、体部外面はヘラケズリされ、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。ⅢＢ類（726）は、瓦質土器のみで土師器は確認されていなが、体部内面は刷毛目調整の後下半はヘラナデ調整され、体部外面はヘラケズリ整形で、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。

これら羽釜形タイプ：Ｂ系列の土製煮炊具は、Ⅰ類が14世紀前半代、ⅡＡ類が14世紀後半代、ⅡＢ類が15世紀前半、ⅡＣ類が15世紀中頃を中心とする時期、ⅢＡ類が15世紀後半～16世紀初頭、ⅢＢ類が16世紀中葉～後半に各々比定されている。なお、Ⅰ類で古相を示す一群は、13世紀後半代に遡る可能性がある。

ウ　羽釜形タイプ：播磨型の土製煮炊具

播磨型の土製煮炊具には、断面三角形状を呈する貼り付け成形の鍔部を持つもの（Ⅰ類）と鍔部が段状の突帯に退化したもの（Ⅱ類）、突帯が消滅したもの（Ⅲ類）とがある。また、Ⅰ類には、鍔部の内面にヨコナデ調整による凹部がわずかながらも認められるＢ系列と凹部の認められないＡ系列とがあるが、Ⅱ類・Ⅲ類はＢ

系列のみである。

これら播磨型の土製煮炊具は、いずれもタタキ成形により成形された土師器で、羽釜形タイプ：A系列及び羽釜形タイプ：B系列で認められた金属製品の摸倣から脱却し、独自の羽釜形タイプを指向したものと理解できる。特に、播磨型の土製煮炊具の初現形態と同形態をとると想定される羽釜形:B系列のⅡA類と比較すると、形態的には鍔部の内面に凹部の認められないA系列が凹部の認められるB系列に比べ、より初現形態のものの摸倣度が高いと理解できる。

Ⅰ類には、シャープな断面三角形の短い鍔部を持つもの（ⅠA類）と断面三角形の短い鍔部の端部が丸味を持つもの（ⅠB類）、鍔部は断面三角形状を呈するが痕跡程度のもの（ⅠC類）とがあり、B系列の鍔部内面のヨコナデ調整による凹部は、ⅠA類→ⅠB類→ⅠC類の順で顕著になる。

ⅠA類は、貼り付け成形による鍔部で、タタキ成形の後、内面をナデ調整・ヘラナデ調整し、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。なお、B系列（1552・1874）は、口縁部内外面のヨコナデ調整により鍔部の内面にわずかながらも凹部を作り出すが、A系列（136・220・1528）では凹部は認められない。また、ⅠB類は、鍔部の成形はⅠA類同様貼り付け成形によるが、端部が丸味を持つ。成形・整形・調整技法は、タタキ成形の後、内面に刷毛目調整・ヘラナデ調整を施し、調整の最終段階で口縁部内外面をヨコナデ調整する。なお、B系列（1525）は、口縁部内外面のヨコナデ調整により鍔部の内面に若干凹部を作り出すが、A系列（241・404・1526）では、ⅠA類同様凹部は認められない。一方、ⅠC類は、鍔部が断面三角形状を呈するものの、鍔部は痕跡的に認められる程度であるが、なお、鍔部は貼り付け成形されている。成形・整形・調整技法は、タタキ成形の後、内面はヘラナデ調整の後底部～体部下半をナデ調整し、底部外面はヘラケズリ及びナデ調整により成形時のタタキ痕を消し、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。なお、A系列（242・405・406・444・1527・1529・1530)では、ⅠA類・ⅠB類と同様鍔部内面のヨコナデ調整による凹部は認められないものの、B系列（693）では、鍔部内面にヨコナデ調整による明瞭な凹部が形成される。

Ⅱ類（1411～1413）は、段状の突帯に退化した鍔部がヨコナデ調整によって作り出されるもので、タタキ成形の後、内面をナデ調整し、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。なお、段状の突帯を成形する口縁部内外面のヨコナデ調整時に、段部内面の凹部が形成され、Ⅲ類のいわゆる「焙烙形」の土製煮炊具の祖形と考えられるものである。

Ⅲ類は、煮炊具の範疇で把握できるものではあるが、Ⅱ類で見られた段状の突帯は消滅し、形態的にはいわゆる「焙烙」の初現形態と理解できるものである。成形・整形・調整技法は、タタキ成形の後、内面をナデ調整し、底部外面はナデ調整により成形時のタタキ痕を消し、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。なお、タタキ痕には、平行タタキ痕のもの（335・558・650・1343）と格子状タタキ痕のもの（140～143・212・560・660・1864）とがある。

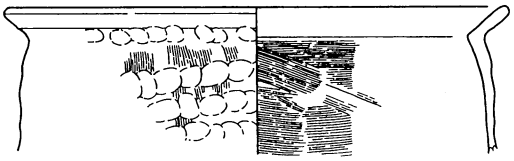
これら羽釜形タイプ：播磨型の土製煮炊具は、ⅠA類が15世紀前半、ⅠB類が15世紀中頃を中心とする時期、ⅠC類が15世紀後半～16世紀初頭、Ⅱ類が16世紀中葉～後半、Ⅲ類が16世紀末葉～17世紀前葉に各々比定されている。

なお、この他、Ⅲ類から系譜のたどれるいわゆる「焙烙形」の形態を呈するもの（Ⅳ類）がある。Ⅳ類は、体部の形状から、深手のもの（ⅣA類）、やや浅いもの（ⅣB類）、扁平なもの（ⅣC類）、扁平で体部と底部の界が垂直を呈するもの（ⅣD類）の4種に分類できる。また、ⅣA類には、成形時のタタキ痕の認められるもの（379・443・480・565・630）と認められないもの（1・65・66・100～102・584・651・879・1570・1690）とがあり、前者がより古相の様相を示す。

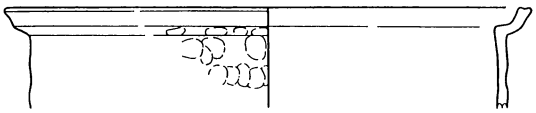
<table>
<tr><th></th><th colspan="2">鉄形タイプ</th><th colspan="5">羽 釜 形 タ イ プ</th><th colspan="2">甕形タイプ</th></tr>
<tr><td>Ⅱ期</td><td rowspan="9">鉄鍋形</td><td>Ⅰ類：
1224・1225</td><td colspan="5"></td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td></td><td>Ⅱ類：
1222・1380</td><td rowspan="4">羽釜形A系列</td><td colspan="3">Ⅰ類：
1223・1497</td><td rowspan="4">播丹型</td><td>Ⅰ類：
1151・1226
1437・1439
1496・1625
1627</td></tr>
<tr><td>Ⅲ期</td><td>ⅢA類：
303・993・1058
1061・1428</td><td>ⅡA類：
837</td><td rowspan="3">羽釜型B系列</td><td>Ⅰ類：
713・714
715・716
717</td><td>Ⅱ類：
888・1138
1229・1462
1475・1626</td></tr>
<tr><td>Ⅳ期</td><td>ⅢB類：
302・532・1101</td><td>ⅡB類：
606・1474・1503</td><td>ⅡA類：
1126・1179
1221・1244
1481</td><td>Ⅲ類：
1227・1230
1592</td></tr>
<tr><td></td><td>ⅢC類：
994・1150・1407
1408</td><td>ⅡC類：
1476</td></tr>
<tr><td>Ⅴ期</td><td>鉄かぶと形</td><td>Ⅰ類：
156・793
794・795</td><td rowspan="4">播磨型B系列</td><td>ⅠA類：
1552・1874</td><td rowspan="3">播磨型A系列</td><td>ⅠA類：
136・220・1528</td><td>ⅡB類：
125・789・791</td><td>Ⅳ類：
1152・1381
1414・1424
1425</td></tr>
<tr><td>Ⅵ期</td><td>Ⅱ類：
119・121
796・797</td><td>ⅠB類：
1525</td><td>ⅠB類：
241・404
1526</td><td>ⅡC類：
122・124
211・786
787・887
1587・1789</td><td>Ⅴ類：
798・889
945・946
970・1011
1012・1228
1250・1464
1580・1590
1591</td></tr>
<tr><td></td><td>Ⅲ類：
120</td><td>ⅠC類：
693</td><td>ⅠC類：
242・405
406・444
1527・1529・1530</td><td>ⅢA類：
123・788
790・792</td></tr>
<tr><td>Ⅶ期</td><td></td><td></td><td>Ⅱ類：
1411・1412
1413</td><td colspan="2"></td><td>ⅢB類：
726</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>Ⅷ期</td><td></td><td></td><td colspan="5">Ⅲ類：
140・141・142・143・212・335・558・560・650・660・1343・1864</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>Ⅸ期</td><td rowspan="4"></td><td></td><td rowspan="4">焙烙形</td><td colspan="5">ⅣA類：
1・65・66・100・101・102・379・443・480・565・584
630・651・879・1570・1690</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>Ⅹ期</td><td></td><td colspan="5">ⅣB類：
2・131・239・649・1418・1772・1889</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>Ⅺ期</td><td></td><td colspan="5">ⅣC類：
103・1571・1717・1718</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>Ⅻ期</td><td></td><td colspan="5">ⅣD類：
1719・1773・1890</td><td colspan="2"></td></tr>
</table>

第6表　土製煮炊具分類表

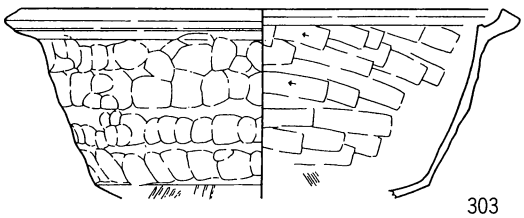
鍋形タイプ：鉄鍋形



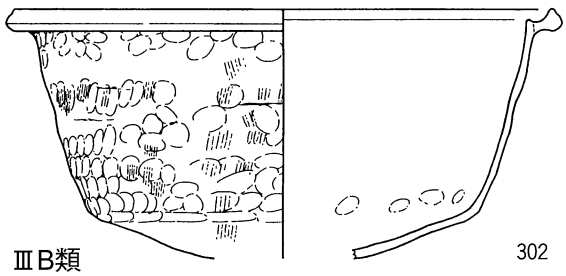
Ⅰ類　1225



Ⅱ類　1222

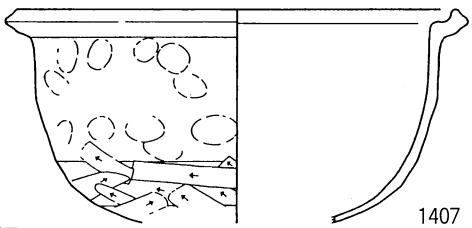


ⅢA類　303

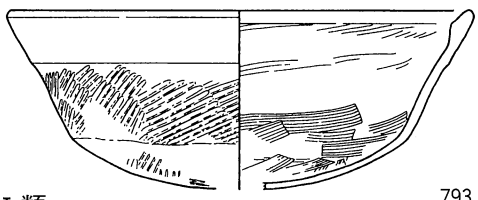


ⅢB類　302

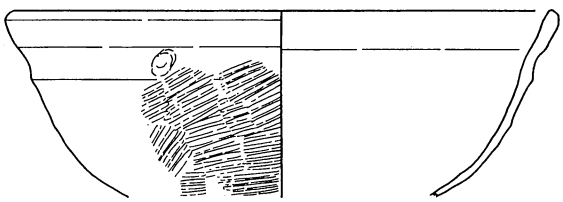
鍋形タイプ：鉄かぶと形



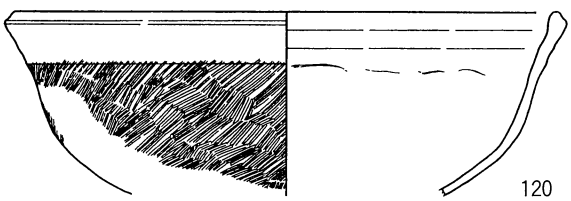
ⅢC類　1407



Ⅰ類　793

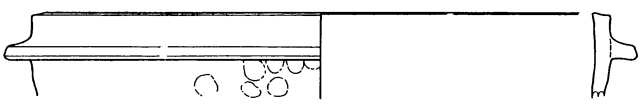


Ⅱ類　121

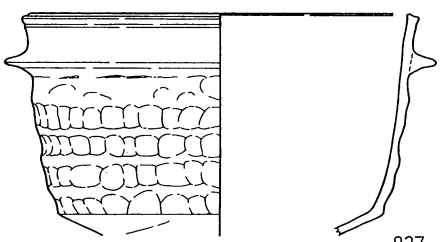


Ⅲ類　120

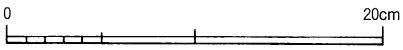
羽釜形タイプ：A系列



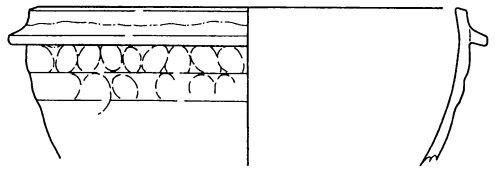
Ⅰ類　1223



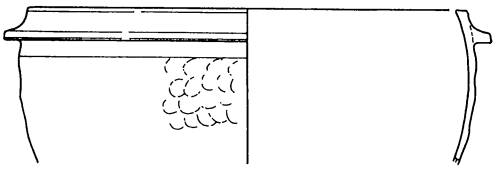
ⅡA類　837



第５図　土製煮炊具分類表　(1)

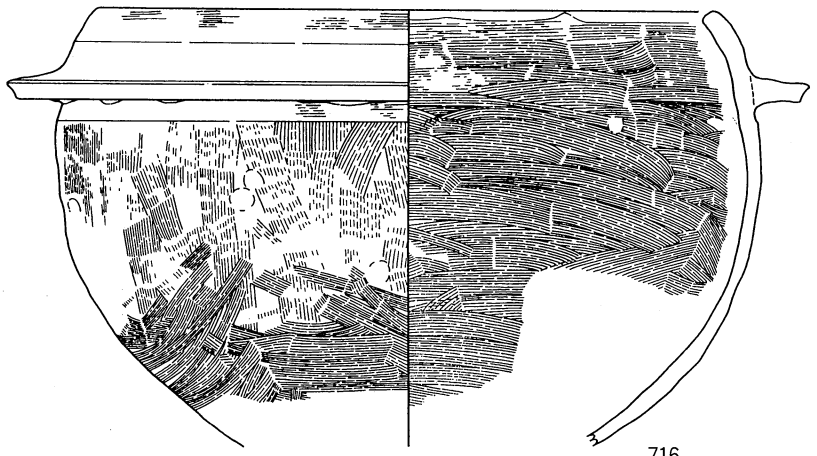


ⅡB類　1474

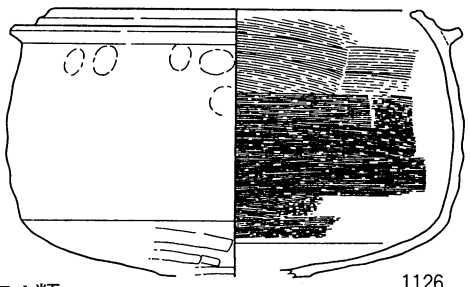


ⅡC類　1476

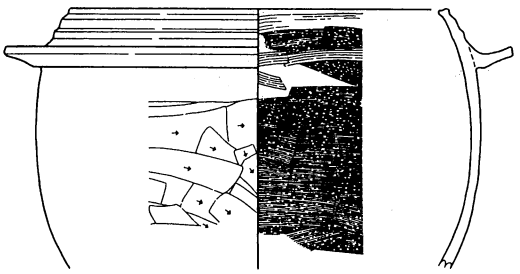
羽釜形タイプ：B系列



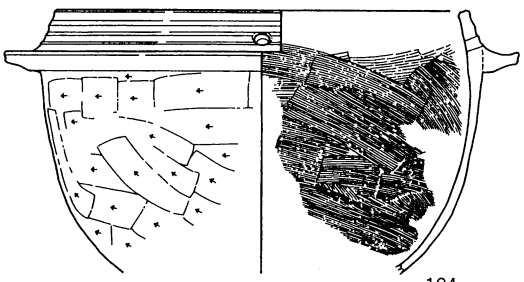
Ⅰ類　716



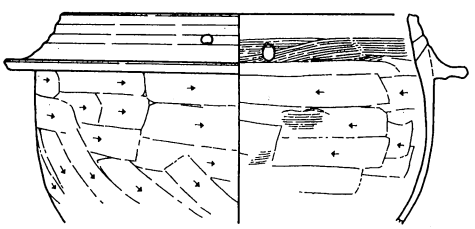
ⅡA類　1126



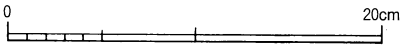
ⅡB類　125



ⅡC類　124

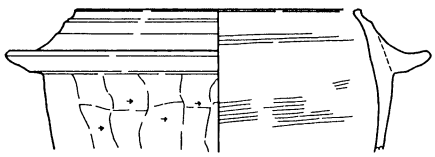


ⅢA類　792

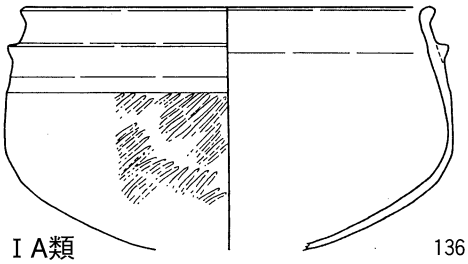


第6図　土製煮炊具分類表　(2)

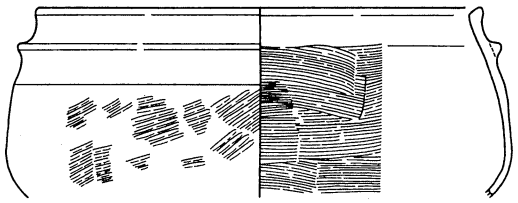
羽釜形タイプ：播磨型A系列



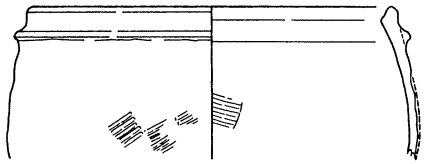
ⅢB類　726



ⅠA類　136

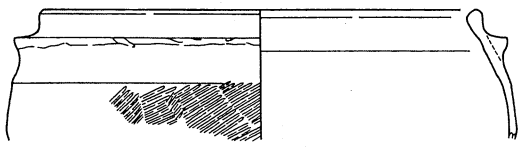


ⅠB類　1525

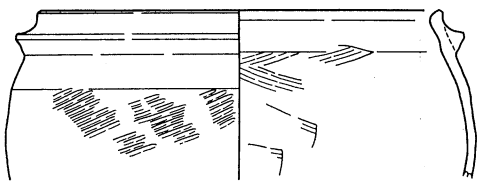


ⅠC類　1530

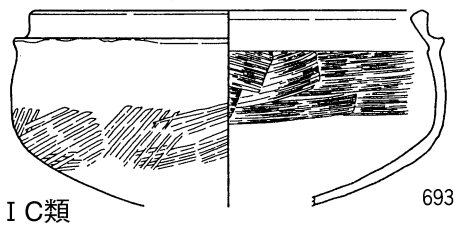
羽釜形タイプ：播磨型B系列



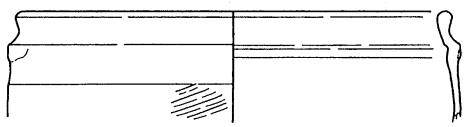
ⅠA類　1552



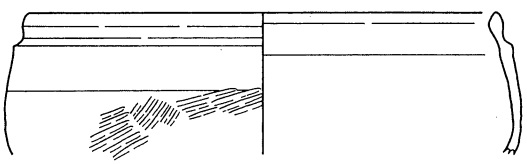
ⅠB類　1526



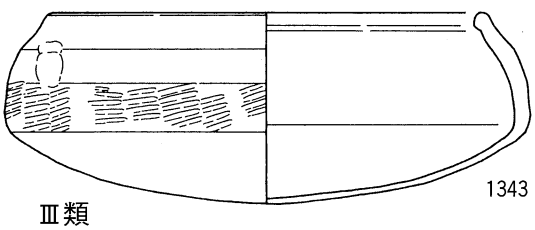
ⅠC類　693



Ⅱ類　1412



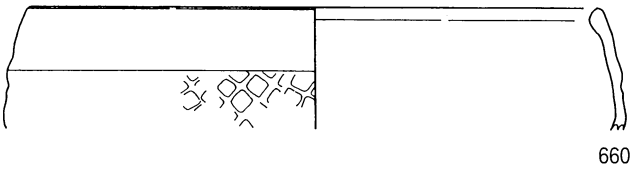
1411

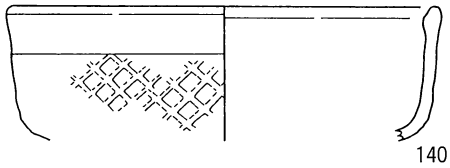


Ⅲ類　1343

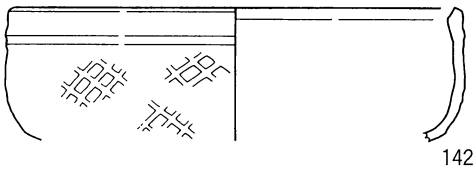
0　20cm

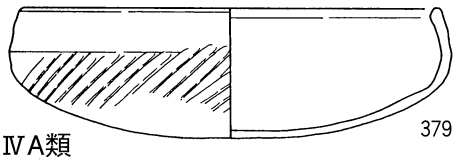
第７図　土製煮炊具分類表　(3)


660

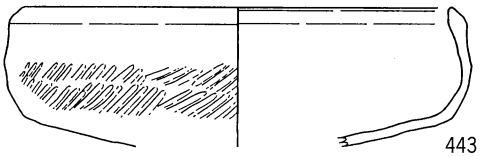

140

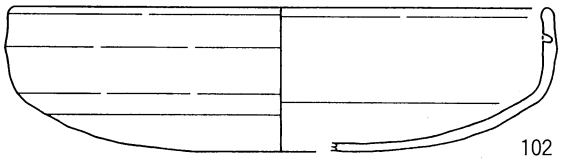
焙烙形

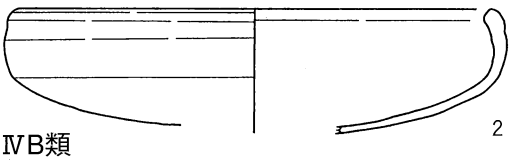

142


379

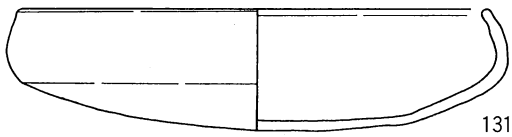
ⅣA類

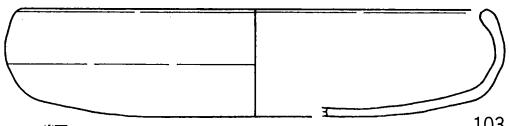

443


102

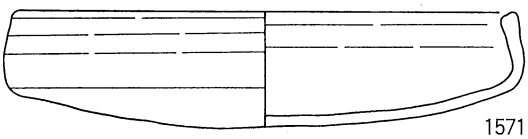

2

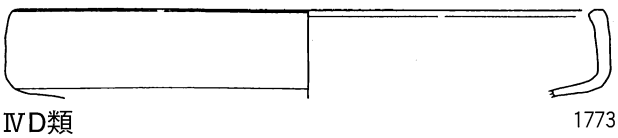
ⅣB類


131

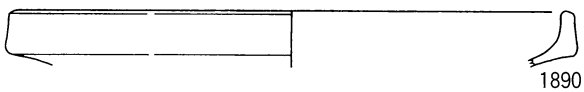

103

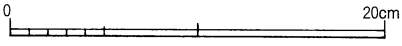
ⅣC類


1571


1773

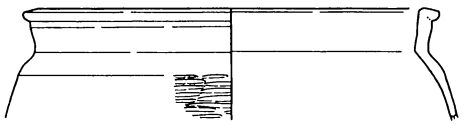
ⅣD類


1890



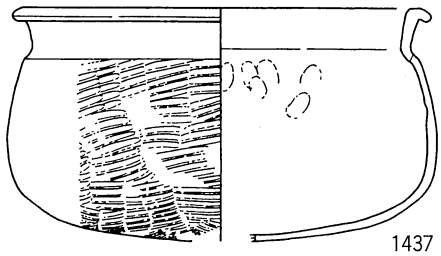
第 8 図　土製煮炊具分類表 (4)

甕形タイプ

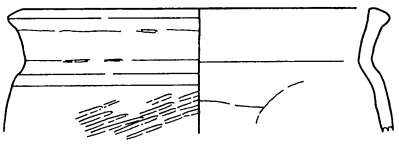


Ⅰ類

1496

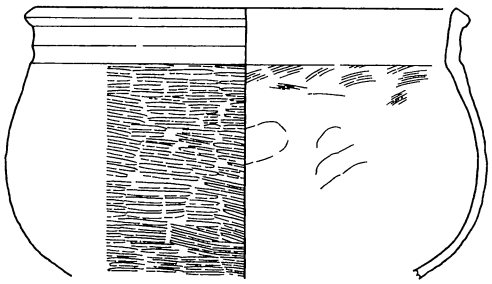


1437

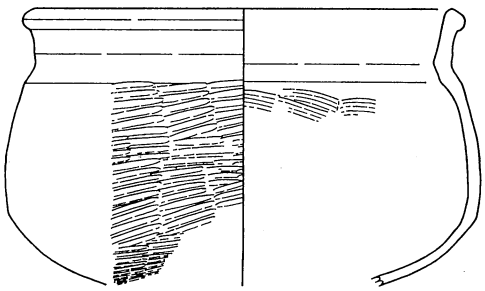


Ⅱ類

1229

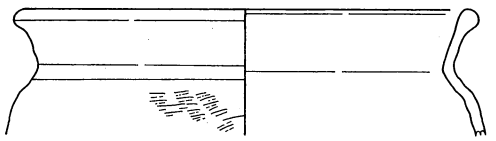


888

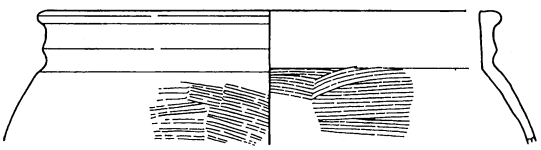


Ⅲ類

1592

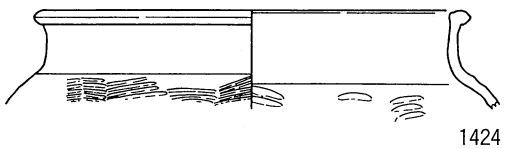


1230

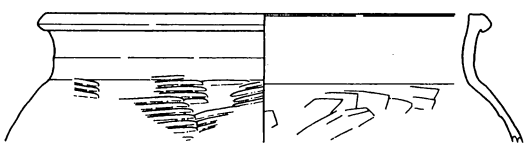


Ⅳ類

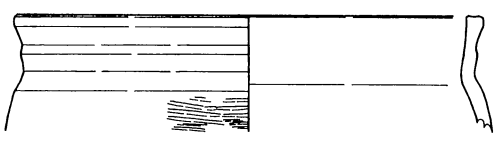
1425



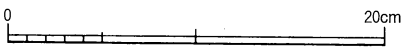
1424



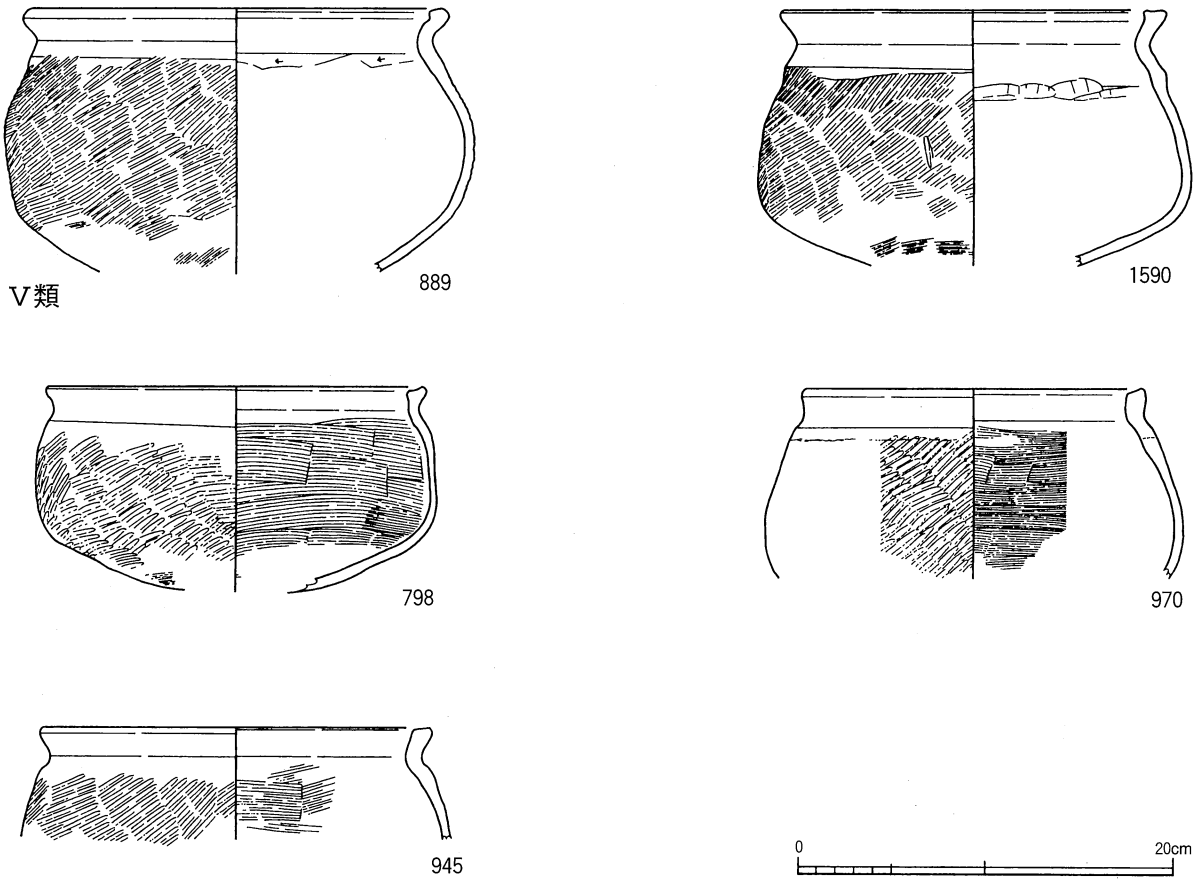
1381



1152



第９図　土製煮炊具分類表　(5)



第10図　土製煮炊具分類表（6）

これらいわゆる「焙烙形」のⅣ類は、ⅣA類が17世紀中葉～後半、ⅣB類（2・131・239・649・1418・1772・1889）が18世紀前半、ⅣC類（103・1571・1717～1718）が18世紀後半、ⅣD類（1719・1773・1890）が19世紀前半以降の所産と各々考えられる。

③　甕形タイプの土製煮炊具

甕形タイプの土製煮炊具には、体部からやや緩やかに外反する口縁端部が外方につまみ出されるもの（Ⅰ類）と、体部から緩やかに外反する口縁端部が断面三角形状につまみ出されるもの（Ⅱ類）、体部から緩やかに外反する口縁端部が玉縁状を呈するもの（Ⅲ類）、口縁部は体部から直立気味に立ち上がり口縁端部が丸く収まるもの（Ⅳ類）、体部から短い口縁部が立ち上がるもの（Ⅴ類）とがある。これらの甕形タイプの土製煮炊具は、いずれもタタキ成形により成形され、タタキ痕を器面に残す土師器で、古代以来の甕形土器の系譜を引く土製煮炊具である。

Ⅰ類（1151・1226・1437・1439・1496・1625・1627）は、口縁部から体部へ緩やかに屈曲し、最大径を体部のほぼ中央に持つもので、タタキ成形の後、内面を刷毛目調整・ヘラナデ調整・ナデ調整し、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。

Ⅱ類（888・1138・1229・1462・1475・1626）は、最大径を体部のほぼ中央に持ち、体部のある一部が大きく張り出すことはないもので、タタキ成形の後、内面は刷毛目調整・ヘラナデ調整の後ナデ調整で、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。

Ⅲ類（1227・1230・1592）は、Ⅱ類と同様に、最大径を体部のほぼ中央に持ち、体部のある一部が大きく張り出すことはないものであるが、Ⅱ類とは口縁部形態に若干の差異が認められる。成形・整形・調整技法は、タタキ成形の後、内面は刷毛目調整・ヘラナデ調整の後ナデ調整で、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナ

デ調整が施される。

Ⅳ類（1152・1381・1414・1424・1425）は、口縁部と体部の境は明瞭でなく寸胴で、タタキ成形の後、内面は刷毛目調整・ヘラナデ調整の後ナデ調整で、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。

Ⅴ類は、体部が扁平な形状を呈するもので、口縁部の形状には、端部を内面に巻き込むことによって丸くしたもの（889・1012・1464）やほぼ水平な口縁端部を持つもの（1228・1250・1580・1590・1591）、内傾する口縁端面を持つもの（798・945・946・970・1011）などがある。成形・整形・調整技法は、タタキ成形の後、内面は刷毛目調整・ヘラナデ調整の後ナデ調整、底部外面はナデ調整により成形時のタタキ痕を消し、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。

これら甕形タイプの土製煮炊具は、Ⅰ類が13世紀後半代、Ⅱ類が14世紀前半代、Ⅲ類が14世紀後半代、Ⅳ類が15世紀前半～中頃、Ⅴ類が15世紀後半～16世紀初頭に各々比定されている。

（4）須恵器

出土した須恵器には捏鉢、甕、碗などがある。

ア　捏鉢

捏鉢は比較的多く出土しているが、良好な個体は少ないため、口縁部の形態によって分類をおこなう。

A類（445）は端部が断面方形のものである。直線的な体部にわずかに外傾気味の口縁部をもつ。包含層よりの出土で、遺構に伴うものではない。12世紀前半のものと考えられる。

B類は端面が外傾するもので、端面は凹み気味のものである。B類はさらに以下の3つに分類する。

B1類（412・1551）は端部の縁が比較的シャープなものである。供伴遺物から年代を明らかにすることはできない。12世紀後半のものと考えられる。

B2類（538・539・608・667・1083・1266・1318・1345・1594・1878）は端部の縁に丸みをもつものである。538・539は包含層出土のものであるものの尾上分類Ⅲ－2・Ⅲ－3期の瓦器碗に伴う可能性が高く、13世紀前半頃のものと考えられる。

B3類（935・1017・1037・1205・1277・1383・1596・1629・1875）はB1類とほぼ同じ形態であるが、端部を大きく拡張するものである。14世紀後半～15世紀前半の遺構から出土することが多い。

C類は端面が丸みを帯びるものである。C類はさらに以下の2つに分類する。

C1類（411・733・890・1163・1183・1184）は端部内面が凹まないものである。13世紀後半～14世紀前半の遺構から出土することが多い。

C2類（410・1315・1382・1865）は端部内面がやや凹むものである。兵庫津遺跡内では明瞭に時期を示す遺構には伴って出土していない。

C3類（861・996・1153・1154・1231・1233・1335・1491・1505・1678・1679・1876）はC1類とほぼ同じ形態であるが、端部を大きく拡張するものである。14世紀後半から15世紀前半にかけての遺構から出土することが多い。

D類（607・638・800・908・947・998・1099・1156・1204・1269・1314・1329・1369・1393・1397・1430・1593・1618・1683）は端部外縁が突出するものである。端部内面が凹むものや端部内縁が上方へ拡張するものなどのバリエーションがある。14世紀前半から15世紀前半にかけての遺構から出土することが多い。

E類は端部外縁を垂下させるものである。E類はさらに以下の2つに分類する。

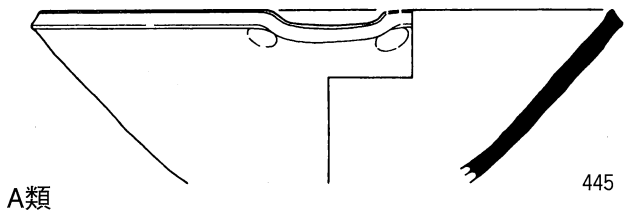
E1類（1232・1270・1367・1368・1384・1488・1501・1595・1597・1623・1682・1892）は端部内縁を上方

へ立ち上げるものである。兵庫津遺跡内では14世紀後半から15世紀前半の遺構から出土することが多い。

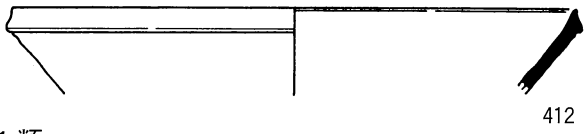
Ｅ２類（891・997・999・1044・1621・1877）は端部内縁を内側へ倒すものである。28区１層下部など15世紀前半の遺構から出土することが多い。

遺構名	B2	B3	C1	C2	C3	D	E1	E2	F	遺構の時期
13・14区（包含層）（暗褐色砂層　第３層）	○									13C前半
14区　SD10（第１層　第２層）	○									13C前半～中頃
26区 SK47			○							13C後半
26区SD01　付近			○							13C後半～14C前半
21区SK04						○				14C前半
29区SE04						○				14C前半
29区 SK116						○				13C後半～14C初頭
29区SE108						○				14C前半
14区 SE23　（枠内埋土）	○					○				14C中頃
22区SK07					○	○	○			14C後半
26区包含層第２層					○		○			14C後半
28区SK03						○	○			14C後半
31区包含層（Ⅱ面直上）					○				○	14C後半
33区 SP04　（Ⅰ面）									○	14C後半
33区SD03	○	○				○	○		○	14C後半～15C前半
26区SD03		○				○			○	14C後半～15C前半
21区整地土層中		○							○	14C後半～15C前半
28区１層下部		○		○			○			15C前半
39区SK11		○			○			○		15C前半
26区SK45					○	○				15C前半
31区SX04					○				○	15C前半～中頃

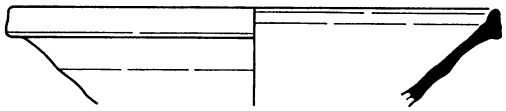
第７表　東播系須恵器捏鉢の型式別出土傾向



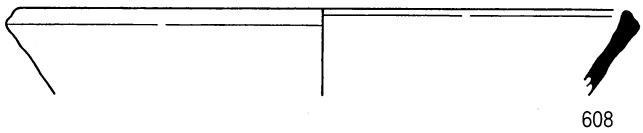
A類

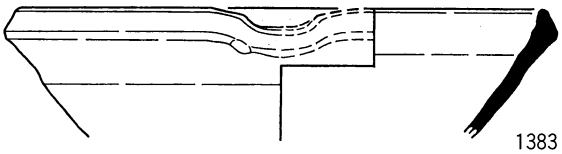


B１類

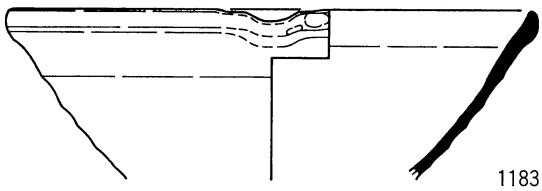


B２類

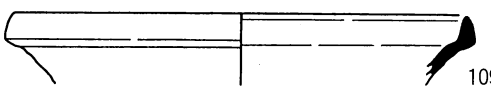




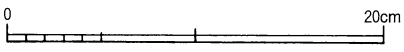
B３類



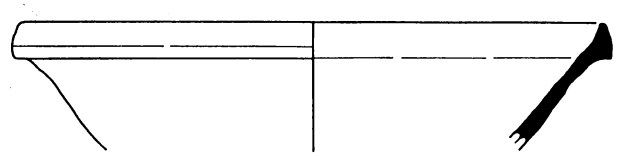
C１類



C２類

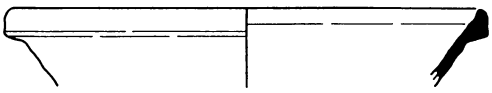


第11図　東播系須恵器鉢分類表　(1)



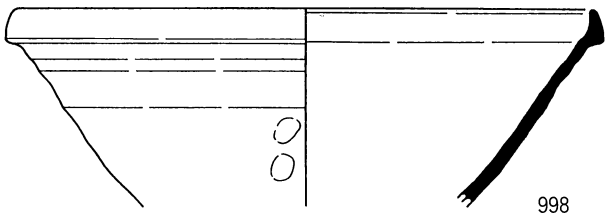
C３類

1335

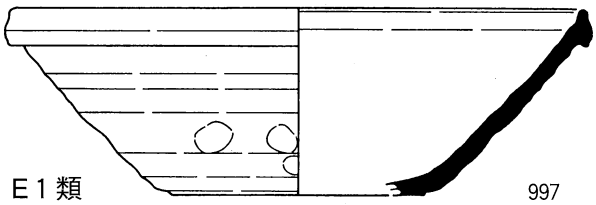


D類

1393

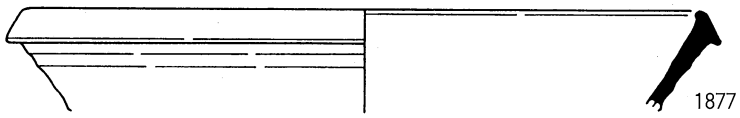


998



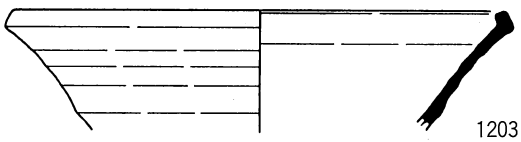
E１類

997



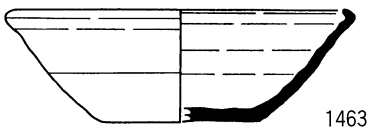
1877

E２類

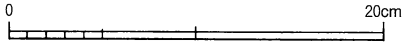


1203

F類



1463



第12図　東播系須恵器鉢分類表　(2)

Ｆ類(923･924･1203･1330･1344･1463･1511･1598)は端部を内側へ折り曲げるように傾けるものである。14世紀後半から15世紀中頃にかけての遺構から出土しているが、15世紀前半にかかるものが多く認められる。鉢の口縁部を兵庫津遺跡内の遺構から出土した各型式の出現時期から見るとB2類、Ｃ１類、Ｃ２類、D類、Ｅ１類、Ｅ２類、Ｆ類と変化したことがうかがわれる。Ｂ３類・Ｃ３類としたものについては14世紀後半～15世紀前半の遺構から出土したものが多く、各Ｂ・Ｃ類の系譜上の関係は不分明であり、口縁部を大きく拡張している点ではＤ類の一部やＥ１類の影響のもとにあるものと考えたい。

イ　甕

体部外面に平行タタキが施されている。口縁部が拡張せずやや丸みのある面をもつもの（668)、口縁端部外縁がやや垂下し、口縁部内面がやや凹む（1185・1186）もの、口縁端部が大きく外反し口縁部内面がやや凹むもの（1187)、口縁部外縁が垂下し、内縁が上方に立ち上がるもの（1599）などがある。

ウ　壺

1486は口縁部が短く外側に折れ曲がり、端部に面をもつ。体部外面には格子タタキが施され、内面には無文の当て具痕を残している。亀山焼と考えられる。

エ　椀

底部付近に丸みを持ち、体部は直線的に開くものである（407～409)。底部まで残存する個体はないが、器高は４cmぐらいの低いものと考えられる。

オ　筒形容器

1880は焼台と考えられる。体部は内外面とも回転ナデである。底部外面は回転糸切りで、底部内外面に指頭圧痕が残っている。底部の器壁は中央に向かって薄くなっており、穴が開いていたと考えられる。魚住窯跡群で出土している焼台と同形態のものである。

（５）陶器

陶器には産地別にみると、備前、丹波、常滑、瀬戸・美濃、肥前系陶器及び産地不明のものがある。ここでは、各産地別に概要及び特徴を述べる。

① 備前

備前焼は、現在の岡山県備前市伊部周辺で生産された焼締陶器である。平安時代末期から鎌倉時代初頭に古代の須恵器生産の技術を踏襲した上で成立し、現在まで生産が続いている。

備前焼の編年ついては、窯址の分布と物原から採集された陶片を検討して、中世～近世初頭の備前焼をⅠ～Ⅴ期に分類した間壁編年（間壁1966ａｂ・1968・1984）と、近年この間壁編年を基礎に、備前焼の中で出土例が多く型式変化が捉えやすい擂鉢と甕を、消費地の資料も積極的に取り入れ、中世を６期、近世を５期に大別した乗岡実氏の研究（乗岡2000・2001）また、窯跡採集資料による型式分類と、消費地出土の資料から推定された廃棄年代を軸とした重根弘和氏の編年作業がある（重根2003)。

兵庫津遺跡の備前焼の分類については、これらの先学の研究に準拠しながら、兵庫津遺跡での分類基準を示し、先学の研究との対照をおこなう。

備前焼の器種としては、甕・擂鉢・鉢・壺・徳利などがある。

ア　甕

甕の分類については、器形全体の形状がわかる個体が少ないため、口縁部の形状によって行う。

Ⅰ類は、頸部は鋭角で口縁部は外反し、口縁端部は水平に伸びる形態である。間壁編年Ⅰ期、乗岡１期、重

根Ⅰ期に相当するが、兵庫津遺跡では該当するものがない。しかし、兵庫県内において、将来的に発見される可能性があること、また、先学の研究との混乱をさけるため、今回はⅠ類を設定しておく。

Ⅱ類は平底で体部下部はやや内弯気味に立ち上がり、体部中位で緩やかに屈曲し、体部中位より少し上方で最大径になる。口縁部はやや丸みをもって屈曲し外方に開く。口縁端部が水平方向に伸びるⅡA類（543・609・1157・1188）と、口縁端部が垂下するⅡB類（1109・1236・1602）とに分類できる。両者とも内外面の調整はハケメ調整である。

Ⅲ類は、口縁端部が玉縁状を呈する形態である。この形態が今回報告する兵庫津遺跡の甕では最も多い形態である。口縁部が外反するⅢA類（255・325・420・422・488・566・610・1237・1238・1239・1251・1278・1373・1375・1433・1434・1603・1604・1605・1660・1695）、口縁部が直立するⅢB類（308・421・921・1049・1110・1128・1169・1240・1302・1336・1337・1362・1370・1374・1385・1399・1409・1453・1545・1601・1681・1893）とがある。

Ⅳ類（174・176・257・419・490・549・902・1050・1064・1110・1346）は体部が長胴化し、口縁端部の玉縁が垂下し、口縁端部の断面が楕円形状になる形態である。細片のためにここでは分類は行わなかったが口縁部が直立するものと外反するものとがある。いずれも内外面はケズリ調整である。

Ⅴ類（137・448・567・1416）は、口縁部はほぼ直立し、垂下した玉縁が扁平化し、口縁部外面の下方に段をもった形態である。

Ⅵ類（175・177・256・491・653・678・694）は、口縁部は扁平化した玉縁からより厚く長くなり、口縁部外面に凹線状の強いナデを施す。口縁部は、直立するもの（491・653）と、わずかに内弯するもの（256・694）がある。

その他、時期不明であるが、斜格子状のカマ印が施された体部の破片（489）がある。

これらの時期については、乗岡編年からⅠ類は12世紀後半～13世紀前半、Ⅱ類は13世紀後半、Ⅲ類は14世紀、Ⅳ類は15世紀前半、Ⅴ類は15世紀後半、Ⅵ類は16世紀～17世紀前半にそれぞれ比定される。

イ　擂鉢

擂鉢の分類については、口縁部形態の変化によって行う。

Ⅰ類は、体部は直線的に伸び口縁端部が水平で、おろし目がまだ施されていないものである。間壁編年Ⅰ期、乗岡1期、重根Ⅰ期に相当するが、兵庫津遺跡では該当するものがない。しかし、兵庫県内において、将来的に発見される可能性があること、また、先学の研究との混乱をさけるため、今回は甕同様にⅠ類を設定しておく。

Ⅱ類は、口縁端部はほぼ水平で平坦面を持ち、体部内面におろし目が施されている。体部が内弯するⅡA類（1398・1640）と体部が直線的なⅡB類（354・550）がある。

Ⅲ類は、体部は斜め方向に直線的に開き、体部内面におろし目が施されている。口縁部の形態から、体部から口縁部まで器壁が同じ厚さで、口縁端部は外傾し端面をもつⅢA類（353・540・895・937・1234・1235・1321・1349・1600・1657）、口縁端部の端面にⅢA類よりやや強いナデを施し、上下に突出しているⅢB類（415・541・1030・1118・1320・1655）、ⅢB類より強く上方に引き上げているⅢC類（247・249・483・632・802・936・1451・1656）に分類できる。

Ⅳ類は、体部は斜め方向に直線的に開き、口縁部を上方に引き上げ、拡張する形態である。口縁部の引き上げがやや内傾気味で、内面に屈曲部をもつⅣA類（126・251・413・414・542・669）と、口縁部をほぼ垂直に引き上げ、口縁端部が三角形状を呈するⅣB類（248・250・306・418・487・1031・1032・1544）とに分類できる。

Ⅴ類は、体部は斜め方向に直線的に開き、口縁部の引き上げがより顕著になり、引き上げた口縁部の厚さが

板状になり薄くなる形態である。口縁部は直立し、口縁端部は丸みをもっておさめるⅤA類（218・307・718・1402・1452）、口縁部は直立し、口縁端部が端面をもつⅤB類（417・1372・1680）がある。

Ⅵ類（252・484・485・486・1415）は、体部は斜め方向に直線的に開き、口縁部がわずかに内傾する。口縁端部は強いナデによって、内傾する端面をつくり、口縁端部が尖った形態である。

Ⅶ類（178・253）は、体部は斜め方向に直線的に開き、口縁部は直立する。強いナデによる口縁端部の尖りがⅥ類より顕著になる。おろし目は放射状だけではなく、斜め方向にも施される。

Ⅷ類は、体部が斜め方向に直線的に開き、口縁部は短くなり、口縁部の器壁が厚くなるものである。口縁部断面が台形状を呈するⅧA類（207・416・676・677）と口縁部がさらに短く、器壁がより厚くなり、口縁部断面が三角形を呈するⅧB類（446・862）がある。

Ⅸ類（68）は、体部はやや内弯し、口縁部は直立する。口縁部断面は台形状を呈し、口縁部内面の段が不明瞭になり、口縁部外面に2条の沈線が施される。

これらの時期については、乗岡編年からⅠ類は12世紀後半～13世紀前半、Ⅱ類は13世紀後半～14世紀前半、Ⅲ類は14世紀後半～15世紀初頭、Ⅳ類は15世紀前半～中頃、Ⅴ類は15世紀後半、Ⅵ類は16世紀、Ⅶ類は、16世紀末、Ⅷ類は、17世紀初頭、Ⅸ類は、17世紀前半にそれぞれ比定される。

ウ　鉢

鉢には平底で体部は内弯し、口縁端部を短くつまみ上げるもの（727）、平底で、体部は直線的に外方に開き、口縁部は「く」の字状に屈曲し外反するもの（692）と、口縁部が短く外反するもの（254）とがある。727は、大阪城三の丸跡で類例が認められ、16世紀代の年代が与えられている。692は、現在のところ類例が認められず、明確な時期は不明である。

エ　壺

壺には、全体の器形がわかるものは少なく、口縁部（213・355・423）と底部（73・424）がある。口縁部の残存するものは、口縁部は直立し、口縁端部は小さな玉縁状を呈する形態のもの（355・423）と口縁部はほぼ直立し、口縁端部を若干外方につまみ出し、体部外面に粘土紐を貼り付けた横耳の痕跡が認められるもの（213）がある。

底部のみ残存するものでは、平底で体部はゆるやかに斜め方向にたち上がるもの（424）と高台をもち体部は大きく内弯するもの（73）がある。73は17世紀以降の製品と考えられる。

さらに壺には、平底で体部は大きく内弯し口縁部が外反して、口縁部の1ヶ所をひねって注口を作り出すいわゆる鳶口壺（132）がある。213は、不老山東口窯址に類品が見られ15世紀前半に、355・423は、水の子岩遺跡出土のものに類例が認められ、14世紀末～15世紀前半に比定できる。

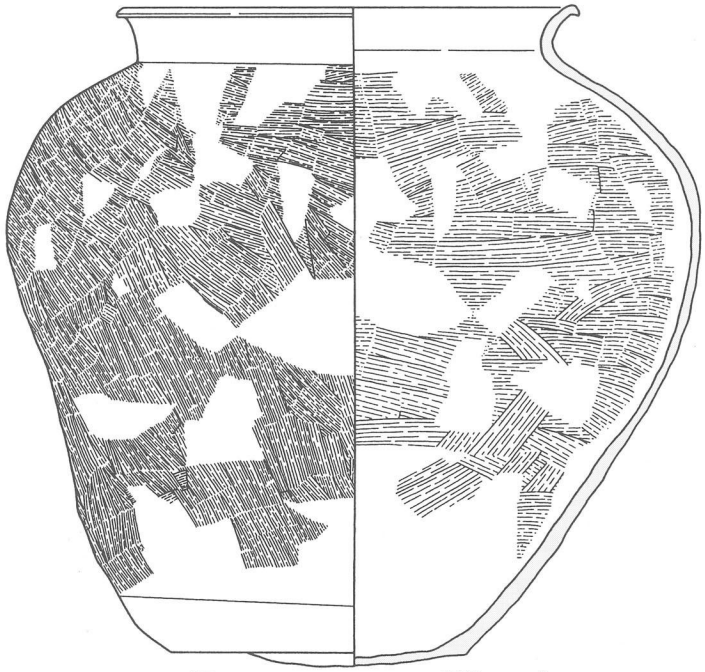
また、132は、外面に赤土部を塗布し、ゴマ状の灰かぶりがみられる事から、15世紀後半～16世紀前半の時期に比定できる。

オ　徳利

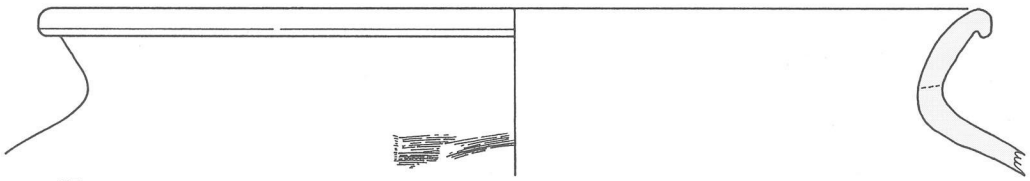
594は、底部は欠損する。体部は内傾し、体部上位で屈曲して、口縁部は外反する、いわゆる船徳利である。形態の特徴から16世紀代の製品と考えられる。

② 丹波

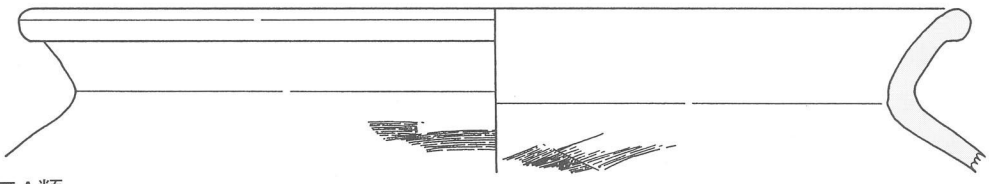
いわゆる「丹波」の生産地を考えると、広義には、旧丹波国のうち現在兵庫県に編入されている篠山市・氷上郡の地域、旧播磨国のうち西脇市と多可郡・加東郡、旧摂津国のうち三田市を含む地域が考えられ、狭義には、篠山市・氷上郡の地域が考えられる。厳密には、前者で生産されたものを「丹波」と呼び、後者で生産さ



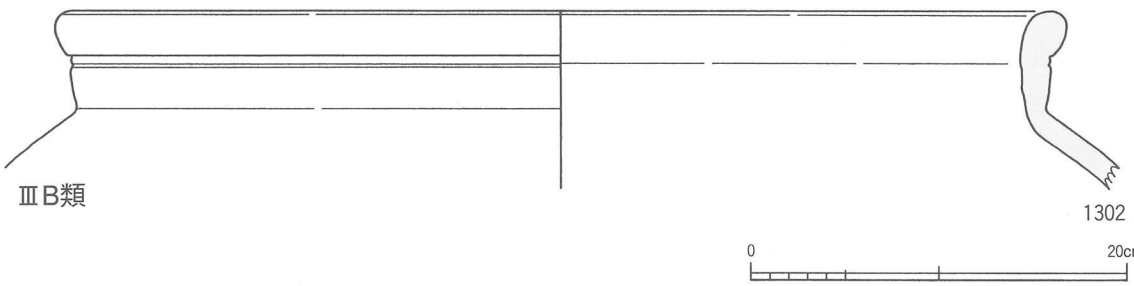
ⅡA類　1188



ⅡB類　1236



ⅢA類　1237



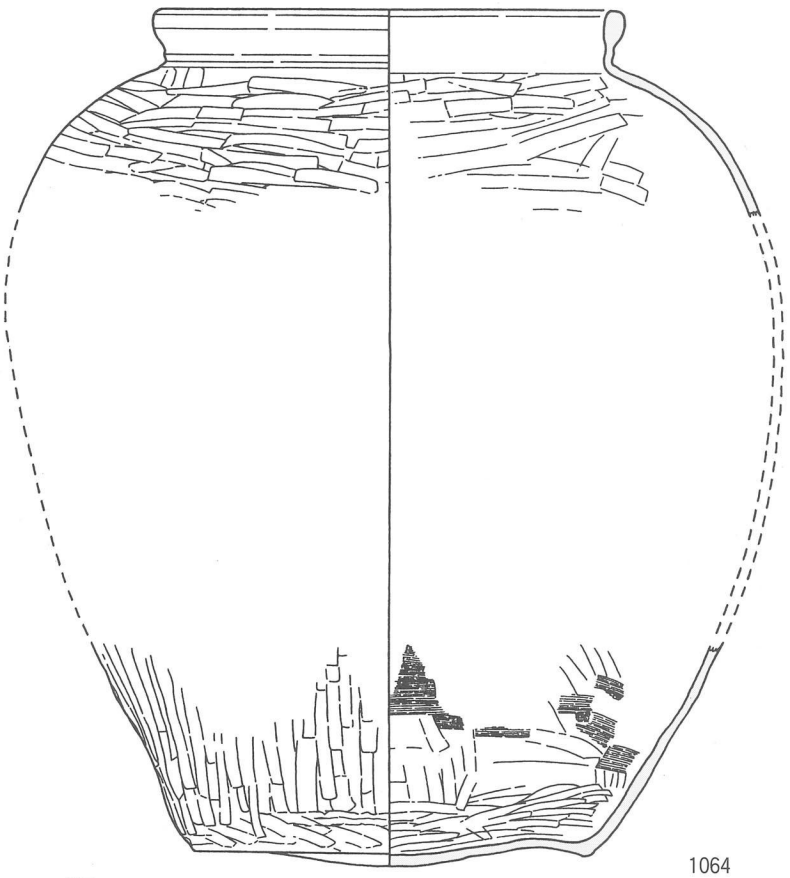
ⅢB類　1302

0　40cm

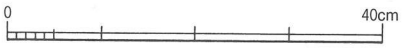
0　20cm

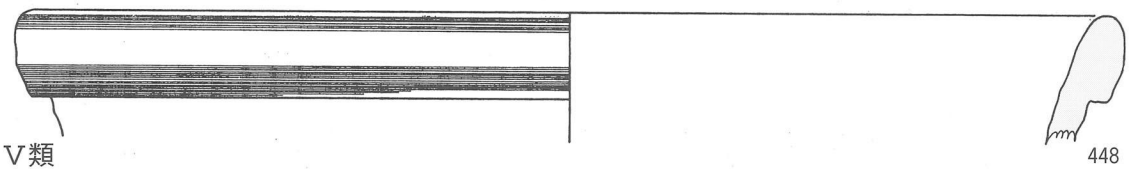
0　20cm

第13図　備前焼分類表　(1)

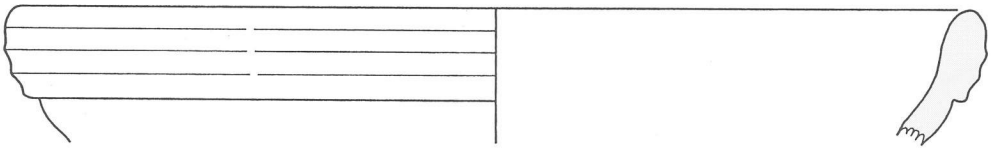


Ⅳ類　1064



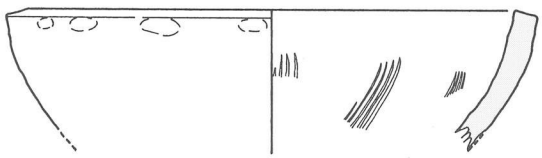


Ⅴ類　448

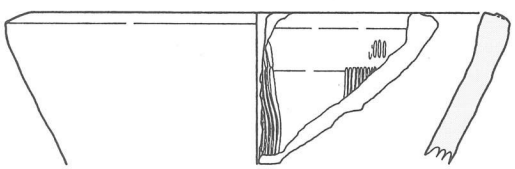


Ⅵ類　175

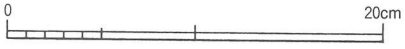
擂鉢



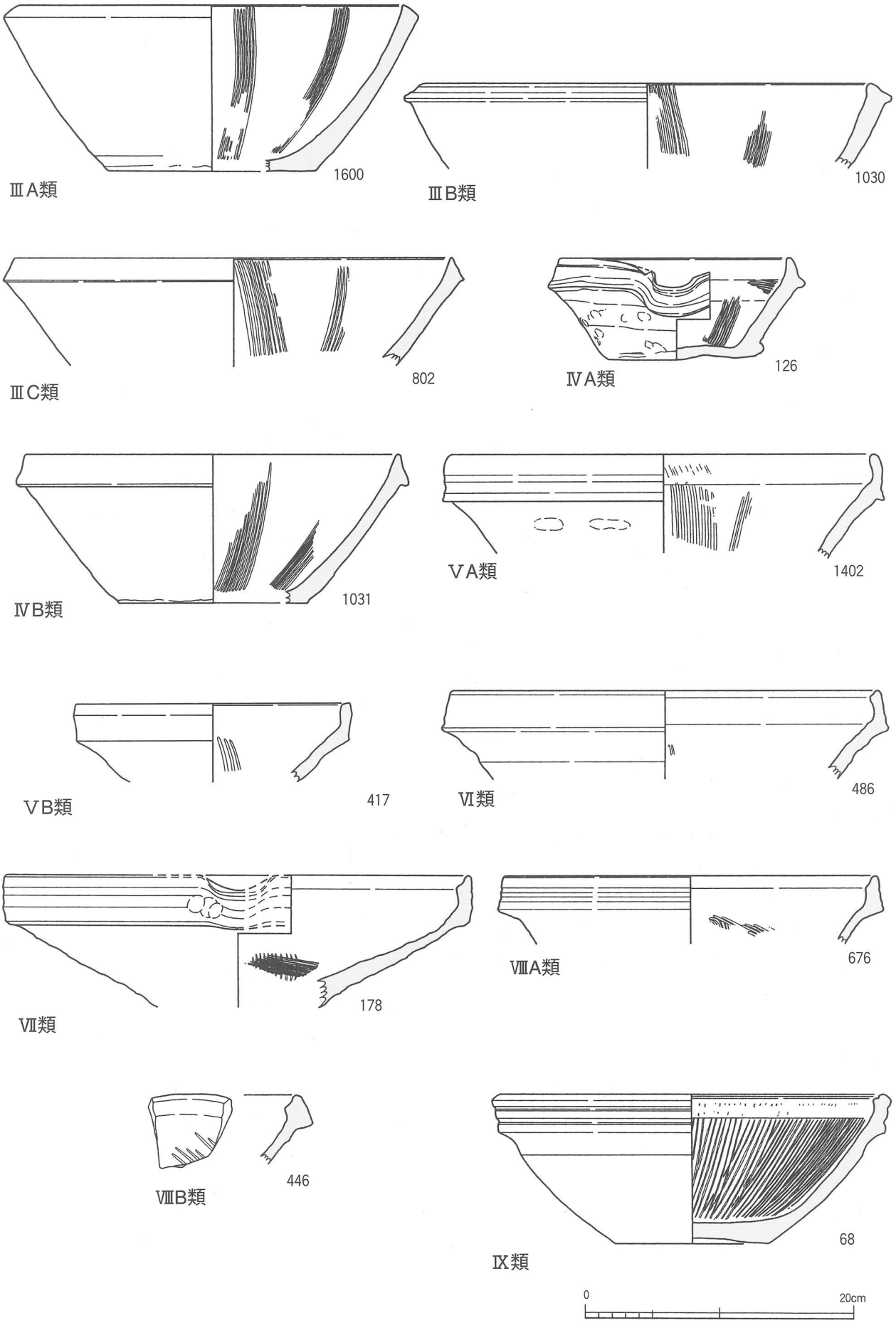
ⅡA類　1640



ⅡB類　354



第14図　備前焼分類表　(2)



第15図　備前焼分類表　(3)

れたものを「丹波系」と呼ぶべきであろう。しかしながら、出土品そのものからは明瞭に分別しがたいので、本報告では、あえて区別せずに両者を包括的に「丹波」と呼ぶことにする。

丹波焼の器種としては、壷・甕・擂鉢・鉢・桶・盤・火入がある。

ア　壷

壷には、逆「L」字形を呈する口縁端部が丸く収まるもの（Ⅰ類）と口縁部が上下に拡張するもの（Ⅱ類）、口縁部が短く直立するいわゆる「短頸壷」の形態をとるもの（Ⅲ類）、受口状の口縁部を持つもの（Ⅳ類）とがある。Ⅰ類（1194）及びⅡ類（1189）、Ⅲ類（224）は無釉陶器であるが、Ⅲ類には塗土が認められ、Ⅳ類（1794）には灰釉が「筒描き」手法で施釉されている。

これらの壷の存続期間は、Ⅰ類・Ⅱ類については、中世の広口壷を含む甕類の編年観（長谷川 2003）を準用すると、両者とも13世紀後半代に比定される。一方、近世に属するⅢ類・Ⅳ類については、Ⅲ類が17世紀代、Ⅳ類が18世紀末以降の所産と各々考えられる。

イ　甕

甕には、口縁部形態がいわゆる「N字状」を呈するもの（Ⅰ類）と外反する口縁端部が上方に立ち上がり端部が丸く収まるもの（Ⅱ類）、口縁部の上方への立ち上がりが断面三角形状を呈し口縁部下方への拡張の認められるもの（Ⅲ類）、口縁部が下方へ拡張し口縁部内面に段を持つもの（Ⅳ類）、短く外反する口縁部内面の凹線が沈線状となるもの（Ⅴ類）、口縁部が大きく外反するもの（Ⅵ類）、口縁部がいわゆる「T字状」を呈するもの（Ⅶ類）、口縁部がいわゆる「L字状」を呈するもの（Ⅷ類）とがある。

ここで、広口壷を含む甕類の編年・系譜関係（長谷川 2003）の提示されている中世に属するⅠ類～Ⅴ類をみると、東海地方の瓷器系陶器と同様の形態的変化の追えるA系列のⅠ類（1242）と共に、東海系の瓷器系陶器の影響の認められるものの、独自の形態的変化の認められるB系列のⅡ類（1131・1164・1400）やⅢ類（1435）、Ⅳ類（1065・1195）が出土している。また、丹波独自の形態変化をするB系列は、下方への拡張が認められる口縁部内面に段を持つB－1系列と、下方への拡張が若干認められる口縁部端部が上方へ伸びるB－2系列との2系統に分かれるが、B－2系統のⅤ類（1111）が出土している。

一方、近世に属するⅥ類～Ⅷ類のうち、Ⅵ類（359）は口縁部端部が面を持ち、Ⅶ類は口縁部が断面三角形を呈するもの（ⅦA類）と口縁部端部がくずれた方形を呈するもの（ⅦB類）とがある。なお、ⅦA類（146）は体部外面上位に条線が施文され、ⅦB類（1795）・Ⅷ類（1084）には灰釉が「筒描き」手法で施釉されている。

これらの甕のうち、中世に属する甕は、Ⅰ類・Ⅳ類が14世紀前半、Ⅱ類が13世紀後半、Ⅲ類が13世紀後葉～14世紀前葉、Ⅴ類が15世紀前半に各々比定されている。また、近世に属する甕のうち、Ⅵ類・ⅦA類は17世紀中葉～後葉、ⅦB類・Ⅷ類は18世紀末以降の所産と考えられる。

ウ　擂鉢

中世末から近世にかけての擂鉢の分類及びその編年・存続期間については、先学の研究（長谷川 2000）がある。ここでは、その研究に基づいて概略を述べる。なお、以下の記述は、長谷川分類等に準拠する。

Ⅰ類には、中世丹波の系譜を純粋に引くⅠA類と、口縁部が外傾または内傾する端面となる等やや変容した形で中世丹波の系譜を引くⅠB類、信楽の形態的影響の受容が想定されるⅠC類とがあるが、今回の調査では、ⅠA2（ヘラ）類（356）とⅠA2（クシ）類（679）、ⅠB1類（183・892）、ⅠB2（ヘラ）類（357）、ⅠB2（クシ）類（631）、ⅠB3類（447・598）とが出土している。これらⅠ類は、ⅠA2（ヘラ）類・ⅠB1類が16世紀後葉～17世紀中頃、ⅠA2（クシ）類が17世紀前半～後葉、ⅠB2（ヘラ）類が17世紀初頭～中葉、

ＩＢ２（クシ）類が17世紀中葉～末、ＩＢ３類が17世紀中頃～18世紀前半に各々比定されている。

また、Ｉ類のうち、外傾する口縁部端面を持つＩＢ類は、口縁部外面に肥厚部を持つⅡ類へその形態的・技術的系譜を引き継ぎ、一方、内傾する口縁部端面を持つＩＣ類は、口縁部内面に肥厚部を持つⅢ類へとその形態的・技術的系譜を引き継ぐが、今回の調査では、ⅡＡ類（358・585・680）とⅢＡ類（184）とが出土している。ⅡＡ類・ⅢＡ類は、共に17世紀後半～18世紀前半に比定されている。

このほかに、18世紀末以降に比定される、施釉陶器であるＶ類（1792）が出土している。

エ　鉢

鉢（69）は、平底の底部から内湾気味に体部が立ち上がり、口縁部が内面に肥厚するもので、口縁部形態の類似する近世擂鉢の分類・編年観（長谷川 2000）を準用すると、18世紀中頃～末に比定できる。

オ　桶

桶（1793）は、口縁部がいわゆる「Ｔ字状」を呈し、体部外面の塗土は暗赤褐色に発色し、体部外面にいわゆる「不遊環」が貼付されるもので、17世紀後葉～18世紀前半の所産と考えられる。

カ　盤

盤には、内湾気味の体部から端部が丸く収まる口縁部が立ち上がるもの（181）と、底部から直線的に立ち上がる体部が口縁部で外方に屈曲し端部が面を持つもの（240）とがあり、両者とも16世紀後葉～17世紀前半の所産と考えられる。

キ　火入

火入（568）は、双耳で、体部中央で一度くびれる形態をとるが、そのくびれの度合いは小さく、17世紀末～18世紀中頃の所産と考えられる。

③ 常滑

常滑焼の製品と考えられるものには甕と壷がある。

ア　甕

甕は口縁部の形態から、口縁部が拡張して、断面が「Ｌ」字状を呈するもの（中野分類5型式　1196・1198）、断面「Ｎ」字状を呈する口縁部をもつもの（6ａ型式　1249）、「Ｎ」字状口縁がさらに拡張するもの（6ｂ型式　1112・1879）、口縁部の縁帯がさらに拡張するもの（7型式　1401・1422・1479・1608）、縁帯部が下方に垂下するもの（８型式　1241）、口縁部の縁帯が垂下して頸部に接着するもの（９型式　309・1038・1206・1609）に分類される。

これらの甕は、５型式が13世紀第２四半期に、6ａ型式が13世紀第3四半期に、6ｂ型式が13世紀第４四半期に、７型式が14世紀前半に、８型式が14世紀後半に、９型式が14世紀末～15世紀前半にそれぞれ比定されている。

イ　壷

壷には体部が大きく内彎し、口縁部は縁帯が頸部に接着する9型式のもの（1038）があり、14世紀末～15世紀前半代に比定される。

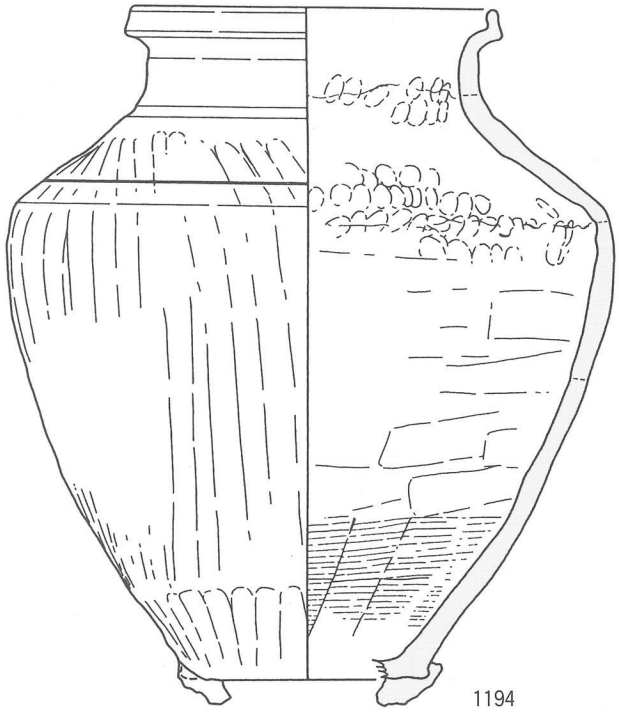
④ 瀬戸・美濃

瀬戸・美濃産と考えられる製品には器種別には、碗、天目茶碗、擂鉢、壷、皿、卸皿、折縁皿、直線大皿、入子、花瓶、水滴などがある。

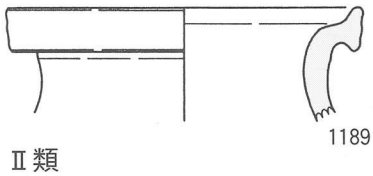
ア　碗

碗はいずれも内外面に灰釉を施す。494は底部は平底で底部外面に糸切り痕を残すもので、藤澤分類平底末広碗古瀬戸中Ⅲ期相当ものと考えられ、14世紀中頃の時期が考えられる。803は体部は僅かに内彎し、口縁部

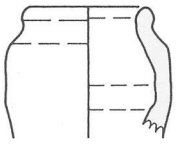
丹波焼　壺



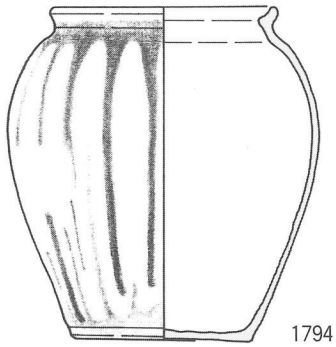
Ⅰ類



Ⅱ類

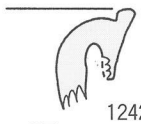


Ⅲ類

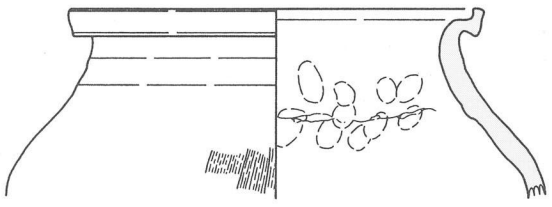


Ⅳ類

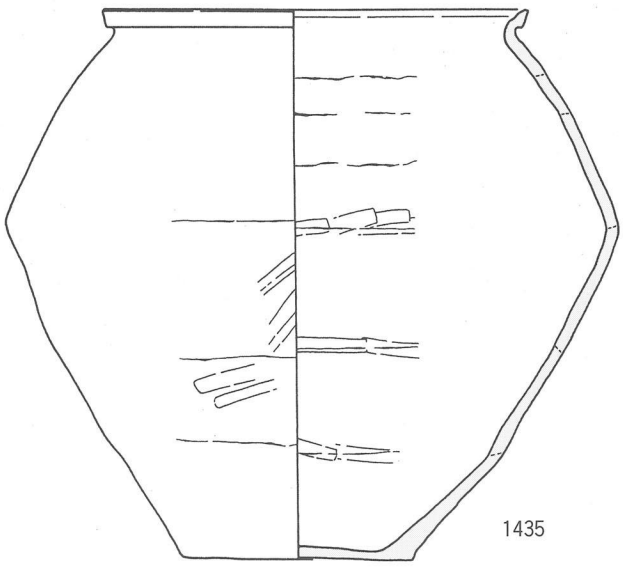
甕



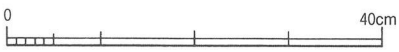
Ⅰ類



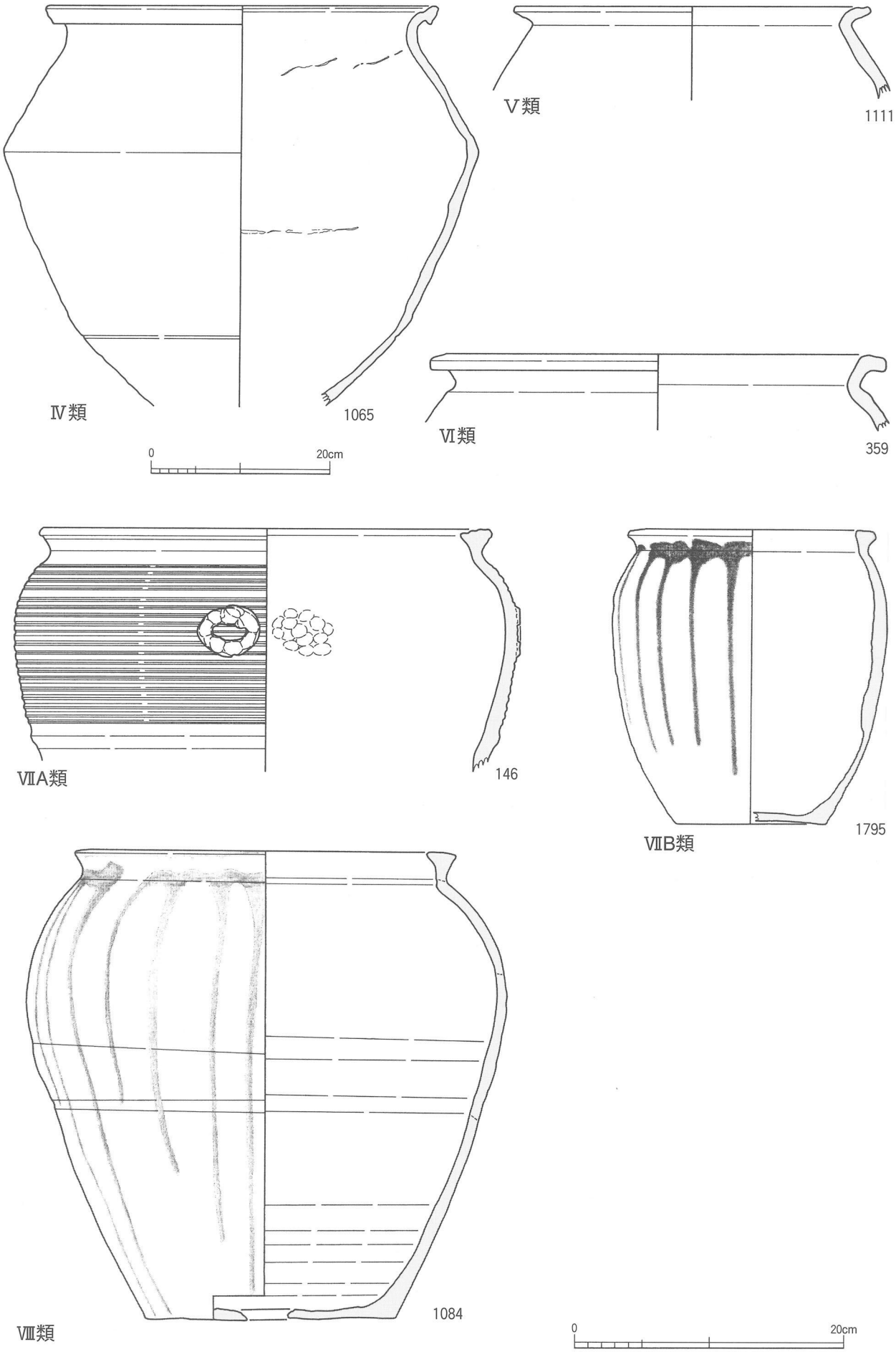
Ⅱ類



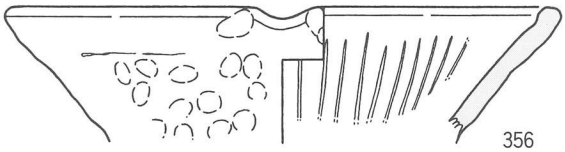
Ⅲ類



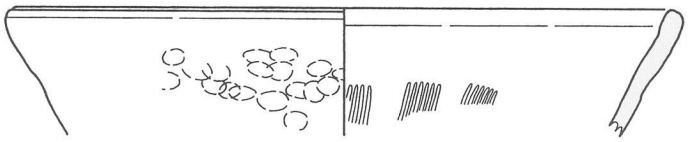
第16図　丹波焼分類表（1）



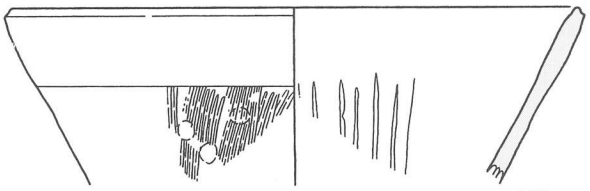
第17図　丹波焼分類表　(2)



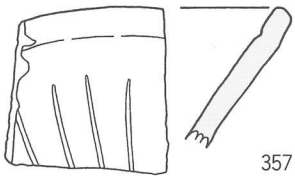
ⅠA2(ヘラ)類



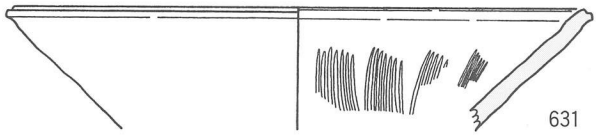
ⅠA2(クシ)類



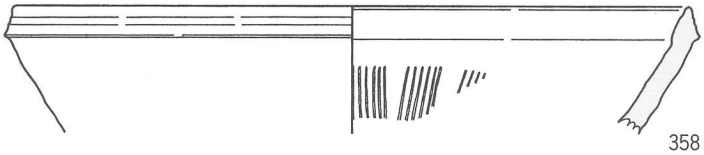
ⅠB1類



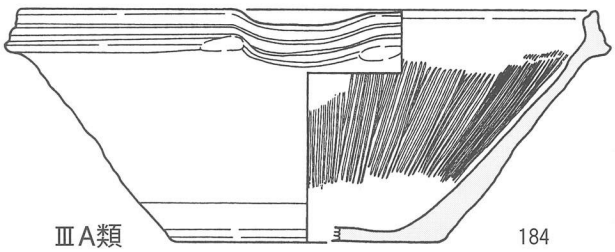
ⅠB2(ヘラ)類



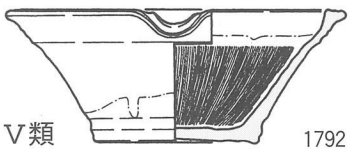
ⅠB2(クシ)類



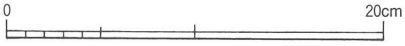
ⅡA類



ⅢA類 184



Ⅴ類 1792



第18図　丹波焼分類表 (3)

が外方にひらくもので、灰釉浅碗古瀬戸後Ⅰ期に相当するものと考えられ、14世紀後半の時期が考えられる。838は体部が直線的に斜め上方に延びるもので、灰釉平碗古瀬戸後Ⅰ期～Ⅱ期相当と考えられ、14世紀後半に比定できる。また、189・190は輪高台をもち、浅黄色に発色するもので、18世紀後半以降の製品と考えられる。

イ　天目茶碗

天目茶碗はいずれも内外面に鉄釉を施す。底部・体部の形態などから、古瀬戸段階のものと、大窯期のものに分類できる。古瀬戸段階のもの（425・493・552・804・805・938・1658・1659）はさらに、体部は直線的に斜め上方に延び、口縁部が僅かに屈曲する藤澤分類中Ⅱ期相当のもの（452・552）、高台を浅く削り出す後Ⅰ期段階のもの（938）、後Ⅱ期～Ⅲ期段階のもの（493）、後Ⅳ期古段階のもの（1658・1659）、後Ⅳ期新段階のもの（425・804・805）に細分できる。また、大窯期のものは、井上分類大窯Ⅲ期相当のもの（449・450）、Ⅴ期相当のもの（144）がある。これらの天目茶碗の所属時期は中Ⅱ期が14世紀前半に、後Ⅰ期が14世紀後半に、後Ⅱ期～Ⅲ期が15世紀前半に、後Ⅳ期古段階が15世紀中頃に、後Ⅳ期新段階が15世紀後半に、大窯Ⅲ期が16世紀後半に、大窯Ⅴ期が16世紀末～17世紀初頭にそれぞれ比定されている。

ウ　擂鉢

擂鉢（105・332・681）はいずれも内外面に鉄釉（332・681）あるいは、鉄泥漿を施すもの（105）で、近世後半代の製品である。

エ　壷

壷（1808）は肩部の上面に横耳を貼り付けるもので、外面に灰釉を施釉し、灰オリーブ色に発色する。19世紀前半以降の本業焼の製品であろう。

オ　皿

皿は全て大窯期の製品である。釉の違いから、灰釉を施釉するいわゆる黄瀬戸皿（145・157・238・360・361・431・554・703）と長石釉を施釉する志野（336・362・451）とに分類される。また、底部の形態には、底部を碁笥底状に浅く削り出すもの（157）、低い高台をもつもの（361・554）などがある。内面の施文には、体部内面に菊花文を施文するもの（360・451）などがある。また、362・451は長石釉を施す志野の製品である。これらの皿は大窯Ⅲ期相当のもの（145・157・360・431・703）、大窯Ⅴ期相当のもの（238・336・362・451）に分類でき、大窯Ⅲ期は16世紀後半に、大窯Ⅴ期は16世紀末～17世紀初頭にそれぞれ比定できる。

カ　卸皿

卸皿は5点図化している（258・682・728・863・1051）。258は口縁端部を上方につまみあげるもので、中Ⅲ期に相当し、14世紀前半の時期が考えられる。682は底部の器壁は比較的厚く、底部内面に卸目を格子状に施文する。中Ⅱ期相当で、14世紀前半代の時期が考えらえる。728・863は口縁端部を内側につまみ出すもので、後Ⅱ期相当と考えられ、15世紀前半の時期が与えられる。1051は底部のみで時期は不明である。

キ　折縁皿

折縁皿は口縁端部を上方につまみ出す折縁小皿（704）、とやや深めの折縁深皿（1347）とがある。704は後Ⅳ期相当で15世紀後半に、また1347は後Ⅱ期相当で15世紀前半の時期が考えられる。720・806・839・840も折縁皿と考えられるが、細片のため時期は特定できない。

ク　直線大皿

553は後Ⅱ期相当の直線大皿と考えられ、15世紀前半代の時期が考えられる。

ケ　入子

352は平底で体部が直線的に斜め上方に延びるもので、前Ⅳ期相当の入子と考えらえる。13世紀後半の所産

であろう。569も入子の口縁部と考えられる。

コ　花瓶

611は脚をもつ花瓶と考えられる。時期的には中Ⅱ～Ⅲ期のもので、14世紀前半～中頃の時期が考えられる。

シ　水滴

127は平底で体部は大きく内彎し、口縁部はほぼ直立する水滴である。体部外面には竹管文・ヘラ描き文を施文し鉄釉を施釉する。中Ⅳ期相当と考えられ、14世紀中頃の時期が考えられる。

ス　その他

1774は鉢もしくは碗と考えられるもので、外面は鉄釉・灰釉の2釉が掛けられている。18世紀後半以降の本業焼の製品と考えられる。

⑤ 肥前

肥前系と考えられる製品には器種別では、皿、椀、鉢、火入などがある。

ア　皿

皿は底部内面の重ね焼きの痕跡から見ると、胎土目跡のもの（Ⅰ類　23・366)、砂目跡のもの（Ⅱ類152・153・188・367・453・454・555・559・571・1333・1334)、蛇ノ目状釉ハギするもの（Ⅲ類　24・70・71・313・1708)、重ね焼きの痕跡を残さないもの（Ⅳ類　150・186・187・1333・1334）に大きく分類できる。

Ⅱ類には、口縁部内面に凹線が1条巡る溝縁皿（152・153・188・454）がある。また、Ⅳ類には内面の底部と体部の界に段をもつもの（186・187）などがあり、また、釉の違いから緑釉皿（70)、灰釉皿（24・1708)、刷毛目唐津皿（111）などが見られる。また、それぞれの所属時期はⅠ類が肥前編年のⅠ－2期に相当し、16世紀末～17世紀初頭に、Ⅱ類がⅡ期すなわち17世紀前半に、Ⅲ類がⅢ～Ⅳ期すなわち17世紀中頃～18世紀後半にそれぞれ比定できる。また、Ⅳ類は底部を浅く削り出す点から見て、Ⅰ－2期～Ⅱ期すなわち16世紀末～17世紀中頃の時期が考えられる。

イ　椀

椀には高台を浅く粗く削りだし、底部外面は露胎のもの（Ⅰ類　163・333・363・364・380・381・570・586・654・706・1316・1332)、高台は輪高台で体部外面は鉄釉施釉の後、白濁釉で波状文を描く現川焼風のもの（Ⅱ類72・1749・1797)、端正な輪高台をもち、形態は京焼風の京焼風陶器（Ⅲ類　106・107　108・595・683・1746）と内外面に鉄釉を施釉する天目茶碗（Ⅳ類　314・687）とがある。Ⅱ類の72は底部内面は蛇ノ目状釉ハギする。また、Ⅲ類の底部には「中金村」銘をスタンプするもの（106)、「清水」銘をスタンプするもの（107・108)、壷形をスタンプするもの（595）がある。それぞれの所属時期はⅠ類がⅡ期すなわち17世紀前半に、Ⅱ類がⅢ～Ⅳ期すなわち17世紀中頃～18世紀後半に、Ⅲ類がⅢ期～Ⅳ期に、Ⅳ類がⅡ期にそれぞれ比定される。

ウ　鉢

74は体部外面に鉄釉施釉の後、白泥で波状文を施文するⅢ期相当のもので、17世紀中頃～後半代の製品である。1661は体部外面に刷毛目で施文するもので、Ⅳ期に相当し、17世紀後半～18世紀後半代の時期が考えられる。

エ　火入

火入（1796）は低い高台をもち、体部は直立する。底部外面には「清水」銘をスタンプする京焼風陶器で、Ⅲ期すなわち17世紀中頃～後半の時期が想定される。

⑥ 京・信楽

京・信楽産と考えられる製品には、椀、徳利、灯明皿、ひょうそくなどがある。

ア　椀

椀（1799）は外面に杉葉文を鉄釉で施文するいわゆる小杉椀で、19世紀前半以降の時期が考えられる。

イ　徳利

徳利（1807）は口縁部を巾着状に成形するもので、19世紀前半代の時期に比定される。

ウ　灯明皿

灯明皿（1715・1803）はいずれも平底で体部は内彎気味に斜め上方に延び、内面～口縁部外面まで施釉する。1803はやや大型で口縁部内面に菊花文を貼り付ける。19世紀前半以降の製品と考えられる。

エ　ひょうそく

ひょうそく（110・1898）は平底で体部は中空になっている。口縁部の残る1898は皿の内面に凸帯が1条巡り、凸帯には1箇所抉りが入れられる。口縁部内面から外面は施釉され、底部外面は露胎である。19世紀前半以降に比定される。

⑦ 堺・明石

堺・明石産と考えられる無釉陶器には擂鉢がある。

ア　擂鉢

擂鉢（179・1722・1723・1757・1894・1895）は底部の擂目の施文方法の違いから、ウールマーク状に施文するもの（Ⅰ類　1722）と放射状に施文するもの（Ⅱ類　1723・1757・1895）に分類される。Ⅰ類は18世紀後半代、Ⅱ類は明石産と考えられ、18世紀後半～19世紀前半代の時期に比定される。また、底部を欠失する179は口縁部形態から堺産と考えられ、18世紀前半代の所産と考えられる。

⑧ 舞子・明石

在地の舞子・明石産と考えられる製品には鍋と蓋がある。

ア　鍋

鍋（1725）は平底で、口縁部を外方に水平に折り曲げるもので、内外面とも鉄釉を施釉する。19世紀前半以降の時期が考えられる。

イ　蓋

蓋（1908）はつまみに割り高台風に4箇所抉りを入れ、上面に鉄釉と白泥で松葉文を施文するもので、19世紀前半以降の時期が考えられる。

⑨ 産地不明の陶器

この他、産地の特定できない陶器には、椀、皿、壷、鉢、香炉、杯、蓋、汽車茶瓶などがある。

ア　椀

椀は体部が直立するもの（Ⅰ類　1775）、内彎するもの（Ⅱ類　368・1724・1748・1751・1896）、直線的に斜め上方に延びるもの（Ⅲ類　338）に大別され、Ⅱ類は口縁部をそのまま上方に引き上げるもの（Ⅱ－1類　368・1748）、直立するもの（Ⅱ－2類　1751）、外反するもの（Ⅱ－3類　1724・1896）に分類できる。いずれも19世紀前半～近代にかけての製品であろう。

イ　皿

皿（112）は内外面とも灰釉を施釉し、底部内面を蛇ノ目状釉ハギするもので、釉ハギ部に鉄釉で施文する。18世紀後半以降の製品と考えられる。

ウ　壷

壷には頸部は短く直立し、口縁端部が丸味をもつ無釉のもの（430）と口縁部が外方にひらき、鉄釉施釉の

後、白濁釉を施すもの（573）がある。

エ　鉢

鉢（75）は高台が高く体部は直線的に斜め上方に延び、口縁端部を上方につまみ上げるもので、内面に淡い呉須で格子状文を施文する陶胎染付である。

オ　香炉

香炉（1776）は体部が内彎し、外面に灰釉施釉の後、赤、緑、青で竹葉文を上絵付けするもので、内面は露胎である。京焼系の製品であろう。

カ　杯

杯には平底で体部が内彎するもの（1800）、輪高台で体部が内彎するもの（1801）、直立するもの（1802）がある。釉がガラス質であることから、1801・1802は近代以降の製品と考えられる。

キ　蓋

蓋には口縁部を外方に水平に折り曲げる落し蓋（1804）、上面に宝珠つまみをもつもの（1805・1806）、外面の中央に段をもつもの（1897）などがある。

（6）磁器

磁器には産地別では中国製の貿易陶磁、肥前、瀬戸・美濃、三田及び産地不明のものがある。

① 中国製

中国製と考えられる貿易陶磁には白磁、青磁、青白磁、青花磁器がある。

A　白磁

白磁には碗、皿、壷がある。

ア　碗

碗は底部あるいは口縁部のみが残存するものがほとんどで、全体の器形が分かるものはない。まず底部のみ残存するものでは、高台を浅く削りだし、底部内面に沈線状の段をもつもの（261）と高台は幅が広く、比較的低く、内外面に施釉するもの（192）がある。261は森田分類Ⅳ—1類に相当し、12世紀後半～13世紀前半の時期が考えられる。口縁部の残存するものは、口縁部を外方につまみ出し、上面を水平にするもの（259）、そのまま上方に引き上げるもの（729）、口縁部が大きく外方にひらくもの（310・807・809・1045）などがある。259はⅤ—4類に相当し、12世紀後半～13世紀前半に、また、口縁部が外方に大きくひらくものは森田分類の白磁C群と考えれ、15世紀～16世紀前半代に比定される。

イ　皿

皿も碗同様、底部のみ或いは口縁部のみが残存するものが大部分を占め、全形が分かるものは非常に少ない。底部のみが残存するものでは、器壁が非常に厚く、高台は浅く削りだし、底部外面は露胎のもの（811）、低い高台をもち、底部外面は露胎もの（810・841・875・1531）、平底で体部は直線的に斜め上方に延び、全面に施釉するもの（1052）などがある。811は森田分類の白磁D群に相当し、15世紀代に、810・841・875・1531は白磁皿Ⅲ類に相当し、12世紀後半～13世紀前半に、1052は白磁皿Ⅸ類に相当し、13世紀後半～14世紀前半にそれぞれ比定される。

口縁部が遺存するものは、文様・形態などの違いから、内面にヘラ描きで草花文を施文するもの（191）、口縁部の釉を掻き取るもの（223・426）、口縁部が外方にひらき、全面に施釉するもの（262・304）、口縁部は外方につまみ出し、体部下半以下は露胎のもの（263）、口縁部を輪花状に成形するもの（876）などに分類でき

る。

191は白磁Ｂ群に相当し、14世紀代に、223・426は白磁皿Ⅸ類に相当し13世紀後半～14世紀前半に、262・304・876は白磁Ｅ群に相当し、16世紀代に、263は白磁皿Ⅴ類に相当し、12世紀後半～13世紀前半にそれぞれ比定される。

ウ　壷

壷は口縁端部を内側に折り曲げるもの（899）と頸部は直立し、口縁部は外方に折り曲げ垂下させるもの（1129・1130）とがある。1129・1130は四耳壷と考えられ、13世紀代に比定される。

Ｂ　青白磁

青白磁には合子と梅瓶がある。

ア　合子

429は合子蓋で、外面に型押しで花弁文を施文する。864は合子身で、体部外面には縦線を施文する。いずれも景徳鎮窯産で、13世紀代に比定される。

イ　梅瓶

1190・1549はいずれも梅瓶の破片である。外面に櫛描きとヘラ描きで渦巻文、界線を施文する。いずれも13世紀代の景徳鎮窯産の製品と考えられる。

Ｃ　青磁

青磁には、産地別では同安窯系青磁と龍泉窯系青磁とがある。

ａ　同安窯系青磁

同安窯系青磁には碗と皿がある。

ア　碗

碗（830）は外面に櫛描き施文を、内面は櫛描きとヘラ描きで雷光文を施文するもので、12世紀後半～13世紀前半に比定される。

イ　皿

皿（495・557・655）はいずれも底部外面には施釉せず、内面に櫛描きとヘラ描きで雷光文を施文するもので、12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

ｂ　龍泉窯系青磁

龍泉窯系青磁には碗、杯、皿、盤などがある。

ア　碗

碗はいずれも、底部あるいは口縁部～体部のみ残存しているものが多く、全体の器形が復元できるものは非常に少ない。ここでは、外面の施文が識別できる口縁部～体部が残存しているものと底部のみ残存して、外面の文様構成の不明なものに分けて記述する。

口縁部～体部の残るものは、外面の文様から、無文碗、劃花文碗、蓮弁文碗、雷文帯碗に分類できる。

無文碗　無文碗は口縁部をそのまま上方に引き上げるもの（707・1039）と口縁部が外反するもの（812・1565）とがある。707・1039は上田分類Ｅ類に相当し、15世紀代に、812・1565はＤ－１類に相当し、14世紀代にそれぞれ比定される。

劃花文碗　劃花文碗（556・1403・1517）はいずれも、体部内面に片切り彫りで草花文を施文するもので、山本分類碗Ⅲ－１Ｂ類に相当し、13世紀中頃から14世紀初頭に比定される。

蓮弁文碗　蓮弁文碗は蓮弁文の施文方法、形態の違いから、片切り彫りで鎬蓮弁を施文するもの（264・

880・881)、鎬のあまい蓮弁文を施文するもの（813・1567)、線刻の広形蓮弁を施文するもの（311・343・1158)、線描きの細蓮弁を施文するものに分類できる。細蓮弁文碗はさらに剣頭と蓮弁が一致するもの（265・710）と一致しないもの（708・709・711）に細分される。264・880・881は山本分類碗Ⅱ類に相当し、13世紀前半代に、813・1567は碗Ⅳ類に相当し、14世紀初頭～後半代に、311・343・1158は上田分類Ｂ－Ⅲ類に相当し、14世紀後半～15世紀前半代にそれぞれ比定される。また、細蓮弁文碗は265・710が上田分類Ｂ－Ⅳ類相当で15世紀後半～16世紀前半に、708・709・711がB-Ⅳ' 類に相当し16世紀代に比定されている。

雷文帯碗　雷文帯碗（134・496）は外面にくずれた雷文帯を施文するもので、いずれも上田分類Ｃ類に相当し、15世紀代に比定される。

底部のみ残るものは底部内面の文様の有無から内面に印花で草花文を施文しないもの（Ⅰ類　893・1014・1060・1566）と施文するもの（Ⅱ類）に分類できる。施文の無いものはいずれも、施釉部位は高台の側面までで、高台畳付以下は露胎である。

施文するものは、高台畳付以下が露胎のもの（Ⅱ-１類　370・816・842・1546・1693)、畳付まで施釉し高台裏は露胎もの（Ⅱ-２類128・208・221・497・1427・1688・1901)、高台畳付も含めて全面に施釉した後、高台裏の釉を蛇の目状に釉ハギするもの（Ⅱ-3類　133・138・260・698・1018）に分類される。上田分類などから、Ⅰ類は13世紀代、Ⅱ-１類は14世紀代、Ⅱ-2類は14世紀後半～15世紀代、Ⅱ-3類は15世紀代にそれぞれ比定される。

この他、碗には、小碗、浅形碗、束口碗がある。

小碗　小碗（427）は口縁部を輪花状に成形し、体部外面に白堆で縦に界線を入れるもので、山本分類小碗Ⅰ-3類に相当し、12世紀中頃～後半代に比定される。

浅形碗　浅形碗（817）は高台が比較的幅が広く低く、体部は緩やかに斜め上方に延びるもので、山本分類の浅形碗Ⅰ-１類に相当し、12世紀中頃～後半代に比定される。

束口碗　束口碗（1243）は口縁部が内側に屈曲し、外面に鎬蓮弁文を施文するもので、山本分類の束口碗Ⅱ-ｂ類に相当する。

イ　杯

杯は体部と底部の界が大きく屈曲し、体部は直線的に斜め上方に延びるもの（815）と口縁部が外反するもの（1394）とがあり、815は山本分類杯Ⅲ-１類に、1394は杯Ⅲ類に相当し、13世紀中頃～14世紀初頭に比定される。

ウ　皿

皿は平底で底部内面に櫛描きの草花文を施文するもの（330・428)、高台をもち、底部内面に印花で草花文を施文するもの（897)、口縁部は外方にひらき、輪花状に成形し、内面にヘラ彫りで簡易な草花文を施文するもの（719・1417・1585）などがある。330・428は山本分類皿Ⅰ-２ｂ類に相当し、12世紀中頃～後半の時期に、897は皿Ⅳ類に相当し、14世紀初頭～後半の時期に、719・1417・1585は16世紀代にそれぞれ比定される。

エ　盤

盤は口縁部を水平に折り曲げ、端部を上方に摘み上げ、内面にヘラ彫りの蓮弁文を施文するもの（818)、口縁部をＬ字状に屈曲させ、内面に櫛描きで施文するもの（819）・無文のもの（821）がある。形式学的には818が819・821に先行するものと考えられ、14世紀～15世紀代に比定される。

D　青花磁器

青花磁器には碗、皿、杯、盤がある。

ア　碗

碗は底部のみ残存するものと口縁部～体部が残存するもののみで、全体の器形がわかるものはない。底部のみ残存するものは、高台が細いもの（269・458）と高台の幅が広く低い粗製のもの（600）がある。文様には雲龍文（269）、草花文（600）などがある。また、口縁部～体部の残るものは、口縁部をそのまま上方に引き上げるもの（267・312）と口縁部が外反するもの（562）がある。文様には梅花文（267）、鹿文（312）、龍文で高台裏に「大明成化年製」の銘をもつもの（562）などがある。いずれも16世紀代の景徳鎮窯産の製品と考えられる。

イ　皿

皿は底部のみ残存するものには、高台が細く低いもの（194・382・877）、幅が広く低いもの（196）、碁笥底を呈するもの（268）がある。196の高台畳付には砂が附着し、17世紀前半代の漳州窯産の可能性が高い。また、194・268・382・877は16世紀代に比定される。口縁部まで残存するものには、口縁部をそのまま上方に引き上げるもの（195・209）と外方にひらくもの（113・215）とがある。113は内面に芙蓉手を施文し、17世紀初頭に、また、215は底部外面に「天文」銘をもち、16世紀後半～17世紀初頭にそれぞれ比定される。また、109・209も16世紀後半～17世紀初頭に比定される。

ウ　杯

杯（270・1313）はいずれも口縁部が外反するもので、16世紀後半～17世紀初頭の時期が考えられる。

エ　盤

499は底部の器壁が厚く、畳付に砂の附着するもので、17世紀前半代の明青花と考えられる。

E　天目茶碗

820は高台は浅く削り出す内反り高台で、体部は直線的に斜め上方に延び、口縁部は僅かに外反する。外面に鉄釉を施釉し、禾目状に発色する。瀬戸天目茶碗の中Ⅲ期のものと形態的には類似し、生産時期は14世紀前半以前に求められる。そのほか、国外産（朝鮮製？）の施釉陶器と考えられる盤片（1363）が出土している。

② 肥前系磁器

肥前系磁器には白磁、青磁、染付磁器がある。

A　白磁

ア　碗

碗（1707）は底部と体部の界が大きく屈曲し、体部は直線的に斜め上方に延びる。Ⅴ期の製品で18世紀後半～19世紀前半に比定できる。

イ　皿

皿（1747）は底部の器壁は非常に厚く、底部内面は蛇ノ目状に釉ハギする。外面の体部下半以下は露胎である。18世紀前半代の波佐見産の製品と考えられる。

ウ　仏具碗

仏具碗（1697）は底部は外周を残して高台状に浅く削り出すもので、Ⅳ期に相当し18世紀代の製品と考えられる。

エ　紅皿

紅皿（1662・1710・1810・1899）は型作り成形で、体部外面に型で花弁状に縦線を施文する。内面～口縁部外面にかけて透明釉を施釉し、体部外面以下は露胎である。Ⅴ期相当のもので19世紀前半の時期に比定される。

B　青磁

青磁には碗、皿、火入がある。

ア　碗

碗（281）は体部は僅かに内彎し、口縁部は直立する。

イ　皿

皿は高台の細く高いもの（371）と幅が広く低いもの（689）とがある。いずれも外面の体部下半以下は露胎で、底部内面は蛇ノ目状に釉ハギする。17世紀後半～18世紀前半代に比定される。

ウ　火入

火入（1726・1811）はいずれも体部が直立し、口縁端部は内側につまみ出す。1811は脚をもち、脚の外面は型押しで鱗文を施文する。

C　染付青磁

染付青磁には碗、蓋、杯がある。

ア　碗

碗は底部の器壁は厚く、体部は内彎する。外面は青磁釉を施釉し、底部内面に呉須で菊花文を施文するもの（40・1812）と施文しないもの（1813）とがある。いずれもⅣ期相当で18世紀後半代の時期が考えられる。

イ　蓋

蓋（1743）は外面に青磁釉、内面は呉須で斜格子文を施文する。Ⅴ期相当で18世紀後半～19世紀前半代に比定される。

ウ　杯

杯（1704）は体部は直立し、外面に青磁釉を施釉する。底部内面にはコンニャク印判で五弁花文を施文する。Ⅴ期相当で18世紀後半～19世紀前半に比定される。

D　染付磁器

染付磁器には、碗、皿、小碗、杯、仏具碗、花瓶、油壺、徳利、鉢、蓋などがある。

ア　碗

碗は肥前磁器の編年観から見ると、Ⅱ期に相当するもの(375)、Ⅳ期相当のもの(77・78・79・80・81・82・1581・1663・1664・1702・1703・1727・1728・1729・1730・1731・1733・1750・1752・1758・1759・1760・1814・1815・1816・1818・1819・1820・1824・1826・1882・1902)、Ⅴ期相当のもの(1732・1761・1762・1798・1827・1828・1829・1830・1831・1832・1833・1903)があり、17世紀後半～18世紀代のⅣ期のものが大部分を占める。

Ⅱ期相当の375は体部はほぼ直線的に斜め上方に延び、外面には一重の網目文を施文する。17世紀中頃の時期が考えられる。

Ⅳ期相当のものは、文様からは、草花文を施文するもの(78・79・82・1664・1702)、雪輪に梅花文を施文するもの(1703・1729・1752・1815・1826)、梅花文を施文するもの(80・1814)、丸文を施文するもの(41)、家屋に草花文を施文するもの(42)、山に草花文を施文するもの(81)、唐草文を施文するもの(1820)、団扇文を施文するもの(1824)、割筆で二重網目文を施文するもの(1759・1818・1882)、コンニャク印判で菊花文を施文するもの(83・1851・1227・1729・1730・1758・1760・1902)、桐文を施文するもの(1663)、松文を施文するもの(1728)、紅葉文を施文するもの(1750・1819)、くずれで文様の不明のもの(1816)などがある。

Ⅴ期相当のものには、形態から、高台の細く高い広東碗タイプのもの(1761・1827・1828・1829・1830・1831・1832・1833・1903)、京焼風の端正なプロポーションをもち、外面に稲束文を施文するもの(1798)、高台が「ハ」の字状にひらき、外面に幾何学文を施文するもの(1732・1762・1817)などがある。いずれも、18世紀後半～19世紀前半

代に比定される。また、広東碗の外面の文様には、草花文(1827・1829)、山水楼閣文(1828)、山水文(1831・1833)、鳥に松文(1761)、雀に稲束文(1830)、筍文(1832)、人物文(1903)などがある。

イ　皿

皿にはⅡ期相当のもの(197・373・374・1537)、Ⅲ期相当のもの(1665)、Ⅳ期相当のもの(1736・1737・1738・1739・1740・1741・1745・1771・1843・1844・1846・1848)、Ⅴ期相当のもの(1845・1905)があり、碗同様Ⅳ期のものが最も多いが、碗に比べてⅡ期、Ⅲ期のものの比率は高く、逆にⅤ期相当のものの比率は低くなる傾向を示す。

これは、Ⅱ期・Ⅲ期には碗は肥前系陶器の比率が高く、Ⅳ期になって本格的に肥前産の磁器碗の搬入が開始されたことを示し、また、Ⅴ期では皿は瀬戸・美濃、あるいは関西系の陶磁器皿の比率が高くなることに起因するものと考えられる。

Ⅱ期相当の皿は高台が小さく低い。文様には草花文（197・374）、菊花文（373）、菊花文と底部外面に「大明成化年製」銘をもつもの（1537）などがある。17世紀前半～中頃の時期が考えられる。

Ⅲ期相当のものには、松竹梅文を描くもの（1665）があり、17世紀中頃～後半に比定される。

Ⅳ期相当のものの文様には、草花文(22・38・84・372・737・1738・1739・1745・1771・1843・1845・1848)、梅花文（114）、桜葉文（1740）、竹葉文（1741）、格子状文（1849）などがあり、底部内面は蛇ノ目状に釉ハギするものが多い。17世紀後半～18世紀後半代に比定される。

Ⅴ期相当のものは、蛇ノ目凹形高台で内面に草花文を施文するもの（1845）、体部が短く直立し、内面に扇文を施文するもの（1905）などがあり、いずれも18世紀後半～19世紀前半の時期が考えられる。

ウ　小碗

小碗には体部は内彎し外面に簡略化された草花文を描くもの（1822・1823）がある。17世紀後半～18世紀前半代の波見産の製品と考えられる。

エ　杯

杯にはⅡ期相当のもの（198）、Ⅳ期相当のもの（1842）、Ⅴ期相当のもの（1836・1837・1838・1839・1840）などがある。

Ⅱ期相当の198は体部外面にヘラ状工具で縦線を施し、「寿」字文を施文するもので、17世紀前半代に比定される。

Ⅳ期相当の1842は、体部は直立し、体部外面にコンニャク印判で菊花文を施文するもので、18世紀代に比定される。

Ⅴ期相当のものは、いずれも輪高台をもち体部は直立する。外面の文様には、窓絵風の草花文（1734）、草花文（1763・1836・1837）、格子目文（1735）、菊花文（1840）、藤文（1838）、笹葉文（1839）などがあり、いずれも18世紀後半～19世紀前半代の時期が考えられる。

オ　仏具碗

仏具碗には高台中央部を浅く削りだし、外面に草花文を描くもの（86）、松葉文を描くもの（87）、高台は蛇ノ目凹形高台風に削り出し、口縁部は外反し、外面に半截菊花文を描くもの（1851）などがある。86・87はⅣ期相当で18世紀後半の時期が、また、1851はⅤ期相当で18世紀後半～19世紀前半の時期がそれぞれ考えられる。

カ　花瓶

88は体部が大きく屈曲し、体部外面に笹葉文を描くもので、Ⅲ期相当と考えられ、17世紀後半の時期に比定される。1852の体部は直立し、体部外面に蛸唐草文を施文する。Ⅴ期相当で、18世紀後半～19世紀代に比定される。1909の体部は大きく内彎し、頸部は直立、口縁部は僅かに外方にひらく。体部外面には草花文を描く。

Ⅳ期相当と考えられ、18世紀代に比定される。

キ　油壷

油壷（376）の体部は大きく内彎し、頸部は短く直立して、口縁部は外方にひらく。体部外面には梅花文を描く。Ⅳ期相当と考えられ、18世紀前半代に比定される。

ク　徳利

徳利（1742）は底部は碁笥底状に削りだし、体部は大きく内彎する。体部外面には草花文を描く。Ⅱ期相当のものと考えられ17世紀前半～中頃の時期に比定される。

ケ　鉢

鉢（1778）は体部が内彎し、体部外面に草花文と蝶文を描く。底部内面は蛇ノ目状に釉ハギし、コンニャク印判で五弁花文を描く。Ⅳ期相当で18世紀代に比定される。

コ　蓋

蓋（1850）は外面に丸文を描く碗蓋である。碗1732の蓋でⅤ期に相当し、18世紀後半～19世紀前半の時期が考えられる。

E　色絵磁器

肥前産と考えられる色絵磁器には皿がある。

ア　皿

皿（1847）は高台は低く、内面に呉須と赤絵で鶴文、草花文などを描く。Ⅲ期相当で17世紀中頃～後半の製品と考えられる。

③ 瀬戸・美濃系磁器

瀬戸・美濃産と考えられる染付磁器には杯と蓋がある。

ア　杯

杯（1841）は体部は直立し、外面はやや滲んだ呉須で丸文に格子状文を施文する。19世紀前半以降の時期が考えられる。

イ　蓋

蓋（1906）は外面に剣頭文などを施文するもので、19世紀前半以降の時期が考えられる。

④ 三田系磁器

18世紀末～19世紀前半に摂津国有馬郡三田（現在の兵庫県三田市）で、生産を始め、青磁を中心に大正年間まで続いた三田焼の製品には、青磁の香炉と角皿がある。

A　青磁

ア　香炉

香炉（193）は体部はほぼ直立し、口縁部は水平に内側に折り曲げる。外面に算木文を型押しで施文する。内面は露胎で明赤褐色に発色する。19世紀前半代の時期が考えられる。

イ　角皿

角皿（1900）は型作り成形で、口縁部の四隅は輪花状に成形する。内面には型押しで草花文を施文する。高台畳付は露胎で明赤褐色に発色する。19世紀前半に比定される。

⑤ 産地不明の磁器

この他、産地の特定できない磁器には、白磁、青磁、染付青磁、染付磁器、色絵磁器などがある。

A　白磁

白磁には碗がある。

ア　碗

碗（76）は型作り成形のミニチュアの碗で、高台脇以下は露胎である。

B　青磁

青磁には碗がある。

ア　碗

碗（455）は底部の器壁は非常に厚く、内外面ともオリーブ灰色に発色する。

C　染付青磁

染付青磁には蓋がある。

ア　蓋

蓋（43）は外面に青磁釉を施釉し、内面に呉須で斜格子文を施文する碗の蓋である。

D　染付磁器

染付磁器には、碗、蓋、皿、花瓶、用途不明品がある。

ア　碗

碗は高台の形態から、高台が直立するもの（Ⅰ類）と「ハ」の字状に外方にひらくもの（Ⅱ類）に大きく分類できる。Ⅰ類はさらに口縁部をそのまま上方に引き上げるもの（Ⅰ-1類　1821）と外反するもの（Ⅰ-2類　1870）に細分される。またⅡ類も同様に口縁部をそのまま上方に引き上げるもの（Ⅱ-1類　1817）と外反するもの（Ⅱ-2類　1825・1834・1835）に細分される。いずれも、19世紀前半以降～近代の製品と考えられる。

イ　蓋

蓋には、碗蓋（44・45・1849）、壷の蓋（115）、鉢の蓋（589）などがある。外面の文様には草花文（44・45・115）、鶴文（589）、海浜風景（1849）などがあり、いずれも、19世紀前半以降の製品と考えられる。

ウ　皿

皿（590）は底部内面に鮮やかな呉須で荒磯に鷹を施文するもので、近代以降の製品と考えられる。

エ　御神酒徳利

御神酒徳利（592）は体部は内彎し頸部は細長く直立する。外面には鮮やかな呉須で、松に梅花文を型紙摺りで施文する。近代以降の時期が考えられる。

オ　用途不明品

591は筒状に成形し、内面は中空で露胎である。内面にはまた煤の附着が見られることから、蝋燭の火消しの可能性が考えられる。

E　色絵磁器

色絵磁器には、碗と仏花瓶がある。

ア　碗

碗（588）は体部は内彎し、高台は外方にひらく。外面の色絵で草花文、幾何学文を描くが赤絵以外は剥落している。

イ　仏花瓶

仏花瓶（1853）は体部は大きく内彎し、頸部は長く直立して、口縁部は大きく外方にひらく。外面に赤絵を主に草花文、界線などを描くが、赤絵以外の顔料は剥落している。体部外面には縦耳を貼り付け、中国製の尊形花瓶の写しである。

引用・参考文献

(1) 伊野近富　1995　「土師器皿」　『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会

(2) 小森俊寛　上村憲章　1996　「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」　『研究紀要』　第3号　京都市埋蔵文化財研究所

(3) 鈴木康之　1995　「土師質土器椀」　『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会

(4) 尾上　実　1983　「南河内の瓦器椀」　『藤澤一夫先生古希記念古文化論叢』

(5) 尾上　実　森島康夫　近江俊秀　1995　「瓦器椀」　『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会

(6) 立石堅志　1995　「奈良火鉢」　『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会

(7) 岡田章一　長谷川　眞　2003　「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」　『研究紀要』　第3号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

(8) 五十川伸矢　1997　「中世の鍋釜」　『国立歴史民俗博物館研究報告』　第71集

(9) 十河良和　1996　「堺環濠都市遺跡出土の土師質土器・焙烙について」　『関西近世考古学研究』Ⅳ

(10) 重根弘和　2003　「中世備前焼に関する考察－形態と変遷と年代について－」　『山口大学考古学論集　近藤喬一先生退官記念論文集』

(11) 間壁忠彦　葭子　1966a　「備前焼研究ノート(1)－備前焼の成立－」『倉敷考古館集報』　1

(12) 間壁忠彦　葭子　1966ｂ　「備前焼研究ノート(2)－中世備前焼の推移－」『倉敷考古館集報』　2

(13) 間壁忠彦　葭子　1968　「備前焼研究ノート(3)－備前焼窯址の分布とその性格－」『倉敷考古館集報』　5

(14) 間壁忠彦　葭子　1994　「備前焼研究ノート(4)－その後の新資料－」　『倉敷考古館集報』　18

(15) 乗岡　実　2000　「備前焼擂鉢の編年について」　『第3回　中近世備前焼研究会資料』

(16) 井上喜久雄　1983　「大坂城三の丸跡における初期近世窯の様相」　『大坂城三の丸跡Ⅱ』　大手前女子大学史学研究所・大坂城三の丸跡研究会

(17) 長谷川　眞　2003　「中世丹波焼の変遷と技術移入・導入－杉本捷雄氏採集資料の再検討に向けて」　『中近世土器の基礎研究』ⅩⅦ　日本中世土器研究会

(18) 長谷川　眞　2000　「近世丹波系擂鉢とその系譜関係」　『関西近世考古学研究』Ⅶ　関西近世考古学研究会

(19) 中野晴久　1994　「生産地における編年について」　『中世常滑焼をおって』　資料集

(20) 中野晴久　1995　「常滑・渥美」　『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会

(21) 藤澤良祐　1995a　「(生産3)　瀬戸」　『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界－その生産と流通－』　資料集

(22) 藤澤良祐　1995ｂ　「古瀬戸」　『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会

(23) 井上喜久雄　1985　「美濃焼の研究（一）」　『東洋陶磁』　第15・16号　東洋陶磁学会

(24) 大橋康二　1984　「肥前陶磁の変遷と出土分布－発掘資料を中心として－」　『国内出土の肥前陶磁』　九州陶磁文化館

(25) 大橋康二　1993　『肥前陶磁』　ニューサイエンス社

(26) 九州近世陶磁学会　2000　『近世陶磁の編年』

(27) 関西陶磁史研究会　2001　『近世信楽焼をめぐって』　研究集会資料集

(28) 白神典之　1992　「堺摺鉢考」　『東洋陶磁』　第19号　東洋陶磁学会

(29) 稲原昭嘉　2000　「明石擂鉢の編年について」　『近世の実年代資料』　第12回　関西近世考古学大会資料集　関西近世考古学研究会

⑶0 稲原昭嘉　1997　「明石城における17・18世紀の器種構成」　『関西近世考古学研究』　V　関西近世考古学研究会
⑶1 横田賢次郎　森田　勉　1978　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－形式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』　4　九州歴史資料館
⑶2 森田　勉　1982　「14～16世紀の白磁の分類と編年」　『貿易陶磁研究』　No. 2　日本貿易陶磁研究会
⑶2 上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』　No. 2　日本貿易陶磁研究会
⑶3 山本信夫　2000　「磁器の分類」　『大宰府条坊跡Ⅴ－陶磁器分類編－』　太宰府市教育委員会
⑶4 小野正敏　1982　「15～16世紀の染付碗、皿の分類と編年」『貿易陶磁研究』 No. 2 日本貿易陶磁研究会
⑶5 田中賢人他　1996　『三田焼の研究－三田志手原　小西家寄贈土型資料調査報告書』　三田市教育委員会

2　土製品

土製品には土錘、面子、器物形、動物形、人形などがある。

① 土錘(5～21・48～50・89・116・158・159・200・219・271～275・327～329・432・459・501～503・574～578・730・731・1323・1641)

土錘は海に近い港町という地理的条件から、比較的多く出土している。いずれも土師質で棒状の芯に粘土を巻きつけて成形し、表面はナデ調整により平滑に仕上げられている。

② 面子

面子には型抜き成形の泥面子、器物片の縁辺部を打ち欠いて成形した転用面子がある。

ア　泥面子

型抜き成形されたもので、表面には「稲妻」を型押し施文するもの(377)、「稲」を施文するもの、「Ｓ」字状文(分銅か？)を施文するもの(1914)などがある。この他、型抜き成形で、円柱状を呈し、無文のもの(1055)がある。やや泥面子としては異形であるが、ここでは泥面子として報告する。

イ　転用面子

器物片の縁辺部を打ち欠いて円形に成形したもので、原体が瓦のもの(51・1168)、土師器の鍋・皿のもの(344・460・1016・1167・1386・1405・1420・1532・1541・1568・1611・1633・1642)、須恵器の鉢・甕のもの(1191・1192・1389・1611・1684)、瀬戸・美濃系の灰釉陶器のもの(161)などがある。

ウ　泥面子の型

1667は内面に人物の顔を陰刻しており、泥面子の型と考えられる。

③ 器物形・動物形・人形

ア　器物形

器物形には型作り成形の家形(90)、灯篭形(130・1709)、蓋形(46)、羽釜形(160)、舟形(202)、螺髪状土製品(1854・1855)、楼閣形(1857)、鉢形(1858)、丁銀形(1859)と手づくね成形の三足鍋形(1244)など様々な形態のものがある。1244以外は近世後半のものと考えられる。

イ　動物形

動物形には型作り成形の亀形(1856)がある。

ウ　人形

人形はすべて型作り成形で、阿弥陀像(52)、地蔵像(91)、僧形像(92)、大黒天像(93)、天神像(94・95)、菩薩像(96・378)、三番叟(97)、猪に跨る人物像(149)、騎馬人物像(201)、唐人像(1915)など様々のものがある。いずれも、

近世後半の所産と考えられる。

④ 紡錘車

1015は磨耗が著しく方形に変形しているが、紡錘車と考えられる。

⑤ 土馬

1390は手づくね成形の土馬である。ヘラ状工具で目を施文するが、表面は著しく磨耗する。

3　瓦

瓦には丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、桟瓦、鳥衾、井戸瓦などがある。

① 丸瓦

461・505は外面に縦方向の板ナデ調整を施す丸瓦である。いずれも燻し瓦で近世以降の製品と考えられる。

② 平瓦

216・504は外面に横方向の板ナデ調整が施される。また、596には外面に「兵吉」の刻印が施される。いずれも、燻し瓦で近世以降の製品と考えられる。

③ 軒丸瓦

軒丸瓦はほとんどが巴文軒平瓦(203・345・656・690・1670・1764・1765・1862)であるが、1493は中央に「福」の字を施文し、周囲を28個の珠文が巡るものである。福厳寺の瓦の可能性が考えられる。また、1913には「久」の文字が施文され、1910は無文である。

④ 軒平瓦

軒平瓦はいずれも唐草文軒平瓦（204・279・280・1860・1911・1912）である。

⑤ 桟瓦

1671・1861はいずれも桟瓦である。近世後半～近代の製品と考えられる。

⑥ 鳥衾

691は巴の尾は比較的長く、珠文数は8個を数える。内外面ともナデ調整を施す。鳥衾と考えられる。

⑦ 井戸瓦

597・1516・1572・1863は平面形状は正方形を呈し、外面にはヘラでジグザグ文を施す井戸瓦である。いずれも近世後半～近代の所産と考えられる。

4　石製品

石製品には硯、石鍋、温石、砥石、石臼がある。

① 硯

135・139はほぼ完存する。平面形状は長方形を呈し、海部は楕円形を呈する。135は側面、裏面にも擦痕が残る。278は海部が非常に浅く、裏面に文字を線刻する。546は携帯用の小型の硯である。海部のみ残存する。器面には墨痕が残る。1419は裏面が剥離し、海部には擦痕が著しく残る。

② 石鍋

石鍋は全て体部～口縁部のみが残るもので、全体の器形が分かるものはない。ここでは木戸分類に従って記述する。これらの石鍋はいずれも木戸分類のⅢ類に相当するもので、鍔の位置及びその形態から、鍔が口縁部よりやや下に位置し、断面は台形状を呈するⅢａ－2類(896)、鍔が口縁部に近く、断面台形状を呈するⅢｂ類(506・1193・1247・1554・1610・1624・1643)、鍔は口縁部直下にあり、断面三角形状のⅢｃ類(866・1246・1338・1371)、

鍔が更に小さくなるⅢｄ類(822･1694)、鍔が形骸化するⅢｅ類(545)に分類できる。Ⅲａ－2類は12世紀後半に、Ⅲｂ類は13世紀代に、Ⅲｃ類は14世紀前半に、Ⅲｄ類は14世紀後半に、Ⅲｅ類は15世紀前半にそれぞれ比定されている。

③ 温石

1569は一部を欠損し、現状は台形状を呈する。一箇所穿孔が見られ、内外面ともノミの調整痕が認められる。石鍋を転用した温石と考えられる。

④ 砥石

867は平面形状は台形を呈し、両面とも擦痕が認められる。1871は平面形状は台形で、側面は使用により摩滅、欠損する。

⑤ 石臼

433は器面は平滑に仕上げる茶臼の上臼である。1767は花崗岩製で、側面に把手を付ける孔を穿孔し、器面には斜め方向の刻みを入れる。器面の摩滅が著しい。

⑥ 面子

1388は滑石製で縁辺を打ち欠いて円形に成形する。面子と考えられる。

引用・参考文献

(1) 木戸雅寿　1995　「石鍋」　『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会

5　金属製品

釘（図版168～185　写真図版160～167　第10表参照）

いわゆる和釘と呼ばれるもので、基本的に軸の断面が方形を呈し、その太さは漸次細くなって先端となるものである。釘にはその材料、形状、及び用途によって、種々の名称と大小がある。

安田善三郎著『釘』大正5年12月刊行を参考として、兵庫津遺跡出土の釘を見ると、その形状から角釘（かくくぎ）、頭巻釘（かしらまきくぎ）、折釘（おりくぎ）（平折釘（ひらおりくぎ）、皆折釘（かいおりくぎ））、合釘（あいくぎ）、平釘（ひらくぎ）、切釘（きりくぎ）に分類される。

釘の種類と形状は、

角　釘：普通の角形釘。

頭巻釘：角釘の頭を平らにし、巻いたもの。

折　釘：頭部が扁平で、直角に折り曲げた釘、平折釘と皆折釘に分類される。

　平折釘：折釘で頭部が薄く平たいもの。

　皆折釘：折釘で貝折釘とも書く。頭部が厚く平たいもの。

合　釘：両端が尖る、まっすぐな釘で、材と材を繋ぐのに用いる。

平　釘：頭部が平たい釘。

切　釘：頭部のない釘、などがある。

これらの釘について、既述の文献では、製品名として平釘には、七寸釘、六寸釘、五寸釘、四寸釘、三寸五分釘の存在が記述されている。当時の製釘技術からすると、原料（地金）を小割にして１本１本作りだしたことから、製品名と同じ長さの釘を生産することは難しく、不揃いが通常であった。そのため、出土した釘の計測値によって製品名にまで迫ることは不可能と考え、長さと方形の幅（厚さ）を記述するのにとどめた。

第10表を作成するのにあたり、ここでは遺存する寸法を記した。遺物は、ほとんど鉄錆に覆われているため、錆取り後に実測した。保存処理に先立ち、Ｘ線透過写真を撮影した。そのためＸ線透過写真で確認できる計測

値は（ ）内に記述した。また計測位置は、図版中に示した。

鎹（図版172　写真図版161　M82、図版180　写真図版165　M252、図版182　写真図版166　M304、図版184　写真図版167　M347・349・350、図版186　写真図版168　M368、第11表参照）

二つの材と材を合わせ、繋ぎ留めるために打ち込む、両端が尖り、直角に曲がった釘である。そのほとんどは断面が正方形で両脚部が平行である。断面が扁平な長方形を呈する大型のM347・349・350や、M252、304のように長さ5.4cmや3.5cmを測る小型のものもある。また、M82のように全体が扁平な板状で一端は直角に折れて先端が尖り、他端に小孔をもつ目鎹などもある。

不明鉄製品（図版185　写真図版167　M351）

形態は、表面が長方形、断面は三角形を呈する鉄製品である。その形の上下等は不明である。表面は錆化し、破損している。用途は不明である。８区、ＳＫ02出土。

遺存する大きさは、縦3.85cm、横2.45cm、最大の厚さ1.05cmである。

不明鉄製品（図版185　写真図版167　M352）

上部が欠損した棒状鉄製品である。下部の先端部は使用の後、湾曲して尖っている。用途は不明である。13区、ＳＫ13出土。

遺存する長さ5.6cm、最大幅1.3cm、厚さはＸ線透過写真によると0.05cmである。

不明鉄製品（図版185　写真図版167　M353）

鉄鏃状の鉄製品、錆で覆われている。上部は三角形を呈し、断面は菱形である。下部の茎は断面四角の角柱がつき一体となっている。Ｘ線透過写真によると鉄鏃に似た形のものが投影されている。用途は不明である。15区、ＳＫ43出土。

遺存する長さ5.9cm、三角形の部分の長さ1.7cm、幅1.6cm、断面の厚さ1.0cm、茎の長さ4.3cm、一辺0.75cm角である。

ボルト・ナット（図版185　写真図版167　M354）

ナットとセットとなっているボルト（おねじ）をもち、軸部のほか頭部がある。この遺物は、頭部が欠損したボルトと六角形のナットである。ボルトには平行する刻みがある。18区、ＳＸ81出土。

遺存する長さ4.0cm、ボルトの径0.8～0.75cm、ナットの外形1.15cm、内径0.5cmである。

ピン状鉄製品（図版185　写真図版167　M355）

上端部を環状に曲げてピン状にした断面四角の鉄製品である。先端部は欠損している。23区、ＳＫ06出土。

遺存する長さ4.3cm、環の径1.1cm、断面は、0.45～0.4cmを測る。

不明鉄製品（図版185　写真図版167　M356）

先端部分が内湾する鎌の形を呈する鉄製品である。断面を見ると刃部と柄部とに分かれ、刃部は断面が三角形をなし、外側に位置する。柄部は断面が四角形を呈する。欠損部分はないが、その用途は不明である。23区、ＳＫ09出土。

遺存する長さ12.8cm、刃部の最大幅1.3cm、長さ5.3cm、柄の長さ7.5cm、幅0.9cm、0.65cmを測る。

不明鉄製品（図版185　写真図版167　M357）

鎌状の鉄製品である。刃部と柄部とに別れ、刃の先端部が欠損している。柄の部分には木柄を留める目釘孔がなく、柄の一部が欠損している。刃の断面は、内側に三角形を呈し、柄部は四角の断面を呈している。その用途は不明である。26区、ＳＫ29出土。

遺存する長さ6.75cm、刃部の幅1.78cm、最大厚さ0.75cm、柄の厚さ１辺0.5cmを測る。

不明鉄製品（図版185　写真図版167　M358）

上･下端が欠損した楕円形を呈する鉄柱の中位に鉄製の帯を巻いている。模様等は見られない。用途は不明である。26区、ＳＤ01出土。

遺存する長さは6.4cm、楕円形の径0.6～0.55cm、帯状の鉄製部品は、Ｘ線透過写真によると幅約0.4cmを測る。

不明鉄製品（図版185　写真図版167　M359）

一見羽子板状を呈する鉄製品である。用途は不明である。27区、Ｐ01出土。

遺存する長さは、4.45cm、最大幅1.25cm、厚さは0.3～0.25を測る。

火箸（図版185　写真図版167　M360）

１本の針金の頭部を円環にして、捻りをかけて１本の火箸とし、先端部分を溶接して、１対とした鉄製火箸である。頭部円環には、円環と円環を繋ぐ一般的な鎖を用いている。28区、ＳＥ02出土。

長さは、35.7cm、火箸の径は上端から下へ約３分の１のところで0.85cm、下端から上へ約３分の１のところで0.55cm～0.5cmを測る。

不明鉄製品（図版185　写真図版167　M361）

鉞状を呈する鉄製品である。上端が欠損しているため、全体の形は不明である。用途は不明である。下端部は、湾曲して端部となる。29区、包含層出土。

遺存する長さ7.4cm、最大幅4.05m、厚さ0.7cmを測る。

不明鉄製品（図版185　写真図版168　M362）

上下端部が欠損する長方形であり、用途は不明である。30区、ＳＫ10出土。

遺存する長さ9.7cm、幅1.9cm、厚さ0.9～0.75cmを測る。

不明鉄製品（図版185　写真図版167　M363）

遺存状態が悪く、形は台形状を呈する。表面には、目口穴が対になるように穿たれている。用途は不明である。30区、ＳＫ30出土。

遺存する長さ、約2.8cm、最大幅2.0、厚さ0.4～0.3cmを測る。

板状鉄製品（図版186　写真図版168　M364）

重量感のある板状鉄製品である。側面は、鉄板切断時の際に被熱し、変質している。用途は不明である。31区、ＳＤ01出土。

遺存する長さ、縦12.85cm、最大幅5.5cm、厚さは0.8cmを測る。

不明鉄製品（図版186　写真図版168　M365）

柳葉形を呈する先端部と基部が欠損した鉄製品である。錆化が著しく原形を復元することができない。用途は不明である。31区、ＳＤ33出土。

遺存する長さ9.25cm、最大幅2.3cm、基部の幅1cm、Ｘ線透過写真によると厚さ0.45～0.35cmを測る。

刀子（図版186　写真図版168　M366）

小形の刀形を呈し、身と茎に分かれる鉄製の刀子。身の断面は三角形、茎は長方形である。茎の下端は欠損している。31区、ＳＫ34出土。

Ｘ線透過写真によると長さ8.85cm、身の長さ7.7cm、茎の長さ1.15cmである。身の最大幅0.9cm、茎の幅は0.7cmである。鎬の幅0.25cm、茎の厚さ0.2cmを測る。

不明鉄製品（図版186　写真図版168　M367）

上下端を欠く中空の円柱、錆化のため原形を保っていない。用途は不明である。32区、ＳＫ10出土。

遺存する最大の長さ4.9cm、X線透過写真によると地金の幅1.83cm、孔の径0.75cmである。

鉤状鉄製品（図版186　写真図版168　M369）

先端部が鉤状に曲がる四角柱である。用途は不明である。38区、ＳＫ06出土。

遺存する全長3.2cm、最大幅1.6cm、四角柱の厚さは、X線透過写真によると0.85cm×0.8cmを測る。

不明鉄製品（図版186　写真図版168　M370）

台形状を呈し、下端部は欠損している。左右の下端部は内側に折り返している。表面には、木質が付着しているがこの鉄製品との関係は不明である。用途は不明である。38区、ＳＫ06出土。

遺存する縦の最大長さ3.5cm、横の最大幅4.85cm、厚さ錆を含めて0.95cmである。

煙管（図版186　写真図版168　M371・372・373、図版187　写真図版168　M378・381・382・385・388・389・393、図版188　写真図版169　M396・397・399・401・403・404・409・410、第12表参照）

真鍮製の煙管が18点ある。これらの煙管のうち、雁首と吸口を別個に製作し、その間の吸管を竹でつなぐ煙管（羅宇煙管）、M371・372・373・385・388・389・393・396・397・399・404・409・410と、雁首は不明であるが、吸管、吸口部分を一体として真鍮により製作された煙管、M382がある。雁首には、M372・378・381・388・389・393・397・401・404・409があり、煙管には、M382が、吸口には、M371・373・385・386・389・403・410が該当する。

雁首全体の形状がわかるものとして、M372と煙管部分が若干欠損しているM404がある。M372は火皿、脂返しまで完全に残り、脂返しは、火皿の付け根から大きく湾曲する。M404は、M372同様の形状をもつものである。

火皿としてM397がある。押しつぶされて円盤状を呈する。

火皿が欠損した雁首が5点ある。M378・381・388・393・409である。ここでも脂返しが大きく湾曲するM378・381と小さく湾曲するM388・393がある。その中でも雁首のうち肩付の遺制を示すものとして、M378・388がある。M409は火皿部分が欠損したもの、M381・378は火皿の補強体を有するものである。M389は肩付きである。

M382は、真鍮製の吸管･吸口が一体となった羅宇である。表面には菊花紋を陽鋳している。

吸口は、８点、長さに若干の長短はあるが、上端より約３分の１のところからラッパ状に開くもの。全形のわかるものとして、M371・373・385・396・399がある。M401・403・410は、下端等が欠損している。

矢立（図版186　写真図版168　M374）

丸い墨壷と小判形の筆筒により構成される。遺存状態は良い。4区、近代埋設甕内出土。

全長16.35cm、墨壷の径3.0cm、筆筒部分の長さ2.9cm、断面の幅は、墨壷近くで1.75cm×1.3cm、下端より約３分の１のところで、1.2cm×1.15cmを測る。

不明鉄製品（図版186　写真図版168　M375）

碗状を呈し、全体の形は不明である。真鍮製の皿かと推測されるもので、部分的に欠損し、折れていた痕跡を残す。用途等は不明である。４区、攪乱層内出土。

遺在する径約9.3cm、底から縁までの高さ1.75cm、厚さ0.05cmを測る。

蝶番（図版187　写真図版168　M376）

１枚の銅板端部を折り曲げ、環状にし、針金を通して一対の金具として、二つの材の境目に釘などで固定して自在に動くようにした金具である。遺物の残存状況は悪く、全体の約２分の１が残存している。表面には固定用の釘孔が穿たれている。金鍍金等は見られない。7区、包含層中出土。

遺存する長さ6.15cm、蝶番の最大幅、現長4.5cm、厚さ0.1cmを測る。表面には、釘孔が4箇所、規則的に穿たれている。

不明銅製品（図版187　写真図版168　M377）

先端は湾曲させた二股の鉤状をもち、下端は環状を形作る無地の銅製品である。用途は不明である。機能部分と柄部に分けると、その境は下端から2.1cmのところにあり、表裏共に段をもうけている。表裏に紋様は施していない。用途は不明である。9区、包含層内出土。

全長6.4cm、機能部の長さ4.4cm、幅0.55cm、厚さ0.25cm（中央部）、柄部の長さ2.1cm、幅0.5cm、厚さ0.35cm、環状部の幅0.95cm、厚さ0.25cmを測る。

和鏡（図版187　写真図版168　M379）

鏡背は、二重界圏によって内区と外区に分けられ、内区に双鶴、松（3ヶ所）を描き、鈕座は亀甲形を呈する銅製の和鏡である。表面は剥離している。10区、ＳＸ02出土。

面径6.9cm、紐径1.25cm、周縁は垂直に立ち上がるもので、その幅0.21cm、高さ0.5cmである。

水滴（図版187　写真図版168　M380）

直方体を呈し、上面中央に突出する長方形の孔、角に小孔をもつものと、底板と思われる板にわかれている。真鍮製である。共に部分的に欠損している。11区、ＳＸ40出土。

縦2.6cm、横5.55cm、高さ1.7cm（1.2cm）を測る。

銅製針金（図版187　写真図版168　M384）

直径約0.1cmの針金である。14区、包含層内出土。遺存状態での長さ2cm、幅0.9cmである。

刀の切羽（図版187　写真図版168　M387）

鍔を両側から固定する板金である銅製の切羽。小判型を呈し、刀身の入る茎穴は一部損壊している。15区、ＳＫ01出土。

遺在する長さ3.0cm、幅2.4cm、厚さ0.09cmを測る。

不明銅製品（図版187　写真図版168　M390）

上下端が欠損した用途不明の銅製品である。15区、包含層内出土。

遺存する長さ4.1cm、幅1.9cm、厚さ0.1cmを測る。

不明銅製品（図版187　写真図版168　M391）

薄い板状を呈し、湾曲している。上端が欠損する。用途は不明である。15区、ＳＸ01出土。

遺存する縦の長さ1.8cm、横の最大長さ2.6cm、厚さ0.05cmを測る。

不明飾り金具（図版187　写真図版168　M392）

上下に何かを嵌め込むための凹みを設けた小判形を呈する薄板である。表面には花柄模様の線彫画が描かれている。現状は、内側に湾曲している。用途は不明である。15区、包含層内出土。

遺存する大きさは、縦5.45cm、横4.15cm、厚さ0.01cmを測る。

飾り金具（図版187　写真図版168　M394）

M字形を呈する銅板である。中央に釘孔かと思われる孔が2箇所ある。厚さ0.1～0.3cmの銅板を内側に折り曲げている。用途は不明である。26区、ＳＫ40出土。

遺存する大きさは、縦1.1cm、横1.5cmを測る。

引手金具（図版187　写真図版168　M395）

半月形を呈する銅製の引手である。継ぎ手の部分に環状のわっかが付いている。26区包含層内出土。

引手の縦2.7cm、横5.5cm、最大の厚さは0.6×0.5cmの楕円形である。

飾り金具（図版188　写真図版169　M398）

五弁の花模様をもち、中央に釘孔を穿った銅製の飾り金具である。金鍍金が施されているのか不明である。使用箇所等不明である。26区包含層内出土。

遺存する大きさは、径約1.45cm、厚さ0.05cmを測る。

環状銅製品（図版188　写真図版169　M400）

断面楕円形の銅線を環状に曲げた銅製の環である。図示の如く正円となっていない。32区、ＳＫ03出土。

遺存する銅線の長さ約５cm、大きさ、縦3.15cm、横3.1cm、銅線の幅0.03、厚さ0.028cmを測る。

不明銅製品（図版188　写真図版169　M402）

上下端部を弧状に整えた短冊形を呈する銅製の金属板である。用途は不明である。32区、包含層内出土。

遺存する長さは、6.45cm、最大幅1.85cm、厚さ0.35cmを測る。

引手金具（図版188　写真図版169　M405）

半月形を呈し、端部に釘孔を設けた銅製引手金具である。他の部分は遺存状態が悪く、欠損している。32区、攪乱層内出土。

遺存する部分の長さ7.1cm、復元すると約8.5cm、高さ3.2cm、厚さ0.1cmを測る。

板状銅製品（図版188　写真図版169　M406）

上下端が欠損した銅製の板状のもの、断面は蒲鉾状になり、端部は鈍角を呈する。33区、ＳＫ02出土。

遺存する長さは、6.65cm、最大幅1.75cm、厚さ0.5～0.4cmを測る。

蝶番（図版188　写真図版169　M407）

繋ぎ部分に擬宝珠を鋳だした蝶番の片方、約２分の１出土。目釘孔が１ヶ所遺存している。擬宝珠をつけ開閉部としたもの。銅製のものと思われ、鋳造品かと推測される。33区、Ｐ11出土。

遺存する部分の蝶番の大きさ4.6cm、幅4.15cm、厚さ0.35cm、擬宝珠の径1.3cm、長さ6.1cmを測る。

鋲（図版188　写真図版169　M408）

頭部を扁平に、丸く叩き出した銅製の平鋲である。完全な形を呈する。38区、ＳＫ06出土。

全長3.4cm、鋲頭の幅1.0cm、中位の径0.18cm、先端部の径0.08cmを測る。

把手金具（図版188　写真図版169　M411）

銅製の把手金具である。39区、包含層内出土。

全体の大きさ8.15cm、幅2.75cm、金具中央で径0.6～0.65cm、端部で径0.35～0.45cmを測る。

銅銭（図版178～182　170～173）

兵庫津遺跡では、浜崎・七宮の両地区から銅銭が出土している。ただし、両地区については、主体となる遺構の性格及び時期が異なるため、地区別に報告する。また、浜崎地区出土銅銭は、古いもので皇朝十二銭、新しいもので寛永通寶等の他、多量の渡来銭を図化しているが、調査区分が１～39区と多く、地区別での解説では文言の重複等が生じるため、同種のものを可能な限り一括し、渡来銭についても模倣銭を含めた形で初鋳年代を記載することとした。

浜崎地区出土の銅銭の図版掲載については、１～39区の内、平成８年度調査（960442）：９・11・13・14・39区、平成９年度調査（970050）：１～８・10・12・15～33・35～37区で二分し、それぞれ初鋳年代の古いもの及び形式的に古いもの順を基本としたレイアウトを行っている。このため、同種・同書体の銅銭が複数の図版にまたがっていることをご容赦されたい。

開元通寶（M412～414・522）は唐銭であり、初鋳年代は621年の他、845年鋳のものもあるが、模倣銭も存在することから、図化したものはその可能性も考えられる。また、M522の背面には「狐状」の印がある。

宋通元寶（M415）は北宋銭であり、初鋳年代は968年である。

太平通寶（M416・523）は北宋銭であり、初鋳年代は976年である。

至道元寶（M417）は北宋銭であり、初鋳年代は995年である。

淳化元寶（M418）は北宋銭であり、初鋳年代は990年である。

景徳元寶（M419・524）は北宋銭であり、初鋳年代は1004年だが、模倣銭の可能性もある。

祥符元寶（M420～423・525～527）は北宋銭であり、初鋳年代は1008年である。

咸平元寶（M424～426）は北宋銭であり、初鋳年代は998年である。

天禧通寶（M427～431・528～531）は北宋銭であり、初鋳年代は1017年である。

天聖元寶（M432・532～535）は北宋銭であり、初鋳年代は1023年だが、模倣銭の可能性もある。

明道元寶（M433・536）は北宋銭であり、初鋳年代は1032年である。

景祐元寶（M434～435）は北宋銭であり、初鋳年代は1034年である。

皇宋通寶（M436～449・537～539）は北宋銭であり、初鋳年代は1039年だが、模倣銭の可能性もある。

嘉祐元寶（M540）は北宋銭であり、初鋳年代は1056年である。

嘉祐通寶（M450・541・542）は北宋銭であり、初鋳年代は1056年である。

治平元寶（M451・453）は北宋銭であり、初鋳年代は1064年である。

萬年通寶（M452）は所謂皇朝十二銭であり、初鋳年代は淳仁天皇期の760年である。本遺跡出土の日本銭で最も古いものである。

熙寧元寶（M453～459・543・544）は北宋銭であり、初鋳年代は1068年である。

元豊通寶（M460～467・545～548）は北宋銭であり、初鋳年代は1078年で宋銭中最も多く鋳造されており、書体の変化が大きい。また、模倣銭も存在し、図化したものはその可能性も考えられる。

元祐通寶（M468～474）は北宋銭であり、初鋳年代は1086年だが、模倣銭も存在し、図化したものには書体に若干のバリエーションが見られる。

紹聖元寶（M475～478）は北宋銭であり、初鋳年代は1094年である。

元符通寶（M479～481）は北宋銭であり、初鋳年代は1098年である。

聖宋元寶（M482）は北宋銭であり、初鋳年代は1101年である。

大観通寶（M483・549）は北宋銭であり、初鋳年代は1107年である。

政和通寶（M484～487）は北宋銭であり、初鋳年代は1111年である。

宣和通寶（M488）は北宋銭であり、初鋳年代は1119年である。

慶元通寶（M489）は南宋銭であり、初鋳年代は1201年である。

洪武通寶（M550～555）は明銭であり、初鋳年代は1368年だが、模倣銭も存在する。また、M554は背面に「一銭」の印を持つ。

弘治通寶（M556）は明銭であり、初鋳年代は1488～1503年である。

上記の他の銅銭には、初鋳1636年の寛永通寶（M496～521・557～581）がある。この中には、背面に「文」の印を持つもの（M500・573～575）、「波文」を持つもの（M519～521）が見られ、特に「波文」を有すものは大型である。

6　木器・木製品（図版183～185　写真図版175～177）

浜崎地区から出土した木器で図化したものはW1～19である。

①　下駄

W１～W６がある。いずれも台部に、指など足の痕跡が残り、よく使用された後廃棄されたものである。

W２は下駄の歯で、台形の上端に２カ所のホゾを作り出している。台にはめ込まれた部分には圧痕が残る。下端の損耗度からみて摩滅によって廃棄されたものではなさそうである。W３・W６も二本の溝に歯を差し込む差し歯下駄の中でも、台のホゾ孔に歯のホゾを差し込み、表面にホゾが露出したいわゆる露卯下駄である。W１・W４・W５は一木で台部と歯を作りだした下駄で台部の形状が楕円形を呈するものである。いずれも歯の損耗が著しいが、特にW１・W５が後ろの歯の減りが著しい。W６はやや前開きの長方形を呈している。W１は７区のSK03から出土し、長さ21.35cm、幅10.55cm、高さ3.0cm。W２からW４は８区出土で、W２の幅12.0cm、高さ9.15cm、厚さ2.0cm。W５・W６は27区のSK19出土で、W５は残存長17.25cm、幅8.3cm、高2.55cm。W４は長さ20.25cm、幅9.8cm、高さ2.4cm。W６は20.7cm、幅9.3cm、高さ2.5cm。

②　漆椀

W７・W８は７区のSK03から出土した漆器の椀である。W７は高台が高く、底部が厚い。黒漆に内面のみ朱漆が一部残る。底面の高台の内側に工具痕がみられる。高台径8.7cm、残存高5.8cm。W８は黒漆に朱で円などの文様が描かれている。口径20.2cm、残存高7.2cm。

W９は26区のSK20から出土し、底面の高台の内側に×印のロクロの爪痕がみられる。外面は黒漆で、内面が朱塗りである。高台径5.8cm、残存高さ4.6cm。

③　箸

W10～12は８区から出土した箸である。いずれも先端は細く尖り、もう一端は欠損している。断面は削りによって六角形から多角形を呈し、表面はなめらかな曲面に仕上げられていない。太さは0.7～0.95cmとやや太い。残存長18～20cm前後である。W11の上部には漆らしいものが付着している。

④　建築材ほか

W13は８区出土。建築部材であろうか。長さ64.1cm、幅5.8cmの細長い板材である。一方の長辺の両端近くに浅いくり込みが入っているが、一方は欠損の可能性がある。また一部に縄などで縛った痕跡がみとめられる。

W14は７区のSK03から出土している。柱材の一部を切断したものであろうか。折れた別材のホゾがはまっている。

W15～W19は、29区のSE108から出土した井戸枠に転用された桶の部材である。井戸枠の上になっていた部分は材がやせている。長さは51～62cmとややばらつきがあるが、幅は12.5～12.9cmでそろっている。W15の上端から少し下がった部分にタガもしくは縄で縛った痕跡がある。W16の上端付近に刃物による切り込みらしきものがみとめられる。W18の側面に縦方向の細い線がみられる。W19は縄もしくはタガの痕跡が中央より下に２段みとめられる。

2．七宮地区

A. 近世・近代の遺物

1　土器・陶磁器

七宮地区の出土遺物には土師器、瓦質土器、無釉陶器、施釉陶器、磁器などがあり、その大半が18世紀後半から近代に属している。ここでは、土師器から磁器の順にその概要を述べる。

（1） 土師器

土師器には器種別には、灯明皿として使用されたと考えられる皿、秉燭、燭台、蛸壺などがある。また、その大部分は内面に透明釉を施し、橙色に発色するいわゆる柿釉施釉のものであるが、土師器と成形・整形・調整技法・焼成などの点から見て共通性を有することから、ここでは土師器として報告する。

ア　皿

皿は透明釉を施さないもの（Ⅰ類）と透明釉を内面に施すいわゆる柿釉の皿（Ⅱ類）とに区分される。Ⅰ類は底部の器壁が厚く、底部と体部の界が明瞭で体部が短く直線的斜め上方に延びるⅠ－ａ類（2209）と器壁が薄く、体部と底部の界が不明瞭なⅠ－ｂ類（2208）に分類される。Ⅱ類（2205～2207）は基本的な形態はⅠ－ｂ類に類似する。

イ　秉燭

秉燭（2213）は透明釉を施さない土師質のもののみで、口縁部上面に灯芯を立てる横棒を貼り付け、横棒の中央部に１箇所穿孔が見られる。

ウ　燭台

燭台は全て皿部の内面に透明釉を施すいわゆる柿釉のものである。台部が円盤状を呈するⅠ類（2010・2210～2212）と皿状を呈するⅡ類（2080）とに分類される。Ⅰ類は皿の内面に凸帯を１条巡らし、凸帯に1箇所抉りを入れるが、Ⅱ類には内面の凸帯は見られない。

エ　蛸壺

2115・2116は蛸壺である。いずれも回転台を使用して成形する。平底で体部は内彎気味にほぼ直上に延び、口縁部は外反する。いずれも体部外面に墨書が認められる。

（2） 瓦質土器

瓦質土器には風炉、羽釜、蓋がある。

ア　風炉

風炉（2097）は平底で底部外面に台形状の脚を３箇所貼り付ける。体部は直立し、体部外面に長方形の焚口をもつ。体部外面上部に把手の貼り付け痕が認められる。煎茶用の風炉と考えられる。

イ　羽釜

羽釜（2117）は器壁が非常に薄く、体部～口縁部は内彎気味にほぼ直上に延びる。体部外面に断面台形状の幅の広い鍔を貼り付け、口縁部外面に凹線を４条施す。鋳造の鉄製羽釜を忠実に模倣したものである。

ウ　蓋

蓋（2118）は上面は水平で体部は直立し、口縁端部は角の丸い断面方形に成形する。火消し壷の蓋と考えられる。

（3） 無釉陶器

無釉陶器には産地別では丹波、備前、堺・明石産の他、産地の特定出来ないものがある。

① 丹波

丹波焼と考えられるものには植木鉢がある。

植木鉢　植木鉢（2042～2045）はいずれも平底で体部は直線的に斜め上方に延び、口縁部は外方に水平に折り曲げる。底部が平底のⅠ類（2042・2043）と底部に獣足状の脚を貼り付けるⅡ類（2044・2045）とに分類できる。Ⅰ類が外面無文であるのに対して、Ⅱ類（2044）は体部外面に貼花と劃花で草花文を施文している。いずれも19世紀前半から近代にかけての丹波産の製品と考えられる。

② 備前

備前焼と考えられるものには壷、甕、瓶がある。

ア　壷

壷（2024）は平底で体部は内彎してほぼ直上に延びる。口縁部内面には蓋を受けるかえりをもつ。内外面とも鉄泥漿を塗布する。19世紀前半代の朱泥の壷と考えられる。

イ　甕

甕（2025）は形態的には2024と類似するが、口縁部内面のかえりがなく、また、体部外面に沈線を施す。内外面とも鉄泥漿を塗布する。19世紀前半代の小型の甕と考えられる。

ウ　瓶

瓶（2046）は底部の平面形状は六角形を呈し、体部は板状の粘土を貼り合わせて成形する。体部外面にはヘラ描きで菊花文を施文した後、鉄泥漿を塗布する。19世紀前半代の保命酒の瓶と考えられる。

③ 堺・明石

堺・明石産と考えられるものには鉢、擂鉢がある。

ア　鉢

鉢には体部が直線的に斜め上方に延び、口縁部は上下に拡張し、断面台形状の縁帯をもつもの（2053・2054）と長方形状の縁帯をもつもの（2122）とがある。いずれも18世紀後半以降の堺・明石産の製品と考えられる。

イ　擂鉢

擂鉢には体部は直線的に斜め上方に延び、口縁部は上下に拡張し断面三角形状の縁帯をもつもの（2062・2120）と台形状の縁帯をもつもの（2121）とがある。いずれも18世紀後半以降の堺・明石産擂鉢と考えられる。

④ 産地不明の無釉陶器

この他、産地の特定できない無釉陶器には土瓶、風炉、鉢、擂鉢、俵形などがある。

ア　土瓶

土瓶（2001）は体部外面を亀甲形に浮き出して施文するもので、注口裏面に「都亭喜癇」の銘をスタンプしている。

イ　風炉

風炉（2002）は体部は直立し口縁部は水平に端面をもつもので、体部外面に文字文をスタンプする。煎茶用の風炉と考えられる。

ウ　擂鉢

擂鉢（2099）は平底で口縁部外面に凹線を２条施し、内外面に鉄泥漿を薄く塗布するもので近代以降の製品と考えられる。

エ　鉢

鉢（2123）は平底で体部は直立するもので備前産の可能性も考えられる。

オ　俵形

俵形（2249）は俵形に成形し外面はヘラ描きで俵を表現する。全面に灰釉が施釉され、淡黄緑色に発色する。あるいは戦時中の手榴弾の可能性も考えられる。

（4） 施釉陶器

施釉陶器には産地別には肥前、丹波、瀬戸・美濃、京・信楽、舞子・明石、姫路の東山焼のもののほか、産地の特定出来ないものがある。

① 肥前

肥前産と考えられるものには鉢がある。

ア　鉢

鉢（2134）は体部内面に印花で草花文、幾何学文を施文した後、白泥で象嵌し灰釉を施釉する肥前系三島唐津鉢である。17世紀後半～18世紀前半の時期が考えられる。

② 丹波

丹波産と考えられる製品には徳利、蓋、植木鉢、擂鉢などがある。

ア　徳利

徳利はいずれも外面に鉄釉を施釉するもので、鉄釉施釉の後、外面に白泥をイッチン掛けで文字を施文するいわゆる貧乏徳利（2070・2100・2145）、体部外面を押さえて窪まるもの（2003・2071）、窪ませないもの（2146）、頸部が直立し口縁部が玉縁状に肥厚するもの（2026）などがある。2070・2100・2145は19世紀前半以降、また、2003・2026・2071・2146は器面がガラス質の光沢をもつ点から見て近代以降の製品と考えられる。

イ　蓋

蓋（2047）は扁平な円盤状の体部に扁平な摘みを貼り付けるもので、外面に鉄釉を施釉する。内面に煤が附着していることから、火消し壷の蓋と考えられる。

ウ　植木鉢

植木鉢（2048）は底部に獣足状の短い脚を3箇所貼り付け、口縁部は水平に外方に折り曲げる。体部外面はヘラ描きで菊花文を施文した後、鉄釉を施釉する。19世紀前半以降の時期が考えられる。

エ　擂鉢

擂鉢（2133）は浅く削り出す高台をもち、口縁部内面から体部外面に鉄釉を施釉するもので、近代以降の製品と考えられる。

③ 瀬戸・美濃

瀬戸・美濃産と考えられるものには灯明皿、秉燭、植木鉢、蓋、尿瓶、杯などがある。

ア　灯明皿

灯明皿（2152・2153）はいずれも内面～口縁部外面にかけて透明釉を施釉し、浅黄色に発色するもので、後述する京・信楽産のものと比べ焼成がやや軟質である。19世紀前半以降の時期が考えられる。

イ　秉燭

秉燭（2036）は内面～体部外面上半にかけて鉄釉を施釉するもので、底部外面に墨書が見られる。灯明皿と同様に、焼成はやや軟質である。19世紀前半以降の時期が考えられる。

ウ　植木鉢

植木鉢（2049）は台形状の低い脚を貼り付け、口縁部は外方に水平に折り曲げる。口縁部内面～体部外面に透明釉を施釉し、黄色味を帯びた灰白色に発色する。19世紀前半以降の製品であろう。

エ　蓋

蓋（2140）は内外面とも透明釉を施釉し淡黄色に発色するもので、19世紀前半以降の時期が考えられる。

オ　尿瓶

2149は外面に鉄釉を施釉する尿瓶で暗茶褐色に発色する。19世紀前半以降の時期が考えられる。

カ　杯

杯（2235）は高台は細く低く、体部は直線的に斜め上方に延び、内外面とも灰釉を施釉する。

④ 京・信楽

京・信楽産と考えられる製品は灯明皿、秉燭の灯火具で占められている。

ア　灯明皿

灯明皿には底部内面に凸帯を巡らせるⅠ類と凸帯をもたないⅡ類とがある。Ⅰ類には小型のもの（2006・2035・2058・2079・2113・2156・2158）とやや大型のもの（2157）とがある。また、Ⅱ類にも同様に、小型のもの（2007・2008・2077・2078・2150・2151）とやや大型のもの（2009・2154）がある。Ⅰ類の凸帯には1箇所抉りが入れられる。いずれも19世紀前半～中頃の時期が考えられる。

イ　秉燭

秉燭はいずれも体部は中空で口縁部内面に凸帯を１条巡らす。凸帯には１箇所抉りが入れられるなど基本的な形態は灯明皿と同様である。（2011・2012・2027～2029・2081～2083・2160～2163・2219～2222）。いずれも19世紀前半～中頃の製品であろう。

⑤ 舞子・明石

在地の舞子・明石産と考えられるものには鍋、土瓶、蓋などがある。

ア　鍋

鍋には口縁部を外方に水平に折り曲げ、内面～体部外面上半に透明釉を施釉するもの（2059・2141）と口縁部が「L」字状に屈曲し、体部外面はトビガンナ施文の後、鉄釉を施釉するもの（2072・2142）とがある。いずれも19世紀前半以降の製品と考えられる。

イ　土瓶

土瓶はいずれも平底で体部中位で大きく「く」の字状に屈曲するもので、外面の施文方法から見ると、体部外面に２段の縦線で施文した後、口縁部内面～体部外面に透明釉を施文するもの（2073）、体部外面上半にトビガンナ施文し、体部外面中央に縦方向の弧状文を施文の後、口縁部内面～体部外面上半に白濁釉を施釉するもの（2144）、体部外面上半に13条の沈線を施し、口縁部外面～体部外面上半に灰釉を施釉するもの（2143）などがある。いずれも19世紀前半以降の時期が考えられる。

ウ　蓋

蓋（2138）は外面に白濁釉を施釉した後、鉄釉・緑釉で施文するもので、比較的大型の球形のつまみをもつ。19世紀前半以降の製品であろう。

⑥ 東山

姫路の東山焼と考えられる製品には焜炉とその蓋がある。

ア　焜炉

焜炉（2075）は比較的高い脚をもち体部は直立する。体部外面に楕円形の透かしをもち、内外面とも透明釉

を施し、明黄褐色に発色する。体部外面に「弥」の文字が刻印され、弥七焜炉と呼ばれる東山焼の製品で、東山焼が藩窯から民窯に転換する近代以降の製品と考えらる。2076はその蓋であろう。

⑦ 産地不明の施釉陶器

この他、産地の明確でない施釉陶器には花瓶、鉢、ミニチュア鉢、椀、杯、蓋、甕、御神酒徳利、燭台などがある。

ア　花瓶

花瓶（2074）は頸部が直立し、口縁部は大きく外方にひらき、頸部に環状の耳を貼り付ける尊形の花瓶で、口縁部内面～底部外面まで緑釉を施釉する。19世紀前半以降の製品と考えられる。

イ　鉢

鉢には呉須で施文の後、白濁釉を施釉するもの（2055・2056・2057）、透明釉を施釉するもの（2132）、灰釉を施釉するもの（2217）と内面～体部外面に鉄釉を施釉し口縁部外面に把手を2箇所貼り付けるミニチュア鉢（2215）などがある。

ウ　椀

椀には体部が内彎気味に斜め上方に延び、口縁部が僅かに外反するもの（2063・2214）と体部～口縁部が直立する湯呑み椀（2128）とがある。いずれも19世紀前半以降～近代の時期が考えられる。

エ　杯

杯には様々なタイプのものがあるが、体部及び口縁部の形態から、口縁部が僅かに内傾するもの（2064）、体部・口縁部とも直立するもの（2124・2125）、体部が直線的に斜め上方に延びるもの（2126・2130・2131）、体部が内彎するもの（2127）、口縁部が外反するもの（2129）などがある。このうち、2131は内面を白泥で象嵌しており、三島唐津の技法に類似する。いずれも、2131を除くと19世紀前半以降～近代にかけての製品と考えられる。

オ　蓋

蓋にも様々なタイプがあるが、落し蓋タイプのもの（2065・2066・2067・2136・2216）、落し蓋タイプで断面形状が台形のもの（2135）、かえりをもつもの（2068）、円盤状で下部を台形状に削り残すもの（2137）、口縁部を外方に水平に折り曲げるもの（2139）などがある。いずれも19世紀前半以降～近代の製品であろう。

カ　甕

甕（2098）は口縁部を水平方向に拡張し、体部外面上半に沈線を7条施す。内外面とも鉄釉を施釉し、暗茶褐色に発色する。近代以降の時期が考えられる。

キ　御神酒徳利

神前に供える御神酒徳利には体部が内彎し、頸部は長く直立するもの（2004・2102・2218）と腰部が細く、体部が球形を呈し頸部が短い梅瓶形（2101・2147・2148）のものがある。いずれも19世紀前半以降～近代の時期が考えられる。

ク　燭台

燭台（2159）は台部が皿状を呈し、皿部には内面の凸帯が見られない。全面に灰釉を施すが、灰被りのため白色に変色している。19世紀前半以降のものであろう。

（5）磁器

磁器には白磁、青磁、染付青磁、染付磁器、色絵磁器などがある。

① 白磁

白磁には肥前系、瀬戸・美濃系と考えられるものの他、産地の特定できないものが含まれる。

A　肥前系

肥前系と考えられる白磁には器種別では杯、皿、紅皿などがある。

ア　杯

杯（2030）は内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色するもので、形態的には染付磁器杯に類似する。18世紀後半代の時期が考えられる。

イ　皿

皿には、高台は蛇ノ目凹形高台で、ロクロ成形の後、型押しで体部を菊花状に整形するもの（2106・2223）、型押しにより口縁部を輪花状に整形し、底部内面にスタンプで龍文を施文するもの（2165）などがある。いずれも、19世紀前半以降の時期が考えられる。

ウ　紅皿

紅皿（2196）は型作り成形で体部外面に放射状に縦線を施文し、内面～口縁部外面にかけて透明釉を施釉する。実用の紅皿としては小さいことから、ミニチュア製品と考えられる。19世紀前半の時期が考えられる。

B　瀬戸・美濃系

瀬戸・美濃系と考えられる白磁には皿がある。

ア　皿

皿には体部は外反気味に斜め上方に延び、口縁部は外方にひらき、底部内面にスタンプで文字文あるいは幾何学文を施文するもの（2031・2103・2104・2105・2201）がある。19世紀前半以降の時期が考えられる。

C　産地不明の白磁

産地の特定できない白磁には碗、杯がある。

ア　碗

碗には底部の器壁が厚く、体部は内彎気味に斜め上方に延びるもの（2013）と体部が直線的に直上に延びるもの（2164）とがある。2164は近代以降の製品と考えられる。

イ　杯

杯（2014）は高台は「ハ」の字状に外方にひらき、底部と体部の界は大きく屈曲し、体部は直線的に斜め上方に延びる。

② 青磁

青磁は極めて少なく僅かに三田産と考えられるものが3点出土している。

A　三田

三田産と考えられる青磁には器種別には植木鉢、燭台、碗がある。

ア　植木鉢

植木鉢（2050）は底部外面に獅子頭状の脚を貼り付けるもので、外面には中央部に2段にわたってトビガンナ施文を施す。19世紀前半以降の製品であろう。

イ　燭台

燭台（2084）は脚部に宝珠状の透かしをもつ。内外面とも青磁釉施釉の後、台部外面に「春凍　帰来　櫻然　看山　酒供」の文字を施文し、皿部内面に赤絵で花弁文を施文する。19世紀前半以降の製品と考えられる。

ウ　角鉢

角鉢（2166）は型作り成形で、底部内面に魚文を型押し施文する。魚文部には呉須を施釉している。19世紀

前半以降の製品であろう。

エ　碗

碗（2202）は高台の幅が広く比較的低いもので、内外面とも青磁釉を施釉する。19世紀前半以降の製品と考えられる。

③ 染付青磁

染付青磁には肥前産のものと産地の特定できない近代以降のものとがある。

A　肥前

肥前産と考えられる染付青磁には碗がある。

ア　碗

碗（2224）は体部が直線的に斜め上方に延びるもので、外面には青磁釉を施釉し、内面は染付で斜格子文・界線2条・コンニャク印判の五弁花文などを施文する。18世紀代の製品と考えられる。

B　産地不明の染付青磁

この他、産地の特定できない染付青磁には杯及び蓋がある。

ア　杯

杯（2091）は体部が直線的に直上に延びる湯呑み形のもので、外面は明緑灰色に発色する。外面は青磁釉施釉の後、緑、鉄、白濁釉で松葉文を施文する。近代以降のクローム青磁である。

イ　蓋

蓋（2203）も外面に青磁釉施釉の後、白濁釉で施文するもので、近代以降のクローム青磁である。

④ 染付磁器

染付磁器には肥前系、瀬戸・美濃系と考えられるものの他、産地不明のものがある。

A　肥前

肥前産と考えられる染付磁器には碗・皿・御神酒徳利・合子・徳利・蕎麦猪口・鉢・瓶・蓋・仏具碗などがある。

ア　碗

碗は体部及び口縁部の形態から、体部が内彎気味斜め上方に延び、口縁部をそのまま斜め上方にひきあげるもの（Ⅰ類）、体部は内彎気味に斜め上方に延び、口縁部が外反するもの（Ⅱ類）、高台は細く高く、体部が直線的に斜め上方に延びるもの（Ⅲ類）、体部がほぼ直立するもの（Ⅳ類）に大きく分類される。Ⅰ類は外面の文様及び全体のプロポーションから、コンニャク印判で松葉文などを施文するもの（2225）、手描きで雪輪文を施文するもの（2039）、割筆で二重網目文を描くもの（2228）、高台が小さく京焼風のプロポーションを呈するもの（2167）、外面に線描きの鳳凰文を施文するもの（2087）、外面に草花文を施文するもの（2015）などがある。2225・2039はいわゆるくらわんか手碗で、2225は18世紀前半、2039は18世紀後半の時期があたえられる。また2228・2167は18世紀代、2087は18世紀後半以降の時期が考えられる。Ⅱ類（2170）はいわゆる端反碗で19世紀前半以降の製品であろう。Ⅲ類（2040・2231・2232）はいわゆる広東碗タイプの碗で19世紀前半に比定できる。Ⅳ類（2016）は湯呑み碗で19世紀前半以降～近代の製品であろう。

イ　皿

皿は口縁部・底部の形態から、底部が平底のもの（Ⅰ類）、底部が蛇ノ目凹形高台のもの（Ⅱ類）に大別できる。Ⅰ類（2019）は体部は外反気味に延び、口縁部は外方にひらくもので、底部内面に鶴に海浜文を施文した後、施文部に呉須を施す。肥前系の白磁皿に類似し19世紀前半以降の時期が考えられる。Ⅱ類は口縁部の形

態から口縁部を玉縁状に肥厚させるもの（Ⅱ—1類　2018)、口縁端が尖り気味のもの（Ⅱ—2類　2178・2240)、口縁端部は水平に端面をもつもの（Ⅱ－3類　2179～2180)、口縁端部は丸味をもつもの（Ⅱ—4類　2181）に分類される。Ⅱ類はいずれも、ロクロ成形の後、型押しで口縁部を波状に整形しており、口縁端部には鉄釉を施釉するいわゆる口紅が施される。内面の文様には、山水文（2018・2178)、海浜文に鶴文（2019)、海浜文に松竹梅文（2179)、海浜文（2181)、兎に草花文（2240）などがあり、いずれも19世紀前半以降の時期が考えられる。

ウ　御神酒徳利

神棚や仏前に供する御神酒徳利は、体部が外反して立ち上がり、体部上半は球形を呈し、頸部は短く直立し、口縁部は外方にひらく梅瓶形のもの（Ⅰ類　2020・2021・2094・2095）と体部は大きく内彎し、頸部は長く、直立するⅡ類とに大別できる。Ⅱ類はさらに口縁部の形態から口縁部をそのままひきあげるⅡ—1類（2034・2094・2095・2188）と口縁部が僅かに外反するⅡ—2類（2185・2187）とに分類できる。外面の文様はⅠ類は全て蛸唐草文であるが、Ⅱ類には草花文のもの（2034・2185～2187)、松竹梅文を施すもの（2188）などがある。19世紀前半以降と考えられる2188以外はいずれも18世紀代の製品と考えられる。

エ　杯

杯には体部が僅かに内彎して上方に延び、体部外面に簡略化した草花文を描くもの（2061)、と体部は直立し、外面に半截菊花文を描くもの（2175）とがある。2061は18世紀代、2175は19世紀前半の製品と考えられる。

オ　蓋

蓋には上面は弧状に成形し、かえりは内傾し、外面に草花文を描く合子の蓋（2110）と外面に線描きの草花文を施文する碗の蓋（2189）とがある。2189は19世紀前半代に比定される。

オ　油壷

油壷（2111）は外面に蛸唐草文と草花文を施文するもので、18世紀代の時期が考えられる。

カ　徳利

徳利（2112）は体部が大きく内彎し、頸部は長く直立するもので、口縁部は玉縁状に肥厚する。体部外面には蛸唐草文・草花文を施文する。18世紀代の製品と考えられる。

キ　蕎麦猪口

蕎麦猪口には低い輪高台をもち、体部は直線的に斜め上方に延び、体部外面に竹松文を施文するもの（2173）と平底で底部の外縁を低く削りだして高台状に成形し、体部は直線的に斜め上方に延び、体部外面に草花文を施文するもの（2176）とがある。2176は19世紀前半代に比定される。

ク　鉢

鉢には蛇ノ目凹形高台で、体部は内彎気味に斜め上方に延び、口縁部は水平に大きく外方にひらくもの（2184）と蛇ノ目凹形高台で体部は直線的に直上に延び、口縁部は輪花状に整形するもの（2239）とがある。文様は2184が外面に山水文・凹凸文を、また2239が外面に花蝶文を施文する。いずれも19世紀前半以降の製品と考えられる。

ケ　仏具碗

仏具碗（2242・2243）はいずれも底部は蛇ノ目状に浅く削りだし、脚部は円柱状に直立するもので、体部外面には蛸唐草文を施文する。18世紀後半以降の製品と考えられる。

B　瀬戸・美濃

瀬戸・美濃産と考えられる染付磁器には器種別では碗・鉢・蓋がある。

ア　碗

碗（2226・2234）はいずれも底部の器壁は厚く、体部は直線的に斜め上方に延びるもので、体部外面の文様は2226が草花文、2234は山水文である。19世紀前半以降の製品と考えられる。

イ　鉢

鉢（2183）は体部は直線的に斜め上方に延び、口縁部は僅かに外反するもので、体部外面に草花文・芙蓉手風文、内面に草花文、底部内面には竹文を施文し、呉須の発色はやや滲んでいる。19世紀前半以降の製品であろう。

ウ　蓋

蓋（2109）は外面に草花文を施文する碗の蓋で19世紀前半以降の時期が考えられる。

C　産地不明の染付磁器

産地の特定できない染付磁器には、碗・皿・蓋・杯・蕎麦猪口・鉢・御神酒徳利などがある。

ア　碗

碗には様々なタイプがあるが、体部の形態から、体部が直線的に直上に延びるもの（Ⅰ類　2032・2086）、直線的に斜め上方に延びるもの（Ⅱ類　2085・2107・2172・2229・2230）、内彎気味に直上にのびるもの（Ⅲ類　2089・2204）、内彎気味に斜め上方に延びるもの（Ⅳ類　2088・2090・2227・2233）に分類できる。また、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ類は口縁部が外反するもの（Ⅰ－1類　2086・Ⅱ―1類　2107・Ⅳ－1類　2233）と外反しないもの（Ⅰ―2類　2032・Ⅱ―2類　2085・2172・2229・2230・Ⅲ－2類　2088・2090・2227）とに細分できる。形態・施文方法などから、2089・2204・2227・2229・2230には19世紀前半以降、2086は19世紀中頃～近代、2085・2090・2107・2172・2233には近代以降、2088は近代～現代の時期がそれぞれ考えられる。

イ　皿

皿は成形技法の違いから、ロクロ成形のもの（Ⅰ類　2051・2052・2060　2093）、型作り成形のもの（Ⅱ類　2092・2238）、ロクロ成形の後、型押しにより、口縁部・体部を波状に成形するもの（Ⅲ類　2177・2236・2237）に分類できる。Ⅰ類のうち2051・2052・2060は器壁が非常に薄く、また、2051の底部外面には「大清雍正年製」の銘があることなどから、清朝青化もしくはその写しと考えられ、19世紀前半以降の製作時期が考えられる。また、Ⅰ類の2093は呉須の発色などから、近代以降の製品と考えられる。Ⅱ類は型作りで口縁部・高台を花形（2092）、隅丸方形（2238）に成形しており、近代以降の時期が考えられる。Ⅲ類には内面に草花文を描くもの（2177）、山水文を描くもの（2236）、海浜文を描くもの（2237）などがあり、いずれも19世紀前半以降の製品と考えられる。

ウ　蓋

蓋（2033・2190～2192・2241）はいずれも高台状のつまみをもつ。外面の文様には山水文（2033）、龍文（2190・2191）、草花文（2192）、葉状文（2241）などがある。形態・呉須の発色などから見て、2190・2192は近代以降、2191は近代～現代の製品と考えられる。

エ　杯

杯（2017・2168）は体部は直線的に斜め上方に延び、口縁部は僅かに外反する。外面の文様には漢詩文（2017）と草花文（2168）とがある。形態・呉須の発色などから見て、いずれも近代以降の製品と考えられる。

オ　蕎麦猪口

蕎麦猪口（2174）は体部は直線的に斜め上方に延び、口縁部は僅かに外反するもので、体部外面には草花文を描く。呉須の発色から見て、近代以降のものと考えられる。

カ　鉢

鉢（2182）は体部は内彎気味にほぼ直上に延び、口縁部は大きく外方にひらく。外面には草花文他を描く。19世紀前半以降の製品と考えられる。

キ　御神酒徳利

御神酒徳利（2186）は体部は大きく内彎し、頸部は長く直立する。高台は浅く削り出す内反り高台である。体部外面には草花文を施文する。近代以降の製品であろう。

⑤ 色絵磁器

色絵磁器には肥前系と考えられるものと産地の特定できないものとがある。

A　肥前

肥前産と考えられる色絵磁器には碗がある。

ア　碗

碗（2231）は高台が細く高く、体部は直線的に斜め上方にのびるいわゆる広東碗タイプのものである。外面には赤絵で草花文を描く。19世紀前半代の時期が考えられる。

B　産地不明の色絵磁器

この他、産地の特定できない色絵磁器には碗がある。

ア　碗

碗には体部が内彎して斜め上方に延びる京焼風のプロポーションをもつもの（2023・2169）と体部は直線的に斜め上方に延び、口縁部は僅かに外反するもの（2171）とがある。いずれも、赤・緑・黄・桃色・金などの顔料で外面に草花文（2023・2169）、鯛文（2171）などを描く。

引用・参考文献

(1) 大橋康二　1984　「肥前陶磁の変遷と出土分布－発掘資料を中心として－」　『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館

(2) 大橋康二　1993　『肥前陶磁』　ニューサイエンス社

(3) 九州近世陶磁学会　2000　『近世陶磁の編年』

(4) 井上喜久雄　1992　『尾張陶磁』　ニューサイエンス社

(4) 関西陶磁史研究会　2001　『近世信楽焼をめぐって』　研究集会資料集

(5) 村上泰樹　2001　『兵庫の陶磁器』　収蔵資料目録9　兵庫県立博物館

(6) 稲原昭嘉　1997　「明石城における17・18世紀の器種構成」　『関西近世考古学研究』Ⅴ　関西近世考古学研究会

(7) 田中賢人他　1996　『三田焼の研究－三田志手原　小西家寄贈土型資料調査報告書』　三田市教育委員会

2　土製品

土製品には土錘、器物形、動物形、人形などがある。

①　土錘

土錘（2244・2245）は棒状の芯に粘土を巻きつけて成形したもので、外面は指ナデ調整し、橙色からにぶい黄橙色に発色する。

②　器物形

器物形には壷形、土瓶形、橋形、すりこ木形、不明土製品などがある。

A　壷形　壷形（2194）は平底で体部は内彎する。体部外面下半まで施釉され、茶褐色に発色する。

B　土瓶形　土瓶形には型作り成形で、器壁は非常に薄く、外面に型押しで草花文・魚々子文を施文する鋳造の鉄瓶を模倣したもの（2195）と型作り成形で、器壁は比較的厚く、外面に多方向のヨコナデ調整を加える土瓶のミニチュア（2247）の2種類がある。

C　橋形　橋形（2197）は型作り成形で全体に弧状に反る。上面に左右対称に突起を貼り付け、欄干を表現している。

D　すりこ木形　2251は手づくね成形で下部の膨れた円柱状を呈し、すりこ木のミニチュアあるいは、鳥の餌を攪拌する実用のすりこ木と考えられる。

E　不明土製品　2022は型作り成形で円錐状を呈する。用途は不明であるが、あるいは仏像の螺髪の一部と考えられる。

③　動物形

動物形には狐形がある。

A　狐形　狐形（2248）は両型作りで台座は長方形を呈する。頭部は欠失する。底部外面に1箇所穿孔が見られる。神棚に祀る狐形と考えられる。

④　人形

人形（2246）は型作り成形で内面は中空で、指頭圧痕が残る。ヘラ状工具で眉、目、口などを施文する。

3　瓦

瓦には軒丸瓦と軒平瓦とがある。

①　軒丸瓦　軒丸瓦（2096）は巴文軒丸瓦で、巴の尾は長く、珠文数は15である。色調は暗灰色を呈する燻し瓦である。

②　軒平瓦　軒平瓦（2198）は唐草文軒平瓦で、外面はナデ調整し、瓦当の接合部はヨコナデ調整を施す。色調は暗黒灰色を呈する燻し瓦である。

4　ガラス製品

ガラス製品には酒杯がある。

①　酒杯　2193は底部は円盤状で脚部は直立する。手吹きガラスで、酒杯と考えられる。

5　石製品

石製品には硯がある。

①　硯　硯（2199）は全体に摩滅が著しい。海部は使用のため表面は平滑で、外面には擦痕が目立つ。色調は灰白色を呈する。

6　金属製品

鉈（図版197　写真図版197　M582）

鉄製の鉈である。刀部断面は、台形に両刃の刃がつき、先端に向かって反り上がっている。錆化のため鏑等は不明である。柄の部分は断面長方形を呈し、木質部分が遺存する。刃部に木質部分が見られるが、鉈に付属するものではない。北トレンチ、堀内出土。

長さ15.7cm、刃部の長さ9.3cm、幅0.95cm、厚さ0.35cm、柄部の長さ6.4cm、幅1.6cm、厚さ0.6cmを測る。

煙管（図版194　写真図版197　M587・595、第12表参照）

真鍮製の煙管が2点ある。M587は吸口であり、口元ですぼまって後開くものである。M595は雁首と吸口を別個に制作し、その間の吸管を竹でつなぐ煙管（羅宇煙管）の雁首である。脂返しはなく、直角に曲がっている。また、羅宇に接する肩の部分には5条の螺子山を設けている。

鋲（図版197　写真図版197　M584）

釘頭を扁平に、丸く叩き出した銅製の太鼓鋲である。西地区、石垣内出土。

全長3.75cm、鋲頭の幅1.0cm、中位の径0.25cm、先端部の径0.15cmを測る。

環状製品（図版197　写真図版197　M585）

長方形の板によって環とし、中空の円柱上端に固定した真鍮製のもの、無地だが、金鍍金を施している。飾金具の一種かと推測される。西地区、石垣内出土。

全長3.2cm、環の径1.65cm、厚さ0.1cm、円柱の長さ1.81cm、径0.5cmを測る。

不明銅製品（図版197　写真図版197　M586）

底面が四角形、蒲鉾状を呈する無地の銅製品。中に絹かと思われる布を入れていた。西地区、焼土層下出土。

全長13.2cm、幅5.15cm、厚さ約0.5cmの銅製板を内湾させて、底面に高さ0.5cmの折り返し部分を設け、縦5.15cm、横4.16cm、高さ3.15cmの箱形にしたもの。用途は不明である。

鋏（図版197　写真図版197　M588）

鋏は、てこの原理を応用した道具である。具体的にはてこの重点・支点・力点の相互関係によるものであり、この鋏はてこの支点が重点と力点の中間支点式のものである。鉄製のかふばさみ夾剪と呼ばれるもので、形は現在の花鋏、庭師鋏、植木鋏、盆栽鋏、剪定鋏などに類似する。支点部は、鋲留により固定している。力点部分は、柄の後端を外側に曲げて、左右同型の大きな指輪をつくり、末端部はさらに湾曲して支点近くで処理する。西地区、盛土内出土。

全長9.0cm、刃の長さ約2.8cm、鎌刃型、最大幅7.3cmを測る。

引き手金具（図版197　写真図版197　M589）

襖の引手に用いられた環状の銅製金具である。引き手金具の側縁は捻りを入れた環状を呈し、内側から外に向けて2カ所釘止め穴が対称の位置に穿たれている。その内の1カ所に釘が遺存している。断面はコの字状を呈するもので、環状部分の一部と襖側の薄い鉄板は完全に欠損し、著しく歪んでいる。西地区、焼土層下出土。

引き手金具の径約7.6cm、高さ1.15cm、厚さ0.8cmを測る。

不明銅製品（図版197　写真図版197　M590）

湾曲する外縁と直線的に延びる内縁、両端は欠損し、断面は菱形状を呈するため、鎌の曲刃かと推測したが、刃部及び峰部が見られないため、用途不明の銅製品とした。表裏共に無地である。西地区、焼土層下出土。

遺存する長さ11.9cm、最大幅3.6cmを測る。

笄（こうがい）　（図版197　写真図版197　M591）

やや湾曲するが真鍮製の笄である。頭部より約3分の1のところから二股になっている。笄全体に金箔が見られ、体部の表裏に、梅花の文様が鋳出されている。頭部は、花弁状の突起となっている。東地区、最下層内出土。

全長15.5cm、幅0.7cmを測り、断面は長方形を呈する。体部の厚さ0.15cm、脚部の厚さ0.01cmを測る。

鋲（図版197　写真図版197　M592）

頭部を扁平に、丸く叩き出した銅製の平鋲である。金鍍金を施している。先端部は欠損している。東地区、最下層内出土。

遺存する長さ2.0cm、鋲頭の幅0.65cm、基部上部の径0.25cm、先端部の径0.15cmを測る。

不明真鍮製金具（図版197　写真図版197　M593）

長方形を呈し、中央に円孔とその上下に長方形の孔を穿った真鍮製の金具である。表裏には金箔が見られる。飾金具かと推測される。東地区、焼土層下出土。

遺存する大きさは、縦3.45cm、横1.45cm、厚さ0.05cmを測る。中央の円孔の径は0.5cm、長方形の孔は約0.3cm×0.15cmである。

不明銅製金具（図版197　写真図版197　M594）

木葉状を呈し、中央には先端に向かって稜線が走る金具である。上部先端には、三角形を呈し、1本の頭が丸く太い鋲と2本（当初は3本）の丸くて若干小さな鋲が打たれ、装飾的効果を挙げている。裏面には、太い鋲から延びる足が約0.7cmあり、何かに打ち付けて固定したものと思われる。飾金具かと推測される。東地区、焼土層下出土。

全長3.85cm、最大幅1.7cm、厚さ0.13cmを測る。

達磨飾り（図版197　写真図版197　M596）

形は、いわゆる達磨形を呈し、達磨の顔のみを陽刻した中空の達磨飾りである。表面には、金鍍金が所々に見られる。側面中央に接合部があり、真鍮製である。現状は押しつぶされて、変形をしている。東地区、最下層内出土。

遺存する大きさは、高さ5.3cm、最大幅3.9cmを測る。

銅銭（図版198～200　写真図版198・199）

本地区出土の銅銭は、その殆どが近世以降に築造された船入江に伴う石垣付近から出土したものである。

寛永通寶（M597～614）には、背面に「文」の印を持つもの（M600）、「佐」の印を持つもの（M608）、「元」の印を持つもの（M609・610）、「波文」を持つもの（M613・614）が見られ、特に「波文」を有すものは大型である。

半銭（M615～619）には、初鋳年代が明治八年のもの（M615･616）、明治十年のもの（M617～619）がある。

一銭（M620・621）には、初鋳年代が明治八年のもの（M620）、明治十三年のもの（M621）がある。

二銭（M622～638）には、初鋳年代が明治十年のもの（M622～629）、明治十三年のもの（M630～636）、明治十四年のもの（M637）、明治十五年のもの（M638）がある。

以上、本地区からは寛永通寶・半銭・一銭・二銭が出土したが、この内、東地区船入江最下層出土のM597・604・613～616・619～638は、巾着状の入れ物の中にあったと考えられ、合計37銭9厘の銭が一塊で出土している。

7　木器・木製品

（図版201～205　写真図版200～205）

七宮地区から出土した中で、図化したものはW20～W63である。

W20からW23は北トレンチより出土している。

箸

W20は箸である。完形で、長さ20.5cm。断面は一辺0.55×0.65cmの方形で、一方の先端のみ面取りしている。

栓と飲み口

W21は栓とそれを差し込む飲み口である。栓の頭部の断面は一辺1.4cmの方形で、差し込む部分の断面は円形に近い形に加工されており、先端は平らである。飲み口は筒状である。

漆器

W22は漆器の蓋である。内外面とも朱色の漆が塗られている。口径110.7cm、高さは2.2cmである。

不明木製品

W23は木材を銅板で覆い、細釘で留めたものである。全体の形状は唐草模様の飾りの一部と思われる。

銅板には、小花模様と唐草模様が打たれている。

W24からW29は東地区から出土している。

箸

W24・W25は箸である。いずれも端部をわずかに欠くが元の長さは20cm程度であろう。W24は断面が一辺0.58cmの方形で、W25は方形の角を面取りした0.6～0.52cmの八角形である。

栓と飲み口

W26・W27は栓と飲み口である。W27の栓の頭部は方形で、差し込む部分は丸く加工され、さらに先端は細かく面取りされている。

櫛

W28は櫛である。半月形のおよそ半分程度が残る。残存長さは6.75cm、幅3.45cm、背の厚みは0.7cmである。表面はわずかに黒く漆塗りか。歯の根もとは浅くサジ面取りされている。

不明木製品

W29は墨書のある板材であるが、3文字目の「支」と推定される以外文字は判読できない。

W30からW63までは西地区から出土している。

木簡

W30～W34は墨書のある札（木簡）で、判読可能なものはW30・W31の2点であった。（以下の釈文は兵庫県立歴史博物館　小栗栖健治館長補佐、松井良祐主査のご教示による）

W30　表　「＜　　上三草村　　裏　□□□□
□□□
當納　　□□□□
衛門
米主　安右□□」　　033型式

W31　表　　「　田中利左衛門　　021型式

W30は加東郡上三草村の安右衛門が米を納めた事を記した付札である。加古川水系を舟運により河口まで運び、さらに兵庫津まで米が運ばれた事を示す興味深い資料である。ほぼ完形で、長方形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他端を尖らせたものである。長さ12.7cm、幅2.45cm、厚さ0.4cm。W31は左辺が剥離している可能性があるが、全体の形状は長方形で、長さ12.65cm、幅3.75cm、厚さ0.23cm。W32、W33とも両辺を欠くが全体の形状は長方形である。W32は「釣道具」という文字の一部であろうか。W33の下端には横方向の圧痕がある。W34は判読不能であるが、横方向に文字が書かれていると考えられる。

加工材

W35は短い丸太材の一部を削ったものである。長さ7.7cm、幅5.3cm、厚さ5.1cm。W36は直方体の一面の四辺

を面取りした加工材で、ほぼ完形である。長さ4.55cm、幅3.2cm、厚さ2.5cmである。W37は薄型の板を加工したもので、細い溝がある。長さ1.55cm、幅2.15cm、厚さ0.5cmである。

箸

W38～W45は箸である。W38～W41は両端とも太さが変わらないもので、未製品もしくは何かの部材である可能性もある。断面はW38～W40は方形である。一辺0.5～0.6cm、長さ20～26cm。W42～W45はいずれも両端を尖らせた利休箸に近い形状で、中央部も断面が丸くなるよう加工されている。長さは24cm、太さは0.6～0.7cmと規格がそろっている。W45は一端を欠き、最大径0.75cmとわずかに太めである。

杓子

W46～W48は杓子である。一木で作り出され、片面は荒く削った面取り痕が残る。W46は他の2点に比べ杓部が短く、幅広である。W48の柄は直線的に伸びるが、W46・W47は柄と杓部の境でややくびれ、端がやや細くなっている。W46の先端には使用痕らしい傷と節穴がある。

栓と飲み口

W49は飲み口、W50・W51は栓である。W49の長さは6.5cm、直径は3.0cmである。W50・W51とも頭部の断面が方形で、一辺が1.6～1.8cmと、1,4cm、長さは7.7cmと長さは7.9cmであり、ほぼ同じ大きさである。W51には飲み口にはめ込んだ際の圧痕が残る。

容器類

W52は直径7.2～7.35cm、厚さ0.3cmの薄い円盤状の板で、杓子の底板であろうか。

W53は直径6.45～6.7cm、厚さ0.5cmで中央に直径3.6cmの円孔の空いた円盤状の板である。

W54・W55は、おそらく箱状の容器の一部である。W54は片面は黒、もう一方は朱塗りである。幅15.85cm、幅6.5cm、厚さ0.65cmの長方形の板の長辺の中央に小さくＶ字状の切り込みが入っている。W55は、長さ24cm、幅7.9cm、厚さ0.65cmで、両短辺に沿って3カ所木釘が打たれていた孔がある。

W56は直径16cm、厚さ0.85cmの曲げ物の底板である。

W57は長さ18.3cm、幅5.8cm、厚さ0.2cm、W58は長さ22.8cm、幅4.2cm、厚さ0.6cmの細長い板材で、いずれも釘痕がある。

W59は桶の側材である。長さ21.5cm、幅8.0cm、厚さ0.8cm。中央よりやや下に、飲み口を差し込むための直径2cmの円孔がある。

W60は桶材に似るが、両側面に切り込みがある。切り込みのすぐそばに木釘が残り、桶の把手か。上下は逆の可能性もある。

W61は桶の蓋板である。飲み口を差し込むための円孔がある。長さ31.3cm、幅7.8cm、厚さ2.4cm。合わせ釘の痕が残る。

W62は桶の蓋板である。W62は長さ33.48cm、幅16.35cm、厚さ2.2cm、側面は上下面から斜めに削っている。断面を切ったラインに1か所釘が打たれている。W63は桶の底板で、2枚の板の側面に打ち込んだ合わせ釘で接合している。長さ29.8cm、幅10.4cm、厚さ1.2cm。

木製釘（図版196）

釘（2250）は裏面に糸かがり孔を2箇所穿孔する。木製で漆を塗布し暗茶褐色に発色する。漆の上には金色の顔料を塗布しているが、大部分は剥落している。木製の金メッキ釘と考えられる。

その他、茶釜洗いの一部（W64）、一輪挿しの様なものと考えられる竹製の容器（W65）、29区SE108の井筒（W66）は写真のみ掲載した。

Ⅴ．遺構と遺物の検討

１．兵庫津の町割と発掘調査成果　－検出遺構に関連して－

１．はじめに

本報告書における兵庫津遺跡浜崎地区・七宮地区の調査は、一般国道２号共同溝整備事業という本体工事の性格上、調査範囲若しくは調査方法等に制限があり、従って抽出される情報の限界は如何ともし難いものであった。しかし、これまで神戸市教育委員会及び大手前女子大学兵庫津遺跡調査会等で実施された発掘調査と比較すると、調査区幅が狭小ながら、最も広範囲の調査であった。今回の発掘調査では、道路下における近現代の攪乱及び埋設管等既設の埋設物の影響、または遺構自体の遺存状況によって、ある地区では１面、ある地区では２～５面と調査区毎にばらつきがあったが、概ね14～15世紀をピークとする中世の遺構、16世紀後半以降の近世の遺構、さらに第２次世界大戦の「神戸大空襲」前後にあたるような近代遺構を検出した。

今回調査を実施した部分は現存する七宮神社、及び現在の町名等から、『元禄兵庫津絵図』（以下、絵図と呼称）に描かれた町屋域の北部に位置することが比較的容易に想定できた。しかし、本調査区が実際に町屋のどの辺を通っているかはあまり明確ではなかった。そこで、現在の地図上における調査区の位置を起点として古い地図へ遡っていく形で、今回の調査成果と町屋との関係を照合していく作業を試みた。以下、その結果について述べるが、浜崎地区と七宮地区の調査成果では、遺構の性格や存続時期等で異なる部分が多いため、両地区それぞれについて述べることとする。

２．明治期の地図

作業の方法としては、まず現在の地図に本調査区を重ね、その後可能な限り現在の地図に重複し得る地形・道路・施設等が残る地図上に重ね合わせる形で行った。

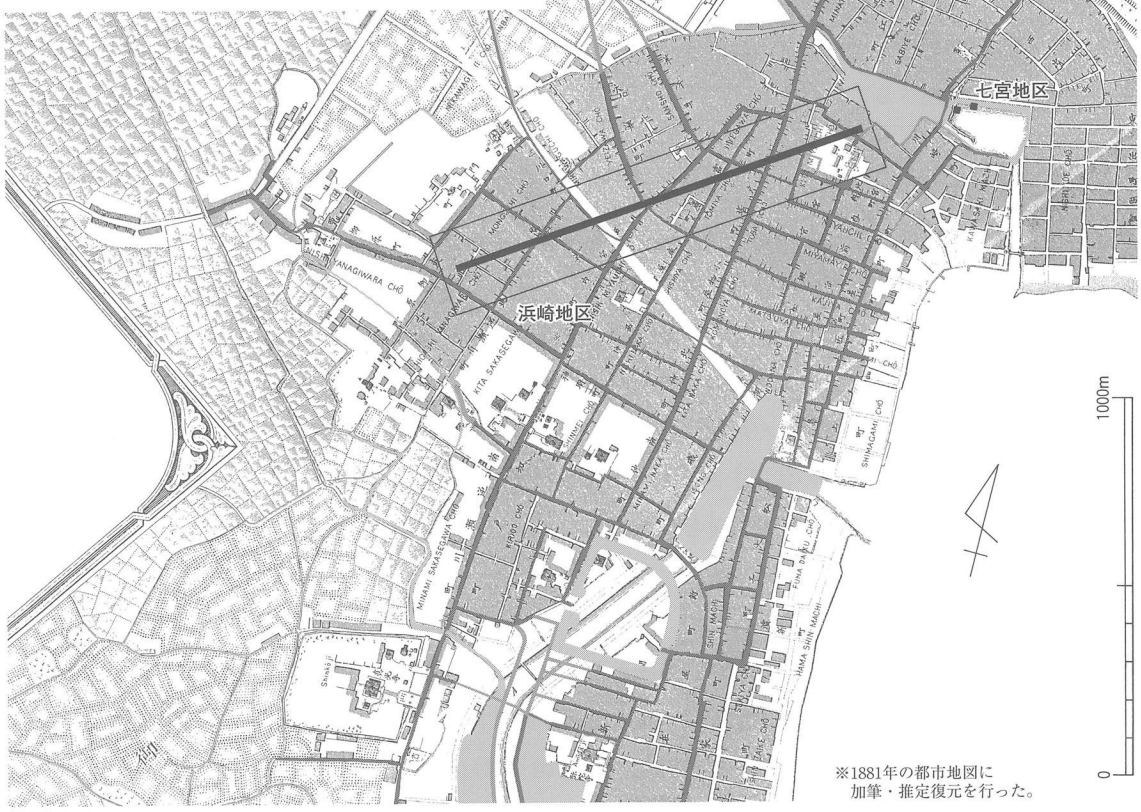
ところで、この作業段階では、明治時代の地図に有意義な資料があった。それは、1881（明治14）年、1885～1886（明治18～19）年、1932（昭和７）年の神戸の都市地図であり、その中でも特に1881年の地図は、旧西国街道をはじめとして絵図に描かれた町割に伴う道路や水路の痕跡を比較的良好な形で止めており、絵図との類似点が多いことが判った。この状況を踏まえて、今回の調査区を重ね合わせたものが第19図である。以下、この図に基づいて両地区の調査成果の検討を行う。

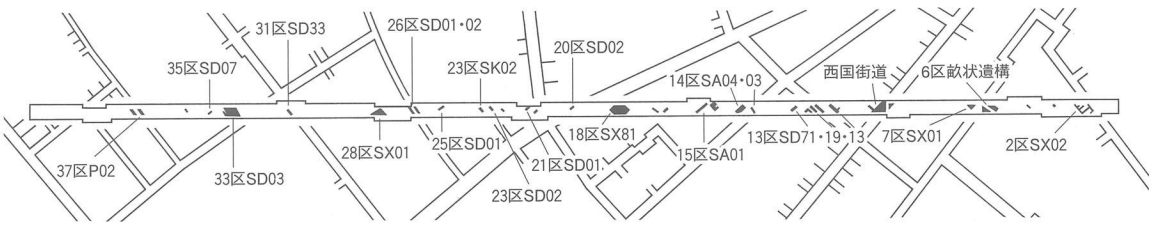
３．浜崎地区の調査成果と関連して

浜崎地区では、検出した遺構の中でも特に建物となり得る施設、長楕円形状あるいは長方形状を呈する土坑やピット、溝、石組や板材等の護岸施設を持つ溝、石積み施設、畝状遺構等を複数時期（複数遺構面）にまたがって抽出し、その遺構配置を調査区内に示した（第19図下段）。この内、10区西側・11区東側で検出した落ち込み及び溝は現在も道路として存続している旧西国街道の延長上にあたり、特に11区ではそれに平行あるいは直行する溝や、石組の水路と考えられる施設を検出しており、道路として整備されたような痕跡は確認できなかったが、ほぼこれを旧西国街道とすることで間違いないと考えた。これを踏まえた上で、抽出した遺構の配置と明治期の道路等との関係を概観し、さらに絵図で描かれた町割を重ねると、次のようなことが見えてきた。各地区の状況は以下の通りである。

２区SX02は東西南北に石を配置し、明らかになんらかの構造物を支えた施設であるが、東側の石列が道路

挿図2　元禄兵庫津絵図要部略図





第19図　兵庫津の町割と本調査成果の対応図

に沿っている。この部分は七宮神社境内の北端の通りにあたり、道路に面して築かれた施設と考えられる。また、SX02付近からは多量の土錘が集積する土坑（SK01）や蛸壺を埋設した遺構（SX01・03）を検出しているが、絵図によれば七宮神社の西部から入江に抜ける水路があり、遺構が入江に非常に近い部分に位置していることに起因するのではないかと考える。

七宮神社の境内にあたる部分としては、6区で畝状遺構を検出している。この部分は境内でも空間地にあたると考えられ、少なくとも17世紀代には畑地であったと想定される。また、西隣の7区SK01は方形状を呈する土坑と考えられるが、土坑の南北方向の一辺が畝の走る方向と同様であり、さらに両遺構の間に遺構が存在しないことから、両遺構の間を南北に走る道路の存在が推測できる。

13区SD13・19は西国街道に直交し、トミヤ町（木戸町・木場町か）の北側を東西に走る道路に伴う側溝と推定され、特にSD13は17世紀以降、長きにわたり継続した石組の溝である。

14区SD04はトミヤ町（木戸町・木場町か）の東側を南北に走る道路側溝と推定される。また、SD04に直行する石詰め溝（SD03）は道路上にあたっているが、これは暗渠ではないかと考える。

18区SX81は方形状の石組遺構で、倉庫状の遺構を想定している。遺構の位置する部分は、絵図に描かれた寺町の中でも浄土宗法界寺とみられる部分にあたる（現在は西幸寺となっている）が、長福寺町域を縦断する形で南北に走る道路と近接しており、法界寺の門口もこの道路沿いに位置していることから、遺構が寺の境内でも門口付近に位置すると考えられる。しかし、遺構の埋没年代が出土遺物から16世紀前半に位置づけられること、絵図に描かれた寺町の形成が、1580（天正8）年、池田恒興による兵庫城の築城を契機とする町屋の整備に際してなされたものである可能性が高いことを考えると、遺構は法界寺の建立以前に機能した施設であると言えよう。何れにしても、SX81は旧法界寺（現在の西幸寺がSX81の西側にあり、旧道路上に建っている。また、旧法界寺の境内は現国道下と推定される。）と同様、道路の存在を充分意識した上で築造されたことが窺える。

20区SD02は長福寺町域を南北に縦断する道路側溝と推定される。

26区SD01・02は三川口町を横断する形で東西に走る道路側溝と推定される。また、遺構付近には溝に平行する土坑・溝も検出しており、道路の拡幅等があったとも考えられる。

31区SD33は門口町域を東西に走る道路側溝の一部と推定される。

37区P02とそれに平行する溝状遺構は門口町南側を横断する道路側溝と推定される。ただし、この道路は元禄絵図では描かれておらず、明治期の地図には現れているものであり、時期的に後出する道路であろう。

この他の溝については、主要道路に関連していないものにおいても、道路にほぼ平行あるいは直行しており、町屋内の細かな屋敷地割や導水施設に伴う溝ではないかと考えられる。例えば、23区SK02・SD02は、東西に併走する溝状の遺構で、直接道路に伴うものではないが、何らかの関連をもつものと思われる。また、33区SD03は丁寧な護岸施設を伴う溝だが、南北の通りにほぼ直行する部分で、方位的には共通しているものの、他の溝と比較しても単なる側溝とは言い難い。このSD03では、出土遺物において古いもので13世紀代、14世紀後半～15世紀初頭をピークとして、16世紀初頭のものが出土しており、元禄絵図に描かれた町屋からは時期的に非常に先行するものである。この溝については、本報告Ⅲ章において中世の町屋の町境にあたる可能性を指摘しているが、これ以西の検出遺構密度をみれば、それを推測するに難はないと考える。

さて、上記した遺構については、その抽出段階で中世から近世、さらに近世以降を含めていることは前述した通りであるが、調査区全体では検出される遺構の時期に一定の傾向が認められることが判っている。それは、23区周辺を中心として13世紀～14世紀代の遺物が出土する中世遺構群が広がり、14世紀後半～15世紀代をピー

クとする遺構群が17区～33区に広がる。そして、その外縁部には16世紀後半以降の近世遺構が広がっていくというものである。ここで、13区・14区で検出した道路側溝と思われる溝は、出土遺物から17世紀以降の位置づけがされ、ほぼ元禄期には現れていて妥当な遺構である。これに対して、20区SD02、23区SK02・SD02、26区SD03・04、31区SD23・33、33区SD03は、若干突出して古い遺物を含むものもあるが、概ね13世紀前半～14世紀前半、14世紀後半～15世紀代の溝であり、しかもその方向は元禄期以降の溝と同様に道路と関連するような形で検出されている。このことは、元禄期に町割の区画として整備されていた道路が、中世においても町割の道路として存在した可能性を示唆するものと捉えられるのである。その中にあって、33区SD03のような丁寧に護岸整備された溝は、これ以西の遺構の検出状況から見て、中世兵庫津における町屋の境界となり得るものと思われ、中世兵庫津の町屋の規模を知る上で興味深い遺構である。また、町屋の小地割に伴うと考えられる溝も含めて、その方向等が中世から近世の時間を超えて同様の傾向を示し、あるいは一部遺構が重複していることは、兵庫津の基本的な町割がほぼ中世の段階で確率し、以後、池田恒興による兵庫城の築城を契機とされる近世兵庫津の町屋の整備に際しても、道路等の大枠としては中世の町割りを踏襲して形成されたということが、少なくとも本調査区周辺ではいえるのではないだろうか。

以上、兵庫津の町割と浜崎地区の調査成果との関連について述べた。当初、調査区の幅が狭小で細長い調査区、合わせて覆工板を開閉しながらの、国道下での条件的に厳しい調査で得た調査成果では、遺構の性格、復元等の検討については悲観的なものがあった。しかしながら、検出した中世から近世に至る溝をはじめとする遺構に認められるある一定の規則性、明治期の地図と絵図との類似性、そして、さらに現道として残る旧道の痕跡は、本調査成果の検討に充分な期待感をもたらした。本項で担当者が想定した内容については、論法・手法的に乱暴だとのご批判もあろうが、現段階で担当者が理解した兵庫津の町屋における本調査成果の位置づけと理解されたい。また、今後周辺の調査例の増加に伴い、其々に検討がされるであろうが、今回の成果がその叩き台となればと思う次第である。（深江）

4．七宮地区の調査成果について

本地区の調査成果については、確認調査・全面調査共に調査を担当した当事務所の水口富夫氏（故人）が、その実績報告書において検討を行っている。本来であれば本項の執筆については氏にお願いするところであったが、それが叶わず非常に残念である。従って、本項では氏の実績報告での検討結果を以って本地区のまとめとしたい。

以下、本地区の調査成果について述べるが、本地区は東地区・西地区があり、さらに西地区は確認調査の南北トレンチの中間にあたる。特に、西地区については、確認・全面それぞれの調査成果での検討を行っており、地区名・トレンチ名が入り交じった表現になることをご容赦願いたい。

西地区（南北トレンチ含む）における調査では、ほぼ南北方向に一直線に並ぶ石垣を検出した。また、東地区ではほぼ東西に並ぶ石垣を検出した。この石垣は、明治期までには存在した「船入江」（現在の西出町周辺）の石垣の一部に当たるとみて、ほぼ間違いなかろう。

「船入江」は、元禄年間（17世紀末～18世紀初）の絵図によれば、今回の調査区の入江からさらに西北側に繋がる佐比江（現在の佐比江町の一部）にまで続いている。一方、明治14年（1881）の地図では佐比江に繋がる入江は認められない。このことは、それまでの間に佐比江付近の埋立てがされ、石垣等の構築によって入江が整備されたことが窺える。明治以降の船入江は、新たに運河が掘削され、港の中心が神戸に移動したのに伴い、徐々にその機能が失われ、明治33年（1900）に入江小学校が開校するまでにはほぼ全域が埋め立てられて

しまった。図示していないが、昭和7年（1932）の地図では、入江小学校の敷地と小学校の東南から浜側へ向かう道路に入江の痕跡を見ることができる。その後、昭和63年の小学校廃校に伴い、その大部分は市営入江住宅用地となり、一部道路に取り込まれている。

元禄年間から見られた船入江の状況については以上のようであるが、今回の調査成果との関係は以下のように考えることが可能であろう。

西地区の調査成果

西地区で検出した石垣は、船入江の西側に築かれた石垣（西側石垣）と考えられ、石垣の下方で認められた積み直しの痕跡は、明治時代に入江が埋め立てられた際のものである可能性が高い。それは、北トレンチで検出した石垣が船入江西側のものであるとすると、そこには湊川方面から流れて来る水路が存在しており、入江側が埋め立てられた後でも水路として機能しなければならなかった事情があったために石垣を修築する必要があったと推定され、その後の全面調査（西地区）において、石垣の変色や土層の堆積状況から積み直し部分を境にして水面下にあった可能性を示していることからも、水路としての機能が窺える。従って、北トレンチの西側で見られた積み直しのあった石垣は、江戸時代に町屋と入江を画するものとして築かれたが、明治時代になって水路の片側の石垣として存続していたものと捉えることができる。

一方、北トレンチの東側で検出した胴木は、明治年間に船入江を埋め立てる際に設けられたと考えるのが妥当で、胴木と西側石垣の間が水路として機能していたことになる。また、胴木の高さと東側の石垣の根石に高低差があるのは、両者の構築時期に差があることを示している。すなわち、東側の石垣は、船入江が埋め立てられた後に構築されたもので、入江小学校敷地と水路を画するものと理解できよう。

南トレンチでは、石垣（西側）の西側を調査したことによって、石垣の裏込めの状況と町屋側の層序が明らかになった。南トレンチの石垣の裏込めは、調査で検出した最上段の石との間に若干の高低差が認められた。石垣の最上段に対応する部位にある裏込め石は、その上方にある石と比較して小振りであり、その配置に時期差があることを窺わせる。これは、上方に積まれた石が町屋側の整地の高さに従って、石垣との間にできた高低差を埋める必要性から配置されたものとも考えられる。町屋側は、標高約30cmにある黄色粗砂がベースと考えられ、その上に少なくとも2面の整地層がある。調査区の都合上、遺構の存在は確認できず、町屋側に大規模な埋め立てを示すような痕跡が確認できなかったことから、この周辺が元禄年間の絵図に描かれた佐比江の入江にあたっていない可能性も考えられる。

東地区の調査成果

東地区で構築された石垣は、古石垣とやや入江側に迫り出す新石垣を検出した。第Ⅲ章でも記述したが、この石垣は古石垣の構築段階でさらに入江側に土留め板を設置して、新石垣の下半部を構築するという段階を踏んでおり、調査担当者も「港湾施設の設備を充実させる意味からも、さらに深い入江が要求されたとみられ、・・・」との分析を調査段階で行っている。神戸市史によれば、港湾施設として整備された石垣は、砂堆という立地条件からか、度々自然災害の影響を受けて倒壊しており、その度に修築を余儀なくされているようである。例えば、明治4年（1871）には、生田川尻において建設を進めていた石垣が、竣工を目前にして嵐のために倒壊している。こういった状況は、当時の本地区周辺においても同様の状況があったと思われ、石垣の構築段階での拡張は、度重なる石垣の倒壊に対応したものであったのではないかと考えられる。

東西地区を通じて

以上、西地区（南北トレンチ含む）・東地区の調査成果について述べた。さて、本地区については絵図に描かれた船入江でも堤防を挟んだ西出町よりの入江にあたると考えられるが、絵図では西出町の入江には海から

入江に入る水路及び西出町側にのみ石垣が築かれていることが看取される。しかし、本地区にあたる部分には、石垣等の表現が認められないことから、本地区で検出した石垣は、少なくともそれ以降に築かれたものと考えられる。

また、その後の本地区周辺の状況は、旧西国街道の整備、旧湊川の改修、兵庫新川及び兵庫運河の開削等の土木事業が進む中、船入江としての機能が失われ、明治26年兵庫船渠会社による西出町地先1100余坪の埋め立てを初めとして、区有財産造成を目的として次々に埋め立てられ、明治35年までには全て埋め立てられたようである。

今回の本地区の調査によれば、この「船入江」は江戸時代の後半に石垣が構築され、「船入江」として整備された後も、明治の初期に大規模な改築が加えられたことが明らかとなった。神戸港の開港に伴い、江戸時代から続く兵庫津の機能が神戸港へ移ったと理解され易いが、兵庫新川・運河等の整備によって船入江の機能がなくなるまで、本地は兵庫津における重要な港湾施設としての役割を担ったと考えられるのである。
(†水口・深江)

5．おわりに

以上、本項では兵庫津遺跡浜崎地区・七宮地区における調査成果について、遺構の面から検討を行った。本遺跡の発掘調査は、交通量の多い国道沿線において、排気ガスや埃にまみれながら、時には道路下を潜り込むように調査する場面もあるなど、非常に過酷な状況であった。この様な状況下で調査した成果が、中世以降、近世・近代にわたる兵庫津の町屋や船入江の風景を推考するまでに至ったのは、偏に調査担当者、特に震災復興のため他府県から派遣された支援職員の方々、また他界された水口富夫氏の熱意と仔細な調査・分析の賜であり、深謝の意を表するものである。筆者の稚拙な論考では、関係諸氏の思いを正確に反映することができたか覚束ないが、本報告書の作成に携わった者の現段階での見解としてご容赦いただければ幸いである。(深江)

引用・参考文献

武藤　直　1981年　「中世の兵庫津と瀬戸内水運」
『兵庫北関入船納帳』　中央公論美術出版

神戸市役所　1971年　「第9章　土木・第12章」　『神戸市史』　名著出版

柏書房　1995年　「兵庫神戸実測図」『神戸都市地図』

岡田章一　2000年　「兵庫津遺跡の調査」　『歴史と神戸』第39巻第2号　神戸史学会

高久智宏　2002年　「近世兵庫津北浜における浜先地開発と屋敷割の変化について」
『神戸市立博物館　研究紀要』第18号　神戸市立博物館

藤井太郎　2002年　「兵庫津遺跡における埋蔵文化財の現状」
『神戸市立博物館　研究紀要』第18号　神戸市立博物館

※本項第19図は、『兵庫北関入船納帳』より「元禄兵庫津絵図要部略図」を、『神戸都市地図』より「兵庫神戸実測図（兵庫・和田岬　1881　1：5000)」を使用し、一部加筆・推定復元を行い、作成したものである。

2．時期設定と土器・陶磁器組成の変遷

1．はじめに

今回の調査地点の年代設定にあたっては、普遍的に出土し、使用期間が比較的短いことからく伝世期間を考慮する必要がなく、また、土師器皿に比べて播磨、丹波など旧国単位の比較的広い範囲に分布する土製煮炊具をとりあげ、その変遷を中心に行った。また、各期の実年代の推定にあたっては、比較的出土量が多く、器形などの変化が顕著で、生産地における研究が進んでいる、東播系須恵器、備前焼、貿易陶磁、肥前系陶磁器を中心に瓦器、瓦質土器、瀬戸・美濃系陶器、常滑焼、丹波焼、石鍋などの年代観をも考慮して行った。

今回、出土した土製煮炊具はその所属時期を、その形態の変化、組成などから、12期に区分できる。以下、Ⅰ期から順に各期の様相、土器・陶磁器組成の変遷について概観する。

2．各時期の様相

Ⅰ期（12世紀代）

様相　出土遺物には、土師器皿、瓦器椀、須恵器甕、鉢、貿易陶磁、石鍋などが僅かに見られるが、土製煮炊具はまだ出現していない。従って、この段階では、断片的に遺物の出土は見られるが、港に伴う町場の形成は行われていないことが分かる。

土師器皿　土師器皿は、轆轤土師器Ⅰ類及び非轆轤土師器のⅠ類、ⅡA1ａ類、ⅣA1類がある。

瓦器・瓦質土器　瓦器椀では和泉型瓦器椀の尾上分類Ⅱ-3期・Ⅲ-1期相当のものが出土している。

須恵器　須恵器では東播系の甕、池田分類鉢Ａ１類・Ｂ１類が見られる。この時期は甕・鉢類は常滑、備前などの国産陶器はまだ見られず、全て東播系を中心とする須恵器で占められている。

貿易陶磁　貿易陶磁では山本分類の龍泉窯系青磁浅形碗Ⅰ-1類・小碗Ⅰ-3類・皿Ⅰ-2ｂ類が僅かに出土している。

石鍋　石鍋は木戸分類Ⅲa-2類が出土している。

これらの遺物群からⅠ期は12世紀代と考えられる。

Ⅱ期（12世紀末葉～13世紀代）

様相　この時期の前半には土製煮炊具が出現し、後半には煮炊具の量、種類が増大し、器種組成が漸く出揃う。これらのことから、この時期の後半に、町場の形成が本格化したことが分かる。

Ⅱ期は土製煮炊具の変遷から、Ⅱ期前半（12世紀末葉～13世紀前半）、Ⅱ期後半（13世紀後半）に細分される。

Ⅱ期前半（12世紀末葉～13世紀前半）

土製煮炊具　土製煮炊具では、鍋形タイプ：鉄鍋形Ⅰ類が出現する。

土師器皿　土師器皿では、前代に引き続き轆轤土師器Ⅰ類が見られるが、基本的には轆轤土師器はこの時期を最後に姿を消す。非轆轤土師器では、Ⅰ類及びⅡA1ａ類、ⅣA1類が使用されている。

瓦器・瓦質土器　瓦器椀には和泉型瓦器椀Ⅲ-2期・Ⅲ-3期のものが見られる。

須恵器　須恵器では東播系の甕、鉢B2類・C1類があり、僅かに常滑焼の甕が加わるが、甕・鉢類は東播系須恵器が主体を占めている。

国産陶器　国産陶器では須恵器甕に加えて、常滑焼中野編年5型式の甕が出現する。

貿易陶磁　貿易陶磁では、この段階は白磁の比率が高く、青磁は少ない。白磁碗は森田分類Ⅳ-1類・Ⅴ-4類、

皿では、Ⅲ類・Ⅴ類が出土している他、白磁四耳壷が見られる。一方、青磁では同安窯系青磁碗・皿の他、龍泉窯系青磁では、山本分類Ⅱ類相当の蓮弁文碗が僅かに見られる。また、僅かではあるが、景徳鎮窯産と考えられる青白磁梅瓶・合子が出土している。

石鍋　石鍋はⅢb類が出土している。

これらの遺物群からⅡ期前半は12世紀末葉～13世紀前半代と考えられる。

Ⅱ期後半（13世紀後半）

土製煮炊具　土製煮炊具は鉄鍋形Ⅱ類に加えて、羽釜形タイプA系列Ⅰ類、甕形タイプ播丹型Ⅰ類が加わり、量とともに器種にも増加が見られる。

土師器皿　土師器皿では、轆轤土師器が姿を消し、非轆轤土師器のⅡA1ｂ類、ⅡB1a類、ⅣA2類が出現する。

瓦器・瓦質土器　瓦器椀では和泉型瓦器椀のⅢ-3期・Ⅳ-1期のものが見られる。また、瓦質土器では立石分類の浅鉢Ⅰ類が出現する。

須恵器　須恵器は前代に引き続き、東播系須恵器甕、鉢B2・C1類が継続して使用されている。甕はこの時期は依然主体を占めているが、この時期の後半に生じる国産陶器の増加につれて、徐々に減少し、この時期を最後に基本的には姿を消す。

国産陶器　国産陶器では常滑焼甕の6a型式・6ｂ型式のものが見られる。また、常滑焼甕に加えて、備前焼では松岡分類甕ⅡＡ類、丹波焼では、長谷川分類甕Ⅱ類、壷Ⅰ類・Ⅱ類が出現し、甕を中心に、量に加えて、器種も増加する。また、瀬戸・美濃系陶器には、藤澤編年前Ⅳ期相当の灰釉の入子が見られる。

貿易陶磁　この時期、貿易陶磁の出土量はⅡ期前半期に比べ全体に急速に減少するが、特に白磁の減少は著しく、白磁碗・皿類ではⅨ類の白磁皿のみとなる。また、青磁も同安窯系のものがなくなり、龍泉窯系の劃花文碗：山本分類Ⅲ-1B類及び杯Ⅲ-1類のみとなる。白磁四耳壷、青白磁梅瓶・合子は前代に引き続き使用されている。

石鍋　石鍋はⅢｂ類が出土している。

これらの遺物群からⅡ期後半は13世紀後半代と考えられる。

Ⅲ期（14世紀前半）

様相　Ⅲ期は土製煮炊具を中心に出土遺物の量・器種が急速に増大する時期である。国産陶器では常滑・備前・丹波・瀬戸・美濃の製品が出揃う。また、少量ではあるが貿易陶磁も継続して使用されている。

また、器種では碗・皿などの供膳具、擂鉢、土製煮炊具などの調理具、甕などの貯蔵具など日常生活で使用される全ての器種が出揃い、その量も増大する。

これらのことから、この時期に町場の形成がほぼ完成したと考えられる。

土製煮炊具　土製煮炊具は鍋形タイプ：鉄鍋形ⅢA類、羽釜形タイプ：A系列　ⅡA類・B系列Ⅰ類、甕形タイプ：播丹型Ⅱ類で構成されている。

土師器皿　土師器皿では非轆轤土師器ⅡA2ａ類、ⅡＢ1ａ類。ⅢA1類、ⅣB1類、ⅤA1類が出現する。

瓦器・瓦質土器　瓦器椀には和泉型瓦器椀のⅣ-3・Ⅳ-4期相当のものが見られ、瓦質土器は前代に引き続き、浅鉢Ⅰ類が使用されている。

須恵器　東播系須恵器甕はすでにこの時期に姿を消す。鉢は東播系須恵器が依然主体であり、C2類・D類が見られる。

国産陶器　国産陶器には備前焼では甕ⅡB類・ⅢA類に加えて、新に擂鉢ⅡA類・ⅡB類が出現する。丹波焼は壷が姿を消し、甕Ⅲ類が見られる。常滑焼には7型式相当の甕がある。瀬戸・美濃系陶器では中Ⅱ期相当の天目茶碗・卸皿・花瓶などが見られる。

貿易陶磁　貿易陶磁は前代の様相と基本的には同様で、龍泉窯系青磁碗が主体となり、白磁ⅢⅨ類・白磁ⅢB群、龍泉窯系青磁の劃花文碗Ⅲ-1B類・蓮弁文碗Ⅳ類・無文碗上田分類D-1類、杯Ⅲ-1類・Ⅲ類、ⅢⅢ類、盤などで構成され、器種は前代に比べて豊富になるものの、国産陶器の増加に比べ、量的にはそれほどの増加は見られない。また、その他、注目すべきものに、建窯産と考えられる天目茶碗がある。

石鍋　石鍋はⅢc類が出土している。

これらの遺物群からⅢ期は14世紀前半と考えられる。

Ⅳ期（14世紀中頃～後半）

様相　Ⅳ期には土製煮炊具の器種・量はますます増大する。瓦器椀はこの時期を最後に姿を消す。国産陶器では備前焼の甕・擂鉢が増加するのに対して、東播系須恵器鉢が減少する。また、甕では常滑焼甕が一定量存在するのに対して、Ⅱ期後半に出現した丹波焼の甕・壷類が姿を消す。瀬戸・美濃系陶器では、天目茶碗の出土が目立つようになり、少量ではあるが、灰釉平碗、平底末広碗など碗類の出土がⅢ期に比べ多くなる。

土製煮炊具　土製煮炊具は鍋形タイプ：鉄鍋形ⅢB類・ⅢC類、羽釜形タイプ：A系列　ⅡB類・ⅡC類・B系列　ⅡA類、甕形タイプⅢ類で構成され、鉄鍋形、羽釜形タイプA系列がこの時期を最後に姿を消す。

土師器Ⅲ　この段階では極僅かではあるが、轆轤土師器Ⅱ類が認められる。また、非轆轤土師器では、ⅡA2b類、ⅣB2類、ⅤA2類、ⅥA類などがあり、量とともに種類も豊富になる。

瓦器・瓦質土器　瓦器では僅かに和泉型瓦器椀Ⅳ-5期のものが見られる。瓦器椀はこの時期を最後に姿を消す。瓦質土器には浅鉢Ⅲ類が見られる。

須恵器　この時期の前半には、鉢E1類・E2類・F類などがあり、備前焼擂鉢と比率が相拮抗するが、徐々に備前焼擂鉢が増加し、この時期の後半には須恵器鉢はF類のみとなり、備前焼擂鉢が大半を占めるようになる。

国産陶器　国産陶器では備前焼の出土が顕著になり、甕ⅢA類、擂鉢ⅢA類・ⅢB類が大量に見られる。一方、丹波焼は甕・壷とも姿を消す。常滑焼は量的には少ないものの、8型式の甕が一定量見られる。瀬戸・美濃系陶器では、貿易陶磁の減少に符合する形で、碗類の比率が高くなり、後Ⅰ期～Ⅱ期の灰釉平碗、中Ⅲ期の灰釉末広碗、後Ⅰ期の天目茶碗などが見られる他、注目すべきものに、中Ⅳ期相当の水滴がある。

貿易陶磁　貿易陶磁は器種、量ともますます減少し、龍泉窯系青磁蓮弁文碗が主体を占めるようになる。蓮弁文碗には碗Ⅳ類、上田分類B-Ⅲ類がある。この他、僅かに、無文碗D-Ⅰ類、ⅢⅣ類、盤などが見られる。

石鍋　石鍋はⅢd類が出土している。

これらの遺物群からⅣ期は14世紀中頃～後半の時期が考えられる。

Ⅴ期（15世紀前半～中頃）

様相　この時期は土製煮炊具では叩き技法を用いた鍋形タイプ：鉄かぶと形・羽釜形タイプ：播磨形が出現する。また、東播系須恵器鉢がこの時期を最後に姿を消す。国産陶器では備前焼の占める割合がますます増大し、常滑焼甕もこの時期を境に見られなくなる。瀬戸・美濃系陶器では前代に出現した天目茶碗に加えて、卸皿、青磁盤を模倣した折縁皿、直線大皿などが出現する。貿易陶磁は龍泉窯系青磁蓮弁文碗を主体とし、器

種・量とも僅かではあるが前代よりも増加する傾向を示す。石鍋はこの時期を最後に姿を消す。

土製煮炊具　土製煮炊具は鍋形タイプ：鉄かぶと形Ⅰ類、羽釜形タイプ：B系列ⅡB類、羽釜形タイプ：播磨型A系列ⅠA類・B系列ⅠA類、甕形タイプ：Ⅳ類で構成されている。

土師器皿　Ⅳ期に見られた轆轤土師器Ⅱ類がこの時期の前半に姿を消し、皿は再び非轆轤土師器のみで構成されるようになる。非轆轤土師器には、ⅡA2b類、ⅡB2a類、ⅢA2類、ⅣB2類、ⅤA2類、ⅥA類などがあり、Ⅳ期に引き続き量、種類とも豊富である。

瓦質土器　瓦質土器には浅鉢Ⅳ類、風炉Ⅱ類がある。奈良火鉢はこの時期を最後に姿を消す。

須恵器　東播系須恵器では僅かに鉢F類が存在するが、備前焼擂鉢が完全に東播系須恵器鉢を圧倒して、鉢類の主体を占めるようになる。この時期を最後に東播系須恵器は姿を消す。

国産陶器　国産陶器ではⅣ期に引き続き、備前焼の占める割合が増大し、甕Ⅳ類、擂鉢ⅢC類・ⅣA類のほか、壷などの器種も見られる。一方、常滑焼は9型式の甕・壷が僅かに見られる程度で、この時期を最後に姿を消す。また、丹波焼甕Ⅴ類が見られることから、少量ではあるが、少なくともこの時期まで丹波焼甕の搬入が継続していたことが窺われる。

貿易陶磁　貿易陶磁はⅣ期に引き続き、龍泉窯系青磁碗・盤で占められる。碗には蓮弁文碗　上田分類B-Ⅲ類、無文碗E類に加えて、新たに雷文帯碗C類が出現する。また、前代に引き続き、青磁盤が使用されている。

石鍋　石鍋はⅢe類が出土している。この時期を最後に石鍋は見られなくなる。

これらの遺物群からⅤ期は15世紀前半から中頃と考えられる。

Ⅵ期（15世紀後半～16世紀初頭）

様相　この時期は、土製煮炊具では羽釜形タイプ：播磨型を中心に鉄鍋タイプ、羽釜形タイプ：B系列、甕形タイプが揃い、器種、量ともⅤ期に引き続き豊富であるが、鉄鍋タイプ、羽釜形タイプ：B系列、甕形タイプはこの時期を最後に姿を消す。国産陶器では、甕・擂鉢ともほぼ備前焼で占められるようになり、備前焼の独占体制が確立する。瀬戸・美濃系陶器では、Ⅴ期に引き続き、天目茶碗及び灰釉の卸皿が使用されている。貿易陶磁では、龍泉窯系の青磁碗に加えて、新たに白磁C・D群の碗・皿類が出現する。

土製煮炊具　土製煮炊具は鉄鍋タイプ：鉄かぶと形Ⅱ類・Ⅲ類、羽釜形タイプ：B系列ⅡC類・ⅢA類、羽釜形タイプ：播磨型A系列ⅠB類・ⅠC類・B系列ⅠB類・ⅠC類、甕形タイプⅤ類など豊富な器種から構成されている。

土師器皿　土師器皿は全て非轆轤土師器で占められている。非轆轤土師器には、ⅡA3b類、ⅡA4類、ⅡB3a類、ⅡB3b類、ⅢB2a類、ⅢA2b類、ⅢC1類、ⅢC2類、ⅣC2a類、ⅣC2b類、ⅣD1類、ⅣD2類、ⅤB2類などがあり、量、質とも最も豊富になる。

国産陶器　国産陶器のうち、甕・擂鉢は全て備前産のもので占められる。甕ではⅤ類が、擂鉢ではⅣB・ⅤA・ⅤB類が出土している。瀬戸・美濃系陶器では後Ⅳ期古・新段階の天目茶碗の他、後Ⅳ期の卸皿が認められる。

貿易陶磁　貿易陶磁では、龍泉窯系青磁無文碗E類・蓮弁文碗B-Ⅲ・Ⅳ類・雷文帯碗C類・盤を主体として、新にC群の白磁碗・D群の白磁皿が加わる。

これらの遺物群からⅥ期は15世紀後半～16世紀初頭と考えられる。

Ⅶ期（16世紀前半～後半）

様相　Ⅶ期は土製煮炊具を中心に全ての遺物群が種類・量とも激減し、一つの空白期を形成する時期である。

土製煮炊具　土製煮炊具では前代まで豊富に存在した、鉄鍋形、甕形が姿を消し、羽釜形タイプ：B系列Ⅲ B類と播磨型Ⅱ類のみで構成され、出土量は激減する。

土師器Ⅲ　土師器Ⅲは非轆轤土師器で占められている点はⅥ期と同様であるが、ⅡA4類、ⅡA5a類、ⅢC2類、ⅣD2類が僅かに見られる程度である。

国産陶器　国産陶器の甕・擂鉢は量的には激減し、備前焼擂鉢Ⅵ類が僅かに出土しているのみである。また、瀬戸・美濃産の施釉陶器では、大窯Ⅲ期の天目茶碗、灰釉Ⅲなどが僅かに見られる。

貿易陶磁　貿易陶磁にはこの時期に確実に使用されたと考えられるものは見られない。

これらの遺物群からⅦ期は16世紀前半～後半代と考えられる。

Ⅷ期（16世紀末葉～17世紀初頭）

様相　前代に種類・量とも激減した遺物群はこの時期に入ると、丹波焼擂鉢の出現・瀬戸・美濃系茶陶の増大、肥前系陶器の出現などにより、急激に増加する傾向を示す。また、貿易陶磁はこの時期の後半を最後に肥前系陶器と入れ替わるように姿を消す。

土製煮炊具　土製煮炊具は羽釜形：B系列が姿を消し、播磨型Ⅲ類のみで構成されるようになる。

土師器Ⅲ　Ⅶ期に激減した非轆轤土師器Ⅲは、この段階でも量・種類とも依然として少量で僅かにⅡA5ｂ類、ⅢD1類が見られる程度である。

国産陶器　国産陶器では備前焼擂鉢Ⅵ類・Ⅶ類・ⅧA類・ⅧB類の他、鉢などの器種が加わる。また、丹波焼擂鉢が新に出現し、ⅠA2（ヘラ類）・（クシ類）類が同時に使用されている。瀬戸・美濃系の施釉陶器では、大窯Ⅴ期の天目茶碗・灰釉Ⅲに、新たに長石釉を施した志野Ⅲが加わる。また、大橋編年Ⅰ期相当の肥前系陶器椀・Ⅲ類が新に出現するが、肥前系磁器はまだ見られない。

貿易陶磁　貿易陶磁では、龍泉窯系青磁蓮弁文碗B-Ⅳ・B-Ⅳ′類・輪花Ⅲ、白磁ⅢE群に加えて、青花碗・Ⅲが出現する。また、貿易陶磁はこの時期を最後に姿を消す。

これらの遺物群からⅧ期は16世紀末葉～17世紀前半代と考えられる。

Ⅸ期（17世紀前半～後半）

様相　Ⅸ期は土製煮炊具がものを煎る焙烙に特化し、焙烙ⅣA類に変化する時期である。この時期以降、焙烙は叩き成形から型作り成形へ成形技法が変化し、形態的に低平化して行く。国産陶器では、備前焼甕・擂鉢が急激に減少し、丹波焼が擂鉢を中心に急速に普及する。また、瀬戸・美濃系の施釉陶器・貿易陶磁が姿を消し、肥前系陶磁器が碗・Ⅲ類の主体となる。

土製煮炊具　土製煮炊具は播磨型が姿を消し、焙烙ⅣA類のみで構成される。

土師器Ⅲ　土師器Ⅲは、新に轆轤土師器が再登場する。轆轤土師器には、ⅢA類、ⅢB類がある。

非轆轤土師器は、Ⅷ期に引き続き少量で、ⅡA5ｃ類、ⅢD2類が見られる程度である。この時期を最後に非轆轤土師器Ⅲは姿を消す。

陶器　備前焼は擂鉢Ⅸ類が僅かに見られる程度で、甕・擂鉢はこの時期以降見られなくなる。替わって、丹波焼は擂鉢ⅠB1類・ⅠB2（ヘラ類・クシ類）類、甕Ⅵ類・ⅦA類、壷Ⅲ類などで構成され、甕・擂鉢の大部分を占めるようになる。施釉陶器では、瀬戸・美濃系陶器が姿を消し、肥前系Ⅱ・Ⅲ期の刷毛目唐津・肥前系京焼風陶器・銅緑釉Ⅲなどで構成されるようになる。

磁器　磁器では貿易陶磁が完全に姿を消し、Ⅱ期・Ⅲ期の肥前系磁器碗・皿が出現するが、陶器に比べ量的にはまだ少ない。

これらの遺物群からⅨ期は17世紀中頃から後半代と考えられる。

X期（18世紀前半）

様相　X期の土製煮炊具は焙烙ⅣB類で占められるようになる。国産陶器では丹波焼が擂鉢を中心に無釉の焼締陶器の主流を占め、備前をはじめ他産地のものはほとんど見られない。施釉陶器の椀・皿は肥前系陶器が大部分であるが、この時期になると、肥前系の粗製の染付磁器碗・皿が急増し、陶器の碗・皿にとって替わるようになる。

土製煮炊具　土製煮炊具は焙烙ⅣB類で占められる。

土師器皿　この時期は非轆轤土師器は姿を消し、土師器皿は全て轆轤土師器で占められるようになる。

轆轤土師器には、ⅢA類、ⅢB類がある。

陶器　無釉の焼締陶器では、丹波焼の出土が顕著である。丹波焼には、擂鉢ⅡA類・ⅢA類の他、桶、火入などが見られる。施釉陶器では、前代引き続き、肥前系が大部分を占め、Ⅳ期相当の刷毛目椀・皿、京焼風陶器椀・銅緑釉皿などが見られる。

磁器　磁器では肥前系の波佐見産と考えられる粗製の碗・皿類が急増し肥前系陶器椀・皿にとって替わるようになる。

これらの遺物群からX期は18世紀前半代と考えられる。

XI期（18世紀後半～19世紀初頭）

様相　XI期の土製煮炊具は焙烙ⅣC類で占められる。陶器では丹波系の擂鉢が姿を消し、替わって、堺・明石産擂鉢が登場する。施釉陶器では、肥前産陶器が急速に減少し、この時期の後半にはほとんど見られなくなる。磁器では、前代に引き続き、くらわんか手と呼ばれる波佐見産の粗製の染付碗・皿が主流を占める。

土製煮炊具　土製煮炊具は焙烙ⅣC類で占められる。

土師器皿　この時期の前半まではⅢA類、ⅢB類が主流をしめるが、後半に内面に透明釉を施す、いわゆる柿釉の灯明皿Ⅳ類、Ⅴ類が出現する。

陶器　陶器では、丹波系の擂鉢が姿を消し、堺・明石産の擂鉢が主体を占めるようになる。しかし、甕・壷類では依然として丹波系のものが主体を占め、甕Ⅷ類・壷ⅦB類・Ⅷ類などが見られる。施釉陶器は肥前系のものがほとんど姿を消し、瀬戸・美濃系、京・信楽系の椀・皿が出現する。

磁器　磁器の組成は、前代とほとんど同様であるが、この時期の後半には、粗製のくらわんか手のものに加え、肥前系Ⅴ期相当の広東碗が出現する。

これらの遺物群からXI期は18世紀後半から19世紀初頭と考えられる。

XII期（19世紀前半以降）

様相　この時期は前代まで、肥前系の製品でほぼ独占されていた磁器に瀬戸・美濃産、在地の三田産のものが加わり、また、施釉陶器も瀬戸・美濃系、京・信楽系に加えて、在地の舞子・明石産のものが出現するなど、陶磁器の組成に大きな変化が生じる時期である。

土製煮炊具　土製煮炊具は型作り成形の焙烙ⅣD類で占められている。

土師器皿　前代に引き続きⅣ類・Ⅴ類が使用されているが、この時期の後半には、京・信楽系陶器が灯火具の主流を占めるようになる。

陶器　陶器では、壷・甕類は丹波系が主流を占め、擂鉢は堺・明石産が主流を占める状況は前代と同様であるが、さらに、瀬戸・美濃産の施釉陶器の擂鉢・鉢類が加わる。また、陶器の椀・皿では、瀬戸・美濃系、京・信楽系、舞子・明石産の製品がさらに増大する。また、灯火具はこの時期の中葉以降、いわゆる柿釉の灯火具から京・信楽系の陶器製へと変化して行く。

磁器　磁器は肥前系Ⅴ期相当の広東碗・端反碗・半球形碗などがあり、依然として肥前系の比率が高いが、瀬戸・美濃産、在地産の三田青磁などがこれに加わり、磁器製品の出土量は全体に増加傾向を示す。これらの遺物群からⅫ期は19世紀前半以降の時期と考えられる。

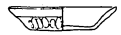
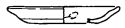
以上、見てきたように、兵庫津遺跡からは、12世紀から19世紀にかけて、在地産の土器・陶磁器の他、一貫して他地域を主な分布範囲とする土器・陶磁器の搬入が確認できる。このような、土器・陶磁器組成の変遷からも、この遺跡が単なる消費地ではなく流通の拠点としての性格が強い遺跡であることが窺える。次に、節を改めて、土器・陶磁器の組成の変遷から窺える、中世を中心とする兵庫津の物流・交易についてふれてみたい。

		轆轤土師器	非轆轤土師器						
			Ⅰ類	ⅡA類	ⅡB類	Ⅲ類	Ⅳ類	Ⅴ類	Ⅵ類
1100	Ⅰ期	284	1438 508	285			299		
1200	Ⅱ期	283		301 1498 1175	342		1172		
1300	Ⅲ期			1395 905	1499	1069 907	1470 1073	911	
1350									

第20図　土器・陶磁器編年表　(1)

		轆轤土師器	非轆轤土師器						
			Ⅰ類	ⅡA類	ⅡB類	Ⅲ類	Ⅳ類	Ⅴ類	Ⅵ類
1350	Ⅳ期			1215	1201	1207	971	1165	836
				990	982	984	1220		
1400		1521							
	Ⅴ期			927	929	1586	742	1454	931
				854	1147	1873	857		
1450	Ⅵ期			1024	754	1022	761	1359	
						770	1309		
				772	775	764	757		
						778	769		
1520				965	969	1354	1350		

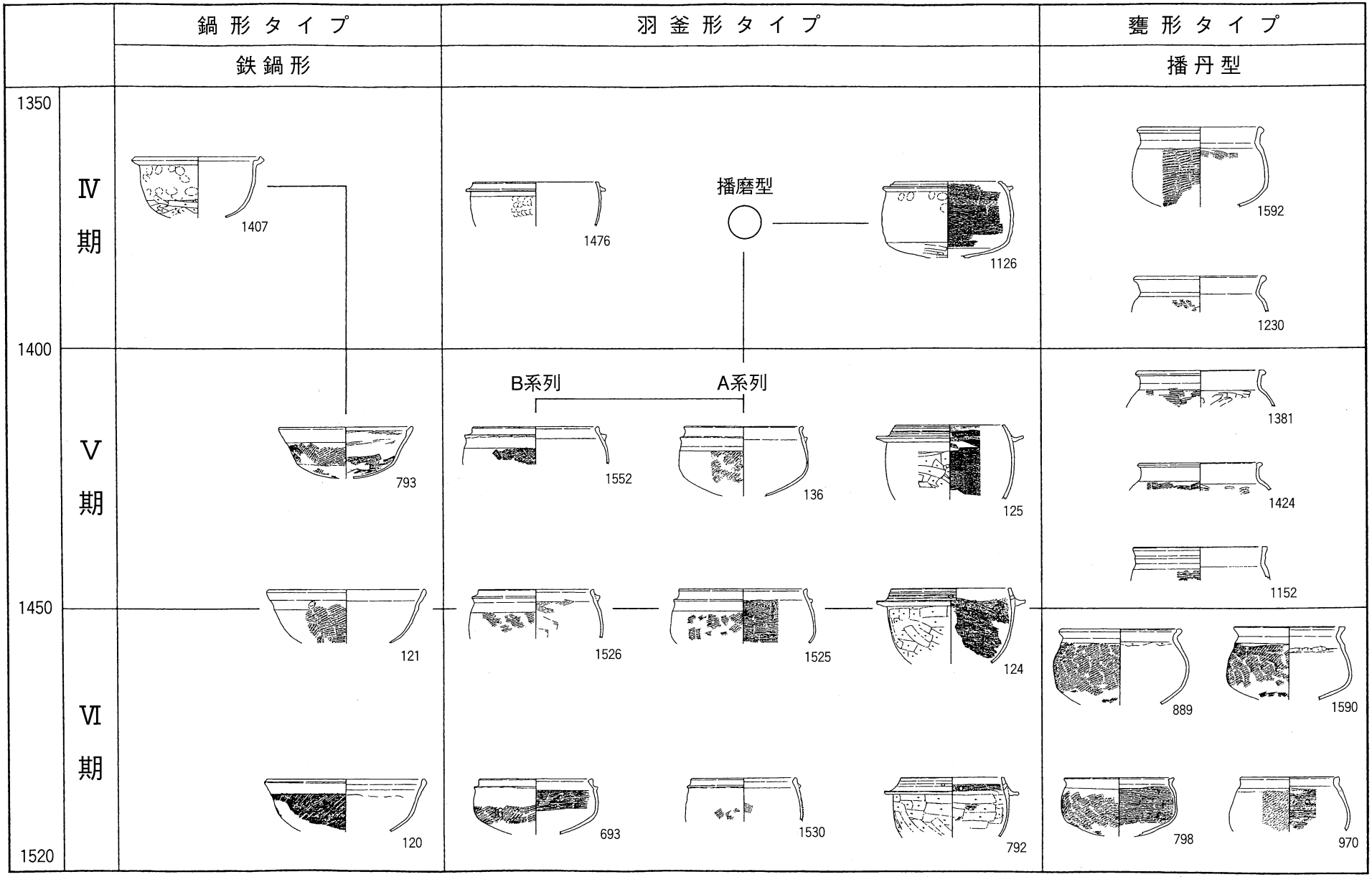
第21図　土器・陶磁器編年表　(2)

		轆轤土師器	非轆轤土師器						
			Ⅰ類	ⅡA類	ⅡB類	Ⅲ類	Ⅳ類	Ⅴ類	Ⅵ類
1520	Ⅶ期			1410		1007	960		
						 1010	1276		
				206					
1575	Ⅷ期								
				334		 214			
1630	Ⅸ期	25 59							
				36		434			
1690									

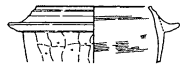
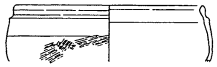
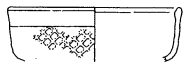
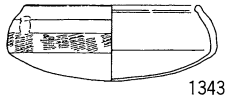
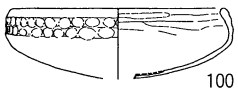
第22図　土器・陶磁器編年表　(3)

		鍋形タイプ	羽釜形タイプ	甕形タイプ
		鉄鍋形		播丹型
1100	Ⅰ期			
1200	Ⅱ	1225		
	期	1222	1497	1496
1300				1437
	Ⅲ期	303	837	1462
			716	
		302	1474	888
1350				

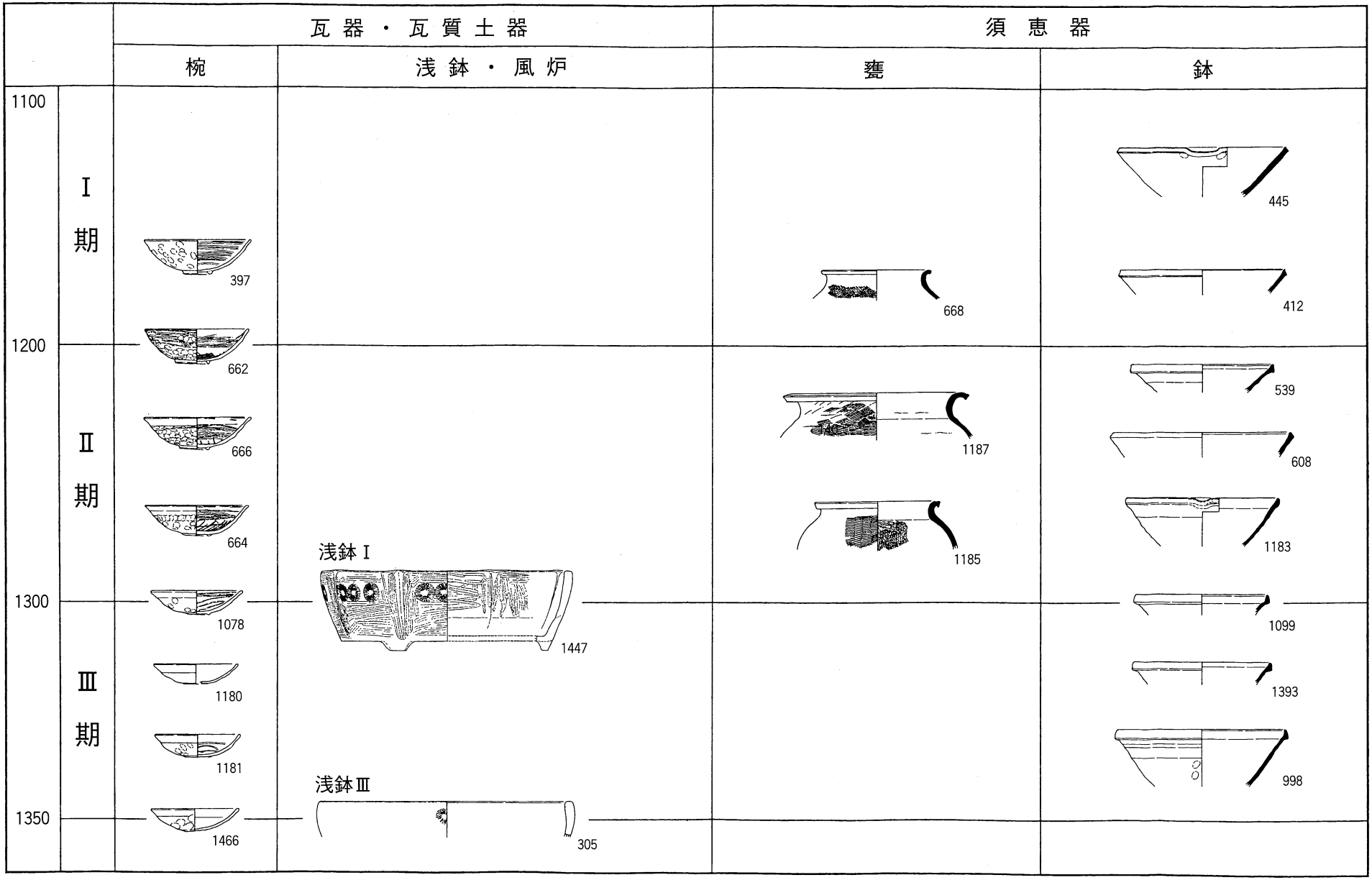
第23図　土器・陶磁器編年表　(4)



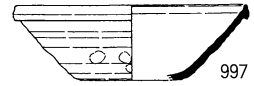
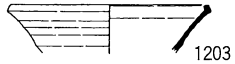
第24図　土器・陶磁器編年表　(5)

		鍋形タイプ	羽釜形タイプ	甕形タイプ
		鉄鍋形		播丹型
1520	Ⅶ期		1412  726  1411	
1575	Ⅷ期		660  140  1343 142	
1630	Ⅸ期		1  100 102	
1690				

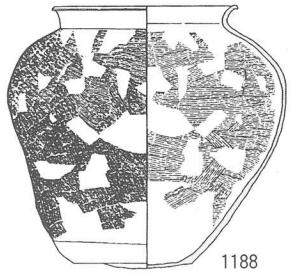
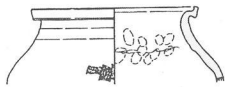
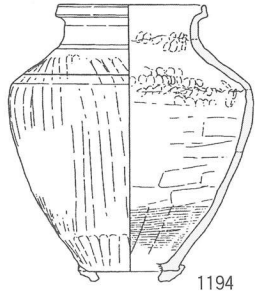
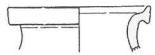
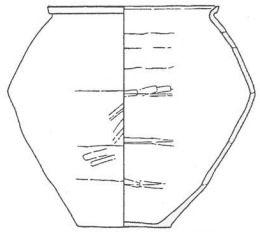
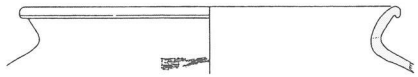
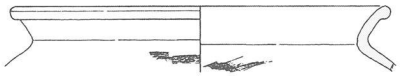
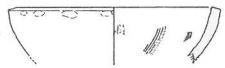
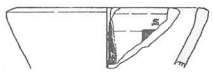
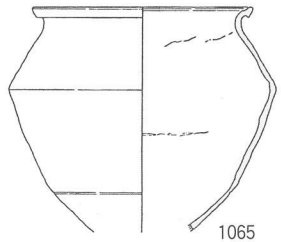
第25図　土器・陶磁器編年表　(6)



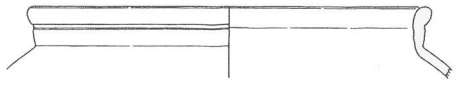
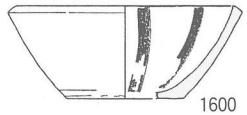
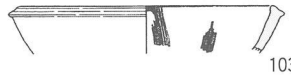
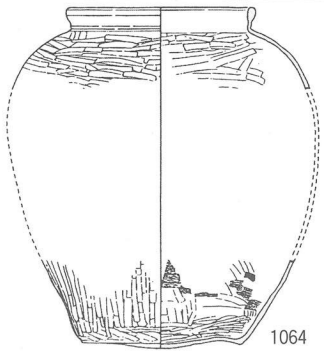
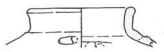
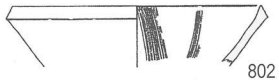
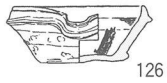
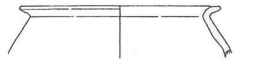
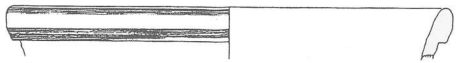
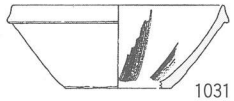
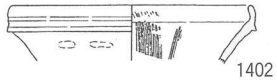
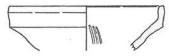
第26図　土器・陶磁器編年表　(7)

		瓦器・瓦質土器		須恵器	
		椀	浅鉢・風炉	甕	鉢
1350	Ⅳ期			1599	 997 1877  1203
1400	Ⅴ期		浅鉢Ⅳ 246 風炉Ⅱ 173		1463
1450	Ⅵ期				
1520					

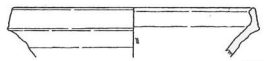
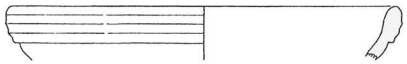
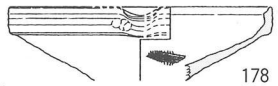
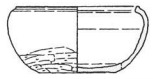
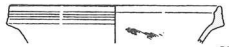
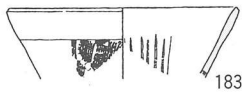
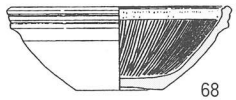
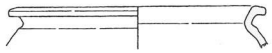
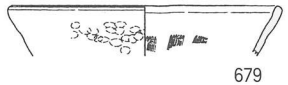
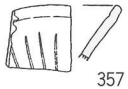
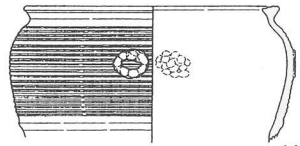
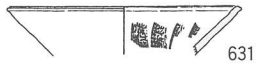
第27図　土器・陶磁器編年表（8）

		備前焼		丹波焼	
		甕・壺	擂鉢	甕・壺	擂鉢
1100	Ⅰ期				
1200	Ⅱ期	 1188		甕  1131 壺  1194  1189  1435	
1300	Ⅲ期	 1236  1237	 1640  354	 1065 1242	
1350					

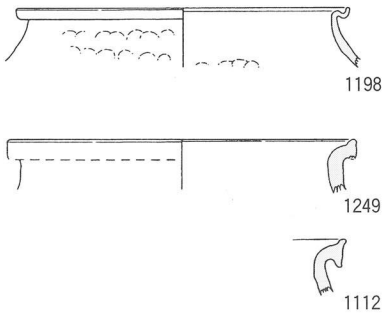
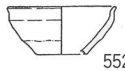
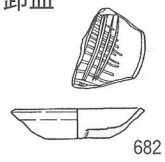
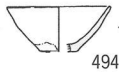
第28図　土器・陶磁器編年表　(9)

		備前焼		丹波焼	
		甕・壺	擂鉢	甕・壺	擂鉢
1350	Ⅳ期	 1302	 1600  1030		
1400	Ⅴ期	 1064 壺  213	 802  126	 1111	
1450	Ⅵ期	 448	 1031  1402  417		
1520					

第29図　土器・陶磁器編年表 (10)

		備前焼	丹波焼
		甕・壺・擂鉢	甕・壺・擂鉢
1520	Ⅶ期	132  486	
1575	Ⅷ期	 175  178  727  676 446	擂鉢 356  183
1630	Ⅸ期	 68	甕  359  679  357 壺 224  146  631
1690			

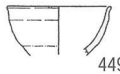
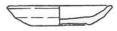
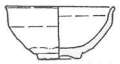
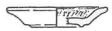
第30図　土器・陶磁器編年表　(11)

		常滑焼	瀬戸・美濃系陶器		
		甕	碗	皿	その他
1100	Ⅰ期				
1200	Ⅱ期	 1198 1249 1112			入子 352
1300	Ⅲ期	1479	天目茶碗  552	卸皿  682	花瓶 611
1350			灰釉碗  494		水滴 127

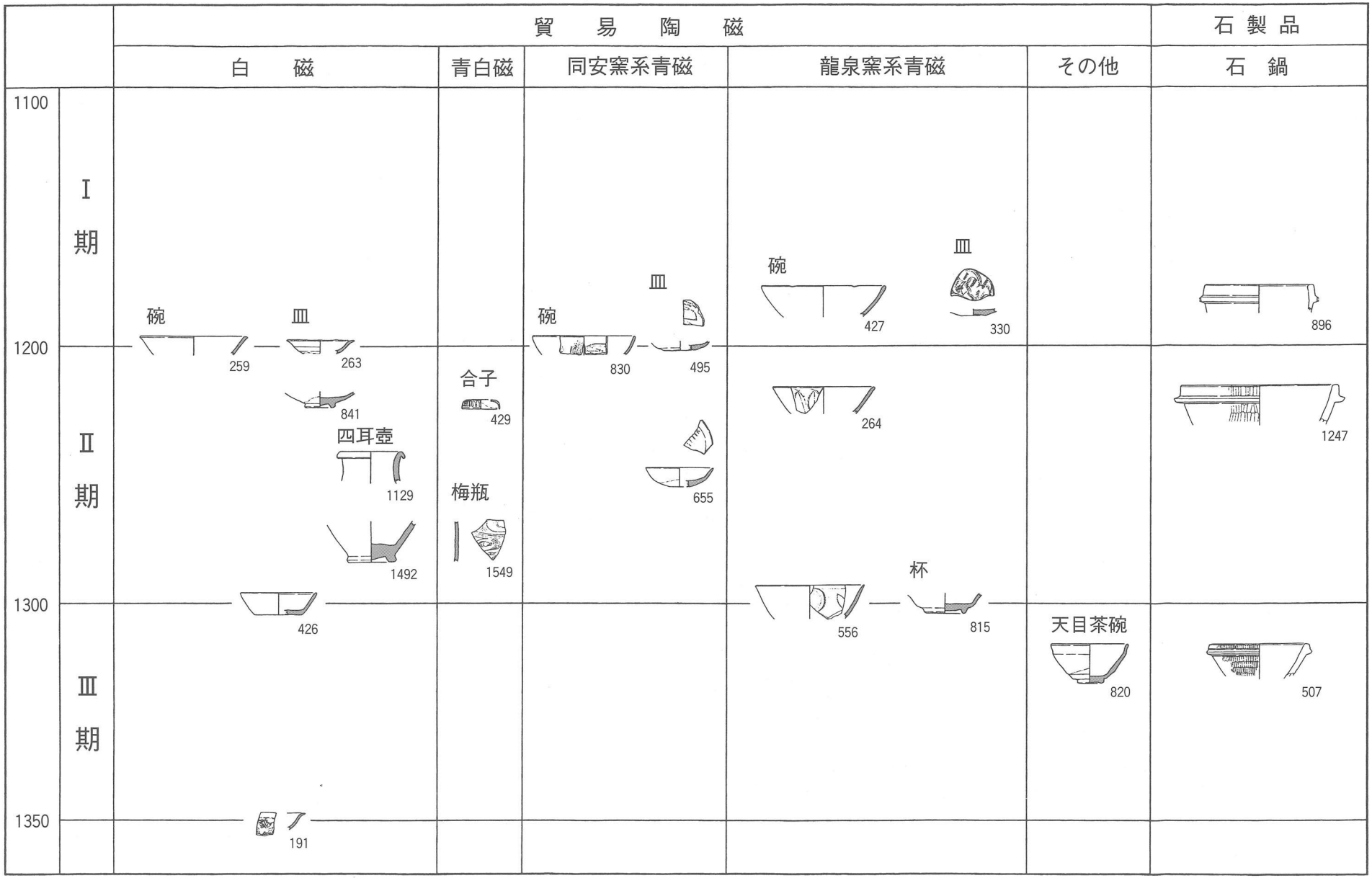
第31図　土器・陶磁器編年表 (12)

		常滑焼	瀬戸・美濃系陶器		
		甕	碗	皿	その他
1350	Ⅳ期	1241	灰釉碗 838 / 803 / 天目茶碗 938		
1400	Ⅴ期	1206	493	卸皿 728 / 折縁深皿 1347 / 直縁大皿 553	
1450	Ⅵ期		1658 / 804	折縁皿 704	
1520					

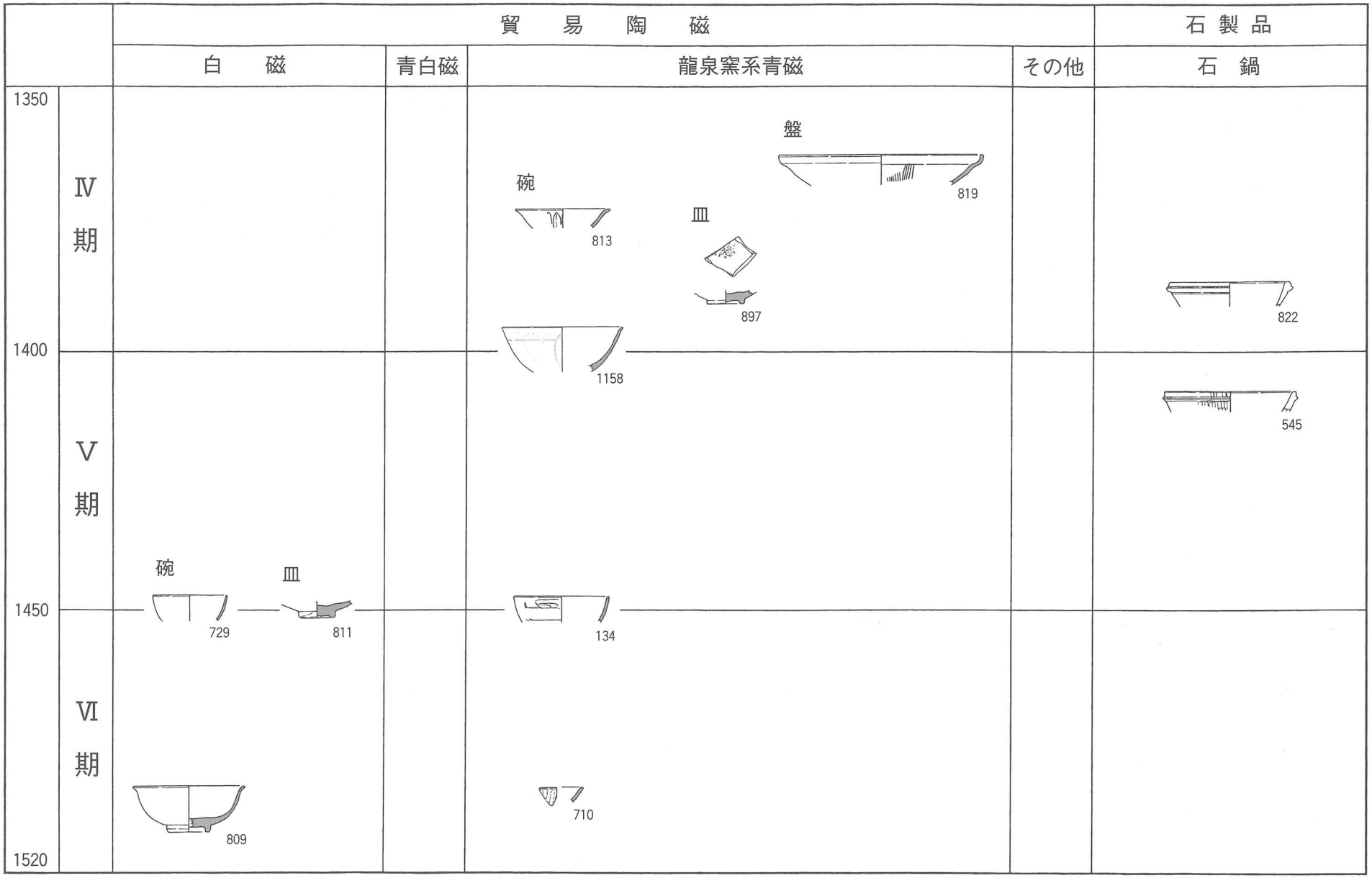
第32図　土器・陶磁器編年表 (13)

		常滑焼	瀬戸・美濃系陶器	
		甕	碗	皿
1520	Ⅶ期		天目茶碗  449	灰釉皿  157
1575	Ⅷ期		 144	 360 志野皿 451
1630	Ⅸ期			
1690				

第33図　土器・陶磁器編年表 (14)



第34図　土器・陶磁器編年表 (15)



第35図　土器・陶磁器編年表 (16)

		貿易陶磁			肥前系陶磁器	
		白磁	龍泉窯系青磁	青花磁器	陶器	磁器
1520	Ⅶ期					
1575	Ⅷ期	皿 262 876	碗 708 皿 1585	碗 312 皿 215 杯 270 562 209	椀 1332 皿 23	
1630	Ⅸ期				163 152 654 153 70	碗 375 皿 197 1665
1690						

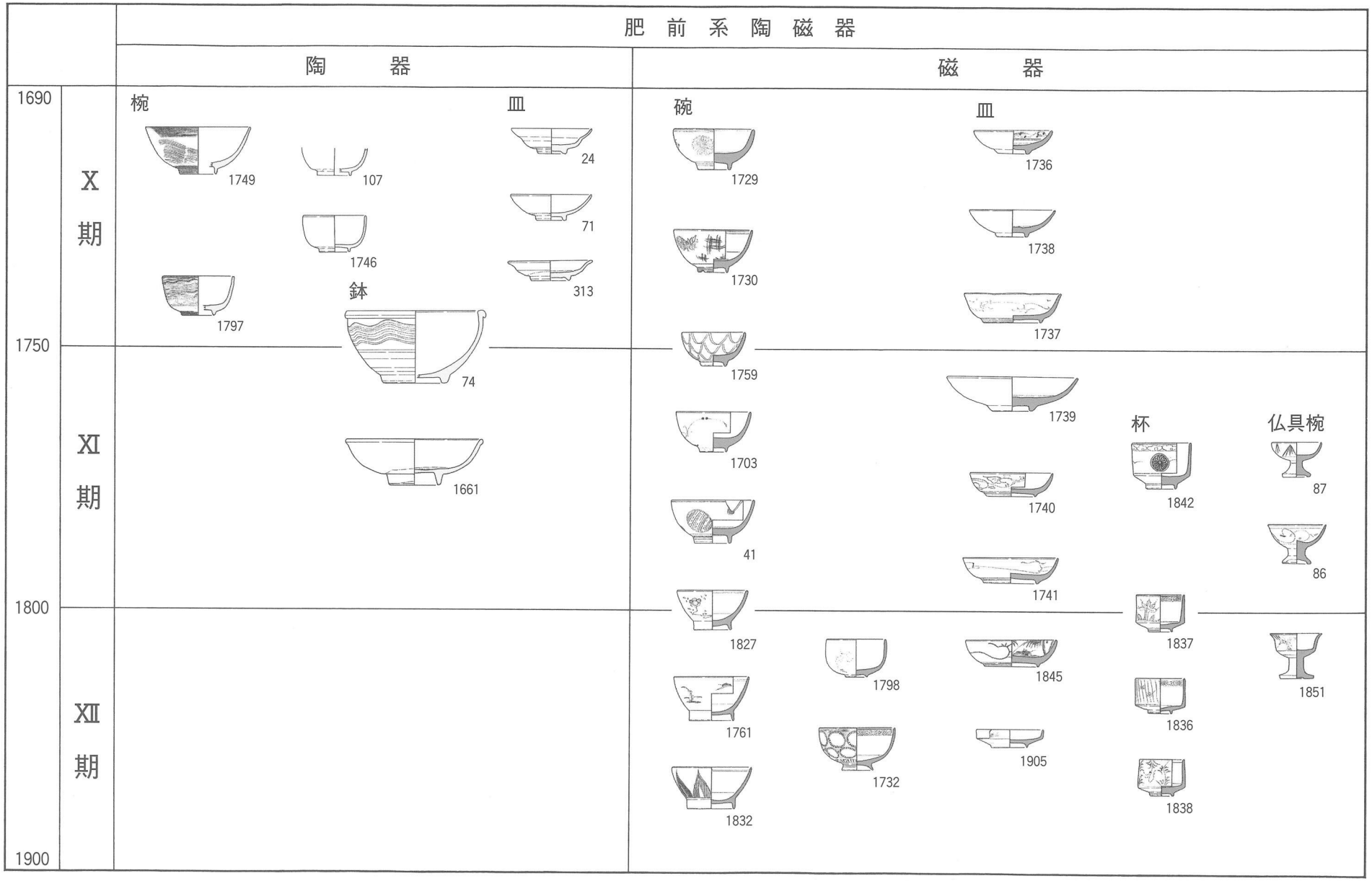
第36図　土器・陶磁器編年表 (17)

		土師器			瓦質土器	瀬戸・美濃系陶磁器	
		轆轤	非轆轤	焙烙	火舎	陶器	磁器
1690	X期	31 98		2 131	67		
1750	XI期	63		103 1571	1698		
1800	XII期	64 1768		1773 1890		1774 105	1906 1841
1900							

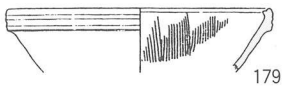
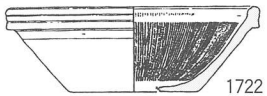
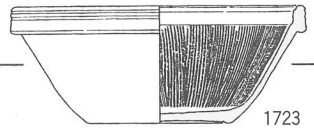
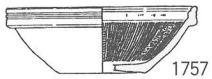
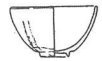
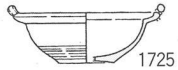
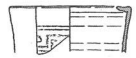
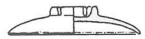
第37図　土器・陶磁器編年表　(18)

		備前焼	丹波焼
1690	X期		擂鉢 358 桶 1793 火入 568
1750	XI期		甕 1084 壺 1794 鉢 69
1800	XII期		1792
1900			

第38図　土器・陶磁器編年表 (19)



第39図　土器・陶磁器編年表 (20)

		堺・明石	京・信楽	舞子・明石	三田
		擂鉢			
1690	X期	 179			
1750	XI期	 1722			
		 1723			
1800	XII期	 1757	椀  1799	鍋  1725	香炉  193
			灯火具 1715	蓋	皿 1900
			1803	 1908	
1900			1898 110		

第40図　土器・陶磁器編年表　(21)

3．土器組成の変遷から見た中世兵庫津の物流と交易

1．はじめに

第2節では、兵庫津遺跡から出土した土器・陶磁器の組成の変遷をⅠ期からⅫ期に区分して概観した。本節では、これらの土器・陶磁器組成の変遷から窺われる、Ⅰ期からⅧ期すなわち12世紀代から17世紀前半に至る中世兵庫津の物流と交易について若干考察してみたい。

ここでは、大量に出土した土器・陶磁器を椀・皿などの供膳具、羽釜・鍋などの煮炊具、捏鉢・擂鉢などの調理具、壷・甕などの貯蔵具の4種類に区分してその傾向を概観してみたい。また、椀・皿などの供膳具は土師器皿、瓦器椀・皿、須恵器椀・皿などのように、日常雑器として使用されたと考えられる土器椀・皿と、白磁碗・皿、青磁碗・皿などの貿易陶磁及び瀬戸・美濃系陶器の灰釉・鉄釉の碗・皿などのように、主として茶陶を中心に使用されたと考えられる陶磁器の碗・皿類に分類される。ここでは、前者を供膳具A、後者を供膳具Bとして記述する。

2．土器・陶磁器各種の傾向

供膳具A

土師器皿

土師器皿は、在地産の須恵器皿を模倣したしたと考えられる轆轤土師器がⅠ期及びⅡ期前半すなわち12世紀から13世紀前半とⅣ期後半からⅤ期前半すなわち15世紀前半にごく僅かに含まれる程度で、その大部分は成形に轆轤の回転を用いない非轆轤土師器によって占められている。

これらの非轆轤土師器は京都系土師器として一括して論じられることが多いが、Ⅰ類、Ⅴ類、ⅢB2b類、ⅣC2b類、ⅢC1類、ⅣD1類に見られるように忠実に「京都産」の土師器を模倣したもの（伊野　1995）の他、ⅡB1b類などのように、同時期の京都産土師器とは形態的に相違する地域色の強い非轆轤土師器も存在する。これら、京都産あるいは京都産土師器を忠実に模倣したと考えられる非轆轤土師器は各時期に散見されるが、その出現時期には、いわゆるコースター状を呈するⅠ類が出現するⅠ期、いわゆる「ヘソ皿」の形態を呈するⅤ類が出現するⅢ期、ⅢB2b類、ⅣC2b類が出現するⅥ期の三つの画期が認められ、そのうち、特にⅥ期以降、Ⅶ期前半にかけての時期に、多数存在することが確認されている。

京都系土師器が最初に出現するⅠ期には、すでに、在地産の須恵器皿を模倣したと考えられる轆轤土師器はⅠ類がごく僅かに見られる程度で、その主流は京都系土師器を忠実に模倣した非轆轤土師器Ⅰ類をはじめとしてⅡA1a類、ⅣA1類などが占めている。その傾向は続くⅡ期前半にも継続され、この時期を最後に非轆轤土師器は姿を消す。

このような12世紀から13世紀前半における京都系土師器の搬入の背景には、兵庫津の北側にある平野、楠・荒田町一帯がいわゆる福原京の有力な候補地の一つされ、少なくとも、12世紀中葉以降、平野、楠・荒田町を中心に平氏の邸宅が甍を並べ（須藤　1999）、後白河院や高倉院がたびたびこの山荘を訪れたとされるなど、この地と京都との間の密接な関係が背後にあるものと考えられる。

また、この時期、清盛は大輪田泊を改修し、経ヶ島を築いて、この地に宋船の直接の入港を図り、この地は日宋貿易の中心地として大いに発展したとされている。第Ⅱ章で述べたように、現在の所、この清盛の大輪田泊の改修を直接示す考古学的な資料は見つかっていないが、非轆轤土師器Ⅰ類に代表されるいわゆる京都系土師器皿の搬入は、清盛の大輪田泊の改修に象徴される平氏を中心とする京都との密接な関係を示唆するものとして注目される。

平氏の滅亡後、町場が形成されるⅡ期後半からⅣ期には、Ⅱ類、Ⅳ類に加えて、Ⅲ期にはⅢ類、「へソ皿」の形態を呈するⅤ類、さらに、地域色の強いⅡB1b類が出現する。

このようなⅡ期後半からⅣ期に至る時期には、京都産もしくは忠実に京都産土師器を模倣したものが存在する一方、独自の形態変化を遂げる土師器皿の出現と発展と言う事実が指摘できよう。

すなわち、Ⅲ期におけるⅤ類に代表されるような、京都産あるいは京都産の土師器皿を忠実に模倣した土師器皿の搬入は、14世紀前半代に兵庫津が発展期を迎え、地方から京都へ運ばれる交易品の集積地として、京都との関係の強化させて行く状況を示すものと言えよう。

また、京都産土師器とは形態を異にする独自の非轆轤土師器の出現と発展には、中世前半の京都に対する交易品の供給と言う一方向の関係に加えて、中世後半期に至ると、瀬戸内航路の中枢としての、西日本各地に対する交易品の受容と供給と言う双方向の関係の成立が示されているものと考えられる。

このような状況に変化が生じるのは、Ⅵ期である。Ⅵ期には京都産あるいは京都産土師器を忠実に模倣したⅢB2b類、ⅣC2b類が出現し、さらにⅦ期前半にはⅢC1類、ⅣD1類が加わり、いわゆる京都系土師器皿が増加する傾向が窺える。

この時期は、従来は応仁・文明の大乱が勃発し、兵庫津は衰退に向かうとされてきた時期である。しかし、土師器皿の出土状況からは、むしろ京都との結びつきが一層強まった時期と捉えることができる。

このような現象を理解する要因として、この時期の京都系土師器の増加には、摂津における細川管領家の領国支配の強化があげられるではないかと考えられる。

摂津は細川頼元が永徳2年（1383）に守護に補任されて以降、細川管領家が守護を世襲して行くが（福田1985)、頼元が入国した時点では、その支配権は摂津の半国にしか及ばず、その支配権が有馬郡を除く摂津の全域に及ぶのは、細川勝元が守護に任ぜられる嘉吉2年（1442）年以降とされる（今谷　1983)。

以後、応仁・文明の大乱を挟んで、永正4年（1507）の細川政元の謀殺までの間は実質的な摂津の支配権は細川管領家にあったものと考えられる。

政元の横死以降、細川管領家ではその後継を廻って内訌が生じ、最終的には永正17年(1520)の細川澄元の死によって和泉守護家出身の細川高国の勝利に帰し、和泉守護家が台頭する。

細川氏の摂津支配が急速に崩壊して行くのは、高国が出家する大永5年（1525）以降とされる（杉山　1978)。

すなわち、15世紀後半の細川管領家による摂津の領国化に伴い、細川氏を介して、兵庫と京都との関係は前代にも増して一層緊密なものとなり、その状況は細川氏の領国支配が事実上崩壊する16世紀前半まで持続される。しかし、16世紀前半以降における細川氏の摂津支配の急速な崩壊に伴って（兵庫県　1978)、摂津国内には混乱が生じ、兵庫津は急速に衰退し、京都と兵庫の関係は希薄になって行く。

土師器皿の出土傾向からも、16世紀前半以降、Ⅶ期後半からⅧ期にかけて、土師器皿は激減し、やがて、Ⅸ期には肥前系陶器の台頭によって、供膳具の主流を肥前陶磁器に譲り、灯火具としての灯明皿へとその役割を変貌させて行く。

このように、兵庫津遺跡における京都系土師器の消長の背後には、単に京都からの京都系土師器の搬入と言うだけでなく、12世紀後半代の平氏一門、14世紀前半代の京都に向かう交易品の集積地としての発展、15世紀後半の細川氏の摂津の領国化に見られるような、それを使用する京都からの人々の移動及び定住と言う現象の存在が窺がわれる。

椀

椀はすでにⅠ期段階から、和泉型瓦器椀が主体となっており、12世紀から13世紀前半代には、隣接する播磨

地域で普遍的に出土する東播系須恵器椀は見られない。供膳具Aに属する椀は、その後、Ⅳ期初頭に至るまで和泉型瓦器椀が存続し、Ⅳ期の和泉型瓦器椀の消滅をもって、椀は消滅する。

供膳具B

供膳具Bには貿易陶磁の碗・皿と瀬戸・美濃系陶器の碗・皿類がある。

まず、Ⅰ期段階では、龍泉窯系青磁浅型碗Ⅰ－1類・小碗Ⅰ－3類・皿Ⅰ－2b類など（山本　2000)、この時期の播磨から西摂の中世遺跡ではほとんど見られない貿易陶磁で占められている。これは、土師器皿でも指摘した様に、この段階は、平氏一門に代表される京都との関連が指摘できる時期であり、これらのやや特殊な貿易陶磁は、平氏一門との関連が想定できる資料である。

Ⅱ期前半に入ると、貿易陶磁の様相には変化が生じ、白磁碗Ⅳ類・Ⅴ類、皿Ⅴ類など白磁を主体に、青磁では同安窯系青磁碗・皿が加わるという、同時期の播磨、西摂の中世集落に見られるのと同様の器種構成を示す。

このような、Ⅰ期からⅡ期前半の貿易陶磁の器種構成の変化は、福原京或いは大輪田泊に代表される平氏政権に伴う古代的・官衙的集落から、兵庫島を中心とした中世的・都市的集落への変貌の状況を表すものと理解される。

貿易陶磁の出土は続くⅡ期後半に入ると急速に減少し、中でも白磁の減少が著しく、白磁碗・皿は口縁部の釉を掻き取るⅨ類のみとなる。また、青磁も同安窯系のものが姿を消し、龍泉窯系青磁碗が主流となる。このような、13世紀後半代における貿易陶磁の搬入の減少は他の中世集落においても、一様に認められる現象であり、南宋の滅亡と元の建国、鎌倉幕府の成立と元との関係の悪化、更には元寇による国交の断絶という国際情勢の変化を如実に表したものと言えよう。貿易陶磁の減少は続くⅢ期、Ⅳ期にかけても継続して進行し、貿易陶磁は龍泉窯系青磁蓮弁文碗を中心に極少量が輸入されると言う状態が継続される（上田　1982)。

一方、減少する貿易陶磁を補完する形で登場するのが、瀬戸・美濃系の施釉陶器である。瀬戸系の施釉陶器は、Ⅱ期後半にすでに古瀬戸前Ⅳ期の入子が見られ、続くⅢ期には古瀬戸中Ⅱ期の天目茶碗、卸皿、花瓶などが見られる。さらに、Ⅳ期に入ると、灰釉平椀・末広椀、天目茶碗、水滴など、量とともにその器種も増加してゆく。このような瀬戸・美濃製品の増加は、貿易陶磁の輸入量と反比例して増加しており、茶陶を中心とした貿易陶磁碗への需要が存在するにもかかわらず、貿易陶磁の不足から、その対象が瀬戸製品へと転化する状況を表したものと考えられる。このような状況はⅤ期以降も継続して進行し、Ⅴ期には貿易陶磁が龍泉窯系青磁蓮弁文碗・雷文帯碗にほぼ集約されるのに対して、瀬戸・美濃系陶器は、前代から存在する天目茶碗、卸皿に加えて、折縁皿などの龍泉窯系青磁盤を模倣したと考えられる大皿類がこれに加わり、量、器種ともにさらに増加する（藤澤　1995)。

Ⅵ期には状況にやや変化が生じ、前代に比べて、貿易陶磁の量は増大し、龍泉窯系青磁の蓮弁文碗・雷文帯碗・無文碗に加えて、C群の白磁碗、D群の白磁皿などが出現する（森田　1982)。

このような、貿易陶磁の増加は中国側では、明の衰退と海禁策の緩和、日本側では、室町幕府の衰退と倭寇の増大という状況に起因するものと考えられる。

一方、瀬戸・美濃製品では、茶陶の盛行に伴い天目茶碗の搬入が更に顕著になる。この状況は続くⅦ期にはさらに増加すると考えられるが、兵庫津遺跡では先に述べたように、この時期が、空白期となっており、僅かに大窯Ⅲ期の天目茶碗、灰釉皿が見られる程度で（井上　1985)、この時期の詳しい状況は不明である。

Ⅷ期には、貿易陶磁はⅥ期に比べて更に増加し、龍泉窯系青磁蓮弁文碗・輪花皿、白磁E群に加えて、景徳鎮産のものを中心に青花磁器の碗、皿が加わり、量、器種とも、Ⅱ期後半に次ぐピークをなす。

一方、瀬戸・美濃系陶器も茶陶の盛行に伴って、大窯Ⅴ期の天目茶碗・灰釉皿に新たに長石釉を施した志野が加わり、桃山茶陶の全盛期を現出する。更に、供膳具Bには、新たに肥前産陶器が加わり、Ⅷ期は質・量ともに供膳具Bの最盛期と言える（国立歴史民俗博物館　1998、瀬戸市埋蔵文化財センター　2001）。

しかし、このような状況は長く続かず、続くⅨ期には貿易陶磁の輸入は鎖国により完全に停止し、瀬戸・美濃系陶器も急速に減少して、供膳具の主体は肥前系陶磁器に移行する（大橋　1993）。

このように、兵庫津遺跡出土の供膳具Bの出土傾向は以下のようにまとめることができよう。

すなわち、12世紀後半の平清盛の大輪田泊の修築と日宋貿易の促進に象徴される宋代陶磁器の輸入の増大は12世紀後半～13世紀前半代の供膳具Bにおける貿易陶磁の独占状態を出現させる。

しかし、13世紀後半代には、国際情勢の変化から、貿易陶磁の輸入は急激に減少する。

一方、中世における唯一の施釉陶器である古瀬戸の製品が、当初は入子、花瓶などの特殊な器種を中心に13世紀の後半代から搬入され始める。

その後、貿易陶磁は龍泉窯系青磁碗を中心に14～15世紀を通じて一定量供給されるが、増大する茶陶を中心とする需要には追いつけず、碗、特に天目茶碗を中心に瀬戸・美濃系陶器が徐々に増加して行く。16世紀代にはこのような状況に変化が生じ、貿易陶磁には従来からの白磁・青磁に加えて、新たに青花磁器が加わり、貿易陶磁の輸入量は一挙に増大する。

また、瀬戸・美濃製品も折からの茶陶の盛行により、従来からの灰釉・鉄釉の製品に加えて、16世紀末葉から17世紀初頭には、新たに長石釉を用いた志野が出現し、桃山茶陶の最盛期を迎える。さらに、肥前系陶器の椀・皿類がこれに加わり、16世紀末葉から17世紀初頭は供膳具Bのすべての主要産地のものが出揃う最盛期を現出する。

しかし、このような状況は、肥前で磁器生産が開始される17世紀前半代には急速に変化し、貿易陶磁の輸入は鎖国政策により完全に停止し、また、瀬戸・美濃産の製品も急速に減少して、供膳具Aも含めた供膳具の主体は肥前系陶磁器へと移って行く。

土製煮炊具

土製煮炊具はⅠ期ではまだ確認されておらず、兵庫津の町場の形成が開始されるⅡ期前半に至って、鍋形タイプ鉄鍋形の土製煮炊具が出現し、また、Ⅱ期後半には、いわゆる播丹型と呼称される、東播磨地域から丹波地域を分布範囲とする甕形タイプの土製煮炊具と羽釜形タイプの羽釜形：A系列の土製煮炊具が出現する。このうち、鍋形タイプ：鉄鍋形の土製煮炊具と羽釜形タイプの羽釜形：A系列の土製煮炊具はいわゆる「京都型瓦質焼成土器」に類似し（鋤柄1995・1997）、Ⅱ期前半からⅣ期にかけては、播丹型の土製煮炊具が一定量存在する他、「京都型瓦質焼成土器」に類似する鍋形タイプ鉄鍋形の土製煮炊具と羽釜形タイプの羽釜形：A系列の土製煮炊具が継続して使用されている。このような、京都の影響を受けた土製煮炊具のⅡ期前半からⅣ期にかけての存続には、土師器皿に見られたような、京都の玄関口としての京都との密接な関係がその背景にあるものと考えられる。

しかし、いわゆる京都系土師器皿が、Ⅰ期からⅦ期にかけて継続的に使用され、Ⅵ期からⅦ期前半にかけての中世後半代に増加する傾向を示すのに対して、土製煮炊具では、京都型瓦質土器の使用はⅣ期には終焉を迎え、Ⅴ期には羽釜形B系列の土製煮炊具が河内・和泉地域で多く認められる「河内・和泉型瓦質焼成土器」に類似度を高め（鋤柄　1995・1997）、河内・和泉地域からの影響が強まる。また、隣接地域を主な分布圏とする土製煮炊具では、Ⅱ期から継続して存続する播丹型の土製煮炊具に加えて、大阪湾沿岸や土佐地域でも存在

が確認できる鉄かぶと形や播磨型の土製煮炊具が出現し、これら成形時に須恵器の伝統を引くタタキ技法を用いタタキ痕を器表に残す一群の土製煮炊具が、使用される土製煮炊具の大半を占めるようになる。

続くⅦ期にはⅥ期に認められた播丹型及び鉄かぶと形の土製煮炊具は消滅し、タタキ技法を用いる土製煮炊具としては、播磨型でも後代にその系譜がたどれる播磨型：B系列及びごく少量であるが、河内・和泉地域との関連が指摘できる羽釜形：B系列にのみになる。さらに、Ⅷ期には、羽釜形：B系列が消滅し、播磨型：B系列の土製煮炊具は、いわゆる焙烙の祖形と考えられるⅢ類へと変化・集約されて行く。

このような、中世後半の土製煮炊具の変遷について、若干の考察を加えて見たい。

兵庫津遺跡から出土する土製煮炊具のうち、Ⅱ期からⅥ期にかけて存続する播丹型の土製煮炊具とⅤ期に出現しⅥ期に盛行する、播磨型・鉄かぶと形の土製煮炊具は、いずれも、須恵器の成形技法であるタタキ技法を導入して成立している。これらの煮炊具の成立・発展には、後述する東播系須恵器の消長が大きく影響しているものと考えられる。すなわち、播丹型煮炊具の確認出来る13世紀には東播系須恵器は甕・鉢を主体に生産の全盛期にあたり、この東播系須恵器の生産の盛行が播丹型煮炊具の成立に大きく影響したものと考えられる。逆に、播磨型及び鉄かぶと形の煮炊具が出現する14世紀後半から15世紀前半代は、東播系須恵器の衰退、消滅する時期にあたり、西日本を中心に広範囲に流通した東播系須恵器の伝統的なタタキ技法を継承する形で、播磨型及び鉄かぶと形の煮炊具が成立し、以後播磨型煮炊具が焙烙へと変化する16世紀後半代まで、その伝統は継承されて行く（岡田　長谷川　2003）。

次に、Ⅱ期からⅣ期見られた、京都からの影響を受けた鉄鍋形及び羽釜形：A系列の土製煮炊具がⅤ期には消滅し、かわって、羽釜形：B系列が河内・和泉からの影響を受ける理由について考えて見たい。

これには、先に土師器皿の項で述べたと同様に、摂津・和泉両国における細川氏の領国支配が影響を与えているものと考えられる。

先に述べたように、摂津は細川頼元が永徳2年（1383）に守護に任ぜられて以降、細川管領家が守護を世襲して行く。また、和泉は応永15年（1408）以降、細川氏が守護を世襲している（福田　1985）。

兵庫津のある摂津と和泉は、羽釜形：Bタイプが摂津・河内型瓦質焼成土器の影響を受け、さらに、鉄かぶと形・播磨型土製煮炊具が成立する14世紀後半以降は管領家・和泉守護家の違いはあるものの、いずれも同族の細川氏の支配下にあり、この時期に和泉との結びつきが強まったものと考えられる。

さらに、播磨型土製煮炊具が分布する土佐も細川氏の守護領国で、播磨を中心に和泉（十河　1995）、更には土佐にまで至る播磨型土製煮炊具の分布圏は細川氏の領国支配と密接な関連があるのではないかと考えられる。

このことを検証するには、15世紀から16世紀前半における播磨型土製煮炊具の分布と細川氏領国との関連を詳細に検討する必要があろうが、一つの可能性として提示しておきたい。

このように、兵庫津遺跡では、Ⅱ期からⅧ期まで一貫して他地域を主な分布範囲とする土製煮炊具が確認できる。たとえば、Ⅱ期からⅣ期にかけての鉄鍋形及び羽釜形：A系列の土製煮炊具は京都地域との関連が指摘でき、Ⅴ期・Ⅵ期には、鉄かぶと形、播磨型、羽釜形：B系列の土製煮炊具の河内・和泉地域との関連が指摘できる。

これらの土製煮炊具は、全国的に流通する貿易陶磁や瀬戸・美濃系陶器あるいは西日本を中心に広範な流通域をもつ東播系須恵器、備前焼とは異なり、商品として流通したものとは考えられず、土製煮炊具における他地域から影響に基づく形態の変化は、流通に携わる人々の動き、言い換えれば物流の経路の変化を表すものと考えられる。

このような前提に立てば、兵庫津遺跡の土製煮炊具が中世前半の京都型瓦質焼成土器の影響の強い土製煮炊具から中世後半の河内・和泉型瓦質焼成土器に類似する煮炊具へ転換することと、そこから派生する播磨型土製煮炊具の和泉・土佐などへの波及は、兵庫津おける物流が、中世前半の京都を指向した一方向の物流から和泉、土佐など京都以外の地方を対象とした双方向の物流へと変化する状況を示すものと考えられる。

調理具

兵庫津遺跡で出土した調理具には、東播系須恵器捏鉢と備前焼擂鉢、丹波焼擂鉢がある。

Ⅰ期段階からⅡ期までは、調理具はすべて東播系須恵器鉢A類、B1・2類、C1類などで占められており、他産地のものは見られない。Ⅲ期に入ると、東播系捏鉢C2類・D類が調理具の主体を占めているが、新たに備前焼擂鉢ⅡA類・ⅡB類が出現する。Ⅳ期には、東播系捏鉢は徐々に減少し、この時期の前半には、捏鉢E1類・E2類・F類などがあり、備前焼擂鉢と拮抗するが、この時期の後半にはF類のみとなりその比率は急速に低下する。

一方、それとは対象的に、備前焼擂鉢は増加し、擂鉢ⅢA類・ⅢB類が大量に見られ、Ⅳ期後半には、東播系捏鉢を圧倒するようになる。続く、Ⅴ期には、僅かに東播系須恵器捏鉢F類が見られるが、備前焼擂鉢ⅢC類・ⅣA類が出現して、備前焼が調理具の主体を占めるようになる。そして、この時期を最後に東播系須恵器鉢は姿を消し、以後、備前焼擂鉢の独占状況が続く。

Ⅵ期からⅦ期は調理具はすべて備前焼で占められる備前焼擂鉢の全盛期で、Ⅵ期には、擂鉢ⅣB類・ⅤA類・ⅤB類が、またⅦ期には擂鉢Ⅵ類が出現するが、Ⅶ期は兵庫津遺跡の空白期にあたっており、その実態は不明である。

このような備前焼の調理具における独占体制に変化が生じるのはⅧ期である。Ⅷ期に入ると、備前焼では擂鉢Ⅵ類・Ⅶ類・ⅧA類・ⅧB類などがあり、依然として擂鉢生産は盛んに行われているが、一方、喫茶の盛行に伴い、茶陶の生産も盛んになる。また、この時期には、丹波焼擂鉢ⅠA類が出現し、備前焼の擂鉢における独占体制が崩れる。Ⅸ期には、備前焼擂鉢は僅かにⅨ類が見られる程度で、擂鉢の主体は丹波焼擂鉢ⅠA類・ⅠB類に移行し、調理具の主体は丹波焼へと移って行く。

このように、兵庫津遺跡での捏鉢・擂鉢に代表される調理具の変遷は、12世紀後半～14世紀前半までの東播系捏鉢の独占状況、14世紀前半の備前焼擂鉢の出現、14世紀後半の備前焼の増加と東播系捏鉢の衰退、15世紀前半の東播系捏鉢の生産停止と15世紀前半から16世紀後半の備前焼擂鉢の独占体制の確立、16世紀末から17世紀初頭の丹波焼擂鉢の出現、17世紀前半以降の備前焼擂鉢の退潮とそれに替わる丹波焼擂鉢の増加へとまとめることができる。このような変化はどのような要因に基づくのであろうか。

まず、14世紀前半の備前焼擂鉢の出現と14世紀後半の東播系須恵器の衰退、15世紀前半の東播系捏鉢の消滅から考えて見たい。後述するように、備前焼の兵庫津への搬入は甕を中心に13世紀後半にはすでに始まっている。擂鉢もほぼ同時期に搬入されたと考えられるが、この時期は東播系捏鉢が西日本を中心に関東から九州にかけてほぼ全国的に普及する時期であり、備前焼擂鉢はまだ、その陰に隠れて普及するに至らなかったものと考えられる。その後、14世紀前半に至って、備前焼擂鉢は市場を徐々に拡大し、14世紀後半には、ついに東播系捏鉢を圧倒するようになる。このような、14世紀代の備前焼擂鉢の普及の要因については、生産地の状況、流通経路、消費地での需要などさまざまな角度からの分析が必要と考えられるが、消費地サイドからの要因として、この時期に起こったと考えられる調理法の変化が挙げられよう。

すなわち、鎌倉時代中期に栄西・道元などによってもたらされた禅宗は当初は支配階級を中心に受け入れら

れるが、次第に武士階級へと普及して行く。この禅宗によってもたらされた食生活の変化、すなわち擂鉢を多用する抹茶法や豆腐・味噌などを用いる精進料理の普及が、内面に擂目を持ち、堅牢な備前焼擂鉢を急速に普及させていったものと考えられる（松岡　2003）。

その後、備前焼擂鉢は15世紀～16世紀代を通じてますますその生産を拡大させ、その全盛期を現出する。しかし、16世紀末葉から17世紀初頭になると、丹波焼擂鉢が市場に進出し、以後、備前焼擂鉢は急速に衰退し、丹波焼擂鉢が調理具の主流を占めるようになる。このような、備前焼から丹波焼擂鉢への移行はどのような要因によるのであろうか。

これには、16世紀代の擂鉢需要の増大に備前焼擂鉢の生産が対応できなくなり、その需要を補完する形で丹波焼擂鉢が市場に参入してくることが要因の一つとして挙げられよう。

一度、市場に参入した丹波焼は徐々にその市場を拡大し、17世紀前半には新興都市江戸をもその市場に組み入れ、備前焼を圧倒して、調理具における主体を占めるようになる。ただし、このような状況は、県内で一様に見られる現象ではなく、備前に比較的近接する姫路城下町では17世紀前半以降も備前焼擂鉢の搬入は継続して行われている（姫路市教育委員会　2003）。

貯蔵具

捏鉢、擂鉢などの調理具では、上記のように、東播系、備前焼、丹波焼へと比較的単純な変遷をたどるのに対して、甕・壷などの貯蔵具では、中世の前半段階から、東播系須恵器・備前焼に加えて常滑焼・丹波焼が加わり、やや複雑な様相を呈する。

まず、Ⅰ期段階では甕はすべて東播系須恵器で占められ、備前焼、常滑焼など他産地のものはまだ見られない。Ⅱ期前半には、はやくも東播系須恵器甕に加えて、常滑焼５型式のものが出現する。県下では丹波焼三本峠北窯や西脇市緑風台窯の成立に常滑・渥美・瀬戸などの東海系瓷器系陶器の影響があるとされており、この時期の常滑焼の兵庫津への搬入は、このような状況を反映したものと言えよう。

この後、常滑焼は15世紀前半に至るまで一定量が継続して搬入されている。さらにⅡ期後半には、東播系、常滑焼に加えて、新たに備前焼、丹波焼がこれに加わる（長谷川　2003）。

13世紀代の備前焼の搬入は備前に隣接する西播磨地域では、龍野市福田片岡遺跡などいくつか知られているが（松岡　2003）、兵庫津遺跡での出土は東播磨から摂津地域では、もっとも早いものの一つであり、備前焼がはやくも13世紀段階で甕を中心に摂津地域にまで搬入されていた状況を窺わせる。

また、丹波焼の甕・壷類が13世紀後半には兵庫津に搬入されていることも注目すべき事象である。

従来、丹波焼は12世紀後半から13世紀前半には成立するものの、中世における流通圏は狭小で、16世紀に至るまで、その流通は生産地を中心に丹波国内に留まるものとされてきた。

しかし、13世紀後半代における兵庫津での丹波焼の出土は、他遺跡での丹波焼の出土状況が不明な現状では断言はできないものの、少なくとも13世紀後半段階でその流通域が摂津にまで及んでいた事を表している。

Ⅲ期に入ると東播系須恵器甕は早くも姿を消し、貯蔵具は備前焼焼甕ⅡB類・ⅢA類などの備前焼を主体にこれに常滑焼が一定量含まれる状況が継続する。また、Ⅱ期後半に出現した丹波焼はこの時期は姿を消している。

Ⅳ期もⅢ期同様、備前焼甕ⅢA類を主体に常滑焼８型式のものが若干ふくまれⅢ期と同様の状況を示している。

Ⅴ期には備前焼ではⅣ類の甕を主体に壷が僅かに搬入されている。また、それ以外の産地では常滑焼９型式

のものと丹波焼甕Ⅴ類が見られる。このことから、断続的にではあるが、Ⅱ期に出現した丹波焼甕がこの時期まで搬入されていたことがわかる。続くⅥ期には常滑焼甕・丹波焼甕は姿を消し、貯蔵具はすべて備前焼甕Ⅴ類で占められ他産地のものは見られなくなる。Ⅶ期は空白期で貯蔵具の出土は見られず、続くⅧ期も貯蔵具の出土は見られない。Ⅸ期には、貯蔵具は丹波焼甕Ⅵ類・ⅦA類、壷Ⅲ類などで占められ、備前焼が姿を消していることから、擂鉢同様、甕も16世紀末から17世紀前半代に備前焼から丹波焼への転換が行われたものと推測される。

このように、甕を中心とした貯蔵具の変遷は12世紀代の東播系須恵器の独占状況、12世紀末葉から13世紀初頭の常滑焼の出現、13世紀後半代の備前焼・丹波焼の出現、15世紀前半代の常滑焼、丹波焼甕の消滅、15世中葉から16世紀後半の備前焼の独占状態、16世紀末葉から17世紀初頭の備前焼の退潮と丹波焼の台頭と言う推移を示している。

以上、甕においては東播系須恵器の独占はすでに12世紀末葉に常滑焼甕の出現によって崩れ、さらに13世紀後半には備前焼が搬入され、14世紀前半代には備前焼の優位が明確になると言う、鉢の変遷よりも1世紀近くも早く東播系甕が消滅する背景には、12世紀後半以降、東播系須恵器の主力商品は鉢に限定され、生産基盤が鉢ほど強くない甕をターゲットにして、備前焼が販路を拡大して行く状況が反映されているものと考えられる。

また、13世紀前半から15世紀に僅かに見られる丹波焼の搬入は、備前焼が13世紀段階で隣接する西播磨地域及び物流の拠点である兵庫津へ搬入されるのと同一の現象として捉えられ、丹波焼も備前焼と同様に、13世紀以降、隣接する北播磨地域、兵庫津への進出をはかるが、擂鉢については東播系須恵器との、また、甕については備前焼との競合に敗れ、16世紀後半に至るまでは広範な流通圏を獲得できなかったものと考えられる（長谷川　2003）。

以上、見てきたように、Ⅰ期からⅧ期に至る兵庫津遺跡の土器組成の変遷には、貿易陶磁、瀬戸・美濃など全国的な流通圏をもつもの、東播系須恵器、備前焼など西日本を中心とした広域の流通圏をもつもの、播磨型土製煮炊具など播磨を中心に兵庫津を経由して和泉から土佐に至る中域の分布圏をもつもの、京都系土師器など、京都との人の往来を指標するものなどがさまざまに流通し、当時の交易・流通の状況を断片的にではあるが反映しているものと考えられる。

また、器種別に見た、それぞれの土器・陶磁器の流通からは、京都系土師器皿の消長に見られる京都からの人の移動と定住、土製煮炊具に見られる中世前半から後半の流通ルートの変化、東播系捏鉢から備前焼擂鉢への変遷に見られる中世後半における調理法の変化、甕の変遷に見られる中世前半からの産地の複合化と15世紀前半における備前焼への集約、貿易陶磁から瀬戸・美濃系陶器への変遷に見られる国際情勢の変化と喫茶の普及など、それらの変遷から窺がわれる様々な社会情勢の変化を読み取ることができる。

しかし、今回分析の対象としたのは、広範に広がる兵庫津遺跡の中でも、遺跡の北東部から出土したごく限られた資料に過ぎない。

また、対象とした時期も中世兵庫津の成立する12世紀後半代については断片的な資料しか見出しえず、また、中世兵庫津が終焉を迎えると想定される16世紀前半から後半については、当然の事とは言え、空白期となっており、中世兵庫津の成立と終焉の要因を探るには、資料的に不足していると言える。

このような、中世兵庫津の成立と終焉に関しては、先行する大物遺跡、後出する堺などの出土資料との詳細な比較検討が必要であろう。

また、東播系須恵器の衰退と消滅に関しても、この時期の生産状況については、生産地での検証が、まだ、

充分に進んでおらず、今後に残された課題と言える。

さらに、流通ルートの変遷を表すとした土製煮炊具の播磨・摂津における消費地での出土状況についても、同様にまだ充分に解明されたとは言い難い状況である。

このように、兵庫津遺跡の土器・陶磁器の組成の変遷を解明するには、今後、生産地、消費地での出土状況を整理し、改めて、流通拠点である兵庫津での出土状況と比較検討する必要があり、今後に残された課題は山積していると言えよう。

引用・参考文献

（1）伊野近富　1995　「土師器皿」　『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会

（2）須藤　宏　1999　「地中から語る清盛の時代」　『歴史の中の神戸と平家』　神戸新聞出版センター

（3）福田豊彦　1985　「守護」　『国史大辞典』7　吉川弘文館

（4）今谷　明　1983　「摂津の国の守護」　『兵庫県　大百科事典』　神戸新聞出版センター

（5）杉山　博　1965　『戦国大名』　日本の歴史　11　中央公論社

（7）兵庫県　1978　『兵庫県史』第3巻

（8）尾上実　森嶋康夫　近江俊秀　1995　「瓦器椀」　『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会

（9）森田　勉　1982　「14～16世紀の白磁の分類と編年」　『貿易陶磁研究』　No. 2　日本貿易陶磁研究会

(10) 上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁碗の分類について」　『貿易陶磁研究』　No. 2　日本貿易陶磁研究会

(12) 山本信夫　2000　「磁器の分類」　『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』　太宰府市教育委員会

(13) 大橋康二　1993　『肥前陶磁』　ニューサイエンス社

(14) 藤澤良祐　1995　「(生産3)　瀬戸」　『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界－その生産と流通－』　資料集

(15) 井上喜久雄　1985　「美濃焼の研究(一)」　『東洋陶磁』　第15・16号　東洋陶磁学会

(16) 国立歴史民俗博物館　1998　『陶磁の文化史』

(17) 瀬戸市埋蔵文化財センター　2001　『瀬戸大窯とその時代』

(18) 岡田章一　長谷川　眞　2003　「兵庫津遺跡出土の土製炊具」　『研究紀要』　第3号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

(19) 鋤柄俊夫　1995　「各地の瓦質土器」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会

(20) 鋤柄俊夫　1997　「土製煮炊具に見る中世食文化の特質」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集

(21) 十河良和　1996　「堺環濠都市遺跡出土の土師質土器・焙烙について」　『関西近世考古学研究』　Ⅳ

(22) 松岡千寿　2003　「播磨出土の備前焼」　『研究紀要』　第3号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

(23) 姫路市教育委員会　2003　『特別史跡姫路城跡Ⅱ』

(23) 長谷川　眞　2003　「中世丹波焼の変遷と技術移入・導入－杉本捷雄氏採集資料の再検討に向けて－」　『中近世土器の基礎研究』　XⅦ　日本中世土器研究会

Ⅵ　終わりに

本報告書では、第Ⅱ章からⅣ章で、遺跡をとりまく環境、遺構の概要、出土遺物の概要について記述し、さらに、第Ⅴ章において、遺構・遺物について若干の検討を加えた。

最後に、これらの検討結果を踏まえ、今回の調査成果を簡潔に記し、まとめにかえたい。

1．調査成果について

(1)　兵庫津遺跡の発掘調査における今回の調査地点の位置付け

今回報告した兵庫津遺跡浜崎地区の調査は、第Ⅱ章で述べたように、平成9年度に阪神・淡路大震災に伴う復興調査の一環として行われたものである。平成9年度までの兵庫津遺跡の調査では、近世の町屋群の存在は確認されていた。しかし、中世の兵庫津に関しては遺構・遺物とも断片的に存在することは知られていたものの、まとまった形での町屋群の存在は知られていなかった。

今回、報告した浜崎地区の調査は、13世紀後半から16世紀後半の中世の兵庫津に伴なう町屋群がそれに伴う膨大な遺物と共に検出され、初めて中世兵庫津の町場の存在が確認されたものとして重要な意義をもつものと位置付けられよう（岡田　松岡　長谷川　2003）。

(2)　遺跡の立地について

今回報告した調査地点を港あるいは港に関連する遺跡と認定する場合、その立地条件が重要となってくる。

たとえば、三重県の安濃津遺跡の場合、国土地理院発行の表層地質図を検討した結果、安濃津遺跡が海岸から2番目の砂堆上に立地していることが分かっている（伊藤他　1977）。

兵庫津の場合、表層地質図を利用しての検討までは行っていないが、海岸部に近い砂堆上に遺跡が形成されていると言う点では安濃津遺跡と同様であり、立地の点からも、今回報告した調査地点が港あるいは港に関連する遺跡であると考えられる。

(3)　土地利用の変遷について

今回の調査は、第Ⅲ章、Ⅳ章及びⅤ章2節で詳述したように、12世紀代から19世紀代に及ぶ遺構・遺物がまとまって出土している。

それらを検討した結果、今回の調査地点では、12世紀後半代までは、遺物は散見されるものの、いずれも包含層中からの出土であり、それらを伴なう確実な遺構群は検出されていない。

13世紀前半になると土製煮炊具が出土しはじめ、13世紀後半には煮炊具、供膳具、調理具、貯蔵具が出揃い、また、掘立柱建物を中心に、溝、井戸、土器廃棄土坑などの遺構群が23区周辺を中心に顕著に見られるようになる。

その状況は続く14世紀前半から16世紀初頭まで、17区から33区にかけて拡大、継続する形で見られる。しかし、遺構・遺物の出土状況からは、続く16世紀前半から後半にかけての時期は空白期となっており、この時期の遺構・遺物はほとんど見られず、16世紀前半から後半は中世兵庫津の衰退期ととらえることができる。

さらに、16世紀末葉から17世紀初頭になると、遺構・遺物の出土が9区から14区を中心に再び見られるようになり、その後、近世の遺構・遺物は1区から16区を中心に、1区から39の調査区の全域で見られるようになる。

以上から、中世兵庫津の町場の形成は、この調査地点では、12世紀代後半代にはまだ見られず、13世紀前半

に開始され、13世紀後半には一応の完成を見、14世紀前半～16世紀初頭にかけて、町場は徐々に拡大して行く。しかし、16世紀前半を境に、急速に町場は縮小、衰退するものと考えられる。

町場の復興は、兵庫城が築城される16世紀後半以降、中世の町場の北東側を中心に再開され、近世以降継続されるが、遺構・遺物の出土状況から、町場の中心は、17区から33区の中世の町場の東へと移行していったことが窺われる。

このことを、兵庫津遺跡全体から見ると、中世の町場は現在の真光寺を中心とする地域すなわち須佐入江を中心に中世前半に形成されはじめ、それが、徐々に北東に拡大し、13世紀後半代には今回の調査地点にまで及ぶ。この須佐入江を中心とする中世の兵庫津は16世紀前半を境に急速に衰退する。

その後、兵庫城の築城を契機として近世兵庫津が復興するが、その中心は須佐入江からさらに北東に移行し、やがて、佐比江を中心とする町場へと移行して行くものと推定される。

(4) 町割について

第Ⅴ章第１節では、『元禄兵庫津絵図』に描かれた状況を比較的良好に留めていると考えられる1881年の神戸市都市図に、本調査区を重ねて分析を行った。

その結果、道路面の痕跡などは確認されなかったものの、10区から11区にまたがって検出された落込み及び溝が旧西国街道の延長上にあり、特に11区では、それに平行或いは直行する溝や石組の水路などが検出され、それらが西国街道に伴なうもので、この地点に西国街道が通っていたことはほぼ間違いないとものと判断された。

この西国街道を基準として見ると、13区・14区・20区・26区・31区・33区などで検出された溝及び溝状遺構は、西国街道に直交あるいは並行する形で描かれている道路上にあり、それらの側溝と考えられ、元禄絵図に描かれた町割を大きく区画する道路が、ほぼ絵図と一致する形で確認された。

このうち、13区・14区で検出された道路は出土遺物から17世紀以降に比定され、絵図の時期と一致するが、20区・26区・31区・33区で検出されたものは、いずれも14世紀～16世紀代に比定されておおり、絵図の時期とは大きな隔たりが認められる。

これのことからは、元禄絵図に描かれた町並みが形成されたのは、兵庫城築城後の16世紀後半以降と考えられるが、西国街道を基準とし、それと平行あるいは直交する道路で区画される大きな町割の形成は、少なくともこの調査区周辺では、すでに中世段階に開始され、それを踏襲する形で、近世の兵庫津の町場が形成されたことが想定できる。

(5) 土器・陶磁器組成の変遷と中世兵庫津の物流・交易

今回の調査地点出土の土器・陶磁器組成の変遷については第Ⅴ章１節で12世紀から19世紀に至る時期をⅠ期からⅫ期に区分してその概要を述べた。特にⅠ期からⅧ期の中世段階については、それを、12世紀から14世紀前半の古代末期から中世前半、14世紀後半から16世紀初頭の中世後半、16世紀末葉～17世紀前半の近世初頭の３つの時期に区分してまとめることができる。

古代末～中世前半

Ⅰ期からⅤ期すなわち12世紀から14世紀前半の古代末期から中世の前半は、供膳具Ａでは、土師器皿はごく少量の轆轤土師器と京都系として一括して論じられる非轆轤土師器で構成されるが、土師器皿の大部分を占める非轆轤土師器はⅠ類、Ⅴ類に代表される京都産或いは京都産土師器を忠実に模倣したものと、同時期の京都産土師器とは形態を異にする非轆轤土師器とで構成されている。

また、供膳具Ａの椀は和泉型瓦器椀が主流を占めており、供膳具Ｂでは、12世紀～13世紀前半までは、貿易

陶磁の白磁、青磁が主流を占めるが、13世紀後半以降、貿易陶磁は減少し、それにかわって、古瀬戸の施釉陶器の碗・皿が徐々に増加して行く。

土製煮炊具は甕形タイプの播丹型と京都型瓦質焼成土器に類似する鍋形タイプ：鉄鍋型と羽釜型タイプ：羽釜形A系列が、この時期には主体を占めている。

また、捏鉢、擂鉢などの調理具はこの段階では東播系須恵器鉢が依然として主体を占めている。

さらに、甕・壺などの貯蔵具は、12世紀代は東播系須恵器が主体を占めているが、12世紀後半から13世紀前半にかけて、常滑、備前、丹波産のものがこれに加わり、すでに、中世前半から産地の複合化現象が生じている。

中世後半

14世紀後半以降の中世後半になると、供膳具Aの土師器皿では、京都産或いは京都産土師器を忠実に模倣したものが顕著に認められるようになる。また、供膳具Aの椀は和泉型瓦器椀が姿を消し、椀が消滅する。供膳具Bでは、貿易陶磁はさらに減少し、瀬戸・美濃製品は量・器種がますます増加する。

土製煮炊具は京都型瓦質焼成土器に類似する鍋形タイプ：鉄鍋型と羽釜型タイプ：羽釜形A系列が姿を消し、かわって、河内・和泉型瓦質焼成土器に類似度を増す羽釜形タイプ：羽釜形B系列及びそれから派生したと考えられる羽釜形タイプ：播磨型が主流を占めるようになる。

調理具では備前焼が東播系須恵器捏鉢を圧倒して、15世紀前半代には東播系須恵器は姿を消し、備前焼擂鉢が調理具を独占するようになる。

貯蔵具も東播系須恵器は14世紀前半に、また、常滑焼、丹波焼も15世紀前半に相次いで姿を消し、擂鉢同様、15～16世紀前半代は備前焼で占められるようになる。

近世初頭

16世紀前半から後半の空白期を挟んで、16世紀末葉から17世紀前半の近世初頭の時期になると、供膳具Aでは、土師器皿は急速に減少し、その供膳具としての役割を肥前系陶磁器に譲り、灯明皿へとその役割を変化させて行く。

また、供膳具Bでは、16世紀末～17世紀初頭では、貿易陶磁の白磁・青磁・青花磁器、瀬戸・美濃系陶器碗・皿に肥前系陶器椀・皿が加わり、活況を呈するが、17世紀前半に肥前系磁器が登場すると、急速に肥前系陶磁器が普及し、貿易陶磁は姿を消し、瀬戸・美濃系陶器も減少する。

土製煮炊具は羽釜形タイプ：播磨型のみとなり、やがてそれは、焙烙へとその機能を限定して行く。

調理具・貯蔵具では備前焼の独占が丹波焼の台頭によって崩れ、17世紀前半以降、備前焼から丹波焼への転換が急速に進行する。

このような、土器・陶磁器組成の変遷の要因として、第Ⅴ章第3節では、人の移動、流通経路の変遷、国際情勢の変化、茶陶の隆盛、調理法の変化、守護細川氏の摂津における領国支配の強化とその崩壊などを挙げ、若干の考察を加えたが、いずれも問題提起の段階に留まって、それらを具体的論拠に基づいて詳細に検討するには至らなかった。

2．まとめ

以上、今回の調査について、昭和63年度に実施された大手前女子大学の調査以来の既往の調査における意義、調査地点の立地、土地利用の変遷、出土した土器・陶磁器組成の変遷とそこから窺える中世兵庫津の物流と交易などについて述べてきた。

最後に、これらの遺構・遺物の検討を通じて、今回の成果からは論じられなかった点について触れておきたい。

今回の調査成果からは、この地点における町場の形成が完成を見ると考えられる13世紀後半から町場が衰退に向かう16世紀前半については、兵庫津遺跡のごく限られた部分とは言え、遺構・遺物が数多く出土し、町場の形成と変遷、土器・陶磁器組成の変遷がある程度解明された。

しかし、兵庫津繁栄の端緒となったと考えられる12世紀後半の平清盛の大輪田泊の改修及び貿易陶磁の搬入が最も盛んに行われる12世紀～13世紀前半代については、この段階の資料が断片的にしか検出されておらず、明らかにされていない。

12世紀後半～13世紀前半代は県下の中世遺跡では普遍的に貿易陶磁が出土する時期であり、すでにこの段階で、兵庫津がこれらの貿易陶磁搬入の窓口としての機能を果たしていたか否かは、先にふれた真光寺周辺の調査が進むにつれて明らかにされるものと考えられる。

また、平清盛の大輪田泊の改修に象徴される平氏政権との関わりについても、福原京の所在とともに今後に残された課題である。

さらに、兵庫津は室町時代には、『兵庫北関入船納帳』に記録されたように、瀬戸内航路の中継継基地としての他に、日明貿易の拠点としての役割も担っていた。今回の調査では、このことを示す資料は全く見つかっていない。勘合貿易に伴なう交易品はごく少量で、兵庫津はその中継に携わっただけで、いわば通過点であり、それらの交易品は直ちに京都に運ばれ、この地には残らない可能性が高い。

しかし、遣明船の発着に際して、たびたび、将軍下向の記事が文献に見られることから、藤田明良氏が指摘するような、日明貿易の際、将軍あるいは明の使節の宿舎として使用された寺院などの施設の存在が想定され、今後、寺院を中心とした調査の成果が待たれる。また、その成果を通じて、日明貿易の実態解明も今後進展を見るものと期待される。

また、中世兵庫津の衰退の原因であるが、これは従来から指摘されるように、日明貿易の根拠地が堺に移ること、京都への交易品搬入の窓口としての地位が応仁・文明の大乱を契機に失われることなどが上げられるが、今回の調査結果からは、兵庫津の町場そのものの衰退は少なくとも16世紀前半から後半にかけて見られ、これには、16世紀前半以降起きる細川氏の摂津支配の崩壊とそれに続く摂津国内の混乱が直接的には契機となったものと考えられる。

国道２号共同溝整備事業に伴う兵庫津遺跡の調査は、平成６年度に始り、平成10年度に現地での調査を終了した。この間、平成７年１月17日に発生した阪神・淡路大震災以降は、震災前にも増して共同溝整備の完成が急がれ、調査は通常調査から復興調査へと移り、全国からの数多くの支援職員の参加を得ることになった。最後に当り、過酷な状況の下で調査に従事された支援職員の皆様に感謝申し上げたい。また、本県職員として復興調査の陣頭に立ち、本遺跡の七宮地区の調査にも携わった故水口富雄氏の霊前に本書を捧げ、刊行を報告したい。

引用・参項文献

(1) 岡田章一　松岡千寿　長谷川　眞　2003　「兵庫津遺跡発掘調査の軌跡と成果」　『歴史と神戸』第42巻第６号　兵庫史学会

(2) 伊藤裕偉他　1977　『安濃津』　三重県埋蔵文化財センター

第８表　兵庫津遺跡（浜崎地区）出土遺物観察表

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1	1区 包含層中	土師器	焙烙	丸底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は僅かに内彎・内傾気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	底部を型作りし、体部～口縁部は粘土紐巻上げ成形（底型作り）。底部内面はナデ調整。器面を平滑に仕上げる。内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	外面に煤附着。色調　橙色。焙烙形Ⅳ A類。17ｃ中葉～後半。
2	1区　包含層中	土師器	焙烙	丸底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は内彎してほぼ直上に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	底部を型作りし、体部～口縁部は粘土紐巻上げ成形（底型作り）。底部内面はナデ調整。器面を平滑に仕上げる。内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁端部は丸味をもつ。	外面に煤附着。色調　橙色。焙烙形Ⅳ B類。18ｃ前半。
3	2区　SX01	土師器	鍔壷	平底。底部と体部の界は垂直。体部は直立。口縁部は玉縁状に肥厚する。	水挽きロクロ成形。内外面とも回転ナデ調整。ロクロ目痕が残る。底部外面未調整　糸切り痕。	ロクロ使用。色調　橙色。
4	2区　SX03	土師器	鍔壷	平底。底部と体部の界は垂直。体部は直立。口縁部は僅かに外反。口縁端部を外方につまみ出す。	水挽きロクロ成形。内外面とも回転ナデ調整。ロクロ目痕が残る。底部外面未調整　糸切り痕。	ロクロ使用。色調　橙色。
5	2区　SK01	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	表面　ナデ調整。器面は平滑。端部僅かに欠損。	色調　にぶい橙色。
6	2区　SK01	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	表面　ナデ調整。器面は平滑。両端とも欠損。	色調　にぶい黄橙色。
7	2区　SK01	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	表面　ナデ調整。器面は平滑。端部僅かに欠損。	色調　にぶい褐色。
8	2区　SK01	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	表面　ナデ調整。器面は平滑。端部僅かに欠損。	色調　にぶい黄橙色。
9	2区　SK01	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	表面　ナデ調整。器面は平滑。両端とも欠損。	色調　暗灰黄色。
10	2区　SK01	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	表面　ナデ調整。器面は平滑。端部僅かに欠損。	色調　にぶい黄橙色。
11	2区　SK01	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	表面　ナデ調整。器面は平滑。端部欠損。	色調　にぶい橙色。
12	2区　SK01	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	表面　ナデ調整。器面は平滑。端部僅かに欠損。	色調　にぶい赤褐色。
13	2区　SK01	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	表面　ナデ調整。器面は平滑。	色調　にぶい橙色。
14	2区　SK01	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	表面　ナデ調整。器面は平滑。	色調　暗黄褐色。
15	2区　SK01	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	表面　ナデ調整。器面は平滑。	色調　にぶい橙色。
16	2区　SK01	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	表面　ナデ調整。器面は平滑。端部僅かに欠損。	色調　にぶい黄橙色。
17	2区　SK01	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	表面　ナデ調整。器面は平滑。両端部僅かに欠損。	色調　橙色。
18	2区　SK01	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	表面　ナデ調整。器面は平滑。両端部僅かに欠損。	色調　にぶい橙色。
19	2区　SK01	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	表面　ナデ調整。器面は平滑。端部僅かに欠損。	色調　にぶい褐色。
20	2区　SK01	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	表面　ナデ調整。器面は平滑。	色調　橙色。
21	2区　SK01	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	表面　ナデ調整。器面は平滑。端部欠損。	色調　橙色。
22	2区　ｐｉｔ内	染付磁器	皿	底部の器壁は厚い。高台は幅が広く低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　赤味を帯びた灰白色（焼成が悪く、酸化炎焼成となっている）。外面の体部下半以下露胎。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。文様　内面簡略化された草花文。外面　無文。	肥前系　粗製の染付皿。17ｃ後半～18ｃ前半。
23	2区　建物整地層	施釉陶器	皿	高台は比較的幅が広く、低い削り出し高台。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	体部内面～体部外面　灰釉施釉。明緑灰色に発色。体部内面に胎土目跡。	二次焼成によって灰被り。肥前系　唐津。Ⅰ-2期。16ｃ末～17ｃ初頭。高台の形態がやや異色。
24	2区　建物整地層	施釉陶器	皿	高台は幅が広く、低い。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がり、中位で外方に屈曲する。口縁部は外方にひらき、口縁端部は尖り気味。	内外面とも灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。外面の体部下半以下露胎。	肥前系。唐津。Ⅲ～Ⅳ期。17ｃ中頃～18ｃ後半。
25	2区　包含層中	土師器	皿	平底で底部の器壁は非常に厚い。体部は短く、僅かに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面未調整　糸切り痕。	口縁部に煤付着－灯明皿として使用。轆轤使用。ⅢA類。17ｃ中葉～18ｃ前半。
26	2区　包含層中	土師器	皿	平底。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面未調整　糸切り痕。	轆轤使用。色調　黄橙色。ⅢA類。17ｃ中葉～18ｃ前半。
27	2区　包含層中	土師器	皿	平底。底部の器壁は非常に厚い。体部は短く、斜め上方に僅かに延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面未調整　糸切り痕。	轆轤使用。色調　浅黄橙色。ⅢA類。17ｃ中葉～18ｃ前半。
28	2区　包含層中	土師器	皿	平底。体部は短く、斜め上方に延びる。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面未調整　糸切り痕。	口縁端部に煤附着－灯明皿として使用。轆轤使用。色調　浅黄橙色。ⅢA類。17ｃ中葉～18ｃ前半。
29	2区　包含層中	土師器	皿	平底。底部の器壁は非常に厚い。体部は短く、斜め上方に僅かに延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面未調整　糸切り痕。	口縁部に煤附着－灯明皿として使用。色調　にぶい黄橙色。轆轤使用。ⅢA類。17ｃ中葉～18ｃ前半。
30	2区　包含層中	土師器	皿	平底。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面未調整　糸切り痕。	口縁端部に煤附着－灯明皿として使用。轆轤使用。色調　浅黄橙色。ⅢA類。17ｃ中葉～18ｃ前半。
31	2区　包含層中	土師器	皿	平底。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面未調整　糸切り痕。	口縁端部に煤附着－灯明皿として使用。轆轤使用。色調　浅黄橙色。ⅢA類。17ｃ中葉～18ｃ前半。
32	2区　包含層中	土師器	皿	底部の器壁は非常に厚い。平底。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面未調整　糸切り痕。	轆轤使用。色調　にぶい橙色。ⅢA類。17c中葉～18ｃ前半。
33	2区　包含層中	土師器	皿	平底。体部は短く直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部内面　ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。	口縁部に煤附着。色調　橙色。轆轤使用。ⅢA類。17ｃ中葉～18ｃ前半。
34	2区　包含層中	土師器	皿	器形は大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部外面未調整　糸切り痕。	底部外面に鉄製品銹着。体部外面に墨あるいは漆附着。ⅢB類。17ｃ中葉～18c前半。
35	2区　包含層中	土師器	皿	平底。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面未調整　糸切り痕。内面　透明釉施釉。橙色に発色。	轆轤使用。いわゆる柿釉の灯明皿。Ⅳ類。18ｃ後半以降。
36	2区　包含層中	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	口縁端部に煤附着－灯明皿として使用。色調　浅黄橙色。轆轤未使用。ⅡA5c類。17c中葉～後半。
37	2区　包含層中	施釉陶器	椀	体部は僅かに内彎。口縁端部は尖り気味。	内外面とも鉄釉施釉。褐色に発色。釉調はガラス質。	瀬戸・美濃系天目茶碗。
38	2区　包含層中	施釉陶器	皿	高台は比較的幅が広く、低い。体部　緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	水挽きロクロ成形の後、型押しにより輪花状に整形。内外面とも灰・緑・白濁釉の３釉を施釉。澱青釉風に滲む。外面の体部下半以下露胎。	瀬戸・美濃系？
39	2区　包含層中	染付磁器	皿	口径に対し高台径が小さい。高台は比較的幅が狭く低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。底部の器壁は非常に厚い。	色調　やや青味を帯びた灰白色。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。底部外面（高台脇）以下露胎。底部外面に砂附着。	肥前系　波佐見産の粗製染付。18ｃ前半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
40	2区　包含層中	染付青磁	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は細く比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　青磁釉施釉。明オリーブ灰色に発色。底部外面　染付　くずれた渦福文。内面　染付　底部内面　界線２条・菊花文。	肥前系。Ⅳ期。18ｃ後半。
41	2区　包含層中	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く、比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　界線１条・丸文・界線１・２条。底部外面　界線１条・□寿？文。内面界線２・２条。底部内面コンニャク印判で五弁花文。	肥前系　くらわんか手　18ｃ後半。
42	2区　包含層中	染付磁器	碗	器壁は比較的薄い。高台は比較的細く高い。体部は内彎気味に上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰色。文様　外面　家屋に草花文・界線１条・くずれた「大明年製」銘。内面　無文。	肥前系　18ｃ代。
43	2区　包含層中	染付青磁	蓋	高台は細く高い。器壁は比較的厚い。体部は直線的に外方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　底部外面・内面　染付　青味を帯びた灰白色。外面　青磁　浅黄緑色に発色。文様　内面　斜格子文・界線２条。	２次焼成のため器面は荒れる。産地不明。19ｃ前半以降か。
44	2区　包含層中	染付磁器	蓋	体部は僅かに内彎。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　草花文。内面　界線２・１条・島嶼文。	碗の蓋。産地不明。19ｃ前半以降。
45	2区　包含層中	染付磁器	蓋	体部は直線的に斜め下方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　草花文。内面　界線２・１条・島嶼文。	碗の蓋。産地不明。19ｃ前半以降。
46	2区　包含層中	土製品	ﾐﾆﾁｭｱ蓋	型作り成形。体部は扁平な円盤状。短い棒状のつまみをもつ。	上面に型押しで花弁状文施文。彩色は全て剥落。	ミニチュアの蓋。
47	2区　包含層中	土製品	ミニチュア鍋？	器壁は非常に厚い。底部外面に粒状の脚を３箇所貼り付け。体部は斜め上方に延びる。口縁部上面は水平に端面をもつ。口縁部上面　長方形に穿孔。口縁部内面に低い段をもつ。	型作り成形。内外面ともナデ調整。器面の彩色は剥落。	ミニチュアの鍋か？。
48	2区　包含層中	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	器面は著しく摩滅。	焼成はややあまい。胎土中に砂粒を多く含む。色調　にぶい橙色。
49	2区　包含層中	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	器面は著しく摩滅。	焼成はややあまい。胎土中に砂粒を多く含む。色調　にぶい褐色。
50	2区　包含層中	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	器面は著しく摩滅。	焼成はややあまい。胎土中に砂粒を多く含む。色調　明赤褐色。
51	2区　包含層中	土製品	面子	瓦片の縁辺を打ち欠いて成形。	器面は摩滅が著しい。	色調　暗灰色。原体は瓦。
52	2区　包含層中	土製品	人形	施文は正面のみ。背面は無文。光背に小仏を８体貼り付ける。阿弥陀像か。	型作り成形。片型作り。彩色は全て剥落。	阿弥陀像？
53	3区　包含層中	土師器	Ⅲ	平底。底部の器壁は非常に厚い。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部外面未調整　ヘラ切り痕。	色調　にぶい橙色。轆轤使用。ⅢB類。17ｃ中葉～18ｃ前半。
54	3区　包含層中	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面。糸切り痕をナデ消す。	口縁部外面　煤附着－灯明Ⅲとして使用。色調　にぶい黄橙色。轆轤使用。ⅢA類。17ｃ中葉～18ｃ前半。
55	3区　包含層中	土師器	Ⅲ	平底。底部の器壁は非常に厚い。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面未調整。糸切り痕。	轆轤使用。色調　浅黄橙色。ⅢA類。17ｃ中葉～18ｃ前半。
56	3区　包含層中	土師器	Ⅲ	平底。底部の器壁は非常に厚い。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面未調整。糸切り痕。	口縁部に１箇所煤附着－灯明Ⅲとして使用。轆轤使用。色調　にぶい黄橙色。ⅢA類。17ｃ中葉～18ｃ前半。
57	3区　包含層中	土師器	Ⅲ	平底。底部の器壁は非常に厚い。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部外面未調整　糸切り痕。	口縁部　煤附着－灯明Ⅲとして使用。轆轤使用。色調　にぶい橙色。ⅢA類。17ｃ中葉～18ｃ前半。
58	3区　包含層中	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部外面未調整　糸切り痕。	口縁部　煤附着－灯明Ⅲとして使用。轆轤使用。色調　浅黄橙色。ⅢB類。17ｃ中葉～18ｃ前半。
59	3区　包含層中	土師器	Ⅲ	平底。底部の器壁は比較的厚い。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。底部外面未調整。糸切り痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤使用。ⅢB類。17ｃ中葉～18ｃ前半。
60	3区　包含層中	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部外面未調整　糸切り痕。	口縁部　煤附着－灯明Ⅲとして使用。轆轤使用。色調　浅黄色。ⅢB類。17ｃ中葉～18ｃ前半。
61	3区　包含層中	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部外面未調整　糸切り痕。	口縁部　煤附着－灯明Ⅲとして使用。轆轤使用。色調　にぶい橙色。ⅢB類。17ｃ中葉～18ｃ前半。
62	3区　包含層中	土師器	Ⅲ	平底。器壁は全体に薄い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部外面未調整　ヘラ切り痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。Ⅳ類。18c後半以降。
63	3区　包含層中	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部外面未調整　糸切り痕。	口縁部　煤附着－灯明Ⅲとして使用。轆轤使用。色調　にぶい橙色。Ⅳ類。18c後半以降。
64	3区　包含層中	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　ヘラ削り調整。内面透明釉施釉　にぶい橙色に発色。	口縁端部に煤附着。いわゆる柿釉の灯明皿。Ⅳ類。18c後半以降。
65	3区　包含層中	土師器	焙烙	丸底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部はほぼ直立する。口縁端部は丸味をもつ。底型作り。	体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヘラ削り調整。底部外面　板ナデ調整。	外面　煤附着。色調　赤褐色。焙烙形ⅣA類。17ｃ中葉～後半。
66	3区　包含層中	土師器	焙烙	型作り成形。底型作り。平底。体部は若干内傾。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面　ナデ調整。体部外面　ヘラ削り調整。	体部外面　煤附着。色調　橙色。焙烙形ⅣA類。17ｃ中葉～後半。
67	3区　包含層中	瓦質土器	火鉢	平底。体部は内彎。口縁部は上面に端面をもつ。	底部内面　ナデ調整。器面を平滑に仕上げる。内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	色調　黒灰色。近世。
68	3区　包含層中	無釉陶器	擂鉢	平底。体部は僅かに内彎して、斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯をつくる。口縁部外面　凹線２条。口縁部外面　凸帯１条。内面の底部と体部の界は不明瞭。	口縁部内外面　回転ナデ調整。底部外面　ヘラ削り調整。体部外面に６条１単位の擂目施文。	備前焼擂鉢Ⅸ類。17ｃ前半。
69	3区　包含層中	無釉陶器	鉢	平底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は内傾し、端部は肥厚する。	内面～体部外面　回転ナデ調整。体部外面に凹線一ロクロ目痕。内外面とも赤土部塗布。	長石の噴き出しが顕著。丹波焼。18ｃ中頃～末。
70	3区　包含層中	施釉陶器	Ⅲ	高台は幅が広く低く削り出す。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部外面から内面　銅緑釉施釉。青緑色に発色。口縁部外面以下露胎。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	肥前系。唐津緑釉Ⅲ。Ⅲ～Ⅳ期。17ｃ中頃～18ｃ前半。
71	3区　包含層中	無釉陶器	Ⅲ	高台は幅が広く比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも銅緑釉施釉。にぶい黄緑色に発色。外面の体部下半（高台脇）以下露胎。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	肥前系。唐津緑釉Ⅲ。Ⅲ～Ⅳ期。17ｃ中頃～18ｃ前半。
72	3区　包含層中	施釉陶器	椀	高台は細く高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　白濁釉を横方向にハケ塗りの後、暗褐色釉施釉。内面　白濁釉を現川風に施釉の後、暗褐色釉施釉。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。高台畳付に砂附着。	肥前系。刷毛目唐津。Ⅲ～Ⅳ期。17ｃ中頃～18ｃ前半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
73	3区　包含層中	施釉陶器	壷	高台は幅が広く比較的高い。底部の器壁は、非常に厚い。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は内傾して斜め上方に延びる。	体部外面下半　ヘラ削り調整。体部外面上半回転ナデ調整。外面　鉄釉施釉。ゴマ状に灰被り。	備前焼。
74	3区　包含層中	施釉陶器	鉢	高台は幅が広く低い。体部は内彎して斜め上方に延びる。口縁部は外方に折り曲げ玉縁状に肥厚する。	外面　褐色釉施釉の後、白濁釉を波状に刷毛塗りする。内面　褐色釉施釉の後、白濁釉を横方向に刷毛塗り。	肥前系　刷毛目唐津。Ⅲ期。17ｃ中頃～後半。
75	3区　包含層中	施釉陶器	鉢	高台は細く高い。平底。底部と体部の界は大きく屈曲する。体部は直線的に斜め上方に延び、口縁部は僅かに外反し、口縁端部は直上につまみ上げる。	内外面とも透明釉施釉。黄色味を帯びた灰白色に発色。底部外面は露胎。文様　内面　淡い呉須で斜格子状文施文。外面　露胎。	産地不明。陶胎染付。
76	3区　包含層中	白磁	碗	型作り成形。体部は僅かに内彎。口縁端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた白色に発色。高台脇以下露胎。	ミニチュアの白磁碗。
77	3区　包含層中	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　コンニャク印判で鶴文・界線２条。内面　無文　底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
78	3区　包含層中	染付磁器	碗	高台は比較的幅が広く高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも施釉　青灰色に発色。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。文様　淡い呉須で草花文・界線２条。内面無文。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
79	3区　包含層中	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部は内彎して上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　呉須山に草花文・界線２条。底部外面　界線１条・「大明年製」銘。内面　無文。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
80	3区　包含層中	染付磁器	碗	高台は比較的幅が広く低い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎、口縁端部は丸味をもつ。高台畳付に砂附着。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　やや淡い呉須で、梅花文・界線１・２条、内面無文。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
81	3区　包含層中	染付磁器	碗	高台は細く高い。体部は内彎気味に上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　呉須山に草花文・界線２条。底部外面　界線１条・くずれた「大明年製」銘。内面　無文。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。焼成はやや軟質。
82	3区　包含層中	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は細く高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	灰被りのため、器面は白濁色に変色。文様　外面　草花文・界線・１・２条。底部内面　界線２条　草花文	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
83	3区　包含層中	染付磁器	碗	幅が広く比較的低い高台。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも全面施釉。色調　青味を帯びた灰白色。文様　底部内面　菊花文施文。口縁端部に鉄釉施釉－口紅。	肥前系　18世紀後半以降か。
84	3区　包含層中	染付磁器	皿	底部の器壁は厚い。高台は幅が広く比較的厚い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　黄色味を帯びた灰白色（焼成があまく、陶胎になっている）。外面の体部下半以下露胎。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	肥前系。粗製の磁器皿。17ｃ後半～18ｃ前半。
85	3区　包含層中	染付磁器	皿	高台は比較的幅が広く低い。体部は僅かに内彎して、斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰色。文様　外面　淡い呉須で唐草文・界線１・２条。底部外面　界線１条・くずれた「大明年製」銘。内面　墨弾きで雲文など・界線２条・コンニャク印判で五弁花文。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。18ｃ。
86	3区　包含層中	染付磁器	仏具碗	高台は中央部を浅く削り出す。脚部は短く直立。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。底部外面は露胎。文様　外面　界線１条・草花文・界線１条	器面に虫喰いが目立つ。肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。18ｃ後半。
87	3区　包含層中	染付磁器	仏具碗	高台は中央部を浅く削り出す。脚部は太く、短く、直立する。体部は僅かに内彎して、直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　簡略化された松葉文・界線１・２条。　内面　無文。底部外面　露胎。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。18ｃ後半。
88	3区　包含層中	染付磁器	花瓶	高台は幅が広く比較的高い。体部は斜め上方に立ち上がり、すぐに大きく屈曲内傾する。体部と頸部の界は内彎し、頸部は外方にひらく。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　竹葉文施文。内面は露胎。	器面に虫喰い、釉切れが目立つ。肥前系。Ⅲ期。17ｃ後半。
89	3区　包含層中	土製品	土錘	平面形状は楕円形を呈する。４箇所に穿孔する。中央部に縦に縄掛け用の溝をもつ。	器面は使用により著しく摩滅する。	色調　にぶい橙色。
90	3区　包含層中	土製品	家形	型作り成形。屋根の頂部　穿孔。	施文は正面のみ。背面は無文。彩色は剥落。	水車子小屋か？
91	3区　包含層中	土製品	人形	型作り成形。錫杖をもつ地蔵像。背面は無文。	両型作り。接合部はヘラケズリの後、ナデ調整。	彩色は全て剥落する。色調　にぶい橙色。地蔵菩薩像。
92	3区　包含層中	土製品	人形	蓮華座の上に座する僧形像。右手に錫杖をもつ。底部外面は大きく穿孔。頭部を欠失。	型作り成形。両型作り。中央部に貼り合わせ痕あり。赤色顔料の一部残存。	僧形像。
93	3区　包含層中	土製品	人形	右手に小槌を持ち、左肩に袋を背負う形。	型作り成形。両型作り。彩色は全て剥落。	大黒天像。
94	3区　包含層中	土製品	人形	型作り成形。両型作り。中央部に貼り合わせ痕あり。	顔と肩の一部剥落。彩色は全て剥落。	底部に径7.5mm、深さ20mmの穿孔あり。天神像。
95	3区　包含層中	土製品	人形	頭部　欠失。勿をもち端座する人物像。	型作り成形。両型作り。中央部に貼り合わせ痕。底部外面に直径　1.15cm、深さ3.1cmの円錐状に穿孔。彩色は全て剥落。	天神像。
96	3区　包含層中	土製品	仏像	光背をもつ仏像。光背は細い凸線で構成される火焔文か。？	型作り成形。光背の裏面は無文。彩色は全て剥落。	菩薩像。
97	3区　包含層中	土製品	人形	右手に扇子、左手に盃をもつ。人物の左前に甕を置く。	型作り成形。両型作り。中央部に貼り合わせ痕あり。正面に緑釉が残存。	三番叟。
98	4区　包含層中	土師器	皿	全体に器壁は厚い。平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。底部の内外面ナデ調整。	口縁部に１箇所煤附着－灯明皿として使用。轆轤使用。色調　にぶい黄橙色。ⅢB類。17ｃ中葉～18c前半。
99	4区　包含層中	土師器	皿	全体に器壁は厚い。平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。底部の内外面ナデ調整。底部外面に糸切り痕。	色調　淡赤褐色。轆轤使用。ⅢA類。17ｃ中葉～18ｃ代。
100	4区　包含層中	土師器	焙烙	丸底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は内傾。口縁端部は丸味をもつ。	底部を型作りし、体部～口縁部は粘土紐巻上げ成形（底型作り）。底部内面は丁寧なナデ調整。内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	外面　煤附着。色調　黄褐色。焙烙形ⅣA類。17ｃ中葉～後半。
101	4区　包含層中	土師器	焙烙	丸底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部はほぼ直立。口縁端部は丸味をもつ。	底部を型作りし、体部～口縁部は粘土紐巻上げ成形（底型作り）。底部内面は丁寧なナデ調整。器面を平滑に仕上げる。内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	外面　煤附着。色調　明赤褐色。焙烙形ⅣA類。17ｃ中葉～後半。
102	4区　包含層中	土師質	焙烙	型作り成形。底型作り。平底。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　不定方向のナデ調整。体部内面に径4mm大の穿孔。外面までは貫通していない。	内外面に煤附着。色調　灰黄褐色。焙烙形ⅣA類。17ｃ中葉～後半。
103	4区　包含層中	土師器	焙烙	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部は内傾。口縁端部は丸味をもつ。	底部を型作りし、体部～口縁部は粘土紐巻上げ成形（底型作り）。底部内面は丁寧なナデ調整。器面を平滑に仕上げる。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	外面　煤附着。色調　橙色。焙烙形ⅣC類。18ｃ後半。
104	4区　包含層中	土師器	壷	平底。体部は直線的にほぼ直上に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	轆轤使用。内外面とも回転ナデ調整。体部外面にロクロ目痕。底部外面未調整　糸切り痕。	器面の摩滅が著しい。色調は橙色。内面煤附着－火消壷として使用。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
105	4区　包含層中	無釉陶器	擂鉢	巾が広く、低い高台を浅く削りだす。体部は緩やかに、直線的に斜め上方に延びる。口縁部は若干肥厚。端部は丸味をもつ。口縁部内面に浅い凹線１条。	内面～体部外面上半　回転ナデ調整。体部外面下半　横方向のヘラ削り調整。内面の底部～体部　10条１単位の擂目を櫛状工具で密に施文。内外面とも鬼板（鉄泥漿）を塗布。	瀬戸・美濃系。近世。
106	4区　包含層中	施釉陶器	椀	高台は端正な輪高台。体部は斜め上方に延びる。	内面　透明釉施釉。黄灰色に発色。外面　露胎。底部外面　「中金村」銘　スタンプ。	肥前系京焼風陶器。Ⅲ期～Ⅳ期。17ｃ中頃～18ｃ前半。
107	4区　包含層中	無釉陶器	椀	高台は端正な輪高台。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。	内外面とも透明釉施釉。淡黄色に発色。高台脇以下露胎。底部外面　「清水」銘　スタンプ。	肥前系京焼風陶器。Ⅲ期～Ⅳ期。17ｃ中頃～18ｃ前半。
108	4区　包含層中	施釉陶器	椀	高台は端正な輪高台。	内面　透明釉施釉。灰白色に発色。外面　露胎。底部外面　「清水」銘　スタンプ。	肥前系京焼風陶器。Ⅲ期～Ⅳ期。17ｃ中頃～18ｃ前半。
109	4区　包含層中	施釉陶器	壷	平底。底部と体部の界はほぼ直角に屈曲。体部は直立。口縁部と体部の界はやや屈曲。口縁部直立。	内外面とも施釉。にぶい黄橙色に発色。口縁部内面・底部外面は露胎。底部外面に回転ヘラ削り痕。	色調　にぶい黄橙色。近代の製品か→汽車茶瓶。
110	4区　包含層中	施釉陶器	乗燭	平底。体部は外反。	外面　ロクロナデ調整。底部外面にヘラ削り痕。外面に灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。器面に細かい貫入。内面及び底部外面　露胎。	露胎部に煤附着。京・信楽系。19ｃ前半以降。
111	4区　包含層中	施釉陶器	皿	比較的幅が広く、低い高台を削りだす。高台裏にトキンが残る。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部を僅かに外方につまみ出す。	内外面とも、ハケで白濁釉を施釉した後、褐色釉を施釉する。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。体部外面上半以下露胎。底部内面中央の施釉部に砂附着。	肥前系　刷毛目唐津。17ｃ後半～18ｃ前半。
112	4区　包含層中	施釉陶器	皿	高台は細く、高い貼付高台。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は外方につまみ出す。	内外面共、灰釉施釉。淡黄褐色に発色。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。釉ハギ部は鉄絵で施文。外面の体部下半（高台脇）以下露胎。	京焼風。産地不明　18ｃ後半以降か。
113	4区　包含層中	染付磁器	皿	器壁は比較的薄い。高台は低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。内面　草花文（芙蓉手）。外面　界線１条・簡略化された草花文？。	明青花。17ｃ初頭。
114	4区　包含層中	染付磁器	皿	高台は細く、比較的低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　唐草文・界線１・２条。　内面　梅花文・草花文・界線２条。高台畳付の釉　掻き取り。	肥前系。
115	4区　包含層中	染付磁器	蓋	摘みは僅かに外方にひらく。体部は若干内彎。かえりをもつ。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　界線２条・草花文・界線２条。内面　無文。かえりは露胎。	壷の蓋か。産地不明。19ｃ前半以降？。
116	4区　包含層中	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	器面はナデ調整。	色調　橙色。
117	4区　包含層中	土製品	面子	土師器片の縁辺を打ち欠いて円形に成形。	表面に擦痕あり。	色調　橙色。原体は土師器。
118	7区　包含層（第3～4層）中	土師器	Ⅲ	器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。口縁端部は丸味をもつ。	内外面共、丁寧なヨコナデ調整。器面は平滑。口縁部内・外面は強いヨコナデ調整。口縁部内面に僅かに凹部をもつ。	外面の底部～体部一面に煤附着。色調は淡黄褐色。ⅢB2ｂ類。15c後半。
119	7区　包含層（第3～4層）中	土師器	鍋	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面ナデ調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目が残る。	外面に煤附着。色調　にぶい黄橙色。鍋形タイプ：鉄かぶと形Ⅱ類。15ｃ中頃。
120	7区　包含層（第3～4層）中	土師器	鍋	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。外面の口縁部と体部の界に凹部をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面横方向のナデ調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目が残る。	外面に煤附着。色調　にぶい黄橙色。鍋形タイプ：鉄かぶと形Ⅲ類。15ｃ後半～16c初頭。
121	7区　包含層（第3～4層）中	土師器	鍋	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方に僅かに肥厚。口縁部外面下方に凹部をもつ。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　横方向のナデ調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目。	外面全体に煤附着。色調　にぶい黄橙色。鍋形タイプ：鉄かぶと形Ⅱ類。15ｃ中頃。
122	7区　包含層（第3～4層）中	瓦質土器	羽釜	口縁部は内傾。口縁部外面に凹線２条。口縁部上面は水平に端面をもつ。口縁部外面に断面台形状の比較的幅の広い鍔をもつ。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　斜め方向のハケ目調整。体部外面　ヘラ削り調整。	色調　暗灰色。羽釜形タイプ：羽釜形B系列ⅡC類。15ｃ中頃。
123	7区　包含層（第3～4層）中	瓦質土器	羽釜	口縁部はほぼ直立。口縁部外面に凹線２条。口縁部外面に断面台形状の幅の広い鍔を貼り付け。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　板ナデ調整。	色調　黒色。羽釜形タイプ：羽釜形B系列ⅢA類。15ｃ後半～16ｃ初頭。
124	7区　包含層（第3～4層）中	瓦質土器	鍋	体部は内彎。口縁部は内傾。口縁部外面に断面台形状の幅の広い鍔を貼り付ける。口縁部外面に凹線３条。鋳造の鉄製羽釜を模倣。口縁部外面に穿孔2箇所。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　斜め方向のハケ目調整。体部外面　ヘラ削り調整。	色調　暗灰色。羽釜形タイプ：羽釜形B系列ⅡC類。15ｃ中頃。
125	7区　包含層（第3～4層）中	瓦質土器	羽釜	体部は内彎。口縁部は内傾。口縁部外面に断面台形状の幅の広い鍔を貼り付ける。口縁部外面に凹線３条。鋳造の鉄製羽釜を模倣。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。口縁部～体部内面　ハケ目調整。体部外面　ヘラ削り調整。	色調　黒灰色。羽釜形タイプ：羽釜形B系列ⅡB類。15ｃ前半。
126	7区　包含層（第3～4層）中	無釉陶器	擂鉢	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張し、縁帯を形成する。	体部内面に７条１単位の擂目を施文した後、体部内面上部に８条１単位の斜め方向の擂目を施文。内・外面回転ナデ調整。底部外面未調整。	全体のつくりは粗い。備前焼擂鉢ⅣA類。15ｃ前半～中頃。
127	7区　包含層（第3～4層）中	施釉陶器	水滴	平底。体部は大きく内彎。口縁部はほぼ直立。体部中央に把手・注口部を貼付る。把手は欠損。底部中央部は後から粘土を充填。	外面の口縁部下に竹管文を巡らせる。外面の体部中央に櫛描き文施文。外面の口縁部～体部に鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。内面及び底部外面は露胎。	瀬戸・美濃系。鉄釉水滴。中Ⅳ期。14ｃ中頃。
128	7区　包含層（第3～4層）中	青磁	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く比較的高い。	底部内面に印花で草花文施文。内外面とも施釉。明オリーブ灰色に発色。高台畳付まで施釉。高台裏　露胎。	龍泉窯系青磁。14ｃ後半～15ｃ代。
129	7区　包含層（第1層）中	土師器	皿	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内・外面共、回転ナデ調整。底部外面未調整。糸切痕が残る。	色調は淡赤褐色。轆轤使用。ⅢA類。17ｃ中葉～18ｃ前半。
130	7区　包含層（第1層）中	土製品	ミニチュア灯籠	両型作り。中央部に貼り合わせ痕。	台座には蓮弁文施文。彩色は全て剥落。	色調　橙色。
131	8区　SK03	土師器	焙烙	丸底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は内傾。口縁端部は丸味をもつ。	底部を型作りし、体部～口縁部は粘土紐巻上げ成形（底型作り）。底部内面は丁寧なナデ調整。内面～体部外面　ヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	外面　煤附着。色調　明赤褐色。焙烙形ⅣB類。18ｃ前半。
132	8区　SK05	無釉陶器	壷（蓋口壷）	平底。体部は、大きく内彎。頭部はほぼ直立。口縁部外反。口縁部の一端をひねって注口を形成する。	体部外面ヘラ削り調整。外面鉄泥漿塗布。口縁部内面～体部外面胡麻状に灰被り。	備前焼。15ｃ後半～16ｃ前半。
133	8区　SK05	青磁	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的幅が広く、高い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	外面　広形蓮弁文を施文。底部内面　界線１条・草花文を印花で施文。内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。底部外面　蛇ノ目状釉ハギ。	龍泉窯系青磁蓮弁文碗。15ｃ代。
134	8区　SK05	青磁	碗	体部は僅かに内彎。口縁端部は丸味をもつ。	外面にヘラ状工具でくずれた雷文帯施文。内外面とも青磁釉施釉。明オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁雷文帯碗。C類。～15ｃ代。
135	8区　SK05	石製品	硯	平面形状は長方形。楕円形の海部をもつ。海部は比較的深い。	海部には擦痕が著しく認められる。側面、裏面にも擦痕が認められる。	色調　暗灰色。
136	8区　包含層（第1～2層）中	土師器	鍋	丸底。体部はほぼ直立。口縁部下に断面三角形状の鍔貼付け。口縁部はほぼ直立、口縁端部を外方につまみ出す。	内面～口縁部外面横ナデ調整。口縁部内外面強い横ナデ調整。体部外面斜め方向の平行叩目。	羽釜形タイプ：播磨型A系列ⅠA類。15ｃ前半。
137	8区　包含層（第1～2層）中	無釉陶器	甕	口縁部は上下に肥厚。楕円形状を呈する。口縁部外面　　凝凹線２条。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　暗赤灰色。備前焼甕Ⅴ類。15ｃ後半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
138	8区　包含層（第1～2層）中	青磁	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的幅が広い。	内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。高台畳付まで施釉。底部外面は蛇ノ目状釉ハギ。釉のノリは非常に悪い。	龍泉窯系青磁碗。15ｃ代。
139	8区　包含層（第1～2層）中	石製品	硯	平面形状は長方形。楕円形の海部をもつ。海部は使用により深く抉られる。	海部には擦痕が著しく認められる。	色調　浅黄橙色。
140	8区　包含層（第1～2層）中	土師器	鍋	平底。体部はほぼ直立。口縁端部は斜め方向に端面をもつ。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　粗い格子目状叩き目。	外面に煤附着。色調　にぶい黄橙色。羽釜形タイプ：播磨型Ⅲ類。16ｃ末～17ｃ前葉。
141	8区　包含層（第1～2層）中	土師器	鍋	体部はほぼ直立。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹部をもつ。体部外面　粗い格子目状叩き目。	外面に煤附着。色調　にぶい黄橙色。羽釜形タイプ：播磨型Ⅲ類。16ｃ末～17ｃ前葉。
142	8区　包含層（第1～2層）中	土師器	鍋	平底。体部はほぼ直立。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　粗い格子目状叩き目。	外面に煤附着。色調　にぶい黄橙色。羽釜形タイプ：播磨型Ⅲ類。16ｃ末～17ｃ前葉。
143	8区　包含層（第1～2層）中	土師器	鍋	平底。体部はほぼ直立。口縁端部は斜め方向に端面をもつ。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　粗い格子目状叩き目。	外面に煤附着。色調　にぶい黄橙色。羽釜形タイプ：播磨型Ⅲ類。16ｃ末～17ｃ前葉。
144	8区　包含層（第1～2層）中	施釉陶器	天目茶碗	畳付の幅が比較的広い内反り高台。体部は僅かに内彎して、斜め上方に延びる。口縁部は屈曲して、端部は僅かに外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。器壁は全体に厚い。	内面～体部外面下半鉄釉施釉。茶褐色に発色。外面の体部下半（高台脇）以下露胎。露胎部ヘラ削り痕。	瀬戸・美濃系。大窯Ⅴ期。16ｃ末～17ｃ初頭。
145	8区　包含層（第1～2層）中	施釉陶器	皿	底部の器壁は比較的厚い。高台は低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は細かいひだをもつ。	内外面とも灰釉施釉。浅黄緑色に発色。底部内面　円形に釉掻き取り。底部外面　輪トチ痕。	瀬戸・美濃系。黄瀬戸灰釉ひだ皿。大窯Ⅲ期。16ｃ後半。
146	8区　包含層（攪乱層）中	無釉陶器	甕	体部は内彎。口縁部は水平方向に拡張。口縁部上面に凹線３条。	内外面ともヨコナデ調整。体部外面に凹線19条。体部外面　環状の耳貼り付け。	色調　褐灰色。丹波焼。甕ⅦA類。17ｃ中葉～後葉。
147	9区　SK01	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方に折り曲げ玉縁状に肥厚。	内面に９条１単位の擂目施文。内外面とも鉄泥漿塗布。赤褐色に発色。	産地不明。
148	9区　SK02	土師器	皿	平底。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。体部外面下半　横方向のヘラ削り痕。底部外面　未調整　糸切り痕。	口縁部に煤附着－灯明皿として使用。轆轤使用。色調　にぶい橙色。
149	9区 SK03	土製品	人形	型作り成形。両型作り。中央部に貼り合わせ痕。	焼成は堅緻。彩色は全て剥落。	色調　橙色。尾をつかみ、猪に跨る人物像。
150	9区 SK05	施釉陶器	皿	高台は粗く、浅く削り出す。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内外面とも灰釉施釉。オリーブ黒色に発色。高台脇以下露胎。	肥前系　唐津。Ⅰ-2～Ⅱ期。16ｃ末～17ｃ前半。
151	9区 SK07	土師器	皿	器壁は比較的厚い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	口縁部に煤附着－灯明皿として使用。轆轤未使用。色調　灰白色。ⅢB類。17ｃ中葉～18c前半。
152	9区　SK08	施釉陶器	皿	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的幅が広く、低い。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がり中位で屈曲する。口縁部は外方に水平に折り曲げる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部内面に浅い凹線1条。	内外面とも施釉。灰白色に発色。底部内面　砂目跡　５箇所。高台畳付　砂目跡　5箇所。	肥前系。唐津。溝縁皿。Ⅱ期。17ｃ前半。
153	9区　SK08	施釉陶器	皿	幅が広く低い三日月高台を、浅く削り出す。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がり、体部中位で内側に屈曲、口縁部は外反する。口縁部内面に凹部をもつ。内面の底部と体部の界に凹部をもつ。	内外面とも灰釉施釉。明褐色に発色。一部釉が溶けず、白濁、高台畳付は露胎。底部内面　砂目痕　2箇所。	肥前系。唐津。溝縁皿。Ⅱ期。17ｃ前半。
154	9区 SK10	土師器	皿	器壁は全体に非常に厚い。平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。	内外面に煤附着－灯明皿として使用。轆轤使用。色調　浅黄橙色。近世。
155	9区 SK10	土師器	皿	底部の器壁は非常に厚い。平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。	轆轤使用。色調　浅黄橙色。ⅢA類。17ｃ中葉～18ｃ代。
156	9区　SK10	土師器	鍋	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状で内側に肥厚。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹部をもつ。体部外面　斜め方向の平行叩き目。	外面に煤附着。色調　にぶい橙色。鍋形タイプ：鉄かぶと形Ⅰ類。15ｃ前半。
157	9区 SK10	施釉陶器	皿	底部は碁笥底風に浅く削り出す。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも灰釉施釉。浅黄色に発色。底部内面円形に釉掻き取り。	瀬戸・美濃系　灰釉丸皿。大窯Ⅲ期。16ｃ後半。
158	9区 SK10	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。	色調　にぶい橙色。
159	9区 SK10	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。	色調　橙色。
160	9区 SK10	土製品	ミニチュア羽釜	型作り成形。丸底。断面台形状の鍔をもつ。頸部～口縁部　直立。	外面　ナデ調整。	鉄製の羽釜写し。色調　橙色。
161	9区 SK10	施釉陶器	面子	平底。	内面　灰釉施釉。淡黄緑色に発色。外面　露胎。糸切り痕。	瀬戸・美濃系灰釉陶器。
162	9区 SK11	土師器	皿	ややあげ底気味の平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	口縁部に煤附着－灯明皿として使用。轆轤未使用。色調　橙色。ⅢA類。17ｃ中葉～18ｃ前半。
163	9区 SK11	施釉陶器	椀	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的幅が広く高い。高台裏にトキンが残る。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも灰釉施釉。灰白色に発色。底部外面（高台裏　露胎）	肥前系。唐津。Ⅱ期。17ｃ前半。
164	9区　包含層（第１層）中	土師器	皿	器壁は厚い。平底。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。	轆轤使用。色調　にぶい黄橙色。器面は摩滅。ⅢA類。17ｃ中葉～18ｃ前半。
165	9区　包含層（第１層）中	土師器	皿	平底。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。	轆轤使用。色調　浅黄橙色。ⅢB類。17ｃ中葉～18c前半。
166	9区　包含層（第１層）中	土師器	皿	平底。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。	口縁部に煤附着－灯明皿として使用。轆轤使用。色調　浅黄橙色。ⅢB2類。17ｃ中葉～18ｃ代。
167	9区　包含層（第１層）中	土師器	皿	平底。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。	口縁部に煤附着－灯明皿として使用。轆轤使用。色調　にぶい黄橙色。器面は摩滅。
168	9区　包含層（第１層）中	土師器	皿	器壁は全体に厚い。平底。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部内面　ナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。	内外面とも全面に煤附着。色調　黒褐色。轆轤使用。Ⅳ類。18c後半以降。
169	9区　包含層（第１層）中	土師器	皿	平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	口縁部に煤附着－灯明皿として使用。轆轤未使用。色調　灰白色。
170	9区　包含層（第１層）中	土師器	皿	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。内面　透明釉施釉。黄橙色に発色。	轆轤使用。いわゆる柿釉の灯明皿。Ⅴ類。18ｃ末。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
171	9区　包含層（第1層）中	土師器	焙烙	底型作り。平底。体部は内傾して斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。体部外面に2箇所ずつ、計4箇所穿孔。孔は貫通していない。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	外面に煤附着。色調　橙色。焙烙形Ⅳ A類。17ｃ中葉～後半。
172	9区　包含層（第1層）中	土師器	焙烙	底型作り。平底。体部は内傾して斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　丁寧なナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	外面に煤附着。色調　橙色。焙烙形Ⅳ A類。17ｃ中葉～後半。
173	9区　包含層（第1層）中	瓦質土器	風炉	体部内彎。口縁部直立。口縁部上面は水平の端面をもつ。口縁端部は若干外方につまみ出す。	内外面とも丁寧なミガキ調整。器面は平滑。口縁部外面に型押しにより、草花文、剣頭文施文。	色調　暗青灰色。風炉Ⅱ。15ｃ前半。
174	9区　包含層（第1層）中	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張、楕円形形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　暗赤褐色。備前焼甕Ⅳ類。15ｃ前半。
175	9区　包含層（第1層）中	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張、楕円形形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。外面に凹線３条。外面　赤塗部を塗布。	色調　暗赤褐色。備前焼甕Ⅵ類。16ｃ～17ｃ前半。
176	9区　包含層（第1層）中	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張、楕円形形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　暗赤褐色。備前焼甕Ⅳ類。15ｃ前半。
177	9区　包含層（第1層）中	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張、楕円形形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。外面　凹線３条。外面　灰被り。	色調　暗赤褐色。備前焼甕Ⅵ類。16ｃ～17ｃ前半。
178	9区　包含層（第1層）中	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁部外面に凹線２条。片口をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　縦方向に10条１単位の擂目施文の後、斜め方向に10条１単位の擂目施文。口縁部外面　灰被り。	色調　暗赤褐色。備前焼Ⅶ類。16ｃ末。
179	9区　包含層（第1層）中	無釉陶器	擂鉢	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部外面　凹線２条。口縁部上面　沈線１条。体部内面　９条１単位の擂目施文。	色調　赤褐色。堺産擂鉢。18ｃ前半。
180	9区　包含層（第1層）中	土師器	皿	平底。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。	口縁部に煤附着－灯明皿として使用。轆轤使用。色調　淡黄色。ⅢB類。17ｃ中葉～18ｃ代。
181	9区　包含層（第1層）中	無釉陶器	盤	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味を帯びる。	内外面ともヨコナデ調整。内外面　灰被り。体部外面に叩き目か。	色調　にぶい橙色。丹波焼。16ｃ後葉～17ｃ前半。
182	9区　包含層（第1層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は断面三角形状を呈する。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面ともヨコナデ調整。内面　灰被り。体部内面　７条1単位の擂目施文。内面の体部と口縁部の界　低い段をもつ。	色調　灰褐色。丹波焼。
183	9区　包含層（第1層）中	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は上方につまみ上げる。	内面～体部外面上半　ヨコナデ調整。体部外面下半　指頭圧痕、ハケ目調整。	焼成はややあまい。色調　橙色。丹波焼。ⅠB1類。16ｃ後葉～17ｃ中頃。
184	9区　包含層（第1層）中	無釉陶器	擂鉢	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁部外面に沈線２条。片口をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。体部外面下半ヘラ削り調整。体部内面　８条１単位の擂目施文。	胎土中に砂粒を多く含む。色調　にぶい橙色。丹波焼。ⅢA類。17ｃ後半～18ｃ前半。
185	9区　包含層（第1層）中	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は直立。口縁端部は内側につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内面に凹部をもつ。体部内面　８条１単位の擂目施文。外面に鉄泥漿塗布。	胎土中に砂粒を多く含む。色調　灰褐色。丹波系。
186	9区　包含層（第1層）中	施釉陶器	皿	底部の器壁は非常に厚い。高台は浅く削り出す。高台裏にトキンが残る。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がり、体部中位で内側に屈曲、口縁端部は上方に若干つまみ出す。	内面の底部と体部の界に段をもつ。内外面とも灰釉施釉。にぶい灰白色に発色。外面の体部下半以下露胎。全面に煤附着。	肥前系。唐津。Ⅰ-2期～Ⅱ期。16ｃ末～17ｃ前半。
187	9区　包含層（第1層）中	施釉陶器	皿	幅が広く比較的高い高台を粗く削り出す。竹節高台。高台裏には兎巾が明瞭に残る。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がり、体部下位でやや屈曲、口縁端部は上方につまみ出す。	底部の器壁は非常に厚い。内面の底部と体部の界に段をもつ。内外面とも施釉。灰を被り、白濁した橙色に発色。外面の体部下半以下　露胎。露胎部　灰赤色に発色。	肥前系。唐津。Ⅰ-2期～Ⅱ期。16ｃ末～17ｃ前半。
188	9区　包含層（第1層）中	施釉陶器	皿	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く低い削りだし高台。底部と体部の界は屈曲、体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外反。口縁部上面に凹線１条。	内外面とも施釉。暗黄灰色に発色。外面の体部下半以下露胎。底部内面　砂目跡　３箇所。高台裏にトキンが残る。	肥前系。唐津。溝縁皿。Ⅱ期。17ｃ前半。
189	9区　包含層（第1層）中	施釉陶器	椀	高台は細く高い。	内外面とも灰釉施釉。浅黄色に発色。	瀬戸・美濃系。近世。
190	9区　包含層（第1層）中	施釉陶器	椀	高台は細く高い。	内外面とも灰釉施釉。浅黄色に発色。	瀬戸・美濃系。近世。
191	9区　包含層（第1層）中	白磁	皿	体部は内彎。口縁部は外反。	体部内面　ヘラ彫で草花文施文。内外面とも青味を帯びた白色に発色。	華南産白磁。白磁B群。14ｃ代。
192	9区　包含層（第1層）中	白磁	碗	高台は幅が広く比較的低い。	内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた灰白色に発色。	華南産白磁。
193	9区　包含層（第1層）中	青磁	香炉	体部はほぼ直立。口縁部は内側に水平に折り曲げる。口縁端部は丸味をもつ。	外面　型押しで算木文？施文。外面　青磁釉施釉。暗オリーブ色に発色。内面　露胎。にぶい橙色に発色。	三田青磁。19ｃ前半。
194	9区　包含層（第1層）中	染付磁器	皿	高台は細く低い。底部は饅頭心風。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　界線１条　「□化？□製」銘。	明青花。16ｃ代。
195	9区　包含層（第1層）中	染付磁器	皿	器壁は薄い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　界線２条・草花文。内面　界線2条・草花文。	比較的優品。明青花。16ｃ後半～17ｃ初頭。
196	9区　包含層（第1層）中	染付磁器	皿	高台は比較的幅が広く、低い。底部の器壁は比較的厚い。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	高台裏は露胎。色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　草花文　界線１条。内面　界線１条草花文。高台畳付に砂附着。	漳州窯系か。17前半。
197	9区　包含層（第1層）中	染付磁器	皿	口径に対し高台径が小さい。高台は比較的幅が広く、低い。体部は緩やかに斜め上方に延び、体部上位で外方に屈曲、口縁部は外反する。口縁端部は丸味をもつ。	色調　灰白色。文様　外面　無文。内面　やや淡い呉須で草花文施文。高台畳付に砂附着。	肥前系。Ⅱ期。17ｃ前半～中頃。
198	9区　包含層（第1層）中	染付磁器	杯	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的幅が広く低い。高台裏にトキンが残る。体部は直線的に斜め上方にのびる。口縁端部は丸味をもつ。	体部外面に5本単位にヘラ状工具で縦線を施文。内外面とも施釉。外面の体部下半（高台脇）以下露胎。色調　灰白色。文様　内面　無文。外面　淡い呉須で寿字文。	肥前系。Ⅱ期。17ｃ前半。
199	9区　包含層（第1層）中	石製品	石鍋	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部外面に断面三角形状の小さい鍔をもつ。	口縁部・体部外面に成形時のノミ痕。	体部外面に煤附着。滑石製。
200	9区　包含層（第1層）中	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	外面　ヘラ及び指でナデ調整。器面に凹みあり。	焼成は非常に堅緻。色調　灰赤褐色。備前焼か？。
201	9区　包含層（第1層）中	土製品	人形	型作り成形。両型作り。中央部に貼り合わせ痕。	彩色は全て剥落。人物の顔部分欠落。	騎馬人物像。色調　にぶい橙色。
202	9区　包含層（第1層）中	土製品	船形	中央部で欠損。屋形部分は型作り成形。	舟の上に型作りの屋形部分を貼り付け。彩色は全て剥落。	色調　浅黄橙色。屋形船か。
203	9区　包含層（第1層）中	瓦	軒丸瓦	巴文軒丸瓦。巴の尾は比較的短い。残存珠文数7。推定珠文数　12。	内外面とも板ナデ調整。	焼成不良。色調　にぶい褐色。
204	9区　包含層（第1層）中	瓦	軒平瓦	変形唐草文軒平瓦。	外面　ナデ調整。内面　板ナデ調整。	色調　灰黄色。焼成はややあまい。
205	9区　包含層（第1層）中	瓦	丸瓦	半円形。	外面　縦方向のヘラナデ調整。内面　横方向のヘラ削り。	色調　暗灰色。
206	10区　SX02	土師器	皿	器形は全体歪む。平底。全体は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁端部は尖り気味。	内・外面横ナデ調整。一部に指頭痕が残る。	色調は淡黄褐色。轆轤未使用。ⅡA5a類。16c中葉～後半。
207	10区　SX02	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部は尖り気味。口縁部外面　凹線２条。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　縦方向に８条１単位の擂目施文の後、斜め方向の擂目施文。	色調　暗赤褐色。備前焼擂鉢ⅧA類。17ｃ初頭。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
208	10区　SX02	青磁	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的幅が広く低い。	かすかに蓮弁文が残る。内外面とも青磁釉施釉。明緑灰色に発色。高台畳付まで施釉。底部外面は釉掻き取り。釉のノリは悪い。	龍泉窯系青磁蓮弁文碗。14c後半～15c代。
209	10区　SX02	染付磁器	Ⅲ	器壁は比較的薄い。高台は細く低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　界線1・1条。底部外面　□印。内面　界線1条・界線2条・不明文。	明青花。16ｃ後半～17ｃ初頭。
210	10区　包含層中	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。	色調　浅黄橙色。轆轤使用。ⅢB類。17ｃ中葉～18c前半。
211	10区　包含層中	瓦質土器	羽釜	体部は内彎。口縁部は内傾。口縁部上面は水平に端面をもつ。口縁部外面に断面台形状の幅の広い鍔を貼り付ける。口縁部外面　凹線3条。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面　板ナデ調整。体部外面　ヘラ削り調整。	色調　暗灰色。羽釜形タイプ：羽釜形B系列ⅡC類。15ｃ中頃。
212	10区　包含層中	土師器	鍋	体部は僅かに内傾。口縁端部は上面に端面をもつ。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。一部縦方向のナデ。体部外面　粗い格子目状叩き目。	外面に煤附着。色調　褐灰色。羽釜形タイプ：播磨型Ⅲ類。16ｃ末～17ｃ前葉。
213	10区　包含層中	無釉陶器	壷	体部外面に横耳貼り付け。頸部は短く直立する。口縁部は玉縁状に肥厚する。	内外面ともヨコナデ調整。外面　胡麻状に灰被り。	色調　にぶい赤褐色。備前焼。
214	11区　SX07	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅢD1類。16c末葉～17c前葉。
215	11区　SX07	染付磁器	Ⅲ	器壁は比較的薄い。高台は細い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は外反。口縁端部は丸味をもつ。口縁部は型押しにより八角形に成形。	色調　やや青味を帯びた白色。文様　内面　細かい草花文？・界線2条・魚文。外面　無文。底部外面　界線2条・「天文」銘。器面に虫喰いが目立つ。	明青花。16ｃ後半～17ｃ初頭。
216	11区　SX10	瓦	平瓦	平瓦。やや彎曲。	外面　縦・横方向のナデ調整。内面　不定方向のナデ調整。	色調　黒灰色。燻し瓦。
217	11区　SX12	土師器	Ⅲ	器壁は比較的厚い。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に浅い凹部をもつ。体部内面　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
218	11区　SX12	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部は丸味をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　櫛状工具で擂目施文。	色調　にぶい赤褐色。備前焼擂鉢ⅤA類。15ｃ後半。
219	11区　SX12	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。器面は使用により摩滅。	色調　灰白色。
220	11区　SK01	土師器	鍋	体部・口縁部とも直立。口縁部外面に断面三角形状の短い鍔を貼り付け。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　平行叩き目。	色調　橙色。羽釜形タイプ：播磨型A系列ⅠA類。15ｃ前半。。
221	11区　SK01	青磁	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的幅広で高い。	底部内面に浅い沈線が1条。内・外面共青磁釉。高台脇・畳付・高台の内側面迄施釉。高台裏の釉のみカキ取る。	龍泉窯系青磁蓮弁文碗。14c後半～15c代。
222	11区　SK13	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面下半～底部　指オサエ・ナデ調整の後、板状工具によるナデ調整。指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
223	11区　SK13	白磁	Ⅲ	口縁端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた灰白色に発色。口縁部の釉掻き取り（口禿）。	華南産白磁。白磁ⅢⅨ類。13ｃ後半～14ｃ前半。
224	11区　SD05	無釉陶器	壷	体部は僅かに内彎。頸部は短く直立。口縁端部は丸味をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。外面　鉄泥漿塗布。	色調　にぶい赤褐色。丹波焼。壷Ⅲ類。17ｃ代。
225	11区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	器形は大きく歪む。器壁は比較的厚い。平底。体部は短く斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
226	11区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	口縁部は大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。底部内面　一方向のナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
227	11区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。粗製。
228	11区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。粗製。
229	11区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。口縁端部は丸味をもつ。	内面から体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。内面の底部と体部の界　凹線1条。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
230	11区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	ややあげ底気味の平底。底部と体部の界は大きく屈曲。口縁端部は丸味をもつ。	内面から体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。内面の底部と体部の界　凹線1条。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
231	11区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	器形は大きく歪む。器壁は比較的厚い。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面から体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。粗製。
232	11区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	器形は大きく歪む。器壁は比較的厚い。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面から体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。粗製。
233	11区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
234	11区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　灰黄褐色。轆轤未使用。
235	11区　包含層（第1層）	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。外面の体部下半～底部　ヘラ削り調整。底部外面　未調整　糸切り痕。	口縁部に煤附着－灯明皿として使用。轆轤使用。色調　にぶい橙色。近世。
236	11区　包含層（第1層）	無釉陶器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。口縁部上面に小さい把手を貼り付け。	内面～口縁部外面　回転ナデ調整。体部外面回転ヘラ削り。底部内面　一方向のナデ調整。内面～口縁部外面　鉄泥漿塗布。	色調　茶褐色。備前焼灯明皿。
237	11区　包含層（第1層）	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	口縁部内外面一面に煤附着－灯明皿として使用。色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
238	11区　包含層（第1層）	施釉陶器	Ⅲ	底部の器壁は非常に厚い。高台は浅く、低く削り出す。平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも灰釉施釉。オリーブ灰色に発色。器面に貫入。底部外面に重ね焼痕2箇所。	瀬戸・美濃系。灰釉丸皿。大窯Ⅲ期。16ｃ後半。
239	11区　包含層（第1層）	土師器	焙烙	型作り成形。底型作り。平底。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　多方向のナデ調整。	器面の摩滅が著しい。色調　橙色。焙烙形ⅣB類。18ｃ前半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
240	11区　包含層（第1層）	無釉陶器	盤	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は外方に折り曲げる。口縁部内面　凹線１条。内面の体部と口縁の界に段をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。内外面とも若干胡麻状に灰被り。	色調　暗赤褐色。丹波焼。16ｃ後葉～17ｃ前半。
241	11区　包含層（第2～3層）中	土師器	鍋	体部内彎。口縁部内傾。口縁端部　上方につまみ上げる。口縁部外面に断面三角形状の短い鍔を貼り付け。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調製。体部外面　斜め方向の平行叩き目。	外面に煤附着。器面の摩滅が著しい。色調　にぶい灰褐色。羽釜形タイプ：播磨型A系列ⅠB類。15ｃ中頃。
242	11区　包含層（第2～3層）中	土師器	鍋	体部はほぼ直立。口縁部はほぼ直立。口縁部外面にナデにより段状の鍔を作り出す。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調製。体部外面・指頭圧痕・斜め方向の平行叩き目。	色調　赤灰色。羽釜形タイプ：播磨型AⅠC類。15ｃ後半～16ｃ初頭。。
243	11区　包含層（第2～3層）中	瓦器	椀	高台は断面三角形状で細く、低い。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁部外面に凹線１条。	体部内面　粗い平行ミガキ。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　黒灰色。和泉型瓦器椀Ⅲ-3期。13ｃ前半。
244	11区　包含層（第2～3層）中	瓦器	椀	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面横方向の暗文。体部外面下半　指頭圧痕。	色調　黒灰色。和泉型瓦器椀Ⅲ期。13ｃ前半。
245	11区　包含層（第2～3層）中	瓦器	椀	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面横方向の暗文。体部外面　指頭圧痕。	色調　暗灰色。和泉型瓦器椀Ⅲ期。13ｃ前半。
246	11区　包含層（第2～3層）中	瓦質土器	火鉢	体部は内彎。口縁部は内傾。口縁部上面は水平に端面をもつ。	内外面ともミガキ調整。器面は平滑。	色調　暗灰色。奈良火鉢。浅鉢Ⅳ。15ｃ前半。
247	11区　包含層（第2～3層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は斜め方向に切る。口縁端部は斜め下方につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　9条１単位の擂目施文。	色調　灰赤色。備前焼擂鉢ⅢC類。14ｃ後半～15ｃ初頭。
248	11区　包含層（第2～3層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は斜め方向に切り、下端は外方につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　櫛状工具で擂目施文。	備前焼擂鉢ⅣB類。15ｃ前半～中頃。
249	11区　包含層（第2～3層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は斜め方向に切る。口縁端部は外側、内側に僅かにつまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　9条１単位の擂目施文。	色調　灰赤色。備前焼擂鉢ⅢC類。14ｃ後半～15ｃ初頭。
250	11区　包含層（第2～3層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。	内外面ともヨコナデ調整。体部外面　ヨコナデの後、縦方向のナデ調整。体部内面　7条１単位の擂目を縦方向に施文した後、５条1単位の擂目を斜め方向に施文。	色調　にぶい赤褐色。備前焼擂鉢ⅣB類。15ｃ前半～中頃。
251	11区　包含層（第2～3層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、縁帯を作る。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　9条１単位の擂目施文。口縁部外面～内面　胡麻状に灰被り。	色調　にぶい赤褐色。備前焼擂鉢ⅣA類。15ｃ前半～中頃。
252	11区　包含層（第2～3層）中	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁部外面に凝凹線。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　9条１単位の擂目施文。	色調　暗赤褐色。備前焼擂鉢Ⅵ類。16ｃ代。
253	11区　包含層（第2～3層）中	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　櫛状工具で擂目施文。口縁部外面　凹線？1条。口縁部外面　僅かに灰被り。	色調　暗赤褐色。備前焼擂鉢Ⅶ類。16ｃ末。
254	11区　包含層（第2～3層）中	無釉陶器	鉢	口縁端部は外方につまみ出す。片口をもつ？。	内外面とも回転ナデ調整。内面　胡麻状に灰被り。	色調　暗赤褐色。備前焼。
255	11区　包含層（第2～3層）中	無釉陶器	甕	頸部は外傾。口縁部は若干上下に拡張。短い楕円形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。	焼成は堅緻。色調　暗褐色。備前焼甕ⅢA類。14ｃ代。
256	11区　包含層（第2～3層）中	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張、楕円形状を呈する。	口縁部外面凹線３条。内・外面共赤塗部を塗布。	色調　暗赤褐色。備前焼甕Ⅵ類。16ｃ～17ｃ前半。
257	11区　包含層（第2～3層）中	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張、楕円形形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　暗赤褐色。備前焼擂鉢Ⅳ類。15ｃ前半。
258	11区　包含層（第2～3層）中	施釉陶器	皿	体部は僅かに内彎。口縁端部は上方につまみ上げる。	内面　ヘラ描きで卸し目施文。内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。	瀬戸・美濃系。灰釉陶器卸皿。中Ⅲ期。14ｃ前半。
259	11区　包含層（第2～3層）中	白磁	碗	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部外方につまみ出す。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	華南産白磁。白磁碗Ⅴ－4類。12ｃ後半～13ｃ前半。
260	11区　包含層（第2～3層）中	青磁	碗	底部の器壁は厚い。高台は幅が広く低い。	高台畳付まで青磁釉施釉。明緑灰色に発色。高台裏は中央部を残して輪状に釉を掻き取る。	龍泉窯系青磁碗。15ｃ代。面子として再利用か？。
261	11区　包含層（第2～3層）中	白磁	碗	底部の器壁は厚い。高台は浅く削り出す。	底部内面　凹線１条。内面　透明釉施釉。灰白色に発色。外面　露胎。	華南産白磁。白磁碗Ⅳ-1類。12ｃ後半～13ｃ前半。
262	11区　包含層（第2～3層）中	白磁	皿	高台は断面三角形状を呈する。体部は内彎して斜め上方に延びる。口縁部は外反。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。白色に発色。高台畳付の釉　丁寧に掻き取り。	華南産白磁。白磁E群。16ｃ代。
263	11区　包含層（第2～3層）中	白磁	皿	体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は外反。口縁部は輪花状に整形。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。外面の体部下半以下露胎。器面に気泡（虫喰い）が目立つ。	焼成はややあまい。華南産白磁。白磁ⅢV類。12ｃ後半～13ｃ前半。
264	11区　包含層（第2～3層）中	青磁	碗	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面　鏑のある蓮弁文を片切り彫で施文。内外面とも青磁釉施釉。明青緑色に発色。	龍泉窯系青磁蓮弁文碗。Ⅱ類。13ｃ前半。～中頃。
265	11区　包含層（第2～3層）中	青磁	碗	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	体部外面　線描きの蓮弁文施文。内外面とも青磁釉施釉。灰白色に発色。器面に貫入が入る。	龍泉窯系青磁蓮弁文碗。BⅣ類。15ｃ後半～16ｃ前半。
266	11区　包含層（第2～3層）中	青磁	鉢	平底。高台は幅が広く、低い。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。	高台畳付まで青磁釉施釉。オリーブ色に発色。高台裏は露胎。露胎部は茶褐色に発色。	龍泉窯系青磁。
267	11区　包含層（第2～3層）中	染付磁器	碗	器壁は薄い。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　界線２条・梅花文。内面　界線２条。	明青花。16ｃ代。
268	11区　包含層（第2～3層）中	染付磁器	皿	底部の器壁は厚い。碁笥底。	色調　黄色味を帯びた灰白色。文様　内面　界線２条　草花文。外面　幾何学文？。	明青花。16ｃ代。
269	11区　包含層（第2～3層）中	染付磁器	碗	高台は細く低い。	色調　青味を帯びた白色。文様　内面　界線２条・雲龍文。外面　草花文・界線１条。	明青花。16ｃ代。
270	11区　包含層（第2～3層）中	染付磁器	杯	器壁は非常に薄い。口縁部外反。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　草花文。内面　界線１条。	明青花。16ｃ後半～17ｃ初頭。
271	11区　包含層（第2～3層）中	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。器面の摩滅が著しく平滑。	色調　にぶい橙色。
272	11区　包含層（第2～3層）中	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	表面ナデ調整。器面の剥落が著しい。	色調　にぶい橙色。胎土中砂粒を含む。
273	11区　包含層（第2～3層）中	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。器面の摩滅が著しい。	色調　にぶい橙色。
274	11区　包含層（第2～3層）中	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。器面の摩滅が著しい。先端部欠損。	色調　橙色。
275	11区　包含層（第2～3層）中	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	表面ナデ調整。器面は平滑。	色調　淡橙色。
276	11区　包含層（第2～3層）中	土製品	面子（転用）	無釉陶器片の縁辺を打ち欠いて成形。	器面は摩滅が著しい。	色調　浅黄橙色。原体は無釉陶器（丹波焼）甕か？。
277	11区　包含層（第2～3層）中	土製品	面子	土師器片の縁辺を打ち欠いて円形に成形。	外面　摩滅が著しい。	色調　にぶい橙色。原体は土師器鍋か。
278	11区　包含層（第2～3層）中	石製品	硯	海部は非常に浅い。	裏面に文字線刻。	色調　にぶい赤褐色。
279	11区　包含層（第2～3層）中	瓦	軒平瓦	唐草文軒丸瓦片。	内外面ともナデ調整。器面の摩滅が著しい。	色調　暗灰色。燻し瓦。
280	11区　包含層（第2～3層）中	瓦	軒平瓦	唐草文軒丸瓦片。	内外面ともヨコナデ調整。器面の摩滅が著しい。	色調　暗灰色。燻し瓦。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
281	11区　包含層（第1層）中	青磁	碗	底部の器壁は比較的厚い。高台は幅が広く比較的高い。体部は僅かに内彎。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。高台畳付の釉掻き取り。	肥前系。
282	12区　SE02	土師器	Ⅲ	円盤状の底部に粘土紐を巻き付けて体部～口縁部を成形。平底。体部は底部から大きく屈曲して、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面横ナデ調整。口縁部内・外面強い横ナデ調整。外面の体部～底部指頭圧痕。	色調は淡黄褐色。轆轤未使用。ⅣB2類。14c後半。
283	12区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	円盤状の底部に、体部は粘土紐を巻き上げて成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面回転ナデ調整。底部外面未調整。ヘラ切り痕が残る。	色調は淡黄褐色。轆轤使用。形態・成形技法が須恵器Ⅲに類似。Ⅰ類。12ｃ後半～13ｃ前半。
284	12区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	円盤状の底部に、体部は粘土紐を巻き上げて成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面回転ナデ調整。底部外面未調整。糸切り痕が残る。	色調は淡黄灰色に発色。轆轤使用。形態・成形技法が須恵器Ⅲに類似。Ⅰ類。12ｃ後半～13ｃ前半。
285	12区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	全体に器形は歪む。器壁は全体に厚い。平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面横ナデ調整。外面の体部下半～底部指頭による調整。	色調は暗黄灰色。轆轤未使用。ⅡA1a類。12c中頃～13c中頃。
286	12区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	器形は全体にやや歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面横ナデ調整。口縁部内・外面強い横ナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調は暗黄灰色。轆轤未使用。ⅡA1a類。12c中頃～13c中頃。
287	12区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	器壁は全体的に比較的厚い。平底。体部は短く斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面横ナデ調整。体部外面に板状工具平行条痕あり。	色調は全体に煤が附着して、暗灰色を呈する。轆轤未使用。ⅡA2a類。14c前半。
288	12区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。器壁は全体に厚い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面横ナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調は暗黄褐色。轆轤未使用。ⅡA1a類。12c中頃～13c中頃。
289	12区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く斜め上方へ立ち上がる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面横ナデ調整。口縁部内・外面は強い横ナデ調整。	色調は淡赤褐色。轆轤未使用。ⅡA1b類。13c後半。
290	12区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	器壁は比較的厚く、特に口縁部の器壁が厚い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面横ナデ調整。口縁部内外面強い横ナデ調整。	色調は淡暗黄褐色。轆轤未使用。ⅡA2a類。14c前半。
291	12区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面横ナデ調整。口縁部内・外面強い横ナデ調整。	色調は淡黄灰色。轆轤未使用。ⅡA1a類。12c中頃～13c中頃。
292	12区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	器壁は全体に厚い。平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面横ナデ調整。口縁部内・外面強い横ナデ調整。底部外面指頭圧痕。	内面に１ヶ所煤附着。色調は淡黄灰色。轆轤未使用。ⅣA2類。13c後半。
293	12区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がり、口縁部はほぼ直立。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面横ナデ調整。口縁部内・外面強い横ナデ調整。外面の底部～体部指頭圧痕。	色調は淡黄灰色。轆轤未使用。ⅡA1a類。12c中頃～13c中頃。
294	12区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面回転ナデ調整。底部外面未調整。ヘラ切り痕が残る。	色調は暗灰色。轆轤使用。須恵器Ⅲに類似。Ⅰ類。12ｃ後半～13ｃ前半。
295	12区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	円盤状の底部に、体部は粘土紐を巻き上げて成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面回転ナデ調整。底部外面未調整。ヘラ切り痕が残る。	色調は内・外面共全面に煤附着のため暗黒灰色。轆轤使用。形態・成形技法が須恵器Ⅲに類似。Ⅰ類。12ｃ後半～13ｃ前半。
296	12区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	器壁は比較的厚い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面横ナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	口縁部内・外面煤附着。色調は暗黄灰色。轆轤未使用。ⅡA1a類。12c中頃～13c中頃。
297	12区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味を帯びる。	内面～体部外面横ナデ調整。口縁部及び体部内・外面強い横ナデ調整。底部外面指頭圧痕。	色調は暗赤褐色。轆轤は未使用。ⅣB1類。14c前半。
298	12区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は若干尖り気味。器壁は比較的厚い。器形は全体に歪む。	内面～口縁部外面横ナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調は暗黄灰色。轆轤未使用。ⅡA1a類。12c中頃～13c中頃。
299	12区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。器壁は全体に比較的厚い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内面～口縁外面横ナデ調整。口縁部内・外面強い横ナデ調整。	色調は淡赤褐色。轆轤未使用。ⅣA1類。12c中頃～13c中頃。
300	12区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	円盤状の底部に粘土紐を巻き付けて体部～口縁部を成形。平底。体部は底部から大きく屈曲して、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面横ナデ調整。口縁部内・外面強い横ナデ調整。外面の体部～底部指頭圧痕。	色調は淡黄褐色。轆轤未使用。ⅣB2類。14c後半。
301	12区　包含層（第2～3層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く斜め上方に立ち上がる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面丁寧な横ナデ調整。器面を平滑に仕上げる。口縁内・外面強い横ナデ調整。口縁部外面に稜線。	色調は淡赤褐色。轆轤未使用。ⅡA1a類。12c中頃～13c中頃。
302	12区　包含層（第2～3層）中	土師器	鍋	器壁は全体に薄い。丸底。底部と体部の界は大きく屈曲し、体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外反し、口縁端部上面は端面をもつ。蓋の受け口は「L」字状を呈する。	粘土紐巻き上げ成形。叩き目はナデ消す。口縁部内外面は強い横ナデ調整。体部外面全面に指頭圧痕が残る。内面ナデ調整。	外面の一部に煤附着。色調は淡黄灰色。鍛造の鉄鍋模倣タイプ。鍋形タイプ：鉄鍋形：ⅢB類。14ｃ中頃。
303	12区　包含層（第2～3層）中	土師器	鍋	器壁は全体に薄い。丸底。底部と体部の界は大きく屈曲し、体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外反し、口縁端部上面は端面をもつ。蓋の受け口は「L」字状を呈する。	粘土紐巻上げ成形。叩き目は基本的にナデ消すが、底部外面に僅かに痕跡が残る。口縁部内・外面強い横ナデ調整。体部外面全面に指頭圧痕が残る。内面は全面に板ナデ調整。	外面煤附着。色調は淡黄灰色。鍛造の鉄鍋模倣タイプ。鍋形タイプ：鉄鍋形ⅢA類。14ｃ前半。
304	12区　包含層（第2～3層）中	白磁	Ⅲ	高台は比較的細く高い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は外反。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台畳付の釉　丁寧に掻き取り。	華南産白磁。白磁E群。16ｃ代。
305	13区　SE18	瓦質土器	火鉢	体部はほぼ直立。口縁部上面は水平に端面をもつ。	体部外面に菊花文を型押し施文。内外面とも丁寧なナデ調整。	色調　暗灰色。奈良火鉢。浅鉢Ⅲ。14ｃ中頃。
306	13区　SE18	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部下端は外方につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。内面９条１単位の擂目施文。	色調　にぶい赤褐色。備前焼擂鉢ⅣB類。15ｃ前半～中頃。
307	13区　SE18	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。	内外面ともヨコナデ調整。内面　擂目施文。体部外面　指頭圧痕。	色調　灰黄褐色。備前焼擂鉢ⅤA類。15ｃ後半。
308	13区　SE18	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張、楕円形形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　橙色。備前焼甕ⅢB類。14ｃ代。
309	13区　SE18	無釉陶器	甕	折り曲げ、上下に拡張して「N」字状呈する口縁部が頸部に附着した形態を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　暗赤褐色。胎土中に砂粒を多く混じえる。常滑焼9型式。15ｃ前半～中頃。
310	13区　SE18	白磁	碗	体部は内彎。口縁部は外反。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた灰白色に発色。器面に細かい貫入。	華南産白磁。白磁C群。15～16ｃ代。
311	13区　SE18	青磁	碗	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面　鏑の無い蓮弁文を片切り彫で施文。内外面とも青磁釉施釉。明緑灰色に発色。	龍泉窯系青磁蓮弁文碗。B-Ⅲ類。14c後半から15c前半。
312	13区　SE18	染付磁器	碗	器壁は薄い。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　界線１条・動物文（鹿文？）。内面　界線１条。	明青花。16ｃ代。
313	13区　SE18	施釉陶器	Ⅲ	底部の器壁は非常に厚い。高台は断面三角形状を呈し、比較的低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は外反、口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも施釉。青味を帯びた灰白色に発色。底部内面蛇ノ目状釉ハギ。外面の体部下半以下露胎。	肥前系。唐津。Ⅲ～Ⅳ期。　17ｃ中頃～18ｃ前半。
314	13区　SK08	施釉陶器	天目茶碗	体部は内彎。口縁部は若干外反。	内外面とも鉄釉施釉。オリーブ褐色に発色。	肥前系。唐津。Ⅱ期。17ｃ前半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
315	13区　SD14	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　黄橙色。
316	13区　SK31	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	口縁部内外面に煤附着－灯明Ⅲとして使用。轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
317	13区　SK35	土師器	Ⅲ	器壁は比較的薄い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。口縁部内面に稜をもつ。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指オサエの後ナデ調整。指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅡA1a類。12c中頃～13c中頃。
318	13区　SK35	土師器	Ⅲ	口縁部はやや歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅡA1a類。12c中頃～13c中頃。
319	13区　SK35	瓦器	椀	断面三角形状の退化した高台を貼り付ける。	底部内面　暗文あり。	色調　暗青灰色。和泉型瓦器椀。
320	13区　SK49	土師器	Ⅲ	口縁部が歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面から体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
321	13区　SK49	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面から体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
322	13区　SK49	土師器	Ⅲ	口縁部が歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面から体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
323	13区　SK49	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面から体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面に浅い段。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄褐色。
324	13区　SK49	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面から体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。底部内面　不定方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
325	13区　SK54	無釉陶器	甕	口縁部は僅かに玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。内外面　自然釉附着、灰被り。器面は光沢をもつ。	色調　灰白色（須恵質）。備前焼甕ⅢA類。14ｃ代。
326	13区　SK54	無釉陶器	擂鉢	口縁端部は丸味をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　ヘラ描きの擂目施文。	焼成堅緻。色調　暗赤褐色。丹波系　16ｃ代。
327	13区　SK54	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。先端部欠損。	色調　にぶい橙色。
328	13区　SK57	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。先端部欠損。	色調　赤褐色。
329	13区　SK57	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。	色調　にぶい橙色。
330	13区　SK62	青磁	Ⅲ	平底。	底部内面に櫛描きの草花文施文。内外面とも青磁釉施釉。灰緑色に発色。底部外面の中央部は露胎。	龍泉窯系青磁皿。ⅢⅠ-2ｂ類。12ｃ中頃～後半。
331	13区　SK65	施釉陶器	Ⅲ	碁笥底風の浅く削り出す高台。	内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。底部内面の釉　輪状に掻き取り。底部外面　露胎。	瀬戸・美濃系。灰釉陶器。黄瀬戸皿。大窯Ⅲ期。16ｃ後半。
332	13区　SK73	施釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに内彎。口縁端部は斜め方向に切る。片口をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。内面　櫛描きで擂目施文。内外面　鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。	瀬戸・美濃系。近世。
333	13区　SK73	施釉陶器	椀	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く、低い。体部は斜め上方に立ち上がる。	内外面とも白濁釉施釉。赤みを帯びた灰白色に発色。	肥前系。唐津。Ⅱ期。17ｃ前半。
334	13区　SK76	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	色調　黄橙色。轆轤未使用。ⅡA5b類。16c末葉～17c前葉。
335	13区　SK76	土師器	焙烙	丸底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は内傾気味に斜め上方に延びる、口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面ヘラ状工具によるヨコナデ調整。底部内面　不定方向のナデ調整。体部外面　斜め方向の叩き目。一部ナデ消し。	色調　褐灰色。羽釜形タイプ：播磨型Ⅲ類。　16ｃ末～17ｃ前葉。
336	13区　SK76	施釉陶器	Ⅲ	細く、低い高台を貼り付け。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内外面とも長石釉施釉。乳白色に発色。粗い貫入が入る。	瀬戸・美濃系。志野皿。大窯Ⅴ期。16ｃ末～17ｃ初頭。
337	13区　SK76	無釉陶器	壺	平底。体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部外面未調整。糸切り痕が僅かに残る。体部外面ロクロ目跡明瞭。	蛸壺か？
338	13区　SK76	施釉陶器	椀	高台は巾が狭く、比較的低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面の底部と体部の界に浅い段。内外面とも透明釉施釉　白濁色に発色。底部内面に砂目痕4箇所。	産地不明。肥前系あるいは朝鮮製白磁か。
339	13区　SK76	染付磁器	碗	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　幾何学文・くずれた草花文？。内面　界線１・１条。	肥前系？。
340	13区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。体部外面下半　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅡA1b類。13c後半。
341	13区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。口縁外面に僅かに稜がある。底部内面　一方向のナデ調整。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅡA1b類。13c後半。
342	13区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に凹部をもつ。体部内面　指頭圧痕。	色調　浅黄橙色。轆轤未使用。ⅡB1a類。13c後半。
343	13区　SK77	青磁	碗	体部内彎。口縁端部はほぼ直立。	外面に鎬の無い広形蓮弁を施文。内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁蓮弁文碗。B-Ⅲ類。14ｃ後半～15ｃ前半。
344	13区　SK77	土製品	面子	土師器片の縁辺を打ち欠いて円形に成形。	器面の磨耗が著しい。平滑。	原体は土師器。
345	13区　SK77	瓦	軒丸瓦	巴文軒丸瓦。		焼成不良。胎土中に砂粒を多く含む。色調灰色。
346	13区　SK78	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
347	13区　SK78	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　黄橙色。
348	13区　SK78	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に浅い凹部をもつ。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
349	13区　SD13	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部内面　ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。	口縁部に煤附着。色調　にぶい黄橙色。轆轤使用。ⅢA類。17c中葉～18c前半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
350	13区　SD13	土師器	皿	底部の器壁は非常に厚い。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。	色調　浅黄橙色。轆轤使用。ⅢA類。17c中葉～18c前半。
351	13区　SD13	土師器	皿	平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部内面　ナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。	轆轤使用。色調　浅黄橙色。ⅢB類。17ｃ中葉～18c前半。
352	13区　SD13	施釉陶器	入子	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面から体部外面　灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。一部釉が溶けず白濁する。外面の体部下半～底部外面　露胎。糸切り痕。	瀬戸・美濃系。前Ⅳ期。13ｃ後半。
353	13区　SD13	無釉陶器	擂鉢	体部は僅かに内彎。口縁部は斜め方向に切る。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。体部外面横方向の板ナデ調整。体部内面　5条1単位の擂目施文。	色調　褐灰色。備前焼擂鉢ⅢA類。14ｃ後半～15ｃ初頭。
354	13区　SD13	無釉陶器	擂鉢	体部は僅かに内彎。口縁部は水平方向に切る。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。体部外面自然釉附着。体部内面　9条1単位の擂目施文。口縁部上面に重ね焼痕。	色調　灰黄褐色。備前焼擂鉢ⅡB類。13ｃ後半～14ｃ前半。
355	13区　SD13	無釉陶器	壺	体部は内彎。頸部は直立。口縁部は玉縁状に肥厚。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。	外面　灰被り。色調　灰色。備前焼。
356	13区　SD13	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。片口を作り出す。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。体部内面ヘラ描きの擂目施文。体部外面　指頭圧痕。外面　灰被り。	色調　にぶい赤褐色。丹波焼。ⅠA2（ヘラ）類。16ｃ後葉～17ｃ中葉。
357	13区　SD13	無釉陶器	擂鉢	口縁部は断面長方形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内面に沈線1条。体部内面　ヘラ描きの擂目施文。内面　自然釉附着。	焼成堅緻。色調　暗褐色。丹波焼。ⅠB2（ヘラ）類。17ｃ初頭～中葉。
358	13区　SD13	無釉陶器	擂鉢	口縁端部は斜め上方につまみ上げる。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　6条1単位の擂目施文。	色調　暗赤褐色。丹波焼。ⅡA類。17ｃ後半～18ｃ前半。
359	13区　SD13	無釉陶器	甕	体部は内彎。口縁部は外方に水平に折り曲げる。	内外面ともヨコナデ調整。内外面とも鉄泥漿塗布。	丹波系。甕Ⅵ類。17ｃ中葉～後葉。
360	13区　SD13	施釉陶器	皿	高台は細く低い。底部と体部の界は屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方に折り曲げ。口縁部上面に凹線1条。	体部内面　ヘラ状工具で菊花文施文。内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。底部内面の釉輪状に掻き取り。底部外面　露胎。	瀬戸・美濃系。灰釉陶器。黄瀬戸菊皿。大窯Ⅲ期。16ｃ後半。
361	13区　SD13	施釉陶器	皿	高台は低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。釉質はガラス質。光沢をもつ。低部内面の釉　輪状に掻き取り。器面に細かい貫入が入る。	瀬戸・美濃系灰釉陶器。黄瀬戸皿。大窯Ⅲ期。16ｃ後半。
362	13区　SD13	施釉陶器	皿	細く、低い高台を貼り付け。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内外面とも白濁釉施釉。乳白色に発色。粗い貫入が入る。	瀬戸・美濃系。志野皿。大窯Ⅴ期。16ｃ末～17ｃ初頭。
363	13区 SD13	施釉陶器	椀	幅広の三ケ月高台を浅く削り出す。高台裏には兎巾が残る。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	内外面とも地釉の灰釉の上に白濁釉を掛ける。体部外面下半（高台脇）以下　露胎。	肥前系。唐津。Ⅱ期。17ｃ前半。
364	13区　SD13	施釉陶器	椀	底部の器壁は非常に厚い。幅が広く低い削りだし高台。高台裏にトキンが残る。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内外面とも灰釉施釉の後、白濁釉施釉。外面の体部下半以下露胎。	肥前系。唐津。Ⅱ期。17ｃ前半。
365	13区　SD13	施釉陶器	壺	幅が広く、低い高台。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に上方に延びる。	外面　灰釉施釉　暗緑灰色に発色。底部外面未施釉　鉄泥漿を塗布。赤褐色に発色。内面露胎。	肥前系　唐津　17ｃ前半。
366	13区　SD13	施釉陶器	皿	幅が広く低い三日月高台を浅く削り出す。高台裏にトキンが残る。底部の器壁は非常に厚い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも灰釉施釉。明オリーブ灰色に発色。体部外面下半（高台脇）以下露胎。底部内面に胎土目痕　3箇所。	肥前系　唐津。Ⅰ-2期。16ｃ末～17ｃ初頭。
367	13区　SD13	施釉陶器	皿	底部の器壁は厚い。高台は幅が広く低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内外面とも白濁釉施釉。灰白色に発色。底部内面　砂目跡2箇所。	肥前系。唐津。Ⅱ期。17ｃ前半。
368	13区　SD13	施釉陶器	椀	高台は比較的幅が広く高い。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面　透明釉施釉。灰色に発色。外面　緑釉施釉。暗オリーブ灰色に発色。体部外面下半以下露胎。	産地不明。19世紀前半以降か？。
369	13区　SD13	土師器	燭台	平底に直立する脚がつく。皿部は内面に凸帯が1条巡る。	皿部の内面　透明釉施釉　橙色に発色。底部外面未調整　糸切り痕。	轆轤使用。色調　露胎部　浅黄橙色。18ｃ後半～19ｃ前半。
370	13区　SD13	青磁	碗	底部の器壁は非常に厚い。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	底部内面　草花文を印花で施文。内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。高台畳付～高台裏露胎。底部外面に沈線2条。	龍泉窯系青磁碗。14ｃ代。
371	13区　SD13	青磁	皿	高台は比較的細く、高い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも青磁釉施釉　明緑灰色に発色。外面の体部下半以下露胎。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	肥前系。17ｃ後半～18ｃ前半。
372	13区　SD13	染付磁器	皿	底部の器壁は比較的厚い。高台は幅が広く比較的高い。体部は僅かに内彎して緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。外面の体部下半以下露胎。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。高台畳付・底部内面に砂附着。文様　内面　界線1条。簡略化した草花文？・界線2条。外面　無文。	肥前系　粗製の皿。17ｃ後半～18ｃ前半？。
373	13区　SD13	染付磁器	皿	高台は比較的幅が広く低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　内面　界線2条・菊花文。外面　界線1条。高台畳付に砂附着。	肥前系。Ⅱ期。17ｃ前半～中頃。
374	13区　SD13	染付磁器	皿	高台は非常に低く径が小さい。	色調　青味を帯びた灰色。文様　内面　草花文。外面　無文。	肥前系。Ⅱ期。17ｃ前半～中頃。
375	13区　SD13	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰色。文様　外面　界線1条・一重網目文・界線1・1条。内面　無文。高台畳付に砂附着。	肥前系。Ⅱ期。17ｃ前半～中頃。
376	13区　SD13	染付磁器	油壺	高台は比較的幅が広く、低い。体部は大きく内彎、頸部は短く直立、口縁部は外反する。	色調　青味を帯びた灰白色。外面　呉須　梅花文施文。	肥前系。Ⅳ期。18ｃ前半。
377	13区　SD13	土製品	面子	型作り成形。断面台形状。上面に「稲妻」の銘を施文。	外面　指ナデ調整。	稲妻は力士名か？。
378	13区　SD13	土製品	人形	型作り成形。両型作り。台座と光背をもつ菩薩像。底部外面に穿孔痕。現状は塞がる。台座には蓮弁文施文。	彩色は全て剥落。体部外面にひび割れ。	菩薩坐像。
379	13区 SD16	土師器	焙烙	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は内傾気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	底部内面　ナデ調整。体部内面　強いナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面斜め方向の粗い平行叩き目。	外面　煤附着。色調　にぶい褐色。焙烙形ⅣA類。17ｃ中葉～後半。
380	13区　SD71	施釉陶器	椀	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く、比較的厚い。底部と体部の界は屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。	内外面とも灰釉施釉。オリーブ灰色に発色。高台裏は露胎。	肥前系。唐津。Ⅱ期。17ｃ前半。
381	13区　SD71	施釉陶器	椀	底部の器壁は非常に厚い。比較的高い高台を削り出す。（三ケ月高台で竹節高台）高台裏縮緬皺、トキンが残る。	内・外面共施釉（にぶい黄橙色に発色）外面の高台脇以下露胎。	肥前系。唐津。Ⅱ期。17ｃ前半。
382	13区　SD71	染付磁器	皿	平底。高台は細く低い。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　内面　界線1条・草花文。外面　界線　1条。	明青花。16ｃ代。
383	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	土師器	皿	底部の器壁は厚い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤使用。ⅢB類。17ｃ中葉～18c前半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
384	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	瓦器	皿	器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部外面に凹部をもつ。底部内面　ナデ調整。体部外面指オサエ痕。	色調　暗灰色。
385	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	土師器	皿	器形は全体に大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。粗製。ⅢC2類。15c末葉～16c前葉。
386	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	瓦器	皿	器壁は比較的厚い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部外面に僅かに凹部をもつ。	色調　暗灰色。
387	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	土師器	皿	器壁は比較的厚い。平底。体部は短く斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部内面　ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。	色調　浅黄橙色。轆轤使用。ⅢB類。17c中葉～18c前半。
388	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	土師器	皿	器形は全体に大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。粗製。ⅡA4類。15c末葉～16c前葉。
389	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	土師器	皿	平底。体部は短く緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　不定方向のナデ調整。体部外面に粘土の継ぎ目あり。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅡA4類。15c末葉～16c前葉。
390	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　橙色。轆轤未使用。ⅢC2類。15c末葉～16c前葉。
391	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	土師器	皿	器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　不定方向のナデ調整。体部外面下半～底部　指オサエの後、板状工具によるナデ調整。指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅡA4類。15c末葉～16c前葉。
392	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	土師器	皿	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面及び外面の体部下半～底部　指頭圧痕	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅡA4類。15c末葉～16c前葉。
393	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面・体部外面下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅢC2類。15c末葉～16c前葉。
394	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	土師器	小椀	「ハ」の字状の比較的低い高台をもつ。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。高台貼り付け。	轆轤未使用。色調　灰白色。吉備系土師器椀。
395	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	土師器	小椀	「ハ」の字状の比較的低い高台をもつ。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。高台貼り付け。	轆轤未使用。色調　灰白色。吉備系土師器椀。
396	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	土師器	蛸壺	体部は直立。口縁部外反。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。	色調　橙色。ロクロ作りの蛸壺。
397	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	瓦器	椀	高台は断面台形状の低い高台。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面の体部～底部　粗い平行ミガキ。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　黒褐色。和泉型瓦器椀Ⅱ-3期。12c後半。
398	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	瓦器	椀	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　横方向の暗文。体部外面下半指頭圧痕	色調　外面　暗灰色。内面　炭素の吸着が弱く灰色。和泉型瓦器椀Ⅱ期。12c後半。
399	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	瓦器	椀	体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　平行ミガキ。体部外面　指頭圧痕。	色調　灰白色。和泉型瓦器椀Ⅲ期。13c前半。
400	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	瓦器	椀	断面台形状の低い高台を貼り付ける。	底部内面　暗文あり。底部外面　ナデ調整	色調　炭素の吸着が悪く、内外面とも灰色。和泉型瓦器椀Ⅳ-1期。13c中頃。
401	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	瓦器	椀	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　横方向の暗文。	色調　暗青灰色。和泉型瓦器椀Ⅲ期。13c前半。
402	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	瓦器	椀	断面三角形状の低い高台を貼り付ける。	底部内面　ナデ調整。底部外面　ナデ調整。	色調　暗灰色。外面　炭素の吸着が悪く、灰白色。和泉型瓦器椀Ⅲ期。13c前半。
403	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	瓦器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部外面に凹部をもつ。	色調　暗灰色。
404	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	土師器	鍋	口縁部はほぼ直立。口縁部上面　斜め方向の端面をもつ。口縁部外面に断面三角形状の短い鍔をもつ。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調製。体部外面　平行叩き目。	色調　にぶい橙色。羽釜形タイプ：播磨型A系列ⅠB類。15c中頃。
405	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	土師器	鍋	口縁部は直立。口縁端部は丸味をもつ。口縁部外面にナデにより段状の鍔を作り出す。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ハケ目調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目。	色調　外面　にぶい黄橙色。内面　暗灰色。羽釜形タイプ：播磨型A系列ⅠC類。15c後半～16c初頭。
406	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	土師器	鍋	口縁部は外反。口縁端部は外方につまみ出す。口縁部外面にナデにより段状の鍔を作り出す。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　板ナデ調整。	外面に煤附着。色調　淡橙色。羽釜形タイプ：播磨型A系列ⅠC類。15c後半～16c初頭。
407	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	須恵器	椀	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。	色調　灰白色。東播系須恵器椀。13c前半。
408	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	須恵器	椀	体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。	色調　灰色　東播系須恵器椀　13c前半。
409	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	須恵器	椀	体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。口縁部外面に重ね焼き痕。	色調　灰白色。東播系須恵器椀。13c前半。
410	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚、縁帯を形成する。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。口縁部内面に凹部をもつ。	口縁部外面に重ね焼き痕あり。色調　灰色。東播系須恵器鉢。C2類。14c前半。
411	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は斜め方向に切り、若干肥厚。口縁部は若干上方につまみ上げる。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。	色調　灰白色。東播系須恵器鉢。C1類。13c後半～14c前半。
412	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は斜め方向に切る。口縁端部は若干上方につまみ上げる。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。	色調　暗灰色。東播系須恵器鉢。B1類。12c後半。
413	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は斜め方向に切る。口縁端部は斜め下方につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。体部外面　ヨコナデの後、縦方向のナデ。体部内面　6条1単位の擂目施文。	色調　にぶい赤褐色。備前焼擂鉢ⅣA類。15c前半～中頃。
414	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁部下端は斜め外方につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内面に凹部をもつ。内面　6条1単位の擂目施文。	色調　灰黄褐色。備前焼擂鉢ⅣA類。15c前半～中頃。
415	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	無釉陶器	鉢	口縁部は斜め方向に切る。口縁端部は内側、外側に僅かにつまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部上面～内面胡麻状に灰被り。	色調　暗赤褐色　備前焼擂鉢ⅢB類。14c後半～15c初頭。
416	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁部外面に凹線1条。口縁部下端を外方につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。内面　櫛状工具で擂目施文。	色調　赤灰色。備前焼擂鉢ⅧA類。17c初頭。
417	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。	内外面ともヨコナデ調整。内面　櫛状工具で擂目施文。	色調　暗青灰色。備前焼擂鉢ⅤB類。15c後半。
418	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部上面～内面胡麻状に灰被り。	色調　灰黄褐色。備前焼擂鉢ⅣB類。15c前半～中頃。
419	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張、楕円形形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。外面に自然釉附着。	色調　にぶい赤褐色。備前焼甕Ⅳ類。15c前半。
420	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	無釉陶器	甕	口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。内外面　胡麻上に灰被り。	色調　灰黄褐色。備前焼甕ⅢA類。14c代。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
421	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	無釉陶器	甕	口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。外面　自然釉附着。光沢をもつ。	色調　にぶい赤褐色。備前焼甕ⅢB類。14ｃ代。
422	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	無釉陶器	甕	口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。内外面　胡麻状に灰被り。	色調　暗赤褐色。備前焼甕ⅢA類。14ｃ代。
423	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	無釉陶器	壺	頸部は短く直立。口縁部は僅かに玉縁状に肥厚。	内外面とも回転ナデ調整。外面は胡麻状に灰被り。	色調　暗赤灰色。備前焼。
424	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	無釉陶器	壺	平底。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。	内面　回転ナデ調整。外面　横方向の板ナデ調整。底部外面にヘラ描きの窯印あり。外面　鉄泥漿塗布。	色調　赤褐色。備前焼。
425	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	施釉陶器	天目茶碗	体部は内彎。口縁部は僅かに外反。口縁端部は尖り気味。	内外面とも鉄釉施釉のち、黒釉施釉。黒褐色に発色。外面の体部下半以下露胎。露胎部に鉄泥漿塗布。	瀬戸・美濃系。後Ⅳ期新。15ｃ後半。
426	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	白磁	皿	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた灰白色に発色。口縁端部の釉掻き取り（口禿）	華南産白磁。白磁ⅢⅨ-1類。13ｃ後半～14ｃ前半。
427	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	青磁	碗	体部は僅かに内彎。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部は輪花状に成形。輪花部に白堆で縦の界線施文。内外面とも青磁釉施釉。暗オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁碗。小碗Ⅰ-3類。12ｃ中頃～後半。
428	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	青磁	皿	底部の器壁は非常に厚い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	底部内面　櫛描きとヘラ描きで草花文施文。内外面とも青磁釉施釉。暗緑色に発色。底部外面露胎。	龍泉窯系青磁。ⅢⅠ-2ｂ類。12ｃ中頃～後半。
429	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	青白磁	合子	体部上面水平。体部は直立。口縁端部は尖り気味。	体部外面に印花で花弁文施文。内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた灰白色に発色。	景徳鎮窯系青白磁。合子蓋。13c代。
430	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	無釉陶器	壺	頸部は短く直立。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも丁寧なミガキ調整。器面は平滑。	産地不明。
431	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	施釉陶器	皿	底部の器壁は非常に厚い。高台は細く、小さい。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。底部外面　露胎。重ね焼き痕。	瀬戸・美濃系。灰釉陶器。黄瀬戸皿。大窯Ⅲ期。16ｃ後半。
432	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。先端部欠損。	色調　黒褐色。
433	13区　包含層（Ⅱ面　第2層）中	石製品	茶臼	茶臼の上臼。	器面は平滑に仕上げる。	色調　灰色。砂岩製。
434	13区　包含層（第1層他）中	土師器	皿	器形は大きく歪む。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に凹部をもつ。底部内面　ナデ調整。	色調　橙色。轆轤未使用。ⅢD2類。17c中葉～後半。
435	13区　包含層（第1層他）中	土師器	皿	底部の器壁は非常に厚い。体部は短く直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部内面　ナデ調整。底部外面　ナデ調整。糸切り痕をナデ消す。	色調　灰白色。轆轤使用。ⅢA類。17c中葉～18c前半。
436	13区　包含層（第1層他）中	土師器	皿	平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部内面　ナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。	轆轤使用　色調　浅黄橙色。ⅢA類。17c中葉～18c前半。
437	13区　包含層（第1層他）中	土師器	皿	平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部内面　ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。	色調　淡黄色。轆轤使用。ⅢA類。17c中葉～18c前半。
438	13区　包含層（第1層他）中	土師器	皿	平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。	色調　にぶい橙色。底部外面に墨書。轆轤使用。ⅢA類。17c中葉～18c前半。
439	13区　包含層（第1層他）中	土師器	皿	平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部内面　ナデ調整・墨書あり。「丁」字状。底部外面　未調整　糸切り痕。	轆轤使用　色調　浅黄橙色。ⅢA類。17c中葉～18c前半。
440	13区　包含層（第1層他）中	土師器	皿	平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部内面　ナデ調整・墨書あり。底部外面　未調整　糸切り痕。	轆轤使用。色調　にぶい黄橙色。ⅢA類。17c中葉～18c前半。
441	13区　包含層（第1層他）中	土師器	皿	平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。	色調　にぶい橙色。底部内面に墨書。轆轤使用。ⅢA類。17c中葉～18c前半。
442	13区　包含層（第1層他）中	瓦器	椀	断面台形状の低い高台を貼り付ける。	底部内面　螺旋状暗文。	色調　灰色。和泉型瓦器椀Ⅲ期。13ｃ前半。
443	13区　包含層（第1層他）中	土師器	焙烙	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は内彎気味に直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面上半　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面下半　斜め方向の平行叩き目。	外面　煤附着。色調　にぶい黄橙色。焙烙形ⅣA類。17ｃ中葉～後半。
444	13区　包含層（第1層他）中	土師器	鍋	口縁部は直立。口縁端部は丸味をもつ。口縁部外面にナデにより段状の鍔を作り出す。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	色調　赤褐色。羽釜形タイプ：播磨型A系列ⅠC類。15ｃ後半～16ｃ初頭。
445	13区　包含層（第1層他）中	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は斜め方向に切る。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	色調　灰白色。東播系須恵器鉢。A類。12ｃ前半。
446	13区　包含層（第1層他）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、小さい縁帯を形成する。口縁部上面に凹部をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　櫛状工具で擂目施文。	色調　暗赤灰色。備前焼ⅧB類。17ｃ初頭。
447	13区　包含層（第1層他）中	無釉陶器	擂鉢	口縁端部は上方につまみ上げる。内面の体部と口縁の界　低い段をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。内面　櫛描きの擂目施文。	色調　にぶい赤褐色。丹波焼。ⅠB3類。17ｃ中頃～18ｃ前半。
448	13区　包含層（第1層他）中	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張、楕円形形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。外面に自然釉附着。	色調　灰赤色。備前焼甕Ⅴ類。15ｃ後半。
449	13区　包含層（第1層他）中	施釉陶器	天目茶碗	体部は内彎。口縁部は僅かに外反。口縁端部は尖り気味。	内外面とも鉄釉施釉。茶褐色に発色。外面の体部下半以下露胎。釉質はガラス質で光沢をもつ。	瀬戸・美濃系。大窯Ⅲ期。16ｃ後半。
450	13区　包含層（第1層他）中	施釉陶器	天目茶碗	高台は浅く削り出す内反り高台。	内外面とも施釉。暗黒褐色に発色。高台脇以下露胎。	瀬戸・美濃系。大窯Ⅲ期。16ｃ後半。
451	13区　包含層（第1層他）中	施釉陶器	皿	底部の器壁は非常に厚い。高台は断面三角形状で低い。型押しで体部を菊花状に成形。	内外面とも白濁釉施釉。灰白色に発色。器面に貫入・気泡が認められる。	瀬戸・美濃系。志野菊皿。大窯Ⅴ期。16ｃ末～17ｃ初頭。
452	13区　包含層（第1層他）中	施釉陶器	椀	体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも鉄釉施釉。暗オリーブ褐色に発色。	肥前系　唐津　17ｃ前半。
453	13区　包含層（第1層他）中	施釉陶器	皿	高台は比較的幅が広く、低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は外反。口縁部内面に凹線1条。	内外面とも灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。外面の体部下半以下露胎。底部内面　砂目跡2箇所。	肥前系。唐津。溝縁皿。Ⅱ期。17ｃ前半。
454	13区　包含層（第1層他）中	施釉陶器	皿	高台は比較的幅が広く、低い。体部は僅かに内彎して斜め上方へ延びる。口縁部外反。口縁端部は丸味をもつ。口縁部内面に浅い凹部をもつ。	内外面とも灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。外面の体部下半以下　露胎。底部内面　砂目痕4箇所。高台裏　砂目跡　4箇所。	肥前系。唐津。溝縁皿。Ⅱ期。17ｃ前半。
455	13区　包含層（第1層他）中	青磁	碗	底部の器壁は非常に厚い。幅が狭く、比較的高い高台。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。高台脇以下露胎。露胎部は灰白色。	産地不明。
456	13区　包含層（第1層他）中	施釉陶器	壷？	高台は細く比較的高い。体部は大きく内彎。	外面　灰釉施釉。淡黄色に発色。内面・高台脇以下露胎。底部外面に銘をスタンプ。	肥前系京焼風陶器。17ｃ後半～18ｃ前半。
457	13区　包含層（第1層他）中	白磁	碗	体部は僅かに内彎。口縁端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた灰白色に発色。器面に細かい貫入。	産地不明。近世以降か。
458	13区　包含層（第1層他）中	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　内面　界線2条・草花文。外面　界線2条。器面に釉切れ・気泡が目立つ。	明青花。16ｃ代。
459	13区　包含層（第1層他）中	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	外面ナデ調整。	色調　橙色。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
460	13区　包含層（第1層他）中	土師器	面子（転用）	土師器片の縁辺を打ち欠いて円形に成形。	外面に煤附着。器面の摩滅が著しい。	原体は土師器鍋か？。
461	13区　包含層（第1層他）中	瓦	丸瓦	丸瓦。	外面　縦方向の板ナデ調整。内面　横方向の板ナデ調整。外面に2箇所釘穴を穿孔。	色調　暗灰色。燻し瓦。
462	13・14区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。	轆轤未使用。色調　浅黄橙。
463	13・14区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	器形は大きく歪む。器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
464	13・14区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　ナデ調整。糸切り痕を消す。	内外面とも煤多量に附着―2次焼成を受ける？。轆轤使用。近世。
465	13・14区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	器形は大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。	轆轤未使用。色調　浅黄橙。
466	13・14区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。底部内面　ナデ調整。器面の摩滅が著しい。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。
467	13・14区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内外面　指頭圧痕。底部内面　一方向のナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
468	13・14区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	器形は著しく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。体部外面　指頭圧痕。底部内面　一方向のナデ調整。	口縁部に煤附着－灯明Ⅲとして使用。轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。粗製。ⅡA5b類。16c末葉～17c前葉。
469	13・14区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	口縁部は大きく歪む。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。内面の体部と底部の界　ナデ調整。浅い凹部をもつ。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。底部内面　不定方向のナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
470	13・14区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。底部内面　ナデ調整。器面の摩滅が著しい。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。
471	13・14区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。外面の体部下半～底部及び体部内面　指頭圧痕。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
472	13・14区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。内面の底部と体部の界　強いナデ調整で僅かにくぼむ。内面の体部下半～底部及び体部内面　指頭圧痕。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。
473	13・14区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	器形は著しく歪む。器壁は比較的薄い。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。内面の体部下半～底部及び体部内面　指頭圧痕。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。
474	13・14区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	口縁部は著しく歪む。平底。体部は緩やかに斜め方向に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。底部内面　一方向のナデ調整。	轆轤未使用。色調　灰黄褐色。
475	13・14区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	器形は著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面　指頭圧痕。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
476	13・14区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	器形は著しく歪む。器壁は比較的薄い。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部外反。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。内面の体部下半～底部及び体部内面　指頭圧痕。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。ⅡB2b類。15c前半。
477	13・14区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部外面強いヨコナデ調整。器面の摩滅が著しく、細かい調整などは不明。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。ⅣC1類。15c前半。
478	13・14区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。底部内面　ナデ調整。体部内外面　指頭圧痕。	色調　浅黄橙色。轆轤未使用。
479	13・14区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	器壁は比較的薄い。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　1方向の丁寧なナデ調整。体部外面下半　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　灰白色。ⅡA3a類。15c前半。
480	13・14区　包含層（第2層）中	土師器	焙烙	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は僅かに内傾。口縁端部は斜め方向に端面をもつ。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目。	外面に煤附着。色調　にぶい橙色。焙烙形ⅣA類。17c中葉～後半。
481	13・14区　包含層（第2層）中	瓦器	椀	断面三角形状の低い高台を貼り付ける。	底部内面　ナデ調整。	色調　暗青灰色。和泉型瓦器椀Ⅳ期。13c中頃～後半。
482	13・14区　包含層（第2層）中	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は斜め方向に切る。口縁部外面に凹部をもつ。	内面　ヨコナデ調整。体部外面　ヘラケズリ。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面に3条1単位の擂目　施文。	色調　灰白色。備前焼擂鉢ⅡB類。13c後半～14c前半。
483	13・14区　包含層（第2層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は僅かに上下に拡張。口縁部は断面三角形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　櫛状工具で擂目施文。	色調　にぶい赤褐色。備前焼擂鉢ⅢC類。14c後半～15c初頭。
484	13・14区　包含層（第2層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は序下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部下端は外方につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。内面　櫛状工具で擂目施文。	色調　にぶい赤褐色。備前焼擂鉢Ⅵ類。16c代。
485	13・14区　包含層（第2層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　灰赤色。備前焼擂鉢Ⅵ類。16c代。
486	13・14区　包含層（第2層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　暗灰赤色。備前焼擂鉢Ⅵ類。16c代。
487	13・14区　包含層（第2層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、口縁部下端は外方につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　櫛状工具で擂目施文。	色調　灰赤色。備前焼擂鉢ⅣA類。15c前半～中頃。
488	13・14区　包含層（第2層）中	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張、楕円形形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部外面　凹線3条。	色調　暗赤褐色。備前焼甕ⅢA類。14c代。
489	13・14区　包含層（第2層）中	無釉陶器	甕	体部は内彎。	内外面ともヨコナデ調整。内面　一部斜め・縦方向のナデ。外面　ヘラ状工具で斜め格子文・窯印施文。	備前焼甕。
490	13・14区　包含層（第2層）中	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張、楕円形形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　暗赤褐色。備前焼甕Ⅳ類。15c前半。
491	13・14区　包含層（第2層）中	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張、楕円形形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部外面　凹線3条。	色調　灰赤色。備前焼甕Ⅵ類。16c～17c前半。
492	13・14区　包含層（第2層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁端部は斜め方向に切る。片口をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。内面に窯印スタンプ。	色調　赤褐色。丹波系。
493	13・14区　包含層（第2層）中	施釉陶器	天目茶碗	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。口縁端部は尖り気味。	内外面とも鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。釉質はガラス質で光沢をもつ。外面の体部下半以下露胎。露胎部に鉄泥漿塗布。	瀬戸・美濃系。後Ⅱ～Ⅲ期。15c前半。
494	13・14区　包含層（第2層）中	施釉陶器	椀	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも施釉。淡黄緑色に発色。外面の体部下半以下　露胎。底部外面　糸切り痕。	瀬戸・美濃系。平底末広碗。中Ⅲ期。14c中頃。
495	13・14区　包含層（第2層）中	青磁	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	底部内面　櫛描雷光文施文。内外面とも青磁釉施釉。緑灰色に発色。底部外面露胎。	同安窯系青磁。12c後半～13c前半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
496	13・14区　包含層（第2層）中	青磁	碗	体部は内彎。口縁端部は丸味をもつ。	外面　くずれた雷文帯施文。内外面とも青磁釉施釉。明緑灰色に発色。	龍泉系青磁雷文帯碗。C類。15ｃ代。
497	13・14区　包含層（第2層）中	青磁	碗	高台は比較的幅が広く高い。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	内外面とも青磁釉施釉。浅黄色に発色。高台畳付も施釉。底部外面　高台裏　露胎。底部内面に印花で草花文施文。	龍泉窯系青磁碗。14ｃ後半～15ｃ代。
498	13・14区　包含層（第2層）中	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　芭蕉文・界線２条。内面　界線１条・草花文。	明青花。16ｃ代。
499	13・14区　包含層（第2層）中	染付磁器	盤	底部の器壁は厚い。高台は幅が広く低い。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　内面　草花文。外面　界線　1条。	高台畳付に砂附着。明青花。
500	13・14区　包含層（第2層）中	瓦質土器	不明	長方形の平面形状。体部は直角に折り曲げて成形する。	外面　縦方向の板ナデ調整。内面　不定方向のナデ調整。	全体に煤附着。灰落としか？。
501	13・14区　包含層（第2層）中	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。使用により器面は摩滅。平滑。	色調　にぶい橙色。
502	13・14区　包含層（第2層）中	土製品	土錘	円筒形。棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。器面は使用により摩滅。	色調　にぶい橙色。胎土中に砂粒を含む。
503	13・14区　包含層（第2層）中	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。先端部欠損。	色調　にぶい黄橙色。
504	13・14区　包含層（第2層）中	瓦	平瓦	長方形。	内外面とも縦方向のナデ調整。	色調　暗灰色。敷瓦。
505	13・14区　包含層（第2層）中	瓦	丸瓦	半円形。	外面　縦方向の丁寧な板ナデ調整。内面　縦方向の粗いナデ調整。	色調　暗灰色。
506	13・14区　包含層（第2層）中	石製品	石鍋	口縁部外面に断面台形状の鍔をもつ。	口縁部・体部外面に成形時のノミ痕。	滑石製。Ⅲｂ類。13ｃ代。
507	13・14区　包含層（第2層）中	石製品	石鍋	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部はほぼ直立。口縁部外面に断面台形状の鍔をもつ。	口縁部・体部外面に成形時のノミ痕。	体部外面に煤附着。滑石製。Ⅲｃ類。14ｃ前半。
508	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く内傾するいわゆるコースター形。口縁端部は尖り気味。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。底部外面　ナデ調整。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。Ⅰ類。12c中頃～13c中頃。
509	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	器形は大きく歪む。器壁は比較的厚い。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	ⅡA3a類。15c前半。
510	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	器形は大きく歪む。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。　体部内面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅡA2ｂ類。14c後半。
511	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界　不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅣB2類。14c後半。
512	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	口縁部はやや歪む。平底。体部は短く緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。底部内面　一方向のナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅡA2ｂ類。14c後半。
513	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　橙色。ⅡA2ｂ類。14c後半。
514	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面・外面の体部下半～底部　指オサエの後ナデ調整。指頭圧痕。	色調　橙色。轆轤未使用。ⅡB2a類。14c後半。
515	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	口縁部はやや歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。底部内面　一方向のナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅡA2ｂ類。14c後半。
516	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は上方につまみ出す。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。口縁内面に凹部をもつ。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　灰白色。ⅡB1b類。14c前半。
517	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	口縁部はやや歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は上方につまみ出す。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部及び体部内面　指頭圧痕。内面の体部と底部の界強いナデ調整　凹部をもつ。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
518	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	口縁部はやや歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は上方につまみ出す。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　不定方向の調整。	轆轤未使用。色調　橙色。ⅡB2a類。14c後半。
519	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	口縁部はやや歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。内面の体部と底部の界　ナデ調整。浅い凹部をもつ。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。底部内面　一方向のナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅢA1類。14c前半。
520	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	口縁部は大きく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部及び体部内面　指頭圧痕。内面の体部と底部の界強いナデ調整　凹部をもつ。底部内面　一方向のナデ調整。	轆轤未使用。色調　橙色。ⅢA2類。14c後半。
521	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	口縁部は大きく歪む。平底。底部と体部の界大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅢA2類。14c後半。
522	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	口縁部は大きく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。内面の体部と底部の界　ナデ調整。凹部をもつ。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。底部内面　一方向のナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅢA1類。14c前半。
523	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	口縁部はやや歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅣB1類。14c前半。
524	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	器壁は比較的薄い。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅡB2a類。14c後半。
525	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面　ナデ調整。体部外面～底部外面　指オサエ、指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅣB2類。14c後半。
526	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	口縁部は大きく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部外反。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部及び体部内面　指頭圧痕。内面の体部と底部の界強いナデ調整　凹部をもつ。底部内面　一方向のナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅡB2a類。14c後半。
527	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	口縁部は大きく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。底部内面　一方向のナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅢA2類。14c後半。
528	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味を帯びる。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。体部外面に凹部をもつ。外面の体部下半～底部及び体部内面　指頭圧痕。底部内面　一方向のナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
529	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　橙色。轆轤未使用。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
530	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　橙色。轆轤未使用。ⅣB2類。14c後半。
531	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	皿	器形は著しく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅡA2ｂ類。14c後半。
532	13・14区　包含層（第3層）中	瓦質土器	鍋	口縁部は「L」字状を呈する。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	外面に煤附着。色調　灰黄色。鍋形タイプ：鉄鍋形ⅢＢ類。14ｃ中頃。
533	13・14区　包含層（第3層）中	瓦器	椀	断面三角形状の低い高台を貼り付ける。	底部内面　螺旋状暗文。	色調　暗灰色。和泉型瓦器椀Ⅳ期。13ｃ中頃～後半。
534	13・14区　包含層（第3層）中	瓦器	椀	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部外反。体部内面　横方向の暗文。	色調　暗灰色。和泉型瓦器椀Ⅳ-1期。13ｃ中頃。
535	13・14区　包含層（第3層）中	瓦器	椀	断面三角形状の低い高台を貼り付ける。	体部　内面　平行ミガキ。底部内面　螺旋状暗文。	色調　暗灰色。和泉型瓦器椀Ⅲ期。13ｃ前半。
536	13・14区　包含層（第3層）中	瓦器	椀	高台は断面三角形状で細く低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	体部内面　螺旋状ミガキ。底部内面　粗い平行ミガキ。口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　灰白色。和泉型瓦器椀Ⅲ-2期。13ｃ前半。
537	13・14区　包含層（第3層）中	瓦器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部外面に凹部をもつ。底部内面　不定方向のミガキ。	色調　暗灰色。
538	13・14区　包含層（第3層）中	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚。縁帯を形成する。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	色調　灰色。東播系須恵器鉢。Ｂ２類。13ｃ前半。
539	13・14区　包含層（第3層）中	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚。縁帯を形成する。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	口縁部外面に重ね焼き痕あり。色調　灰白色。東播系須恵器鉢。Ｂ２類。13ｃ前半。
540	13・14区　包含層（第3層）中	無釉陶器	擂鉢	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は斜め方向に切る。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。体部外面指頭圧痕。体部外面下半　ヘラケズリ調整。体部内面　5条1単位の擂目施文。	色調　黄灰色。備前焼擂鉢ⅢＡ類。14ｃ後半～15ｃ初頭。
541	13・14区　包含層（第3層）中	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は斜め方向に切る。口縁端部は内側、外側に僅かにつまみ出す。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。体部内面　7条1単位の擂目施文。	色調　にぶい赤褐色。備前焼擂鉢ⅢＢ類。14ｃ後半～15ｃ初頭。
542	13・14区　包含層（第3層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、断面三角形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　灰赤色。備前焼擂鉢ⅣＡ類。15ｃ前半～中頃。
543	13・14区　包含層（第3層）中	無釉陶器	甕	口縁端部を外方に僅かにつまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　暗灰色。備前焼甕ⅡＡ類。13ｃ後半。
544	13・14区　包含層（第3層）中	無釉陶器	甕	体部のみ遺存。	外面　綾杉文印花施文。自然釉附着。	色調　褐灰色。常滑焼。
545	13・14区　包含層（第3層）中	石製品	石鍋	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部はほぼ直立。口縁部外面に断面三角形状の小さい鍔をもつ。	口縁部・体部外面に成形時のノミ痕。	滑石製。Ⅲｅ類。15ｃ前半。
546	13・14区　包含層（第3層）中	石製品	硯	携帯用の小型硯。海部のみ残存。	器面に墨痕が残る。	色調　暗灰色。
547	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	皿	器形は著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部僅かに外反。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。内面の体部下半～底部　指頭圧痕。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
548	13・14区　包含層（第3層）中	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部僅かに外反。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。内面の底部と体部の界　強いナデ調整で僅かにくぼむ。内面の体部下半～底部　指頭圧痕。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
549	13・14区　包含層（第3層）中	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張、楕円形形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部外面　凝凹線2条。	色調　灰赤色。備前焼甕Ⅳ類。15ｃ前半。
550	13・14区　包含層（第3層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部はほぼ水平方向に切る。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　灰褐色。口縁部上面～内面　自然釉附着。備前焼擂鉢ⅡＢ類。13ｃ後半～14ｃ前半。
551	13・14区　包含層（第3層）中	施釉陶器	壷？	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内外面とも露胎。外面に僅かに灰釉が附着。底部外面　糸切り痕。	瀬戸・美濃系。
552	13・14区　包含層（第3層）中	施釉陶器	天目茶碗	体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに屈曲。口縁端部は尖り気味。	内外面とも鉄釉施釉。暗オリーブ色に発色。外面の体部下半以下露胎。露胎部に鉄泥漿塗布。	瀬戸・美濃系。中Ⅱ期。14ｃ前半。
553	13・14区　包含層（第3層）中	施釉陶器	皿	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。	瀬戸・美濃系。灰釉陶器。直線大皿。後Ⅱ期。15ｃ前半。
554	13・14区　包含層（第3層）中	施釉陶器	皿	平底。小さく低い高台を削り出す。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。底部内面　輪状に釉掻き取り。底部外面　露胎。糸切り痕が残る。	瀬戸・美濃系。灰釉陶器。黄瀬戸皿。大窯Ⅲ期。16ｃ後半。
555	13・14区　包含層（第3層）中	施釉陶器	皿	高台は断面台形状を呈し低い。	内外面とも施釉。明オリーブ灰色に発色。底部内面・高台畳付にそれぞれ砂目跡3箇所。	肥前系。唐津。Ⅱ期。17ｃ前半。
556	13・14区　包含層（第3層）中	青磁	碗	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面　片切り彫で草花文施文。内外面とも青磁釉施釉。灰オリーブ色に発色。	龍泉窯系青磁劃花文碗。青磁碗Ⅲ-1B類。13ｃ中頃～14ｃ初頭。
557	13・14区　包含層（第3層）中	青磁	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	底部内面　櫛描き雷光文施文。内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。底部外面　露胎。	同安窯系青磁。12ｃ後半～13ｃ前半。
558	13・14区　包含層（暗灰色粗砂）中	土師器	鍋	丸底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に直上に延びる。口縁端部は斜め方向に端面をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。口縁部外面に凹線1条。外面の体部～底部　斜め方向の平行叩き目。	外面に煤附着。色調　にぶい褐色。羽釜形タイプ：播磨型Ⅲ類。16ｃ末～17ｃ前葉。
559	13・14区　包含層（暗灰色粗砂）中	施釉陶器	皿	比較的幅が広く低い高台を浅く削り出す。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は僅かに上方につまみ出す。内面の体部と底部の界段をもつ。	内外面とも灰釉施釉。灰白色に発色。外面の体部下半以下露胎。露胎部　にぶい橙色に発色。底部内面　砂目痕。	肥前系。唐津。Ⅱ期。17ｃ前半。
560	13・14区　包含層（Ⅱ面　整地土層）中	土師器	鍋	体部は下半で屈曲。口縁端部は斜め方向の端面をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。体部外面　粗い格子目状叩き目。	色調　にぶい橙色。羽釜形タイプ：播磨型Ⅲ類。16ｃ末～17ｃ前葉。
561	13・14区　包含層（Ⅱ面　整地土層）中	施釉陶器	天目茶碗	体部は内彎。口縁端部は尖り気味。	内外面とも鉄釉施釉。黒褐色に発色。	胎土・焼成とも堅緻。瀬戸・美濃系ｏｒ中国製天目茶碗。
562	13・14区　包含層（Ⅱ面　整地土層）中	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外反。	色調　白色。文様　外面　界線2条・龍文・界線2条。底部外面　界線2条・「大明成化年製」銘。内面　界線2条・雲龍文？。	比較的優品。明青花。16ｃ後半～17ｃ初頭。
563	13・14区　包含層（Ⅰ面　整地土層）中	土師器	皿	平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。底部外面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
564	13・14区　包含層（Ⅰ面　整地土層）中	土師器	皿	底部の器壁は非常に厚い。平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面未調整　糸切り痕。	口縁部に煤附着－灯明皿として使用。轆轤使用。色調　淡橙色。ⅢＡ類。17c中葉～18c前半。
565	13・14区　包含層（Ⅰ面　整地土層）中	土師器	焙烙	口縁部は著しく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は僅かに内傾して上方に延びる。口縁端部は斜め方向の端面をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　丁寧なナデ調整。体部外面下半　斜め方向の平行叩き目が残る。	外面に煤附着。色調　橙色。焙烙形ⅣＡ類。17ｃ中葉～後半。
566	13・14区　包含層（Ⅰ面　整地土層）中	無釉陶器	甕	口縁部は僅かに玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。内外面　自然釉附着、灰被り。光沢をもつ。	色調　灰白色（須恵質）。備前焼甕ⅢＡ類。14ｃ代。
567	13・14区　包含層（Ⅰ面　整地土層）中	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張、楕円形形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部外面　凹線2条。	色調　暗赤灰色。備前焼甕Ⅴ類。15ｃ後半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
568	13・14区　包含層(Ⅰ面　整地土層)中	無釉陶器	火入	平底。体部は僅かに内彎して、ほぼ直上に立ち上がり、体部上位で内側に屈曲、口縁部は内傾する。口縁端部は水平の端面をもつ。口縁部内面に凹部をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。底部外面　ナデ調整　糸切り痕をナデ消す。口縁部外面　自然釉附着　オリーブ灰色に発色。外面に縦耳状の把手を貼り付け。	丹波焼。17ｃ末～18ｃ中頃。
569	13・14区　包含層(Ⅰ面　整地土層)中	施釉陶器	入子？	体部直立。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　灰釉施釉。淡黄緑色に発色。体部内外面　露胎。	瀬戸・美濃系。
570	13・14区　包含層(Ⅰ面　整地土層)中	施釉陶器	椀	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的厚く高い。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。	内外面とも施釉　淡緑灰色に発色。高台裏に兎巾が残る。	肥前系。唐津。Ⅱ期。17ｃ前半。
571	13・14区　包含層(Ⅰ面　整地土層)中	施釉陶器	皿	幅が広く、低い高台を浅く削り出す。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	内面　灰釉施釉。灰色に発色。外面　露胎。高台裏にトキンが残る。底部内面　砂目痕　3箇所。	肥前系　唐津。Ⅰ-2期。16ｃ末～17ｃ初頭。
572	13・14区　包含層(Ⅰ面　整地土層)中	施釉陶器	皿	底部の器壁は非常に厚い。高台は粗く、低く削り出す。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面の底部と体部の界に段をもつ。内外面とも灰釉施釉。オリーブ黄色に発色。外面の体部下半以下露胎。底部内面　胎土目跡　1箇所。	肥前系　唐津。17ｃ初頭。
573	13・14区　包含層(Ⅰ面　整地土層)中	施釉陶器	壷	体部は内傾。口縁部は外方にひらく。口縁部上面に凹部をもつ。	外面　鉄釉を地釉として施釉した後、白濁釉を施釉。内面　露胎。	産地不明。
574	13・14区　包含層(Ⅰ面　整地土層)中	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。先端部欠損。	色調　にぶい黄橙色。
575	13・14区　包含層(Ⅰ面　整地土層)中	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。先端部欠損。	色調　にぶい黄橙色。
576	13・14区　包含層(Ⅰ面　整地土層)中	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。先端部欠損。	色調　灰黄褐色。
577	13・14区　包含層(Ⅰ面　整地土層)中	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。先端部欠損。	色調　赤褐色。
578	13・14区　包含層(Ⅰ面　整地土層)中	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。	色調　橙色。
579	13・14区　包含層(撹乱層他)　中	土師器	皿	若干上げ底気味の平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
580	13・14区　包含層(撹乱層他)　中	土師器	皿	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。	轆轤使用。色調　浅黄橙色。ⅢA類。17c中葉～18c前半。
581	13・14区　包含層(撹乱層他)　中	土師器	皿	底部の器壁は厚い。体部は短く斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部」内外面　強い回転ナデ調整。底部内面　ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。	口縁部に煤附着。色調　にぶい黄橙色。轆轤使用。ⅢB類。17ｃ中葉～18c前半。
582	13・14区　包含層(撹乱層他)　中	土師器	皿	底部の器壁は比較的厚い。平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。底部外面　未調整、糸切り痕。	口縁部に煤附着。色調　浅黄橙色。轆轤使用。ⅢA類。17c中葉～18c前半。。
583	13・14区　包含層(撹乱層他)　中	土師器	皿	平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部内面　ナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。	轆轤使用。色調　橙色。ⅢA類。17c中葉～18c前半。。
584	13・14区　包含層(撹乱層他)　中	土師器	焙烙	底型作り。器壁はやや厚い。平底。体部はほぼ直立。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　丁寧なナデ調整。	外面に煤附着。色調　にぶい褐色。焙烙形ⅣA類。17ｃ中葉～後半。
585	13・14区　包含層(撹乱層他)　中	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状を呈する。	内面～体部外面上半　ヨコナデ調整。内面の体部と口縁部の界　凹線1条。体部外面　指頭圧痕。体部内面　7条1単位の擂目施文。	焼成堅緻。色調　にぶい褐色。丹波焼。ⅡA類。17ｃ後半～18ｃ前半。
586	13・14区　包含層(撹乱層他)　中	施釉陶器	椀	底部の器壁は非常に厚い。高台は低い。体部は内彎気味に上方に延びる。	内外面とも灰釉施釉の後、白濁釉施釉。青味を帯びた灰色に発色（朝鮮唐津風）。高台脇以下露胎。	肥前系。唐津。Ⅱ期。17ｃ前半。
587	13・14区　包含層(撹乱層他)　中	施釉陶器	蓋	中央部に球形の摘みを貼り付け。かえりは比較的高い。	外面　白濁釉施釉の後、鉄釉・緑釉で巴状文施文。内面　露胎。	京焼系　明石・舞子産。
588	13・14区　包含層(撹乱層他)　中	色絵磁器	碗	高台は比較的幅が広い。体部は内彎。口縁端部は丸味をもつ。	色調　白色。文様　外面　赤絵で草花文・幾何学文・界線など施文。内面　幾何学文・草花文施文。赤以外の顔料は剥落して不明。	産地・時期とも不明。
589	13・14区　包含層(撹乱層他)　中	染付磁器	蓋	摘みは欠損。体部は内彎する。	色調　青味を帯びた白色。外面　呉須　界線2条・丸に吉・丸に鶴文を交互に施文・界線1条。内面　無文。受け部は露胎。	鉢蓋。産地不明。19ｃ前半以降か。
590	13・14区　包含層(撹乱層他)　中	染付磁器	皿	高台は比較的高い。体部は内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　無文。内面　鮮やかな呉須で荒磯に鷹文を施文。	産地不明。近世末～近代？
591	13・14区　包含層(撹乱層他)　中	染付磁器	蝋燭の火消し?	筒状に成形。	色調　白色。文様　外面　草花文施文。内面露胎。露胎部に煤附着。	産地不明。近代以降。
592	13・14区　包含層(撹乱層他)　中	染付磁器	御酒徳利	底部は浅い削りだし高台。体部は内彎。頸部は細長く、直立。口縁部　直立。	色調　白色。文様　外面　鮮やかな呉須で　草花文・松に梅花文・界線2条・蓮弁文を型紙摺で施文。	近代以降。
593	13・14区　包含層(撹乱層他)　中	無釉陶器	面子	無釉陶器片の縁辺を打ち欠いて成形。	外面は灰被り。内面　露胎。	色調　暗茶褐色。原体は丹波焼甕か？。
594	14区　SE01	無釉陶器	徳利	体部内傾。頸部直立。口縁部外反。口縁端部は丸味をもつ。	体部外面にヘラ記号。外面鉄泥漿塗布。大部分剥落	備前焼。船徳利。16c代。
595	14区　SE02	施釉陶器	椀	高台は断面長方形状で低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台脇以下露胎。底部内面　鉄絵で草花文施文。底部外面　壺形文スタンプ。	肥前系京焼風陶器。Ⅲ期～Ⅳ期。17ｃ中頃～18ｃ前半。
596	14区　SE02	瓦	平瓦	燻し瓦。「兵吉」銘の刻印あり。	表面はナデ調整。	色調　暗灰色。燻し瓦。
597	14区　SE02	瓦	井戸瓦	平面形状はほぼ正方形。僅かに内彎。	外面　ジグザク文施文。内外面ともヨコナデ調整。	色調　暗灰色。井戸瓦。
598	14区　SE19	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面長方形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。体部外面　ナデ調整。体部内面　7条1単位の擂目施文。内面の体部と口縁部の界　強いナデにより凹部をもつ。	色調　にぶい赤褐色。丹波焼。ⅠB3類。17ｃ中頃～18ｃ前半。
599	14区　SE19	施釉陶器	皿	巾が広く低い高台を粗く削り出す。底部外面にトキンが認められる。三日月高台。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内面の底部と体部の界　段がある。内外面とも全面に灰釉施釉。灰白色に発色。外面の体部下半以下露胎。底部内面　砂目痕　4箇所。	肥前系　唐津　17ｃ前半。
600	14区　SE19	青花磁器	碗	高台は巾が広く、比較的低い。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	色調　やや青味を帯びた白色。文様　外面　呉須　唐草文・界線1条。内面　界線2条　底部内面　草花文。	粗製の明青花。16ｃ後半。
601	14区　SE23	土師器	皿	器形は著しく歪む。平底。体部は短く、僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面、強いナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。Ⅳ B2類。14c後半。
602	14区　SE23	土師器	皿	器壁は比較的厚い。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に」延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に低い段をもつ。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅡA2a類。14c前半。
603	14区　SE23	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面、強いナデ調整。体部外面に凹部をもつ。内面の底部と体部界にも強いナデ調整。やや凹む。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　橙色。ⅡB1b類。14c前半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
604	14区　SE23	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面、強いナデ調整。内面の底部と体部界にも強いナデ調整。やや凹む。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅢA1類。14c前半。
605	14区　SE23	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面、強いナデ調整。体部内面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅡB1b類。14c前半。
606	14区　SE23	瓦質土器	羽釜	体部は僅かに内彎、斜め上方に延びる。口縁部外面に断面台形状の短い鍔を貼り付ける。口縁部はほぼ直立。口縁部上面は水平の端面をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面横方向のハケ目調整。体部外面　指頭圧痕。	口縁部外面に重ね焼き痕あり。色調　灰色。羽釜形タイプ：羽釜形A系列ⅡB類。14ｃ中頃。
607	14区　SE23	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹部をもつ。	口縁部外面に重ね焼き痕あり。色調　灰色。東播系須恵器鉢　D類。14ｃ前半。
608	14区　SE23	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は斜め方向に切る。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。色調　灰色。	色調　灰色。東播系須恵器鉢。B２類。13ｃ前半。
609	14区　SE23	無釉陶器	甕	頸部はほぼ直立。口縁部は外反。口縁端部は外方につまみ出し、丸味をもつ。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面　縦方向の粗いハケ目調整。体部内面　横方向のハケ目調整。	色調　灰白色（須恵質）。備前焼甕ⅡA類。13ｃ後半。
610	14区　SE23	無釉陶器	甕	頸部は僅かに外反。口縁部玉縁状に成形。	体部内面　板ナデ調整。外面　自然釉と灰被り。	色調　灰白色（須恵質）。備前焼甕ⅢA類。14ｃ代。
611	14区　SE23	施釉陶器	花瓶	低い脚部。　体部は内弯気味に内傾。	底部外面未調整。糸切り痕が残る。外面灰釉施釉（淡灰緑色に発色）。内面ロクロ目明瞭。	瀬戸・美濃系。花瓶Ⅰ類。中Ⅱ～Ⅲ期。14ｃ前半～中頃。
612	14区　SK06	土師器	Ⅲ	平底　短い体部が直線的に外上方へ延びる。口縁端部は丸味をもって収める。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部にかけて指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
613	14区　SK06	土師器	Ⅲ	器面の摩滅が著しい。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	色調　褐灰色。轆轤未使用。
614	14区　SK06	土師器	Ⅲ	器壁は比較的厚い。平底　体部は緩やかに外上方へ延びる。底部に比して体部口縁部の器壁は厚い。口縁部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	口縁部に煤附着－灯明Ⅲとして使用。轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
615	14区　SK06	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	内外面に煤附着－灯明Ⅲとして使用。色調　橙色。轆轤未使用。
616	14区　SK06	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は不明瞭。体部はは緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　不定方向のナデ調整。外面の体部下半～底部にかけて指頭圧痕。	色調　灰黄褐色。轆轤未使用。
617	14区　SK06	土師器	Ⅲ	平底　体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部の器壁は厚く、端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部にかけて指頭圧痕。内外面ナデ調整。内面の底部中央　指押さえ。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
618	14区　SK06	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
619	14区　SK06	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く緩やかに外上方へ延びる。口縁端部は尖り気味。	内・外面共横ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
620	14区　SK06	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。特に口縁部外面には強いヨコナデ調整を加える。口縁部外面に段。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
621	14区　SK06	土師器	Ⅲ	器形は大きく歪む。平底（凹凸が著しい）底部と体部の界は不鮮明。体部は緩やかに外上方へ延びる。口縁端部は丸味を帯びる。	内面～体部外面　ナデ調整。特に口縁部外面には強いナデ調整を加える。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
622	14区　SK06	土師器	Ⅲ	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。特に口縁部外面には強いヨコナデ調整を加える。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
623	14区　SK06	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。底部と体部の界は大きく屈曲。平底。体部は直線的に斜め上方へ立ち上がる。口縁端部は丸味を帯びる。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。口縁部外面強いナデ調整により若干凹む。内面の底部と体部の界ナデ調整により若干凹む。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
624	14区　SK06	土師器	Ⅲ	器壁は比較的厚い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
625	14区　SK06	土師器	Ⅲ	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に浅い凹部をもつ。底部内面　不定方向のナデ調整。外面の体部下半　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
626	14区　SK06	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁端部は丸味を帯びる。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。14ｃ代か。
627	14区　SK06	土師器	Ⅲ	器壁は比較的厚い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指オサエ。	口縁部に煤附着－灯明Ⅲとして使用。色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
628	14区　SK06	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め方に立ち上がる。口縁端部は丸味を帯びる。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に段をもつ。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。粗製。
629	14区　SK06	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。特に口縁部外面には強いヨコナデ調整を加える。	内外面　煤附着－灯明Ⅲとして使用。轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
630	14区　SK06	土師器	鍋	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は僅かに内傾して斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	体部内面　板状工具による削り。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目。底部外面　ナデ調整。	底部外面　煤附着。色調　にぶい赤褐色。焙烙形ⅣA類。17ｃ中葉～後半。
631	14区　SK06	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部上面沈線１条。	内外面ともヨコナデ調整。内面の体部と口縁部の界　低い段をもつ。内面　７条１単位の擂目施文。	胎土中に砂粒を含む。色調　にぶい赤褐色。丹波焼。ⅠB2（クシ）類。17ｃ中葉～末。
632	14区　SK07	無釉陶器	擂鉢	口縁部は斜め方向に切る。口縁端部は内側につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　灰赤色。備前焼擂鉢ⅢC類　14ｃ後半～15ｃ初頭。
633	14区　SK12	施釉陶器	Ⅲ	幅広の三ケ月高台を浅く削り出す。体部は緩るやかに外上方へ立ち上がり、体部中位で屈曲する。口縁端部尖り気味に収める。体部と底部界に一段段をもつ。	内面～外面口縁部上半　灰釉施釉（淡灰緑色に発色）以下は露胎。底部内面砂目跡３ケ所	肥前系陶器（唐津）17ｃ前半
634	14区　SK22	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　灰白色。
635	14区　SK22	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界　大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面中央に段をもつ。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。底部内面指オサエ痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
636	14区　SK29	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。	色調　にぶい橙色。轆轤使用。ⅢB類。17ｃ中葉～18c前半。
637	14区　SK29	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部内面　ナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。底部内面　穿孔１箇所。	色調　にぶい橙色。轆轤使用。ⅢB類。17ｃ中葉～18c前半。用途不明。
638	14区　SK29	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は斜め方向に切り、縁帯状に拡張。口縁端部は若干上方につまみ上げる。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。口縁内面に凹部をもつ。	焼成は完全に還元せず、軟質。色調　にぶい橙色。東播系須恵器鉢。D類。14ｃ前半。
639	14区　SK29	施釉陶器	Ⅲ	高台は幅が広く、低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	全面に銅緑釉施釉。暗黄緑色に発色。外面の体部下半以下露胎。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	肥前系　緑釉唐津　18ｃ前半。
640	14区　SK35	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	口縁部内外面に煤附着－灯明Ⅲとして使用。轆轤未使用。色調　橙色。
641	14区　SK35	土師器	椀	平底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面ヨコナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。体部内面～底部内面　煤附着。	色調　にぶい橙色。須恵器椀の模倣タイプか？。
642	14区　SK37	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面中央に段をもつ。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
643	14区 SD04	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に低い段をもつ。	口縁部に煤附着－灯明Ⅲとして使用。色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅡA5c類。17c中葉～後半。
644	14区 SD04	土師器	Ⅲ	底部の器壁は非常に厚い。平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面未調整　糸切り痕。	轆轤使用。色調　淡黄色。ⅢB類。17ｃ中葉～18c前半。
645	14区 SD04	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面未調整　糸切り痕。	轆轤使用。色調　浅黄色。ⅢB類。17ｃ中葉～18c前半。
646	14区 SD04	土師器	Ⅲ	底部の器壁は非常に厚い。体部は短く斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部内面　不定方向のナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。	色調　灰黄色。轆轤使用。ⅢB類。17ｃ中葉～18c前半。
647	14区 SD04	土師器	Ⅲ	底部の器壁は非常に厚い。平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面未調整　糸切り痕。	轆轤使用。色調　淡黄色。ⅢA類。17c中葉～18c前半。
648	14区 SD04	土師器	Ⅲ	底部の器壁は非常に厚い。平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面未調整　糸切り痕。	器面の摩滅が著しい。轆轤使用。色調　灰黄色。ⅢB類。17ｃ中葉～18c前半。
649	14区 SD04	土師器	焙烙	平底（やや丸底気味）体部と底部の界は明瞭。体部は内弯してやや内傾する。口縁部内傾。口縁端部は丸味をもつ。	体部内外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。底部内外面　ナデ調整。底部外面　未調整。	内外面とも煤附着。色調　橙色。焙烙形ⅣB類。18ｃ前半。
650	14区 SD04	土師器	焙烙	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は僅かに内彎して直上に延びる。口縁部上面は斜め方向に端面をもつ。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目。	外面に煤附着。色調　褐灰色。羽釜形タイプ：播磨型Ⅲ類。16ｃ末～17ｃ前葉。
651	14区 SD04	土師器	焙烙	底型作り。丸底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部はほぼ直立。口縁端部は丸味をもつ。	体部内面　ヘラナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	体部外面に煤附着。色調　赤褐色。焙烙形ⅣA類。17ｃ中葉～後半。
652	14区 SD04	瓦器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は屈曲。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。体部内面　不定方向の粗いミガキ。　暗文が残る。	色調　暗灰色。
653	14区 SD04	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張、楕円形形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。外面に自然釉附着。口縁部外面　凹線３条。	色調　赤灰色。備前焼甕Ⅵ類。16ｃ～17c前半。
654	14区 SD04	施釉陶器	椀	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が比較的広く、高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	内面　鉄釉施釉。赤黒色に発色。外面　白濁釉施釉。灰白色に発色。外面の体部下半以下露胎。	肥前系。唐津。Ⅱ期。17ｃ前半。
655	14区 SD04	青磁	Ⅲ	平底。体部緩やかに斜め上方に立ち上がり、中位で屈曲、口縁端部は尖り気味。内面の底部と体部の界に沈線１条。	底部内面　櫛描雷光文施文。内外面とも青磁釉施釉。オリーブ黄色に発色。底部外面露胎。	同安窯系青磁。12ｃ後半～13ｃ前半。
656	14区 SD04	瓦	軒丸瓦	巴文軒丸瓦。巴の尾は比較的長い。残存珠文数11。	内面　不定方向のナデ調整。器面の摩滅が著しい。	色調　暗灰色。燻し瓦。
657	14区　SD10	土師器	Ⅲ	体部～口縁部の器壁が非常に厚い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　橙色。
658	14区　SD10	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面　指オサエ。	色調　橙色。轆轤未使用。
659	14区　SD10	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
660	14区　SD10	土師器	鍋	体部はやや内傾。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。体部外面　粗い格子目状叩き目。	色調　にぶい橙色。羽釜形タイプ：播磨型Ⅲ類。16ｃ末～17ｃ前葉。
661	14区　SD10	瓦器	椀	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調製。内面　平行ミガキ。内面の体部下半～底部　格子状ミガキ。体部外面　指頭圧痕。	色調　暗青黒色。和泉型瓦器椀Ⅲ-1期。12ｃ後半。
662	14区　SD10	瓦器	椀	断面三角形状の小さく、低い高台を貼り付ける。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　ヨコナデ調整の後、ミガキ調整。体部外面　横方向のミガキ。平行暗文が認められる。体部外面下半　指オサエ　指頭圧痕。体部内面　平行ミガキ。平行暗文。底部内面　格子目状の暗文。	色調　暗灰色。和泉型瓦器椀Ⅲ-１期。12ｃ後半。
663	14区　SD10	瓦器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面　粗い平行ミガキ。口縁部内外面　ヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　暗灰色。
664	14区　SD10	瓦器	椀	高台は断面三角形状で非常に低い。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面　平行ミガキ。底部内面　粗い平行ミガキ。口縁部内外面　ヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　暗灰色。和泉型瓦器椀Ⅳ-1期。13ｃ中頃～後半。
665	14区　SD10	瓦器	椀	高台は断面三角形状で細く、低い。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁部内面に凹線１条。	内面　細かい平行ミガキ。底部内面　螺旋状ミガキ。口縁部内外面　ヨコナデ調整。底部外面ナデ調整。体部外面　指オサエ痕。	色調　暗黒色。和泉型瓦器椀Ⅲ-2期。13ｃ前半。
666	14区　SD10	瓦器	椀	高台は断面三角形状で幅がやや広く、低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面　やや細かい平行ミガキ。底部内面　粗い平行ミガキ。口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面　指オサエによる指頭圧痕。	色調　暗灰色。和泉型瓦器椀Ⅲ-2期。13ｃ前半。
667	14区　SD10	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に僅かに肥厚。断面三角形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁外面　灰被り。重ね焼き痕。	東播系須恵器鉢。B2類。13ｃ後半。
668	14区　SD10	須恵器	甕	頸部は短く直立。口縁部は外反。	口縁部内外面　強いヨコナデ調製。体部外面斜め方向の格子目状叩き目。	焼成はやや軟質で器面は摩滅する。東播系須恵器。
669	14区　SD10	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、断面三角形状に縁帯を形成する。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　櫛状工具で擂目施文。	色調　赤褐色。備前焼擂鉢ⅣA類。15ｃ前半～中頃。
670	14区　包含層（第1層）中	土師器	Ⅲ	器面は全体に大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
671	14区　包含層（第1層）中	土師器	皿	平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。底部内外面　ナデ調整。	口縁部に煤附着－灯明皿として使用。轆轤使用。近世。
672	14区　包含層（第1層）中	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。底部内外面　一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指オサエ、指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
673	14区　包含層（第1層）中	土師器	皿	平底。指オサエにより上方に突出。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。器壁は全体比較的厚い。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。外面の体部下半～底部及び体部内面　指頭圧痕。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　橙色。ⅢA2類。17ｃ中葉～18ｃ代。
674	14区　包含層（第1層）中	土師器	皿	底部の器壁は非常に厚い。平底。体部は短く直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。	全面に煤附着－灯明皿として使用。轆轤使用。色調　灰黄褐色。ⅢB類。17ｃ中葉～18c前半。
675	14区　包含層（第1層）中	土師器	皿	底部の器壁は比較的厚い。平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕（静止）	口縁部に煤附着－灯明皿として使用。轆轤使用。ⅢA類。17c中葉～18c前半。
676	14区　包含層（第1層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部外面　凹線２条。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　櫛状工具で擂目施文。	色調　にぶい赤褐色。備前焼擂鉢ⅧA類。17ｃ初頭。
677	14区　包含層（第1層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部外面　沈線２条。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　櫛状工具で擂目施文。	色調　暗赤褐色。備前焼擂鉢ⅧA類。17ｃ初頭。
678	14区　包含層（第1層）中	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張、楕円形形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。外面　凹線３条。内外面とも鉄泥漿塗布。	色調　暗赤褐色。備前焼甕Ⅵ類。16ｃ～17ｃ前半。
679	14区　包含層（第1層）中	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部上面に沈線１条。	内外面　ヨコナデ調整。口縁部内面　僅かに凹む。体部内面　６条１単位の擂目施文。体部外面　指頭圧痕。	色調　にぶい赤褐色。丹波焼。ⅠA2（クシ）類。17ｃ前半～後葉。
680	14区　包含層（第1層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は断面三角形状を呈する。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面ともヨコナデ調整。内外面　灰被り。	色調　にぶい黄褐色。丹波焼擂鉢ⅡA類。17ｃ後半～18ｃ前半。
681	14区　包含層（第1層）中	施釉陶器	擂鉢	平底。高台は幅が広く低い。	底部内面　７条１単位の擂目施文。内外面とも鉄釉施釉。内面の釉は使用のため剥落。	焼成はややあまい。瀬戸・美濃系。近世。
682	14区　包含層（第1層）中	施釉陶器	卸皿	底部の器壁は比較的厚い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は斜め方向に切る。	底部内面　ヘラ状工具で斜格子状に卸目施文。内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。底部外面　糸切り痕。	瀬戸・美濃系。灰釉陶器皿。中Ⅱ期。14ｃ前半。
683	14区　包含層（第1層）中	施釉陶器	椀	高台は断面台形状で端正。体部は斜め上方に立ち上がる。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台脇以下露胎。底部外面にスタンプで施文。	肥前系京焼風陶器。Ⅲ期～Ⅳ期。17ｃ中頃～18ｃ前半。
684	14区　包含層（第1層）中	施釉陶器	皿	高台は幅が広く低い削り出し高台。底部外面縮緬皺。僅かに兎巾が認められる。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面の底部と体部の界に浅い段をもつ。内外面とも全面に灰釉施釉。暗オリーブ灰色に発色。外面の体部下半以下露胎。底部内面　砂目痕4箇所。	肥前系。Ⅱ期。唐津　17ｃ前半。
685	14区　包含層（第1層）中	施釉陶器	椀	高台は比較的幅が広く高い。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも全面に灰釉施釉。浅黄橙色に発色。高台畳付の釉掻き取り。砂附着。	産地不明。19ｃ前半以降か。
686	14区　包含層（第1層）中	施釉陶器	皿	高台は断面台形状を呈し、端正。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台脇以下露胎。内面　鉄絵と赤絵で草花文施文。底部外面　スタンプで銘施文。	肥前系京焼風陶器。17ｃ後半～18ｃ前半。
687	14区　包含層（第1層）中	施釉陶器	天目茶碗	高台は断面台形状を呈し、比較的高い。高台裏にトキンが残る。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。	内外面とも鉄釉施釉。黒褐色に発色。外面の体部下半以下露胎。	肥前系。唐津。Ⅱ期。17ｃ前半。
688	14区　包含層（第1層）中	施釉陶器	蓋	円盤状。下面に受け部を貼り付け。	上面　白濁釉施釉。細かい貫入が走る。下面露胎。	産地不明。19ｃ前半以降か。
689	14区　包含層（第1層）中	青磁	皿	高台は幅が広く、比較的高い。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がり、中位で屈曲、口縁部は外方にひらく。口縁端部は尖り気味。	内外面とも青磁釉施釉。明緑灰色に発色。高台脇以下は露胎。底部内面は蛇ノ目状釉ハギ。	肥前系。17ｃ後半～18ｃ前半。
690	14区　包含層（第1層）中	瓦	軒丸瓦	巴文軒丸瓦。巴の尾は長い。珠文数　11。	外面　板ナデ調整。内面　ナデ調整。	色調　黒灰色。燻し瓦。
691	14区　包含層（第1層）中	瓦	鳥衾	巴の尾は比較的短い。残存珠文数　８。推定珠文数　12。	内外面ともナデ調整。	色調　暗灰色。燻し瓦。器面の摩滅が著しい。
692	15区　SX02	無釉陶器	鉢	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は逆「く」の字状に屈曲。外方にひらく。	内外面ともヨコナデ調整。外面の体部下半　板ナデ調整。内面　灰被り。	焼成　堅緻。色調　暗赤褐色。備前焼。16ｃ代。
693	15区　SX04	土師器	鍋	丸底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部はほぼ直上に延びる。上下のナデにより断面三角形状の鍔を形成。口縁部内傾。	口縁部内面～体部外面上半横ナデ調整。体部外面下半～底部外面斜め方向の平行叩き目。体部内面上半板ナデ調整。	底部～体部外面全体に煤附着。色調はにぶい橙色。羽釜形タイプ：播磨型B系列ⅠC類。15ｃ後半～16ｃ初頭。
694	15区　SK18	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張。断面楕円形状を呈する。口縁部外面に凹線３条。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　暗赤褐色。備前焼甕Ⅵ類。16ｃ～17c前半。
695	15区 SD01	土師器	皿	器形は全体に歪む。口縁部の器壁が非常に厚い。平底。中央部はやや凹む。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面　横ナデ調整。	色調はにぶい黄橙色。轆轤未使用。
696	15区 SD01	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲、体部は直線的に外上方へ延びる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。器形は全体に歪む。	内面～体部外面　横ナデ調整。口縁部内外面に強い横ナデ調整。底部外面指頭圧痕。	色調はにぶい黄橙色。轆轤未使用。
697	15区 SD01	土師器	皿	器壁は全体に薄い。器形は全体に歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面　横ナデ調整。口縁部内・外面強い横ナデ調整。体部外面は指頭圧痕が著しい。	色調は淡黄色。轆轤未使用。
698	15区 SD01	青磁	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的幅が広く、高い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	外面　広形蓮弁文を施文。底部内面　界線１条・草花文を印花で施文。内外面とも青磁釉施釉。暗黄緑色に発色。底部外面　蛇ノ目状釉ハギ。	龍泉窯系青磁蓮弁文碗。15ｃ代。
699	15区　包含層（第3層他）中	土師器	皿	器壁は全体に非常に厚い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　横ナデ調整。	色調は淡黄灰色。轆轤未使用。
700	15区　包含層（第3層他）中	土師器	皿	底部の器壁は非常に厚い。体部は非常に短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。底部外面糸切りの後ナデ調整。	口縁部２ヶ所煤附着（灯明皿として使用）色調は浅黄色。轆轤使用。ⅢA類。17c中葉～18c前半。
701	15区　包含層（第3層他）中	土師器	皿	器壁は比較的厚い。平底で中央部はやや凹む。底部と体部の界は大きく屈曲し、口縁部は外方にひらく。	内面～口縁部外面　横ナデ調整。体部内・外面強い横ナデ調整。底部外面指頭圧痕。	色調は暗赤褐色。轆轤未使用。
702	15区　包含層（第3層他）中	土師器	坏身	平底。底部と体部の界は大きく屈曲、体部は直線的に斜め上方へ延びる。口縁端部は尖り気味。口縁部内面に沈線１条。	内面～底部外面　回転ナデ調整。内面は平滑に仕上げる。底部外面ヘラ切りの後ナデ調整。	色調は橙色。７Ｃ代か？
703	15区　包含層（第3層他）中	施釉陶器	皿	高台は細く、低く削り出す。高台の断面形状は三角形状。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	体部外面ヘラ削り。内・外面とも灰釉施釉、オリーブ黄色に発色。	底部外面に重ね焼痕（輪トチか？）。瀬戸・美濃系。黄瀬戸灰釉丸皿。大窯Ⅲ期。16ｃ後半。
704	15区　包含層（第3層他）中	施釉陶器	皿	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は上方につまみ出す。	口縁部内外面　灰釉施釉。淡黄緑色に発色。体部内外面　露胎。	瀬戸・美濃系。灰釉折縁小皿。後Ⅳ期。15ｃ後半。
705	15区　包含層（第3層他）中	白磁	皿	高台は幅が広く低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内外面とも透明釉施釉。淡黄灰色に発色。高台脇以下露胎。底部外面　トキン状に削り残す。	焼成はややあまい。華南産白磁ｏｒ近世陶器か？。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
706	15区　包含層（第3層他）中	施釉陶器	椀	比較的細く高い高台を粗く削り出す。底部の器壁は非常に厚い。削りが粗い為高台は極端な三日月高台状を呈す。体部は僅かに内彎して、斜め上方に延びる。	内・外面共、灰釉施釉。淡黄灰色に発色。外面の体部下半（高台脇）以下露胎。	肥前系。唐津。Ⅱ期。17C前半。
707	15区　包含層（第3層他）中	青磁	碗	器壁は比較的厚い。体部は内彎。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁無文碗。E類。15ｃ代。
708	15区　包含層（第3層他）中	青磁	碗	体部は内彎。口縁端部は丸味をもつ。	外面　線描きの細蓮弁文を施文。剣頭と縦線は一致しない。内面　ヘラ描き施文。内外面とも青磁釉施釉　暗緑灰色に発色。	龍泉窯系青磁蓮弁文碗。B-Ⅳ'類。16ｃ代。
709	15区　包含層（第3層他）中	青磁	碗	体部は内彎。口縁端部は丸味をもつ。	外面　線描きの細蓮弁文施文。剣頭は描かれない。内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁細蓮弁文碗。B-Ⅳ'類。16ｃ代。
710	15区　包含層（第3層他）中	青磁	碗	口縁端部は丸味をもつ。	外面　線描きの細蓮弁文施文。剣頭と縦線は一致する。内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁細蓮弁文碗。B-Ⅳ類。15ｃ後半～16ｃ代。
711	15区　包含層（第3層他）中	青磁	碗	体部は内彎。口縁端部は丸味をもつ。	外面　線描きの細蓮弁文施文。剣頭と縦線は一致しない。内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁細蓮弁文碗。B-Ⅳ'類。16ｃ代。
712	16区　SK13	土師器	皿	器形は全体に歪む。器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	色調　にぶい黄橙色。
713	16区　SK14	土師器	羽釜	体部は内彎する。口縁部はやや内傾する。口縁部上面は水平方向に端面をもつ。口縁部外面に断面台形状の幅の広い鍔を貼り付ける。	口縁部内外面　ハケ目調整の後、ヨコナデ調整。体部外面上半　一部指オサエの後、ヨコナデ調整。体部外面下半　縦・横方向の粗いハケ目調整。体部内面　横方向の細かいハケ目調整。	体部外面煤附着。口縁部外面　薄く油煙が附着。色調　暗灰黄色。羽釜形タイプ：羽釜形B系列Ⅰ類。14ｃ前半。
714	16区　SK14	土師器	羽釜	体部は内彎する。口縁部はやや内傾する。口縁端部は屈曲し、短く直立する。口縁端部上面は水平に端面をもつ。口縁部外面　微かに凹線２条。	口縁部外面～体部外面上半　ヨコナデ調整。体部外面下半　縦方向の粗いハケ目調整。体部外面下半～底部　多方向の細かいハケ目調整。体部内面　横方向の細かいハケ目調整。	外面に煤附着。色調　浅黄橙色。羽釜形タイプ：羽釜形B系列Ⅰ類。14ｃ前半。
715	16区　SK14	土師器	羽釜	丸底。体部は内彎する。口縁部はやや内傾する。口縁端部は丸味をもつ。口縁部外面に断面台形状の幅の広い鍔を貼り付ける。	口縁部内外面　ハケ目調整の後、ヨコナデ調整。体部外面上半　ヨコナデ調整の後、指オサエ。体部外面下半　縦方向の粗いハケ目調整の後、指オサエ。体部内面　横方向の細かいハケ目調整。	胎土中に金雲母を含む。体部外面に煤附着。色調　にぶい黄橙色。羽釜形タイプ：羽釜形B系列Ⅰ類。14ｃ前半。
716	16区　SK14	土師器	羽釜	体部は内彎する。口縁部はやや内傾する。口縁端部は丸味をもつ。口縁部外面に断面台形状の幅の広い鍔を貼り付ける。	口縁部内外面　ハケ目調整の後、ヨコナデ調整。体部外面上半　ヨコナデ調整。体部外面下半縦方向の粗いハケ目調整。体部外面下半～底部多方向のハケ目調整。体部内面　横方向のハケ目調整。	胎土中に石粒を含む。体部外面に煤附着。下半部により多く附着。色調　にぶい黄橙色。羽釜形タイプ：羽釜形B系列Ⅰ類。14ｃ前半。
717	16区　SK14	土師器	羽釜	体部は内彎する。口縁部はやや内傾する。口縁部上面は水平方向に端面をもつ。口縁部外面に断面台形状の幅の広い鍔を貼り付ける。口縁部外面　浅い凹線３条。	口縁部内外面　横方向のハケ目調整の後、ヨコナデ調整。体部外面上面　指オサエの後、ヨコナデ調整。体部外面下半　縦方向の粗いハケ目調整。体部内面　横方向の細かいハケ目調整。	体部外面に煤附着。特に体部下半に煤が多く附着する－カマドの受け口と関連。色調　浅い黄橙色。羽釜形タイプ：羽釜形B系列Ⅰ類。14ｃ前半。
718	17区　SX01	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部下端を外方につまみ出す。片口をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面４条１単位の擂目施文。	焼成はややあまい。色調　明赤褐色。備前焼擂鉢ⅤA類。15ｃ後半。
719	17区　SK01	青磁	皿	体部は外反。口縁端部は丸味をもつ。口縁部輪花状に整形。	内面　片切彫で草花文施文。内外面とも青磁釉施釉。オリーブ色に発色。	龍泉窯系青磁。輪花皿。16ｃ代。
720	18区　SX07	施釉陶器	皿	体部は直線的に斜め上方に延びる。	内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色	瀬戸・美濃系。灰釉折縁皿。
721	18区 SX81	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面横ナデ調整。口縁部内・外面強い横ナデ調整。体部外面中央にかすかに段をもつ。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。
722	18区 SX81	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面横ナデ調整。口縁部内・外面強い横ナデ調整。外面の口縁部下面に浅い段をもつ。	色調は橙色。轆轤未使用。
723	18区 SX81	土師器	皿	器壁は比較的厚い。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
724	18区 SX81	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がり、体部下半で僅かに屈曲して、外上方へ延びる。口縁端部は内側に折り込み、口縁部内面は僅かに凹む。全体に器壁は薄い。	内面～口縁部外面丁寧な横ナデ調整。器面を平滑に仕上げる。口縁部内・外面は強いヨコナデ調整。外面の体部外面～底部指圧痕。	色調は浅い黄橙色。轆轤未使用。
725	18区 SX81	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半　指頭圧痕。	色調　浅黄橙色。轆轤未使用。
726	18区 SX81	瓦質土器	羽釜	体部は僅かに内彎してほぼ直上に延びる。断面台形状の比較的幅の広い鍔を貼り付け。口縁部は内傾。口縁部外面に鋳造の鉄釜を模倣した沈線を３条施文。	口縁部内・外面強い回転ナデ調整。体部内面横方向の粗いハケ目調整。体部外面横方向のヘラ削り調整。	色調は褐灰色。鋳造の鉄製羽釜を模倣した瓦質羽釜。羽釜形タイプ：羽釜形B系列ⅢB類。16ｃ中葉～後半。
727	18区 SX81	無釉陶器	鉢（水差し）	平底。体部内彎。口縁端部直立。粘土紐巻き上げ成形か？	体部内面及び外面不定方向のヘラ削り。内・外面鉄泥漿塗布。器面に光沢をもつ。内面～口縁部外面胡麻状に灰被り。	備前焼。16ｃ後半～17ｃ前半。
728	18区 SX81	施釉陶器	卸皿	体部は斜め上方に延びる。口縁部は僅かに内側につまみ出す。	体部内面に卸目施文。口縁部内面～体部外面に灰釉施釉。淡黄緑色に発色。	瀬戸・美濃系。灰釉陶器卸皿。後Ⅱ期。15ｃ前半。
729	18区 SX81	白磁	碗	器壁は比較的薄い。口縁端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	華南産白磁。白磁D群。15ｃ代。
730	18区 SX81	土製品	土錘	形態は棒状。穿孔１箇所。	器面は指ナデ調整。平滑。	色調　にぶい黄橙色。
731	18区 SX81	土製品	土錘	棒状型に粘土を巻きつけて成形。体部外面に棒状工具で溝を入れる。	外面　ナデ調整。成形時の指頭圧痕が残る。	色調　灰黄色。焼成　比較的堅緻。
732	18区　SX102	土師器	皿	平底。体部は短く緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。底部外面　指オサエ。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
733	18区　SX102	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め方向に延びる。口縁部は斜め方向に切り、端部は上方につまみ上げる。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	色調　灰色。東播系須恵器。Ｃ１類。13ｃ後半。
734	18区　SK74	土師器	皿	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。口縁側面に端面をもつ。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	内外面に煤附着－灯明皿として使用。色調　にぶい橙色。
735	18区　SK74	土師器	皿	器形は全体に大きく歪む。器壁は比較的薄い。平底。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。口縁側面に端面をもつ。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　浅黄橙色。
736	18区　SK77	土師器	皿	器壁は全体的に厚く成形。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部はやや尖り気味。器形は全体的に歪む。	内・外面共、ヨコナデ調整。体部外面に強いヨコナデ調整。	口縁部内面に１ヶ所煤附着。色調は淡赤褐色。轆轤未使用。ⅣC1類。15c前半。
737	18区　SK77	土師器	皿	器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部外面　指頭圧痕。	色調　橙色。轆轤未使用。ⅡA3b類。15c後半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
738	18区　SK77	土師器	Ⅲ	器壁は比較的薄い。やや上げ底気味の平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	色調　橙色。轆轤未使用。ⅢB2a類。15c後半。
739	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。底部の中央部を指で押さえて凹ませる。(ヘソ皿風) 体部は緩やかに直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界に浅い凹部をもつ。	内・外面共、ヨコナデ調整。体部外面に指頭圧痕が残る。	色調は淡黄褐色。轆轤未使用。ⅢB2a類。15c後半。
740	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は屈曲。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。ⅣC2a類。15c後半。
741	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。底部は若干凹ませる。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界に浅い凹部をもつ。	内面～口縁部外面横ナデ調整。外面の底部～体部指頭圧痕。	色調は淡赤褐色。轆轤未使用。ⅢB1類。15c前半。
742	18区　SK77	土師器	Ⅲ	器形は著しく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅣC1類。15c前半。
743	18区　SK77	土師器	Ⅲ	器形は著しく歪む。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	内面に煤附着－灯明皿として使用。色調にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅢB2ｂ類。15c後半。
744	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。指オサエによりやや上方に突出。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。器壁は全体に厚い。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部指頭圧痕。	色調は橙色。轆轤未使用。ⅣC2a類。15c後半。
745	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。底部ヘソ皿状に僅かに突出。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面横ナデ調整。口縁部内・外面強い横ナデ調整。	口縁部全面に煤附着(灯明皿として使用)色調は浅い黄橙色。轆轤未使用。ⅢB2a類。15c後半。
746	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。ⅡB3a類。15c後半。
747	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。底部外面の中央部を僅かに凹ませる。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。外面の底部～体部指頭圧痕。	色調は淡黄褐色。轆轤未使用。ⅣC2a類。15c後半。
748	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅢB2a類。15c後半。
749	18区　SK77	土師器	Ⅲ	器壁は全体に薄い。平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。外面は指頭圧痕が明瞭に残る。	色調は淡黄褐色。ⅢB2a類。15c後半。
750	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。体部外面に指頭圧痕。	色調は淡黄褐色。轆轤未使用。ⅢB1類。15c前半。
751	18区　SK77	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面横ナデ調整。外面の底部～体部指頭圧痕。	色調は淡黄褐色。轆轤未使用。ⅡB2b類。15c前半。
752	18区　SK77	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅢB1類。15c前半。
753	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面及び外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅣC1類。15c前半。
754	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	外面全面に煤附着。色調は灰白色。轆轤未使用。ⅡB3a類。15c後半。
755	18区　SK77	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。底部の器壁は薄い。底部外面は指オサエで凹ませる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面横ナデ調整。外面の底部～体部指頭圧痕。	色調は淡赤褐色。轆轤未使用。ⅢB2a類。15c後半。
756	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　橙色。轆轤未使用。ⅣC1類。15c前半。
757	18区　SK77	土師器	Ⅲ	器壁は、全体に比較的厚い。器形は全体に歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。体部外面指頭圧痕。	色調は淡赤褐色。轆轤未使用。ⅣC2b類。15c後半。
758	18区　SK77	土師器	Ⅲ	体部はやや外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅣC1類。15c前半。
759	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅣC2a類。15c後半。
760	18区　SK77	土師器	Ⅲ	器壁は比較的薄い。平底。体部はやや外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界に凹部をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。底部内面　ナデ調整。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅣC2b類。15c後半。
761	18区　SK77	土師器	Ⅲ	器壁は比較的薄い。やや上げ底気味の平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	口縁部に煤附着－灯明皿として使用。色調　浅黄橙色。轆轤未使用。ⅣC2a類。15c後半。
762	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に微かに指頭圧痕。	口縁部に煤附着－灯明皿として使用。色調　橙色。轆轤未使用。ⅣC2b類。15c後半。
763	18区　SK77	土師器	Ⅲ	体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　浅黄橙色。轆轤未使用。ⅣC2a類。15c後半。
764	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅢB2ｂ類。15c後半。
765	18区　SK77	土師器	Ⅲ	器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　二方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　黄灰色。轆轤未使用。ⅢB2ｂ類。15c後半。
766	18区　SK77	土師器	Ⅲ	器壁は薄い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面　横方向のハケ目調整の後、ナデ調整。作りは比較的丁寧。	色調　浅黄橙色。轆轤未使用。ⅣC2b類。15c後半。
767	18区　SK77	土師器	Ⅲ	器壁は薄い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。作りは比較的丁寧。	色調　灰白色。轆轤未使用。ⅣC2b類。15c後半。
768	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がり、体部下半で僅かに屈曲して、外上方へ延びる。口縁端部は内側に折り込み、口縁部内面は僅かに凹む。	内面～口縁部外面丁寧なヨコナデ調整。器面を平滑に仕上げる。口縁部内・外面は強いヨコナデ調整。	色調は灰黄灰色。轆轤未使用。ⅣC2b類。15c後半。
769	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は緩やかに、ほぼ直線的に斜め上方へ延びる。口縁端部は尖り気味。口縁部内面は僅かに凹む。器壁は全体に非常に薄い。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。器面を平滑に仕上げる。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。口縁部内面ハケ目調整。外面体部～底部指頭圧痕。	色調は浅い黄橙色。轆轤未使用。ⅣC2b類。15c後半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
770	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面共、丁寧なヨコナデ調整。口縁端部は強いヨコナデ調整。	体部外面に煤附着。轆轤未使用。色調は淡黄褐色。ⅢB2a類。15c後半。
771	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がり、体部下半で僅かに屈曲して、外上方へ延びる。口縁端部は内側に折り込み、口縁部内面は若干凹む。	内面～口縁部外面丁寧なヨコナデ調整。器面を平滑に仕上げる。口縁部内・外面は強いヨコナデ調整。	色調は灰黄灰色。轆轤未使用。ⅣC2b類。15c後半。
772	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。器面を平滑に仕上げる。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調は浅い黄橙色。轆轤未使用。ⅡA3ｂ類。15c後半。
773	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は若干屈曲。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。器面を平滑に仕上げる。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。	色調は浅い黄橙色。轆轤未使用。ⅢB2a類。15c後半。
774	18区　SK77	土師器	Ⅲ	器壁は薄い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面下半　僅かに指頭圧痕が残る。作りは比較的丁寧。	色調　浅黄橙色。轆轤未使用。ⅢB2ｂ類。15c後半。
775	18区　SK77	土師器	Ⅲ	器壁は薄い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面下半　指頭圧痕。全体に作りは丁寧。	色調　浅黄橙色。轆轤未使用。ⅡB3a類。15c後半。。
776	18区　SK77	土師器	Ⅲ	全体に器壁は薄い。底部の器壁は特に薄い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内・外面共、丁寧なヨコナデ調整。器面は平滑。	色調は淡黄灰色。轆轤未使用。大型Ⅲ。ⅢB2ｂ類。15c後半。
777	18区　SK77	土師器	Ⅲ	器壁は全体に薄手に成形。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は、丸味をもつ。	内・外面共、ヨコナデ調整。口縁部内・外面強い横ナデ調整。	色調は淡黄褐色。轆轤未使用。ⅢB2a類。15c後半。
778	18区　SK77	土師器	Ⅲ	器壁は全体に薄手に成形。平底（やや丸底風）。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面共、丁寧なヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹部をもつ。	色調は淡黄褐色。轆轤未使用。ⅢB2ｂ類。15c後半。
779	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。体部は上位で屈曲、口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内外面　ナデ調整。	色調　にぶい黄褐色。轆轤未使用。ⅡB3a類。15c後半。
780	18区　SK77	土師器	Ⅲ	やや丸底気味の平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は内側に折り曲げ、口縁内面は僅かに凹む。器壁は全体に薄い。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。器面を平滑に仕上げる。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。ⅢB2ｂ類。15c後半。
781	18区　SK77	土師器	Ⅲ	器壁は全体に非常に薄い。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は内側に折り曲げ、つまみ出す。口縁部内面に浅い凹部をもつ。	口縁部内面ハケ目調整。内面～口縁部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。	色調は浅い黄橙色。轆轤未使用。ⅢB2ｂ類。15c後半。
782	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部はやや外反気味に斜め上方へ延びる。口縁端部は丸味をもつ。器形は全体に歪む。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。焼成後底部を中心に、10ヵ所以上穿孔→用途不明。	色調はにぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅣC2a類。15c後半。
783	18区　SK77	土師器	Ⅲ	平底。底部の径は比較的小さい。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部指頭圧痕。	色調は浅い黄橙色。轆轤未使用。ⅣC2a類。15c後半。
784	18区　SK77	土師器	Ⅲ	器壁は全体に厚い。底部中央は若干上方に突出する。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部指頭圧痕。	色調は浅い黄橙色。轆轤未使用。ⅣC2a類。15c後半。
785	18区　SK77	土師器	Ⅲ	器壁は、全体に薄い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。器形は全体に歪む。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面は強いヨコナデ調整。指オサエで底部中央を僅かに上方に突出させる。外面の体部～底部指頭圧痕。	色調は浅い黄橙色。轆轤未使用。ⅡA3ｂ類。15c後半。
786	18区　SK77	土師器	羽釜	丸底。体部は内彎する。口縁部は僅かに内傾する。口縁部外面に断面台形状の鍔を貼り付ける。口縁部外面　凹線３条。鋳造の鉄製羽釜を模倣。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面上半　横方向のヘラ削り調整。体部外面下半縦・斜め方向のヘラ削り調整。体部内面　ハケ目調整。	外面に煤附着。色調　灰黄褐色。羽釜形タイプ：羽釜形B系列ⅡC類。15ｃ中頃。
787	18区　SK77	瓦質土器	羽釜	丸底。体部は内彎する。口縁部は僅かに内傾。口縁端部は丸味をもつ。口縁部外面に断面台形状の幅の広い鍔を貼り付ける。口縁部外面に凹線２条。鋳造の鉄製羽釜を模倣。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面上端　横方向のヘラ削り調整。体部外面　縦方法のヘラ削り調整。底部外面　横斜め方向のヘラ削り調整。体部内面　斜め方向のハケ目調整。	外面に煤附着。色調　灰黒色。羽釜形タイプ：羽釜形B系列ⅡC類。15ｃ中頃。
788	18区　SK77	瓦質土器	羽釜	丸底。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。幅の広い断面長方形状の鍔を貼り付け。口縁部はやや内傾。口縁部外面凹線３条（鋳造の鉄製羽釜を模倣）	口縁部内・外面強いヨコナデ調整。体部内面上半横方向のハケ目調整。体部内面下半斜め方向のハケ目調整。体部外面上半横方向のヘラ削り。	外面煤附着。色調は黒灰色。鋳造の鉄製羽釜の模倣タイプ。羽釜形タイプ：羽釜形B系列ⅢA類。15ｃ後半～16ｃ初頭。
789	18区　SK77	瓦質土器	羽釜	丸底。体部は内彎する。口縁部は僅かに内傾する。口縁部外面に断面台形状の幅の広い鍔を貼り付ける。口縁部外面に凹線３条。鋳造の鉄製羽釜を模倣。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面上半　横方向のヘラ削り調整。体部外面下半　横斜め方向のヘラ削り調整。体部内面　横斜め方向のハケ目調整。	色調　暗灰色。羽釜形タイプ：羽釜形B系列ⅡB類。15ｃ前半。
790	18区　SK77	瓦質土器	羽釜	口縁部はほぼ直立。口縁部外面に断面台形状の幅の広い鍔を貼り付ける。口縁部外面　凹線３条。鋳造の羽釜を模倣。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　斜め方向のナデ調整。体部外面　横方向のヘラ削り調整。	色調　暗灰色。羽釜形タイプ：羽釜形B系列ⅢA類。15ｃ後半～16ｃ初頭。
791	18区　SK77	瓦質土器	羽釜	口縁部は僅かに内傾。口縁部外面に断面台形状の幅の広い鍔を貼り付ける。口縁部外面　凹線３条。鋳造の羽釜を模倣。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。口縁部内面　ハケ目調整の後、ヨコナデ調整。体部内面　ハケ目調整・板ナデ調整。体部外面　ヘラ削り調整。	色調　暗灰色。羽釜形タイプ：羽釜形B系列ⅡB類。15ｃ前半。
792	18区　SK77	瓦質土器	羽釜	体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。比較的幅の広い断面台形状の鍔を貼り付け。口縁部はやや内傾。口縁部外面凹線３条（鋳造の鉄製羽釜を模倣）	口縁部内・外面強いヨコナデ調整。口縁部内面ハケ目調整。体部内面上半横方向の板ナデ調整。体部内面下半縦方向の板ナデ調整。体部外面上半横方向のヘラ削り、体部外面下半斜め方向のヘラ削り。	外面煤附着。色調は黒灰色。鋳造の鉄製羽釜の模倣タイプ。口縁部外面に２ヶ所に２個ずつ計４個の穿孔。羽釜形タイプ：羽釜形B系列ⅢA類。15ｃ後半～16ｃ初頭。
793	18区　SK77	土師器	鍋	丸底。底部と体部の界は若干屈曲。体部は直線的に斜め上方へ延びる。口縁部内側に玉縁状に肥厚。内面の口縁部下面に凹部をもつ。	粘土紐巻上げ成形。体部外面～底部外面斜め方向の平行叩き目が残る。体部内面粗い横方向のハケ目調整。口縁部内外面は強いヨコナデ調整。	色調は橙色。外面に煤附着。鍛造の鉄鍋を模倣。鉄鍋タイプ：鉄かぶと形Ⅰ類。15ｃ前半。
794	18区　SK77	土師器	鍋	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は内側に肥厚、楕円形状を呈する。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面ハケ目調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目が残る。	外面に煤附着。色調　橙色。鍋形タイプ：鉄かぶと形Ⅰ類。15ｃ前半。
795	18区　SK77	土師器	鍋	丸底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は内側に若干肥厚。口縁部内面に若干凹部をもつ。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　一部ハケ目調整。ナデ調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目。底部外面　平行叩き目をナデ消す。	外面に薄く煤附着。色調　にぶい赤褐色。鍋形タイプ：鉄かぶと形Ⅰ類。15ｃ前半。
796	18区　SK77	土師器	鍋	口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面ナデ調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目が残る。	外面に煤附着。色調　にぶい橙色。鍋形タイプ：鉄かぶと形Ⅱ類。15ｃ中頃。
797	18区　SK77	土師器	鍋	口縁部は内側に若干肥厚。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面ナデ調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目が残る。	外面に煤附着。色調　にぶい橙色。鍋形タイプ：鉄かぶと形Ⅱ類。15ｃ中頃。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
798	18区　SK77	土師器	鍋	丸底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部はほぼ直上に延びる。口縁若干外方にひらく。	口縁部内・外面強いヨコナデ調整。体部外面斜め方向の平行叩き目。体部内面横方向のハケ目調整。	外面全面に煤附着。色調はにぶい橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅴ類。15ｃ後半～16ｃ初頭。
799	18区　SK77	瓦質土器	風炉	体部の下半部。	外面に型押しで幾何学文・蓮弁文を施文。	色調　灰黒色。風炉Ⅱに類似。15ｃ前半。
800	18区　SK77	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　オリーブ灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。D類。14ｃ前半。
801	18区　SK77	須恵器	蓋（栓？）	円盤状の落とし蓋。	下面　不定方向のヘラナデ調整。側面　工具によるヨコナデ調整。	壷の蓋か。
802	18区　SK77	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は斜め方向に切る。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　9条1単位の擂目施文。	色調　にぶい赤褐色。備前焼擂鉢ⅢC類。14ｃ後半～15ｃ初頭。
803	18区　SK77	施釉陶器	椀	体部は僅かに内彎。口縁部は屈曲、外面の口縁部と体部の界に凹部をもつ。口縁端部は外方につまみ出す。	内・外面共、灰釉施釉。淡灰緑色に発色。外面の体部下半（高台脇）以下露胎。	瀬戸・美濃系。灰釉浅碗。後Ⅰ期。14ｃ後半。
804	18区　SK77	施釉陶器	天目茶碗	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は内側に屈曲。口縁端部は僅かに外方にひらく。	内外面とも鉄釉施釉。暗褐色に発色。釉調はガラス質。外面の体部下半以下露胎。露胎部に鉄泥漿塗布。	瀬戸・美濃系。後Ⅳ期新。15ｃ後半。
805	18区　SK77	施釉陶器	天目茶碗	高台は浅く削り出す内反り高台。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内外面とも鉄釉施釉。黒色に発色。外面の体部下半以下露胎。	瀬戸・美濃系。後Ⅳ期新。15ｃ後半。
806	18区　SK77	施釉陶器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。外面の体部下半以下露胎。	瀬戸・美濃系。灰釉折縁Ⅲ。
807	18区　SK77	白磁	碗	体部は大きく内彎。口縁部は外反。	内外面とも透明釉施釉。明オリーブ灰色に発色。器面に細かい貫入。	華南産白磁。白磁C群。15～16ｃ代。
808	18区　SK77	白磁	碗	体部は僅かに内彎。口縁部は外反。口縁端部は丸味を帯びる。	内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた灰色に発色。	華南産白磁。白磁C群。15～16ｃ代。
809	18区　SK77	白磁	碗	高台は幅が広く比較的高い。底部の器壁は、非常に厚い。体部は、内彎気味に斜め上方に立ち上がる。口縁部は外反。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面共、施釉。暗灰白色に発色。	華南産白磁。白磁C群。15～16ｃ代。
810	18区　SK77	白磁	Ⅲ	高台は比較的幅が広く低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内外面とも透明釉施釉。黄灰色に発色。高台脇以下露胎。	焼成はややあまい。華南産白磁。Ⅲ類。12ｃ後半～13ｃ前半。
811	18区　SK77	白磁	Ⅲ	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた灰白色に発色。高台畳付・高台裏露胎。	華南産白磁。白磁D群。15ｃ代。
812	18区　SK77	青磁	碗	体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。	内外面とも青磁釉施釉。灰オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁無文碗。D-Ⅰ類。14ｃ代。
813	18区　SK77	青磁	碗	体部は斜め上方に延びる。口縁部は外反。口縁端部は丸味をもつ。	体部外面に広形蓮弁文を施文。内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁蓮弁文碗。青磁碗Ⅳ類。14ｃ初頭～後半。
814	18区　SK77	青磁	Ⅲ？	口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁。
815	18区　SK77	青磁	杯	底部の器壁は厚い。平底。高台は比較的幅が広く低い。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。	内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。高台裏は露胎。	龍泉窯系青磁杯。杯Ⅲ-1類。13ｃ中頃～14ｃ初頭。
816	18区　SK77	青磁	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台畳付は斜め方向に削る。	底部内面にくずれた草花をスタンプ。内・外面共、青磁釉施釉（明オリーブ灰色に発色）底部外面（高台裏・畳付）露胎。	龍泉窯系青磁碗。14ｃ代。
817	18区　SK77	青磁	碗	高台は比較的幅が広く高い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内外面とも青磁釉施釉。淡青緑色（空色）に発色。高台畳付の釉は丁寧に掻き取り。	龍泉窯系青磁。優品。浅形碗Ⅰ-1類。12ｃ中頃～後半。
818	18区　SK77	青磁	盤	体部は内彎。口縁部は水平に折り曲げる。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面とも青磁釉施釉。空色に発色。	龍泉窯系青磁盤。
819	18区　SK77	青磁	盤	体部は緩やかに斜め上方に延びる。体部と口縁部の界は屈曲。口縁部はほぼ直立。	体部内面　櫛描き施文。内外面とも青磁釉施釉。淡黄緑色に発色。	龍泉窯系青磁盤。
820	18区　SK77	施釉陶器	天目茶碗	高台は浅い削りの内反り高台。底部（茶溜）の器壁は非常に厚い。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。	内面～外面の体部下半迄、黒釉施釉の後、口縁部内・外面に鉄釉施釉。禾目状に発色。外面の体部下半（高台脇）以下露胎淡灰白色に発色。	建窯産。禾目天目。14ｃ前半。
821	18区　SK77	青磁	盤	体部は緩やかに斜め上方に延びる。体部と口縁部の界は屈曲。口縁部はほぼ直立。	内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁盤。
822	18区　SK77	石製品	石鍋	口縁部上面は水平に端面をもつ。口縁部外面上方に断面台形状の短い鍔をもつ。	器面は著しく摩滅。調整等は不明。	滑石製。色調　明褐灰色。Ⅲｄ類。14ｃ後半。
823	18区　SK78	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。口縁側面に端面をもつ。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	内外面に大量に煤附着－灯明皿として使用。色調　にぶい褐色。
824	18区　SK101	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。底部外面に指頭圧痕。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。
825	18区　SK101	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は緩やかに斜め上方へ延びる。口縁端部は尖り気味。口縁部内面にかすかに凹部をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。体部外面中央に低い段をもつ。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	底部内面・口縁部内面に煤附着。色調はにぶい橙色。轆轤未使用。
826	18区　SK101	土師器	Ⅲ	やや丸底気味の平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。
827	18区　SK101	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。
828	18区　SK101	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。体部外面中央にかすかに段がある。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。
829	18区　SK101	土師器	Ⅲ	平底。（やや上げ底気味）底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。体部外面中央にかすかに段をもつ。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。
830	18区　SK109	青磁	碗	器壁は比較的薄い。口縁端部は丸味をもつ。	外面　櫛描き施文。内面　ヘラ描きと櫛描きで雷光文施文。内外面とも青磁釉施釉。暗黄緑色に発色。	同安窯系青磁。12ｃ後半～13ｃ前半。
831	18区　P113	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。やや丸底気味の平底。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。
832	18区　包含層（Ⅱ面　第13層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。ⅢA1類。14c前半。
833	18区　包含層（Ⅱ面　第13層）中	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅢA1類。14c前半。
834	18区　包含層（Ⅱ面　第13層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　浅黄橙色。轆轤未使用。ⅣB1類。14c前半。
835	18区　包含層（Ⅱ面　第13層）中	土師器	Ⅲ	平底で底部の器壁は比較的薄い。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は緩やかに、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	器面の摩滅が著しい。色調は橙色。轆轤未使用。ⅣB1類。14c前半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
836	18区　包含層（Ⅱ面　第13層）中	土師器	皿	器壁は全体に薄い。底部は若干丸底気味の平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面丁寧なヨコナデ調整。器面を平滑に仕上げる。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調は灰白色。轆轤未使用。ⅥA類。14c後半。
837	18区　包含層（Ⅱ面　第13層）中	瓦質土器	羽釜	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的にほぼ直立する。口縁部は直立。口縁部外面に断面三角形状の鍔を貼り付ける。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　ハケ目調整の後、ナデ調整。体部外面　指頭圧痕（鍛造の鉄製羽釜を模倣）。	外面に煤附着。色調　暗灰色。羽釜形タイプ：羽釜形A系列ⅡA類。14c前半。
838	18区　包含層（Ⅱ面　第13層）中	施釉陶器	椀	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。外面の体部下半以下露胎。	瀬戸・美濃系。灰釉平椀。後Ⅰ期～Ⅱ期。14c後半。
839	18区　包含層（Ⅱ面　第13層）中	施釉陶器	皿	体部は直線的に斜め上方に延びる。	内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。	瀬戸・美濃系。灰釉折縁皿。
840	18区　包含層（Ⅱ面　第13層）中	施釉陶器	皿	体部は直線的に斜め上方に延びる。	内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色	瀬戸・美濃系。灰釉折縁皿。
841	18区　包含層（Ⅱ面　第13層）中	白磁	皿	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く低い。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	内外面とも透明釉施釉。黄灰白色に発色。体部外面下半以下露胎。	焼成はややあまい。華南産白磁。白磁皿Ⅲ類。12c後半～13c前半。
842	18区　包含層（Ⅱ面　第13層）中	青磁	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は側面を面取りする。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	底部内面に印花で草花文施文。内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。高台畳付以下露胎。	龍泉窯系青磁碗。14c代。
843	18区　包含層（Ⅱ-2面下層）中	土師器	皿	平底で、中央部が内側に突出するヘソ皿状に成形。器壁はヘソ皿に比べて厚い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。口縁部に煤附着。VB1類。15c前半。
844	18区　包含層（Ⅱ-2面下層）中	土師器	皿	ややあげ底気味の平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	色調　浅黄橙色。轆轤未使用。VB1類。15c前半。
845	18区　包含層（Ⅱ-2面下層）中	土師器	皿	器壁は比較的厚い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面ヨコナデ調整。外面の底部と体部の界に段あり。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。ⅡA3a類。15c前半。
846	18区　包含層（Ⅱ-2面下層）中	土師器	皿	平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。ⅡA3a類。15c前半。
847	18区　包含層（Ⅱ-2面下層）中	土師器	皿	平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅡA3a類。15c前半。
848	18区　包含層（Ⅱ-2面下層）中	土師器	皿	平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。ⅡA3a類。15c前半。
849	18区　包含層（Ⅱ-2面下層）中	土師器	皿	平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。器形は全体に歪む。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。	口縁部に2ヶ所煤附着。色調はにぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅡA3a類。15c前半。
850	18区　包含層（Ⅱ-2面下層）中	土師器	皿	器形は大きく歪む。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。	色調　浅黄橙色。轆轤未使用。ⅡB2b類。15c前半。
851	18区　包含層（Ⅱ-2面下層）中	土師器	皿	器形はやや歪む。平底。体部と底部の界は屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　浅黄橙色。轆轤未使用。ⅣC1類。15c前半。
852	18区　包含層（Ⅱ-2面下層）中	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部指頭圧痕。	色調は浅い黄橙色。轆轤未使用。口縁端部に煤附着。ⅣC1類。15c前半。
853	18区　包含層（Ⅱ-2面下層）中	土師器	皿	平底。底部と体部の界は屈曲。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。底部外面　板状工具による一方向のナデ調整。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅣC1類。15c前半。
854	18区　包含層（Ⅱ-2面下層）中	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅡA3a類。15c前半。
855	18区　包含層（Ⅱ-2面下層）中	土師器	皿	やや丸底気味の平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。ⅣC1類。15c前半。
856	18区　包含層（Ⅱ-2面下層）中	土師器	皿	平底。体部と底部の界は大き屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に凹部をもつ。底部内面　2方向のナデ調整。	口縁部内面に煤附着－灯明皿として使用。色調　にぶい橙色。轆轤未使用。焼成は比較的堅緻。ⅢB1類。15c前半。
857	18区　包含層（Ⅱ-2面下層）中	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。器形は歪む。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅣC1類。15c前半。
858	18区　包含層（Ⅱ-2面下層）中	瓦器	椀	断面三角形状の低い高台を貼り付ける。	底部内面に暗文。底部外面　ナデ調整。	色調　暗灰色。和泉型瓦器椀Ⅲ期。13c前半。
859	18区　包含層（Ⅱ-2面下層）中	瓦器	椀	体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内面　平行ミガキ。暗文あり。体部内面に工具痕。口縁部内外面　強いヨコナデ調製。体部外面　指オサエ。	色調　暗灰色。和泉型瓦器椀Ⅲ期。13c前半。
860	18区　包含層（Ⅱ-2面下層）中	瓦器	椀	断面三角形状の低い高台を貼り付ける。	底部内面に暗文。底部外面　ナデ調整。	色調　暗灰色。和泉型瓦器椀Ⅲ期。13c前半。
861	18区　包含層（Ⅱ-2面下層）中	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に僅かに肥厚する。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	焼成はややあまい。色調　内面　灰色・外面　灰白色。東播系須恵器。C3類。14c代。
862	18区　包含層（Ⅱ-2面下層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁部内面に凹部をもつ。口縁部外面　凹線2条。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　にぶい赤褐色。備前焼擂鉢ⅧB類。17c初頭。
863	18区　包含層（Ⅱ-2面下層）中	施釉陶器	卸皿	体部は内彎。口縁部上面に凹部をもつ。	内面に卸目施文。内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。	瀬戸・美濃系。灰釉陶器卸皿。後Ⅱ期。15c前半。
864	18区　包含層（Ⅱ-2面下層）中	青白磁	合子	平底。体部は直立。	体部外面に縦線施文。内外面とも施釉。オリーブ黄色に発色。底部外面は露胎。	景徳鎮窯系青白磁。合子。13c代。
865	18区　包含層（Ⅱ-2面上層）中	土製品	面子	土師器片の縁辺を打ち欠いて円形に成形。	器面は摩滅。	色調　にぶい橙色。
866	18区　包含層（Ⅱ-2面上層）中	石製品	石鍋	口縁部外面に断面台形状の非常に短い鍔をもつ。	体部内外面に成形時のノミ痕。	色調　灰色。滑石製。Ⅲc類。14c前半。
867	18区　包含層（Ⅱ-2面上層）中	石製品	砥石	平面形状は台形。	両面とも擦痕が認められる。	色調　浅黄橙色。
868	18区　包含層（Ⅱ面　第3層）中	土師器	皿	器壁は全体に比較的薄い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。	内・外面共、ヨコナデ調整。	器形はやや歪む。色調は淡黄褐色。轆轤未使用。
869	18区　包含層（Ⅱ面　第3層）中	土師器	皿	器壁は全体に非常に厚い。平底（やや丸底気味）。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内・外面共、ヨコナデ調整。	色調は淡黄褐色。轆轤未使用。
870	18区　包含層（Ⅱ面　第3層）中	土師器	皿	底部の器壁は比較的厚い。平底。体部は、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内・外面共、ヨコナデ調整。体部外面強いヨコナデ調整。	器形は全体的に歪む。色調は淡赤褐色。轆轤未使用。
871	18区　包含層（Ⅱ面　第3層）中	土師器	皿	底部の器壁は比較的薄い。平底。体部は僅かに外反気味に斜め上方に立ち上がる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。外面の底部～体部に指頭圧痕。	色調は淡黄褐色。轆轤未使用。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
872	18区　包含層（Ⅱ面　第3層）中	土師器	Ⅲ	器形は著しく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
873	18区　包含層（Ⅱ面　第3層）中	土師器	Ⅲ	器形は大きく歪む。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
874	18区　包含層（Ⅱ面　第3層）中	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。底部はヘソ皿風に凹ませる。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。体部外面に指頭圧痕。	色調は淡赤褐色。轆轤未使用。ヘソⅢを模倣した在地産土師Ⅲ。
875	18区　包含層（Ⅱ面　第3層）中	白磁	Ⅲ	高台は比較的幅が広く低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内外面とも透明釉施釉。黄灰色に発色。高台脇以下露胎。	焼成はややあまい。華南産白磁。白磁Ⅲ　Ⅲ類。12ｃ後半～13ｃ前半。
876	18区　包含層（Ⅱ面　第3層）中	白磁	Ⅲ	体部は僅かに内彎。口縁部は外反し、輪花状に成形する。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	華南産白磁。白磁E群。16ｃ代。
877	18区　包含層（Ⅱ面　第3層）中	染付磁器	Ⅲ	高台は低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　内面　界線2条・草花文。外面　草花文。底部外面　□福文。	明青花。16ｃ代。
878	19区　SE01	染付磁器	碗	高台は比較的高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　雪輪に笹文・界線2条。内面　無文。	肥前系　くらわんか手　18ｃ後半。
879	19区　SK06	土師器	焙烙	底型作り。丸底。体部はやや内傾。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　不定方向のナデ調整。	底部外面　一部煤附着。色調　橙色。焙烙形ⅣA類。17ｃ中葉～後半
880	20区　SK07	青磁	碗	口縁端部は尖り気味。	外面　鎬のあまい蓮弁文を片切り彫。内外面とも施釉。緑灰色に発色。	龍泉窯系青磁連弁文碗。青磁碗Ⅱ類。13ｃ前半。
881	19区　SK11	青磁	碗	口縁端部は尖り気味。	外面　鎬のあまい蓮弁文を片切り彫で施文。内外面とも青磁釉施釉。灰オリーブ色に発色。	龍泉窯系青磁蓮弁文碗。青磁碗Ⅱ類。13ｃ前半。
882	19区　SK13	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
883	19区　SK13	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。
884	19区　SK13	土師器	Ⅲ	平底。底部は若干ヘソ皿風に凹ませる。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。器形は全体に大きく歪む。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調は浅い黄橙色。轆轤未使用。ヘソⅢの影響を受けたタイプ。
885	19区　SK13	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。底部外面に板状工具による調整痕。	色調は灰白色。轆轤未使用。
886	19区　SK13	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調は灰白色。轆轤未使用。
887	19区　SK13	瓦質土器	羽釜	体部は内彎。口縁部は内傾。口縁部外面　凹線3条。口縁部外面に断面台形状の比較的幅の広い鍔を貼り付ける。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　ハケ目調整の後ナデ調整。体部外面　ヘラ削り調整。	色調　灰黄色。羽釜形タイプ：羽釜形B系列ⅡC類。15ｃ中頃。
888	19区　SK13	土師器	鍋	丸底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は内彎。口縁部はほぼ直立。口縁端部は若干外方に肥厚、丸味をもつ。	粘土紐巻上げ成形。内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内・外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ハケ調整の後、ナデ。外面の体部～底部斜め方向の平行叩き目が残る。	外面に煤附着。色調　にぶい橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅱ類。14ｃ前半。
889	19区　SK13	土師器	鍋	丸底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は内彎。口縁部は大きく屈曲して外反する。口縁端部は丸味をもつ。口縁部内面に凹線1条。	粘土紐巻上げ成形。内面～口縁部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部斜め方向の平行叩き目が残る。	外面の体部と口縁部の界に粘土紐のつなぎ目痕。色調は橙色。外面に煤附着。甕形タイプ：播丹型Ⅴ類。15ｃ後半～16ｃ初頭。
890	19区　SK13	須恵器	鉢	口縁部は僅かに肥厚。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部」内外面　強いヨコナデ調整。	色調　灰色。東播系須恵器。Ｃ1類。13ｃ後半。
891	19区　SK13	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚。口縁端部は内側につまみ出す。口縁部内面に沈線1条。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　黄灰色。焼成はややあまい。東播系須恵器。赤根川支群の製品。Ｅ2類。14ｃ後半。
892	19区　SK13	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は斜め方向に切る。	内外面ともヨコナデ調整。内面にヘラ描きの擂目施文。	色調　橙色。丹波焼。ⅠB1類。16ｃ後葉～17ｃ中頃。
893	19区　SK13	青磁	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く低い。	内外面とも青磁釉施釉。明緑灰色に発色。高台畳付～高台裏　露胎。	龍泉窯系青磁碗。13ｃ代。
894	19区　SK13	青磁	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く低い。	内外面とも青磁釉施釉。暗オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁碗。13ｃ代。
895	19区　包含層（近世整地層）中	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は斜め方向に切る。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　7条1単位の擂目施文。口縁部上面　胡麻状に灰被り。	色調　灰赤色。備前焼擂鉢ⅢA類。14ｃ後半～15ｃ初頭。
896	20区　SD02	石製品	石鍋	口縁端部上面は水平に端面をもつ。口縁部外面に断面台形状の鍔を削りだす（一部欠損）。	内外面とも研磨仕上げ。	滑石製。色調　灰白色。Ⅲa-2類。12ｃ後半。
897	20区　P06	青磁	Ⅲ	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く低い。	底部内面　印花で草花文施文。内外面とも青磁釉施釉。灰黄緑に発色。高台畳付～高台裏　露胎。	龍泉窯系青磁。ⅢⅣ類。14ｃ初頭～後半。
898	20区　P38	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
899	21区　SK01	白磁	壷？	口縁部は内側に折り曲げる。	内外面とも透明釉施釉。明オリーブ灰色に発色。	華南産白磁？。
900	21区　SK02	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	轆轤未使用。色調　浅黄色。
901	21区　SK02	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	口縁部内外面に煤附着－灯明Ⅲとして使用。轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
902	21区　SK04	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張。断面楕円形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　灰褐色。備前焼甕Ⅳ類。15ｃ前半。
903	21区　SK04	土師器	Ⅲ	底部は指オサエによって上方に突出させるいわゆるヘソ皿。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内・外面共、ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。	色調は灰白色。轆轤未使用。ⅤA1類。14c前半。
904	21区　SK04	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。体部外面に凹線状の段。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅡB1b類。14c前半。
905	21区　SK04	土師器	Ⅲ	器壁は比較的薄い。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面は強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。ⅡA2a類。14c前半。
906	21区　SK04	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調は橙色。轆轤未使用。ⅡA2a類。14c前半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
907	21区　SK04	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。ⅢA1類。14c前半。
908	21区　SK04	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚。口縁部内面に凹部をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　灰黄色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。D類。14ｃ後半。
909	21区　SK05	土師器	Ⅲ	器壁は比較的薄い。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部指頭圧痕。	色調は浅い黄橙色。轆轤未使用。ⅡA2a類。14c前半。
910	21区　SK05	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部指頭圧痕。	色調はにぶい黄橙色。轆轤未使用。14ｃ代。？
911	21区　SK05	土師器	Ⅲ	底部は上方に大きく突出するいわゆるヘソ皿。体部は斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面下半　指頭圧痕。	色調　灰白色。轆轤未使用。ⅤA1類。14c前半。
912	21区　SK05	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅣB1類。14c前半。
913	21区　SK05	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部指頭圧痕。	色調は浅い黄橙色。轆轤未使用。ⅢA1類。14c前半。
914	21区　SK05	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲し、体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指オサエの後、指頭圧痕をナデ消す。	色調は橙色。轆轤未使用。ⅢA1類。14c前半。
915	21区　SK05	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部僅かに外反。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調は橙色。轆轤未使用。ⅡB1b類。14c前半。
916	21区　SK05	土師器	Ⅲ	器形は全体にやや歪む。器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅡA2a類。14c前半。
917	21区　SK05	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲し、体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指オサエの後指頭圧痕をナデ消す。	色調は橙色。轆轤未使用。ⅢA1類。14c前半。
918	21区　SK05	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は若干尖り気味。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。体部外面に凹線状の段。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。ⅡB1b類。14c前半。
919	21区　SK05	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面に浅い段をもつ。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。ⅡB1b類。14c前半。
920	21区　SK05	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。体部外面中央に浅い段をもつ。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。ⅡA2a類。14c前半。
921	21区　SK05	無釉陶器	甕	口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　灰赤色。備前焼甕ⅢB類。14ｃ代。
922	21区　包含層（整地土層）中	土師器	Ⅲ	底部は中央部が突出するヘソ皿。器壁は全体に薄い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。体部外面にかすかに指頭圧痕。	色調は灰白色。轆轤未使用。ⅤB1類。15c前半。
923	21区　包含層（整地土層）中	須恵器	鉢	平底。底部は僅かに平底高台風に削り出す。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は内側につまみ出す。	粘土紐巻き上げ成形の後、内外面共回転ナデ調整。器面を平滑に仕上げる。底部外面未調整糸切り痕が残る。	東播系須恵器。F類。14ｃ後半～15ｃ前半。
924	21区　包含層（整地土層）中	須恵器	鉢	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は内側につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕が残る。	胎土中に細砂を多量に含む。色調　灰白色。F類。14ｃ後半～15ｃ前半。
925	21区　包含層（整地土層）中	石製品	鍋	石鍋の一部。	内外面とも研磨仕上げ。	外面に煤附着。滑石製。
926	21区　包含層（整地土層）中	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。器形は全体に大きく歪む。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。体部の中央に浅い段が巡る。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい黄橙色。轆轤未使用。内面に煤付着。ⅢB1類。15c前半。
927	21区　包含層（攪乱層）中	土師器	Ⅲ	調整は非常に雑。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい黄橙色。轆轤未使用。口縁部に煤付着（灯明皿として使用）。ⅡA3a類。15c前半。
928	21区　包含層（攪乱層）中	土師器	Ⅲ	器形はやや歪む。器壁は比較的薄い。ややあげ底気味の平底（ヘソ皿の影響か）。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　浅黄橙色。轆轤未使用。ⅢB2a類。15c後半。
929	21区　包含層（攪乱層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方へ延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。内面の体部と底部の堺に強いナデ調整、凹部を形成。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。ⅡB2b類。15c前半。
930	21区　包含層（攪乱層）中	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は外反気味に斜め上方へ延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。ⅣC1類。15c前半。
931	21区　包含層（攪乱層）中	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲、体部は直線的に斜め上方へ延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半指頭圧痕。底部外面に板状工具痕。	色調は橙色。ⅥB類。15c前半。
932	21区　包含層（攪乱層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。内面に煤付着（灯明皿として使用か？）ⅢB1類。15c前半。
933	21区　包含層（攪乱層）中	土師器	Ⅲ	器形は著しく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲、体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。ⅢB1類。15c前半。
934	21区　包含層（攪乱層）中	土師器	Ⅲ	器形は大きく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面中央に段をもつ。体部内面及び外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅢB1類。15c前半。
935	21区　包含層（攪乱層）中	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　暗灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。B3類。14ｃ代。
936	21区　包含層（攪乱層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は斜め方向に切る。口縁端部は尖り気味。片口をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　6条1単位の擂目施文。	色調　暗赤灰色。備前焼擂鉢ⅢC類。14ｃ後半～15ｃ初頭。
937	21区　包含層（攪乱層）中	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は斜め方向に切る。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　5条1単位の擂目施文。	色調　黄灰色（須恵質）。備前焼擂鉢ⅢA類。14ｃ後半～15ｃ初頭。
938	21区　包含層（攪乱層）中	施釉陶器	天目茶碗	高台は浅く削り出す内反り高台。体部は直線的に斜め上方に延びる。	内外面とも鉄釉施釉。黒褐色に発色。	瀬戸・美濃系。後Ⅰ期。14ｃ後半。
939	22区　SK02	土師器	Ⅲ	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
940	22区　SK02	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。成形・整形とも粗雑。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　橙色。轆轤未使用。
941	22区　SK02	土師器	Ⅲ	器壁は全体に厚い。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	内面　全体に煤附着。－灯明皿として使用。色調　にぶい褐色。轆轤未使用。
942	22区　SK02	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	色調　橙色。轆轤未使用。
943	22区　SK03	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。Ⅱ A4類。15c末葉～16c前葉。
944	22区　SK03	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面及び外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。Ⅲ C2類。15c末葉～16c前葉。
945	22区　SK03	土師器	鍋	体部は内彎。口縁部は短く僅かに外傾。口縁端部上面は水平の端面をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調製。体部内面横方向のハケ目調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目。	色調　橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅴ類。15ｃ後半～16ｃ初頭。
946	欠番					
947	22区　SK03	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面ともヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　暗灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。D類。14ｃ前半。
948	22区　SK04	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	色調　にぶい褐色。轆轤未使用。
949	22区　SK05	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　橙色。轆轤未使用。
950	22区　SK05	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部は短く、僅かに外反して直上に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の底部と体部の界に稜線をもつ。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
951	22区　SK05	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。器壁は比較的厚い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。体部外面に火ぶくれあり。	色調　橙色。轆轤未使用。
952	22区　SK05	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。ややあげ底気味の平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　橙色。轆轤未使用。
953	22区　SK05	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は斜め上方に立ち上がり、中位で屈曲。口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	色調　橙色。轆轤未使用。
954	22区　SK05	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
955	22区　SK05	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内外面に浅い段あり。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
956	22区　SK05	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面及び外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	内面に煤附着－灯明皿として使用。轆轤未使用。
957	22区　SK05	土師器	Ⅲ	器形は全体に比較的薄い。やや丸底気味の平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部はやや外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
958	22区　SK05	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
959	22区　SK06	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	口縁部に煤付着。(灯明皿として使用)色調は、浅黄色。轆轤未使用。Ⅳ D2類。15c末葉～16c前葉。
960	22区　SK06	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調は浅黄色。轆轤未使用。Ⅳ D2類。15c末葉～16c前葉。
961	22区　SK06	土師器	Ⅲ	平底。やや上げ底気味。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい黄橙色。轆轤未使用。Ⅳ D2類。15c末葉～16c前葉。
962	22区　SK06	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。ややあげ底気味の平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。内面の底部と体部の界　凹部をもつ。	口縁部に煤附着－灯明皿として使用。色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。Ⅳ D1類。15c末葉～16c前葉。
963	22区　SK06	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい黄橙色。轆轤未使用。Ⅱ A4類。15c末葉～16c前葉。
964	22区　SK06	土師器	Ⅲ	平底。底部は上方に突出。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。内面の底部と体部の界に凹線１条。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。内面の底部と体部の界　ナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。口縁部に煤附着－灯明皿として使用。Ⅳ D1類。15c末葉～16c前葉。
965	22区　SK06	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。底部の器壁は非常に厚い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面ヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい黄橙色。轆轤未使用。Ⅱ A4類。15c末葉～16c前葉。
966	22区　SK06	土師器	Ⅲ	器形は大きく歪む。平底。体部は斜め上方に立ち上がり、中位で屈曲、口縁部は外方にひらく。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。Ⅳ D2類。15c末葉～16c前葉。
967	22区　SK06	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部～口縁部は外方にひらく。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。内面の底部と体部の界に浅い凹部をもつ。	色調は浅黄色。轆轤未使用。Ⅳ D2類。15c末葉～16c前葉。
968	22区　SK06	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調　浅黄色。轆轤未使用。Ⅲ C2類。15c末葉～16c前葉。
969	22区　SK06	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　灰白色。轆轤未使用。Ⅱ B3b類。15c末葉～16c前葉。
970	22区　SK06	土師器	鍋	体部は内彎。口縁部は短く直立。口縁端部は斜め方向に切る。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　横方向のハケ目調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目。	色調　橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅴ類。15ｃ後半～16ｃ初頭。
971	22区　SK07	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。Ⅳ B2類。14c後半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
972	22区　SK07	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調は浅い黄橙色。轆轤未使用。ⅡA2ｂ類。14c後半。
973	22区　SK07	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅢA2類。14c後半。
974	22区　SK07	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は斜め上方に立ち上がり、体部中位で屈曲。口縁部は外反。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	器壁は比較的薄く、焼成は堅緻。色調橙色。轆轤未使用。ⅣB2類。14c後半。
975	22区　SK07	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。ⅣB2類。14c後半。
976	22区　SK07	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅣB2類。14c後半。
977	22区　SK07	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部の器壁は厚い。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅡA2ｂ類。14c後半。
978	22区　SK07	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に低い段をもつ。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅡA2ｂ類。14c後半。
979	22区　SK07	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅣB2類。14c後半。
980	22区　SK07	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅣB2類。14c後半。
981	22区　SK07	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面　指頭圧痕。	器壁は比較的薄い。色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅡB2a類。14c後半。
982	22区　SK07	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。器壁は全体に薄い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。体部は中位で屈曲。口縁部は外方にひらく。口縁端部は上方につまみ出す。口縁部内面に凹部をもつ。	内面～体部外面丁寧なヨコナデ調整。器面を平滑に仕上げる。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調は灰白色。轆轤未使用。ⅡB2a類。14c後半。
983	22区　SK07	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部僅かに外反。口縁端部は尖り気味。器壁は比較的薄い。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面中央に段をもつ。底部外面に板状工具痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅡB2a類。14c後半。
984	22区　SK07	土師器	Ⅲ	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅢA2類。14c後半。
985	22区　SK07	土師器	Ⅲ	器壁は比較的薄い。器形は全体に著しく歪む。平底。体部は直線的に斜め上方に立ち上がり、中位で屈曲。口縁部は外方にひらく。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　橙色。轆轤未使用。ⅡB2a類。14c後半。
986	22区　SK07	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅣB2類。14c後半。
987	22区　SK07	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面中央に凹部をもつ。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅣB2類。14c後半。
988	22区　SK07	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面の中央部に段をもつ。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅡA2ｂ類。14c後半。
989	22区　SK07	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	器壁は比較的薄い。轆轤未使用。ⅥA類。14c後半。
990	22区　SK07	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅡA2ｂ類。14c後半。
991	22区　SK07	土師器	Ⅲ	器壁は薄い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　不定方向のナデ調整。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅡA2ｂ類。14c後半。
992	22区　SK07	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の底部下半～体部指頭圧痕。	色調は橙色。轆轤未使用。ⅡA2ｂ類。14c後半。
993	22区　SK07	瓦質土器	鍋	体部は僅かに内彎。体部は外方に折り曲げ、端部は上方につまみ上げる。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面　指オサエの後、ナデ調整　指頭圧痕。体部内面　ハケ目調整の後、板ナデ調整。	鍛造の鉄鍋を模倣。外面に煤附着。色調灰白色。鍋形タイプ：鉄鍋形ⅢＡ類。14ｃ前半。
994	22区　SK07	瓦質土器	鍋	丸底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部直線的にほぼ直上に延びる。	体部内外面とも回転ナデ調整。体部外面に指頭圧痕（鍛造の鉄鍋を模倣）。	外面　煤附着。色調　灰色。鍋形タイプ：鉄鍋形ⅢＣ類。14ｃ後半。
995	22区　SK07	瓦質土器	火鉢	底部に台形状の脚を3箇所貼り付け。体部はほぼ直立。口縁部は八角形の花弁状に成形。体部に縦に輪花の界線が入る。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　縦方向の暗文。体部外面　ヨコナデ調整。印花で菊花文施文。	色調　暗灰色。奈良火鉢。浅鉢Ⅰ。13ｃ後半～14ｃ前半。
996	22区　SK07	須恵器	鉢	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　板ナデ調整。体部外面　ヨコナデ調整。	色調　にぶい黄橙色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。Ｃ３類。14ｃ代。
997	22区　SK07	須恵器	鉢	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部内面に凹部をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。底部外面　未調整。ヘラ切り痕が残る。体部外面下半に指頭圧痕。	色調　灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。E2類。14ｃ後半。
998	22区　SK07	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部内面に浅い凹部をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	体部内面に煤附着。色調　灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。D類。14ｃ前半。
999	22区　SK07	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	色調　灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。E2類。14ｃ後半。
1000	22区　SK08	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。体部内外面・底部外面指頭圧痕。	色調は浅い黄橙色。轆轤未使用。
1001	22区　SK09	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に凹部をもつ。	轆轤未使用。色調　橙色。
1002	22区　SK10	土師器	Ⅲ	器形は著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内・外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調はにぶい橙色。轆轤未使用。
1003	22区　SK11	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。内面の底部と体部の界　ナデ調整、浅い凹部をもつ。外面の体部～底部指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅢC2類。15c末葉～16c前葉。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1004	22区　SK11	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。内面の底部と体部の界　凹部をもつ。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。Ⅳ D1類。15c末葉～16c前葉。
1005	22区　SK11	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。内面の底部と体部の界に沈線。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。Ⅲ C1類。15c末葉～16c前葉。
1006	22区　SK11	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は斜め上方に立ち上がり、口縁部は外方にひらく。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　浅黄橙色。轆轤未使用。ⅣD1類。15c末葉～16c前葉。
1007	22区　SK11	土師器	Ⅲ	ややあげ底気味の平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。Ⅲ C2類。15c末葉～16c前葉。
1008	22区　SK11	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。粗製。ⅡA4類。15c末葉～16c前葉。
1009	22区　SK11	土師器	Ⅲ	器形は著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。Ⅱ A4類。15c末葉～16c前葉。
1010	22区　SK11	土師器	Ⅲ	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　二方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　淡黄色。轆轤未使用。ⅢC2類。15c末葉～16c前葉。
1011	22区　SK11	土師器	鍋	体部は若干内彎。口縁部は僅かに外反。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面斜め方向の平行叩き目。	甕形タイプ：播丹型Ⅴ類。15ｃ後半～16ｃ初頭。
1012	22区　SK11	土師器	鍋	丸底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外反。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面ハケ目調整。外面の体部～底部　斜め方向の平行叩き目。	色調　橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅴ類。15ｃ後半～16ｃ初頭。
1013	22区　SK11	青磁	碗	口縁端部は尖り気味。	外面　片切り彫で蓮弁文施文。内外面とも青磁釉施釉。明緑灰色に発色。	龍泉窯系青磁蓮弁文碗。青磁碗Ⅱ類。13ｃ前半。
1014	22区　SK11	青磁	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く厚い。	内外面とも青磁釉施釉。暗オリーブ灰色に発色。高台畳付～高台裏　露胎。	龍泉窯系青磁碗。13ｃ代。
1015	22区　SK11	土師器	紡錘車	摩滅が著しく、方形に変形。中央部に穿孔。	内外面　ナデ調整。指オサエ痕あり。	色調　橙色。
1016	22区　SK11	土師器	面子	土師器片の縁辺を打ち欠いて円形に成形。	器面はナデ調整。	色調　灰白色。原体は土師器Ⅲ。
1017	22区　SK11	須恵器	鉢	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張し、小さな縁帯を形成する。口縁端部は内側に折り曲げ、口縁部内面に凹部をもつ。	粘土紐巻上げ成形。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。体部外面に指頭圧痕。底部外面未調整　糸切り痕。	外面の底部と体部の界に藁状繊維の押圧痕あり。色調　灰白色。東播系須恵器。B3類。14ｃ代。
1018	22区　SK１２	青磁	碗ｏｒ鉢	平底。高台は幅が広く比較的低い。	底部内面に印花で草花文施文。内外面に青磁釉施釉。浅黄色に発色。高台裏　蛇ノ目状釉ハギ。	龍泉窯系青磁碗。焼成はやや軟質。15ｃ代。
1019	22区　SK13	土師器	Ⅲ	丸底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅡA3ｂ類。15c後半。
1020	22区　SK13	土師器	Ⅲ	丸底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅡA3ｂ類。15c後半。
1021	22区　SK13	土師器	Ⅲ	丸底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅡA3ｂ類。15c後半。
1022	22区　SK13	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅢB2a類。15c後半。
1023	22区　SK13	土師器	小Ⅲ	丸底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅡA3ｂ類。15c後半。
1024	22区　SK13	土師器	Ⅲ	丸底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅡA3ｂ類。15c後半。
1025	22区　SK13	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅣC2a類。15c後半。
1026	22区　SK13	土師器	Ⅲ	丸底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅡA3ｂ類。15c後半。
1027	22区　SK13	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅢB2a類。15c後半。
1028	22区　SK13	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅣC2a類。15c後半。
1029	22区　SK13	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅢB2a類。15c後半。
1030	22区　SK13	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は斜め方向に切る。口縁端部下端を僅かに斜め下方につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　8条１単位の擂目施文。口縁部上面　胡麻状に灰被り。	色調　灰赤色。備前焼擂鉢ⅢB類。14ｃ後半～15ｃ初頭。
1031	22区　SK13	無釉陶器	擂鉢	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部下端は斜め下方につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　9条１単位の擂目施文。	内面　灰被り。光沢をもつ。色調　にぶい赤褐色。備前焼擂鉢ⅣB類。15ｃ前半～中頃。
1032	22区　SK13	無釉陶器	擂鉢	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部下端は斜め下方につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　10条１単位の擂目施文。	内面　灰被り。光沢をもつ。色調　にぶい赤褐色。備前焼擂鉢ⅣB類。15ｃ前半～中頃。
1033	22区 P03・P04上面	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面板ナデ調整。体部内外面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　赤灰色。
1034	22区 P03・P04上面	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　2方向のナデ調整。内面及び体部外面　指頭圧痕。	色調　橙色。轆轤未使用。
1035	22区　包含層（盛土等一括）中	土師器	Ⅲ	器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部から底部　指頭圧痕。	色調　橙色。轆轤未使用。
1036	22区　包含層（盛土等一括）中	土師器	Ⅲ	底部の器壁は薄い。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面中央に段をもつ。体部外面下半　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1037	22区　包含層（盛土等一括）中	須恵器	鉢	体部は僅かに内彎。口縁部は断面三角形状に肥厚。口縁部面に凹部をもつ。口縁端部は内側につまみ出す。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。片口をもつ。	内面に煤附着。色調　灰白色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。B3類。14ｃ代。
1038	22区　包含層（盛土等一括）中	無釉陶器	壷	体部は大きく内彎、中位で「く」の字状に屈曲。頸部は直立。口縁部は「N」字状口縁が頸部にくっついた形。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面　ナデ調整。体部内面　板ナデ調整の後、指オサエ。	色調　暗赤褐色。胎土中に砂粒を含む。常滑焼9型式。15ｃ前半～中頃。
1039	22区　包含層（盛土等一括）中	青磁	碗	口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁無文碗。E類。14ｃ後半～15ｃ前半。
1040	22区　包含層（盛土等一括）中	須恵器	面子	須恵器片の縁辺を打ち欠いて成形。	器面は摩滅が著しい。	色調　灰色。原体は須恵器甕。
1041	22区　包含層（盛土等一括）中	須恵器	面子	須恵器片の縁辺を打ち欠いて成形。	器面に叩き目が残る。	色調　灰色。原体は須恵器甕。
1042	23区　SX01	土師器	皿	器形は全体に大きく歪む。成形・整形とも粗雑。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は外反。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　橙色。轆轤未使用。
1043	23区　SX01	土師器	皿	器形は全体に歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
1044	23区　SX01	須恵器	鉢	口縁部は断面三角形状に肥厚する。口縁部内面に沈線１条。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。E2類。14ｃ後半。
1045	23区　SX01	白磁	碗	体部は内彎。口縁部は外反。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた灰色に発色。器面に細かい貫入。	華南産白磁。白磁C群。15～16ｃ代。
1046	23区　SK01	土師器	皿	器形は全体に大きく歪む。成形・整形とも粗雑。平底。底部と体部の界大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。胎土中に砂粒を多く混える。
1047	23区　SK01	土師器	皿	器形は全体に大きく歪む。元来は平底だが、丸底風に成形。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。口縁外面に僅かに凹部をもつ。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
1048	23区　SK04	土師器	皿	底部の器壁は比較的厚い。体部は短く斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部内面　ナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。	内外面とも煤附着。轆轤使用。ⅢB類。17ｃ中葉～18c前半。
1049	23区　SK05	無釉陶器	甕	口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　黒褐色。備前焼甕ⅢB類。14ｃ代。
1050	23区　SK05	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張。断面楕円形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　暗赤褐色。備前焼甕Ⅳ類。15ｃ前半。
1051	23区　SK07	施釉陶器	卸皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	底部内面　斜格子状の卸目施文。底部内面に一部灰釉附着。	瀬戸・美濃系。灰釉陶器卸皿。
1052	23区　SK09	白磁	皿	平底。	内外面とも透明釉施釉。灰オリーブ色に発色。	華南産白磁。白磁ⅢⅨ類。13ｃ後半～14ｃ前半。
1053	23区　SK09	青磁	碗	体部は僅かに内彎。口縁端部は丸味をもつ。	外面　鏑の明瞭な蓮弁文を片切り彫で施文。内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁鏑蓮弁文碗。青磁碗Ⅱ類。13ｃ前半。
1054	23区　SK09	土製品	土錘	棒状の型に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。粘土の継ぎ目痕。	色調　灰黄色。焼成　比較的堅緻。
1055	23区　SK09	土製品	面子	円柱状。	全面にナデ調整。	面子か？
1056	23区　SK10	土師器	皿	平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。器壁は全体に厚い。	内面～体部外面　丁寧なヨコナデ調整。内面の器面を平滑に仕上げる。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
1057	23区　SK10	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。器壁は全体に厚い。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。胎土中に砂粒を多く含む。
1058	23区　SK10	瓦質土器	鍋	体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部は「L」字状に外方に折り曲げる。口縁部側面に端面をもつ。口縁部内面に凹部をもつ。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　ナデ調整。体部外面上半　指オサエの後ナデ調整指頭圧痕。体部外面下半　ハケ目調整の後ナデ調整。	鍛造の鉄鍋を模倣。色調　灰色。鍋形タイプ：鉄鍋形ⅢA類。14C前半。
1059	23区　SK10	瓦器	椀	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	体部内面　平行ミガキ。暗文あり。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	色調　暗灰色。和泉型瓦器椀Ⅳ-4期。14ｃ前半。
1060	23区　SK10	青磁	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く低い。	内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。高台畳付～高台裏　露胎。	龍泉窯系青磁碗。13ｃ代。
1061	23区　SK11	瓦質土器	鍋	器壁は薄い。丸底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方に折り曲げ、逆「L」字状を呈する。口縁部上面に凹部をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面横方向のハケ目調整。体部外面　叩きの後、指オサエ、指頭圧痕が残る。(鍛造の鉄鍋を模倣)。	外面煤附着。色調　黒褐色。鍋形タイプ：鉄鍋形ⅢA類。14ｃ前半。
1062	23区　SK16	土師器	皿	指オサエにより底部は上方に突出。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。指頭圧痕。	色調　橙色。轆轤未使用。ヘソ皿の模倣形か。
1063	23区　SK17	瓦器	椀	高台は貼り付けるが、粘土紐がひしゃげた形にまで退化する。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	体部内面　暗文あり。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　ナデ調整。	色調　暗灰色。和泉型瓦器椀Ⅳ-4期。14ｃ前半。
1064	23区　SK18	無釉陶器	甕	平底　体部は内彎して立ち上がる。頸部は極く短い。口縁部は楕円形状に肥厚。	体部外面　上半　横　斜方向の板ナデ調整。体部内面　上半　横　斜方向の板ナデ調整。体部外面　下半　縦方向・斜方向の板ナデ調整。体部内面下半　不定方向の板ナデ調整・横方向のハケ目調整。	色調　暗赤褐色。備前焼甕Ⅳ類　15ｃ前半。
1065	23区　SK19	無釉陶器	甕	底部は欠失。体部は直線的に斜め上方に立ち上がり、中位で大きく「く」の字状に屈曲する。頸部は短く直立し、口縁部は外方にひらく。口縁端部は上下に僅かに拡張する。口縁部外面は端面をもつ。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　板ナデ調整。体部外面　ヨコナデ調整。外面は胡麻状に灰被り。	焼成は比較的堅緻。色調　浅黄橙色。丹波焼甕Ⅳ類。14c前半。
1066	24区　SK02	土師器	皿	器壁は比較的厚い。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	口縁部全面に煤附着－灯明皿として使用。色調　橙色。轆轤未使用。ⅢA1類。14c前半。
1067	24区　SK02	土師器	皿	器壁は比較的厚い。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	口縁部全面に煤附着－灯明皿として使用。色調　橙色。轆轤未使用。ⅡA2a類。14c前半。
1068	24区　SK02	土師器	皿	器形は全体に歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	口縁部全面に煤附着－灯明皿として使用。色調　橙色。轆轤未使用。ⅣB1類。14c前半。
1069	24区　SK02	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　横方向にナデ調整。	色調　橙色。轆轤未使用。ⅢA1類。14c前半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1070	24区　SK02	土師器	皿	器形は著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は斜め上方に立ち上がり、中位で屈曲、口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい褐色。轆轤未使用。ⅡB1b類。14c前半。
1071	24区　SK02	土師器	皿	器形は大きく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　浅黄橙色。轆轤未使用。ⅣB1類。14c前半。
1072	24区　SK02	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅣB1類。14c前半。
1073	24区　SK02	土師器	皿	器形は全体に大きく歪む。ややあげ底気味の平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅣB1類。14c前半。
1074	24区　SK02	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は僅かに外反。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　浅い黄橙色。轆轤未使用。ⅣB1類。14c前半。
1075	24区　SK02	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は斜め上方に立ち上がり、中位で屈曲、口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅡB1b類。14c前半。
1076	24区　SK02	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部下半　指頭圧痕。	色調　浅黄橙色。轆轤未使用。ⅣB1類。14c前半。
1077	24区　SK02	土師器	皿	器形は大きく歪む。器壁は比較的薄い。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅣB1類。14c前半。
1078	24区　SK02	瓦器	椀	断面三角形状の退化した高台を貼り付ける。体部は僅かに内彎して、斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面　平行ミガキ。体部外面　指頭圧痕。	色調　暗灰色。和泉型瓦器椀Ⅳ-3期。13ｃ後半～14ｃ前半。
1079	24区　SK02	瓦器	椀	断面三角形状の退化した高台を貼り付ける。体部は僅かに内彎して、斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面　螺旋状の暗文。体部外面　指頭圧痕。	色調　灰色。和泉型瓦器椀Ⅳ-4期。14ｃ前半。
1080	24区　SK06	土師器	皿	器形は歪みが著しい。丸底。器壁は比較的厚い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　橙色。轆轤未使用。胎土中に砂粒を多く含む。特に粗製。
1081	24区　SK08	土師器	皿	器壁は厚い。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部外面　指頭圧痕。	色調　浅黄橙色。轆轤未使用。
1082	24区　SK08	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面に指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
1083	24区　SK08	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は斜め方向に切る。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	色調　灰色。東播系須恵器。B2類。13ｃ前半。
1084	24区　包含層（鉄骨下38cm）	無釉陶器	甕	平底。体部は内彎する。頸部は短く直立する。口縁部は水平方向に拡張、口縁部上面は水平方向に端面をもつ。	口縁部外面～体部外面　鉄釉施釉の後、灰釉をひしゃくで飴状に施釉。口縁部上面～内面　白濁釉を薄く、ラフに施釉。底部外面は露胎。砂目跡　6箇所。	底部外面に焼成後穿孔１箇所。水琴窟に使用。丹波焼。Ⅶ類。18ｃ末以降。
1085	25区　SK04	土師器	皿	底部は中央部を指オサエで突出させるいわゆるヘソ皿タイプ。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。口縁部内面に僅かに凹部をもつ。外面の体部下半　指頭圧痕。	色調　灰白色。轆轤未使用。
1086	25区　SK04	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
1087	25区　SK04	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面中央に凹部をもつ。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
1088	25区　SK04	土師器	皿	やや丸底気味の平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部僅かに外反。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面中央に凹部をもつ。外面の体部下半　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
1089	25区　SK04	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部外面に凹部をもつ。底部内面　ナデ調整。	色調　橙色。轆轤未使用。
1090	25区　SK04	土師器	皿	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部僅かに外反。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面中央に浅い段。外面の体部下半　指頭圧痕。	色調　橙色。轆轤未使用。
1091	25区　SK11	土師器	皿	器壁は比較的厚い。平底。体部と底部の界　不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
1092	25区　SK11	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面に指頭圧痕。	色調　淡赤橙色。轆轤未使用。
1093	25区　SK11	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
1094	25区　SK11	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
1095	25区　SK11	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
1096	25区　SK11	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面に指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
1097	25区　SK11	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面に指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
1098	25区　SK11	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部中央に浅い段がある。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
1099	25区　SK11	須恵器	鉢	口縁部は断面三角形状に肥厚する。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面ともヨコナデ調整。	内面に煤附着。色調　灰黄褐色。焼成はややあまい。東播系須恵器。赤根川支群の製品。D類。14ｃ前半。
1100	25区　SK11	無釉陶器	甕	口縁部は外方に折り曲げ、上下に拡張したものが、頸部に付いた形。	内外面ともヨコナデ調整。	胎土中に砂粒を含む。色調　暗褐色。常滑焼9型式。15ｃ前半～中頃。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1101	25区　SD01	瓦質土器	鍋	丸底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。体部と口縁部の界は大きく屈曲。口縁部は外反。口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部内面（蓋の受け部）は「L」字状を呈する。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面横方向のハケ目調整。体部外面　指頭圧痕（鍛造の鉄鍋を模倣）。	鍋形タイプ：鉄鍋形ⅢB類。14c中頃。
1102	25区　P06	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内外面に指頭圧痕。	色調　明黄褐色。轆轤未使用。
1103	25区　P06	土師器	Ⅲ	平底。底部の器壁は非常に厚い。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部外面に指頭圧痕・工具痕あり。	色調　橙色。轆轤未使用。
1104	25区　P11	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面に指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
1105	25区　P11	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内外面に指頭圧痕。	色調　橙色。轆轤未使用。
1106	25区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に凹部をもつ。底部内面　一方向のナデ調整。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅡB3a類。15c後半。
1107	25区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面に指頭圧痕。	色調　橙色。轆轤未使用。ⅣC1類。15c前半。
1108	25区　包含層（第3層）中	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面に指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅡA3a類。15c前半。
1109	25区　包含層（第3層）中	無釉陶器	甕	頸部はほぼ直立。口縁端部は外方につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。外面灰被り。	色調　灰色（須恵質）。備前焼甕ⅡB類。13ｃ後半。
1110	25区　包含層（第3層）中	無釉陶器	甕	口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　暗赤褐色。備前焼甕ⅢＢ類。14ｃ代。
1111	25区　包含層（第3層）中	無釉陶器	甕	口縁部は水平に折り曲げる。口縁部上面に凹部をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。外面　自然釉附着。明オリーブ灰色に発色。	丹波焼。甕Ⅴ類。15ｃ前半。
1112	25区　包含層（第3層）中	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張。いわゆる「N」字状口縁を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。外面に自然釉が掛かる。	色調　暗灰黄色。常滑焼6ｂ型式。13ｃ中頃～後半。
1113	25区　包含層（第1層）中	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。器壁は比較的薄い。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅡB2a類。14c後半。
1114	25区　包含層（第1層）中	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。平底で底部の径は小さい。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。比較的器壁は薄い。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部の内外面に指頭圧痕。	色調　浅い黄橙色。轆轤未使用。ⅣB1類。14c前半。
1115	25区　包含層（第1層）中	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。成形・整形とも極めて粗製。平底（凹凸が著しい）。底部と体部の界大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。粗製。ⅡA2ｂ類。14c後半。
1116	25区　包含層（第1層）中	土師器	Ⅲ	口縁部の歪みが著しい。器壁は全体に比較的薄い。平底。ややあげ底気味。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　橙色。轆轤未使用。ⅢA1類。14c前半。
1117	25区　包含層（第1層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅢA2類。14c後半。
1118	25区　包含層（第1層）中	無釉陶器	擂鉢	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は斜め方向に切る。片口をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　6条1単位の擂目施文。	焼成は堅緻。色調　にぶい赤褐色。備前焼擂鉢ⅢB類。14ｃ後半～15ｃ初頭。
1119	25区　包含層（第1層）中	無釉陶器	甕	口縁部は外方に折り曲げ、端部を上下に拡張する。	内外面ともヨコナデ調整。外面　胡麻状に灰被り。	色調　暗赤褐色。常滑焼5型式。13ｃ前半。
1120	26区　SK02	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面・外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　浅黄橙色。轆轤未使用。
1121	26区　SK13	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅡA2ｂ類。14c後半。
1122	26区　SK13	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。　色調　にぶい黄橙色。ⅣB2類。14c後半。
1123	26区　SK29	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	底部内面に煤附着－灯明皿として使用。轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅣB1類。14c前半。
1124	26区　SK29	土師器	Ⅲ	器形は著しく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面　指頭圧痕。	色調　褐灰色。轆轤未使用。ⅣB1類。14c前半。
1125	26区　SK29	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　明赤褐色。轆轤未使用。ⅣB1類。14c前半。
1126	26区　SK13	瓦質土器	羽釜	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部はほぼ直立。口縁部は内傾。口縁部外面に断面台形状の短い鍔を貼り付ける。口縁部外面　凹線2条。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　横方向のハケ目調整。体部外面上半　僅かに指頭圧痕が残る。底部外面　板ナデ調整。	色調　黒褐色。羽釜形タイプ：羽釜形B系列ⅡA類。14ｃ後半。
1127	26区　SK29	瓦質土器	火鉢	体部はほぼ直立。口縁部上面は水平に端面をもつ。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内外面　ヘラミガキ調整。器面は平滑。体部外面に菊花文を印花で施文。	色調　暗灰色。奈良火鉢。浅鉢Ⅰ。13ｃ後半～14ｃ前半。
1128	26区　SK29	無釉陶器	甕	口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　暗赤褐色。備前焼甕ⅢＢ類。14ｃ代。
1129	26区　SK29	白磁	四耳壺	頸部は直立。口縁部は外方に折り曲げる。口縁端部は斜め下方に引き出す。	内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた灰色に発色。	華南産白磁。四耳壺。13ｃ代。
1130	26区　SK29	白磁	四耳壺	口縁部は外方に折り曲げる。口縁端部は斜め下方に引き出す。	内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた灰白色に発色。	華南産白磁。四耳壺。13ｃ代。
1131	26区　SK30	無釉陶器	甕	頸部はほぼ直立。口縁端部は上方につまみ上げる。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面　ハケ目調整。体部内面　指頭圧痕。	色調　褐灰色。丹波焼。甕Ⅱ類。14ｃ前半。
1132	26区　SK39	土師器	Ⅲ	器形は大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
1133	26区　SK39	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1134	26区　SK39	土師器	Ⅲ	器形は大きく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面中央に浅い段。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
1135	26区　SK39	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延び上位で屈曲。口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。口縁部外面中央に浅い段をもつ。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
1136	26区　SK39	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　淡黄色。轆轤未使用。
1137	26区　SK39	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は斜め上方に立ち上がり、中位で屈曲。口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。口縁部外面に凹部をもつ。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
1138	26区　SK39	土師器	鍋	体部内彎。口縁部ほぼ直立。口縁端部　断面三角形状に肥厚。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面粗いハケ目調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目。	外面　煤附着。色調　にぶい黄橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅱ類。14ｃ前半。
1139	26区　SK44	瓦質土器	鉢	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部に１箇所片口をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　不定方向の指ナデ。	瓦質土器鉢。
1140	26区　SK45	土師器	Ⅲ	器形は著しく歪み、器面は凹凸が著しい。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。粗製。ⅢB1類。15c前半。
1141	26区　SK45	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅡA2ｂ類。14c後半。
1142	26区　SK45	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に段をもつ。底部内面　ナデ調整。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅡB2b類。15c前半。
1143	26区　SK45	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面及び外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅢB1類。15c前半。
1144	26区　SK45	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　多方向のナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅡB2b類。15c前半。
1145	26区　SK45	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に凹部をもつ。内面及び外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅢB1類。15c前半。
1146	26区　SK45	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　不定方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅡB2b類。15c前半。
1147	26区　SK45	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。体部内面及び外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅡB2b類。15c前半。
1148	26区　SK45	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。底部内面　ナデ調整。	色調　浅黄色。轆轤未使用。ⅡB2b類。15c前半。
1149	26区　SK45	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　灰黄褐色。轆轤未使用。ⅡA3a類。15c前半。
1150	26区　SK45	瓦質土器	鍋	体部は僅かに内彎。口縁部は外方に折り曲げ、口縁端部上面は斜め方向に端面をもつ。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　ナデ調整。体部外面　指オサエの後ナデ調整　指頭圧痕。	鍛造の鉄鍋を模倣。外面に煤附着。色調　灰色。鍋形タイプ：鉄鍋形ⅢC類。14ｃ後半。
1151	26区　SK45	土師器	鍋	器壁は全体に薄い。体部は大きく内彎。口縁部は僅かに外傾。口縁端部は外方に若干つまみ出す。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面ハケ目調整。粘土の継ぎ目が観察される。体部外面　平行叩き目。	焼成は堅緻。色調　にぶい赤褐色。丹波焼の可能性あり。甕形タイプ：播丹型Ⅰ類。13ｃ後半。
1152	26区　SK45	土師器	鍋	体部内彎。口縁部ほぼ直立。口縁端部水平に端面をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面ナデ調整。体部外面　平行叩き目。	色調　橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅳ類。15ｃ前半～中頃。
1153	26区　SK45	須恵器	鉢	口縁部は断面三角形状に肥厚する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。Ｃ３類。14ｃ代。
1154	26区　SK45	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に僅かに肥厚する。片口をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	色調　灰色。東播系須恵器。Ｃ3類。14ｃ代。
1155	26区　SK45	白磁	碗	底部の器壁は厚い。高台は粗く浅く削り出す。体部は斜め上方に延びる。	内面　透明釉施釉。灰白色に発色。外面　露胎。	華南産白磁。白磁碗Ⅳ類。12ｃ後半～13ｃ前半。
1156	26区　SK45	須恵器	鉢	口縁部は断面三角形状に肥厚する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　灰白色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。D類。14ｃ前半。
1157	26区　SK45	無釉陶器	甕	頸部はほぼ直立。口縁端部は外方につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。体部内外面　板ナデ調整。	色調　灰赤色。備前焼甕ⅡA類。13ｃ後半。
1158	26区　SK45	青磁	碗	体部は僅かに内彎。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面の強い回転ナデにより、口縁部外面は僅かに凹む。外面　広形蓮弁文施文。内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁蓮弁文碗。B-Ⅲ類。14ｃ後半～15c前半。
1159	26区　SK47	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
1160	26区　SK47	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
1161	26区　SK47	土師器	Ⅲ	器形は著しく歪む。平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面板ナデ調整。体部内外面　　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。
1162	26区　SK47	瓦器	椀	体部は内彎。口縁端部は丸味をもつ。	体部内面　平行ミガキ。暗文あり。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　ヘラ状工具と指によるナデ調整。	色調　灰白色。和泉型瓦器椀Ⅳ-4期。14ｃ前半。
1163	26区　SK47	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は楕円形状に僅かに肥厚する。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	色調　灰色。東播系須恵器。Ｃ1類。13ｃ後半。
1164	26区　SK47	無釉陶器	甕	口縁部は外方に水平に折り曲げ、さらに口縁端部を内側に折り込む形。	内外面ともヨコナデ調整。外面に自然釉附着。灰オリーブ色に発色。	焼成は極めて堅緻。丹波焼。甕Ⅱ類。14ｃ前半。
1165	26区　SD01	土師器	Ⅲ	ややあげ底気味の平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。内面の体部と底部の界に凹部をもつ。	轆轤未使用。色調　灰白色。ＶA2類。14c後半。
1166	26区　SD01	青磁	碗	高台は比較的幅が広く低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。内面の体部と底部の界　凹線１条。	外面に片切り彫で蓮弁文施文。内外面とも施釉オリーブ灰色に発色。底部外面（高台裏）露胎。	龍泉窯系青磁鎬連弁文碗。青磁碗Ⅱ類。13ｃ前半。
1167	26区　SD01	土製品	面子	土師器片の縁辺を打ち欠いて円形に成形。	器面は摩滅が著しい。	色調　灰白色。原体は土師器。
1168	26区　SD01	土製品	面子	瓦片の縁辺を打ち欠いて成形。	器面は摩滅が著しい。	色調　暗灰色。原体は瓦。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1169	26区　SD01	無釉陶器	甕	口縁部は短く上下に拡張、断面楕円形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　暗赤灰色。備前焼甕Ⅲ B類。14ｃ代。
1170	26区　SD04	土師器	Ⅲ	平底　体部と底部の界不明瞭。口縁部の器壁は厚い。	内・外面とも横ナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅡA1b類。13c後半。
1171	26区　SD04	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに短く斜め上方に立ち上がる。	口縁部外面を強くナデる。体部内・外面に指頭痕。	轆轤未使用。ⅡA1b類。13c後半。
1172	26区　SD04	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅣA2類。13c後半。
1173	26区　SD04	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く、斜め上方に立ち上がる。口縁端部は丸味を帯びる。	内・外面ともヨコナデ調整。口縁部外面　強いヨコナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅡA1b類。13c後半。
1174	26区　SD04	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁端部は若干尖り気味。	内・外面ともヨコナデ調整。口縁部外面　強いヨコナデ調整。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。ⅡA1b類。13c後半。
1175	26区　SD04	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁部外面に端面をもつ。	内・外面ともナデ調整。口縁部外面　強いナデ調整→外面に端面をもつ。口縁部内面に煤附着。内面指頭圧痕。	轆轤未使用。ⅡA1b類。13c後半。
1176	26区　SD04	土師器	Ⅲ	器壁は比較的薄い。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅢA1類。14c前半。
1177	26区　SD04	土師器	Ⅲ	器形は大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。　色調　にぶい橙色。ⅡA1b類。13c後半。
1178	26区　SD04	土師器	鉢？	体部は僅かに内彎。口縁部は水平に切る。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面　ナデ調整。指頭圧痕が若干残る。体部内面　ミガキ調整。暗文が認められる。内面　黒色に変色。	色調　にぶい橙色。
1179	26区　SD04	瓦質土器	羽釜	体部僅かに内彎。断面台形状の短い鍔を貼り付け。口縁端部は水平に切る。口縁部上端から鍔までは比較的短い。	内面～外面鍔上面まで　ヨコナデ調整。外面の鍔下面以下　指頭圧痕が残る。	色調　暗灰色。羽釜形タイプ：羽釜形B系列ⅡA類。14ｃ後半。
1180	26区　SD04	瓦器	椀	平底。高台は消滅。体部は僅かに内彎。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。口縁外面に僅かに凹部をもつ。	色調　暗灰色。和泉型瓦器椀Ⅳ-4期。14ｃ前半。
1181	26区　SD04	瓦器	椀	高台は退化し、粘土紐を貼り付けたのみ。体部は内彎。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調製。体部外面　指頭圧痕。	色調　灰白色。和泉型瓦器椀Ⅳ-4期。14ｃ前半。
1182	26区　SD04	瓦器	椀	平底。高台は消滅。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面　螺旋状ミガキ。暗文あり。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　暗灰色。和泉型瓦器椀Ⅳ-4期。14ｃ前半。
1183	26区　SD04	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁部上端は垂直につまみ上げる。口縁部は玉縁状に若干肥厚。	内・外面ともヨコナデ調整。口縁部外面　重ね焼痕あり。外面　粘土輪積痕明瞭。	東播系須恵器。Ｃ１類。13ｃ後半。
1184	26区　SD04	須恵器	鉢	口縁端部を上方につまみ上げる。	口縁部外面　黒色に変色→重ね焼の痕跡。内・外面とも回転ナデ調整。	東播系須恵器。Ｃ1類。13ｃ後半。
1185	26区　SD04	須恵器	甕	体部僅かに内彎。頸部直立。口縁部外反。口縁部外側面は垂直に切る。口縁部外面に沈線１条。	体部外面に横・右上がり・右下がり方向の叩目。頸部の叩目はナデ消す。体部内面　縦方向・斜め方向のハケ目調整。	焼成は堅緻。東播系。
1186	26区　SD04	須恵器	甕	体部僅かに内彎。頸部直立。口縁部外反。口縁部外側面　垂直に切る。口縁部上面に沈線１条。	体部外面に不定方向の叩目。頸部の叩目はナデ消す。体部内面　縦方向のハケ目調整。口縁部内面は横ナデ。	焼成は堅緻。東播系。
1187	26区　SD04	須恵器	甕	口縁部は外反、頸部は短く直立。口縁端部は端面をもつ。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　ナデ調整。外面の頸部～体部　斜め方向の平行叩き目。	色調　暗灰色。東播系須恵器。13ｃ前半。
1188	26区　SD04	無釉陶器	甕	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、中位で緩やかに屈曲する。頸部は短く外傾し、口縁部は外方にひらく。口縁端部は外方につまみ出し、端部は尖る。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面上半横方向のハケ目調整。体部外面中位　斜め方向のハケ目調整。体部外面下半　縦方向のハケ目調整。体部内面上半　横方向のハケ目調整。体部内面下半　横または斜め方向のハケ目調整。体部下半の内外面　ナデ調整。	色調　褐灰色。備前焼甕ⅡA類。13ｃ後半。
1189	26区　SD04	無釉陶器	壷	口縁部は上下に拡張。	内外面ともヨコナデ調整。外面に自然釉附着。暗黄緑色に発色。	色調　暗褐色。丹波焼。壷Ⅱ類。13ｃ後半。
1190	26区　SD04	青白磁	梅瓶	体部は僅かに内彎。	外面　渦巻き文。界線２条。	景徳鎮窯系青白磁。梅瓶。
1191	26区　SD04	土製品	面子	須恵器片の縁辺を打ち欠いて成形。	器面に叩き目が残る。	色調　暗灰色。原体は須恵器甕。
1192	26区　SD04	土製品	面子	須恵器片の縁辺を打ち欠いて成形。	器面に叩き目あり。	色調　にぶい黄橙色。原体は須恵器甕。
1193	26区　SD04	石製品	鍋	口縁端部上面は水平に端面をもつ。口縁部外面に断面台形状の鍔を削りだす。	体部外面上半にヨコ方向の削り痕。体部外面下半　横方向のノミ痕・縦方向の削り痕が認められる。体部内面　横方向のノミ痕・縦方向の削り痕が認められる。	滑石製。色調　明褐灰色。Ⅲb類。13ｃ代。
1194	26区　SD04	無釉陶器	壺	平底。体部は直線的に斜め上方に立ち上がり、中位で「く」の字状に屈曲する。頸部は短く直立する。口縁部は逆「L」字状に屈曲する。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面上半斜め方向の板ナデ調整。体部外面下半　縦方向の板ナデ調整。口縁部内面～体部内面上半　指頭圧痕。口縁部～肩部　自然釉が飴状に掛かる。	底部外面に窯壁2箇所附着。色調　にぶい赤褐色。釉色　暗オリーブ色。丹波焼。壷Ⅰ類。13ｃ後半。。
1195	26区　SD04	無釉陶器	甕	頸部直立。口縁部外反。口縁部上・下端を上下に拡張。口縁部上面に沈線１条。	内・外面とも横ナデ調整。頸部内・外面に指頭圧痕が残る。	胎土中に砂粒を含む。丹波焼甕Ⅳ類。14c前半。
1196	26区　SD04	無釉陶器？	甕	体部は大きく内彎する。頸部はやや内傾する。口縁部は外方に折り曲げ、口縁端部は上方につまみ上げる。	口縁部内外面　ヨコナデ調整の後、指オサエ。体部外面　縦斜め方向のハケ目調整。体部外面中央に格子目・十字に×印を組み合わせた文様をスタンプする。	胎土中に砂・石粒を含む。色調　オリーブ灰色（須恵質）。常滑焼5型式。13ｃ前半～中頃。
1197	26区　SD04	無釉陶器	甕	頸部直立。口縁端部は上方につまみ上げる。	内・外面とも横ナデ調整。頸部内面に粘土の継目痕。外面　自然釉附着。	胎土中に砂粒を含む。常滑焼5型式。13ｃ前半～中頃。
1198	26区　SD04	無釉陶器	甕	口縁部は水平に外方に折り曲げる。口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部上面に凹部をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。色調。体部内外面に指頭圧痕。	色調　灰黄褐色。常滑焼5型式。13ｃ前半～中頃。
1199	26区 SD03	土師器	Ⅲ	平底。底部中央部　僅かに指おさえ。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁端部は丸味をもつ。	外面の口縁部上面～内面　ナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。内面の底部と体部の界に凹部。外面の口縁部下面～底部　未調整。	618タイプの在地模倣タイプか？色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅣB2類。14c後半。
1200	26区 SD03	土師器	Ⅲ	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は丸く収まる。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内外面　指オサエ。	色調　灰白色。轆轤未使用。ⅡB2a類。14c後半。
1201	26区 SD03	土師器	Ⅲ	平底。底部中央　指オサエ。僅かにへそ皿風に成形。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁端部は尖り気味。	内・外面ともヨコナデ調整。口縁部内・外面は強いヨコナデ調整。	全体に器壁が薄い。色調　灰白色。轆轤未使用。ⅡB2a類。14c後半。
1202	26区 SD03	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁端部は若干尖り気味。	底部外面は未調整。指頭圧痕が残る。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内・外面　ヨコナデ調整。底部内面　不定方向のナデ。体部外面下半　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1203	26区 SD03	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は内側につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。F類。14ｃ後半～15ｃ前半。
1204	26区 SD03	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚する。口縁部内面に凹線１条。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	焼成はあまい。色調　灰白色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。D類。14ｃ前半。
1205	26区 SD03	須恵器	鉢	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁部内面に凹部をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面下半　横方向のヘラ削り。底部外面　未調整。糸切り痕。	焼成はややあまい。色調　灰黄色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。B3類。14ｃ代。
1206	26区 SD03	無釉陶器	甕	口縁部は外方に折り曲げ、上下に拡張したものが頸部に附着した形。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面　縦方向のハケ目調整の後、ヨコナデ調整。体部内面指オサエ。	色調　褐灰色。常滑焼9型式。15ｃ前半～中頃。
1207	26区　包含層(第2層)中	土師器	Ⅲ	平底。中央部指おさえによりやや突出。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界に浅い凹線。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。ⅢA2類。14c後半。
1208	26区　包含層(第2層)中	土師器	Ⅲ	底部の器壁は比較的厚い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅡA2ｂ類。14c後半。
1209	26区　包含層(第2層)中	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。ⅡA2ｂ類。14c後半。
1210	26区　包含層(第2層)中	土師器	Ⅲ	器形は大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。ⅣB2類。14c後半。
1211	26区　包含層(第2層)中	土師器	Ⅲ	平底。中央部　指おさえによりやや突出。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部の器壁は厚く、端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	口縁部に煤附着－灯明Ⅲとして使用。轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅡA2ｂ類。14c後半。
1212	26区　包含層(第2層)中	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅢA2類。14c後半。
1213	26区　包含層(第2層)中	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部外面　指オサエ。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅣB2類。14c後半。
1214	26区　包含層(第2層)中	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部外面　指オサエ。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅡA2ｂ類。14c後半。
1215	26区　包含層(第2層)中	土師器	Ⅲ	器形は著しく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。ⅡA2ｂ類。14c後半。
1216	26区　包含層(第2層)中	土師器	Ⅲ	平底。ややあげ底気味。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　浅黄色。ⅣB2類。14c後半。
1217	26区　包含層(第2層)中	土師器	Ⅲ	平底。ややあげ底気味。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅡB2a類。14c後半。
1218	26区　包含層(第2層)中	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界に凹線１条。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。ⅣB2類。14c後半。
1219	26区　包含層(第2層)中	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅢA2類。14c後半。
1220	26区　包含層(第2層)中	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	色調　浅黄色。轆轤未使用。ⅣB2類。14c後半。
1221	26区　包含層(第2層)中	瓦質土器	羽釜	体部は内彎。口縁部は内傾。口縁部外面に断面台形状の鍔を貼り付ける。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　ナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　暗灰色。羽釜形タイプ：羽釜形B系列ⅡA類。14ｃ後半。
1222	26区　包含層(第2層)中	瓦質土器	鍋	体部はほぼ直立。口縁部は外方に水平に折り曲げ、端部は上方につまみ出す。口縁端部上面は水平に端面をもつ。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　板ナデ調整。体部外面　指オサエの後、ナデ調整指頭圧痕。	鍛造の鉄鍋を模倣。外面に煤附着。色調　灰白色。鍋形タイプ：鉄鍋形Ⅱ類。13ｃ後半。
1223	26区　包含層(第2層)中	瓦質土器	羽釜	口縁部はほぼ直立。口縁部外面に断面長方形状の鍔を貼り付ける。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に指頭圧痕。	色調　暗灰色。羽釜形タイプ：羽釜形A系列Ⅰ類。13ｃ後半。
1224	26区　包含層(第2層)中	土師器	鍋	口縁部と体部の界は「く」の字状に大きく屈曲、口縁部は外反する。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面　指オサエ。体部内面　横方向の細かいハケ目調整。	色調　にぶい赤褐色。鍋形タイプ：鉄鍋形Ⅰ類。　13ｃ前半。
1225	26区　包含層(第2層)中	土師器	鍋	体部は僅かに内彎。口縁部と体部の界は「く」の字状に大きく屈曲、口縁部は外反する。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面　縦方向の粗いハケ目調整の後、指オサエ。体部内面多方向の細かいハケ目調整。	外面に煤附着。色調　にぶい褐色。鉄鍋タイプ：鉄鍋形Ⅰ類。13ｃ前半。
1226	26区　包含層(第2層)中	土師器	鍋	口縁部はほぼ直立。口縁端部は外方につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　褐灰色。甕形タイプ：播丹型Ⅰ類。13ｃ後半。
1227	26区　包含層(第2層)中	土師器	鍋	口縁部は僅かに外傾。口縁端部は玉縁状に肥厚。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面　横方向の平行叩き目。	色調　橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅲ類。14ｃ後半。
1228	26区　包含層(第2層)中	土師器	鍋	体部内彎。口縁部は僅かに外反。口縁端部は若干内側につまみ出す。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面ナデ調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目。	外面　煤附着。色調　にぶい赤褐色。甕形タイプ：播丹型Ⅴ類。15ｃ後半～16ｃ初頭。
1229	26区　包含層(第2層)中	土師器	鍋	体部は内彎。口縁部は僅かに外方にひらく。口縁端部は丸味をもち、端部は若干外方につまみ出す。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面ナデ調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目。	外面に煤附着。色調　にぶい橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅱ類。14ｃ前半。
1230	26区　包含層(第2層)中	土師器	鍋	体部は内彎。口縁部は僅かに外傾する。口縁端部は若干肥厚。	口縁部内外面　強いヨコナデ調製。体部内面板状工具痕。体部外面　平行叩き目。	色調　赤橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅲ類。14ｃ後半。
1231	26区　包含層(第2層)中	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚する。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面ややくぼむ。	焼成はややあまい。色調　灰黄色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。C3類。14ｃ代。
1232	26区　包含層(第2層)中	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	色調　暗灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。E1類。14ｃ代。
1233	26区　包含層(第2層)中	須恵器	鉢	口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。	口縁部外面降灰の為黒色に変色一部重ね焼痕。	東播系　魚住窯　赤根川支群の製品。C3類。14ｃ代。
1234	26区　包含層(第2層)中	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は水平に切る。口縁端部は内側につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　8条１単位の擂目施文。	色調　灰色（須恵質）。備前焼擂鉢ⅢA類。14ｃ後半～15ｃ初頭。
1235	26区　包含層(第2層)中	無釉陶器	擂鉢	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部はほぼ水平方向に切る。片口をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　7条１単位の擂目施文。	色調　灰白色（須恵質）。備前焼擂鉢ⅢA類。14ｃ後半～15ｃ初頭。
1236	26区　包含層(第2層)中	無釉陶器	甕	頸部はほぼ直立。口縁部は外方につまみ出し、玉縁状に肥厚。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面の一部横方向のハケ目調整。	色調　暗灰色（須恵質）。備前焼甕ⅡB類。13ｃ後半。
1237	26区　包含層(第2層)中	無釉陶器	甕	頸部はほぼ直立。口縁部は玉縁状に肥厚。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　横斜め方向のハケ目調整。体部外面　一部ハケ目調整。	色調　灰オリーブ色（須恵質）。備前焼甕ⅢA類。14ｃ代。
1238	26区　包含層(第2層)中	無釉陶器	甕	頸部は若干外傾。口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。	焼成はややあまい。色調　にぶい赤褐色。備前焼甕ⅢA類。14ｃ代。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1239	26区　包含層(第2層)中	無釉陶器	甕	口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　黄灰色（須恵質）。備前焼甕ⅢA類。14ｃ代。
1240	26区　包含層(第2層)中	無釉陶器	甕	口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　赤灰色。備前焼甕ⅢB類。14ｃ代。
1241	26区　包含層(第2層)中	無釉陶器	甕	口縁部は外方に折り曲げ。口縁部下端と頸部との間は狭い。	胎土中には砂粒を多く含む。	形態・胎土から見て常滑の製品か。8型式。14ｃ中頃～後半。
1242	26区　包含層(第2層)中	無釉陶器	甕	口縁部は外方に折り曲げ。口縁部下端と頸部との間は比較的広い。いわゆる「N」字状口縁を呈する。	胎土はあまり砂粒を含まず、きめ細かい。	丹波焼。甕Ⅰ類。14ｃ前半。
1243	26区　包含層(第2層)中	青磁	碗	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は大きく内側に屈曲。口縁端部は丸味をもつ。	体部外面にやや鎬のあまい連弁文を片切り彫で施文。内外面とも青磁釉施釉。緑灰色に発色。口縁部に1箇所鉄釉を飛び青磁風に施釉。	龍泉窯系青磁。東口碗Ⅱ-b類。
1244	26区　包含層(第2層)中	土師器	三足鍋	丸底。体部は内彎・内傾し、斜め上方に延びる。口縁部は大きく内傾。口縁部外面　凹線３条。底部外面に脚を３箇所貼り付ける。脚は欠損。	内内面ともヨコナデ調整。	三足鍋のミニチュア。色調　灰白色。
1245	26区　包含層(第2層)中	土製品	土錘	棒状型に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。器面は使用により摩滅し平滑。	色調　橙色。焼成　堅緻。一部灰被り。
1246	26区　包含層(第2層)中	石製品	石鍋	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部はほぼ直立。口縁部上面は水平に端面をもつ。口縁部外面に断面三角形状の鍔を削りだす。	体部外面　成形時のノミ跡が明瞭に認められる。	外面全面に煤附着。滑石製。色調　灰色。Ⅲｃ類。14ｃ前半。
1247	26区　包含層(第2層)中	石製品	石鍋	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は直立。口縁端部上面は水平に端面をもつ。	体部外面　成形時の縦方向のノミ跡が明瞭に認められる。	滑石製。色調　灰白色。Ⅲｂ類。13ｃ代。
1248	27区 SX01	土師器	Ⅲ	器形は著しく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1249	27区 SX01	無釉陶器	甕	口縁部は外方に折り曲げ、端部は僅かに上下に拡張する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　灰赤色。常滑焼6ａ型式。13ｃ中頃。
1250	27区 SX02	土師器	鍋	丸底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は内彎・内傾して上方に延びる。口縁部は大きく屈曲、外方にひらく。口縁端部上面は水平に整形。端部を内側につまみ出す。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面上半　ヘラ状工具による横方向のナデ調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目。	外面　煤附着。甕形タイプ：播丹型Ⅴ類。15ｃ後半～16ｃ初頭。
1251	27区 SX02	無釉陶器	甕	口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内面　灰被り。	色調　にぶい赤褐色。備前焼甕ⅢＡ類。14ｃ代。
1252	27区 SK03	土師器	Ⅲ	器形は全体的に大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
1253	27区 SK04	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。Ⅳ B2類。14c後半。
1254	27区 SK04	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。Ⅳ B2類。14c後半。
1255	27区 SK04	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。Ⅲ A2類。14c後半。
1256	27区 SK04	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。Ⅱ A2ｂ類。14c後半。
1257	27区 SK04	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。Ⅱ B2a類。14c後半。
1258	27区 SK04	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部中央にナデによる稜をもつ。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。Ⅱ B2a類。14c後半。
1259	27区 SK04	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。Ⅱ B2a類。14c後半。
1260	27区 SK04	土師器	Ⅲ	器形は全体にやや歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。ⅢA2類。14c後半。
1261	27区 SK04	土師器	Ⅲ	器形は全体にやや歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。Ⅳ B2類。14c後半。
1262	27区 SK04	土師器	Ⅲ	器形は全体的に大きく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	轆轤未使用。色調　灰黄褐色。ⅡA2ｂ類。14c後半。
1263	27区 SK04	土師器	Ⅲ	器形は大きく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。Ⅲ A2類。14c後半。
1264	27区 SK04	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。Ⅲ A2類。14c後半。
1265	27区 SK04	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。Ⅱ A2ｂ類。14c後半。
1266	27区 SK04	須恵器	鉢	口縁部は断面三角形状に肥厚する。片口をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。	焼成はあまい。色調　にぶい黄橙色。東播系須恵器。B2類。13ｃ前半。
1267	27区 SK05	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は不明瞭。体部はやや内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅡA2a類。14c前半。
1268	27区 SK05	瓦質土器	火鉢	口縁部上面は水平に面取り。外面に凸帯2条貼り付け。	内外面ともヨコナデ調整。２条の凸帯間に菊花文押を印花で施文。	色調　黄灰色。器面の摩滅が著しい。奈良火鉢。浅鉢Ⅳ。15ｃ前半。
1269	27区 SK05	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚する。口縁部内面やや凹む。	内外面ともヨコナデ調整。	焼成はあまい。色調　灰白色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。D類。14ｃ前半。
1270	27区 SK05	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面ともヨコナデ調整。体部外面に指オサエ。	色調　暗灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。E1類。14ｃ後半。。
1271	27区 SK08	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部は外方へ開き気味に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。内面の底部と体部の界にヘラ状工具で沈線施文。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。Ⅳ D1類。15c末葉～16c前葉。
1272	27区 SK08	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅢC1類。15c末葉～16c前葉。
1273	27区 SK08	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は屈曲。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部下半　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。Ⅳ D2類。15c末葉～16c前葉。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1274	27区 SK08	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅡB3b類。15c末葉～16c前葉。
1275	27区 SK08	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に凹部をもつ。底部内面　ナデ調整。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅣD2類。15c末葉～16c前葉。
1276	27区 SK08	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部は外方にひらく。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。ⅣD2類。15c末葉～16c前葉。
1277	27区 SK08	須恵器	鉢	口縁部は断面三角形状に肥厚する。片口をもつ。	内外面とも強いヨコナデ調整。	色調　褐灰色。東播系須恵器。B3類。14ｃ代。
1278	27区 SK08	無釉陶器	甕	口縁部は短く上下に拡張、断面楕円形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　にぶい赤褐色。備前焼甕ⅢA類。14ｃ代。
1279	27区　SK09	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味を帯びる。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1280	27区　SK09	土師器	Ⅲ	器壁は比較的厚い。平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内外面　指頭圧痕。	口縁部に煤附着－灯明Ⅲとして使用。轆轤未使用。色調　浅黄橙色。
1281	27区　SK09	土師器	Ⅲ	器形は歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に立ち上がり中位で屈曲、口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。
1282	27区　SK09	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　褐灰色。轆轤未使用。
1283	27区　SK09	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界　浅い凹部をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1284	27区　SK09	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1285	27区　SK09	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に凹部をもつ。外面の体部下半　指頭圧痕。	色調　浅黄橙色。轆轤未使用。
1286	27区　SK09	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1287	27区　SK09	土師器	Ⅲ	器壁は比較的薄い。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
1288	27区　SK09	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に立ち上がり中位で屈曲、口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
1289	27区　SK09	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に立ち上がり、中位で外方に屈曲、口縁部は外反する。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部・体部内面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。
1290	27区　SK11	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1291	27区　SK11	土師器	Ⅲ	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。ⅡB2a類。14c後半。
1292	27区　SK11	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面中央に低い段あり。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅡB2a類。14c後半。
1293	27区　SK11	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は明瞭ではなく、体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	口縁部に煤附着－灯明Ⅲとして使用。轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅢA2類。14c後半。
1294	27区　SK11	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。器壁は全体に比較的厚い。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅢA2類。14c後半。
1295	27区　SK11	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅣB2類。14c後半。
1296	27区　SK11	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅣB2類。14c後半。
1297	27区　SK11	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅢA2類。14c後半。
1298	27区　SK11	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に浅い段をもつ。底部内面　ナデ調整。	口縁部に一部煤附着－灯明Ⅲとして使用。轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
1299	27区　SK11	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　黄橙色。ⅢA2類。14c後半。
1300	27区　SK14	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界　浅い凹線。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。ⅣB2類。14c後半。
1301	27区　SK14	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅢA2類。14c後半。
1302	27区　SK14	無釉陶器	甕	頸部は直立。口縁部は小さく玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。	焼成はややあまい。備前焼甕ⅢB類。14ｃ代。
1303	27区　SK15	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
1304	27区　SK18	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	内外面に煤附着－灯明Ⅲとして使用。色調　灰白色。ⅡA3ｂ類。15c後半。
1305	27区　SK18	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は明瞭ではなく、体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	体部内面に煤附着－灯明Ⅲとして使用。轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅡA3ｂ類。15c後半。
1306	27区　SK18	土師器	Ⅲ	器形は全体的に大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅢB2a類。15c後半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1307	27区　SK18	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。内面　比較的丁寧なナデ調整。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。ⅣC2a類。15c後半。
1308	27区　SK18	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅡA3ｂ類。15c後半。
1309	27区　SK18	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。　体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅣC2a類。15c後半。
1310	27区　SK18	土師器	Ⅲ	器形は全体に比較的薄い。平底。体部は緩やかに、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅢB2a類。15c後半。
1311	27区　SK18	土師器	Ⅲ	器形は全体に比較的薄い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は僅かに内側に折り込む。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　黄灰色。ⅢB2ｂ類。15c後半。
1312	27区　SK19	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内外面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
1313	27区　SK19	染付磁器	杯	器壁は非常に薄い。口縁部外反。	色調　白色。文様　外面　龍文か？。内面　無文。	明青花。16c後半～17ｃ初頭。
1314	27区　SK20	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚する。口縁部内面は僅かにくぼむ。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　灰白色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。D類。14ｃ代。
1315	27区　SK20	須恵器	鉢	口縁部は断面三角形状に肥厚する。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　灰白色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。C2類。13ｃ後半。
1316	27区　SK20	施釉陶器	椀	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く浅く削り出す。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも灰釉施釉。暗緑灰色に発色。高台脇以下露胎。露胎部　暗赤褐色に発色。	肥前系。唐津。Ⅱ期。17ｃ前半。
1317	27区　SK21	瓦器	Ⅲ	やや丸底気味の平底。底部と体部の界は僅かに屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　平行ミガキ－暗文あり。底部外面は指オサエ。	色調　黒灰色。
1318	27区　SK21	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚する。	内外面ともヨコナデ調整。	焼成　ややあまい。色調　にぶい黄褐色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。B2類。14ｃ代。
1319	27区　SK24	土師器	小Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界　ナデによる凹線１条。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1320	27区　SK24	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は斜め方向に切る。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　７条１単位の擂目施文。口縁部上面　胡麻状に灰被り。	色調　暗褐色。備前焼擂鉢ⅢB類。14ｃ後半～15ｃ初頭。
1321	27区　SK24	無釉陶器	擂鉢	体部は僅かに内彎。口縁部は水平方向に切る。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　擂目施文。	色調　暗赤灰色。備前焼擂鉢ⅢA類。14ｃ後半～15ｃ初頭。
1322	27区　P01	土師器	Ⅲ	器壁は全体に比較的薄い。器形は大きく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。内面の底部と体部の界に浅い凹部をもつ。底部外面　指おさえ。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
1323	27区　P01	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	器面はナデ調整。平滑。表面に煤附着。2次焼成を受けた痕跡がある。	色調　にぶい橙色。
1324	27区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。
1325	27区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
1326	27区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。器壁は全体に厚い。丸底気味の平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
1327	27区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
1328	27区　包含層（第2層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に凹部をもつ。底部内面　ナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
1329	27区　包含層（第2層）中	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚する。口縁部内面は浅くくぼむ。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。D類。14ｃ前半。
1330	27区　包含層（第2層）中	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は玉縁状に肥厚する。口縁端部は内側につまみ出す。片口をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	焼成の際、酸化炎が強く、色調は淡赤褐色を呈する。焼成はややあまい。東播系須恵器。赤根川支群の製品。F類。14ｃ後半～15ｃ前半。
1331	27区　包含層（第2層）中	無釉陶器	壷	体部は僅かに内彎。頸部は短く直立。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面に窯印「上」をヘラ描き。	備前焼。
1332	27区　包含層（第2層）中	施釉陶器	椀	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く浅く削り出す。三日月高台。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	内外面とも施釉。オリーブ灰色に発色、外面の体部下半以下露胎。	肥前系。唐津。Ⅱ期。17ｃ初頭～前半。
1333	27区　包含層（第2層）中	施釉陶器	Ⅲ	底部の器壁は非常に厚い。高台は小さく浅く削り出す。三日月高台。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	内面　施釉。灰被りのため白濁色に発色。外面露胎。露胎部　橙色に発色。	肥前系。唐津。Ⅱ期。17ｃ前半。
1334	27区　包含層（第2層）中	施釉陶器	Ⅲ	底部の器壁は非常に厚い。高台は小さく浅く削り出す。三日月高台。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	内面　施釉。灰被のため灰オリーブ色に発色。外面　露胎。露胎部　明赤褐色に発色。	肥前系。唐津。Ⅱ期。17ｃ前半。
1335	27区　包含層（第2層）中	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚する。口縁部内面は僅かにくぼむ。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	内面に煤附着。色調　灰白色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。C3類。14ｃ代。
1336	27区　包含層（第2層）中	無釉陶器	甕	口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　オリーブ黒色（須恵質）。備前焼甕ⅢB類。14ｃ代。
1337	27区　包含層（第2層）中	無釉陶器	甕	口縁部は短く上下に拡張、断面楕円形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　にぶい赤褐色。備前焼甕ⅢＢ類。14ｃ代。
1338	27区　包含層（第2層）中	石製品	鍋	体部直立。口縁部は僅かに内傾。口縁部外面に断面台形状の短い鍔を削りだす。	体部外面　成形時のノミ跡が明瞭に認められる。	外面に煤附着。色調　灰色。滑石製。Ⅲｃ類。14ｃ前半。
1339	27区　包含層（第1層）中	土師器	Ⅲ	平底。指オサエでややあげ底気味に成形。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ヘソⅢの模倣形か。
1340	27区　包含層（第1層）中	土師器	Ⅲ	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1341	27区　包含層（第1層）中	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界　ヘラ状工具で沈線。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅢC1類。15c末葉～16c前葉。
1342	27区　包含層（第1層）中	土師器	Ⅲ	器形は全体に歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　灰黄褐色。
1343	27区　包含層（第1層）中	土師器	鍋	丸底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は内傾して斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	底部を型作りし、体部～口縁部は粘土紐巻上げ成形。（底型作り）。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。内面～体部外面上半　ナデ調整。体部外面下半　平行叩き目が残る。底部内外面　ナデ調整。	外面　全面に煤附着。色調　にぶい橙色。羽釜形タイプ：播磨型Ⅲ類。16ｃ末～17ｃ前葉。
1344	27区　包含層（第1層）中	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚する。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内面に凹部をもつ。	色調　褐灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。F類。14ｃ後半～15ｃ前半。
1345	27区　包含層（第1層）中	須恵器	鉢	口縁部は断面三角形状に肥厚する。口縁部内面ややくぼむ。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。B2類。13ｃ前半。
1346	27区　包含層（第1層）中	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張、断面楕円形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　灰赤色。備前焼甕Ⅳ類。15ｃ前半。
1347	27区　包含層（第1層）中	施釉陶器	Ⅲ	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方に水平に折り曲げる。口縁部上面に凹部をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。内外面とも灰釉施釉。オリーブ黄色に発色。	瀬戸・美濃系。灰釉陶器。折縁深Ⅲ。後Ⅱ期。15ｃ前半。
1348	28区　SE01	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	内面　煤附着－灯明皿として使用。轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅢC2類。15c末葉～16c前葉。
1349	28区　SE01	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は斜め方向に切る。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　擂目施文。内面　胡麻状に灰被り。	色調　暗赤褐色。備前焼擂鉢ⅢA類。14ｃ後半～15ｃ初頭。
1350	28区　SE01	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。内面の底部と体部の界　ヘラ状工具で沈線1条施文。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅣD1類。15c末葉～16c前葉。
1351	28区　SE01	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界　ヘラ状工具で沈線1条施文。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅣD1類。15c末葉～16c前葉。
1352	28区　SE01	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面の体部と底部の界に沈線１条。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅢC1類。15c末葉～16c前葉。
1353	28区　SE01	土師器	Ⅲ	口縁部は著しく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界ヘラ状工具で沈線1条施文。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内外面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅣD1類。15c末葉～16c前葉。
1354	28区　SE01	土師器	Ⅲ	器形は歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。内面の底部と体部の界ヘラ状工具で沈線1条施文。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。ⅢC1類。
1355	28区　SE01	土師器	Ⅲ	器形は歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は僅かに外反して斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に指頭圧痕が僅かに残る。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。ⅣD1類。15c末葉～16c前葉。
1356	28区　SE01	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。内面の底部と体部の界　ヘラ状工具で沈線1条施文。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅢC1類。15c末葉～16c前葉。
1357	28区　SE01	土師器	Ⅲ	口縁部は大きく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界ヘラ状工具で沈線1条施文。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅣD1類。15c末葉～16c前葉。
1358	28区　SE01	土師器	Ⅲ	器形は歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。内面の底部と体部の界　ヘラ状工具で沈線1条施文。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅣD1類。15c末葉～16c前葉。
1359	28区　SE01	土師器	Ⅲ	底部は上方に突出するいわゆるヘソⅢ。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　灰白色。ⅤB2類。15c後半。
1360	28区　SE01	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。底部は上方に突出するいわゆるヘソⅢ。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　灰白色。ⅤB2類。15c後半。
1361	28区　SE01	土師器	Ⅲ	器形は大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　灰白色。轆轤未使用。ⅣD2類。15c末葉～16c前葉。
1362	28区　SE01	無釉陶器	甕	口縁部は短い楕円形状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　暗赤褐色。備前焼甕ⅢB類。14ｃ代。
1363	28区　SE01	施釉陶器	盤orⅢ？	器壁は比較的厚い。盤か？。	内面に白泥で蓮弁文を象嵌し、さらに鉄釉で施文した後、灰釉施釉。淡青緑色に発色。	朝鮮産？。
1364	28区　SE01	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界に沈線１条。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。指頭圧痕。	色調　橙色。轆轤未使用。ⅢC1類。15c末葉～16c前葉。
1365	28区　SE02	土師器	Ⅲ	底部の器壁は非常に厚い。器形は全体に大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内外面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
1366	28区　SK01	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	口縁部内面に煤附着－灯明皿として使用。轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1367	28区　SK03	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁部内面はくぼむ。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	焼成はややあまい。色調　灰白色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。E1類。14ｃ後半。
1368	28区　SK03	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁部内面は僅かにくぼむ。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	色調　暗灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。E1類。14ｃ後半。
1369	28区　SK03	須恵器	鉢	口縁部は断面三角形状に肥厚する。口縁端部は斜め上方につまみ上げる。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　暗灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。D類。14ｃ前半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1370	28区　SK03	無釉陶器	甕	口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　暗黄褐色。備前焼甕ⅢB類。14ｃ代。
1371	28区　SK03	石製品	鍋	口縁部は直立。口縁部上面は水平方向に端面をもつ。口縁部外面に断面台形状の短い鍔をもつ。	体部外面に成形時の縦方向のノミ痕が認められる。	滑石製。色調　灰白色。Ⅲｃ類。14ｃ前半。
1372	28区　SK04	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部下端を外方につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　擂目施文。	胎土は精良。色調　暗赤褐色。備前焼擂鉢ⅤB類。15ｃ後半。
1373	28区　SK04	無釉陶器	甕	口縁部は短く上下に拡張、断面楕円形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　にぶい赤褐色。備前焼甕ⅢA類。14ｃ代。
1374	28区　SK04	無釉陶器	甕	口縁部は短く上下に拡張、断面楕円形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　暗赤褐色。備前焼甕ⅢB類。14ｃ代。
1375	28区　SK04	無釉陶器	甕	頸部は若干外傾。口縁部は短く上下に拡張。断面楕円形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。外面　胡麻状に灰被り。	色調　暗赤褐色。備前焼甕ⅢA類。14ｃ代。
1376	28区　SK10	瓦器	皿	平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。外面の体部～底部　ナデ調整。内面の体部～底部　平行ミガキ。暗文あり。	器面は大きく摩滅。色調　灰白色。
1377	28区　P14	土師器	皿	器形は全体に著しく歪む。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部下半　指頭圧痕。	色調　黄橙色。轆轤未使用。粗製。
1378	28区　包含層(第1層下部)　中	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　灰白色。ⅢB1類。15c前半。
1379	28区　包含層(第1層下部)　中	土師器	皿	器形は全体に著しく歪む。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅡA3a類。15c前半。
1380	28区　包含層(第1層下部)　中	瓦質土器	鍋	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は若干外方ににひらき、口縁端部上面は水平に端面をもつ。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　横方向の板ナデ調整。体部外面　不定方向のヘラ削り調整。	色調　暗灰色。鍋形タイプ：鉄鍋形Ⅱ類。13c後半。
1381	28区　包含層(第1層下部)　中	土師器	鍋	口縁部はほぼ直立。口縁端部は玉縁状に肥厚。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面　横方向の平行叩き目。体部内面　板ナデ調整。	外面　煤附着。色調　にぶい橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅳ類。15ｃ前半～中頃。。
1382	28区　包含層(第1層下部)　中	須恵器	鉢	口縁部は断面三角形状に肥厚する。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面とも強いヨコナデ調整。	色調　灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。C2類。13ｃ後半。
1383	28区　包含層(第1層下部)　中	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。片口をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	焼成はややあまい。色調　灰白色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。B3類。14ｃ代。
1384	28区　包含層(第1層下部)　中	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚する。口縁部内面　若干くぼむ。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	焼成はややあまい。色調　灰白色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。E1類。14ｃ後半。
1385	28区　包含層(第1層下部)　中	無釉陶器	甕	口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。外面灰被り。	色調　灰オリーブ色に発色。備前焼甕ⅢB類。14ｃ代。
1386	28区　包含層(第1層下部)　中	土製品	面子	土師器片の縁辺を打ち欠いて円形に成形。	器面は磨耗により平滑。	色調　にぶい橙色。原体は土師器。
1387	28区　包含層(第1層下部)　中	土製品	面子	土師器片の縁辺を打ち欠いて円形に成形。	器面は磨耗により平滑。	色調　にぶい橙色。原体は土師器。
1388	28区　包含層(第1層下部)　中	石製器	面子？	滑石製。	器面は平滑。	色調　灰白色。
1389	28区　包含層(第1層下部)　中	土製品	面子	須恵器片の縁辺を打ち欠いて成形。	器面は磨耗。	色調　灰色。原体は須恵器甕。
1390	28区　包含層(第1層下部)　中	土製品	土馬	手づくね成形。土馬の頭部。	表面は著しく磨耗する。ヘラ状工具で両目を表現。	色調　にぶい黄橙色。
1391	29区　SE04	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。器面の摩滅が著しい。	色調　橙色。轆轤未使用。ⅡA2a類。14c前半。
1392	29区　SE04	土師器	皿	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半　指頭圧痕。	色調　黄橙色。轆轤未使用。ⅢA1類。14c前半。
1393	29区　SE04	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚する。口縁部内面に浅い凹部をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	焼成はややあまい。色調　灰白色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。D類。14ｃ前半。
1394	29区　SE04	青磁	杯	口縁部は外反。	内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁。杯Ⅲ類。13ｃ中頃～14ｃ初頭。
1395	29区　SE108	土師器	皿	平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅡA2a類。14c前半。
1396	29区　SE108	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。体部は中位で外方に屈曲。口縁部は外反する。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。ⅢA1類。14c前半。
1397	29区　SE108	須恵器	鉢	口縁部は断面三角形状に肥厚する。口縁端部は内側につまみ出す。口縁部内面に凹線１条。	内外面ともヨコナデ調整。器面は摩滅。	色調　灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。D類。14ｃ前半。
1398	29区　SE108	無釉陶器	擂鉢	体部は僅かに内彎。口縁部は水平方向に切る。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　9条1単位の擂目施文。	色調　灰色（須恵質）。備前焼擂鉢ⅡA類。13ｃ後半～14ｃ前半。
1399	29区　SE108	無釉陶器	甕	頸部は直立。口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　黒褐色（須恵質）。備前焼甕ⅢB類。14ｃ代。
1400	29区　SE108	無釉陶器	甕	口縁部上端を上方につまみ上げる。	内外面ともヨコナデ調整。外面　灰被り。	色調　褐色。丹波焼。甕Ⅱ類。14ｃ前半。
1401	29区　SE108	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張。いわゆる「N」字状口縁。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。外面　自然釉附着。	色調　暗茶褐色。常滑焼7型式。14ｃ前半～中頃。
1402	29区　SX01	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部下端を外方につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面８条１単位の擂目施文。	胎土は精良。色調　暗赤褐色。備前焼擂鉢ⅤA類。15ｃ後半。
1403	29区　SX118	青磁	碗	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面に片切り彫で劃花文施文。内外面とも青磁釉施釉。背味を帯びた灰白色に発色。	龍泉窯系青磁劃花文碗。青磁碗Ⅲ-１B類。13ｃ前半。
1404	29区　SX118	土製品	土錘	両端が細く、中央部がふくらむ形。棒状型に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。	色調　灰黄褐色。焼成　比較的堅緻。
1405	29区　SX125	土製品	面子	土師器片の縁辺を打ち欠いて円形に成形。	器面に叩き目が残る。	色調　灰白色。原体は土師器鍋。
1406	29区　SX128	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅢA2類。14c後半。
1407	29区　SX128	瓦質土器	鍋	丸底。体部は僅かに内彎気味に直上に延びる。口縁部は外方に折り曲げ、口縁端部は内側につまみ出す。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　板ナデ調整。体部外面上半　指オサエの後ナデ調整指頭圧痕。体部外面下半～底部　ヘラ削り調整の後ナデ調整。	鍛造の鉄鍋を模倣。外面に煤附着。色調　黒褐色。鍋形タイプ：鉄鍋形ⅢC類。14ｃ後半。
1408	29区　SX128	瓦質土器	鍋	体部は僅かに内彎。口縁部は外方に折り曲げ、逆「L」字状を呈する。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　板ナデ調整。体部外面　指頭圧痕（鍛造の鉄鍋を模倣）。	色調　黒褐色。鍋形タイプ：鉄鍋形ⅢC類。14ｃ後半。
1409	29区　SX128	無釉陶器	甕	頸部は直立。口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。外面　灰被り。	色調　灰赤色。備前焼甕ⅢB類。14ｃ代。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1410	29区　SK06	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。体部外面指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅡA4類。15c末葉～16c前葉。
1411	29区　SK06	土師器	鍋	体部は僅かに内彎。口縁部内傾。口縁端部は丸味をもつ。外面の体部と口縁部の界に強いヨコナデによって段状の鍔をもつ。口縁部内面に凹線が１条巡る。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調製。体部外面　斜め方向の平行叩き目。	外面に煤附着。色調　にぶい橙色。羽釜形タイプ：播磨型Ⅱ類。16ｃ中葉～後半。
1412	29区　SK06	土師器	鍋	体部はほぼ直立。口縁部内傾。口縁端部は丸味をもつ。外面の体部と口縁部の界に強いヨコナデによって段状の鍔をもつ。口縁部内面に凹線が１条巡る。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調製。体部外面　斜め方向の平行叩き目。	外面に煤附着。色調　にぶい橙色。羽釜形タイプ：播磨型Ⅱ類。16ｃ中葉～後半。
1413	29区　SK06	土師器	鍋	体部はほぼ直立。口縁部内傾。口縁端部は丸味をもつ。外面の体部と口縁部の界に僅かに段をもつ。(鍔の痕跡か)。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調製。体部外面　指頭圧痕。	外面に煤附着。色調　にぶい橙色。羽釜形タイプ：播磨型Ⅱ類。16ｃ中葉～後半。
1414	29区　SK06	土師器	鍋	体部は内彎。口縁部直立。口縁端部は外方につまみ出す。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面斜め方向の平行叩き目が残る。	外面に煤附着。色調　にぶい橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅳ類。15ｃ前半～中頃。
1415	29区　SK06	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部下端を外方につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　９条１単位の擂目施文。	色調　暗赤灰色。備前焼擂鉢Ⅵ類。16ｃ代。
1416	29区　SK06	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張、断面楕円形形状を呈する。口縁部外面に凝凹線１条。	内外面ともヨコナデ調整。内面　胡麻状に灰被り。	色調　灰赤色。備前焼甕Ⅴ類。15ｃ後半。
1417	29区　SK06	青磁	皿	体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部は輪花状に整形。器面に貫入。	内外面とも青磁釉施釉。暗黄緑色に発色。	龍泉窯系青磁。輪花皿。16ｃ代。
1418	29区　SK10	土師器	焙烙	丸底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部はほぼ直立。口縁部上面　水平に成形。底型作り。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面板ナデ調整。体部外面～底部外面　板ナデ調整。	外面　煤附着。色調　明赤褐色。焙烙形ⅣB類。18ｃ前半。
1419	29区　SK10	石製品	硯	裏面は剥離する。	海部には擦痕が著しく認められる。	色調　灰色。
1420	29区　SK18	土製品	面子	土師器片の縁辺を打ち欠いて円形に成形。	器面は摩滅が著しい。	色調　浅黄色。原体は土師器。
1421	29区　SK102	土師器	皿	器形は全体に大きく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部・体部内面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。
1422	29区　SK102	無釉陶器	甕	口縁部は外方に折り曲げ、端部は上下に拡張するいわゆる「Ｎ」字状口縁。	内外面ともヨコナデ調整。外面　胡麻状に灰被り。	色調　暗赤褐色。常滑焼7型式。14ｃ前半～中頃。
1423	29区　SK104	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調　浅黄橙色。轆轤未使用。
1424	29区　SK104	土師器	鍋	口縁部は直立。口縁端部は僅かに玉縁状に肥厚する。	口縁内外面　ヨコナデ調整。体部外面　平行叩き目。体部内面　板ナデ調整。	外面に煤附着。色調　明褐灰色。甕形タイプ：播丹型Ⅳ類。15ｃ前半～中頃。
1425	29区　SK104	土師器	鍋	体部は内彎。口縁部直立。口縁端部は外方につまみ出す。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面ハケ目調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目が残る。	外面に煤附着。色調　にぶい橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅳ類。15ｃ前半～中頃。
1426	29区　SK109	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部・体部内面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
1427	29区　SK109	青磁	碗	底部の器壁は厚い。高台は比較的幅が広い。	内外面とも施釉。暗緑色に発色。高台畳付まで施釉。高台裏　露胎。	龍泉窯系青磁碗。14後半～15ｃ代。
1428	29区　SK116	瓦質土器	鍋	体部は直立。口縁部は外方に水平に折り曲げ、端部は上方につまみ上げる。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。体部外面　指オサエの後ナデ調整指頭圧痕。	鍛造の鉄鍋を模倣。色調　灰白色。鍋形タイプ：鉄鍋形：ⅢA類。14ｃ前半。
1429	29区　SK116	瓦器	椀	高台は退化が著しく、粘土紐を貼り付けた程度。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	体部内面　粗い平行ミガキ。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。体部外面　指頭圧痕。	色調　灰白色。和泉型瓦器椀Ⅳ-3期。13ｃ後半～14ｃ前半。
1430	29区　SK116	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚する。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	色調　暗灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。D類。14ｃ前半。
1431	29区　P147	土師器	皿	平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。底部内面　一定方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
1432	29区　P147	瓦器	椀	丸底。高台は消失。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面　粗い平行ミガキ。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　黒灰色。和泉型瓦器椀Ⅳ-5期。14ｃ前半～中頃。
1433	29区　包含層中	無釉陶器	甕	頸部は僅かに外傾。口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。外面　灰被り。光沢をもつ。	色調　黒褐色。備前焼甕ⅢA類。14ｃ代。
1434	29区　包含層中	無釉陶器	甕	口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　灰褐色。備前焼甕ⅢA類。14ｃ代。
1435	30区　SK03	無釉陶器	甕	平底。体部は直線的に斜め上方に延び、中位で大きく「く」の字状に屈曲する。口縁部は外方にひらき、口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部外面に端面をもつ。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内外面　横方向の板ナデ調整。粘土の接合痕は強いナデで消す。	焼成はややあまい。色調　明赤褐色。丹波焼。甕Ⅲ類。13ｃ中葉～14ｃ前葉。
1436	30区　SK02	土師器	皿	器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	色調　にぶい黄褐色。轆轤未使用。
1437	30区　SK02	土師器	鍋	丸底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。頸部はほぼ直立。口縁端部は外方につまみ出す。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　斜め方向の平行叩き目。体部内面　指頭圧痕。底部内面　横方向のヘラナデ調整。	外面　煤附着。色調　浅黄橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅰ類。13ｃ後半。
1438	30区　SK15	土師器	皿	平底。体部は短く内傾するいわゆるコースター形を呈する。口縁端部は丸味をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。底部外面　未調整。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。Ⅰ類。12c中頃～13c中頃。
1439	30区　SK15	土師器	鍋	口縁端部は外方につまみ出す。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	外面　煤附着。色調　にぶい黄橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅰ類。13ｃ後半。
1440	30区　SK29	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は斜め上方に立ち上がり、口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面板ナデ調整。体部内外面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
1441	30区　SK61	瓦器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味を帯びる。	体部内面　多方向のナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　暗灰色。
1442	30区　SK61	土師器	皿	平底。体部は短く、僅かに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
1443	30区　SK61	土師器	皿	器形はやや歪む。平底。体部は短く緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部外面　指オサエ・不定方向のナデ調整。底部内面　不定方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
1444	30区　SK61	土師器	竈	体部直立。口縁部外反。口縁端部は斜め上方に拡張する。口縁部上面は斜め方向の端面をもつ。	体部内面　板ナデ調整。体部外面　縦方向のハケ目調整。器面の剥離が著しい。	内外面に煤附着。色調　外面　黒褐色。内面　黒色。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1445	30区　SK61	土師器	竈	体部直立。口縁部外反。口縁端部は横方向に拡張する。口縁部上面は水平方向の端面をもつ。	体部内面　横方向のハケ目調整。体部外面　縦方向のハケ目調整。器面の剥離が著しい。	内面に煤附着。色調　外面　褐色。内面黒褐色。
1446	30区　SD20	土師器	Ⅲ	口縁部は大きく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。Ⅲ A1類。14c前半。
1447	30区　SD20	瓦質土器	火鉢	底部に長方形の脚を貼り付け。平底。体部と底部の界は直角に屈曲。体部は僅かに内彎。口縁部上面は水平に端面をもつ。口縁部は八弁の花弁状に整形。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面　ミガキ調整。印花で菊花文施文。体部内面　ミガキ調整。	色調　暗灰色。奈良火鉢。浅鉢Ⅰ。13ｃ後半～14ｃ前半。
1448	30区　P34	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。Ⅱ A2a類。14c前半。
1449	30区　P53	土師器	Ⅲ	器壁は全体に比較的厚い。平底。体部は短く斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。Ⅱ A2a類。14c前半。
1450	31区　SX02	土師器	Ⅲ	器壁は比較的薄い。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	色調　灰白色。轆轤未使用。
1451	31区　SX02	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は斜め方向に切る。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　10条１単位の擂目施文。	焼成はややあまい。色調　灰褐色。備前焼擂鉢ⅢC類。14ｃ後半～15ｃ初頭。
1452	31区　SX02	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部は丸味をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　にぶい赤褐色。備前焼擂鉢ⅤA類。15ｃ後半。
1453	31区　SX02	無釉陶器	甕	口縁部は短く上下に拡張、断面楕円形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　にぶい赤褐色。備前焼甕ⅢB類。14ｃ代。
1454	31区　SX04	土師器	Ⅲ	底部は上方に大きく突出するいわゆるヘソ皿。体部は斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。ⅤB1類。15c前半。
1455	31区　SX04	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は若干上方につまみ出す形。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅡB2b類。15c前半。
1456	31区　SX04	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅢB1類。15c前半。
1457	31区　SX04	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。ⅢB1類。15c前半。
1458	31区　SX04	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は内側に折り曲げ。口縁部内面に浅い沈線をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。ⅡB2b類。15c前半。
1459	31区　SX04	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅢB1類。15c前半。
1460	31区　SX04	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　浅黄橙色。轆轤未使用。ⅣC1類。15c前半。
1461	31区　SX04	土師器	Ⅲ	口縁部が歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　橙色。ⅣC1類。15c前半。
1462	31区　SX04	土師器	鍋	体部は内彎。口縁部ほぼ直立。口縁端部は斜め方向の端面をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　あて具痕あり。体部外面　平行叩き目。	外面　煤附着。色調　橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅱ類。14ｃ前半。
1463	31区　SX04	須恵器	鉢	平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は内側につまみ出す。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。内面の底部～体部　ヨコナデ調整。体部外面下半　ヘラ削りの後、ナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。	色調　灰色。東播系須恵器。F類。14ｃ後半～15ｃ前半。
1464	31区 SK06	土師器	鍋	丸底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は内彎して上方へ延びる。口縁部は外反。口縁端部は玉縁状に肥厚する。口縁部内面に浅い凹線をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　横方向のハケ目調整。体部外面から底部外面　斜め方向の平行叩き目あり。	外面　煤附着。色調　橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅴ類。15ｃ後半～16ｃ初頭。
1465	31区　SK08	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
1466	31区　SK08	瓦器	椀	高台は紐状の粘土を貼り付けた極めて退化した形状。丸底。体部と底部の界は不明瞭で、体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味を帯びる。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。体部外面下半に指頭圧痕。	色調　暗灰色。最終段階の和泉型瓦器椀Ⅳ-5期。14ｃ前半～中頃。
1467	31区　SK08	土師器	Ⅲ	口縁部はやや歪む。器壁は比較的厚い。平底。体部は緩やかに、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。口縁部内面にかすかに沈線１条。	器面に砂附着。轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
1468	31区　SK08	瓦器	椀	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調製。体部外面　指頭圧痕。	色調　灰白色。和泉型瓦器椀Ⅳ－4期。14ｃ前半。
1469	31区　SK10	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	口縁部に１箇所煤附着－灯明Ⅲとして使用。轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅣB1類。14c前半。
1470	31区　SK10	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　僅かに凹部をもつ。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　橙色。轆轤未使用。ⅣB1類。14c前半。
1471	31区　SK10	土師器	Ⅲ	器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅡA2a類。14c前半。
1472	31区　SK10	土師器	Ⅲ	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面下半に凹部をもつ。底部内面　ナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。Ⅲ A1類。14c前半。
1473	31区　SK10	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面　指頭圧痕。底部内面　ナデ調整。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。Ⅲ A1類。14c前半。
1474	31区　SK10	瓦質土器	羽釜	体部は内彎。口縁部はほぼ直立。口縁部外面に断面台形状の鍔を貼り付ける。	内外面ともヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	外面に煤附着。色調　暗灰色。羽釜形タイプ：羽釜形A系列ⅡB類。14ｃ中頃。
1475	31区　SK10	土師器	鍋	丸底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。頸部は僅かに外反。口縁部は若干肥厚し、内面に鋭い端面をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。内面　板ナデ調整。体部～底部外面　斜め方向の叩き目が残る。	外面　煤附着。色調　にぶい黄橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅱ類。14ｃ前半。
1476	31区　SK11	瓦質土器	羽釜	器壁は薄い。体部は内彎。口縁部はほぼ直立。口縁部外面に断面台形状の短い鍔を貼り付ける。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。体部内面　ハケ目調整の後、ナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　オリーブ黒色。羽釜形タイプ：羽釜形A系列ⅡC類。14ｃ後半。
1477	31区　SK14	土師器	Ⅲ	器形は著しく歪む。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　不定方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1478	31区　SK20	土師器	皿	器形は著しく歪む。平底。体部は緩やかに斜め方に延びる。口部縁部端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。　口縁部内外面強強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
1479	31区　SK20	無釉陶器	甕	口縁部は外反。口縁端部は上下に拡張、いわゆる「N」字状口縁を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。外面に灰釉附着。オリーブ灰色に発色。	常滑焼7型式。14ｃ前半～中頃。
1480	31区　SK21	土師器	皿	平底。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面横ナデ調整。体部内・外面に指頭圧痕。口縁部内・外面強い横ナデ調整。	色調は暗赤褐色。轆轤未使用。
1481	31区　SK21	瓦質土器	ミニチュア三足羽釜	丸底。体部は、ほぼ直立。体部上面に断面長方形の鍔貼付け。口縁部内傾。口縁部外面に鋳物鍋を模した凹線２条。	外面の体部中央に脚を３ヵ所貼付け。口縁部内・外面横ナデ調整。体部外面ナデ調整。	瓦質三足付羽釜を忠実に模倣したミニチュア羽釜。
1482	31区　SK24	土師器	皿	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。体部内面・外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
1483	31区　SK25	青白磁	合子	平底。体部は直立。口縁部は内傾。口縁端部は尖る。	外面　縦線施文。内面・体部外面上半のみ施釉。淡黄色に発色。焼成はあまく、陶胎。	粗製の青白磁合子。
1484	31区　SK26	土師器	皿	器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面・外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　灰白色。轆轤未使用。体部内面に粘土の接合痕が残る。
1485	31区　SK30	土師器	皿	器形は全体に大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤使用。色調　にぶい橙色。
1486	31区　SK30	須恵器	壺	体部は僅かに内彎。口縁部は外反する。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。体部内面板ナデ調整。体部外面　細かい格子目叩きが残る。	色調　暗灰色。亀山焼。
1487	31区　SK33	土師器	皿	器形は全体に著しく歪む。器壁は比較的薄い。平底。体部緩やかに斜め上方に立ち上がり、中位で屈曲、口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面・外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。
1488	31区　SK34	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	色調　灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。E1類。14ｃ後半。
1489	31区　SD01	土師器	皿	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部内面に浅い凹線１条。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内外面及び底部外面指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1490	31区　SD03	土師器	皿	器形は大きく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。体部内面・外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　黄橙色。轆轤未使用。ⅡB2a類。14c後半。
1491	31区　SD03	須恵器	鉢	口縁部は断面三角形状に肥厚する。	内外面とも強いヨコナデ調整。	焼成はややあまい。色調　灰白色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。C3類。14ｃ代。
1492	31区　SD03	白磁	四耳壷	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く低い。	内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた灰白色に発色。底部外面は露胎。	華南産白磁。四耳壷。13ｃ代。
1493	31区　SD03	瓦	軒丸瓦	瓦当の中央部に「福」字施文。珠文数は28と考えれるが、現状では13個が残存。	内外面ともナデ調整。	色調　黒褐色。福厳寺の瓦か？。
1494	31区　SD23	土師器	皿	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
1495	31区　SD23	土師器	皿	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面中央に段をもつ。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。
1496	31区　SD23	土師器	鍋	体部は内彎。口縁部はほぼ直立。口縁端部は玉縁状に肥厚。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面　横方向の平行叩き目。体部内面　ナデ調整。	色調　にぶい橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅰ類。13ｃ後半。
1497	31区　SD23	瓦質土器	鍋	口縁部外面に断面台形状の短い鍔を貼り付ける。	内外面ともヨコナデ調整。	外面に煤附着。色調　暗灰色。羽釜形タイプ：羽釜形Ａ系列Ⅰ類。13ｃ後半。
1498	31区　SK34	土師器	皿	器形は大きく歪む。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は外面に端面をもつ。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅡA1b類。13c後半。
1499	31区　SK34	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に段をもつ。底部内面　ナデ調整。体部内面・外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅡB1b類。14c前半。
1500	31区　SK34	土師器	皿	平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅢA1類。14c前半。
1501	31区　SK34	須恵器	鉢	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	色調　灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。E1類。14ｃ後半。
1502	31区　包含層（Ⅱ面直上　SX04の周辺）中	土師器	皿	平底。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。底部外面　指オサエ。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅣB2類。14c後半。
1503	31区　包含層（Ⅱ面直上　SX04の周辺）中	瓦質土器	羽釜	体部は内彎。口縁部ほぼ直立。口縁部外面に断面台形状の鍔を貼り付ける。	内外面ともヨコナデ調整。体部外面に指頭圧痕。	外面に煤附着。色調　黒褐色。羽釜形タイプ：羽釜形Ａ系列ⅡB類。14ｃ中頃。
1504	31区　包含層（Ⅱ面直上　SX04の周辺）中	無釉陶器	甕	体部のみ遺存。	内外面ともヨコナデ調整。外面　格子状文スタンプ。	色調　にぶい赤褐色。常滑焼。
1505	31区　包含層（Ⅱ面直上　SX04の周辺）中	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚する。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	色調　灰色。東播系須恵器。Ｃ3類。14ｃ代。
1506	31区　包含層（Ⅱ面直上　SX04の周辺）中	土師器	皿	底部は平底で指オサエにより、上方にやや突出させる。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は斜め上方に立ち上がり、中位で屈曲、口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界　凹部をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅤA2類。14c後半。
1507	31区　包含層（Ⅱ面直上　SX04の周辺）中	土師器	皿	ややあげ底気味の平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅤA2類。14c後半。
1508	31区　包含層（Ⅱ面直上　SX04の周辺）中	土師器	皿	器形は全体に大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅡA2ｂ類。14c後半。
1509	31区　包含層（Ⅱ面直上　SX04の周辺）中	土師器	皿	器形は全体に大きく歪む。平底。体部は短く、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅡA2ｂ類。14c後半。
1510	31区　包含層（Ⅱ面直上　SX04の周辺）中	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅢA2類。14c後半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1511	31区　包含層（Ⅱ面直上　SX04の周辺）中	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は内側につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。内面に自然釉附着。	色調　暗灰色。東播系赤根川支群の製品。F類。14ｃ後半～15ｃ代。
1512	31区　包含層（Ⅱ面直上　SX04の周辺）中	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界　凹部をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅢA2類。14c後半。
1513	31区　包含層（Ⅱ面直上　SX04の周辺）中	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は斜め上方に立ち上がり、下位で屈曲、口縁部は外方にひらく。口縁端部は尖り気味。内面の底部と体部の界　凹部をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面下半に段をもつ。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい褐色。ⅣB2類。14c後半。
1514	31区　包含層（Ⅱ面直上　SX04の周辺）中	土師器	皿	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に低い段をもつ。底部内面　ナデ調整。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅣB2類。14c後半。
1515	32区　SE01	土製品	土錘	棒状型に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。器面は使用により摩滅し平滑。	色調　暗灰色。焼成　堅緻。
1516	32区　SE01	瓦	井戸瓦	平面形状はほぼ正方形。僅かに内彎。	外面にジグザク文施文。	色調　暗灰色。井戸用瓦
1517	32区　SE02	青磁	碗	体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面　片切彫で草花文施文。内外面とも青磁釉施釉。灰オリーブ色に発色。	龍泉窯系青磁劃花文碗。青磁碗Ⅲ-1B類。13ｃ前半。
1518	32区　SE03	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。内面　透明釉施釉　にぶい橙色に発色。	口縁部に煤附着―灯明皿として使用。轆轤使用。いわゆる柿釉の灯明皿。
1519	32区　SX01	土師器	皿	器形は全体に大きく歪む。器壁は全体に非常に厚い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
1520	32区　SX01	土師器	皿	器壁は比較的厚い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
1521	32区　SX01	土師器	皿	円盤状の底部に体部は粘土紐巻上げ成形か？平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。	轆轤使用。色調　にぶい橙色。Ⅱ類。14c後半～15c前半。
1522	32区　SX01	土師器	皿	器壁は全体に非常に厚い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
1523	32区　SX01	無釉陶器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。底部内面　全面に施釉（自然釉か？）	色調　にぶい赤褐色。備前焼。
1524	32区　SX01	土師器	皿	器壁は非常に厚い。丸底。底部と体部の界は不明瞭。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1525	32区　SX01	土師器	鍋	体部は内彎。口縁部は内傾。口縁端部上面は斜め方向に端面をもつ。口縁部外面に断面三角形状の短い鍔をもつ。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調製。体部内面　ハケ目調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目。	外面に煤附着。色調　にぶい橙色。羽釜形タイプ：播磨型B系列ⅠB類。15ｃ中頃。
1526	32区　SX01	土師器	鍋	体部は内彎。口縁部は内傾。口縁端部は斜め方向に端面をもつ。口縁部外面に断面三角形状の鍔をもつ。	体部内面　板ナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目。	外面に煤附着。色調　にぶい橙色。羽釜形タイプ：播磨型A系列ⅠB類。15ｃ中頃。
1527	32区　SX01	土師器	鍋	体部は内彎。口縁部は内傾。口縁端部は斜め方向に端面をもつ。口縁部外面に断面三角形状の鍔をもつ。	体部内面　板ナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目。	外面に煤附着。色調　にぶい橙色。羽釜形タイプ：播磨型A系列ⅠC類。15ｃ中頃。
1528	32区　SX01	土師器	鍋	体部は内彎。口縁部は内傾。口縁端部は斜め方向に端面をもつ。口縁部外面に断面三角形状の鍔をもつ。	体部内面　板ナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目。	内外面に煤附着。色調　灰褐色。羽釜形タイプ：播磨型A系列ⅠA類。15ｃ前半。
1529	32区　SX01	土師器	鍋	体部は内彎。口縁部は内傾。口縁端部は斜め方向の端面をもつ。口縁部外面に断面三角形状の鍔をもつ。	体部内面　板ナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目。	外面に煤附着。色調　橙色。播磨型A系列ⅠC類。15c後半～16c初頭。
1530	32区　SX01	土師器	鍋	体部は内彎。口縁部は内傾。口縁端部は斜め方向の端面をもつ。口縁部外面に断面三角形状の鍔をもつ。	体部内面　板ナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目。	器面は剥落が目立つ。色調　にぶい橙色。羽釜形タイプ：播磨型ⅠC類。15ｃ後半～16ｃ初頭。
1531	32区　SX01	白磁	皿	高台は比較的幅が広く低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台脇以下露胎。高台畳付に重ね焼き痕。	華南産白磁。白磁ⅢⅢ類。12ｃ後半～13ｃ前半。
1532	32区　SX01	土製品	面子	土師器片の縁辺を打ち欠いて円形に成形。	器面は摩滅する。	色調　にぶい橙色。原体は土師器。
1533	32区　SK01	土師器	皿	平底。体部は短く、僅かに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。	口縁部～体部に煤附着―灯明皿として使用。轆轤使用。色調　浅黄橙色。ⅢA類。17c中葉～18c前半。
1534	32区　SK01	土師器	皿	器壁は非常に厚い。平底。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。	口縁部に煤附着―灯明皿として使用。轆轤使用。色調　浅黄橙色。ⅢB類。17ｃ中葉～18c前半。
1535	32区　SK02	土師器	皿	器形は全体に大きく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部はやや外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。内面及び外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
1536	32区　SK03	石製品	硯	平面形状は長方形。一部欠損。	海部は使用により大きく抉れる。	色調　灰白色。粘板岩製？。
1537	32区　SK04	染付磁器	皿	底部碁笥底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にほぼ水平に折り曲げる。	色調　青味を帯びた白色。文様　内面　雲龍文？・菊花文。外面　唐草文・界線２条。底部外面　「大明成化年製」銘。	肥前系。Ⅱ期。17ｃ前半～中頃。
1538	32区　SK06	土師器	皿	平底。体部は短く、僅かに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1539	32区　SK06	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面中央に浅い段。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　橙色。器面は比較的平滑。
1540	32区　SK06	土師器	皿	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　橙色。
1541	32区　SK06	土製品	面子	土師器片の縁辺を打ち欠いて円形に成形。	器面は摩滅が著しい。	色調　橙色。原体は土師器。
1542	32区　SK10	土師器	皿	器形は全体に大きく歪む。器壁は薄い。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界に沈線１条施文。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　灰白色。ⅢB1類。15c前半。
1543	32区　SK10	土師器	皿	平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面及び外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　浅黄橙色。轆轤未使用。ⅡA3a類。15c前半。
1544	32区　SK10	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部は尖り気味。口縁端部下端は斜め下方につまみ出す。片口をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　擂目施文。	色調　灰赤色。備前焼擂鉢ⅣB類。15ｃ前半～中頃。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1545	32区　SK10	無釉陶器	甕	口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。外面　灰被り。	色調　灰赤色。備前焼甕ⅢB類。14ｃ代。
1546	32区　SK10	青磁	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く比較的高い。	底部内面に印花で草花文施文。内外面とも青磁釉施釉。暗オリーブ灰色に発色。高台畳付以下露胎。	龍泉窯系青磁碗。14ｃ代。
1547	32区　SD01	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　橙色。
1548	32区　SD02	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。内面の体部と底部の界に凹線１条。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1549	32区　P11	青白磁	梅瓶	体部は僅かに内彎。	外面　渦巻き文。界線３条をヘラ描きで施文。内外面とも施釉。空色に発色。	景徳鎮窯系青白磁。梅瓶。
1550	32区　P17	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面に指頭圧痕。	口縁部に煤附着－灯明Ⅲとして使用。色調　浅黄橙色。轆轤未使用。
1551	32区　P17	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は端部を上方につまみ上げる。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	色調　灰色。東播系須恵器。B1類。12ｃ後半。
1552	32区　P23	土師器	鍋	体部は内彎。口縁部は内傾。口縁端部上面は斜め方向に端面をもつ。口縁部外面に断面三角形状の短い鍔をもつ。	体部内面　板ナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目。	外面に煤附着。色調　にぶい橙色。羽釜形タイプ：播磨型B系列ⅠA類。15ｃ前半。
1553	32区　P31	白磁	四耳壺	頸部はやや外傾。口縁部は外方に折り曲げ。口縁端部は斜め下方に引き出す。	内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた灰白色に発色。	華南産白磁。四耳壺。13ｃ代。
1554	32区　P32	石製品	石鍋	体部は僅かに内彎。口縁部は直立。口縁端部上面は水平に端面をもつ。口縁部外面に断面台形状の鍔を削りだす。	体部外面に成形時の縦方向のノミ痕が認められる。	外面に煤附着。滑石製。色調　灰色。Ⅲb類。13ｃ代。
1555	32区　包含層(Ib面)中	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界　凹線１条。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　橙色。ⅢC1類。15c末葉～16c前葉。
1556	32区　包含層(Ib面)中	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。内面の底部と体部の界　ヘラ状工具で沈線1条施文。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅣD1類。15c末葉～16c前葉。
1557	32区　包含層(Ib面)中	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。内面の底部と体部の界　ヘラ状工具で沈線１条施文。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅢC1類。15c末葉～16c前葉。
1558	32区　包含層(Ib面)中	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界　凹線１条。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅣD1類。15c末葉～16c前葉。
1559	32区　包含層(Ib面)中	土師器	小皿	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界　凹線１条。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。ⅣD1類。15c末葉～16c前葉。
1560	32区　包含層(Ib面)中	土師器	Ⅲ	器形は著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界　凹線１条。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅣD1類。15c末葉～16c前葉。
1561	32区　包含層(Ib面)中	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は屈曲して、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。内面の底部と体部の界　ヘラ状工具で沈線１条。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。内面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。ⅣD1類。15c末葉～16c前葉。
1562	32区　包含層(Ib面)中	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。内面の底部と体部の界　凹線１条。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅢC1類。15c末葉～16c前葉。
1563	32区　包含層(Ib面)中	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。内面の底部と体部の界　ヘラ状工具で沈線１条。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅢC1類。15c末葉～16c前葉。
1564	32区　包含層(Ib面)中	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界　ヘラ状工具で沈線１条。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅢC1類。15c末葉～16c前葉。
1565	32区　包含層(Ib面)中	青磁	碗	口縁部は僅かに外反。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁碗。D類。14ｃ代。
1566	32区　包含層(Ib面)中	青磁	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く低い。	内外面とも青磁釉施釉。暗オリーブ灰色に発色。高台畳付～高台裏　露胎。	龍泉窯系青磁碗。13ｃ代。
1567	32区　包含層(Ib面)中	青磁	碗	口縁端部は尖り気味。	外面　鎬のあまい蓮弁文を片切り彫で施文。内外面とも青磁釉施釉。灰被りのため、明緑灰色に発色。	龍泉窯系青磁蓮弁文碗。青磁碗Ⅳ類。14初頭～後半。
1568	32区　包含層(Ib面)中	土製品	面子	土師器片の縁辺を打ち欠いて円形に成形。	器面は摩滅する。	色調　にぶい橙色。原体は土師器。
1569	32区　包含層(Ib面)中	石製品	温石	一部欠損。現状は台形を呈する。1箇所穿孔。	内外面ともノミで調整した後研磨仕上げ。内外面とも擦痕が顕著－砥石に転用か？。	滑石製。温石を転用した砥石か？。
1570	32区　包含層（撹乱層）中	土師器	焙烙	平底。　体部と底部の界は大きく屈曲。体部は僅かに内傾して斜め上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。	底型作り。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	外面　煤附着。色調　橙色。焙烙形ⅣA類。17ｃ中葉～後半。
1571	32区　包含層（撹乱層）中	土師器	焙烙	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は僅かに内傾して斜め上方に延びる。口縁端部はほぼ水平に成形。	底型作り。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	底部外面　煤附着。色調　橙色。焙烙形ⅣC類。18ｃ後半。
1572	33区　SE02	瓦	井戸瓦	平面形状はほぼ正方形。僅かに内彎。	外面にジグザク文施文。	色調　暗灰色。井戸用瓦
1573	33区　SK01	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面ナデ調整。	轆轤　未使用。色調　にぶい褐色。底部内面　煤附着。
1574	33区　SK04	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。器形は全体に著しく歪む。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1575	33区　SK04	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。体部は短く緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1576	33区　SK04	土師器	皿	器形は全体に著しく歪む。平底。体部は短く緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1577	33区　SK04	土師器	皿	器形は全体に著しく歪む。平底。体部は短く緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1578	33区　SK04	土師器	皿	器形は全体に著しく歪む。平底。体部は短く緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1579	33区　SK04	土師器	皿	平底。やや、上げ底気味。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1580	33区　SK08	土師器	鍋	丸底。体部は大きく内彎。口縁部は外反。口縁端部上面は水平に端面をもつ。口縁部内面　凹線１条。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ハケ目調整の後、ナデ調整。外面の体部～底部　斜め方向の平行叩き目。	外面　附着。色調　にぶい橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅴ類。15ｃ後半～16ｃ前半。
1581	33区　SK12	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。底部の器壁は非常に厚い。	色調　明青灰色。文様　外面　コンニャク印判で菊花文施文。界線　２条。底部外面　不明文。内面　無文。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1582	33区　SK16	土師器	皿	器形は全体に、著しく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。内面の底部と体部の界　沈線を１条ヘラ状工具で施文する。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　橙色。
1583	33区　SK16	土師器	皿	器形は全体に、著しく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。内面の体部と底部の界　浅い凹部をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	口縁部　部分的に煤附着。→灯明皿として使用。　轆轤未使用。色調　橙色。
1584	33区　SK16	土師器	皿	器形は歪む。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　橙色。
1585	33区 SK17	青磁	皿	底部の器壁は比較的厚い。高台は幅が広く低い。体部は緩やかにやや外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部は輪花状に成形。	体部内面　線彫りで雲文？施文。内外面とも青磁釉施釉。淡暗緑色に発色。高台畳付～高台裏露胎。底部内面　円形に釉掻き取り。	龍泉窯系青磁。輪花皿。16ｃ代。
1586	33区　SK18	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。内面の底部と体部の界　浅い沈線。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅢB1類。15c前半。
1587	33区　SK18	瓦質土器	羽釜	体部は内彎。口縁部は内傾する。口縁部外面に浅い凹線３条。口縁部外面に断面台形状の比較的幅の広い鍔を貼り付ける。	体部内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。体部外面　横方向のヘラ削り調整。	外面に煤附着。色調　黒褐色。羽釜形タイプ：羽釜形B系列ⅡC類。15ｃ中頃。
1588	33区　SD03	土師器	皿	器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　橙色。ⅡA2ｂ類。14c後半。
1589	33区　SD03	土師器	皿	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面　ナデ調整。口縁部内外面強いナデ調整。体部外面に凹部をもつ。体部外面下半～底部　指頭圧痕。	色調　浅黄橙色。轆轤未使用。ⅣB2類。14c後半。
1590	33区　SD03	土師器	鍋	丸底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は内傾して斜め上方に延びる。口縁部は外反。口縁端部上面は水平に面取りする。口縁部内面に凹部をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。内面の体部～底部　板ナデ調整。外面の体部～底部　斜め方向の平行叩き目が残る。	外面　煤附着。色調　にぶい橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅴ類。15ｃ後半～16ｃ初頭。
1591	33区　SD03	土師器	鍋	丸底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外反。口縁端部は水平に面をもつ。	内面～口縁部外面　ナデ調整。口縁部内外面強いナデ調整。外面の口縁部と体部の界　指頭圧痕。体部外面から底部　指頭圧痕。	外面　煤附着。色調　淡橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅴ類。15ｃ後半～16ｃ初頭。
1592	33区　SD03	土師器	鍋	丸底。体部と底部の界は大きく屈曲。口縁部は僅かに外傾。口縁端部は玉縁状に肥厚。	口縁部内外面　強いヨコナデ調製。体部内面板状工具による横方向のナデ調整。外面の体部～底部　斜め方向の平行叩き目。	外面全面に煤附着。色調　橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅲ類。14ｃ後半。
1593	33区　SD03	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚する。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	色調　灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。D類。14ｃ後半。
1594	33区　SD03	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚する。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	色調　灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。B2類。13ｃ代。
1595	33区　SD03	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁部内面は浅くくぼむ。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	色調　暗灰黄色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。E1類。14ｃ後半。
1596	33区　SD03	須恵器	鉢	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	焼成は比較的堅緻だが、酸化炎が強く、赤褐色に発色する。東播系須恵器。赤根川支群の製品。B3類。14ｃ代。
1597	33区　SD03	須恵器	鉢	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に浅い凹部をもつ。	色調　灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。E1類。14ｃ後半。
1598	33区　SD03	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は内側につまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　褐灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。F類。14ｃ後半～15ｃ代。
1599	33区　SD03	須恵器	甕	口縁部は僅かに外反する。口縁端部は上端は上方へ、下端は斜め下方にそれぞれつまみ出す。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。外面の叩き目は丁寧にナデ消す。体部内面　板ナデ調整。	焼成は堅緻。胎土　精良。色調　灰白色。産地・時期とも不明。
1600	33区　SD03	無釉陶器	擂鉢	平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は斜め方向に切る。	体部内面に７条１単位の擂目を疎らに施文。内外面とも回転ナデ調整。体部外面　部分的に縦方向のナデ調整。	内面は使用による磨耗が著しい。色調にぶい褐色。備前焼擂鉢ⅢA類。14ｃ後半～15ｃ初頭。
1601	33区　SD03	無釉陶器	甕	口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　褐灰色。備前焼甕ⅢB類。14ｃ代。
1602	33区　SD03	無釉陶器	甕	口縁端部は外方に僅かにつまみ出す。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　灰色（須恵質）。備前焼甕ⅡB類。13ｃ後半。
1603	33区　SD03	無釉陶器	甕	口縁部は短く上下に拡張、断面楕円形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。体部外面　胡麻状に灰被り。	色調　暗赤灰色。備前焼甕ⅢA類。14ｃ代。
1604	33区　SD03	無釉陶器	甕	頸はほぼ直立。口縁部は玉縁状に肥厚する。	内外面ともヨコナデ調整。外面に自然釉附着。	色調　暗赤褐色。備前焼甕ⅢA類。14ｃ代。
1605	33区　SD03	無釉陶器	甕	体部は内彎。頸部はやや外傾。口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　ハケ目調整。体部外面　胡麻状に灰被り。	色調　暗赤褐色。備前焼甕ⅢA類。14ｃ代。
1606	33区　SD03	無釉陶器	甕	体部のみ遺存。	内外面ともヨコナデ調整。体部外面に格子城文スタンプ。外面　灰被り。	色調　暗茶褐色。常滑焼。
1607	33区　SD03	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張。口縁部下半欠失。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調製。外面　灰釉附着。	色調　暗赤灰色。常滑焼6or7形式。13中頃～14中頃。
1608	33区　SD03	無釉陶器	甕	口縁部は外方に折り曲げ、上下に拡張するいわゆる「Ｎ」字状口縁。	内外面ともヨコナデ調整。外面　胡麻状に灰被り。	色調　暗赤褐色。常滑焼7型式。14ｃ前半～中頃。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1609	33区　SD03	無釉陶器	甕	口縁部は外方に折り曲げ、上下に拡張したものが頸部に附着した形。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　明褐色。常滑焼9型式。15ｃ前半～中頃。
1610	33区　SD03	石製品	鍋	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は直立。口縁部上面は水平に端面をもつ。口縁部外面に断面台形状の短い鍔を削りだす。	体部内外面に成形時のノミ痕。	外面に煤附着。色調　灰白色。Ⅲｂ類。13ｃ代。
1611	33区　SD03	土製品	面子	須恵器片の縁辺を打ち欠いて成形。	器面は灰被り。	色調　黒灰色。原体は須恵器甕。
1612	33区　SK04	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1613	33区　SK04	土師器	Ⅲ	器形は著しく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1614	33区　SK04	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部は斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　橙色。
1615	33区　SK04	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面の底部と体部の界に沈線１条施文。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。。
1616	33区　SK04	土師器	Ⅲ	平底であるがヘソ皿風に底部がやや上方に突出する。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。ヘソ皿に比べ器壁が厚い。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1617	33区　SK04	土師器	Ⅲ	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部中央に低い段あり。体部外面～底部外面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1618	33区　SK04	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	色調　暗灰色。東播系須恵器。D類。14ｃ前半。
1619	33区　SK06	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。	轆轤使用。色調　にぶい黄橙色。ⅢB類。17ｃ中葉～18c前半。
1620	33区　P03	土師器	Ⅲ	平底。体部は短く緩やかに斜め上方に延びる。器形は全体に著しく歪む。平底。体部は短く緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。底部内面ナデ調整。	轆轤使用。轆轤未使用。色調　橙色。
1621	33区　P04	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部断面三角形状に肥厚する。口縁部内面に凹部をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	焼成はややあまい。色調　灰白色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。Ｅ2類。14ｃ後半～15ｃ前半。
1622	33区　P04	無釉陶器	甕	口縁部は外反。口縁端部は上下に拡張。いわゆる「N」字状口縁を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。色調　オリーブ黒色。	常滑焼？。
1623	33区　P05	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	色調　暗灰色。東播系須恵器。E1類。14ｃ後半～15c前半。
1624	33区　P05	石製品	石鍋	断面台形状の短い鍔をもつ。口縁部直立。上端は水平。	器壁は比較的厚い。	外面に煤附着。色調　黄灰色。滑石製。Ⅲｂ類。13ｃ代。
1625	33区　P14	土師器	鍋	平底。体部は大きく内彎。頸部はほぼ直立。口縁端部は外方につまみ出す。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　斜め方向のハケ目調整。体部外面　横方向の平行叩き目。	色調　橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅰ類。13ｃ後半。
1626	33区　P14	土師器	鍋	口縁部はほぼ直立。口縁端部は外方につまみ出す。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面　斜め方向の叩き目。体部内面　ハケ目調整の後、指オサエ。	色調　にぶい橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅱ類。14ｃ前半。
1627	33区　P14	土師器	鍋	体部内彎。口縁部ほぼ直立。口縁端部　外方につまみ出す。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ハケ目調整の後、指オサエ。体部外面　平行叩き目。	外面　若干煤附着。色調　にぶい橙色。甕形タイプ：播丹型Ⅰ類。13ｃ後半。
1628	33区　P20	瓦質土器	火鉢	体部は僅かに内彎。口縁端部は丸味をもつ。	内外面ともミガキ調整を施すが、器面が摩滅しているため詳細は不明。外面に印花で菊花文施文。	内面に煤附着。色調　暗灰色。奈良火鉢。浅鉢Ⅲ。14ｃ中頃。
1629	33区　P20	須恵器	鉢	口縁部は断面三角形状に肥厚する。口縁端部は上方につまみ上げる。片口をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　暗灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。B3類。14ｃ代。
1630	33区　P35	土師器	Ⅲ	器形は全体に、著しく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。内面の体部と底部の界　浅い凹部をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1631	33区　P35	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内外面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1632	33区　P35	土師器	Ⅲ	器壁は全体に薄い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	轆轤　未使用。色調　灰白色。
1633	33区　P35	土製品	面子	器壁は非常に薄い。土師器片の縁辺を打ち欠いて円形に成形。	器面は摩滅が著しい。	色調　にぶい黄橙。原体は土師器鍋。
1634	33区　包含層中	土師器	Ⅲ	器壁は全体に比較的厚い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1635	33区　包含層中	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。器壁は比較的厚い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1636	33区　包含層中	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。内面の底部と体部の界　凹線１条。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。16ｃ代。
1637	33区　包含層中	土師器	Ⅲ	器形は全体に大きく歪む。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1638	33区　包含層中	土師器	Ⅲ	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。
1639	33区　包含層中	土師器	Ⅲ	底部は上方に突出するいわゆるヘソ皿。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。
1640	33区　包含層中	無釉陶器	擂鉢	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は水平方向に切る。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　4条1単位の擂目を疎らに施文。内面　胡麻状に灰被り。	色調　灰色（須恵質）。備前焼擂鉢ⅡＡ類。13ｃ後半～14ｃ前半。
1641	33区　包含層中	土製品	土錘	棒状型に粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。	色調　橙色。焼成　やや軟質。
1642	33区　包含層中	土製品	面子	土師器片の縁辺を打ち欠いて円形に成形。	器面は摩滅が著しい。	色調　浅黄橙色。原体は土師器。
1643	33区　包含層中	石製品	石鍋	断面台形状の短い鍔をもつ。	口縁部外面に成形時のノミ痕。	外面に煤附着。色調　黒色。滑石製。Ⅲｂ類。13ｃ代。
1644	34区　SK01	土師器	Ⅲ	ややあげ底気味の平底。底部と体部の界　大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。内面の底部と体部の界　凹部をもつ。	轆轤未使用。色調　黄橙色。16ｃ代。
1645	34区　SK01	土師器	Ⅲ	器形は全体に著しく歪む。ややあげ底気味の平底。底部と体部の界　大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。内面の底部と体部の界　凹部をもつ。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1646	34区　SK03	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。内面の底部と体部の界　凹部をもつ。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。
1647	34区　SK06	土師器	皿	器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
1648	34区　SK06	土師器	皿	器形は全体に著しく歪む。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部及び体部内面　指頭圧痕。内面の底部と体部の界凹部をもつ。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。
1649	34区　SK06	土師器	皿	平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	轆轤未使用。色調　浅黄橙色。
1650	34区 包含層（第1層）中	土師器	皿	器形は著しく歪む。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
1651	34区 包含層（第1層）中	土師器	皿	器形は著しく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。底部内面　ナデ調整。外面の体部下半～底部及び体部内面　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。
1652	34区 包含層（第1層）中	土師器	皿	器形は全体に大きく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。外面の体部下半～底部及び体部内面　指頭圧痕。	轆轤使用。色調　にぶい橙色。
1653	34区 包含層（第1層）中	土師器	皿	器壁は全体に薄い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。底部外面未調整　糸切り痕。内面　透明釉施釉。黄橙色に発色。外面　露胎。	轆轤使用。色調　黄橙色。いわゆる柿釉の灯明皿。Ⅳ類。18c後半以降。
1654	34区 包含層（第1層）中	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。低部内面に凸帯が1条巡る。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。底部外面未調整　糸切り痕。内面　透明釉施釉。露胎。橙色に発色。外面露胎。	轆轤使用。色調　橙色。いわゆる柿釉の灯明皿。Ⅳ類。18c後半以降。
1655	34区 包含層（第1層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は斜め方向に切る。口縁端部は僅かに斜め下方につまみ出す。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。体部内面7条1単位の擂目施文。	色調　暗赤褐色。口縁部上面　灰被り。備前焼擂鉢ⅢB類。14ｃ後半～15ｃ初頭。
1656	34区 包含層（第1層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は斜め方向に切る。口縁端部を内側につまみ出す。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。体部内面7条1単位の擂目施文。擂目の上端は斜め方向に延びる。	色調　赤褐色。口縁部上面　灰被り。備前焼擂鉢ⅢC類。14ｃ後半～15ｃ初頭。
1657	34区 包含層（第1層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は斜め方向に切る。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。体部内面6条1単位の擂目施文。	色調　暗赤褐色。内外面とも灰被り。備前焼擂鉢ⅢA類。14ｃ後半～15ｃ初頭。
1658	34区 包含層（第1層）中	施釉陶器	天目茶碗	高台は浅く削り出す内反り高台。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は屈曲、ほぼ直立する。口縁端部は尖り気味。	内外面とも鉄釉・黒釉を施釉。暗赤褐色に発色。外面の体部下半以下露胎。露胎部に鉄泥漿塗布。	瀬戸・美濃系。後Ⅳ期古。15ｃ中頃。
1659	34区 包含層（第1層）中	施釉陶器	天目茶碗	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに屈曲。口縁端部は尖り気味。	内外面とも鉄釉施釉。黒褐色に発色。	胎土・焼成とも堅緻。瀬戸・美濃系。後Ⅳ期古。15ｃ中頃。
1660	34区 包含層（第1層）中	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張、やや角張った楕円形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。内外面とも鉄泥漿塗布。胡麻上に灰被り。	色調　オリーブ黒色。備前焼甕ⅢA類。14ｃ代。
1661	34区 包含層（第1層）中	施釉陶器	鉢	高台は幅が広く、高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は小さい玉縁状に肥厚する。	内外面とも灰釉施釉の後、白濁釉を横方向にハケ塗り。刷毛目唐津風に発色。高台脇以下露胎。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	肥前系。唐津。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ代。
1662	34区 包含層（第1層）中	白磁	紅皿	型作り成形。高台は低く小さい。体部は僅かに内彎、斜め上方に延びる。口縁端部は水平に端面をもつ。体部外面　花弁状に縦線を入れる。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。外面の体部上半以下露胎。	肥前系。Ⅴ期。19ｃ前半。
1663	34区 包含層（第1層）中	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的細く高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　コンニャク印判で桐文・界線1・2条。内面　無文。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1664	34区 包含層（第1層）中	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的細く高い。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　淡い呉須で草花文施文。内面　無文。	肥前系。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1665	34区 包含層（第1層）中	染付磁器	皿	底部の器壁は比較的厚い。高台は細く低い。体部は中位で屈曲、口縁端部は尖り気味。口縁部は輪花状に成形。	色調　青味を帯びた白色。文様　内面　界線1条・松竹梅文・界線2条・草花文。外面　唐草文・界線1・1・1条。	肥前系。Ⅲ期。17ｃ中頃～後半。
1666	34区 包含層（第1層）中	土製品	人形	両型作り。中央部に貼り付け痕。頭部欠損。両手で勿をもつ人物像。	彩色は全て剥落。人物の頭部分欠落。	色調　灰黄色。天神像。
1667	34区 包含層（第1層）中	土製品	面子の型	内面に人物の顔陰刻。	外面　ナデ調整。	色調　浅黄橙色。
1668	34区 包含層（第1層）中	土製品	面子	断面形状は長方形。型作り成形。上面に「稲」を型押し施文。	下面以外はナデ調整。	色調　にぶい橙色。泥面子。
1669	34区 包含層（第1層）中	土製品	人形	両型作り。中央部に貼り付け痕。頭部・台座の一部欠損。両手で勿をもつ人物像。	彩色は全て剥落。人物の頭部分欠落。	色調　にぶい黄橙色。天神像。
1670	34区 包含層（第1層）中	瓦	軒丸瓦	巴文軒丸瓦。巴の尾は長い。珠文数　13。	外面　縦方向のナデ調整。内面　ナデ調整。	色調　暗青灰色。燻し瓦。
1671	34区 包含層（第1層）中	瓦	桟瓦	桟瓦	外面　ナデ調整。	色調　暗青灰色
1672	34区 包含層（第2層）中	土師器	皿	器壁は全体に比較的厚い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　橙色。ⅡA3b類。15c後半。
1673	34区 包含層（第2層）中	土師器	皿	器形は著しく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　不定方向のナデ調整。内面の底部と体部の界　ナデによる凹部をもつ。外面の体部～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅢB2a類。15c後半。
1674	34区 包含層（第2層）中	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内外面　ナデ調整。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅣC1類。15c前半。
1675	34区 包含層（第2層）中	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に凹部をもつ。底部内面　不定方向のナデ調整。内面の体部と底部の界　凹部をもつ。外面の体部下半～底部指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅣC1類。15c前半。
1676	34区 包含層（第2層）中	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい橙色。ⅢB2b類。15c後半。
1677	34区 包含層（第2層）中	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	色調　にぶい橙色。轆轤未使用。ⅣC1類。15c前半。
1678	34区 包含層（第2層）中	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部は上方につまみ上げる。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	外面に煤附着。色調　黒褐色。東播系須恵器鉢。C3類。　14ｃ代。
1679	34区 包含層（第2層）中	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、断面三角形状の縁帯を形成する。口縁端部は上方につまみ上げる。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。凹部をもつ。	色調　灰色。東播系須恵器鉢。C3類。14ｃ代。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1680	34区 包含層（第2層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。	内外面ともヨコナデ調整。内面　櫛状工具で擂目施文。	色調　にぶい赤褐色。備前焼擂鉢ⅤB類。15ｃ後半。
1681	34区 包含層（第2層）中	無釉陶器	甕	口縁部は上下に拡張、楕円形形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　にぶい赤褐色。備前焼甕ⅢB類。14ｃ代。
1682	35区　SK01	須恵器	鉢	口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。	内外面とも強いヨコナデ調整。	焼成は酸化炎が強く、色調は褐灰色を呈する。東播系須恵器。赤根川支群の製品。EⅠ類。14ｃ前半。
1683	35区　SK01	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張縁帯を形成する。口縁端部は上方につまみ上げる。	内面～口縁部　外面　ヨコナデ調整。体部内面板ナデ調整。体部外面　ヨコナデ調整。	色調　灰色。東播系須恵器。赤根川支群の製品。D類。14ｃ前半。
1684	35区　包含層（撹乱を含む）中	土製品	面子	須恵器片の縁辺を打ち欠いて成形。	器面は摩滅が著しい。	色調　オリーブ灰色。原体は須恵器鉢。
1685	35区　包含層（撹乱を含む）中	石製品	砥石	平面形状は長方形。	両面とも擦痕が認められる。	色調　淡黄色。砂岩製？。
1686	35区　包含層（撹乱を含む）中	石製品	石鍋	体部は僅かに内彎。口縁部は直立。口縁部上面は水平に端面をもつ。口縁部外面に断面台形状の短い鍔を削りだす。	体部外面　成形時のノミ跡が明瞭に残る。	外面に煤附着。滑石製。色調　灰色。
1687	36区　包含層中	土師器	高坏	脚部は欠損。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面　縦方向のハケ目調整。一部ナデ消し。体部内面　斜め方向のハケ目調整。	色調　にぶい黄橙色。古式土師器。古墳時代前期。。
1688	36区　包含層中	青磁	碗	底部に器壁は非常に厚い。高台は比較的低い。	底部内面に印花で草花文施文。内外面とも施釉淡青緑色に発色。高台裏は丁寧に釉掻き取り。	龍泉窯系青磁碗。14ｃ後半～15ｃ代。
1689	37区　SK01	土師器	Ⅲ	器壁は非常に厚い。平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部外面未調整　糸切り痕。	口縁部に煤附着－灯明Ⅲとして使用。色調　にぶい橙色。ⅢB類。17ｃ中葉～18c前半。
1690	37区　SK01	土師器	焙烙	丸底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直立。口縁部は玉縁状に肥厚。	底型作り。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　不定方向のナデ調整。	外面　煤附着。色調　にぶい橙色。焙烙形ⅣA類。17ｃ中葉～後半。
1691	37区　SK01	色絵磁器	小碗	高台は比較的高い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　灰白色。文様　外面　無文。内面　赤絵で草花文？蜜などを施文。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	粗製の色絵磁器　肥前系か。？
1692	37区　SK01	土師器	Ⅲ	器形は著しく歪む。平底。体部は緩やかに斜め方に延びる。口部縁部端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	轆轤未使用。色調　にぶい黄橙色。粗製。
1693	37区　SK02	青磁	碗	底部の器壁は厚い。高台は幅が広く低い。	底部内面　印花で草花文施文。内外面とも青磁釉施釉。暗オリーブ灰色に発色。高台畳付～高台裏　露胎。	龍泉窯系青磁碗。14ｃ代。
1694	37区　SK04	石製品	石鍋	口縁部上面は水平に端面をもつ。体部外面に断面台形状の鍔を削りだす。	内外面とも研磨仕上げ。	滑石製。色調　褐灰色。Ⅲｄ類。14ｃ後半。
1695	37区　P04	無釉陶器	甕	頸部はほぼ直立。口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　暗オリーブ灰色（須恵質）。備前焼甕ⅢA類。14ｃ代。
1696	37区　包含層中	土師器	壺	丸底。体部は大きく内彎。口縁部は外方にひらく。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　ナデ調整。体部外面ハケ目調整。	色調　橙色。古式土師器。古墳時代前期。
1697	38区　SK02	白磁	仏具碗	平底。底部は外周を残して高台状に浅く削る。脚部は短く直立する。碗部の底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。灰色に発色。外面の脚部下半以下露胎。	肥前系。Ⅳ期。18ｃ代。
1698	38区　SK03	瓦質土器	火鉢	丸底。体部は直線的にほぼ直上に延びる。口縁部は外反。	口縁端部は器面が剥離する。口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　指オサエの後、縦方向の板ナデ調整。体部外面　型押しによって魚々子文・菊花文施文。	色調　暗灰色。近世。
1699	38区　SK03	瓦質土器	火鉢	体部は直立。口縁端部水平に端面をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。	色調　暗灰色。
1700	38区　SK03	無釉陶器	徳利	平底。体部は内彎。	内外面とも回転ナデ調整。外面　鉄泥漿塗布（暗赤褐色に発色。）外面に火襷あり。	備前焼。
1701	38区　SK03	白磁	杯	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的幅が広く低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。高台側面には未施釉。	産地・時期とも不明。
1702	38区　SK03	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的細く、高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰色。文様　外面　淡い呉須で草花文・界線2条。内面　無文。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1703	38区　SK03	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　雪輪に梅花文・界線2条。底部外面　不明文。内面　無文。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1704	38区　SK03	染付青磁	杯	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的低い。底部と体部の界　直角に屈曲。体部は直線的に直上に延びる。	色調　外面　青磁釉施釉　明緑灰色に発色。内面　染付　底部内面　界線2条・コンニャク印判でくずれた五弁花文。	肥前系。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半。
1705	38区　SK03	瓦	軒丸瓦	燻し瓦。巴文軒丸瓦。巴の尾は長い。珠文数13。	外面　ヘラ削りの後、ナデ調整。内面　ナデ調整。	色調　暗灰色。
1706	38区　SK04	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。	色調　橙色。Ⅳ類。18c後半以降。
1707	38区　SK04	白磁	碗	底部の器壁は非常に厚い。底部と体部の界大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	肥前系。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半。
1708	38区　SK04	施釉陶器	Ⅲ	高台は幅が広く比較的高い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも灰釉施釉。にぶい黄色に発色。さらには白濁釉流しがけ。外面の体部下半以下露胎。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	肥前系。唐津。Ⅲ～Ⅳ期。17ｃ中頃～18ｃ前半。
1709	38区　SK04	土製品	灯籠形	型作り整形。両型作りと考えられるが、貼り合わせ部はナデ消す。外面に円形と鳥居形を施文。屋根に五曜星文底。部外面　円錐状に穿孔。	頂部　欠損。彩色は全て剥落。	色調　にぶい橙色。
1710	38区　SK05	白磁	紅Ⅲ	型作り成形。高台は低く小さい。体部は僅かに内彎、斜め上方に延びる。口縁端部は水平に端面をもつ。体部外面　花弁状に縦線を入れる。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。外面の体部上半以下露胎。	肥前系。Ⅴ期。19ｃ前半。
1711	38区　SK06	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。内面　透明釉施釉。明赤褐色に発色。	いわゆる柿釉の灯明Ⅲ。Ⅳ類。18c後半以降。
1712	38区　SK06	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。体部内面に凸帯が１条巡る。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。内面　透明釉施釉。橙色に発色。	いわゆる柿釉の灯明Ⅲ。Ⅳ類。18c後半以降。Ⅳ類。18c後半以降。
1713	38区　SK06	土師器	Ⅲ	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。内面　透明釉施釉。橙色に発色。	いわゆる柿釉の灯明Ⅲ。Ⅳ類。18c後半以降。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1714	38区　SK06	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。内面　透明釉施釉。明赤褐色に発色。	釉の剥落が見られる。いわゆる柿釉の灯明皿。Ⅳ類。18c後半以降。
1715	38区　SK06	施釉陶器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。内面　白濁釉施釉。淡黄色に発色。	京・信楽系。灯明皿。19ｃ前半以降。
1716	38区　SK06	土師器	燭台	平底。底部外面は比較的深く削る。脚部は円柱状で、直立。皿部の体部は緩やかに斜め上方に延びる。皿部内面に凸帯が１条巡る。凸帯の一箇所は抉る。	内面～脚部外面　回転ナデ調整。底部外面　回転ヘラ削り。皿部内面　透明釉施釉。明赤褐色に発色。底部外面に一部糸切り痕が残る。	轆轤使用。いわゆる柿釉の燭台。19ｃ前半。
1717	38区　SK06	土師器	焙烙	型作り成形。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部はほぼ直立。口縁端部は丸味をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　板ナデ痕。	色調　にぶい赤褐色。焙烙形ⅣC類。18ｃ後半。
1718	38区　SK06	土師器	焙烙	型作り成形。底型作り。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は僅かに内傾。口縁端部は水平に端面をもつ。口縁部上面に耳貼り付け。耳の上面に穿孔2箇所。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁内外面強いヨコナデ調製。	色調　橙色。焙烙形ⅣC類。18ｃ後半。
1719	38区　SK06	土師器	焙烙	型作り整形。平底。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	外面に煤附着。色調　にぶい橙色。焙烙形ⅣD類。19ｃ前半。
1720	38区　SK06	土製品	竈	体部はほぼ直立。口縁端部上面は水平に端面をもつ。	口縁部内外面　回転ナデ調整。体部外面　ナデ調整。体部内面　指オサエの後、多方向のナデ調整。外面に焚口をあける。口縁部外面に粘土紐で捻り文を貼り付ける。	内面に煤附着。色調　にぶい橙色。
1721	38区　SK06	瓦質土器	火鉢	体部は僅かに内彎。ほぼ直上に延びる。口縁部は直立。口縁端部は水平に端面をもつ。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　指オサエの後、ヨコナデ調整。体部　外面　魚々子文を型押しにより施文。体部外面に獅子頭を貼り付け。獅子の口に穿孔。把手を通す孔か。	色調　暗灰色。近世。
1722	38区　SK06	無釉陶器	擂鉢	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、断面三角形状の縁帯を形成。口縁部外面　凹線２条。口縁部内面に凹部をもつ。	体部外面　横方向のナデ調整。底部外面　未調整。体部内面　８条１単位の擂目施文。底部内面　８条1単位の擂目をウールマーク状に施文。	色調　赤橙色。堺・明石産。Ⅰ類。18ｃ後半。
1723	38区　SK06	無釉陶器	擂鉢	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁部外面　沈線２条。口縁部内面　凹線２条。	口縁部～体部外面　ヨコナデ調整。底部外面ナデ調整。体部内面に９条１単位の擂目施文。底部内面　９条１単位の擂目を放射状に施文。底部外面　凹線１条巡る。	色調　にぶい赤褐色。焼成堅緻。明石産擂鉢。Ⅱ類。18ｃ後半～19ｃ前半。
1724	38区　SK06	施釉陶器	椀	高台は幅が広く比較的高い。体部は大きく内彎して上方に延びる。口縁部は僅かに外反。	内外面とも施釉。にぶい黄色に発色。高台脇以下露胎。	産地不明。
1725	38区　SK06	施釉陶器	鍋	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は水平に折り曲げ、端部は上方に摘み上げる。体部外面下方に粘土塊附着。口縁部上面に把手貼り付け。	内外面とも鉄釉施釉。茶褐色に発色。外面の体部下半以下露胎。	在地産か（明石・舞子産）。19ｃ前半以降。
1726	38区　SK06	青磁	火入	体部直立。口縁端部は内側に若干つまみ出す。	外面　青磁釉施釉。明緑灰色に発色。口縁部内面以下露胎。	肥前系。
1727	38区　SK06	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　淡い呉須で界線1条・コンニャク印判で菊花文・手描きで井桁文施文・界線１・２条。内面　界線２・１条。底部内面　界線１条・コンニャク印判で菊花文。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1728	38区　SK06	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　コンニャク印判で松文？界線１・２条。内面　界線２条。底部内面　界線２条・コンニャク印判で施文。コンニャク印判のくずれが著しい。	肥前系。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1729	38区　SK06	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　雪輪に梅花文・界線2条。底部外面　渦福文か？。内面　無文。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1730	38区　SK06	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　コンニャク印判で菊花文・井桁状文・界線１・２条。内面　界線２条。底部内面　界線２条・コンニャク印判で施文。コンニャク印判のくずれが著しい。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1731	38区　SK06	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は断面三角形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰色。文様　外面　黒ずんだ呉須で簡易な草花文？施文・界線２条。内面　無文。	プロポーションは京焼風。絵付け・焼成は粗雑。肥前系。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1732	38区　SK06	染付磁器	碗	高台は「ハ」の字状に外方にひらく。体部は内彎。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　呉須白抜きの丸文・蓮弁文・界線２条。内面　菱形文。底部内面　界線2条。源氏香。	肥前系。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半。
1733	38区　SK06	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は細く比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　割筆で二重網目文・界線2条。内面　一重網目文。底部内面　菊花文。	肥前系。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1734	38区　SK06	染付磁器	杯	高台は幅が狭く低い。平底。体部と底部の界は直角に屈曲。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　窓絵風に草花文・草花文・界線２条。内面　斜格子文。底部内面　界線・コンニャク印判でくずれた五弁花文。	肥前系　19ｃ前半。
1735	38区　SK06	染付磁器	杯	高台は幅が狭く低い。平底。体部と底部の界は直角に屈曲。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　格子目文に×印・草花文・界線２条。内面　斜格子文。底部内面　界線・コンニャク印判でくずれた五弁花文。	肥前系　19ｃ前半。
1736	38区　SK06	染付磁器	皿	器壁は全体に非常に厚い。高台は幅が広く低い。体部は内彎気味に緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰色。文様　内面　やや黒ずむ呉須で唐草文・界線２条。底部内面　コンニャク印判でくずれた五弁花文。外面　無文。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	肥前系。粗製の皿。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1737	38区　SK06	染付磁器	皿	高台は低い。平底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部は輪花上に整形。	色調　青味を帯びた灰色。文様　外面　黒ずむ呉須で唐草文・界線２条。底部外面　界線１条渦福文。内面　草花文・界線１条。底部内面コンニャク印判で五弁花文。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1738	38区　SK06	染付磁器	皿	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰色。文様　外面　無文内面　簡略化した草花文。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	肥前系。粗製の皿。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1739	38区　SK06	染付磁器	皿	器壁は全体に非常に厚い。高台は幅が広く比較的低い。口縁端部は丸味をもつ。高台径は口径に比べて非常に小さい。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　呉須　雲状文・界線２条。底部内面　コンニャク印判で五弁花文。外面　無文。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	肥前系。粗製の皿。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1740	38区　SK06	染付磁器	皿	底部の器壁は非常に厚い。高台は断面三角形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　唐草文・界線１・２条。底部外面　界線１条・□渦福文。内面　一部吹き墨で桜葉文施文。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1741	38区　SK06	染付磁器	皿	底部の器壁は非常に厚い。高台は断面三角形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　簡略化した唐草文・界線１・１条。底部外面　界線１条　渦福文。内面　竹葉文・界線２条。底部内面　コンニャク印判で五弁花文。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1742	38区　SK06	染付磁器	徳利	底部は碁笥底風に成形。体部は大きく内彎。頸部・口縁部は欠失。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　やや黒ずんだ呉須で草花文施文。内面　露胎。	肥前系。Ⅱ期。17ｃ前半～中頃。
1743	38区　SK09	染付青磁	蓋	摘みは若干外方にひらく。体部は内彎気味に斜め下方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　外面　青磁釉施釉。薄青緑色に発色。摘み上面　染付　□渦福文施文。内面　染付　色調　青味を帯びた灰白色。文様　斜格子文・界線２条・草花文。	肥前系。Ⅴ期。19ｃ前半。
1744	38区　SK10	土師器	椀	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部　僅かに端面をもつ。	内外面ともナデ調整。底部に焼成後、穿孔。	色調　浅黄橙色。灯火具。
1745	38区　SK10	染付磁器	皿	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰色。文様　外面　無文　内面　簡略化した草花文・界線2条。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	肥前系。粗製の皿。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1746	38区　SK11	施釉陶器	椀	平底。高台は断面長方形で端正に整形。底部と体部の界は直角に屈曲。体部は直線的に直上に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。黄灰白色に発色。外面の高台脇以下露胎。底部外面に刻印。	肥前系京焼風陶器。Ⅲ期～Ⅳ期。17ｃ中頃～18ｃ前半。
1747	38区　SK11	白磁	皿	底部の器壁は非常に厚い。高台は断面三角形状で比較的高い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。外面の体部下半以下露胎。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	肥前系　粗製の白磁皿。波佐見産。18ｃ前半。
1748	38区　SK11	施釉陶器	椀	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも施釉。灰黄色に発色。高台以下露胎。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	産地不明。
1749	38区　SK11	施釉陶器	椀	高台は細く高い。底部の器壁は比較的厚い。体部は僅かに内彎。口縁端部は尖り気味。	内外面とも鉄釉施釉ののち、白泥で外面　波状文・内面　現川風に施文。	肥前系。現川焼。Ⅲ～Ⅳ期。17ｃ中頃～18ｃ前半。
1750	38区　SK11	染付磁器	碗	器壁は比較的薄い。高台は細く比較的低い。体部は内彎。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた黄灰色。文様　外面　コンニャク印判で菊花と紅葉文・界線３条。	京焼風の端正なプロポーション。肥前系。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1751	38区　SK12	施釉陶器	椀	高台は断面長方形状で低い。体部は内彎。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも灰釉施釉。高台脇以下露胎。灰黄褐色に発色。外面　鉄釉で施文。	京焼風の端正なプロポーション。産地不明。
1752	38区　SK12	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　界線1条・コンニャク印判で菊花文・界線１・２条。内面　界線２条。底部内面　界線２条・コンニャク印判で五弁花文施文。	肥前系　くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1753	38区　SK13	土師器	皿	器形は全体に著しく歪む。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　にぶい黄橙色。
1754	38区　SK13	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。体部内面に凸帯が１条巡る。凸帯に1箇所抉りが入る。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。	外面に煤附着。いわゆる柿釉の灯明皿。18ｃ後半以降。
1755	38区　SK13	土師器	竈	高い高台状の脚部をもつ。脚部に透かしをもつ。平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。脚部は貼り付け。	外面　丁寧なナデ調整。器面は平滑に仕上げる。	色調　黒褐色。近世。
1756	38区　SK13	無釉陶器	擂鉢	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁部外面　沈線２条。口縁部内面　凹線２条。内面の底部と体部の界は不明瞭。	口縁部～体部外面　ヨコナデ調整。底部外面未調整。体部内面に９条１単位の擂目施文。底部内面　９条１単位の擂目を交差して施文。	色調　赤褐色。備前産か？
1757	38区　SK13	無釉陶器	擂鉢	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張。縁帯を形成する。口縁部外面　沈線2条。口縁部内面　凹線２条。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部～体部外面　ヨコナデ調整。底部外面ナデ調整。体部内面に９条１単位の擂目施文。底部内面　９条１単位の擂目を放射状に施文。	色調　暗赤褐色。焼成堅緻。明石産擂鉢。Ⅱ類。18ｃ後半～19ｃ前半。
1758	38区　SK13	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰色。文様　外面　無文。内面　コンニャク印判で菊花文・界線１・２条。底部外面　施文。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ代。
1759	38区　SK13	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的幅が広い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　割筆で二重網目文。界線２条。内面　無文。高台畳付に砂附着。	肥前系。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ代。
1760	38区　SK13	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的幅が広く、高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　界線１条・コンニャク印判で菊花文施文・界線１・２条。内面　界線２・１条。底部内面　界線１条・コンニャク印判でくずれた五弁花文。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1761	38区　SK13	染付磁器	碗	器壁は比較的薄い。高台は細く高い。体部は僅かに内彎。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　鶴に松文？・界線１条。内面　界線２条。底部内面　界線１条・松文？。	肥前系。広東碗。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半。
1762	38区　SK13	染付磁器	碗	高台は「ハ」の字状に外方にひらく。体部は僅かに内彎。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰色。文様　外面　呉須幾何学文・界線１条・蓮弁文・界線２条。内面　菱形文。底部内面　界線2条・源氏香。	肥前系。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半。
1763	38区　SK13	染付磁器	杯	高台は幅が狭く低い。平底。体部と底部の界は直角に屈曲。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　界線１条・細かい草花文・界線１条・草花文・界線１・１条。内面　界線２条。底部内面　界線１条・コンニャク印判で五弁花文。	肥前系　19ｃ前半。2次焼成を受けた痕跡あり。
1764	38区　SK13	瓦	軒丸瓦	燻し瓦。三巴文。巴の尾は長い。珠文数　13。	外面　ヘラ削りの後、ナデ調整。内面　ナデ調整。	色調　暗灰色。
1765	38区　SK13	瓦	軒丸瓦	燻し瓦。三巴文。巴の尾は長い。珠文数　16。	外面　ヘラ削りの後、ナデ調整。内面　ナデ調整。	色調　暗青灰色。
1766	38区　SK13	瓦	丸瓦	燻し瓦。	外面　ヘラ削り痕。内面　縄目痕。	色調　暗灰色。
1767	38区　SK13	石製品	石臼	側面に把手を付ける穴を穿孔。器面に斜め方向の刻み目。	器面の磨耗が著しい。	花崗岩製。
1768	38区　SK14	土師器	皿	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。内面　透明釉施釉。橙色に発色。	轆轤使用。色調　灰黄褐色。Ⅴ類。18ｃ後半以降。
1769	38区　SK16	無釉陶器	鉢	平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直立。口縁端部は玉縁状に肥厚。	口縁部内外面　強いヨコナデ調製。体部外面横方向にヘラで凹線を4本施文の後、縦方向の細線施文。外面に自然釉附着。オリーブ褐色に発色。	丹波系か？。サヤ鉢に類似。用途不明。
1770	38区　SK16	無釉陶器	壺	平底。体部は大きく内彎。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面にヘラ状工具で窯印か。？底部外面　未調整　糸切り痕。外面肩部に自然釉附着。	色調　にぶい橙色。丹波焼か？
1771	38区　SK16	染付磁器	皿	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰色。文様　外面　無文　内面　簡略化した草花文・界線2条。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	肥前系。粗製の皿。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1772	38区　瓦片廃棄土坑	土師器	焙烙	型作り成形。底型作り。平底。体部と底部の界はほぼ直角に屈曲。体部は直立。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整	色調　暗赤褐色。外面に煤附着。焙烙形ⅣB類。18ｃ前半。
1773	38区　瓦片廃棄土坑	土師器	焙烙	型作り成形。平底。底部と体部の界はほぼ直角に屈曲。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹部をもつ。底部外面　ヘラ削り調整。	外面に煤附着。色調　にぶい赤褐色。焙烙形ⅣD類。19ｃ前半。
1774	38区　瓦片廃棄土坑	施釉陶器	鉢	底部の器壁は比較的厚い。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	鉄釉と灰釉の２釉掛け分け。それぞれ黒褐色、灰白色に発色。	瀬戸・美濃産か？。18c後半以降。
1775	38区　瓦片廃棄土坑	施釉陶器	椀	高台径は口径に比べて小さい。底部は直線的に斜め上方に延びる。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は僅かに外反。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも灰釉施釉。灰黄色に発色。内外面に鉄絵で施文。	産地不明。19ｃ前半以降か？。
1776	38区　瓦片廃棄土坑	施釉陶器	香炉	体部は内彎。口縁部は僅かに内傾。輪花状に整形か。	外面に施釉（明オリーブ灰色に発色）の後、赤・緑・青で竹葉文を上絵付けする。内面　露胎。	産地不明。
1777	38区　瓦片廃棄土坑	土製品	人形	完存。型作り成形。両型作り。中央部に貼り合わせ痕。両手で勿をもつ人物像。	両袖には緑釉施釉。勿の辺りは赤色が釉僅かに残る。他の部分には黄釉・透明釉が残る。	天神像。
1778	38区　瓦片廃棄土坑	染付磁器	鉢	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的幅が広い。体部は僅かに内彎。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　草花文・蝶文・界線1・2条。底部内面　界線2条・コンニャク印判で五弁花文。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	肥前系。Ⅳ期。18ｃ代。
1779	38区　包含層中	土師器	皿	器壁は全体に比較的厚い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。内外面とも指頭圧痕が顕著に認められる。	色調　淡黄色。
1780	38区　包含層中	土師器	皿	器形は全体に著しく歪む。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。外面全体に指頭圧痕が顕著に認められる。	色調　浅黄橙色。
1781	38区　包含層中	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。内外面とも指頭圧痕が認められる。	色調　にぶい黄橙色。
1782	38区　包含層中	土師器	皿	器壁は比較的薄い。平底。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。内面の底部と体部の界に凹線１条。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。内外面とも指頭圧痕が認められる。	色調　浅黄橙色。
1783	38区　包含層中	土師器	皿	器壁は全体に比較的厚い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。内外面とも指頭圧痕が認められる。	色調　橙色。
1784	38区　包含層中	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。内面に透明釉施釉。明赤褐色に発色。	いわゆる柿釉の灯明皿。Ⅳ類。18c後半以降。
1785	38区　包含層中	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。内面に透明釉施釉。赤橙色に発色。	いわゆる柿釉の灯明皿。Ⅳ類。18c後半以降。
1786	38区　包含層中	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。内面に透明釉施釉。赤橙色に発色。	いわゆる柿釉の灯明皿。Ⅳ類。18c後半以降。
1787	38区　包含層中	土師器	皿	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。外面の体部下半　指頭圧痕。	色調　浅黄橙色。
1788	38区　包含層中	土師器	皿	器壁は全体に比較的薄い。平底。体部と底部の界は僅かに屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。体部内面　一方向のナデ調整。体部外面ナデ調整。	色調　にぶい黄橙色。
1789	38区　包含層中	瓦質土器	羽釜	口縁部僅かに内傾。口縁部外面に断面台形状の幅の広い鍔を貼り付け。口縁部外面　凹線３条。	体部内面　板ナデ調整。口縁部内外面　回転ナデ調整。	色調　褐灰色。羽釜形タイプ：羽釜形B系列ⅡC類。15ｃ中頃。
1790	38区　包含層中	無釉陶器	鉢	平底。体部直立。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。底部外面　ナデ調整。	色調　赤褐色。備前焼　サヤ鉢か？
1791	38区　包含層中	無釉陶器	徳利	体部をへこませる。	外面　回転ナデ調整。へこんだ部分に布袋像貼り付け。	備前焼。布袋徳利。18ｃ代。
1792	38区　包含層中	施釉陶器	擂鉢	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は水平方向に拡張。口縁部上面に凹線２条。	体部内面　櫛状工具で擂目を密に施文。底部内面　同心円上に擂目施文。中央部に重ね焼痕あり。内外面とも鉄釉施釉。黒褐色に発色。外面の体部下半以下露胎。	丹波焼。Ⅴ類。18ｃ末以降。
1793	38区　包含層中	施釉陶器	桶	体部は直立。口縁部は左右に拡張する。口縁部上面は水平に端面をもち、凹線を3条施文する。体部外面に環状の耳を貼り付ける。	内外面とも鉄泥漿を塗布する。外面の耳周辺に灰釉施釉。暗赤褐色に発色。地釉部分はにぶい赤褐色に発色。	丹波焼。17ｃ後葉～18ｃ前半。
1794	38区　包含層中	施釉陶器	壷	平底。体部は内彎してほぼ直上に延びる。口縁部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	外面　鉄釉を地釉として薄く施釉した後、灰釉を流し掛けで鉛上に施釉。内面　灰釉施釉。	丹波焼。壷Ⅳ類。18ｃ末以降。
1795	38区　包含層中	施釉陶器	甕	平底。体部は内彎してほぼ直上に延びる。口縁部は外方に拡張。上面に水平の端面をもつ。	外面　鉄釉を地釉として薄く施釉した後、灰釉を流し掛けで鉛上に施釉。内面　灰釉施釉。	丹波焼。甕ⅦB類。18ｃ末降。
1796	38区　包含層中	施釉陶器	火入	高台は断面台形状で比較的低い。平底。体部と底部の界はほぼ直角に屈曲。体部は直線的にほぼ直上に延びる。口縁端部は内側につまみ出す。	外面～口縁部内面まで灰釉施釉。にぶい黄色に発色。釉裏に淡い呉須で墨絵風に施文。高台脇以下及び内面は露胎。底部外面に行書で「清水」銘　刻印。	肥前系京焼風陶器。Ⅲ期。17ｃ中頃～後半。
1797	38区　包含層中	施釉陶器	椀	底部の器壁は厚い。体部はほぼ直立。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも施釉（茶褐色に発色）の後、白泥で外面は波状、内面は現川風に施文。	肥前系。現川焼。Ⅲ～Ⅳ期。17ｃ中頃～18ｃ前半。
1798	38区　包含層中	染付磁器	碗	底部の器壁は厚い。高台は小さく低い。底部と体部の界は大きく屈曲。体部はほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　呉須稲束文。底部内面　鷲文か？。	京焼風の端正なプロポーション。肥前系。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半。
1799	38区　包含層中	施釉陶器	椀	高台は小さく低い。高台脇は面取りする。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも灰釉施釉。青味を帯びた灰白色に発色。高台脇以下露胎。体部外面に鉄絵で杉葉文施文。	京・信楽系。小杉椀。19ｃ前半。
1800	38区　包含層中	施釉陶器	杯	平底。底部の径は比較的小さい。体部は大きく内彎。口縁部は内傾。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面　灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。外面の口縁部以下露胎。底部外面　未調整　糸切り痕。	産地・時期とも不明。
1801	38区　包含層中	施釉陶器	杯	高台は「ハ」の字状に外側にひらく。体部は内彎して斜め上方に延びる。口縁部端部は丸味をもつ。	内外面とも白濁釉施釉。オリーブ灰色に発色。外面の体部下半以下露胎。	産地不明。粗製の杯。近代以降か。
1802	38区　包含層中	施釉陶器	杯	高台は比較的高い。底部は饅頭心風にやや上げ底。体部は内彎気味にほぼ直立。口縁端部は尖り気味。	内外面ともガラス質の灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。器面に貫入が走る。高台脇以下露胎。	産地不明。粗製の杯。近代以降か。
1803	38区　包含層中	施釉陶器	皿	平底。体部は僅かに内彎、斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部内面に1箇所、菊花文を貼り付け。	内面～口縁部外面施釉。灰黄色に発色。口縁部外面以下露胎。露胎部　回転削り調整。	京・信楽系。灯明皿。19ｃ前半以降。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1804	38区　包含層中	施釉陶器	蓋	落とし蓋。平底。体部は直立。口縁部は外方に折り曲げる。	上面　灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。下面　露胎。	産地不明。19ｃ前半以降か。
1805	38区　包含層中	施釉陶器	蓋	体部は直立。上面中央に宝珠形の摘みを貼り付け。	上面　鉄釉施釉。暗赤褐色に発色。下面　露胎。	産地不明。19ｃ前半以降か。
1806	38区　包含層中	施釉陶器	蓋	体部は直立。上面中央に宝珠形の摘みを貼り付け。	上面　灰釉施釉後、白泥をイッチン掛けで施文。灰オリーブ色に発色。下面　露胎。	産地不明。19ｃ前半以降か。
1807	38区　包含層中	施釉陶器	燗徳利	体部下半以下欠損。体部外面に沈線施文。体部上面に注口1箇所貼り付け。口縁部は手ひねりで巾着状に整形。	内外面とも灰釉施釉。灰黄色に発色。	京・信楽系。19ｃ前半。
1808	38区　包含層中	施釉陶器	壺	底部の器壁は厚い。高台は幅が広く低い。体部は内彎気味に斜め上方に延び、中位で大きく屈曲、内傾する。口縁部は直立、端部は丸味をもつ。	屑部上面に横耳を貼り付け。内外面とも灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。底部外面　露胎。	胎土から瀬戸・美濃系。19ｃ前半以降。
1809	38区　包含層中	白磁	皿	高台は比較的低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた白色に発色。	産地不明。
1810	38区　包含層中	白磁	紅皿	型作り成形。高台は低く小さい。体部は僅かに内彎、斜め上方に延びる。口縁端部は水平に端面をもつ。体部外面　花弁状に縦線を入れる。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。外面の体部上半以下露胎。	肥前系。Ⅴ期。19ｃ前半。
1811	38区　包含層中	青磁	火入	高台は非常に厚い。底部外面中央部を平底高台風に円形に削り残す。底部外面に3箇所脚を貼り付ける。体部は直立。口縁部上面は水平に端面をもつ。	内外面とも青磁釉施釉。明緑灰色に発色。底部外面中央部は露胎。明赤褐色に発色。脚部外面に鱗文を型押し施文。	肥前系。
1812	38区　包含層中	染付青磁	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は欠失。体部は直線的に斜め上方に延びる。	外面　青磁釉施釉。浅黄橙色に発色。底部外面染付で施文。渦福文？。内面　染付。色調　にぶい黄橙色。底部内面　菊花文施文。	焼成はややあまい。肥前系。Ⅳ期。18ｃ後半。
1813	38区　包含層中	染付青磁	碗	底部の器壁は非常に厚い。体部は直線的にほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　外面　高台裏を除いて青磁釉施釉。明緑灰色に発色。内面　染付。底部内面　界線2条・五弁花文。	肥前系。Ⅳ期。18ｃ後半。
1814	38区　包含層中	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰色。文様　外面　淡い呉須で梅花文・界線1・2条。底部外面　不明文。内面　無文。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1815	38区　包含層中	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　やや黒ずんだ呉須で雪輪文・界線1・2条。底部外面　花文。内面　無文。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1816	38区　包含層中	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　呉須コンニャク印判で不明文・界線1・2条。内面　無文。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1817	38区　包含層中	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的細く高く、「ハ」の字状にひらく。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰色。文様　外面　草花文・界線2条。内面　無文。	産地不明。
1818	38区　包含層中	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的細い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰色。文様　外面　淡い呉須　コンニャク印判で菊花文施文の後、割筆で二重網目文施文・界線1・2条。内面　無文。	肥前系。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1819	38区　包含層中	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的細く高い。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰色。文様　外面　コンニャク印判で紅葉文・界線1・2条。内面　無文。底部内面の釉　蛇ノ目状釉ハギ。高台畳付に砂附着。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1820	38区　包含層中	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的細く高い。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰色。文様　外面　簡略化した唐草文・界線1・1条。内面　無文。底部内面の釉　蛇ノ目状釉ハギ。高台畳付に砂附着。	肥前系。くらわんか手。17ｃ後半～18ｃ。
1821	38区　包含層中	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部は僅かに内彎、斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　白色。文様　外面　鮮やかな呉須で草花文・猿文・縦の細線を施文。内面　幾何学文施文。	産地不明。近代以降か？。
1822	38区　包含層中	染付磁器	杯	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　やや青味を帯びた白色。文様　外面　呉須　簡略化した草花文。内面　無文。	肥前系。波佐見産。17ｃ後半～18ｃ。
1823	38区　包含層中	染付磁器	杯	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　やや青味を帯びた白色。文様　外面　呉須　簡略化した草花文。内面　無文。	肥前系。波佐見産。17ｃ後半～18ｃ。
1824	38区　包含層中	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　淡い呉須で団扇？文・界線1・2条。内面　界線2・2条。底部内面　花文。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1825	38区　包含層中	染付磁器	碗	高台は「ハ」の字状に外方にひらく。体部は僅かに内彎して外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	色調　やや青味を帯びた白色。文様　外面　呉須　帆掛け舟と島嶼文・墨弾き施文・界線2条。内面　界線2・1条。底部内面　草花文？。	産地不明。
1826	38区　包含層中	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的細く高い。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰色。文様　外面　雪輪文・梅花文・界線2条。内面　無文。底部内面の釉　蛇ノ目状釉ハギ。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17後半～18ｃ。
1827	38区　包含層中	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は細く高く若干外方にひらく。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　呉須草花文。内面　界線2条。底部内面　界線1条・寿字文。	肥前系。広東碗。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半。
1828	38区　包含層中	染付磁器	碗	器壁は全体に比較的薄い。高台は比較的細く高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　白色。文様　外面　呉須　山水楼閣文。内面　界線2条。底部内面　界線1条　鳥嶼文？	肥前系。広東碗。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半。
1829	38区　包含層中	染付磁器	碗	器壁は比較的薄い。高台は細く高い。体部は僅かに内彎。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　呉須界線1条・草花文・界線1条。内面　無文。	小型広東碗。肥前系。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半。
1830	38区　包含層中	染付磁器	碗	高台は焼け歪により歪む。高台は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　鳥に草花文・界線1条。内面　界線2条。底部内面界線1条・草花文。	肥前系。広東碗。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半。
1831	38区　包含層中	染付磁器	碗	器壁は比較的薄い。高台は細く高い。体部は僅かに内彎。口縁端部は尖り気味。	色調　僅かに青味を帯びた白色。文様　外面　山水文・界線2条。内面　界線2・1条。底部内面　丸に花文。焼継痕・焼継銘あり。	肥前系。広東碗。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半。
1832	38区　包含層中	染付磁器	碗	高台は細く高い。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　呉須筍状文・界線一条。内面　界線2条。底部内面界線1条・鶯文。	肥前系。広東碗。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半。
1833	38区　包含層中	染付磁器	碗	高台は細く高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　やや淡い呉須で外面　界線1条・山水文・界線2条。内面　界線2・1条。底部内面　花文。	肥前系。広東碗。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半。
1834	38区　包含層中	染付磁器	碗	高台は比較的高く細い。「ハ」の字状に外方にひらく。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は若干内側に摘む。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　呉須雨降り文・草花文・界線1・2条。内面　雨降り文・界線1条。底部内面　草花文。	端反碗。産地不明。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1835	38区　包含層中	染付磁器	碗	高台は比較的高く細い。「ハ」の字状に外方にひらく。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　呉須大根を齧る鼠文。内面　無文。焼継痕・焼継銘あり。	端反碗。産地不明。
1836	38区　包含層中	染付磁器	杯	高台は幅が狭く比較的低い。平底。体部と底部の界は直角に屈曲。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　呉須雨降り文に草花文・不明文・界線2条。内面斜め格子文・界線１条。底部内面　コンニャク印判でくずれた五弁花文。	肥前系。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半。
1837	38区　包含層中	染付磁器	杯	高台は幅が狭く低い。平底。体部と底部の界は直角に屈曲。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　芙蓉手風に草花文施文・草花文・界線１・2条。内面　斜格子状文。底部内面　界線１条・コンニャク印判でくずれた五弁花文。	肥前系。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半。
1838	38区　包含層中	染付磁器	杯	高台は幅が狭く比較的低い。平底。体部と底部の界は直角に屈曲。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　呉須草花文（藤？）・不明文・界線２条。内面　界線2・１条。底部内面　コンニャク印判でくずれた五弁花文。	肥前系。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半。
1839	38区　包含層中	染付磁器	杯	高台は幅が狭く比較的低い。平底。体部と底部の界は直角に屈曲。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　呉須笹葉文・不明文・界線１・2条。内面　界線１・１条。底部内面　コンニャク印判で五弁花文。呉須の発色はやや滲む。	肥前系。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半。
1840	38区　包含層中	染付磁器	杯	高台は幅が狭く比較的低い。平底。体部と底部の界は直角に屈曲。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　呉須斜格子文と菊花文を交互に施文。・不明文・界線２条。内面　界線2・１条。底部内面　コンニャク印判でくずれた五弁花文。	肥前系。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半。
1841	38区　包含層中	染付磁器	杯	高台は幅が狭く比較的低い。平底。体部と底部の界は直角に屈曲。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　呉須丸文に斜格子文。界線１・１条。内面　界線２・１条。底部内面　不明文。呉須の発色は滲む。	瀬戸・美濃系。　19ｃ前半以降。
1842	38区　包含層中	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的高い。底部と体部の界は直角に屈曲。体部は直線的に直上に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰色。文様　外面　黒ずむ淡い呉須で界線１条・雲形文・界線１条・コンニャク印判で菊花文・界線１条。内面　無文。高台畳付　砂附着。	肥前系。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1843	38区　包含層中	染付磁器	Ⅲ	底部の器壁は非常に厚い。高台は低い。体部は内彎。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰色。文様　外面　呉須簡略化された唐草文・界線１・２条。底部外面界線１条・渦巻き福文。内面　草花文・界線２条・コンニャク印判で五弁花文。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1844	38区　包含層中	染付磁器	Ⅲ	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く低い。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　無文。内面　やや黒ずんだ呉須で　簡易な斜格子状文・界線２条。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1845	38区　包含層中	染付磁器	Ⅲ	底部の器壁は厚い。高台は断面三角形状で小さく、低い。底部と体部の界は大きく屈曲、体部はほぼ直上に延びる。口縁端部は丸味をもつ。低部外面　蛇ノ目凹形高台。	色調　白色。文様　外面　呉須　唐草文・界線１・２条。底部外面の釉、中心を残して掻き取り。内面　草花文・界線１条。底部内面　花文。	肥前系。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半。
1846	38区　包含層中	染付磁器	Ⅲ	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く低い。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰色。文様　外面　無文。内面　やや黒ずんだ呉須で　簡易な唐草文・界線２条。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1847	38区　包含層中	色絵磁器	Ⅲ	平底。高台は低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	色調　灰白色。文様　外面　呉須　鶴文・赤絵菱形文等・呉須　界線2条。底部内面　呉須界線１条・「大□□□」。内面　呉須　鶴文・赤絵　雲形文？。底部内面　呉須　界線2条・赤絵　草花文・呉須　草花文。	焼継痕・焼継銘あり。肥前系。高級品。Ⅲ期。17ｃ中頃～後半。
1848	38区　包含層中	染付磁器	Ⅲ	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的幅が広く、高い。体部は内彎。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　無文。内面　簡略化した唐草文・界線２条。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。所々、釉切れが目立つ。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1849	38区　包含層中	染付磁器	蓋	摘みは比較的細く高い。体部は内彎。口縁端部は尖り気味。	色調　白色。文様　外面　松原・海浜風景。摘みの外面　雁行文。内面中央　鳥嶼文	産地不明。19ｃ前半以降か。？
1850	38区　包含層中	染付磁器	蓋	摘みは逆「ハ」の字状に外方にひらく。体部は内彎。口縁部は直立。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　界線2条・蓮弁文・丸文。内面　菱形文・界線2条・源氏香。	肥前系。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半。
1851	38区　包含層中	染付磁器	仏具碗	平底。底部は外周を残して蛇ノ目凹形高台状に浅く削る。脚部は直立する。碗部の底部の器壁は非常に厚い。碗部の体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外反。口縁端部は丸味をもつ。	色調　白色。文様　外面　呉須　半裁菊花文・界線２条。内面　無文。底部外面　中央部を残して釉掻き取り。	肥前系。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半以降。
1852	38区　包含層中	染付磁器	花瓶	高台は低い。体部は直立。	色調　灰白色。文様　外面　呉須　蛸唐草文・縦線・界線２条。内面　露胎。	肥前系。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半。
1853	38区　包含層中	色絵磁器	仏花瓶	高台は比較的細く高い。平底。体部は内彎する。頸部は長く直立。口縁部は大きく外方にひらく。口縁端部は内側につまみ出す。	色調　白色。文様　上絵付けで赤絵を主に界線・草花文などを描く。赤絵以外の顔料は剥落して、元の色調は不明。体部外面に縦耳を2箇所貼り付け。青銅器の尊形花瓶写し。	産地不明。
1854	38区　包含層中	土製品	螺髪？	型作り成形。螺旋状。	外面はナデ調整。彩色は全て剥落。	色調　橙色。
1855	38区　包含層中	土製品	螺髪？	型作り成形。螺旋状。	外面はナデ調整。彩色は全て剥落。	色調　浅黄橙色。
1856	38区　包含層中	土製品	亀形	形作り成形。片型作り。	上面　型押しにより亀甲文施文。彩色は全て剥落。	色調　にぶい橙色。
1857	38区　包含層中	土製品	楼閣形	型作り成形。片型作り。	片面に楼閣と水車を型押し施文。背面は無文で平滑。彩色は全て剥落。	色調　にぶい黄橙色。
1858	38区　包含層中	土製品	ﾐﾆﾁｭｱ鉢	型作り成形。低い高台を貼り付け。口縁部は波状に整形。	内面　型押しによって草花文施文。内外面とも彩色は全て剥落。	色調　浅黄橙色。
1859	38区　包含層中	土製品	丁銀形？	型作り成形。	上面　型押しにより「寶」の字と弁才天？・大黒天？を施文。彩色は全て剥落。	色調　にぶい橙色。
1860	38区　包含層中	瓦	軒丸瓦	燻し瓦。唐草文軒平瓦。	外面　ナデ調整。	近世。
1861	38区　包含層中	瓦	桟瓦	桟瓦。	外面　ナデ調整。色調　にぶい橙色。	刻印あり。
1862	38区　包含層中	瓦	軒丸瓦	燻し瓦。巴文軒丸瓦。巴の尾は長い。珠文数16	外面　ナデ調整。	近世。
1863	38区　包含層中	瓦	井戸瓦	燻し瓦。やや内彎。	内面　ナデ調整。外面　ジグザグ文施文。	色調　暗灰色。井戸用瓦。
1864	39区　SK01	土師器	焙烙	丸底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部はほぼ直立。口縁端部は斜め方向に端面をもつ。	内面の体部～底部　ナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部外面に格子目状叩きが残る。	外面　煤多量に附着。色調　にぶい橙色。羽釜形タイプ：播磨型Ⅲ類。16ｃ末～17ｃ前葉。
1865	39区　SK01	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚。口縁端部は上方につまみ上げる。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹部をもつ。	色調　灰色。東播系須恵器鉢。C2類。13ｃ後半。
1866	39区　SK01	無釉陶器	擂鉢	口縁部はほぼ水平方向に切る。	口縁部上面　灰被り。体部内面に４条１単位の擂目施文。	備前焼擂鉢ⅢC類。14c後半～15c初頭。
1867	39区　SK01	無釉陶器	甕	頸部は非常に短い。口縁部は楕円形状に肥厚。	外面の口縁部～体部　自然釉（灰釉附着）	備前焼甕Ⅳ類。15c前半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1868	39区　SK01	無釉陶器	甕	頸部は非常に短い。口縁部は楕円形状に肥厚。	体部外面　板ナデ調整。体部外面　灰被り　胡麻状。	備前焼甕Ⅳ類。15c前半。
1869	39区　SK07	施釉陶器	蓋	体部は僅かに内彎。口縁部は外方に水平に折り曲げ。	体部外面　飛びガンナ施文。環状に２条鉄釉施釉。更に白泥と緑釉のイッチン掛けで菊花文施文。	明石・舞子産？。19ｃ前半以降。
1870	39区　SK07	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部は僅かに内彎。口縁部　外反。	釉調　青味を帯びる。文様　外面界線１条　草花文（ヨウラクか？）界線１条　　内面界線２条　２条底部内面　草花文施文。	産地不明。19Ｃ前半以降の端反り碗。
1871	39区　SK07	石製品	砥石	側面　使用により摩滅。欠損。	両面とも擦痕が認められる。	色調　浅黄橙色。
1872	39区　SK11	土師器	皿	体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部外面　強い横ナデ調整。体部外面は未調整。	色調　にぶい黄橙色。轆轤未使用。ⅣC1類。15c前半。
1873	39区　SK11	土師器	皿	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　指頭圧痕。	内面～口縁部外面　薄く煤附着－灯明皿として使用。色調　褐灰色。轆轤未使用。ⅢB1類。15c前半。
1874	39区　SK11	土師器	鍋	体部は内彎。口縁部若干内傾。口縁端部は丸味をもつ。口縁部外面に断面三角形状の短い鍔をもつ。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　斜め方向の平行叩き目。	外面　煤附着。色調　にぶい橙色。羽釜形タイプ：播磨型B系列ＩＡ類。15ｃ前半。
1875	39区　SK11	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は斜め方向に切り、若干肥厚する。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	色調　暗灰色。東播系　魚住窯　赤根川支群の製品。Ｂ3類。14ｃ代。
1876	39区　SK11	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は斜め方向に切り、縁帯状に拡張。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。口縁内面に凹部をもつ。	口縁部外面に重ね焼き痕。色調　暗青灰色。東播系　魚住窯　赤根川支群の製品。Ｃ3類。14ｃ代。
1877	39区　SK11	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は斜め方向に切り、縁帯状に拡張。	口縁部内面　強い横ナデにより凹部をもつ。口縁部外面に重ね焼痕。	色調　暗灰色。東播系　魚住窯　赤根川支群の製品。Ｅ2類。14ｃ後半。
1878	39区　SK11	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は斜め方向に切り、縁帯状に拡張。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。外面　灰被り　黒色に変色。	色調　黒灰色。東播系須恵器鉢。Ｂ2類。13ｃ前半。
1879	39区　SK11	無釉陶器	甕	頸部は直立。口縁端部は上下に拡張。いわゆる「Ｎ」字状口縁に成形。	外面　灰被り	常滑焼6b型式。13ｃ後半。
1880	39区　SK11	須恵器	筒形容器	平底　体部直立。口縁部丸味をもつ。	底部外面　未調整。指頭圧痕が残る。体部外面粘土紐の継ぎ目明瞭。	器種不明。全体的に成形技法は粗雑。
1881	39区　SK11	土製品	人形	両手で勿をもつ貴人像。顔は磨耗して不鮮明。	両型作り。中央部に貼り合わせ痕あり。彩色は全て剥落。	天神像。
1882	39区　SK14	染付磁器	碗	底部の器壁は厚い。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　割筆で二重網目文施文・界線１・２条。内面　１重網目文・菊花文。	肥前系。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1883	39区　包含層（撹乱層）中	土師器	壷	丸底。体部は大きく内彎、球形を呈する。口縁部は外方にひらく。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内外面　指ナデ調整。体部外面　指頭圧痕。	色調　明赤褐色。小型丸底壷。古墳時代。
1884	39区　包含層（撹乱層）中	土師器	皿	平底。体部は短く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面未調整　糸切り痕。	口縁部に煤附着－灯明皿として使用。轆轤使用。色調　浅黄橙色。Ⅳ類。18c後半以降。
1885	39区　包含層（撹乱層）中	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。	口縁部に煤附着。色調　浅黄橙色。轆轤使用。Ⅳ類。18c後半以降。
1886	39区　包含層（撹乱層）中	土師器	皿	平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部内面　ナデ調整。底部外面　未調整　糸切り痕。内面～口縁部外面透明釉施釉。橙色に発色。体部外面以下　露胎。	口縁部に僅かに煤附着。轆轤使用。いわゆる柿釉の灯明皿。Ⅳ類。18c後半以降。
1887	39区　包含層（撹乱層）中	土師器	秉燭	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は僅かに外方につまみ出す。	底部内面中央に灯心立てを貼り付け。内外面ともナデ調整。底部外面に墨書。	色調　橙色。
1888	39区　包含層（撹乱層）中	土製品	秉燭	平底。底部と体部の界はほぼ直角に屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は水平の端面をもつ。口縁部に灯心を支える横桟を貼り付け。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調製。底部外面　ナデ調整。内面透明釉施釉。浅黄橙色に発色。外面　露胎。	いわゆる柿釉の灯明皿と同質のもの。19ｃ前半以降。
1889	39区　包含層（撹乱層）中	土師器	焙烙	型作り成形。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。体部内面に凹部をもつ。底部内外面ナデ調整。	外面に煤附着。色調　明赤褐色。焙烙形ⅣＢ類。18ｃ前半。
1890	39区　包含層（撹乱層）中	土師器	焙烙	型作り成形。平底。体部と底部の界は直角に屈曲。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	体部内外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。底部内外面　ナデ調整。	色調　にぶい橙色。焙烙形ⅣＤ類。19ｃ前半。
1891	39区　包含層（撹乱層）中	土師器	焼塩壺	平底。体部はほぼ直立。円筒形。	底部に粘土板を巻きつけて成形。内外面ともヨコナデ調整。板作り法。	色調　にぶい橙色。粗製。
1892	39区　包含層（撹乱層）中	須恵器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚、縁帯を形成する。	内面～体部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面強いヨコナデ調整。	色調　暗灰色。東播系須恵器鉢。Ｅ1類。14ｃ前半。
1893	39区　包含層（撹乱層）中	無釉陶器	甕	口縁部は僅かに上下に拡張。短い楕円形状を呈する。	内外面ともヨコナデ調整。	色調　にぶい赤褐色。備前焼甕ⅢＢ類。14c代。
1894	39区　包含層（撹乱層）中	無釉陶器	擂鉢	口縁部　上下に拡張。縁帯部を形成。	口縁部外面凹線２条。口縁部内面凹線１条。内面擂目　単位は不明。	堺or明石産擂鉢18c前半以降。
1895	39区　包含層（撹乱層）中	無釉陶器	擂鉢	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部は丸味をもつ。口縁部外面に凹線２条。口縁部内面に凹線１条。	内面　７条１単位の擂目施文。底部内面　11条１単位の擂目を放射状に施文。底部外面　ヘラ削り調整。	胎土中に砂粒を含む。堺・明石産。Ⅱ類。18ｃ後半～19ｃ前半。。
1896	39区　包含層（撹乱層）中	施釉陶器	碗	高台は「ハ」の字状に外側にひらく。体部は内彎して斜め上方に延びる。口縁部が外反。	内外面とも灰釉を全面施釉。明オリーブ灰色に発色。細かい貫入がはしる。高台脇以下露胎。	産地不明。京焼系か？。
1897	39区　包含層（撹乱層）中	施釉陶器	蓋	外面の中央部に段をもつ。摘みは低く小さい。下面に直立する受け部をもつ。	外面　白濁釉施釉。灰白色に発色。内面　露胎灰黄色。器面に細かい貫入。	産地不明。19ｃ前半以降か。
1898	39区　包含層（撹乱層）中	施釉陶器	秉燭	平底。体部は中空。内傾して斜め上方に延びる。皿部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。皿部内面に凸帯が１条巡る。凸帯に1箇所抉りを入れる。	口縁部内面～外面　全面に白濁釉施釉。灰黄色に発色。底部外面　露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
1899	39区　包含層（撹乱層）中	白磁	紅皿	型作り成形。高台は低く小さい。体部は僅かに内彎、斜め上方に延びる。口縁端部は水平に端面をもつ。体部外面　花弁状に縦線を入れる。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。外面の体部上半以下露胎。	肥前系。Ⅴ期。19ｃ前半。
1900	39区　包含層（撹乱層）中	青磁	皿	型作り成形。高台は幅が広く、低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部の四隅は輪花状に整形。	内面　型押しによって草花文施文。内外面とも青磁釉施釉。暗緑灰色に発色。高台畳付露胎。明赤褐色に発色。	三田青磁。角皿。19ｃ前半。
1901	39区　包含層（撹乱層）中	青磁	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く低い。	高台畳付まで青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。高台裏は露胎。	龍泉窯系青磁碗。14ｃ後半～15ｃ代。
1902	39区　包含層（撹乱層）中	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的細く高い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　淡い呉須で、コンニャク印判の菊花文・界線１・２条。内面　無文。	肥前系。くらわんか手。Ⅳ期。17ｃ後半～18ｃ。
1903	39区　包含層（撹乱層）中	染付磁器	碗	高台は細く高い。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。口縁端部は尖り気味。	色調　やや青味を帯びた灰白色。文様　外面　舟で釣りをする人物と浜の松原・界線１条。内面　界線　２条・１条。底部内面　松葉文。	肥前系。広東碗。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ前半。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
1904	39区　包含層（撹乱層）中	陶胎染付	皿	底部の器壁は比較的厚い。高台は幅が広く比較的厚い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。高台畳付の釉　丁寧に拭き取り。	色調　黄色味を帯びた灰白色。文様　内面　界線１条・草花文・界線１条。外面　簡略化された唐草文。	肥前系？。
1905	39区　包含層（撹乱層）中	染付磁器	皿	高台は細く低い。平底。体部と底部の界は直角に屈曲。体部は短く直立する。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　内面　扇文に草花文。外面　草花文　界線　１・１・２条。底部内面　界線１条・「大明年製」銘。	肥前系。Ⅴ期。18ｃ後半～19ｃ後半。
1906	39区　包含層（撹乱層）中	染付磁器	蓋	高台は比較的細く高い。体部は緩やかに斜め下方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　やや青味を帯びた白色。文様　外面　呉須　界線２条・剣頭文・界線２条・不明文。内面　呉須　界線１条・不明文・界線２・１条・巻物文。	瀬戸・美濃系。19ｃ前半以降。
1907	39区　包含層（撹乱層）中	染付青磁	蓋	摘みは比較的細く高い。体部は僅かに内彎して斜め下方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	文様　外面　青磁釉施釉　淡い緑灰色に発色。摘みは染付　口福文施文　内面　呉須　草花文・界線２条・コンニャク印判で五弁花文。	肥前系　18ｃ代。
1908	39区　包含層（撹乱層）中	施釉陶器	蓋	環状のつまみに割り高台風に４箇所抉りを入れる。体部は緩やかに斜め下方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも施釉。褐灰色に発色。外面は鉄釉と白泥で松葉に花文施文。口縁部の釉は掻き取り。	舞子・明石産。19ｃ前半以降。
1909	39区　包含層（撹乱層）中	染付磁器	花瓶	高台は幅が広く低い。体部は大きく内彎、頸部は直立し口縁部は外方にひらく。	色調　やや青味を帯びた灰白色。文様　外面　呉須　草花文施文。	肥前系。Ⅳ期。18ｃ代。
1910	39区　包含層（撹乱層）中	瓦	軒丸瓦	軒丸瓦。	内外面ともナデ調整。	色調　暗灰色。燻し瓦。
1911	39区　包含層（撹乱層）中	瓦	軒平瓦	唐草文軒丸瓦片。	内外面ともナデ調製。	色調　暗灰色。燻し瓦。
1912	39区　包含層（撹乱層）中	瓦	軒平瓦	唐草文軒丸瓦片。	内外面ともナデ調製。	色調　暗灰色。燻し瓦。
1913	39区　包含層（撹乱層）中	瓦	軒丸瓦	文字瓦。「久」の文字施文。	外面　縦方向のナデ調整。内面　横方向のナデ調整。	色調　暗青灰色。燻し瓦。
1914	39区　包含層（撹乱層）中	土製品	面子	型作り成形。断面長方形状。	上面に「S」字状文型押し施文。	色調　にぶい橙色。泥面子。
1915	39区　包含層（撹乱層）中	土製品	人形	型作り成形。両型作り。中央部に貼り合わせ痕あり。頭部・両手首欠損。中国服を着た人物像。	服装は中国服風。彩色は全て剥落。	色調　にぶい橙色。
1916	23区　重機掘削	土製品	面子	土師器片の縁辺を打ち欠いて円形に成形。	器面は摩滅が著しい。	色調　にぶい橙色。原体は土師器。

第９表　兵庫津遺跡（七宮地区）出土遺物観察表

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
2001	北トレンチ堀内（上層）	無釉陶器	土瓶	体部はほぼ直立。口縁部外面に把手の提環を貼り付け。体部外面に注口１箇所貼り付け。	体部外面を亀甲形に浮き出して施文。注口裏面に「都亭喜癇」銘スタンプ。	色調　黄灰色。産地不明。
2002	北トレンチ堀内（上層）	無釉陶器	風炉	体部は直立。口縁部は水平に端面をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面に「松□泉」の文字スタンプ。	色調　灰白色。煎茶用の風炉？。
2003	北トレンチ堀内（上層）	施釉陶器	徳利	平底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。体部外面をおさえて一部窪ませる。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面にロクロ目跡。内外面とも鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。	釉調はガラス質。丹波系。近代以降。
2004	北トレンチ堀内（上層）	施釉陶器	御神酒徳利	高台は幅が広く低い。体部は内彎。頸部は長く直立。	外面　藍色の釉を施釉。高台脇以下露胎。	産地不明。近代以降か？。
2005	北トレンチ堀内（上層）	施釉陶器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面　灰釉施釉。にぶい黄橙色に発色。口縁部外面以下露胎。底部内面　目跡３箇所。口縁部外面に煤附着。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2006	北トレンチ堀内（上層）	施釉陶器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。体部内面に凸帯１条。凸帯に1箇所抉りを入れる。	内面～口縁部外面　透明釉施釉。灰黄褐色に発色。口縁部外面以下露胎。口縁部外面に煤附着。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2007	北トレンチ堀内（上層）	施釉陶器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面　灰釉施釉。にぶい黄橙色に発色。口縁部外面以下露胎。口縁部外面に煤附着。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2008	北トレンチ堀内（上層）	施釉陶器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面　灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。口縁部外面以下露胎。底部内面　目跡２箇所	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2009	北トレンチ堀内（上層）	施釉陶器	灯明皿	器壁は全体に薄い。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面　透明釉施釉。灰白色に発色。口縁外面以下露胎。底部内面　目跡３箇所。	口縁部外面に煤附着。京・信楽系。19ｃ前半以降。
2010	北トレンチ堀内（上層）	土師器	燭台	底部は円盤状。脚部は円柱状で直立する。皿部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部端部は尖り気味。皿部内面に凸帯１条。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。皿部内面に透明釉施釉。赤褐色に発色。	いわゆる柿釉の燭台。19ｃ前半以降。
2011	北トレンチ堀内（上層）	施釉陶器	秉燭	底部は円盤状。脚部は直立。脚部は中空。皿部の内面に凸帯１条。凸帯に１箇所抉りを入れる。	口縁部内面～体部外面　透明釉施釉。黄色味を帯びた灰白色に発色。内面及び底部外面　露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2012	北トレンチ堀内（上層）	施釉陶器	秉燭	平底。脚部は直立。脚部は中空。皿部の内面に凸帯１条。	口縁部内面～体部外面　透明釉施釉。にぶい黄褐色に発色。内面及び底部外面　露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2013	北トレンチ堀内（上層）	白磁	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は細く高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	産地不明。
2014	北トレンチ堀内（上層）	白磁	杯	平底。高台は「ハ」の字状にひらく。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	産地不明。
2015	北トレンチ堀内（上層）	染付磁器	碗	高台は比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　草花文。内面　無文。	肥前系。
2016	北トレンチ堀内（上層）	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部と底部の界は大きく屈曲。体部は直立。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　松葉文か？。内面　無文。	肥前系。
2017	北トレンチ堀内（上層）	染付磁器	杯	平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。	色調　白色。文様　外面　界線１条　山水文。「□有　明月　長如　此」の詩文を銅版手で施文。底部外面　界線１条　山亦銘。	産地不明。近代以降か？。
2018	北トレンチ堀内（上層）	染付磁器	皿	底部の器壁は比較的厚い。高台は蛇ノ目凹形高台。体部は体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は玉縁状に肥厚。	色調　青味を帯びた灰白色。底部外面は中央部を残して蛇ノ目状釉ハギ。文様　外面　簡易な唐草文・界線2条。内面　界線１条　山水文。	肥前系。19ｃ前半以降。
2019	北トレンチ堀内（上層）	染付磁器	皿	平底。高台は低い。体部は外反気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	色調　白色。文様　内面　スタンプで鶴に海浜文を施文の後、呉須で着色。	肥前系。19ｃ代。
2020	北トレンチ堀内（上層）	染付磁器	御神酒徳利	高台は断面台形状で比較的低い。体部は外反して立ち上がり、上位で屈曲、体部上位は球形を呈する。頸部は短く直立し、口縁部は外方にひらく。全体の形状は梅瓶形。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　蛸唐草文。界線１・２条。	肥前系。18ｃ代。
2021	北トレンチ堀内（上層）	染付磁器	御神酒徳利	高台は比較的幅が広く高い。体部は外反して立ち上がり、上位で屈曲。体部上半は球形を呈する。頸部は短く直立する。全体の器形は梅瓶形。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　蛸唐草文。界線２条。高台畳付に砂附着。	肥前系。18ｃ代。
2022	北トレンチ堀内（上層）	土製品	螺髪か？	型作り成形。円錐状の形態。	表面はナデ調整。	色調　橙色。用途不明。螺髪の一部か？。
2023	北トレンチ堀内（上層）	色絵磁器	碗	高台は低く小さい。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。京焼風のプロポーション。	色調　白色。文様　外面　赤、緑、黄色で草花文施文。	産地不明。
2024	北トレンチ堀内（下層）	無釉陶器	壺	平底。体部は内彎してほぼ直上に延びる。口縁部は蓋受けのかえりをもつ。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面　ロクロ目跡。体部外面に鉄泥漿塗布。にぶい赤褐色に発色。内面　露胎。火襷あり。	備前焼　19ｃ代。
2025	北トレンチ堀内（下層）	無釉陶器	甕	体部は内彎。頸部は短く直立。口縁部は玉縁状に肥厚。	口縁部内外面　回転ナデ調整。体部内外面　板ナデ調整。体部外面に沈線施文。体部外面　鉄泥漿塗布。	備前焼。
2026	北トレンチ堀内（下層）	施釉陶器	徳利	頸部は直立。口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面　ロクロ目跡。内外面とも鉄釉施釉。暗赤褐色に発色。	釉調はガラス質。丹波系。近代以降。
2027	北トレンチ堀内（下層）	施釉陶器	灯明皿	平底。脚部は直立。脚部は中空。皿部の内面に凸帯１条。凸帯に１箇所抉りを入れる。	口縁部内面～体部外面　透明釉施釉。にぶい黄褐色に発色。内面及び底部外面　露胎。底部外面に煤附着。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2028	北トレンチ堀内（下層）	施釉陶器	秉燭	底部は円盤状。脚部は直立。脚部は中空。皿部の内面に凸帯１条。凸帯に１箇所抉りを入れる。	口縁部内面～体部外面　透明釉施釉。青色味を帯びた灰白色に発色。内面及び底部外面　露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2029	北トレンチ堀内（下層）	施釉陶器	秉燭	底部は円盤状。脚部は直立。脚部は中空。皿部の内面に凸帯１条。凸帯に１箇所抉りを入れる。	口縁部内面～体部外面　透明釉施釉。黄色味を帯びた灰白色に発色。内面及び底部外面　露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2030	北トレンチ堀内（下層）	白磁	杯	高台は断面三角形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	肥前系。18ｃ代。
2031	北トレンチ堀内（下層）	白磁	皿	平底。高台は低い。体部は外反気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	底部内面に幾何学文スタンプ。内外面とも透明釉施釉。白色に発色。	瀬戸・美濃系。19ｃ代。
2032	北トレンチ堀内（下層）	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く低い。体部は直線的に直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　菱形文・○に風景・人物文など・界線１条・蓮弁文・界線２条。内面　無文。	産地不明。
2033	北トレンチ堀内（下層）	染付磁器	蓋	つまみは比較的細く高い。体部は緩やかに斜め下方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　山水文。内面　雲形文・鳥襖文。	産地不明。
2034	北トレンチ堀内（下層）	染付磁器	御神酒徳利	高台は幅が広く低い。体部は内彎。頸部は長く直立。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　草花文。	肥前系　18ｃ代。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
2035	東地区　石垣裏込め整地層	施釉陶器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。底部内面に凸帯１条。凸帯に１箇所抉りを入れる。	内面～口縁部外面　灰釉施釉。灰白色に発色。口縁部外面以下露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2036	東地区　石垣裏込め整地層	施釉陶器	乗燭	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は内側に端面をもつ。低部に穿孔１箇所。灯芯を立てる突起は欠失。	内面～体部外面上半　鉄釉施釉。黒褐色に発色。体部外面下半以下露胎。	底部外面に「十三」？の文字墨書。焼成は軟質。瀬戸・美濃系。
2037	東地区　石垣裏込め整地層	染付磁器	蓋	つまみは比較的細く高い。体部緩やかに斜め下方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　界線2条・細かい草花文。つまみ上面　界線１条・「□□成化年製」銘。	肥前系　19ｃ前半。
2038	東地区　古石垣と新石垣の間の整地層	施釉陶器	蓋	体部は内彎。上面に棒状のつまみ貼り付け。	内外面とも灰釉施釉。暗灰黄色に発色。外面灰被り。	丹波系か？。
2039	東地区　古石垣と新石垣の間の整地層	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰色。文様　外面　雪輪に梅花文。界線１・２条。底部外面　不明文。内面　無文。	肥前系　くらわんか手　18ｃ後半。
2040	東地区　古石垣と新石垣の間の整地層	染付磁器	碗	高台は細く高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　岩に草花文。底部内面　不明文。	肥前系。広東碗　19ｃ前半。
2041	東地区　入江内焼土層	無釉陶器	植木鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方に水平に折り曲げ。口縁部上面　波状文を櫛描き。	内外面とも回転ナデ調整。	焼成堅緻。色調　にぶい褐色。丹波系か？。
2042	東地区　入江内焼土層	無釉陶器	植木鉢	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方に水平に折り曲げ。底部を1箇所抉る。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面　ロクロ目跡。体部・底部外面　灰被り。底部中央　穿孔１箇所。	焼成堅緻。色調　褐灰色。丹波系。
2043	東地区　入江内焼土層	無釉陶器	植木鉢	やや上げ底気味の平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方に水平に折り曲げ。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面　ロクロ目跡。体部外面　灰被り。底部外面に砂附着。底部中央　穿孔１箇所。	焼成堅緻。色調　灰褐色。丹波系。
2044	東地区　入江内焼土層	無釉陶器	植木鉢	平底。獣足状の短い脚を３箇所貼り付け。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方に水平に折り曲げ。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面に花弁は貼り付け、茎はヘラ描きの草花文を施文。体部外面一部灰被り。	焼成堅緻。色調　灰褐色。丹波系。
2045	東地区　入江内焼土層	無釉陶器	植木鉢	平底。脚は獣足で３箇所に貼り付け。底部と体部の界はほぼ直角に屈曲。口縁部は外方に水平に折り曲げ。口縁部上面は水平に端面をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。体部外面　花文貼り付け・凹線２条施文。口縁部外面　沈線２条。口縁部上面　波状文施文。底部外面　砂附着。	産地不明。近代以降か？。
2046	東地区　入江内焼土層	無釉陶器	瓶	底部の平面形状は六角形。体部は板状の粘土を張り合わせて成形。	外面にヘラ描きで菊花文施文。外面に鉄泥漿塗布。赤褐色に発色。	備前焼。
2047	東地区　入江内焼土層	施釉陶器	蓋	体部は円盤状で扁平。上面中央に扁平なつまみ貼り付け。	外面　回転ナデ調整。内面　ヘラ削り調整。外面　鉄釉施釉。暗赤褐色に発色。内面　露胎。	内面に煤附着。火消し壷の蓋か？。丹波系。
2048	東地区　入江内焼土層	施釉陶器	植木鉢	平底。底部に獣足状の短い脚を３箇所貼り付け。体部は僅かに内彎してほぼ直上に延びる。口縁部は外方に水平に折り曲げ。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面にヘラ描きで菊花文施文。口縁部内面～体部外面　鉄釉施釉。黒褐色に発色。内面及び底部外面露胎。底部中央に穿孔１箇所。	丹波系。19ｃ前半以降。
2049	東地区　入江内焼土層	施釉陶器	植木鉢	平底。台形状の低い脚を４箇所貼り付け。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方に水平に折り曲げ。口縁部外面に凹線１条。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内面～体部外面　透明釉施釉。黄色味を帯びた灰白色に発色。内面及び底部外面　露胎。底部中央に穿孔１箇所。	瀬戸・美濃系。19ｃ前半以降。
2050	東地区　入江内焼土層	青磁	植木鉢	平底。底部中央に穿孔１箇所。底部外面に獅子頭状の脚を３箇所貼り付け。体部は直線的にほぼ直上にのびる。口縁部は外方に水平に折り曲げ。	体部外面中央に2段にわたってトビガンナ状に施文。体部外面下半　浅い沈線６条。口縁部内面～体部外面　青磁釉施釉。にぶい黄緑色に発色。内面及び底部外面　露胎。	三田産か？。19ｃ前半以降。
2051	東地区　入江内焼土層	染付磁器	皿	器壁は比較的薄い。高台は細く高い。平底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　白色。　文様　外面　草花文・界線１条・不明文・界線２・１条。底部外面　「大清雍正年製」銘。内面　不明文・界線２条・不明文。	産地不明。清朝青花写し。19ｃ前半以降。
2052	東地区　入江内焼土層	染付磁器	皿	器壁は薄い。高台は細く低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　界線１条・唐草文・界線２条。底部外面　□文字文。内面　界線１条・界線２・２条・唐草文。	清朝青花か？。19ｃ前半以降。
2053	東地区　入江内最下層	施釉陶器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、、断面台形状の縁帯をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。体部外面　ヘラ削り調整。	色調　暗灰赤色。堺・明石産。18ｃ後半以降。
2054	東地区　入江内最下層	無釉陶器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、、断面台形状の縁帯をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。体部外面　ヘラ削り調整。	色調　暗灰赤色。堺・明石産。18ｃ後半以降。
2055	東地区　入江内最下層	陶胎染付	鉢	平底。高台は幅が広く低い。体部は緩やかに斜め上方に延び、下位で大きく屈曲。ほぼ直上に延びる。口縁部は斜め方向に端面をもつ。	外面　雨降り文施文の後、白濁釉施釉。白色に発色。体部下半以下　露胎。露胎部　にぶい赤褐色に発色。内面　松葉文施文の後、白濁釉施釉。口縁部上面　呉須施釉。	産地不明　近代以降？。
2056	東地区　入江内最下層	陶胎染付	鉢	底部と体部の界は大きく屈曲。体部はほぼ直立。口縁部は斜め方向に端面をもつ。口縁部は一部捻る。	外面　雨降り文施文の後、白濁釉施釉。白色に発色。体部下半以下　露胎。露胎部　にぶい赤褐色に発色。内面　松葉文施文の後、白濁釉施釉。口縁部上面　呉須施釉。	産地不明　近代以降？。
2057	東地区　入江内最下層	陶胎染付	鉢	高台は幅が広く低い。体部と底部の界は大きく屈曲。体部はほぼ直立。口縁部上面は水平に端面をもつ。	ロクロ成形の後、型押しにより口縁部～体部を隅を歪めた方形に成形。文様　外面　呉須で菖蒲文施文。外面　呉須で菖蒲文施文。口縁部に呉須施釉の後、内面～体部外面下半　白濁釉施釉。体部外面下半以下露胎。	産地不明。底部外面に「うえの恒吉」銘。
2058	東地区　入江内最下層	施釉陶器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。底部内面に凸帯１条。凸帯に１箇所抉りを入れる。	内面～口縁部外面　透明釉施釉。にぶい黄橙色に発色。口縁部外面以下露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2059	東地区　入江内最下層	施釉陶器	鍋	丸底。底部と体部の界は大きく屈曲。体部はほぼ直立する。口縁部は水平に外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面上半　透明釉施釉。淡黄色に発色。体部外面下半以下露胎。露胎部に煤附着。施釉部に細かい貫入。	京焼系。舞子・明石産。19ｃ前半以降。
2060	東地区　入江内最下層	染付磁器	皿	平底。高台は幅が広く低い。体部は緩やかに斜め上方に延び、下位で大きく屈曲。ほぼ直上に延びる。口縁部は斜め方向に端面をもつ。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　界線１条・唐草文・界線２条。□文字文。内面　界線１条・界線２・２条・唐草文。	清朝青花か？。19ｃ前半以降。
2061	東地区　包含層（撹乱層）	染付磁器	杯	高台は幅が広く比較的低い。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　簡略化した草花文。内面　無文。	肥前系　18ｃ代。
2062	西地区　入江内盛土	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、断面三角形状の縁帯を形成する。口縁部外面に凹線２条。口縁部内面　沈線１条。片口をもつ。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面　横方向の板ナデ調整。体部内面　11条１単位の擂目施文。	焼成堅緻。色調　にぶい赤褐色。堺・明石産　18ｃ後半以降。
2063	西地区　入江内盛土	施釉陶器	椀	高台は細く、比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　灰釉施釉。淡い灰オリーブ色に発色。器面に粗い貫入。外面の高台脇以下露胎。露胎部　灰白色に発色。	産地不明　19ｃ前半以降。
2064	西地区　入江内盛土	施釉陶器	杯	底部の器壁は非常に厚い。高台は細く低く、「ハ」の字状に外方にひらく。	内面～口縁部外面　施釉。灰色に発色。体部外面以下露胎。	産地不明。
2065	西地区　入江内盛土	施釉陶器	蓋	落とし蓋。平底。体部は直立。口縁部は外方に水平に折り曲げる。底部中央に松ぼっくり形のつまみを貼り付ける。	外面に白濁釉を線状に施釉。釉色は明青灰色。露胎部は灰黄色に発色。	産地不明。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
2066	西地区　入江内盛土	施釉陶器	蓋	落し蓋。平底。体部は直立。口縁部は外方に水平に折り曲げる。扁平な長方形のつまみを貼り付け。	外面　灰釉施釉（明オリーブ灰色に発色）の後、白濁釉施釉。	産地不明。
2067	西地区　入江内盛土	施釉陶器	蓋	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方に水平に折り曲げ。外面中央に球形のつまみ貼り付け。	外面　灰釉施釉（灰オリーブ色に発色）の後、白濁釉施釉。	産地不明。
2068	西地区　入江内盛土	施釉陶器	蓋	体部は円盤状。つまみは形骸化。	外面　施釉。灰黄褐色に発色。器面に細かい貫入。内面　露胎。	産地不明。
2069	西地区　入江内盛土	施釉陶器	花瓶	頸部は直立。口縁部は大きく外方にひらく。口縁部は上方に摘み上げる。口縁端部は丸味をもつ。頸部外面に耳2箇所貼り付け。	内外面とも全面に厚く鉄釉施釉。暗赤褐色に発色。	丹波系か。19ｃ前半以降？。
2070	西地区　入江内盛土	施釉陶器	徳利	平底。体部はやや内彎気味にほぼ直上に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面下半　板ナデ調整。体部内面　ロクロ目跡。内外面とも鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。体部外面　白泥をイッチン掛けで、○「□呑」の文字施文。底部外面　砂目跡３箇所。	丹波系。いわゆる貧乏徳利。19ｃ前半以降。
2071	西地区　入江内盛土	施釉陶器	徳利	平底。体部はほぼ直立。体部はおさえて窪ませる。頸部は直立。	内外面とも回転ナデ調整。内面　ロクロ目跡。外面　鉄釉施釉。暗赤褐色に発色。	丹波系。近代以降。
2072	西地区　入江内盛土	施釉陶器	鍋	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。体部は中位で屈曲、直線的にほぼ直上に延びる。口縁部は「L」字状に屈曲。口縁端部は尖る。口縁部外面に把手の貼り付け痕。	体部外面上半　トビガンナ施文。外面の口縁部～体部上半　鉄釉施釉　暗茶褐色に発色。体部内面　白濁釉施釉。灰白色に発色。口縁部内面、体部外面下半以下露胎。	行平鍋。京焼系。舞子・明石産。19ｃ前半以降。
2073	西地区　入江内盛土	施釉陶器	土瓶	体部は内彎。口縁部は短く直立。口縁部外面に把手の提げ環を2箇所貼り付け。	体部外面に2段に縦線で施文。口縁部内面～体部外面　透明釉施釉。浅黄橙色に発色。内面　露胎。	京焼系。舞子・明石産。19ｃ前半以降。
2074	西地区　入江内盛土	施釉陶器	花瓶	高台は断面台形状で比較的高い。体部は内彎気味に直上に延びる。頸部は直立、口縁部は大きく外方にひらく。口縁端部は上方につまみ上げる。体部外面に2箇所環状の耳貼り付け。	口縁部内面～底部外面　緑釉施釉。緑青色に発色。高台部内外面及び体部内面以下露胎。	産地不明。19ｃ前半以降か？。
2075	西地区　入江内盛土	施釉陶器	焜炉	平底。断面台形状の比較的高い脚部を貼り付ける。体部は直立。体部外面に楕円形状の透かしを入れる。体部外面に「弥」の字の刻印あり。	内外面とも回転ナデ調整。外面　施釉。明黄褐色に発色。内面及び底部外面　露胎。	姫路東山焼の弥七焜炉。19ｃ代。
2076	西地区　入江内盛土	施釉陶器	焜炉の蓋	体部は弧状に湾曲。体部外面に把手を貼り付け。×状のヘラ記号あり。	外面　透明釉施釉。橙色に発色。内面　露胎。	2075の焚口の蓋。
2077	西地区　入江内盛土	施釉陶器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面　灰釉施釉。灰黄色に発色。底部内面に目跡３箇所。口縁部外面以下露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2078	西地区　入江内盛土	施釉陶器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面　灰釉施釉。黄灰色に発色。器面に貫入。底部内面に目跡３箇所。口縁部外面以下露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2079	西地区　入江内盛土	施釉陶器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。底部内面に凸帯１条。凸帯に１箇所抉りを入れる。	内面～口縁部外面　透明釉施釉。明緑灰色に発色。口縁部外面以下露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2080	西地区　入江内盛土	土師器	燭台	底部は浅い皿状。脚部は円柱状で直立。皿部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。皿部内面に透明釉施釉。施釉部の釉は剥落。	口縁部内外面に煤附着。いわゆる柿釉の燭台？。19ｃ前半以降。
2081	西地区　入江内盛土	施釉陶器	乗燭	平底。脚部は外反気味に直上に延びる。脚部は中空。皿部は緩やかに斜め上方に延びる。皿部内面に凸帯1条。凸帯に１箇所抉りを入れる。	皿部内面～脚部外面　透明釉施釉。灰黄色に発色。内面及び底部外面露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2082	西地区　入江内盛土	施釉陶器	乗燭	平底。脚部は外反気味に直上に延びる。脚部は中空。皿部は緩やかに斜め上方に延びる。皿部内面に凸帯1条。凸帯に１箇所抉りを入れる。	皿部内面～脚部外面　透明釉施釉。灰白色に発色。内面及び底部外面露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2083	西地区　入江内盛土	施釉陶器	乗燭	平底。脚部は外反気味に直上に延びる。脚部は中空。皿部は緩やかに斜め上方に延びる。皿部内面に凸帯1条。凸帯に１箇所抉りを入れる。	皿部内面～脚部外面　透明釉施釉。浅黄色に発色。内面及び底部外面露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2084	西地区　入江内盛土	青磁	燭台	底部は高い脚をもつ皿状に成形。脚部には宝珠状の透かしを３箇所もつ。皿部は体部は緩やかに斜め上方に延び、口縁端部は丸味をもつ。台部は円柱状に直立。外面に凹線７条。	内外面とも青磁釉施釉。明オリーブ灰色に発色。台部外面に赤絵で「春凍　帰来　櫻然　看山酒共」の文字施文。皿部内面に赤絵で花弁文施文。	三田産か？。19ｃ前半以降。
2085	西地区　入江内盛土	染付磁器	碗	器壁は比較的薄い。高台は比較的細く高い。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　丸に井桁文・界線１・１条。内面　界線１条。	産地不明。近代以降か？。
2086	西地区　入江内盛土	染付磁器	碗	高台は細く、比較的高い。体部は直線的にほぼ直上に延びる。口縁部は僅かに外反。	色調　青味を帯びた白色。文様　内面　界線１条・山水文・界線１条。内面　界線２条・唐子文・界線２条・草花文・界線１条。底部外面界線１条・□字施文。	産地不明　幕末～明治？。
2087	西地区　入江内盛土	染付磁器	碗	高台は細く高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　線描きの鳳凰文・界線１・２条。内面　界線２条・雷文帯・界線２・１条・	肥前系？。19ｃ前半以降。
2088	西地区　入江内盛土	染付磁器	碗	高台は「ハ」の字状に外方にひらく。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　白色。文様　外面　界線１・２・１条。内面　界線１条。	産地不明。現代。
2089	西地区　入江内盛土	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。体部は僅かに内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　界線１条・よろけ文・界線２・２条。内面　無文。	産地不明。19ｃ前半以降。
2090	西地区　入江内盛土	染付磁器	碗	高台は細く高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　白色。文様　外面　銅版手で細かい松竹梅文。内面　細かい草花文。呉須の発色は濃い藍色。	産地不明。近代以降。
2091	西地区　入江内盛土	染付青磁	杯	高台は比較的高い。体部は直線的にほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	体部外面　青磁釉施釉。明緑灰色に発色。青磁釉施釉の後、緑、鉄、白濁釉で松葉文施文。内面及び高台裏　染付。界線２条・□字文施文。	クローム青磁。近代以降。
2092	西地区　入江内盛土	染付磁器	皿	器壁は厚い。高台は幅が広く低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	型作り成形で、口縁部・高台とも花弁状に成形。色調　白色。文様　内面　雷帯状文・花弁文。外面　無文。	産地不明。近代以降。
2093	西地区　入江内盛土	染付磁器	皿	平底。高台は低い。体部は内彎してほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた白色。文様　内面　龍文・口縁部に鉄釉施釉（口紅）。外面　雷文帯状文。	産地不明。近代以降。
2094	西地区　入江内盛土	染付磁器	御神酒徳利	高台は比較的高い。体部は外反して立ち上がり、上位で屈曲、体部上半は球形を呈する梅瓶形。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　蛸唐草文・界線１・２・１条。	肥前系　18ｃ代。
2095	西地区　入江内盛土	染付磁器	御神酒徳利	高台は比較的高い。体部は外反して立ち上がり、上位で屈曲、体部上半は球形を呈する梅瓶形。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　蛸唐草文・界線１・２・１条。	肥前系　18ｃ代。
2096	西地区　入江内盛土	瓦	軒丸瓦	巴文軒丸瓦。巴の尾は長い。珠文数　15。	内面　ナデ調整。	色調　暗灰色。燻し瓦。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
2097	西地区　入江内焼土層	瓦質土器	風炉	平底。底部に台形状の脚３箇所貼り付け。体部は直立。体部外面に長方形の焚口をもつ。体部外面上部に把手の貼り付け痕。	内外面ともナデ調整。	色調　黒褐色。煎茶用の風炉か？。
2098	西地区　入江内焼土層	施釉陶器	甕	体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部は水平方向に拡張、端部外面は垂直に端面をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。体部外面上半に沈線７条。内外面とも鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。	産地不明。19ｃ前半以降か？。
2099	西地区　入江内焼土層	無釉陶器	擂鉢	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部外面　凹線２条。	口縁部内面～体部外面　ヨコナデ調整。底部外面　板状工具痕。体部内面　密に擂目施文。内外面に鉄泥漿を薄く塗布。底部外面　露胎。砂附着。	焼成堅緻。胎土精良。産地不明。近代以降か？。
2100	西地区　入江内焼土層	施釉陶器	徳利	やや上げ底気味の平底。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。頸部は直立。口縁部は玉縁状に肥厚する。	外面　鉄釉施釉の後、白泥をイッチン掛けで「希六馬？」「明儀」の文字施文。外面は暗赤褐色に発色。体部外面に穿孔１箇所。内面露胎。底部外面に砂附着。	丹波系。いわゆる貧乏徳利。19ｃ前半以降。
2101	西地区　入江内焼土層	施釉陶器	御神酒徳利	高台は比較的幅が広く低い。体部は外反して立ち上がり、上位で屈曲、体部上半は球形を呈する梅形。頸部は短く直立。口縁部は玉縁状に肥厚。	外面　緑釉施釉。緑灰色に発色。高台脇以下露胎。	産地不明。近代以降か？。
2102	西地区　入江内焼土層	施釉陶器	御神酒徳利	高台は比較的高い。体部は内彎気味に延びる。頸部は直立。口縁部は僅かに外方にひらく。	外面　緑釉施釉。緑灰色に発色。高台脇以下露胎。	産地不明。近代以降か？。
2103	西地区　入江内焼土層	白磁	皿	平底。高台は細く低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外反。口縁端部は丸味をもつ。	型押し成形。内面　印花で文字文施文。内外面とも透明釉施釉。白色に発色。	瀬戸・美濃系。19ｃ前半以降。
2104	西地区　入江内焼土層	白磁	皿	平底。高台は細く低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外反。口縁端部は丸味をもつ。	型押し成形。内面　印花で文字文施文。内外面とも透明釉施釉。白色に発色。	瀬戸・美濃系。19ｃ前半以降。
2105	西地区　入江内焼土層	白磁	皿	平底。高台は細く低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外反。口縁端部は丸味をもつ。	型押し成形。内面　印花で文字文施文。内外面とも透明釉施釉。白色に発色。	瀬戸・美濃系。19ｃ前半以降。
2106	西地区　入江内焼土層	白磁	皿	高台は蛇ノ目凹形高台。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	ロクロ成形の後、型押しにより全体を菊花状に整形。内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた白色に発色。底部外面は中央部を残して蛇ノ目状に釉ハギ。	肥前系。19ｃ前半以降。
2107	西地区　入江内焼土層	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。口縁部は僅かに外反。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　草花文。界線３条。内面　繋文・界線１条。	産地不明。近代以降。
2108	西地区　入江内焼土層	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。僅かに「ハ」の字状にひらく。体部は僅かに内彎して斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　界線１条・線描きの草花文・界線１・２条。内面　界線２条・不明文・界線２・１条・不明文。	肥前系？。19ｃ前半以降。
2109	西地区　入江内焼土層	染付磁器	蓋	つまみは比較的細く高い。体部は内彎気味に斜め下方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　草花文。内面　繋文・界線２条。寿字文。	瀬戸・美濃系。19ｃ前半以降。
2110	西地区　入江内焼土層	染付磁器	合子蓋	上面は弧状に成形。体部は直立。かえり部は内傾する。	色調　青味を帯びた白色。かえり部は露胎。文様　外面　斜線文・鉄釉の界線１条・草花文・界線１条・草花文。	肥前系。
2111	西地区　入江内焼土層	染付磁器	油壷	平底。高台は比較的幅が広く低い。体部は大きく内彎。口縁部は外方にひらく。	色調　青味を帯びた白色。文様　蛸唐草文・草花文。	肥前系　18ｃ代。
2112	西地区　入江内焼土層	染付磁器	徳利	高台は幅が広く低い。体部は大きく内彎。頸部は長く直立。口縁部は玉縁状に肥厚する。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　界線２条・草花文・界線１条。	肥前系　18ｃ代。
2113	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。底部内面に凸帯１条。凸帯に１箇所抉りを入れる。	内面～口縁部外面　透明釉施釉。灰白色に発色。口縁部外面以下露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2114	西地区　入江内焼土層下	土師器	皿	平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。内面～口縁部外面　透明釉施釉。橙色に発色。口縁部外面以下露胎。	いわゆる柿釉の灯明皿。19ｃ前半以降。
2115	西地区　入江内焼土層下	土師器	蛸壺	平底。体部は僅かに内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部は外反。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面未調整。糸切り痕。体部外面　ロクロ目跡。墨書あり。	色調　浅黄橙色。
2116	西地区　入江内焼土層下	土師器	蛸壺	平底。体部と底部の界は直角に屈曲。体部は直線的にほぼ直上に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面下半　板ナデ調整。底部外面未調整。糸切り痕。体部外面に墨書。体部内外面　ロクロ目跡。	色調　浅黄橙色。
2117	西地区　入江内焼土層下	瓦質土器	羽釜	器壁は非常に薄い。体部～口縁部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。口縁部外面に凹線４条。（鋳造の鉄製羽釜を模倣）。体部外面に断面台形状の幅の広い鍔を貼り付け。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部外面　ミガキ調整。体部外面に印花で浮き彫りの記号施文。	色調　暗黒灰色。鋳造の鉄製羽釜を忠実に模倣。
2118	西地区　入江内焼土層下	瓦質土器	蓋	上面は水平。体部は直立。口縁端部は角の丸い断面方形に成形。	外面　板ナデ調整。内面　ヨコナデ調整。	色調　暗黒灰色。火消し壷の蓋か？。
2119	西地区　入江内焼土層下	無釉陶器	植木鉢	体部は直線的に直上に延びる。口縁部は外方に水平に折り曲げ。口縁端部は縄目状に整形。	内外面とも回転ナデ調整。	焼成堅緻。色調　暗茶褐色。丹波系。
2120	西地区　入江内焼土層下	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、断面三角形状の縁帯を形成する。口縁部外面に凹線２条。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。体部内面に９条１単位の擂目施文。	焼成堅緻。色調　暗褐色。堺・明石産　18ｃ後半以降。
2121	西地区　入江内焼土層下	無釉陶器	擂鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁部外面に凹線２条。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　８条１単位の擂目施文。	焼成堅緻。色調　暗赤褐色。堺・明石産。18ｃ後半以降。
2122	西地区　入江内焼土層下	無釉陶器	鉢	底部外面の外周を溝状に削って低い高台を削りだす。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁端部上面は水平に端面をもつ。口縁部外面　浅い凹線１条。	内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　板ナデ調整。底部外面　ナデ調整。	底部内面は使用により磨耗が著しい。色調　暗赤褐色。堺・明石産。18ｃ後半以降。
2123	西地区　入江内焼土層下	無釉陶器	鉢	平底。体部と底部の界は直角に屈曲。口縁端部は水平に端面をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面　未調整ヘラ起こし痕。	色調　暗赤褐色。備前焼か？。
2124	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	杯	高台は比較的幅が広く低い。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面　透明釉施釉。灰白色に発色。体部外面下半以下露胎。	産地不明。
2125	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	杯	底部の器壁は非常に厚い。高台は平底高台。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。内面～口縁部外面　灰釉施釉。浅黄色に発色。体部外面以下露胎。	産地不明。
2126	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	杯	平底。高台は細く比較的高い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面　白濁釉施釉。灰白色に発色。外面　緑釉施釉。緑色に発色。	産地不明。珉平焼風。近代以降。
2127	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	杯	高台は「ハ」の字状にひらく。体部は内彎してほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも施釉。黄褐色に発色。内外面とも灰被り。	産地不明。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
2128	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	椀	底部の器壁は厚い。高台は比較的細く、高い。体部は直線的に直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面　白濁釉施釉。外面　灰釉施釉。明黄褐色に発色。	産地不明。近代以降？。
2129	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	杯	高台は比較的細く高く、「ハ」の字状にひらく。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面　白化粧の後、透明釉施釉。乳白色に発色。外面　透明釉施釉。暗黄褐色に発色。外面　白泥をイッチン掛けで施文。	産地不明。近代以降か？。
2130	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	杯	高台は比較的高い。３箇所に抉りを入れる割り高台。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面　透明釉施釉　黄色味を帯びた乳白色。外面　透明釉を網目状に施釉。高台脇以下露胎。	産地不明。萩焼風。近代以降か？。
2131	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	杯	高台裏に兎巾を削り残す。高台は比較的幅が広く低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	文様　内面　白泥の象嵌で界線２条・よろけ文・界線２条・花弁文・界線２条・花弁文施文の後、灰黄褐色釉施釉。外面　灰黄褐色釉施釉の後、白泥釉をハケ塗り。	産地不明。肥前系陶器の三島唐津に類似。18ｃ代か？。
2132	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	鉢	平底。高台は幅が広く低い。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外方に水平方向に折り曲げる。口縁部　輪花状に整形。	内外面とも透明釉施釉。黄色味を帯びた白色に発色。高台畳付の釉掻き取り。	産地不明。焼成のあまい染付磁器の可能性あり。
2133	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	擂鉢	平底。高台は浅く削りだす。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部上面は水平に端面をもつ。口縁部外面・上面に凹線２条。	体部内面・底部内面に密に擂目施文。口縁部内面～体部外面　鉄釉施釉。黒褐色に発色。体部内面・底部外面　露胎。	丹波系。近代以降。
2134	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	鉢	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方に水平に折り曲げ。口縁端部は上方につまみ上げる。	体部内面　印花で草花文・幾何学文を施文の後、白泥で象嵌。灰釉を施釉するが、焼成不良のため、釉が剥落する。	色調　明赤褐色。肥前系　三島唐津。17ｃ後半～18ｃ前半。
2135	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	蓋	落し蓋。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方に水平にひらく。上面中央に亀形のつまみを貼り付け。	外面　灰釉施釉（明オリーブ灰色に発色）の後、白濁釉施釉。	産地不明。
2136	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	蓋	落とし蓋。平底。体部は直立。口縁部は外方に水平に折り曲げる。底部中央に小さいつまみを貼り付ける。	外面　灰釉施釉。オリーブ黄色に発色。内面　露胎。	産地不明。
2137	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	蓋	体部は円盤状に成形。内面を台形状に削り残す。つまみは欠失。	外面　灰釉施釉。淡緑灰色に発色。内面　露胎。	産地不明。
2138	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	蓋	つまみは比較的大きな球形を呈する。体部は僅かに内彎。かえりは直立。	外面　白濁釉施釉の後、鉄釉・緑釉で施文。内面　露胎。	舞子・明石産。19ｃ前半以降。
2139	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	蓋	つまみは比較的高い。体部は内彎気味に斜め下方に延びる。口縁部は外方に水平に折り曲げる。	外面　一部白濁釉を施釉。内面　灰釉施釉。明緑灰色に発色。	産地不明。
2140	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	蓋	つまみは比較的幅が広く低い。体部は緩やかに斜め下方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。体部外面に沈線４条。	内外面とも透明釉施釉。淡黄色に発色。器面に細かい貫入。	瀬戸・美濃系。19ｃ前半以降。
2141	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	鍋	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。体部下位で大きく屈曲。ほぼ直上に延びる。口縁部は水平に外方に折り曲げ。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面上半　透明釉施釉。淡黄色に発色。体部外面下半以下露胎。	京焼系。舞子・明石産。19ｃ前半以降。
2142	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	鍋	やや上げ底気味の平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。体部は中位で屈曲、直線的にほぼ直上に延びる。口縁部は「L」字状に屈曲。口縁端部は尖る。口縁部外面に把手の貼り付け痕。	体部外面上半　トビガンナ施文。外面の口縁部～体部上半　鉄釉施釉　暗茶褐色に発色。体部内面　灰釉施釉。にぶい黄橙色に発色。口縁部内面、体部外面下半以下露胎。露胎部に煤附着。	行平鍋。京焼系。舞子・明石産。19ｃ前半以降。
2143	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	土瓶	上げ底気味の平底。体部は直線的に斜め上方に立ち上がり、中位で「く」の字状に屈曲する。口縁部は短く直立。口縁部外面に提げ手を２箇所、体部外面に注口を１箇所貼り付ける。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面上半に沈線13条。口縁部外面～体部外面上半　灰釉施釉。暗オリーブ灰色に発色。内面および体部外面下半以下露胎。内面及び露胎部に煤附着。	産地不明。京焼系。舞子・明石産。19ｃ前半以降。
2144	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	土瓶	ややあげ底気味の平底。体部は大きく内彎する。口縁部は短く直立。口縁部上面は水平に端面をもつ。口縁部外面に２箇所提げ手をつける耳を貼り付ける。	体部外面上半　細かいトビガンナ施文。体部中央　縦方向の弧状施文。口縁部外面～体部外面上半　白濁釉施釉。淡灰黄色に発色。体部外面下半以下露胎。	京焼系陶器。舞子・明石産。19ｃ前半。
2145	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	徳利	やや上げ底気味の平底。体部は内彎してほぼ直上に延びる。	外面　鉄釉施釉の後、白泥をイッチン掛けで○に「北」の字を施文。外面は黒褐色に発色。内面及び底部外面　露胎。底部内面　ロクロ目跡。胎土中に砂粒を多く含む。	丹波系。いわゆる貧乏徳利。19ｃ前半以降。
2146	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	徳利	やや上げ底気味の平底。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。頸部は直立。口縁部は玉縁状に肥厚する。	外面　鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。内面及び底部外面　露胎。器面はガラス質の光沢をもつ。	丹波系。近代以降か？。
2147	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	御神酒徳利	高台は比較的幅が広く低い。体部は外反して立ち上がり、上位で屈曲、体部上半は球形を呈する梅形。頸部は短く直立。口縁部は玉縁状に肥厚。	外面　緑釉施釉。緑灰色に発色。高台脇以下露胎。	産地不明。近代以降か？。
2148	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	御神酒徳利	高台は比較的幅が広く低い。体部は外反して立ち上がり、上位で屈曲、体部上半は球形を呈する梅形。頸部は短く直立。口縁部は玉縁状に肥厚。	外面　緑釉施釉。緑灰色に発色。高台脇以下露胎。	産地不明。近代以降か？。
2149	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	尿瓶	ややあげ底気味の平底。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。体部上面の端に短く直立する口縁部を貼り付ける。口縁端部は丸味をもつ。	体部内外面　回転ナデ調整。底部外面　回転ヘラ切りの後、ナデ調整。口縁部内面～体部外面鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。底部外面は露胎。	瀬戸・美濃系。19ｃ前半。
2150	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面　灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。底部内面　目跡３箇所。口縁部外面以下露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2151	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面　灰釉施釉。浅黄色に発色。底部内面に目跡３箇所。口縁部外面以下露胎。	口縁部に煤附着。京・信楽系。19ｃ前半以降。
2152	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面　透明釉施釉。灰白色に発色。口縁部外面以下露胎。	焼成はやや軟質。瀬戸・美濃系。19ｃ前半以降。
2153	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面　透明釉施釉。浅黄色に発色。口縁部外面以下露胎。	焼成はやや軟質。瀬戸・美濃系。19ｃ前半以降。
2154	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	灯明皿	やや上げ底気味の平底。体部は内彎気味に緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面　透明釉施釉。灰黄色に発色。底部内面に目跡１箇所。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2155	西地区　入江内焼土層下	土師器	皿	平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。内面～口縁部外面　透明釉施釉。橙色に発色。口縁部外面以下露胎。	いわゆる柿釉の灯明皿。19ｃ前半以降。
2156	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。底部内面に凸帯１条。凸帯に１箇所抉りを入れる。	内面～口縁部外面　透明釉施釉。灰白色に発色。口縁部外面以下露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
2157	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。底部内面に凸帯１条。凸帯に１箇所抉りを入れる。	内面～口縁部外面　透明釉施釉。浅黄色に発色。口縁部外面以下露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2158	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。底部内面に凸帯１条。凸帯に１箇所抉りを入れる。	内面～口縁部外面　透明釉施釉。灰オリーブ色に発色。口縁部外面以下露胎。	口縁部に煤附着。京・信楽系。19ｃ前半以降。
2159	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	燭台	平底。底部は若干削る。皿状の台に円柱状の脚部を付ける。皿部は比較的器壁が厚く、緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面　灰釉？施釉。全面に灰被り。白色に変色。底部外面　露胎。	産地不明。19ｃ前半。
2160	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	乗燭	平底。脚部は外反気味に直上に延びる。脚部は中空。皿部は緩やかに斜め上方に延びる。皿部内面に凸帯1条。凸帯に１箇所抉りを入れる。	皿部内面～脚部外面　透明釉施釉。灰色に発色。内面及び底部外面露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2161	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	乗燭	平底。脚部は外反気味に直上に延びる。脚部は中空。皿部は緩やかに斜め上方に延びる。皿部内面に凸帯1条。凸帯に１箇所抉りを入れる。	皿部内面～脚部外面　透明釉施釉。灰白色に発色。内面及び底部外面露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2162	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	乗燭	平底。脚部は外反気味に直上に延びる。脚部は中空。皿部は緩やかに斜め上方に延びる。皿部内面に凸帯1条。凸帯に１箇所抉りを入れる。	皿部内面～脚部外面　透明釉施釉。灰黄色に発色。内面及び底部外面露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2163	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	乗燭	平底。脚部は外反気味に直上に延びる。脚部は中空。皿部は緩やかに斜め上方に延びる。皿部内面に凸帯1条。凸帯に１箇所抉りを入れる。	皿部内面～脚部外面　透明釉施釉。淡緑灰色に発色。内面及び底部外面露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2164	西地区　入江内焼土層下	白磁	碗	高台は細く高い。体部は直線的に直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。白色に発色。	底部内面に焼継痕あり。産地不明。近代以降か？。
2165	西地区　入江内焼土層下	白磁	皿	底部の器壁は比較的厚い。高台は幅が広く低い。底部と体部の界は大きく屈曲。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	型押しにより口縁部を輪花状に整形。底部内面に龍文を印花で施文。内外面とも透明釉施釉。白色に発色。	肥前系。19ｃ前半以降。
2166	西地区　入江内焼土層下	青磁	角鉢	平底。高台は断面三角形状で幅が広く、比較的低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方に水平に折り曲げる。	型作り成形。底部内面に魚文を型押し施文。魚文部は呉須を施釉。藍色に発色。内外面とも青磁釉施釉。暗緑色に発色。	三田青磁。19ｃ前半。
2167	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	碗	器壁は比較的薄い。高台は細く低い。体部は内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　「日之□紅□庫通ノ上」の文字施文。内面　無文。	京焼風のプロポーション。肥前系。18ｃ代。
2168	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	杯	高台は細く高い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　草花文施文。	産地不明　近代以降か？。
2169	西地区　入江内焼土層下	色絵磁器	碗	高台は比較的細く低い。体部は内彎してほぼ直上に延びる。口縁端部は細く尖る。	色調　白色。文様　外面　円内に緑・赤・桃色・黄色の顔料で草花文施文。内面　赤絵で界線２条・草花文施文。	京焼風のプロポーション。産地不明。
2170	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	碗	底部の器壁は厚い。高台は比較的幅が広く低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　源氏香・草花文。底部内面　草花文？。	肥前系。19ｃ前半以降。
2171	西地区　入江内焼土層下	色絵磁器	碗	器壁は薄い。高台は比較的細く高い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反気味。	色調　白色。文様　外面　赤・緑・茶・金の顔料で界線１条・草花文・鋼文・界線１・２条施文。内面　無文。	産地不明。
2172	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	碗	高台は比較的細く高い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　白色。文様　外面　花弁文を釉層を厚く施文。文様が浮き出た感じ。内面は見込み以外は無文。口縁部に鉄釉施釉（口紅）。	産地不明。近代以降か？。
2173	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	蕎麦猪口	平底。高台は細く低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　竹・松文。内面　無文。	肥前系。
2174	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	蕎麦猪口	底部の器壁は比較的厚い。高台は比較的高い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。	色調　白色。呉須は発色の濃いいわゆるベロ藍。文様　外面　界線１条・草花文・界線２条。内面　無文。	産地不明。近代以降。
2175	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	杯	高台は比較的細く高い。底部の器壁は非常に厚い。底部と体部の界は直角に屈曲。体部は直線的に直上に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　半截菊花文・菱形文・唐草文・界線。内面　斜格子文・界線１条。全体に灰被り。	肥前系　19ｃ前半。
2176	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	蕎麦猪口	平底。高台は細く低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　草花文・界線２条。内面　無文。	肥前系。
2177	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	皿	底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	ロクロ成形の後、型押しで口縁部・体部を波状に整形。色調　青味を帯びた白色。文様　内面　草花文・口縁部に呉須施釉。外面　無文。	産地不明　19ｃ前半以降か？。
2178	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	皿	高台は蛇ノ目凹形高台。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	ロクロ成形の後、型押しにより、口縁部・体部を波状に成形。色調　青味を帯びた白色。文様　内面　山水文・口縁部に鉄釉施釉（口紅）。外面　無文。底部外面　中央部を残して蛇ノ目状に釉ハギ。	肥前系　19ｃ前半以降。
2179	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	皿	高台は蛇ノ目凹形高台。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部上面は水平に端面をもつ。	ロクロ成形の後、型押しにより、口縁部・体部を波状に成形。色調　青味を帯びた白色。文様　内面　島嶼文・界線１条・松竹梅文。口縁部に鉄釉施釉（口紅）。外面　無文。底部外面　中央部を残して蛇ノ目状に釉ハギ。	肥前系。19ｃ前半以降。
2180	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	鉢	高台は蛇ノ目凹形高台。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部上面は水平に端面をもつ。	ロクロ成形の後、型押しにより、口縁部・体部を波状に成形。色調　青味を帯びた灰白色。文様　内面　海浜文・口縁部に鉄釉施釉（口紅）。外面　無文。底部外面　中央部を残して蛇ノ目状に釉ハギ。	肥前系。19ｃ前半以降。
2181	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	皿	高台は蛇ノ目凹型高台。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	ロクロ成形の後、型押しにより口縁部・体部を波状に成形。色調　青味を帯びた白色。文様　内面　海浜文・口縁部に鉄釉施釉（口紅）。底部外面は中央部を残して蛇ノ目状釉ハギ。	肥前系。19ｃ前半以降。
2182	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	鉢	器壁は全体に比較的厚い。平底。高台は比較的高い。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部は外反。口縁端部は斜め方向に端面をもつ。	色調　やや青味を帯びた白色。文様　外面　草花文他・界線１・２条。内面　草花文・界線２条・草花文。	産地不明。19ｃ前半以降か？。
2183	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	鉢	平底。高台は比較的細く高い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部は型押しにより波状に整形。	色調　やや青味を帯びた灰白色。文様　外面　草花文・界線２条・芙蓉手風文・縦線・界線１条。内面　草花文・底部内面　竹文。呉須の発色は滲む。	瀬戸・美濃系。19ｃ前半以降。
2184	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	鉢	平底。高台は比較的幅が細く高い。高台は蛇ノ目凹形高台。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は水平方向に大きくひらく。	色調　やや青味を帯びた白色。文様　外面　山水文・凸凹文。内面　幾何学文・丸文に草花文。高台裏の釉　中央部を残して蛇ノ目状に掻き取り。	肥前系か？。19ｃ前半以降。
2185	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	御神酒徳利	高台は比較的幅が広く低い。体部は大きく内彎。頸部は直立。口縁部は僅かに内彎。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　草花文。	高台畳付に砂附着。肥前系　18ｃ代。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
2186	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	御神酒徳利	高台は底部を浅く削る内反り高台。体部は大きく内彎。頸部は直立。口縁部は丸味をもつ。	色調　白色。文様　外面　草花文。	産地不明。近代以降か？。
2187	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	御神酒徳利	高台は比較的幅が広く低い。体部は大きく内彎。頸部は直立。口縁部は僅かに内彎。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　草花文。	肥前系　18ｃ代。
2188	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	瓶	高台は断面台形状で比較的高い。体部は大きく内彎、ほぼ直上に延びる。頸部～口縁部は直立。	色調　やや青味を帯びた白色。文様　外面　縦線・松竹梅文・界線２条・縦線（蓮弁文のくずれか）。	肥前系。
2189	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	蓋	つまみは比較的細く高い。体部緩やかに斜め下方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　明黄褐色。文様　外面　線描きの草花文。内面　界線２条・雷文帯・界線２・１条・草花文。	肥前系。19ｃ前半。
2190	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	蓋	つまみは比較的細く高い。体部緩やかに斜め下方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　白色。文様　外面　龍文。内面　不明文。	産地不明。近代以降。
2191	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	蓋	つまみは細く高い。体部は内彎気味に斜め下方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　白色。文様　外面　龍文。内面　龍文。文様は写実的。	産地不明。近代～現代。
2192	西地区　入江内焼土層下	染付磁器	蓋	つまみは細く高い。体部は内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　白色　文様　外面　草花文。内面　無文。酸化コバルト使用。銅版手。	産地不明。近代以降。
2193	西地区　入江内焼土層下	ｶﾞﾗｽ製品	酒杯	底部は円盤状でやや上げ底。脚部は直立。	手吹きガラスか？。	酒杯の脚部か？。
2194	西地区　入江内焼土層下	施釉陶器	ﾐﾆﾁｭｱ壺	平底。体部は内彎。	外面　体部外面下半まで施釉。茶褐色に発色。体部外面下半以下露胎。	底部外面　糸切り痕。ミニチュア壺。
2195	西地区　入江内焼土層下	土製品	ﾐﾆﾁｭｱ土瓶	型作り成形。器壁は非常に薄い。やや上げ底気味の平底。体部は内彎。口縁部は短く直立。口縁端部は尖り気味。口縁部は波状に成形。口縁部外面に注口貼り付け。体部外面中央　穿孔１箇所。	体部外面　型押しで草花文？・魚々子文施文。底部外面　布目痕。彩色は全て剥落。	色調　灰黄色。鋳物の土瓶を忠実に模倣したミニチュアの土瓶。
2196	西地区　入江内焼土層下	白磁	ﾐﾆﾁｭｱ紅皿	型作り成形。器壁は比較的厚い。	体部外面　放射状に縦線を施文。内面～口縁部外面　透明釉施釉。白色に発色。口縁部外面以下露胎。	肥前系　白磁の紅皿のミニチュア。
2197	西地区　入江内焼土層下	土製品	器物形	型作り成形。器形は弧状に反る。上面に縦線を施文（橋の床板を表現か？）。上面に左右対称に突起を貼り付け（橋の欄干を表現か？）。	内外面とも指ナデ調整。彩色は全て剥落。	ミニチュアの橋形。
2198	西地区　入江内焼土層下	瓦	軒平瓦	唐草文軒平瓦。	外面ナデ調整。瓦当の接合部はヨコナデ調整。	色調　暗黒灰色。燻し瓦。
2199	西地区　入江内焼土層下	石製品	硯	全体に摩滅が著しい。	海部は使用のため平滑。外面に擦痕が目立つ。	色調　灰白色。
2200	西地区　入江内（東方）　整地層	施釉陶器	灯明皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～口縁部外面　透明釉施釉。灰白色に発色。口縁部外面以下露胎。	焼成はやや軟質。瀬戸・美濃系か？。19ｃ前半以降。
2201	西地区　入江内（東方）　整地層	白磁	皿	高台は細く低い。体部は外反気味に斜め上方に延びる。口縁部は大きく外方にひらく。	底部内面　印花で幾何学文施文。内外面とも透明釉施釉。白色に発色。	瀬戸・美濃系。19ｃ前半以降。
2202	西地区　入江内（東方）　整地層	青磁	碗	高台は幅が広く比較的低い。	内外面とも青磁釉施釉。青緑色に発色。底部外面に焼継銘あり。	三田青磁。19ｃ前半。
2203	西地区　入江内（東方）　整地層	染付青磁	蓋	高台は細く高い。体部は緩やかに斜め下方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　青磁釉施釉。明緑灰色に発色。外面に白濁釉で施文。高台裏、内面　染付。水鳥文施文。	クローム青磁。近代以降。
2204	西地区　入江内（東方）　整地層	染付磁器	碗	高台は比較的細い。体部は僅かに内彎してほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　内面　界線２条・界線１条・斜め格子文？。外面　横線７条・幾何学文・界線１・１・１条。	産地不明　19ｃ前半以降。
2205	西地区　入江内最下層	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。内面～口縁部外面　透明釉施釉。橙色に発色。口縁部外面以下露胎。	口縁部に煤附着。いわゆる柿釉の灯明皿。19ｃ前半以降。
2206	西地区　入江内最下層	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。内面～口縁部外面　透明釉施釉。橙色に発色。口縁部外面以下露胎。	いわゆる柿釉の灯明皿。19ｃ前半以降。
2207	西地区　入江内最下層	土師器	皿	平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。内面～口縁部外面　透明釉施釉。橙色に発色。口縁部外面以下露胎。	いわゆる柿釉の灯明皿。19ｃ前半以降。
2208	西地区　入江内最下層	土師器	皿	器壁は全体に厚い。平底。体部は短く、斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。体部外面下半　横方向にのヘラ削り痕。底部外面　未調整。糸切り痕。	色調　にぶい黄橙色。回転台使用。
2209	西地区　入江内最下層	土師器	皿	比較的器壁は薄い。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面～体部外面　回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。底部外面　未調整。糸切り痕。	口縁部に薄く煤附着。色調　黄橙色。回転台使用。
2210	西地区　入江内最下層	土師器	燭台	底部は円盤状。脚部は円柱状で直立する。皿部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部端部は丸味をもつ。皿部内面に凸帯１条。	内面～体部外面　回転ナデ調整。底部側面　ヘラ削り調整。底部外面　未調整。糸切り痕。皿部内面　透明釉施釉。明褐色に発色。	いわゆる柿釉の燭台。19ｃ前半以降。
2211	西地区　入江内最下層	土師器	燭台	底部は円盤状。脚部は円柱状で直立する。皿部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部端部は丸味をもつ。皿部内面に凸帯１条。	内面～体部外面　回転ナデ調整。底部側面　ヘラ削り調整。底部外面　未調整。糸切り痕。皿部内面　透明釉施釉。橙色に発色。	いわゆる柿釉の燭台。19ｃ前半以降。
2212	西地区　入江内最下層	土師器	燭台	底部は円盤状。脚部は円柱状で直立する。皿部は緩やかに斜め上方に延びる。皿部内面に凸帯１条。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面未調整。糸切り痕。皿部内面に透明釉施釉。橙色に発色。	いわゆる柿釉の燭台。19ｃ前半以降。
2213	西地区　入江内最下層	土師器	乗燭	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は水平に端面をもつ。口縁部上面に灯芯を立てる横棒を貼り付け。横棒中央部に穿孔１箇所。	内外面ともヨコナデ調整。	土師器の小型の乗燭。
2214	西地区　入江内最下層	施釉陶器	椀	高台は比較的細い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外反。口縁端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた灰白色に発色。外面の高台脇以下露胎。	産地不明。京焼風のプロポーション。
2215	西地区　入江内最下層	施釉陶器	ﾐﾆﾁｭｱ鉢	平底。体部は内彎気味に直上に延びる。口縁端部は尖り気味。口縁部外面に把手を２箇所貼り付け。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面未調整。糸切り痕。内面～体部外面上半　鉄釉施釉。茶褐色に発色。体部外面下半以下露胎。	鉢のミニチュア。
2216	西地区　入江内最下層	施釉陶器	蓋	平底。体部は短く直立。口縁部は外方に水平に折り曲げ。外面中央に棒状のつまみ貼り付け。	外面　灰釉施釉。内面　露胎。	産地不明。
2217	西地区　入江内最下層	施釉陶器	鉢	高台は幅が広く低い。体部は緩やかに斜め上方に延び、中位で大きく屈曲、内彎気味にほぼ直立する。口縁部は外方に折り曲げ、玉縁状に肥厚する。	内外面とも回転ナデ調整。内面～体部外面上半灰釉施釉。オリーブ黄色に発色。体部外面下半以下露胎。	産地不明。19ｃ前半以降か？。
2218	西地区　入江内最下層	施釉陶器	御神酒徳利	高台は比較的高い。体部は内彎気味に延びる。頸部は直立。口縁部は僅かに外方にひらく。	外面　緑釉施釉。緑灰色に発色。高台脇以下露胎。	産地不明。近代以降か？。
2219	西地区　入江内最下層	施釉陶器	乗燭	平底。脚部は外反気味に直上に延びる。脚部は中空。皿部は緩やかに斜め上方に延びる。皿部内面に凸帯1条。凸帯に１箇所抉りを入れる。	皿部内面～脚部外面　透明釉施釉。明黄褐色に発色。内面及び底部外面露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。

No.	出土遺構	種別	器種	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
2220	西地区　入江内最下層	施釉陶器	秉燭	平底。脚部は外反気味に直上に延びる。脚部は中空。皿部は緩やかに斜め上方に延びる。皿部内面に凸帯1条。凸帯に1箇所抉りを入れる。	皿部内面～脚部外面　透明釉施釉。浅黄色に発色。内面及び底部外面露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2221	西地区　入江内最下層	施釉陶器	秉燭	平底。脚部は外反気味に直上に延びる。脚部は中空。皿部は緩やかに斜め上方に延びる。皿部内面に凸帯1条。凸帯に1箇所抉りを入れる。	皿部内面～脚部外面　透明釉施釉。にぶい黄橙色に発色。内面及び底部外面露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2222	西地区　入江内最下層	施釉陶器	秉燭	平底。脚部は外反気味に直上に延びる。脚部は中空。皿部は緩やかに斜め上方に延びる。皿部内面に凸帯1条。凸帯に1箇所抉りを入れる。	皿部内面～脚部外面　透明釉施釉。灰褐色に発色。内面及び底部外面露胎。	京・信楽系。19ｃ前半以降。
2223	西地区　入江内最下層	白磁	皿	高台は蛇ノ目凹形高台。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	ロクロ成形の後、型押しにより全体を菊花状に整形。内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた白色に発色。底部外面は中央部を残して蛇ノ目状に釉ハギ。	肥前系。19ｃ前半以降。
2224	西地区　入江内最下層	染付青磁	碗	高台は比較的細く高い。底部と体部の界は大きく屈曲、体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　青磁釉施釉。淡いオリーブ灰色に発色。内面染付　斜格子文・界線2条・コンニャク印判で施文（五弁花文か？）	肥前系。18ｃ代？。
2225	西地区　入江内最下層	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　コンニャク印判で松葉文他施文・界線2条。内面　無文。	肥前系くらわんか手。18ｃ前半。
2226	西地区　入江内最下層	染付磁器	碗	底部の器壁は厚い。高台は比較的厚い。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　界線1条・草花文・界線1・2条。内面　界線2・2条・草花文。	瀬戸・美濃系。19ｃ前半以降。
2227	西地区　入江内最下層	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的細く高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は細く尖る。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　界線1条・井桁文・界線1・2条。底部外面　界線1条・井桁文。内面　界線1・2条・井桁文。	産地不明。19ｃ前半以降か？。
2228	西地区　入江内最下層	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的高い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　刷筆で二重網目文施文・界線1条。底部外面　くずれた□福文。内面　一重網目文・菊花文。	肥前系　18ｃ代。
2229	西地区　入江内最下層	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く低い。体部直線的にほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　界線2条・草花文・界線2条。内面　界線2・1条・くずれた寿文。底部内面に目跡4箇所。	産地不明　19ｃ前半以降？。
2230	西地区　入江内最下層	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的高い。体部は直線的にほぼ直上に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　界線1条・草花文・界線2・2条。内面　界線1条・円弧文・界線2条・界線1条・簡易な草花文。	産地不明。19ｃ前半以降か？。
2231	西地区　入江内最下層	色絵磁器	碗	器壁は薄い。高台は細く高い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　やや赤味を帯びた灰白色。文様　外面赤絵で草花文施文（上絵付けのため赤絵のみ部分的に残存）。内面　外面と同様赤絵部分のみ残存。界線2条・草花文。	肥前系。広東碗　19ｃ前半。
2232	西地区　入江内最下層	染付磁器	碗	底部の器壁は非常に厚い。高台は細く高い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　界線1条・半截菊花文・界線1・2条。内面　界線1・1条。島襖文？。	肥前系。19ｃ前半。
2233	西地区　入江内最下層	染付磁器	碗	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　竹葉文。内面　斜線文・界線1条。	産地不明。近代以降。
2234	西地区　入江内最下層	染付磁器	碗	底部の器壁は厚い。高台は細く高い。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた灰白色。文様　外面　界線1条・山水文・文字文・界線1・2条。内面　界線2・1条・島襖文。	瀬戸・美濃系。19ｃ前半以降。
2235	西地区　入江内最下層	染付磁器	杯	平底。高台は細く低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも回転ナデ調整。内外面とも灰釉施釉。淡黄色に発色。	瀬戸・美濃系。
2236	西地区　入江内最下層	染付磁器	皿	底部の器壁は厚い。高台は比較的低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	ロクロ成形の後、型押しで口縁部・体部を波状に整形。色調　青味を帯びた灰白色。文様　内面　山水文・口縁に鉄釉施釉（口紅）。外面　無文。	産地不明　19ｃ前半以降。
2237	西地区　入江内最下層	染付磁器	皿	高台は比較的低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	ロクロ成形の後、型押しで口縁部・体部を波状に整形。色調　青味を帯びた白色。文様　内面　海浜文・口縁に鉄釉施釉（口紅）。外面　無文。	産地不明。19ｃ前半以降。
2238	西地区　入江内最下層	染付磁器	皿	高台は幅が広く低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	型作り成形で、口縁部・高台とも隅を捻った方形に整形。文様　内面　花弁文・口縁部に鉄釉施釉（口紅）。外面　無文。	産地不明。近代以降。
2239	西地区　入江内最下層	染付磁器	鉢	底部の器壁は比較的厚い。高台は蛇ノ目凹形高台。体部は直線的に直上に延びる。口縁端部は水平に端面をもつ。口縁部は輪花状に整形。	底部外面の釉は中央部を残して掻き取る。色調　青味を帯びた白色。文様　外面　花蝶文？。内面　花蝶文？。器面に細かい貫入。	肥前系。19ｃ前半以降。
2240	西地区　入江内最下層	染付磁器	皿	高台は蛇ノ目凹形高台。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部及び体部は形押しにより花弁状に整形。色調　青味を帯びた白色。底部外面は中央部を残し、蛇ノ目状に釉掻き取り。文様　内面　丸い兎に草花文。外面　無文。口縁部　鉄釉施釉（口紅）。	肥前系　19ｃ前半。
2241	西地区　入江内最下層	染付磁器	蓋	つまみは比較的低い。体部緩やかに斜め下方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調　青味を帯びた白色。文様　外面　葉状文。つまみ上面　製字か？。内面　墨弾きで雷文帯状文・界線2条・馬上の人物と風景文。	産地不明。
2242	西地区　入江内最下層	染付磁器	仏具飯	底部は蛇ノ目状に中央部を削る。脚部は円柱状で直立。碗部は内彎気味に斜め上方に延び、口縁端部は尖り気味。	内面～脚部外面　透明釉施釉。色調　青味を帯びた白色。底部外面露胎。文様　外面　界線1条・蛸唐草文・界線2条。	肥前系　18ｃ後半以降。
2243	西地区　入江内最下層	染付磁器	仏具碗	底部は蛇ノ目状に中央部を削る。脚部は円柱状で直立。碗部は内彎気味に斜め上方に延び、口縁端部は尖り気味。	内面～脚部下半　透明釉施釉。色調　青味を帯びた灰白色。脚部下半以下露胎。文様　外面　界線1条・蛸唐草文・界線2条。	肥前系　18ｃ後半以降。
2244	西地区　入江内最下層	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	外面　指ナデ調整。使用により器面は著しく磨耗。	色調　にぶい黄橙色。胎土中に砂粒を含む。
2245	西地区　入江内最下層	土製品	土錘	棒状の芯に粘土を巻きつけて成形。	内外面とも指ナデ調整。	色調　にぶい橙色。
2246	西地区　入江内最下層	土製品	人形	型作り成形。内部は中空。内面に指頭圧痕。	外面はナデ調整。ヘラ状工具で眉、目、口などを施文。彩色は全て剥落。	布袋の頭部か。
2247	西地区　入江内最下層	土製品	ミニチュア土瓶	器壁は比較的厚い。平底。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部外面に注口1箇所貼り付け。口縁部上面に把手を付ける孔を2箇所穿孔。	外面　ヨコナデ調整。内面　多方向の指ナデ調整。彩色は全て剥落。	色調　灰白色。土瓶のミニチュアか？。
2248	西地区　入江内最下層	土製品	ミニチュア狐形	型作り成形。両型作り。台座は長方形。頭部欠失。	底部外面に穿孔1箇所。彩色は全て剥落。	神棚の祀る狐形か。
2249	西地区　入江内最下層	無釉陶器	米俵形	米俵形に成形。	外面にヘラ描きで俵を表現。全面に灰釉施釉。淡黄緑色に発色。	米俵形。或いは手榴弾か？。
2250	西地区　入江内最下層	木製品	釦	木製で漆を塗布か？。暗茶褐色に発色。	漆の上に金色の顔料を塗布するが、大部分は剥落。裏面に糸かがり孔を2箇所穿孔。	木製の金釦。
2251	西地区　入江内最下層	土製品	すりこ木	下部の膨れた円柱状を呈する。	手づくね成形。	色調　橙色。鳥の餌用のすりこ木か。
2252	表採	白磁	皿	高台は細い。口縁部外反。	内面に幾何学文施文。	瀬戸・美濃系。19c前半。

第10表　金属器属性表 (1) 釘

図版番号	報告番号	調査区	遺構	素材	名称		全長（cm）	幅（cm）		残存等
図版１６９	Ｍ１	確認調査　５Ｇ	ＳＫ０１	鉄器	角釘		6.7	(0.5)	(0.6)	先端部欠損
	Ｍ２	１１区	ＳＫ１７	鉄器	頭巻釘		6.0	(0.4)	(0.35)	先端部若干欠損
	Ｍ３	１１区	ＳＫ２３	鉄器	角釘		6.5	(0.45)	(0.45)	完形
	Ｍ４	１２区	ＳＫ０４	鉄器	折釘	皆折釘	3.8	(0.3)	(0.25)	先端部欠損
	Ｍ５	１３区	ＳＤ１３	鉄器	頭巻釘		9.45	(0.4)	(0.45)	完形
	Ｍ６	１３区	ＳＤ１３	鉄器	折釘	皆折釘	12.55	(0.7)	(0.75)	先端部欠損
	Ｍ７	１３区	ＳＤ１３	鉄器	折釘	平折釘	5.25	(0.3)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ８	１３区	ＳＤ１３	鉄器	折釘	不明	4.7	(0.5)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ９	１３区	ＳＤ１３	鉄器	折釘	不明	4.8	(0.75)	(0.75)	先端部欠損
	Ｍ１０	１３区	ＳＫ７７	鉄器	角釘		9.0	(0.6)	(0.7)	完形
	Ｍ１１	１３区	ＳＫ７７	鉄器	頭巻釘		7.4	(0.4)	(0.4)	完形
	Ｍ１２	１３区	ＳＫ７７	鉄器	不明		4.75	(0.35)	(0.4)	釘頭部・先端部欠損
	Ｍ１３	１３区	ＳＫ７７	鉄器	頭巻釘		4.35	(0.35)	(0.3)	完形
	Ｍ１４	１４区	ＳＥ２３	鉄器	頭巻釘		7.5	(0.45)	(0.35)	完形
	Ｍ１５	１４区	ＳＫ２２	鉄器	頭巻釘		5.15	(0.45)	(0.45)	先端部欠損
	Ｍ１６	１４区	ＳＫ２９	鉄器	合釘		5.3	(0.4)	(0.45)	先端部欠損
	Ｍ１７	１４区	ＳＫ３２	鉄器	頭巻釘		10.05	(0.6)	(0.6)	先端部欠損
	Ｍ１８	１４区	ＳＫ３３	鉄器	頭巻釘		5.9	(0.3)	(0.4)	先端部欠損
図版１７０	Ｍ１９	１４区	ＳＫ３５	鉄器	切釘		7.0	(0.6)	(0.55)	先端部欠損
	Ｍ２０	１４区	ＳＫ３５	鉄器	角釘		6.0	(0.45)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ２１	１４区	ＳＫ３５	鉄器	角釘		5.85	(0.3)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ２２	１４区	ＳＫ３５	鉄器	角釘		5.4	(0.4)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ２３	１４区	ＳＫ３５	鉄器	頭巻釘		6.0	(0.38)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ２４	１４区	ＳＫ３５	鉄器	角釘		7.1	(0.4)	(0.3)	完形
	Ｍ２５	１４区	ＳＫ３５	鉄器	頭巻釘		5.1	(0.3)	(0.35)	完形
	Ｍ２６	１５区	ＳＫ０１	鉄器	角釘		6.5	(0.53)	(0.55)	完形
	Ｍ２７	１５区	ＳＫ０１	鉄器	角釘		10.25	(0.55)	(0.65)	完形
	Ｍ２８	１５区	ＳＫ０１	鉄器	角釘		5.9	(0.2)	(0.2)	先端部欠損
	Ｍ２９	１５区	ＳＫ０１	鉄器	頭巻釘		10.2	0.65	0.55	完形
	Ｍ３０	１５区	ＳＫ０１	鉄器	合釘か		7.7	(0.5)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ３１	１５区	ＳＫ０２	鉄器	不明		4.15	0.4	0.4	釘頭部・先端部欠損
	Ｍ３２	１５区	ＳＫ０２	鉄器	不明		5.2	(0.25)	(0.35)	釘頭部・先端部欠損
	Ｍ３３	１５区	ＳＫ０２	鉄器	頭巻釘		3.7	(0.25)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ３４	１５区	ＳＫ０２	鉄器	折釘	平折釘	3.9	(0.25)	(0.25)	先端部欠損
	Ｍ３５	１５区	ＳＫ０２	鉄器	角釘		2.75	(0.35)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ３６	１５区	ＳＫ０２	鉄器	折釘	皆折釘	6.85	(0.45)	(0.5)	完形
	Ｍ３７	１５区	ＳＫ０２	鉄器	不明		7.1	0.3	(0.3)	釘頭部・先端部欠損
	Ｍ３８	１５区	ＳＫ０２	鉄器	不明		8.0	0.55	(0.6)	釘頭部・先端部欠損
図版１７１	Ｍ３９	１５区	ＳＫ０３	鉄器	頭巻釘		3.68	(0.4)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ４０	１５区	ＳＫ０３	鉄器	角釘		4.85	(0.4)	(0.45)	先端部欠損
	Ｍ４１	１５区	ＳＫ０４	鉄器	①頭巻釘		7.6	(0.4)	(0.68)	ほぼ完形、２本付着
					②不明		7.8	(0.4)	(0.9)	
	Ｍ４２	１５区	ＳＫ０４	鉄器	折釘	皆折釘	6.05	(0.7)	(0.8)	頭部欠損
	Ｍ４３	１５区	ＳＫ１３	鉄器	折釘	不明	4.25	(0.4)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ４４	１５区	ＳＫ１６	鉄器	角釘		4.35	(0.3)	(0.5)	完形
	Ｍ４５	１５区	ＳＫ２９	鉄器	折釘	平折釘	5.9	(0.35)	(0.55)	先端部欠損、２本付着
					角釘		5.45	(0.45)	(0.6)	先端部欠損
	Ｍ４６	１５区	ＳＫ３９	鉄器	角釘		3.0	(0.25)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ４７	１５区	ＳＫ４６	鉄器	角釘		3.6	(0.6)	(0.6)	先端部欠損
	Ｍ４８	１５区	ＳＫ４９	鉄器	不明		3.5	0.3	0.35	釘頭部・先端部欠損
	Ｍ４９	１５区	ＳＫ５８	鉄器	角釘		6.0	(0.35)	(0.4)	完形
	Ｍ５０	１５区	ＳＫ５８	鉄器	角釘		6.25	(0.45)	(0.5)	先端部欠損
	Ｍ５１	１５区	ＳＤ０１	鉄器	折釘	平折釘	4.78	(0.4)	(0.35)	完形
	Ｍ５２	１５区	ＳＤ０１	鉄器	頭巻釘		3.38	(0.3)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ５３	１５区	ＳＤ０１	鉄器	不明		3.2	0.3	0.3	釘頭部・先端部欠損
	Ｍ５４	１５区	ＳＤ０１	鉄器	折釘	平折釘	2.5	(0.35)	(0.45)	先端部欠損
	Ｍ５５	１５区	ＳＤ０１	鉄器	不明		3.75	(0.25)	(0.3)	完形？

図版番号	報告番号	調査区	遺構	素材	名称		全長（cm）	幅（cm）		残存等
図版１７１	Ｍ５６	１５区	ＳＤ０１	鉄器	折釘	平折釘	6.9	(0.55)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ５７	１５区	ＳＤ０１	鉄器	不明		11.15	(0.85)	(0.95)	完形
図版１７２	Ｍ５８	１５区	ＳＫ０５	鉄器	角釘		5.0	(0.35)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ５９	１５区	ＳＫ０５	鉄器	折釘	平折釘	5.3	(0.4)	(0.4)	完形
	Ｍ６０	１５区	ＳＫ０５	鉄器	折釘	平折釘	4.1	(0.8)	(0.6)	先端部欠損
	Ｍ６１	１５区	ＳＫ０７	鉄器	不明		4.1	(0.25)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ６２	１５区	ＳＫ０７	鉄器	折釘	平折釘	4.1	(0.65)	(0.5)	先端部欠損
	Ｍ６３	１５区	ＳＫ０７	鉄器	角釘		3.4	(0.3)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ６４	１５区	ＳＫ１０	鉄器	角釘		4.72	(0.4)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ６５	１５区	ＳＫ１０	鉄器	角釘		3.25	(0.35)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ６６	１５区	ＳＫ１０	鉄器	角釘		2.25	(0.4)	(0.35)	完形
	Ｍ６７	１５区	ＳＫ１０	鉄器	角釘		5.9	(0.35)	(0.7)	完形
	Ｍ６８	１５区	ＳＫ１６	鉄器	角釘		5.55	(0.4)	(0.5)	完形
	Ｍ６９	１５区	ＳＫ２３	鉄器	不明		2.75	(0.35)	(0.4)	先端部のみ残存
	Ｍ７０	１５区	ＳＫ３６	鉄器	不明		2.8	(0.20)	(0.25)	釘頭部・先端部欠損
	Ｍ７１	１５区	ＳＫ３６	鉄器	不明		3.25	(0.3)	(0.25)	ほぼ完形
	Ｍ７２	１５区	ＳＫ４８	鉄器	合釘		6.48	(0.55)	(0.65)	完形
	Ｍ７３	１５区	ＳＫ５６	鉄器	切釘		8.3	(0.3)	(0.4)	完形
	Ｍ７４	１６区	Ｐ０１	鉄器	角釘		6.2	(0.5)	(0.55)	先端部欠損
	Ｍ７５	１６区	ＳＫ０２	鉄器	角釘		2.82	(0.2)	(0.25)	完形
	Ｍ７６	１６区	ＳＫ０６	鉄器	折釘	平折釘	5.35	(0.5)	(0.5)	完形
	Ｍ７７	１６区	ＳＫ０９	鉄器	折釘	平折釘	5.9	(0.45)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ７８	１７区	ＳＫ０２	鉄器	角釘		3.3	(0.2)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ７９	１７区	ＳＫ０３	鉄器	頭巻釘		4.35	(0.75)	(0.6)	先端部欠損
	Ｍ８０	１７区	ＳＫ１３	鉄器	角釘		5.7	(0.4)	(0.4)	完形
	Ｍ８１	１７区	ＳＫ１４	鉄器	角釘		5.15	(0.45)	(0.45)	完形
	Ｍ８２	１７区	ＳＫ１６	鉄器	目鏡		①10.8	(0.4)	(0.38)	完形、２本付着
					切釘		②3.4	(0.25)	(0.25)	完形
図版１７３	Ｍ８３	１７区	ＳＸ０１	鉄器	切釘		3.6	(0.25)	(0.25)	先端部欠損
	Ｍ８４	１７区	Ｐ０７	鉄器	折釘	皆折釘	10.4	(0.45)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ８５	１７区	Ｐ０８	鉄器	角釘		5.65	(0.3)	(0.45)	先端部欠損
	Ｍ８６	１８区	ＳＫ５６	鉄器	頭巻釘		5.05	(0.4)	(0.45)	先端部欠損
	Ｍ８７	１８区	ＳＫ６５	鉄器	不明		8.45	(0.6)	(0.25)	釘頭部・先端部欠損
	Ｍ８８	１８区	ＳＫ７４	鉄器	不明		7.7	(0.4)	(0.5)	ほぼ完形
	Ｍ８９	１８区	ＳＫ７４	鉄器	折釘	平折釘	4.3	(0.30)	(0.30)	先端部欠損
	Ｍ９０	１８区	ＳＫ７７	鉄器	不明		4.1	(0.4)	(0.3)	ほぼ完形
	Ｍ９１	１８区	ＳＫ７７	鉄器	平釘		5.3	(0.7)	(0.7)	完形
	Ｍ９２	１８区	ＳＫ７７	鉄器	切釘		4.6	(0.2)	(0.2)	先端部欠損
	Ｍ９３	１８区	ＳＫ７７	鉄器	角釘		7.9	(0.55)	(4.5)	完形
	Ｍ９４	１８区	ＳＫ７７	鉄器	頭巻釘		4.15	(0.3)	(0.4)	ほぼ完形
	Ｍ９５	１８区	ＳＫ７８	鉄器	角釘		6.05	(0.3)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ９６	１８区	ＳＫ７８	鉄器	角釘		6.4	(0.45)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ９７	１８区	ＳＫ７８	鉄器	角釘		6.35	(0.4)	(0.5)	先端部欠損
	Ｍ９８	１８区	ＳＫ７８	鉄器	折釘	皆折釘	5.4	(0.35)	(0.4)	完形
	Ｍ９９	１８区	ＳＸ８１	鉄器	頭巻釘		6.05	(0.3)	(0.5)	先端部欠損
	Ｍ１００	１８区	ＳＸ８１	鉄器	頭巻釘		13.1	(0.6)	(0.75)	先端部欠損
	Ｍ１０１	１８区	ＳＸ８１	鉄器	角Ｌ釘		4.15	(0.35)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ１０２	１８区	ＳＸ８１	鉄器	角Ｌ釘		5.35	(0.35)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ１０３	１８区	ＳＸ８１	鉄器	頭巻釘		3.55	(0.4)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ１０４	１８区	ＳＸ８１	鉄器	折釘	平折釘	2.9	(0.3)	(0.25)	完形
図版１７４	Ｍ１０５	１８区	ＳＸ８１	鉄器	角釘		6.4	(0.35)	(0.35)	完形、湾曲著しい
	Ｍ１０６	１８区	ＳＸ８１	鉄器	折釘	平折釘	4.6	(0.35)	(0.3)	完形
	Ｍ１０７	１８区	ＳＫ１２０	鉄器	頭巻釘		7.0	(0.3)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ１０８	１８区	ＳＫ１２０	鉄器	角釘		5.25	(0.5)	(0.55)	先端部欠損
	Ｍ１０９	１８区	Ｐ１２１	鉄器	折釘	平折釘	5.8	(0.45)	(0.5)	先端部欠損
	Ｍ１１０	１８区	Ｐ１２１	鉄器	角釘		4.1	(0.3)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ１１１	１９区	ＳＫ０７	鉄器	頭巻釘		5.15	(0.4)	(0.5)	両端欠損
	Ｍ１１２	１９区	ＳＫ１２	鉄器	合釘		9.0	(0.6)	(0.6)	両端欠損
	Ｍ１１３	１９区	ＳＫ１２	鉄器	頭巻釘		4.85	(0.45)	(0.35)	完形

図版番号	報告番号	調査区	遺構	素材	名称		全長（cm）	幅（cm）		残存等
図版１７４	Ｍ１１４	１９区	ＳＫ１１	鉄器	角釘		3.4	(0.4)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ１１５	１９区	ＳＫ１２	鉄器	平釘		6.68	(頭部) 1.08・0.9		釘頭部は、段をもつ
								(0.45)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ１１６	１９区	ＳＫ２０	鉄器	折釘	平折釘	6.45	(0.6)	(0.6)	先端部欠損
	Ｍ１１７	２０区	Ｐ３１	鉄器	頭巻釘		6.4	(0.65)	(0.4)	完形
	Ｍ１１８	２０区	ＳＫ０２	鉄器	折釘	皆折釘	8.2	(0.3)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ１１９	２０区	ＳＫ０２	鉄器	不明		4.7	(0.28)	0.3	頭部欠損
	Ｍ１２０	２０区	ＳＫ０７	鉄器	角釘		4.6	(0.3)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ１２１	２０区	ＳＫ０７	鉄器	頭巻釘		7.0	(0.35)	(0.35)	完形
	Ｍ１２２	２０区	ＳＫ０７	鉄器	角釘		7.3	(0.4)	(0.5)	完形
	Ｍ１２３	２０区	ＳＫ０７	鉄器	頭巻釘		5.9	(0.4)	(0.5)	先端部欠損
	Ｍ１２４	２０区	ＳＫ０９	鉄器	角釘		6.75	(0.35)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ１２５	２０区	ＳＫ０９	鉄器	頭巻釘		7.9	(0.4)	(0.4)	完形
	Ｍ１２６	２１区	ＳＤ０１	鉄器	不明		8.0	(0.45)	(0.5)	釘頭部欠損
	Ｍ１２７	２１区	Ｐ０７	鉄器	不明		5.65	(0.3)	(0.3)	釘頭部欠損
	Ｍ１２８	２１区	Ｐ０７	鉄器	角釘		5.9	(0.5)	(0.5)	完形
	Ｍ１２９	２１区	ＳＫ０３	鉄器	角釘		7.5	(0.42)	(0.4)	完形
図版１７５	Ｍ１３０	２１区	ＳＫ０５	鉄器	折釘	平折釘？	6.8	(0.3)	(0.25)	完形
	Ｍ１３１	２１区	ＳＫ１０	鉄器	角釘		5.1	(0.3)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ１３２	２２区	Ｐ０８	鉄器	角釘		6.8	(0.3)	(0.4)	完形
	Ｍ１３３	２２区	ＳＫ１４	鉄器	角釘		6.1	(0.35)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ１３４	２２区	ＳＫ１４	鉄器	切釘		4.65	(0.35)	(0.35)	完形
	Ｍ１３５	２２区	ＳＫ１４	鉄器	頭巻釘		6.3	(0.4)	(0.45)	完形
	Ｍ１３６	２２区	ＳＫ１４	鉄器	折釘	皆折釘	4.0	(0.4)	(0.4)	完形
	Ｍ１３７	２２区	ＳＫ１４	鉄器	切釘		6.8	(0.25)	(0.45)	完形
	Ｍ１３８	２２区	ＳＫ１４	鉄器	折釘	平折釘	4.65	(0.3)	(0.4)	完形
	Ｍ１３９	２２区	ＳＫ１４	鉄器	角釘		4.15	(0.3)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ１４０	２２区	ＳＫ１１	鉄器	頭巻釘		8.2	(0.4)	(0.4)	完形
	Ｍ１４１	２２区	ＳＫ１１	鉄器	合釘		7.2	(0.25)	(0.45)	完形
	Ｍ１４２	２２区	ＳＫ０７	鉄器	不明		4.9	(0.5)	(0.65)	釘頭部・先端部欠損
	Ｍ１４３	２２区	ＳＫ０１	鉄器	頭巻釘		5.3	(0.3)	(0.35)	完形
	Ｍ１４４	２２区	ＳＫ０２	鉄器	折釘	平折釘	7.65	(0.45)	(0.4)	完形
	Ｍ１４５	２３区	ＳＫ２０	鉄器	折釘	平折釘	4.1	(0.6)	(0.65)	先端部欠損
	Ｍ１４６	２３区	ＳＫ０７	鉄器	頭巻釘		7.9	(0.5)	(0.5)	先端部欠損
	Ｍ１４７	２３区	ＳＫ０９	鉄器	角釘		7.5	(0.6)	(0.7)	先端部欠損
	Ｍ１４８	２３区	ＳＫ０９	鉄器	折釘	平折釘	7.75	(0.5)	(0.55)	先端部欠損
	Ｍ１４９	２３区	ＳＫ０９	鉄器	角釘		8.75	(0.4)	(0.5)	釘頭部欠損
	Ｍ１５０	２３区	ＳＫ０９	鉄器	頭巻釘		7.6	(0.4)	(0.35)	完形
	Ｍ１５１	２３区	ＳＫ０９	鉄器	合釘		15.8	(0.4)	(0.4)	完形
図版１７６	Ｍ１５２	２３区	ＳＫ０９	鉄器	頭巻釘		7.65	(0.5)	(0.45)	完形
	Ｍ１５３	２３区	ＳＫ０９	鉄器	頭巻釘		6.8	(0.4)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ１５４	２３区	ＳＫ０９	鉄器	折釘	平折釘	5.95	(0.45)	(0.5)	先端部欠損
	Ｍ１５５	２３区	ＳＫ０９	鉄器	頭巻釘		4.9	(0.4)	(0.5)	先端部欠損
	Ｍ１５６	２３区	ＳＫ０９	鉄器	頭巻釘		6.6	(0.35)	(0.4)	完形
	Ｍ１５７	２３区	ＳＫ０９	鉄器	折釘	皆折釘	6.1	(0.5)	(0.5)	完形
	Ｍ１５８	２３区	ＳＫ０９	鉄器	頭巻釘		6.9	(0.35)	(0.35)	完形
	Ｍ１５９	２３区	ＳＫ０９	鉄器	角釘		6.45	(0.35)	(0.4)	完形
	Ｍ１６０	２３区	ＳＫ０９	鉄器	折釘	平折釘	4.1	(0.4)	(0.3)	完形
	Ｍ１６１	２３区	ＳＫ０９	鉄器	角釘		4.6	(0.4)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ１６２	２３区	ＳＫ０９	鉄器	角釘		8.1	0.7	0.65	先端部欠損
	Ｍ１６３	２３区	ＳＫ０９	鉄器	角釘		8.4	(0.4)	(0.35)	完形
	Ｍ１６４	２３区	ＳＸ０１	鉄器	角釘		8.6	(0.55)	(0.55)	先端部欠損
	Ｍ１６５	２３区	ＳＸ０１	鉄器	角釘		4.53	(0.25)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ１６６	２３区	ＳＤ０２	鉄器	角釘		7.0	(0.4)	(0.4)	完形
	Ｍ１６７	２３区	ＳＤ０２	鉄器	角釘		5.5	(0.45)	(0.45)	完形
	Ｍ１６８	２３区	ＳＫ２１	鉄器	不明		4.2	(0.25)	(0.25)	釘頭部・先端部欠損
	Ｍ１６９	２３区	ＳＫ２１	鉄器	角釘		6.4	(0.5)	(0.55)	先端部欠損
	Ｍ１７０	２３区	ＳＫ２１	鉄器	角釘		5.65	(0.35)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ１７１	２３区	ＳＫ２１	鉄器	角釘		5.15	(0.45)	(0.4)	先端部欠損

図版番号	報告番号	調査区	遺構	素材	名称		全長（cm）	幅（cm）		残存等
	Ｍ１７２	２３区	ＳＫ２１	鉄器	折釘	平折釘	4.2	(0.3)	(0.4)	完形
図版１７７	Ｍ１７３	２３区	ＳＫ２３	鉄器	合釘		8.1	(0.4)	(0.35)	先端部共に欠損
	Ｍ１７４	２３区	ＳＫ２３	鉄器	頭巻釘		5.1	(0.35)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ１７５	２３区	ＳＫ２３	鉄器	折釘	平折釘	4.7	(0.3)	(0.4)	完形
	Ｍ１７６	２３区	ＳＫ０２	鉄器	頭巻釘		6.5	(0.35)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ１７７	２３区	ＳＫ２２	鉄器	頭巻釘		7.45	(0.4)	(0.5)	先端部欠損
	Ｍ１７８	２３区	ＳＫ１５	鉄器	角釘		8.2	(0.4)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ１７９	２３区	攪乱	鉄器	頭巻釘		4.15	(0.3)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ１８０	２３区	ＳＫ１９	鉄器	角釘		5.9	0.55	0.5	完形
	Ｍ１８１	２３区	ＳＫ１０	鉄器	角釘		5.9	(0.35)	(0.4)	完形
	Ｍ１８２	２３区	ＳＫ１０	鉄器	角釘		4.65	(0.7)	(0.55)	完形
	Ｍ１８３	２３区	ＳＫ１０	鉄器	頭巻釘		4.6	(0.4)	(0.5)	先端部欠損
	Ｍ１８４	２３区	ＳＫ１０	鉄器	角釘		6.9	(0.3)	(0.3)	完形
	Ｍ１８５	２３区	ＳＫ１０	鉄器	切釘		4.5	(0.3)	(0.3)	釘頭部・先端部欠損
	Ｍ１８６	２３区	ＳＫ１０	鉄器	頭巻釘		2.6	(0.35)	(0.3)	完形
	Ｍ１８７	２３区	ＳＫ１２	鉄器	角釘		4.7	(0.4)	(0.5)	完形？
	Ｍ１８８	２４区	ＳＫ０２	鉄器	折釘	平折釘	3.15	(0.2)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ１８９	２４区	ＳＸ０１	鉄器	頭巻釘		6.7	(0.4)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ１９０	２５区	ＳＫ１１	鉄器	頭巻釘		5.55	(0.45)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ１９１	２６区	ＳＫ２９	鉄器	角釘		6.9	(0.45)	(0.5)	完形
	Ｍ１９２	２６区	ＳＫ１６	鉄器	不明		4.45	0.3	(0.35)	完形
	Ｍ１９３	２６区	ＳＫ２１	鉄器	折釘	平折釘	5.6	(0.4)	(0.45)	先端部欠損
	Ｍ１９４	２６区	ＳＫ２５	鉄器	角釘		5.2	(0.5)	(0.55)	先端部欠損
図版１７８	Ｍ１９５	２６区	ＳＫ３４	鉄器	切釘		10.18	(0.8)	(0.8)	先端部欠損
	Ｍ１９６	２６区	ＳＫ３９	鉄器	折釘	皆折釘	5.9	(0.35)	(0.45)	完形
	Ｍ１９７	２６区	ＳＫ４５	鉄器	不明		3.6	(0.3)	(0.25)	釘頭部欠損
	Ｍ１９８	２６区	ＳＤ０４	鉄器	折釘	平折釘	4.1	(0.6)	(0.8)	先端部欠損
	Ｍ１９９	２７区	ＳＫ０８	鉄器	頭巻釘		5.75	(0.3)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ２００	２７区	ＳＫ０８	鉄器	角釘		4.4	(0.25)	(0.25)	完形
	Ｍ２０１	２７区	ＳＫ０８	鉄器	折釘	平折釘	4.8	(0.25)	(0.45)	先端部欠損
	Ｍ２０２	２７区	ＳＫ０８	鉄器	角釘		6.85	0.55	(0.35)	完形
	Ｍ２０３	２７区	ＳＫ０８	鉄器	角釘		5.1	(0.4)	(0.35)	完形
	Ｍ２０４	２７区	ＳＫ１３	鉄器	角釘		3.9	(0.3)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ２０５	２７区	ＳＫ１３	鉄器	切釘		4.05	(0.25)	(0.25)	先端部欠損
	Ｍ２０６	２７区	ＳＫ２１	鉄器	折釘	平折釘	8.0	(0.5)	(0.8)	完形
	Ｍ２０７	２７区	ＳＫ２１	鉄器	角釘		7.3	(0.4)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ２０８	２７区	ＳＫ２２	鉄器	平釘		10.7	（頭部）1.0・0.5 (0.65)	(0.5)	先端部欠損
	Ｍ２０９	２７区	ＳＫ２４	鉄器	折釘	平折釘	7.2	(0.4)	(0.4)	完形
	Ｍ２１０	２８区	Ｐ０１	鉄器	切釘		5.55	(0.45)	(0.45)	先端部欠損
	Ｍ２１１	２８区	Ｐ１７	鉄器	角釘		4.45	(0.38)	(0.28)	先端部欠損
	Ｍ２１２	２８区	ＳＥ０２	鉄器	角釘		4.9	(0.45)	(0.45)	先端部欠損
	Ｍ２１３	２８区	ＳＥ０２	鉄器	角釘		3.65	(0.3)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ２１４	２８区	ＳＫ０２	鉄器	折釘	平折釘	7.15	(0.6)	(0.55)	先端部欠損
	Ｍ２１５	２８区	ＳＫ０３	鉄器	折釘	平折釘	5.3	(0.45)	(0.5)	完形
	Ｍ２１６	２８区	ＳＫ０３	鉄器	頭巻釘		4.0	(0.5)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ２１７	２８区	ＳＫ０８	鉄器	角釘		5.4	(0.5)	(0.5)	釘頭部欠損
	Ｍ２１８	２８区	ＳＫ１０	鉄器	切釘		4.1	(0.3)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ２１９	２８区	ＳＫ１０	鉄器	切釘		4.2	(0.35)	(0.35)	先端部欠損
図版１７９	Ｍ２２０	２８区	ＳＸ０１	鉄器	角釘		10.1	(0.4)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ２２１	２９区	ＳＫ１９	鉄器	頭巻釘		6.65	(0.38)	(0.35)	完形
	Ｍ２２２	２９区	ＳＫ107	鉄器	折釘	皆折釘	4.8	(0.45)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ２２３	２９区	ＳＥ108	鉄器	折釘	平折釘	4.65	(0.35)	(0.35)	完形
	Ｍ２２４	２９区	ＳＥ108	鉄器	角釘		5.85	(0.3)	(0.28)	完形
	Ｍ２２５	２９区	ＳＫ116	鉄器	角釘		6.4	(0.35)	(0.35)	完形
	Ｍ２２６	２９区	ＳＫ119	鉄器	頭巻釘		5.6	(0.3)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ２２７	２９区	ＳＸ０１	鉄器	角釘		8.05	(0.45)	(0.5)	完形
	Ｍ２２８	２９区	ＳＸ０１	鉄器	折釘	平折釘	6.58	(0.4)	(0.45)	完形
	Ｍ２２９	２９区	ＳＸ110	鉄器	切釘		5.35	(0.4)	(0.4)	先端部欠損

図版番号	報告番号	調査区	遺構	素材	名称		全長（cm）	幅（cm）		残存等
	Ｍ２３０	２９区	ＳＸ１１８	鉄器	角釘		4.1	0.6	(0.45)	先端部欠損
	Ｍ２３１	２９区	ＳＸ１１８	鉄器	角釘		4.15	(0.4)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ２３２	２９区	ＳＸ１２６	鉄器	角釘		6.5	(0.3)	(0.5)	完形
	Ｍ２３３	２９区	ＳＸ１２８	鉄器	折釘	皆折釘	5.8	(0.5)	(0.55)	先端部欠損
	Ｍ２３４	２９区	ＳＸ１２８	鉄器	角釘		6.6	(0.5)	(0.5)	完形
	Ｍ２３５	２９区	Ｐ１４９	鉄器	不明		4.0	(0.35)	(0.45)	釘頭部・先端部欠損
図版１７９	Ｍ２３６	３０区	ＳＫ１９	鉄器	角釘		3.9	(0.35)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ２３７	３０区	ＳＫ２１	鉄器	角釘		6.0	(0.3)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ２３８	３０区	ＳＫ２４	鉄器	角釘		6.75	(0.45)	(0.5)	完形
	Ｍ２３９	３０区	ＳＫ２４	鉄器	折釘	平折釘	6.0	(0.4)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ２４０	３０区	ＳＫ２６	鉄器	合釘		8.8	(0.4)	(0.35)	完形
	Ｍ２４１	３０区	ＳＫ２７	鉄器	角釘		4.9	(0.35)	(0.3)	完形
	Ｍ２４２	３０区	ＳＫ２９	鉄器	頭巻釘		4.8	(0.25)	(0.3)	完形
	Ｍ２４３	３０区	ＳＫ３０	鉄器	折釘	平折釘	4.4	(0.4)	(0.3)	完形
	Ｍ２４４	３０区	ＳＫ６１	鉄器	頭巻釘		9.6	(0.55)	(0.45)	先端部欠損
	Ｍ２４５	３０区	ＳＫ６１	鉄器	角釘		5.55	(0.3)	(0.25)	完形
	Ｍ２４６	３０区	ＳＸ０１	鉄器	角釘		4.75	(0.4)	(0.4)	完形
	Ｍ２４７	３０区	ＳＤ２８	鉄器	切釘		7.0	(0.2)	(0.3)	完形
	Ｍ２４８	３１区	ＳＸ０２	鉄器	頭巻釘		6.75	(0.35)	(0.45)	完形
	Ｍ２４９	３１区	ＳＸ０４	鉄器	角釘		7.5	(0.55)	(0.4)	完形
	Ｍ２５０	３１区	ＳＤ０１	鉄器	切釘		8.0	(0.5)	(0.5)	先端部欠損
	Ｍ２５１	３１区	ＳＤ０１	鉄器	頭巻釘		7.5	(0.45)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ２５３	３２区	Ｐ１７	鉄器	頭巻釘		6.5	(0.5)	(0.55)	完形
図版１８０	Ｍ２５４	３２区	Ｐ１７	鉄器	角釘		6.5	(0.45)	(0.45)	完形
	Ｍ２５５	３２区	Ｐ１９	鉄器	頭巻釘		7.3	(0.3)	(0.3)	完形
	Ｍ２５６	３２区	ＳＫ０５	鉄器	頭巻釘		8.7	(0.55)	(0.6)	完形
	Ｍ２５７	３２区	ＳＫ０６	鉄器	角釘		6.0	(0.5)	(0.4)	完形
	Ｍ２５８	３２区	ＳＫ０７	鉄器	頭巻釘		5.2	(0.4)	(0.33)	先端部欠損
	Ｍ２５９	３２区	ＳＫ０７	鉄器	角釘		10.0	(0.55)	(0.55)	完形
	Ｍ２６０	３２区	ＳＫ０７	鉄器	角釘		5.0	(0.35)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ２６１	３２区	ＳＸ０１	鉄器	切釘		7.6	(0.5)	(0.58)	完形？
	Ｍ２６２	３２区	ＳＸ０１	鉄器	角釘		5.9	(0.4)	(0.45)	先端部欠損
	Ｍ２６３	３２区	ＳＸ０１	鉄器	角釘		4.85	(0.3)	(0.3)	完形
	Ｍ２６４	３２区	ＳＤ０２	鉄器	切釘		7.3	(0.4)	(0.3)	完形
	Ｍ２６５	３２区	Ｐ４８	鉄器	角釘		4.9	(0.3)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ２６６	３２区	Ｐ５０	鉄器	角釘		5.7	(0.3)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ２６７	３２区	Ｐ５４	鉄器	角釘		4.3	(0.3)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ２６８	３２区	Ｐ５９	鉄器	角釘		4.1	(0.3)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ２６９	３２区	Ｐ６９	鉄器	角釘		4.9	(0.25)	(0.25)	先端部欠損
	Ｍ２７０	３２区	Ｐ６８	鉄器	角釘		7.6	(0.45)	(0.5)	先端部欠損
	Ｍ２７１	３２区	Ｐ７５	鉄器	角釘		5.5	(0.35)	(0.3)	完形
	Ｍ２７２	３２区	Ｐ９４	鉄器	角釘		4.6	(0.3)	(0.2)	完形
	Ｍ２７３	３２区	Ｐ１２２	鉄器	角釘		4.6	(0.25)	(0.3)	完形
	Ｍ２７４	３２区	Ｐ１４０	鉄器	角釘		6.0	(0.25)	(0.3)	完形
	Ｍ２７５	３２区	ＳＫ１１	鉄器	角釘		4.1	(0.35)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ２７６	３２区	ＳＫ１１	鉄器	角釘		7.05	(0.4)	(0.4)	先端部欠損
図版１８１	Ｍ２７７	３２区	ＳＫ１２	鉄器	角釘		7.0	(0.5)	(0.45)	先端部欠損
	Ｍ２７８	３２区	ＳＫ１４	鉄器	角釘		9.1	(0.45)	(0.55)	完形
	Ｍ２７９	３２区	ＳＫ１４	鉄器	角釘		8.75	(0.4)	(0.5)	完形
	Ｍ２８０	３２区	ＳＫ１４	鉄器	折釘	平折釘	8.95	(0.3)	(0.4)	完形
	Ｍ２８１	３２区	ＳＫ１４	鉄器	折釘	平折釘	8.2	(0.35)	(0.45)	先端部欠損
	Ｍ２８２	３２区	ＳＫ１４	鉄器	角釘		7.15	(0.4)	(0.45)	先端部欠損
	Ｍ２８３	３２区	ＳＫ１４	鉄器	頭巻釘		6.6	(0.38)	(0.43)	先端部欠損
	Ｍ２８４	３２区	ＳＫ１４	鉄器	角釘		5.67	(0.28)	(0.25)	先端部欠損
	Ｍ２８５	３２区	ＳＫ１４	鉄器	角釘		5.9	(0.35)	(0.35)	完形
	Ｍ２８６	３２区	ＳＫ１４	鉄器	角釘		6.6	(0.5)	(0.6)	先端部欠損
	Ｍ２８７	３２区	ＳＫ１４	鉄器	切釘		6.0	(0.5)	(0.55)	完形
	Ｍ２８８	３２区	ＳＫ１４	鉄器	角釘		6.05	(0.4)	(0.45)	完形
	Ｍ２８９	３２区	ＳＫ１４	鉄器	折釘	平折釘	5.05	(0.4)	(0.25)	完形

図版番号	報告番号	調査区	遺構	素材	名称		全長（cm）	幅（cm）		残存等
図版１８２	Ｍ２９０	３２区	ＳＫ１４	鉄器	角釘		7.65	(0.35)	(0.4)	釘頭部・先端部欠損
	Ｍ２９１	３２区	ＳＫ１４	鉄器	角釘		7.95	(0.4)	(0.45)	釘頭部・先端部欠損
	Ｍ２９２	３２区	ＳＫ１４	鉄器	角釘		6.65	(0.35)	(0.65)	先端部欠損
	Ｍ２９３	３２区	ＳＫ１４	鉄器	角釘		8.18	(0.4)	(0.4)	釘頭部・先端部欠損
	Ｍ２９４	３２区	ＳＫ１４	鉄器	角釘		9.2	(0.5)	(0.35)	完形
	Ｍ２９５	３２区	ＳＫ１４	鉄器	角釘		8.45	(0.4)	(0.4)	完形
	Ｍ２９６	３２区	ＳＫ１４	鉄器	頭巻釘		8.35	(0.55)	(0.5)	先端部欠損
	Ｍ２９７	３２区	ＳＫ１４	鉄器	頭巻釘		7.8	(0.35)	(0.45)	先端部欠損
	Ｍ２９８	３２区	ＳＫ１４	鉄器	角釘		6.7	(0.25)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ２９９	３２区	ＳＫ１４	鉄器	折釘	平折釘	6.6	(0.4)	(0.45)	先端部欠損
	Ｍ３００	３２区	ＳＫ１４	鉄器	折釘	平折釘	5.5	(0.3)	(0.3)	完形
	Ｍ３０１	３２区	ＳＫ１４	鉄器	切釘		7.6	(0.5)	(0.6)	完形
	Ｍ３０２	３２区	ＳＸ０２	鉄器	角釘		6.05	(0.4)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ３０３	３２区	ＳＸ０２	鉄器	角釘		4.3	0.38	0.5	先端部欠損
	Ｍ３０４	３２区	ＳＸ０２	鉄器	角釘		3.4	(0.7)	(0.6)	完形
	Ｍ３０５	３２区	ＳＫ１７	鉄器	折釘	皆折釘	5.2	(0.3)	(0.35)	完形
	Ｍ３０６	３２区	ＳＫ２１	鉄器	折釘	平折釘	6.25	(0.3)	(0.4)	完形
	Ｍ３０７	３２区	Ｐ１３６	鉄器	角釘		5.3	(0.25)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ３０８	３２区	Ｐ１４１	鉄器	折釘	平折釘	3.8	(0.4)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ３０９	３３区	Ｐ０４	鉄器	頭巻釘		6.65	(0.5)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ３１０	３３区	Ｐ０５	鉄器	頭巻釘		5.95	(0.4)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ３１１	３３区	Ｐ１５	鉄器	角釘		4.4	(0.45)	(0.5)	完形
	Ｍ３１２	３３区	ＳＫ０３	鉄器	頭巻釘		3.9	(0.4)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ３１３	３３区	ＳＫ０８	鉄器	角釘		5.2	(0.45)	(0.35)	先端部欠損
図版１８３	Ｍ３１４	３３区	ＳＫ０８	鉄器	切釘		7.5	(0.3)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ３１５	３３区	ＳＫ１０	鉄器	角釘		5.0	(0.4)	(0.45)	完形
	Ｍ３１６	３３区	ＳＫ１４	鉄器	折釘	平折釘	5.35	(0.3)	(0.3)	完形
	Ｍ３１７	３３区	ＳＫ１６	鉄器	折釘	皆折釘	7.35	(0.4)	(0.45)	先端部欠損
	Ｍ３１８	３３区	ＳＤ０１	鉄器	角釘		4.9	(0.35)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ３１９	３３区	ＳＤ０１	鉄器	角釘		3.55	(0.3)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ３２０	３３区	ＳＤ０２	鉄器	角釘		7.25	(0.4)	(0.55)	完形
	Ｍ３２１	３３区	ＳＤ０３	鉄器	角釘		5.95	(0.4)	(0.3)	先端部欠損
	Ｍ３２２	３３区	ＳＤ０３	鉄器	角釘		6.1	(0.5)	(0.55)	先端部欠損
	Ｍ３２３	３４区	包含層	鉄器	角釘		5.8	0.45	0.5	先端部欠損
	Ｍ３２４	３５区	Ｐ０５	鉄器	不明		6.35	(0.6)	(0.65)	完形？
	Ｍ３２５	３７区	Ｐ０４	鉄器	不明		7.2	(0.35)	(0.4)	釘頭部欠損
	Ｍ３２６	３７区	ＳＫ０３	鉄器	角釘		7.7	(0.35)	(0.45)	完形
	Ｍ３２７	３７区	ＳＫ０３	鉄器	頭巻釘		7.5	(0.4)	(0.45)	先端部欠損
	Ｍ３２８	３７区	ＳＫ０４	鉄器	角釘		6.2	(0.3)	(0.4)	完形
	Ｍ３２９	３７区	ＳＫ０４	鉄器	頭巻釘		7.4	(0.3)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ３３０	３７区	ＳＫ０４	鉄器	角釘		6.3	(0.25)	(0.35)	完形
	Ｍ３３１	３７区	ＳＫ０４	鉄器	角釘		5.6	(0.45)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ３３２	３７区	ＳＫ０４	鉄器	角釘		4.2	(0.3)	(0.35)	完形
	Ｍ３３３	３７区	ＳＫ０４	鉄器	頭巻釘		4.0	(0.4)	(0.4)	先端部欠損
	Ｍ３３４	３７区	ＳＫ０４	鉄器	折釘	平折釘	7.0	(0.35)	(0.35)	完形
図版１８４	Ｍ３３５	３８区	ＳＫ０３	鉄器	不明		3.0	(0.4)	(0.55)	釘頭部欠損
	Ｍ３３６	３８区	ＳＫ０６	鉄器	角釘		4.55	(0.45)	(0.45)	完形、錆化が著しい
	Ｍ３３７	３８区	ＳＫ０８	鉄器	角釘		7.6	(0.4)	(0.45)	完形
	Ｍ３３８	３８区	ＳＫ１１	鉄器	角釘		3.05	(0.4)	(0.3)	完形
	Ｍ３３９	３８区	ＳＫ１２	鉄器	角釘		4.65	(0.45)	(0.5)	完形、錆化が著しい
	Ｍ３４０	３８区	ＳＫ１３	鉄器	角釘		5.7	(0.45)	(0.4)	完形、先端部木質あり
	Ｍ３４１	３８区	ＳＫ１３	鉄器	角釘		3.8	(0.3)	(0.35)	先端部欠損
	Ｍ３４２	３８区	包含層	鉄器	頭巻釘		6.5	(0.4)	(0.5)	先端部欠損
	Ｍ３４３	３９区	ＳＫ１０	鉄器	角釘		8.3	(0.45)	(0.5)	先端部欠損
	Ｍ３４４	１３区	ＳＫ１３	鉄器	不明		5.0	(0.55)	(1.1)	釘頭部・先端部欠損
	Ｍ３４６	２８区	ＳＸ０１	鉄器	折釘	平折釘	8.65	(0.8)	(1.2)	先端部欠損
図版１８７	Ｍ３８３	１４区	包含層	鉄器	折釘	平折釘	(3.85)	0.75	1.35	２／３程度残存
	Ｍ３８６	１４区	包含層	鉄器	切釘		6.95	0.45	0.85	完形
図版１９７	Ｍ５８３	南トレンチ	石垣	鉄器	切釘		7	0.35	0.5	先端部欠損

表11表　金属器属性表 (2) 鏃

図版番号	報告番号	調査区	遺構	素材	名称	全長（cm）	幅（cm）		残存等
図版１７２	Ｍ８２	１７区	ＳＫ１６	鉄器	目鏃	10.8	(0.4)	(0.38)	完形、２本付着
図版１８０	Ｍ２５２	３１区	ＳＤ１２	鉄器	鏃	5.4	(0.4)	(0.4)	先端部欠損
図版１８２	Ｍ３０４	３２区	ＳＸ０２	鉄器	鏃	3.4	(0.7)	(0.7)	完形
図版１８４	Ｍ３４７	２９区	ＳＫ１０９	鉄器	鏃	8.5	(0.95)	(1.2)	先端部欠損
図版１８４	Ｍ３４９	３８区	ＳＫ１２	鉄器	鏃	11.4	(1.3)	(2.05)	先端欠損
図版１８４	Ｍ３５０	３８区	ＳＫ１２	鉄器	鏃	8.2	(0.65)	(1.9)	先端欠損
図版１８６	Ｍ３６８	３８区	ＳＥ０１	鉄器	鏃	2.15	(0.25)	(0.3)	一部端部欠損

表12表　金属器属性表 (3) 煙管

図版番号	報告番号	調査区	遺構	素材	名称	全長	高さ	厚み	火皿径	雁首小口径	羅宇小口径	吸口小口径	残存等
図版１８６	Ｍ３７１	確認調査１８Ｇ	包含層	真鍮	吸口	6.5		0.07				(0.6)・(0.5)	吸口のみ残存
	Ｍ３７２	２区	包含層	真鍮	雁首	5.95	2.45	0.09	1.65	1.0			雁首のみ残存、火皿内の錆は、火皿冠か
	Ｍ３７３	３区	包含層	真鍮	吸口	6.1		0.09				0.95・(0.4)	吸口のみ残存
図版１８７	Ｍ３７８	10区	ＳＫ０７	真鍮	雁首	(6.2)	(2.55)	0.05		1.05			火皿が欠損した雁首
	Ｍ３８１	１３区	ＳＫ７３	真鍮	雁首	(2.55)	(2.4)	0.05					火皿が欠損した雁首
	Ｍ３８２	１４区	ＳＫ２９	真鍮	煙管	(12.5)	0.7	0.05			0.7	0.52	吸管・吸口のみ残存
	Ｍ３８５	１４区	包含層	真鍮	吸口	5.8		0.09				(0.85)・(0.4)	吸口のみ残存
	Ｍ３８８	１５区	ＳＫ０３	真鍮	雁首	(5.15)	(1.65)	0.05		0.95			火皿が欠損した雁首
	Ｍ３８９	１５区	ＳＫ０４	真鍮	雁首の肩付	(3.8)		0.18		0.8			肩付部分の雁首
	Ｍ３９３	２４区	包含層	真鍮	雁首	(6.15)	1.85	0.04		0.95			火皿が欠損した雁首
図版１８８	Ｍ３９６	２９区	ＳＫ０４	真鍮	吸口	5.85		0.03				0.8・0.4	吸口のみ残存
	Ｍ３９７	２９区	ＳＫ０４	真鍮	雁首の火皿	1.8		0.2	1.55				雁首のみ残存
	Ｍ３９９	２９区	包含層	真鍮	吸口	5.3		0.07				0.7・0.35	吸口のみ残存
	Ｍ４０１	３２区	包含層	真鍮	吸口	(4.65)		0.05				(1.0)・(0.65)	吸口のみ残存
	Ｍ４０３	３２区	包含層	真鍮	吸口	(2.85)		0.1				(0.9)・?	吸口のみ約１／２弱残存
	Ｍ４０４	３２区	包含層	真鍮	雁首	(4.1)	2.1	0.07	1.65	(0.7)			雁首のみ残存
	Ｍ４０９	３８区	ＳＫ１２	真鍮	雁首	(2.45)		0.1		0.6			火皿が欠損した雁首
	Ｍ４１０	３９区	ＳＫ０４	真鍮	吸口	(3.4)		0.03				0.8・(0.45)	吸口のみ残存
図版１９７	Ｍ５９５	東地区	焼土層	真鍮	雁首	3.9	1.5	0.12		0.9			雁首のみ残存

報告書抄録

よみがな	ひょうごついせき　に　（はまさき・しちのみやちくのちょうさ）
書　　名	兵庫津遺跡　Ⅱ　（浜崎・七宮地区の調査）
副書名	一般国道２号共同溝整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第270冊
編著者名	池田正男・岡田章一・菱田淳子・深江英憲・池田征弘・松岡千寿・長谷川眞
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652－0032　神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号　　TEL　078－531－7011
発行年月日	西暦2004（平成16）年３月19日

所収遺跡名	所在地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
兵庫津遺跡	兵庫県神戸市兵庫区兵庫町１丁目～東柳原町１丁目・七宮町１丁目	28105	本分第１章参照	34度40分6秒	135度10分9秒	本分第１章参照	本分第１章参照	一般国道２号共同溝整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
兵庫津遺跡（浜崎地区）	集落跡	鎌倉時代～室町時代 江戸時代～近・現代	井戸・土坑・柱穴・溝・石組施設・畠	土師器・瓦器・瓦質土器・須恵器・国産陶器・貿易陶磁・土製品・石製品・金属製品・木製品	倉庫状施設の基壇と考えられる石組施設 中世～近世の多量の遺物
（七宮地区）	港湾施設跡	江戸時代～明治時代	石垣	陶磁器・金属製品・木製品	入江の護岸に伴う石垣 船材の転用による土留め施設

兵庫県文化財調査報告　第270冊

神戸市兵庫区

兵庫津遺跡Ⅱ

一般国道２号共同溝整備事業に伴う埋蔵文化財文化財調査報告書

〔本文編〕

平成16年３月19日　発行

（２００４年）

編　　集　　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652－0032　神戸市兵庫区荒田町２丁目１－５

発　　行　　兵庫県教育委員会

〒650－0011　神戸市中央区下山手通５丁目10－１

印　　刷　　株式会社　廣済堂 神戸営業所

〒657－0834　神戸市灘区泉通６丁目２－15

兵庫県文化財調査報告　第270冊

神戸市兵庫区

兵庫津遺跡Ⅱ

（浜崎・七宮地区の調査）

一般国道２号共同溝整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

〔図 版 編〕

2004年3月
兵庫県教育委員会

兵庫県文化財調査報告　第270冊

神戸市兵庫区

兵庫津遺跡Ⅱ

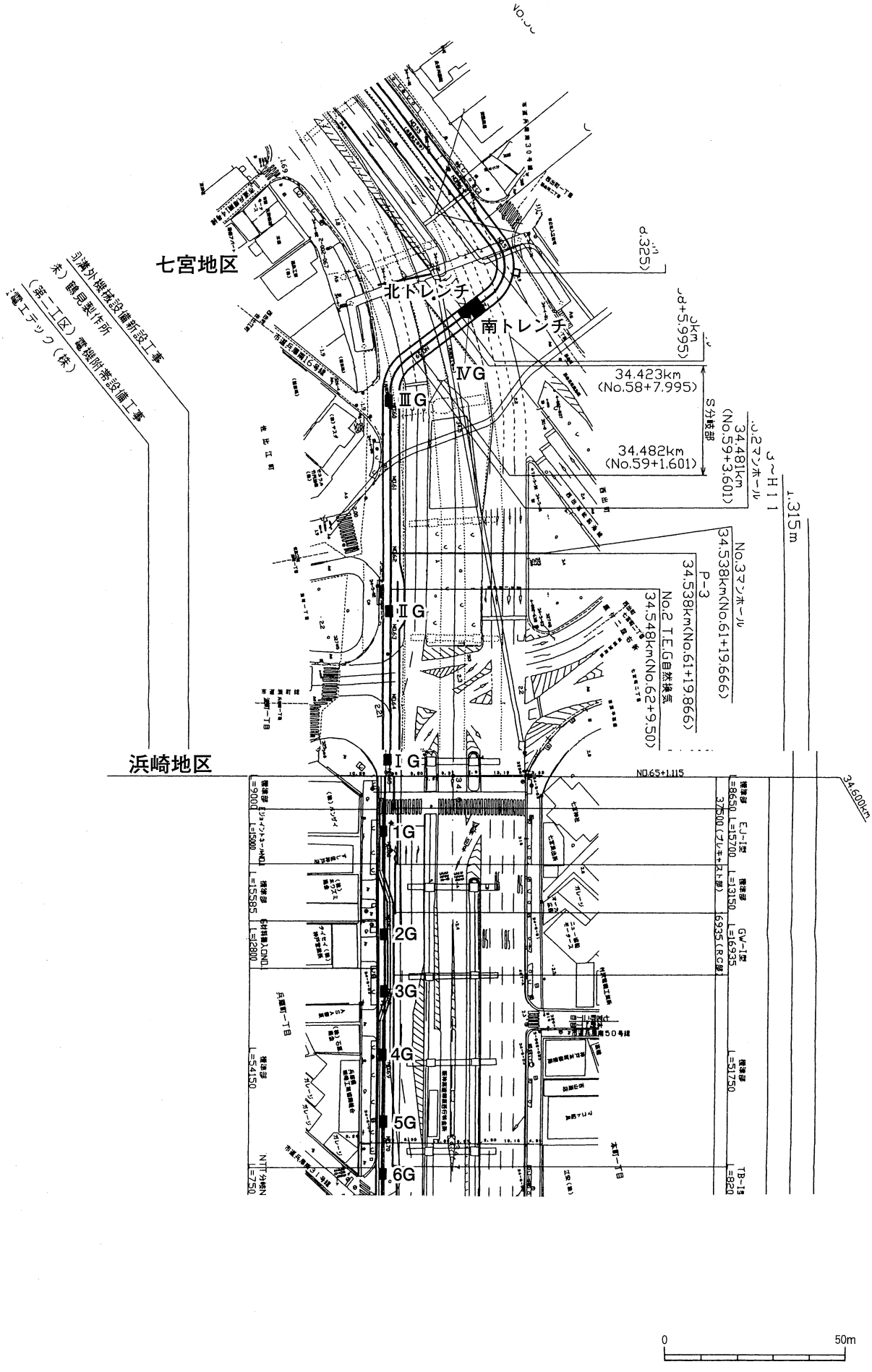
(浜崎・七宮地区の調査)

一般国道2号共同溝整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

〔図 版 編〕

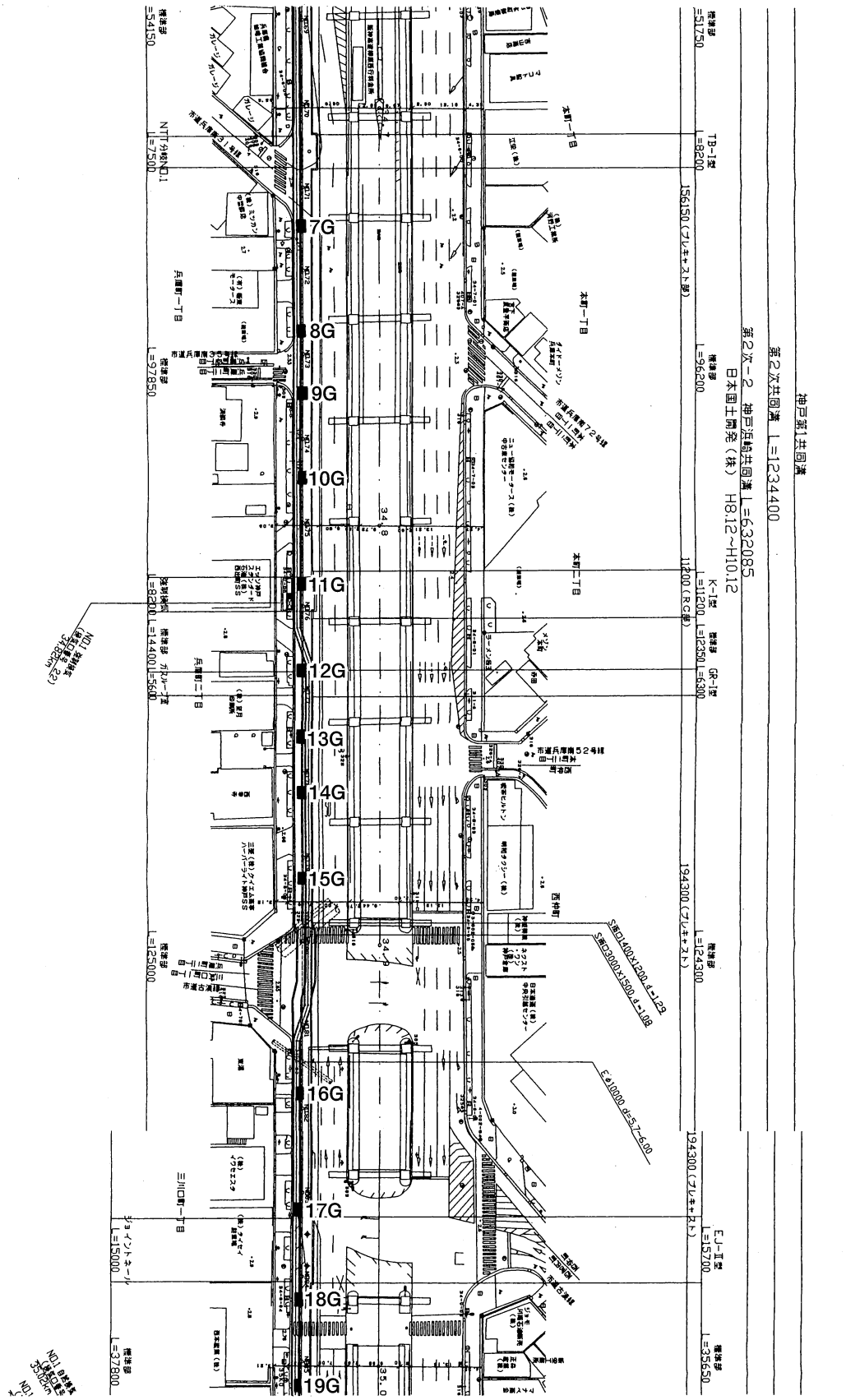
2004年3月
兵庫県教育委員会

図　　版

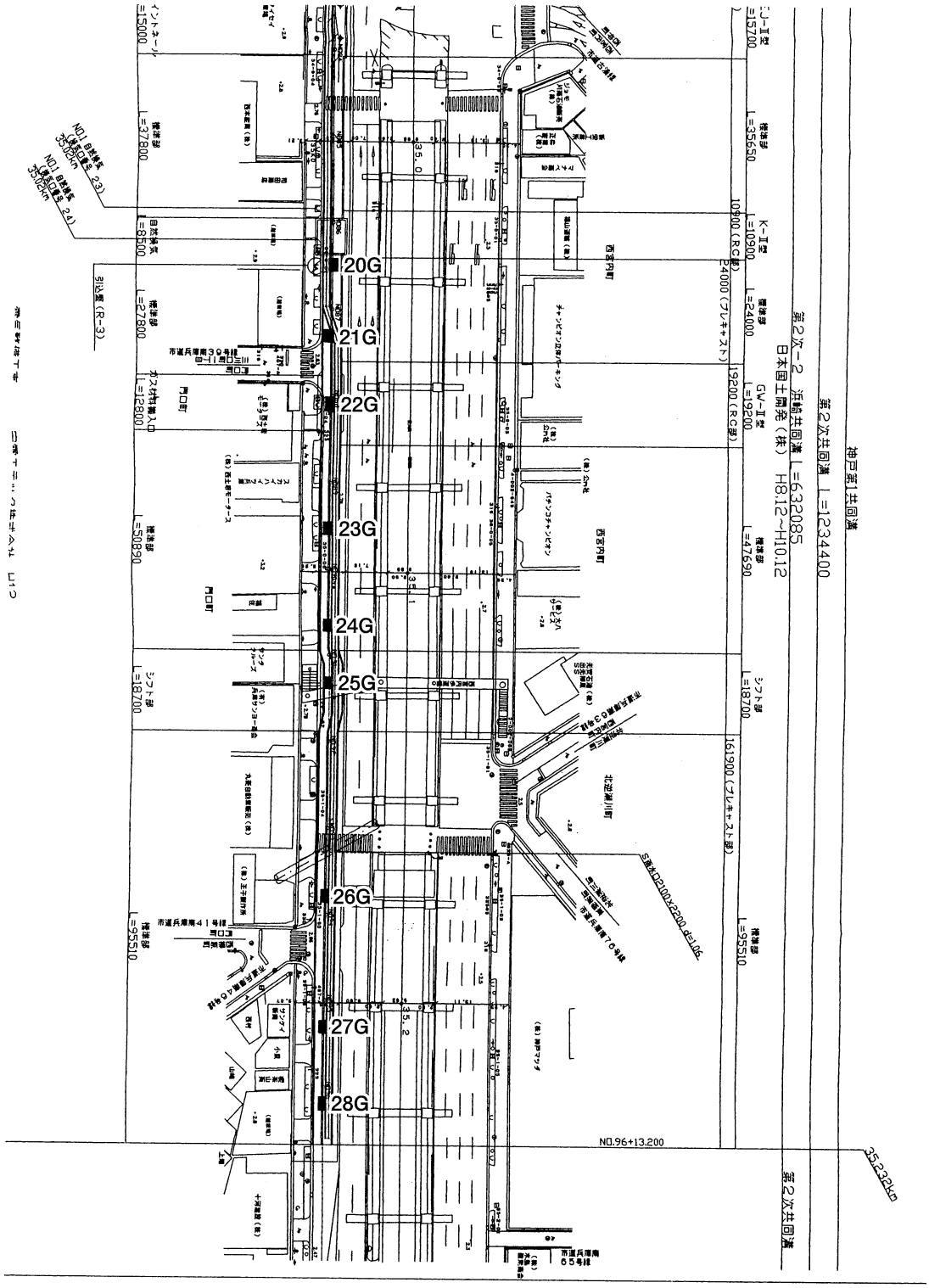


浜崎・七宮地区確認調査トレンチ・グリッド位置図①

図版2



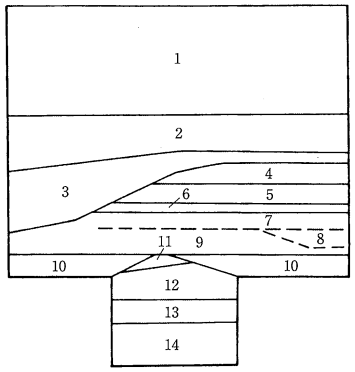
浜崎・七宮地区確認調査トレンチ・グリッド位置図②



浜崎・七宮地区確認調査トレンチ・グリッド位置図③

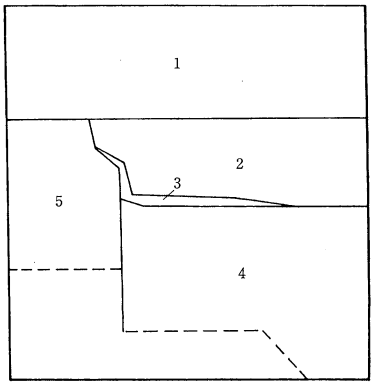
図版4

3G



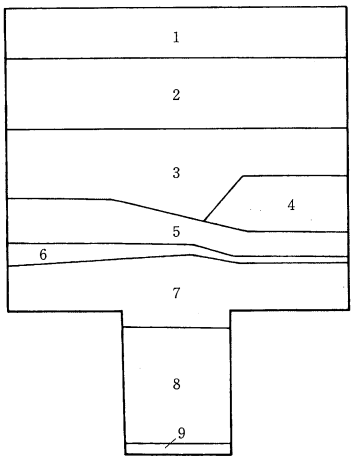
1　舗装
2　攪乱層（上部に焼土面あり）
3　暗灰色シルト混じり粗砂
4　暗灰褐色シルト（細砂～粗砂混じる）
5　焼土（炭化物を多量に含む粗砂層）
6　明黄褐色粗砂（上部被熱）
7　明黄灰色粗砂～細砂
8　明黄灰色粗砂～細砂（炭化物・焼土ブロック含む）
9　明黄灰色粗砂～細砂
10　褐色シルト混じり粗砂（炭化物・焼土ブロック多量に含む）
11　黄灰色粗砂
12　黄褐色粗砂～細砂
13　灰褐色シルト（粗砂混じり）
14　黄褐色粗砂
※3～11は近世包含層　13は中世包含層

5G



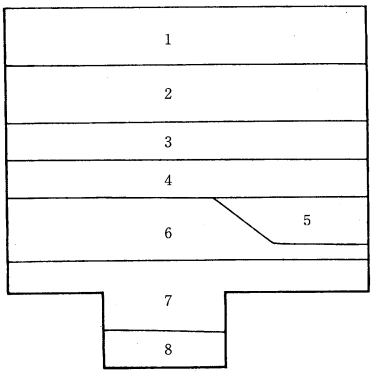
1　舗装
2　褐灰色粗砂
3　褐灰色シルト質粗砂（炭混じる）
4　灰褐色粗砂
5　黄褐色粗砂・灰褐色粗砂の互層
※2・3は土坑（SK01）埋土

10G



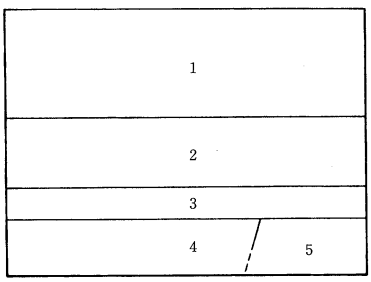
1　舗装
2　砕石
3　暗茶褐色砂質土（焼土混じる）
4　灰白色粗砂
5　青灰褐色砂質土
6　灰褐色粗砂
7　茶褐色砂質土
8　茶褐色砂質土・灰褐色粗砂の互層（瓦器・須恵器等含む）
9　赤褐色粗砂
※3～6は近世包含層　8は中世包含層

15G



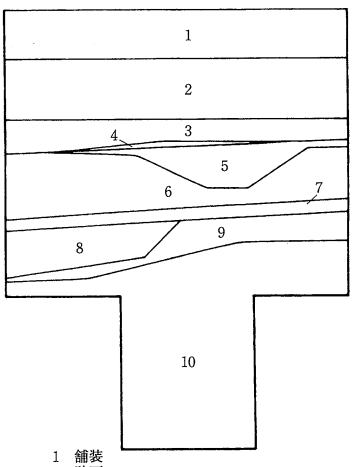
1　舗装
2　砕石
3　茶褐色砂質土
4　黄褐色土（焼土・瓦・土器片含む）
5　茶褐色土（瓦・礫含む）
6　茶褐色砂質土（粘質土混じる）
7　暗茶褐色砂質土（瓦・土器多量に含む）
8　茶灰色細砂
※3・4は近世包含層　5は土坑（SK01）の埋土
7は中世包含層

20G



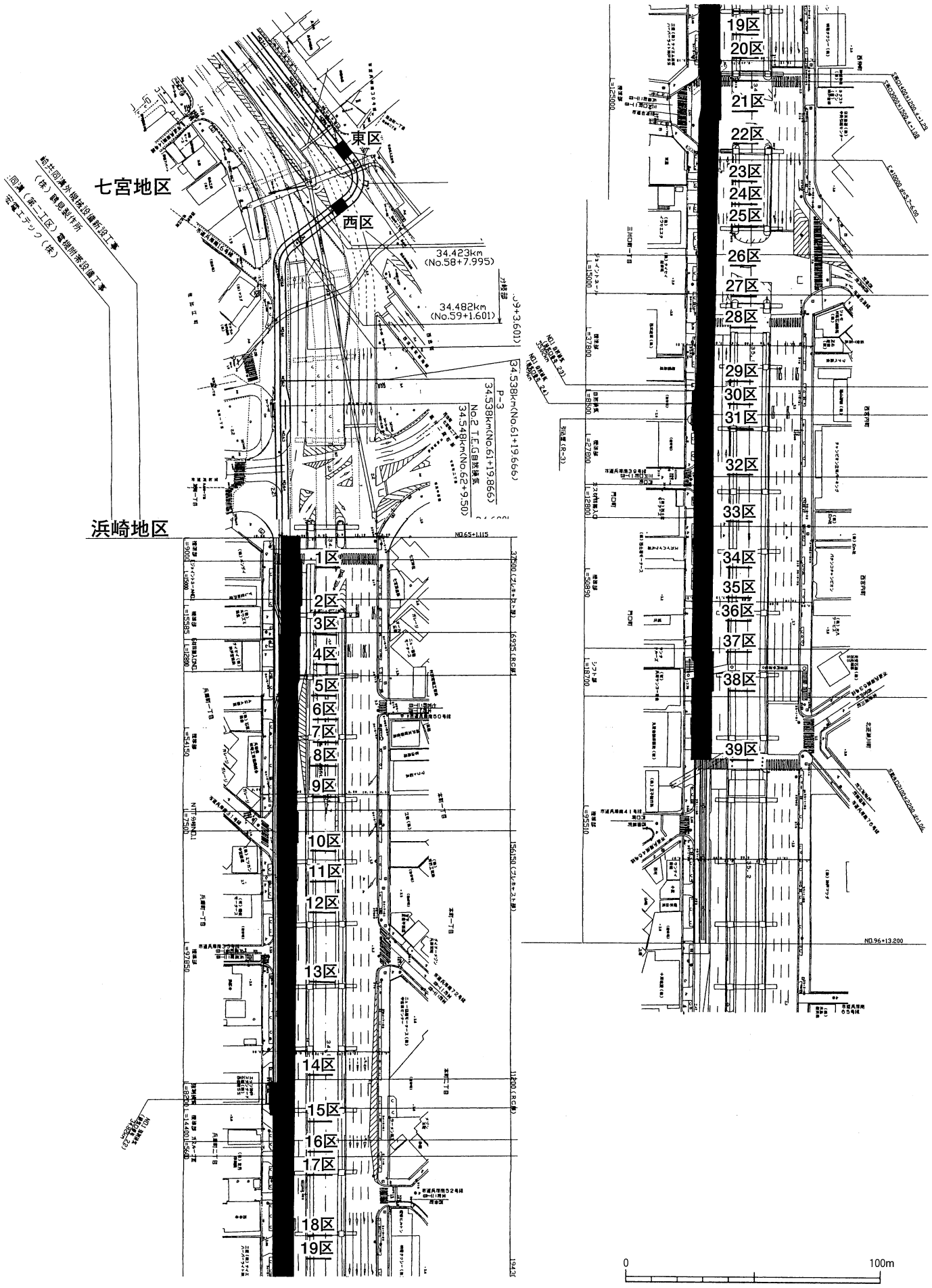
1　舗装
2　攪乱
3　青灰色粗砂
4　茶褐色シルト混じり粗砂
5　淡黄灰色粗砂
※3は近世包含層　4は土坑埋土　5は近世遺構面ベース層

25G



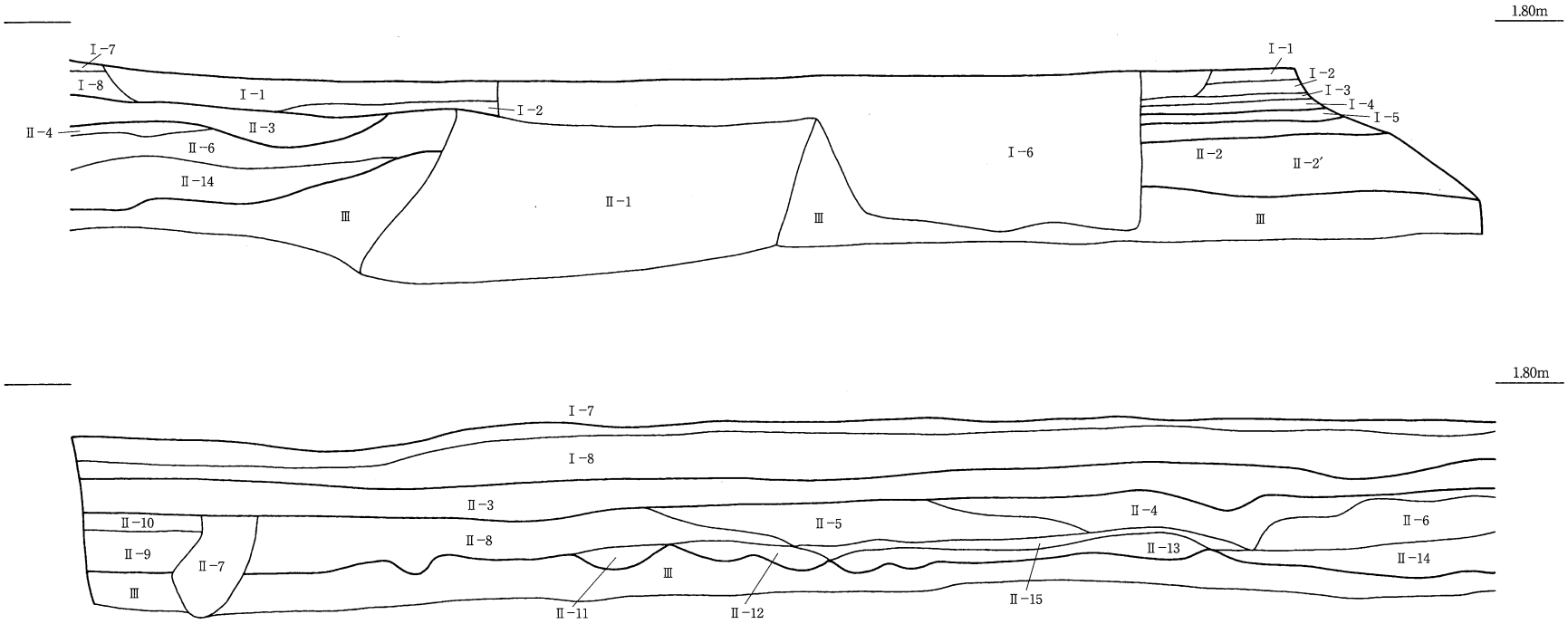
1　舗装
2　砕石
3　茶褐色粘質土
4　焼土
5　黄灰色粗砂
6　暗灰色細砂混じり粘質土（土師皿含む）
7　暗茶褐色砂質土
8　茶灰色砂質土
9　明茶色粗砂（土壌化）
10　灰白色粗砂
※3～5は近世包含層　6は中世包含層
7は中世遺構面か？　8は土坑埋土か？

浜崎地区主要グリッド断面図

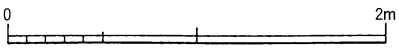


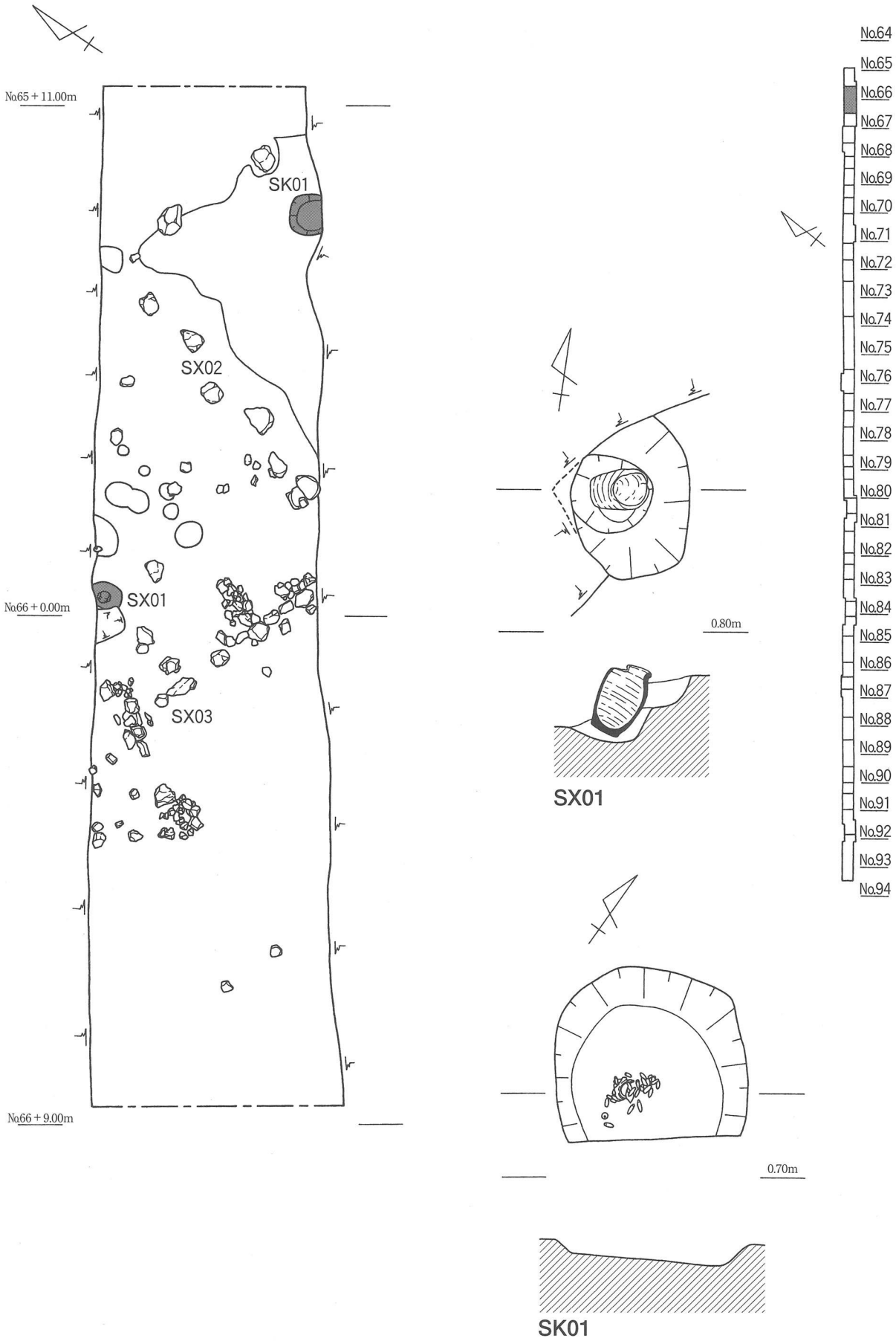
浜崎・七宮地区全面調査区位置図

浜崎地区主要調査区断面図



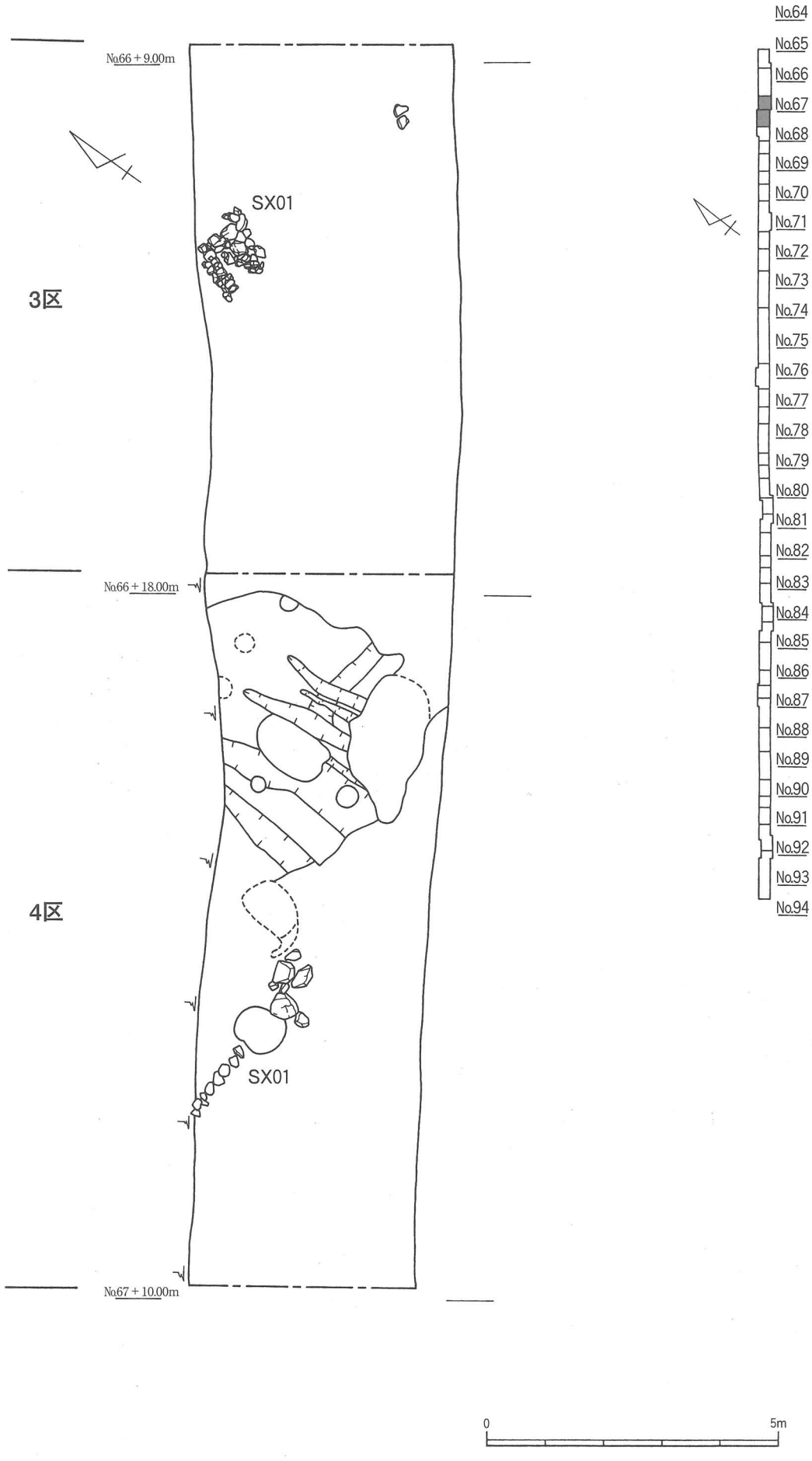
Ⅰ－1	2.5Y	3/3	暗オリーブ褐色砂質土	Ⅱ－1	2.5Y	4/6	オリーブ褐色砂質土	Ⅲ 10YR 8/4 浅黄橙色砂
Ⅰ－2	2.5Y	6/6	明黄褐色砂	Ⅱ－2	10YR	2/3	黒褐色砂（炭・土器多量に含む）	
Ⅰ－3	2.5Y	2/1	黒色砂質土	Ⅱ－2′	10YR	2/3	黒褐色砂	
Ⅰ－4	2.5Y	8/1	灰白色粘質土	Ⅱ－3	2.5Y	5/6	暗オリーブ褐色粘質土	
Ⅰ－5	2.5Y	4/2	暗灰黄色砂	Ⅱ－4	7.5YR	3/4	暗褐色粘質土	
Ⅰ－6	瓦礫含む黒～灰色土（近代攪乱か？）			Ⅱ－5	10YR	4/4	褐色砂質土	
Ⅰ－7	2.5Y	7/4	浅黄色砂	Ⅱ－6	2.5Y	3/2	黒褐色砂質土	
Ⅰ－8	2.5Y	5/6	黄褐色砂	Ⅱ－7	10YR	4/1	褐灰色土	
				Ⅱ－8	2.5Y	4/3	にぶい褐色粘質土	
				Ⅱ－9	10YR	4/3	にぶい黄褐色砂	
				Ⅱ－10	2.5Y	5/6	黄褐色砂	
				Ⅱ－11	2.5Y	3/1	黒褐色砂	
				Ⅱ－12	2.5Y	5/6	黄褐色砂	
				Ⅱ－13	2.5Y	3/1	黒褐色砂	
				Ⅱ－14	2.5Y	4/2	暗灰黄色砂	



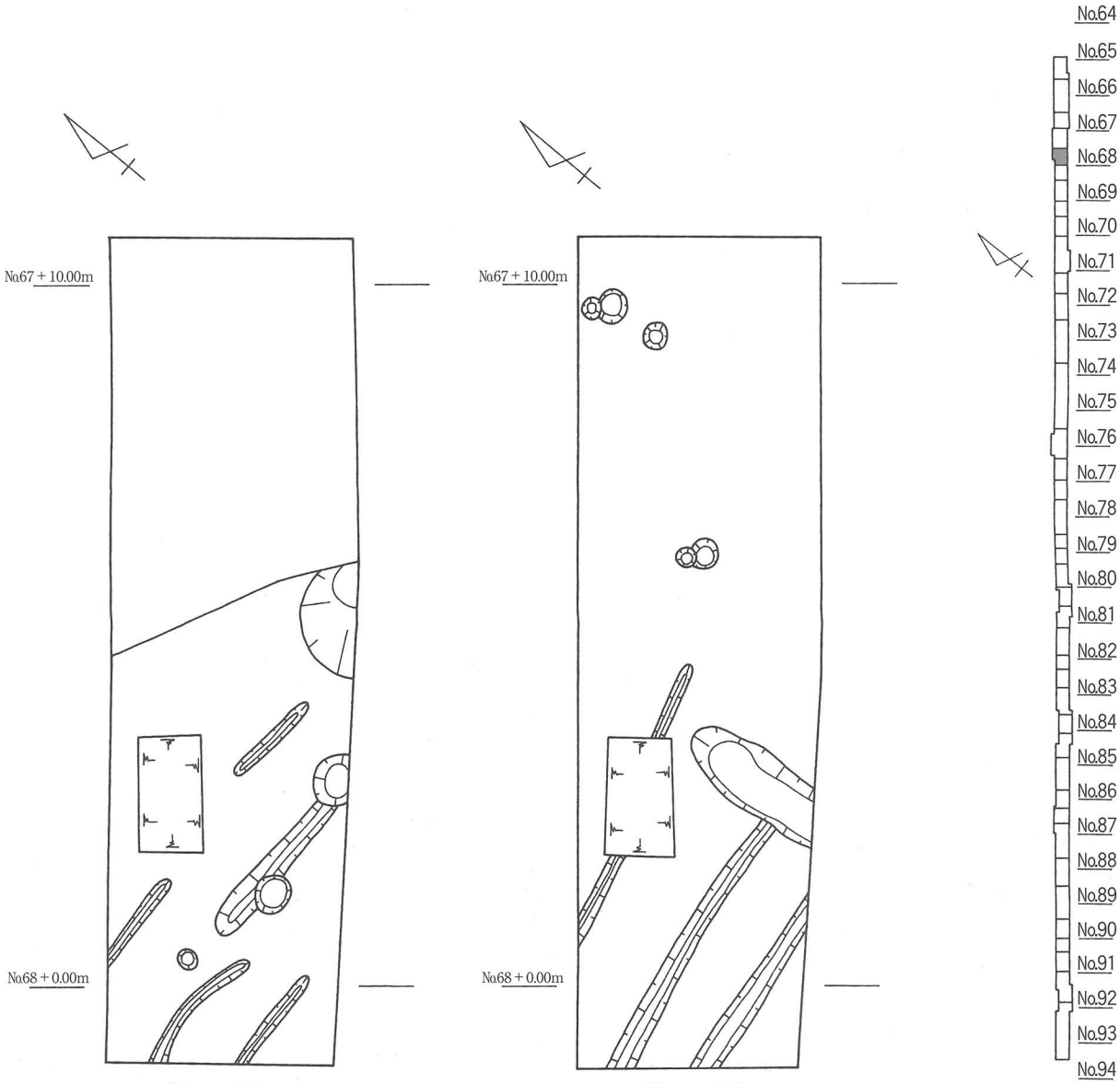

No.65＋11.00m
SK01
SX02
SX01
SX03
No.66＋0.00m
No.66＋9.00m
No.64
No.65
No.66
No.67
No.68
No.69
No.70
No.71
No.72
No.73
No.74
No.75
No.76
No.77
No.78
No.79
No.80
No.81
No.82
No.83
No.84
No.85
No.86
No.87
No.88
No.89
No.90
No.91
No.92
No.93
No.94
0.80m
SX01
0.70m
SK01
0
5m
0
1m

2区遺構配置図・平面図

図版8



3・4区遺構配置図

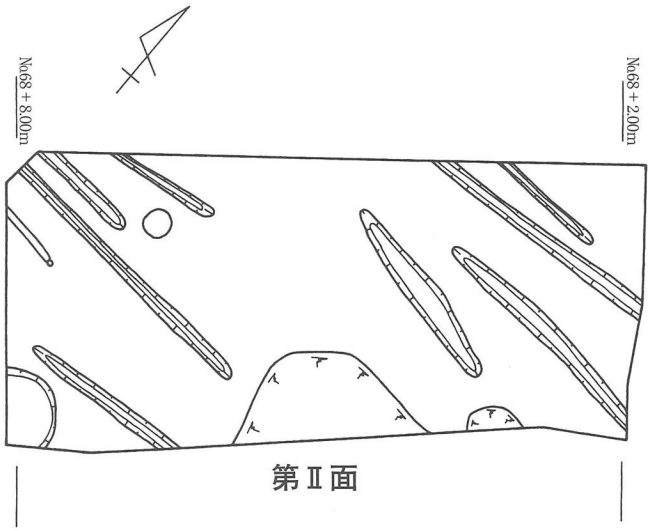


第Ⅱa面

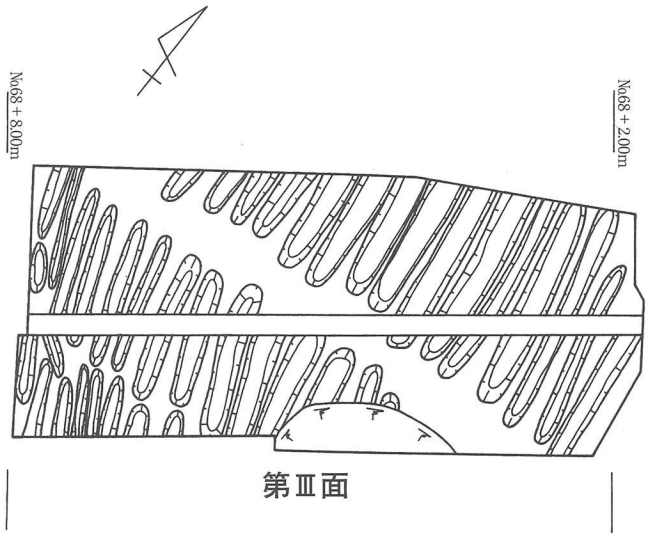
第Ⅱb面

5区遺構配置図

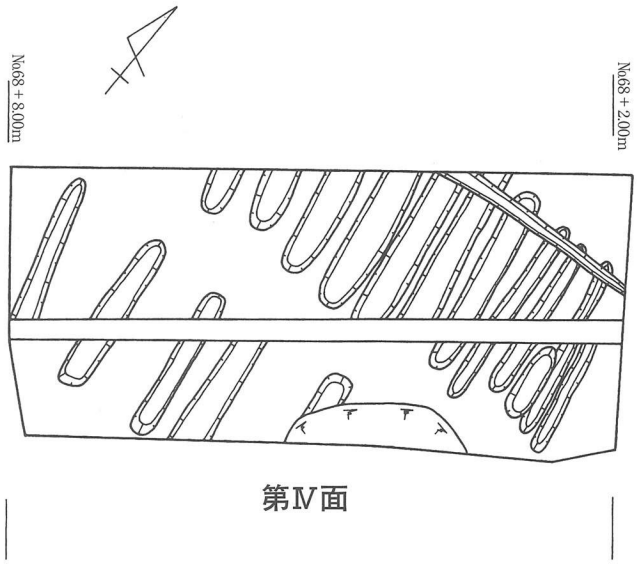
図版10



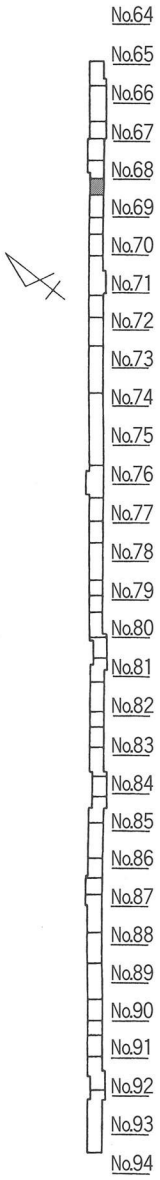
第Ⅱ面



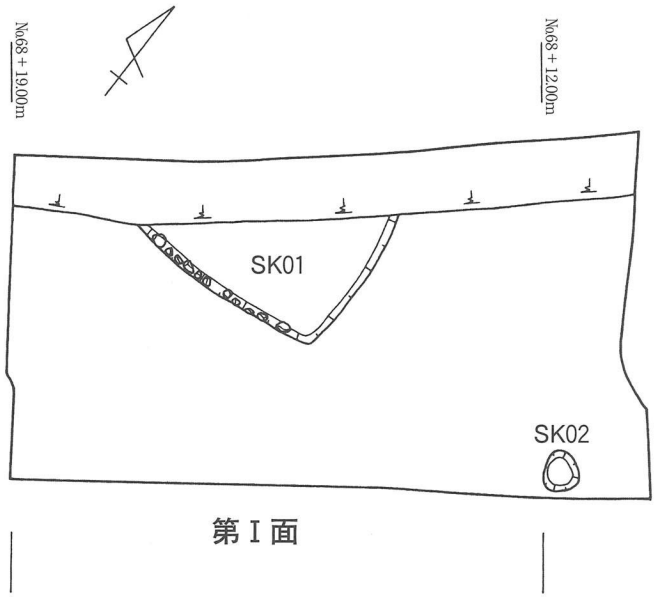
第Ⅲ面



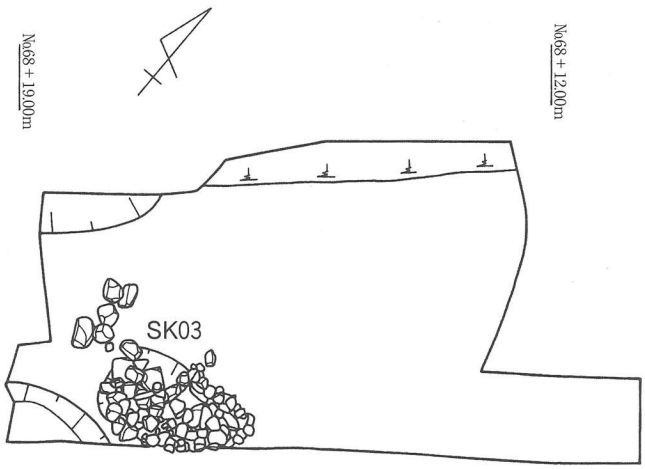
第Ⅳ面



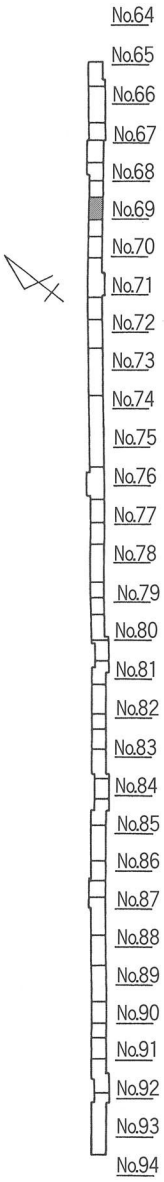
6区遺構配置図

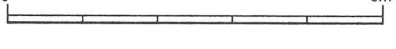


第Ⅰ面

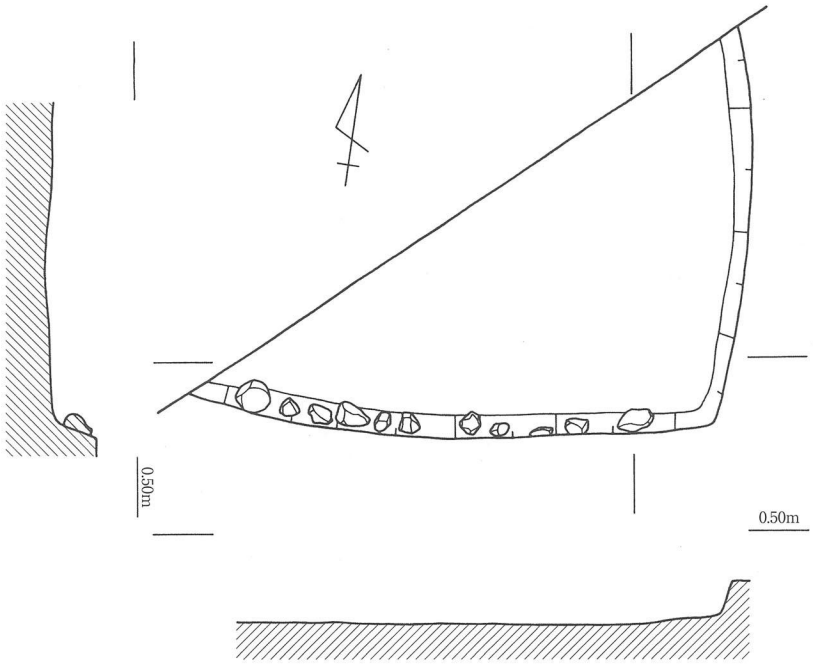


第Ⅱ面

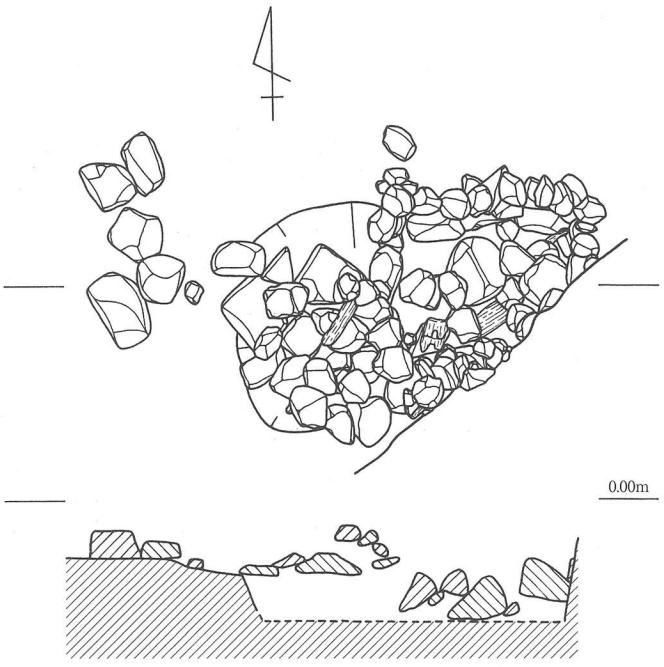




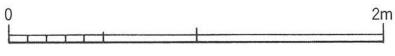
7区遺構配置図



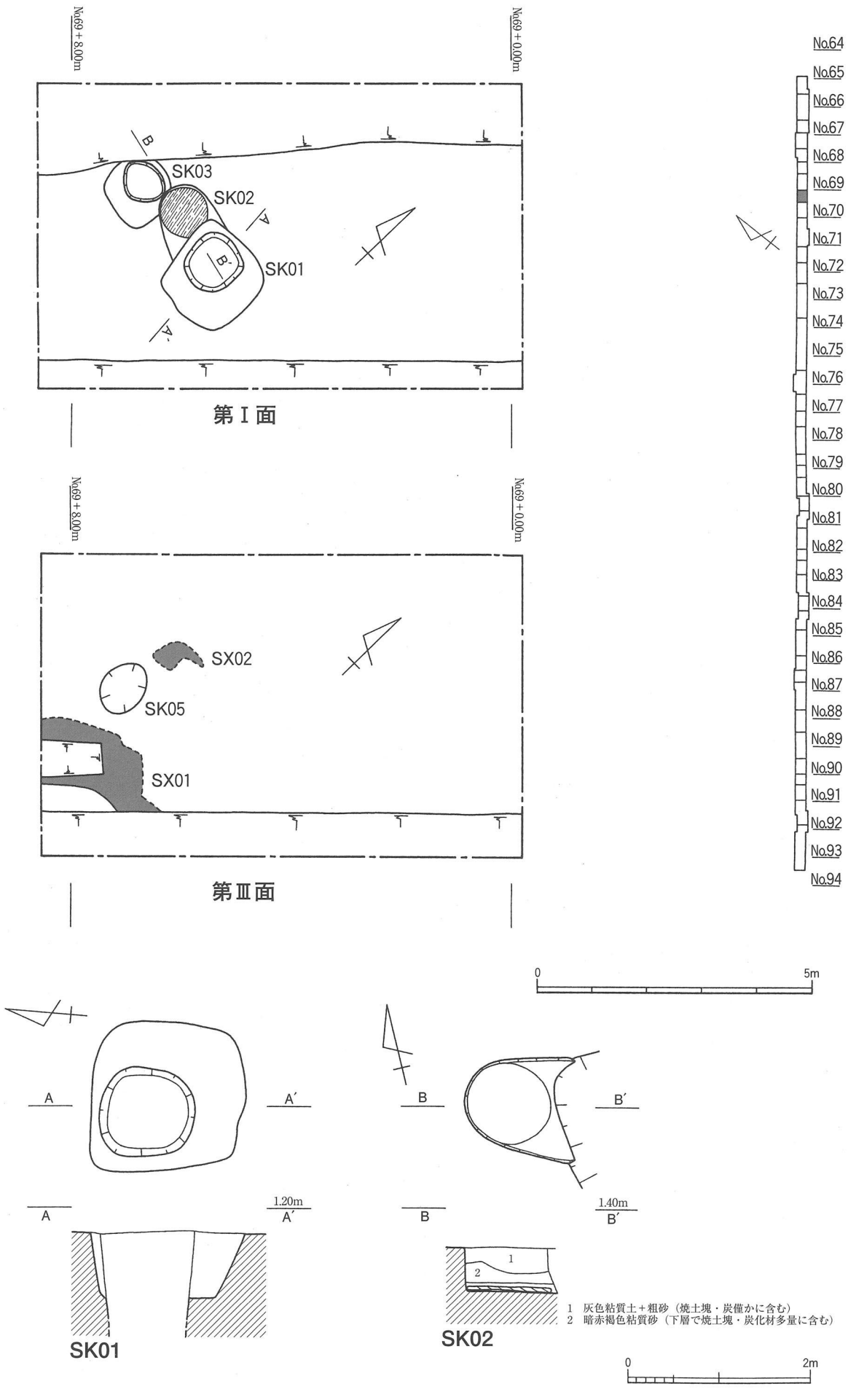
SK01



SK03

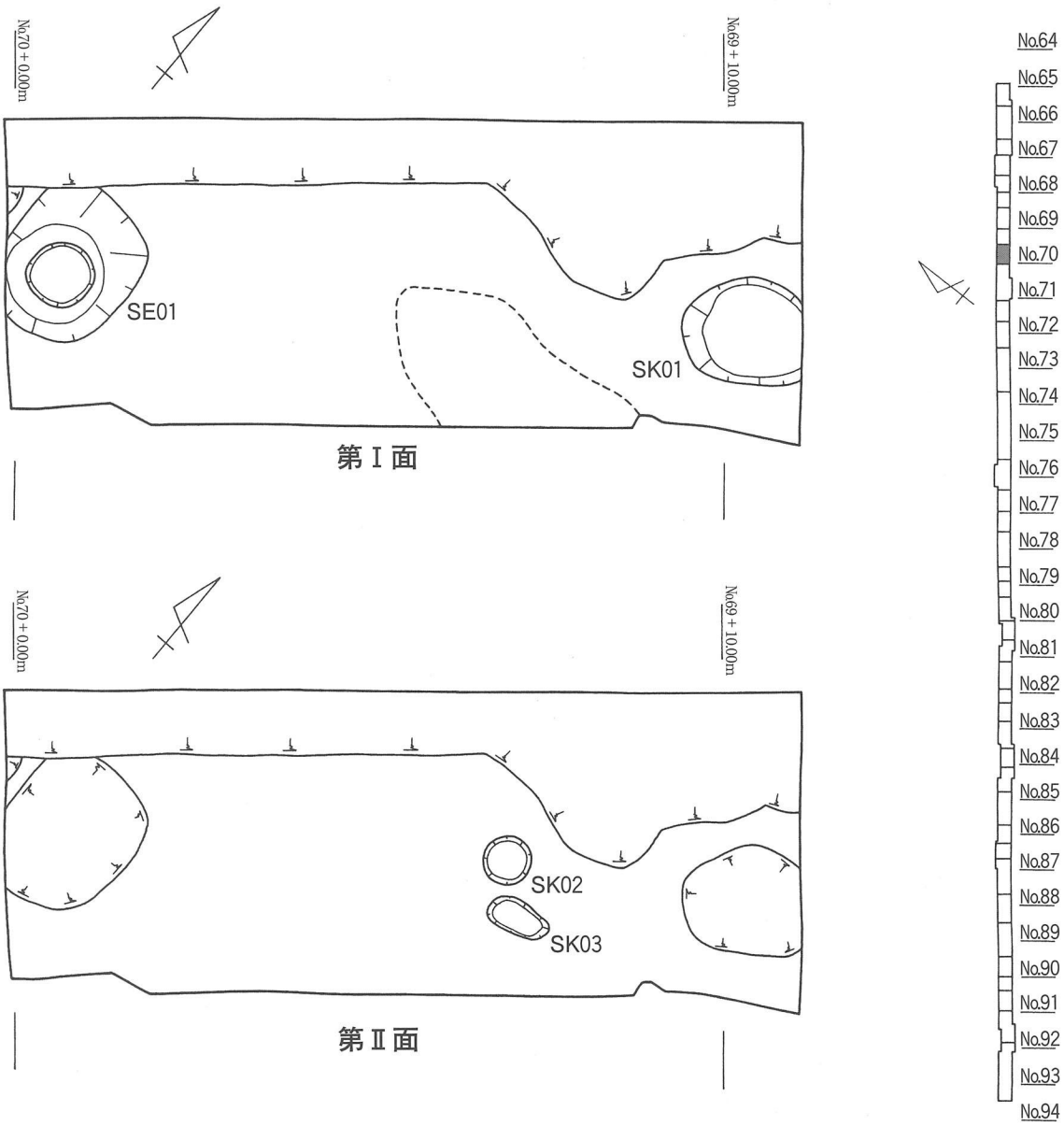


7区遺構平面図

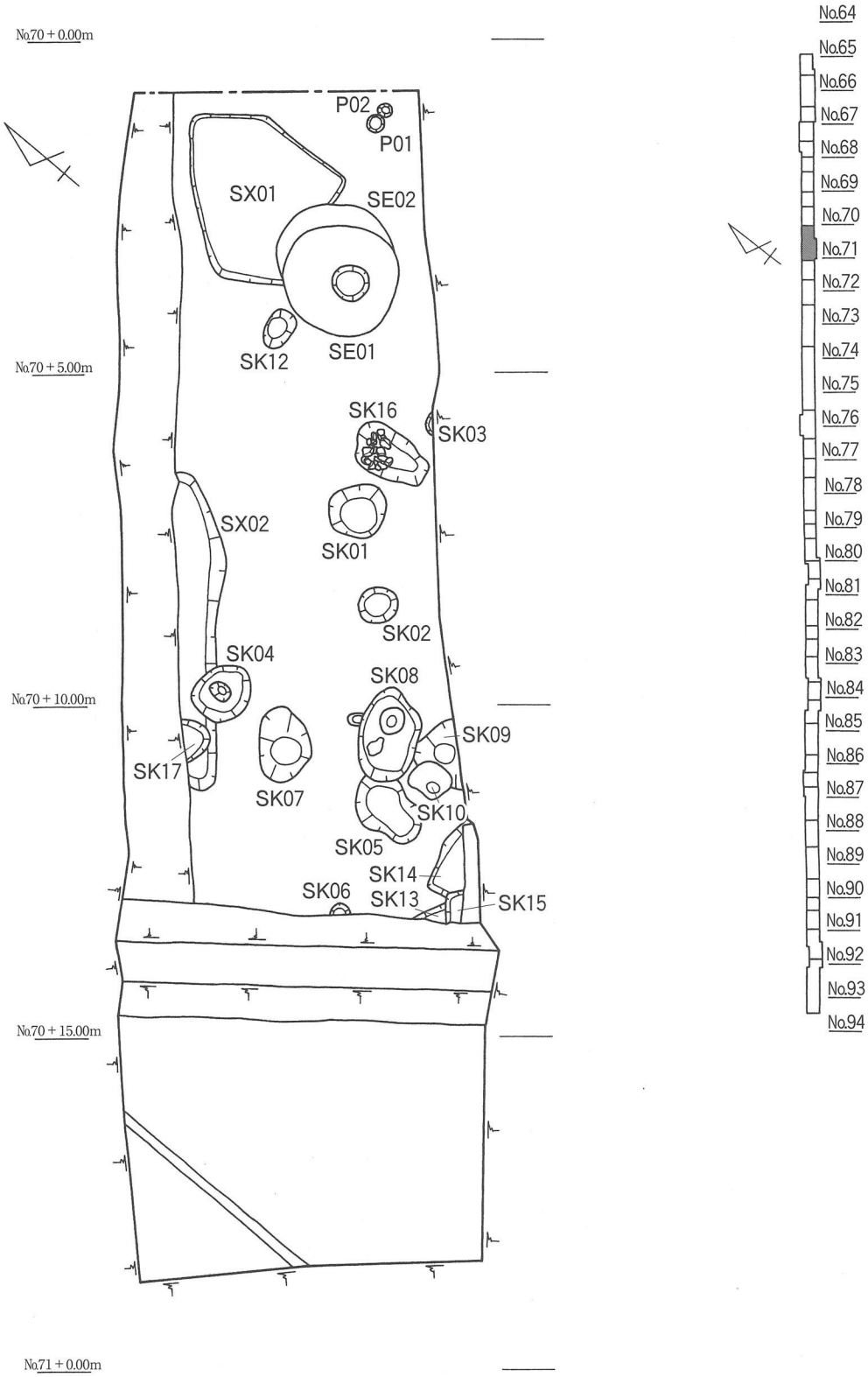

No.69＋8.00m
No.69＋0.00m
B
SK03
SK02
A
B′
SK01
A′
第Ⅰ面
No.69＋8.00m
No.69＋0.00m
SX02
SK05
SX01
第Ⅲ面
No.64
No.65
No.66
No.67
No.68
No.69
No.70
No.71
No.72
No.73
No.74
No.75
No.76
No.77
No.78
No.79
No.80
No.81
No.82
No.83
No.84
No.85
No.86
No.87
No.88
No.89
No.90
No.91
No.92
No.93
No.94
0
5m
A
A′
1.20m
A
A′
SK01
B
B′
1.40m
B
B′
1
2
SK02
1 灰色粘質土＋粗砂（焼土塊・炭僅かに含む）
2 暗赤褐色粘質砂（下層で焼土塊・炭化材多量に含む）
0
2m

8区遺構配置図・平面図

図版14

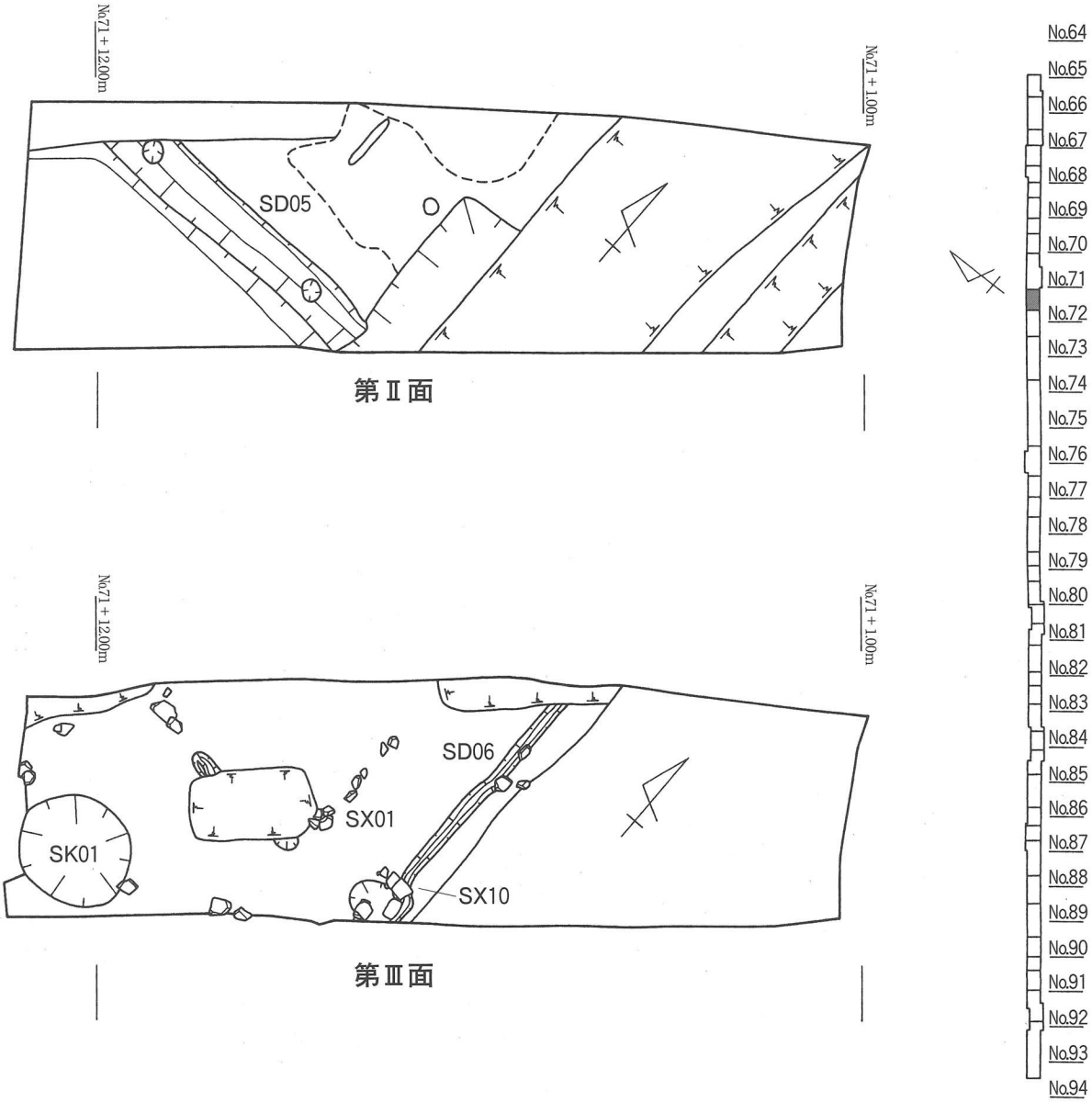


9区遺構配置図

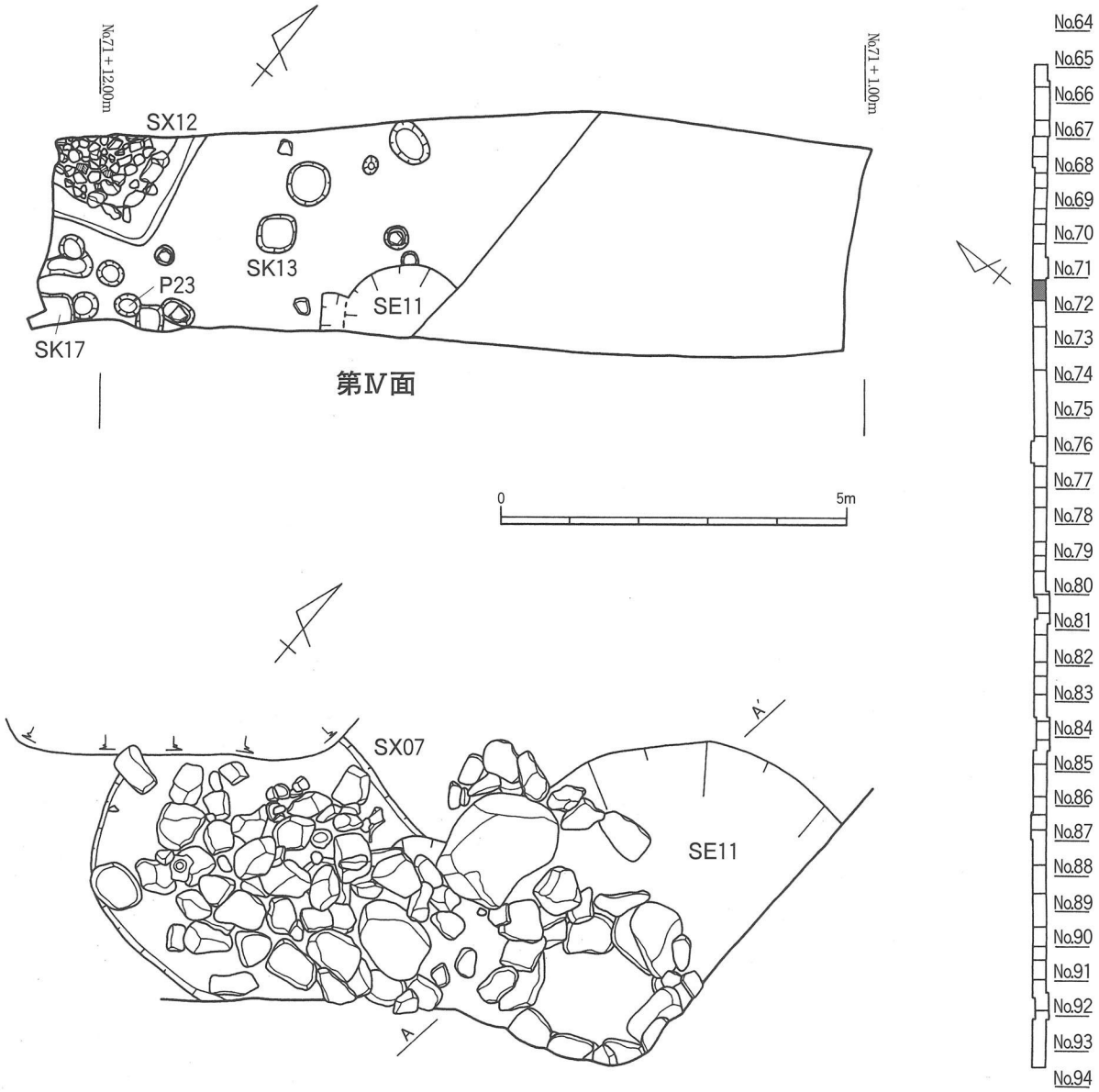

No.70＋0.00m
No.70＋5.00m
No.70＋10.00m
No.70＋15.00m
No.71＋0.00m
P02
P01
SX01
SE02
SE01
SK12
SK16
SK03
SX02
SK01
SK02
SK04
SK08
SK09
SK17
SK07
SK10
SK05
SK14
SK06
SK13
SK15
No.64
No.65
No.66
No.67
No.68
No.69
No.70
No.71
No.72
No.73
No.74
No.75
No.76
No.77
No.78
No.79
No.80
No.81
No.82
No.83
No.84
No.85
No.86
No.87
No.88
No.89
No.90
No.91
No.92
No.93
No.94
0
5m

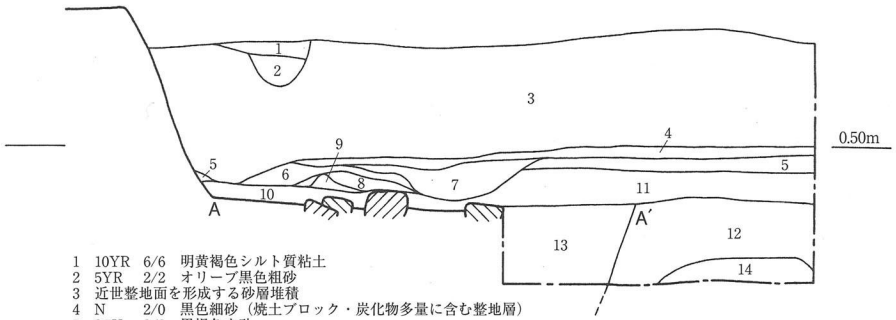
10区遺構配置図

図版16



11区遺構配置図①

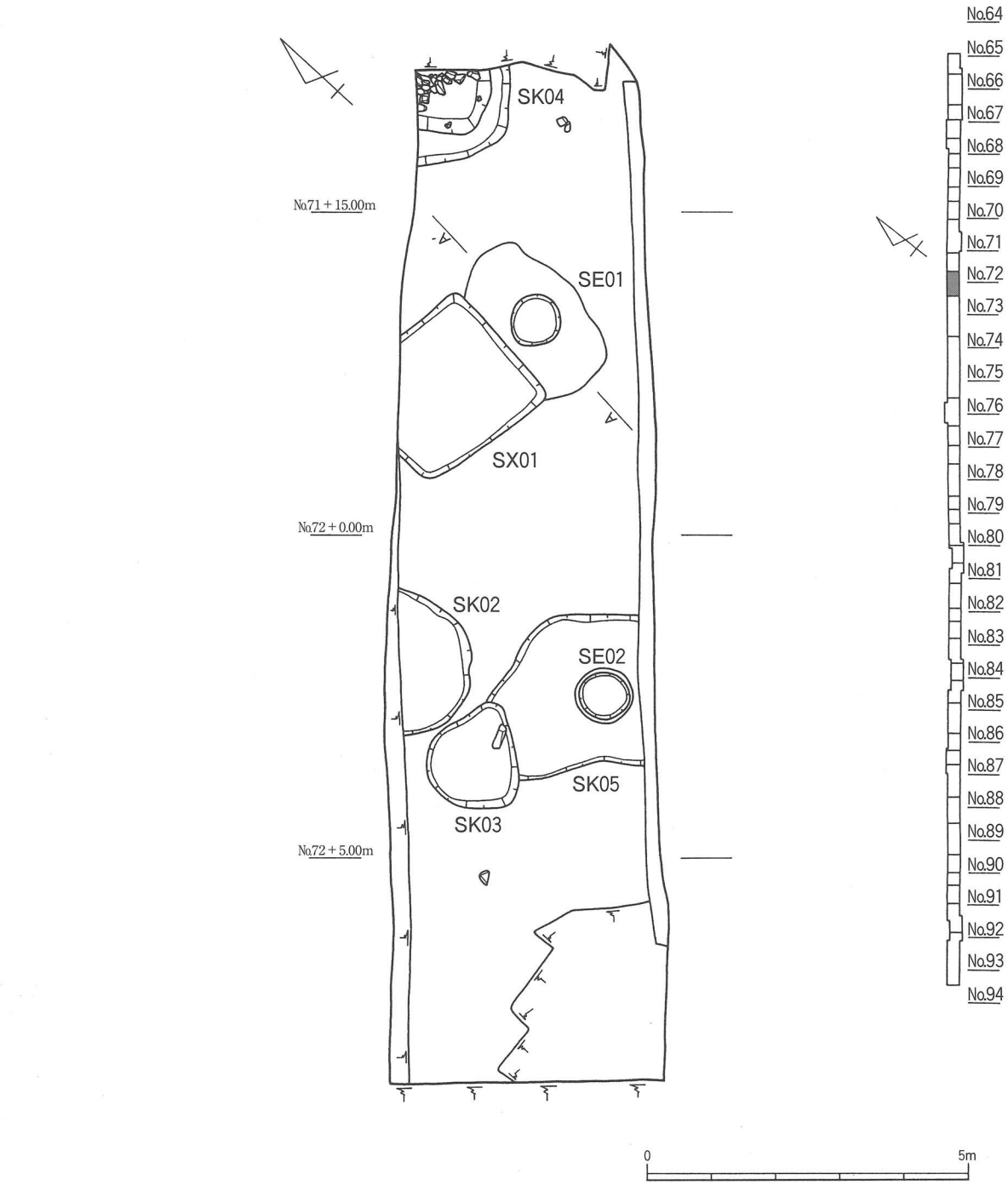


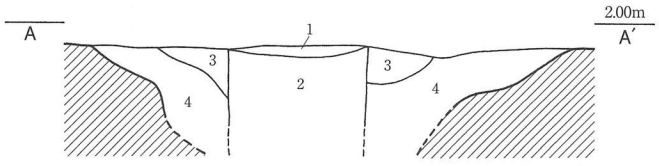


1 10YR 6/6 明黄褐色シルト質粘土
2 5YR 2/2 オリーブ黒色粗砂
3 近世整地面を形成する砂層堆積
4 N 2/0 黒色細砂（焼土ブロック・炭化物多量に含む整地層）
5 2.5Y 3/2 黒褐色中砂
6 7.5Y 6/1 灰色細砂
7 7.5Y 6/1 灰色細砂（粘土ブロック・礫・小礫含む）
8 7.5Y 6/1 灰色細砂（一部酸化部分が見られる）
9 5Y 6/4 にぶい黄色シルト混じり細砂
10 5Y 6/2 灰オリーブ色中砂混じり細砂
11 2.5Y 3/1 黒褐色細砂～中砂
12 N 2/0 黒色細砂～中砂
13 10YR 3/2 黒褐色中砂
14 5Y 7/2 灰白細砂～中砂（下部に酸化が見られる）

0
1m

11区遺構配置図②・平面図



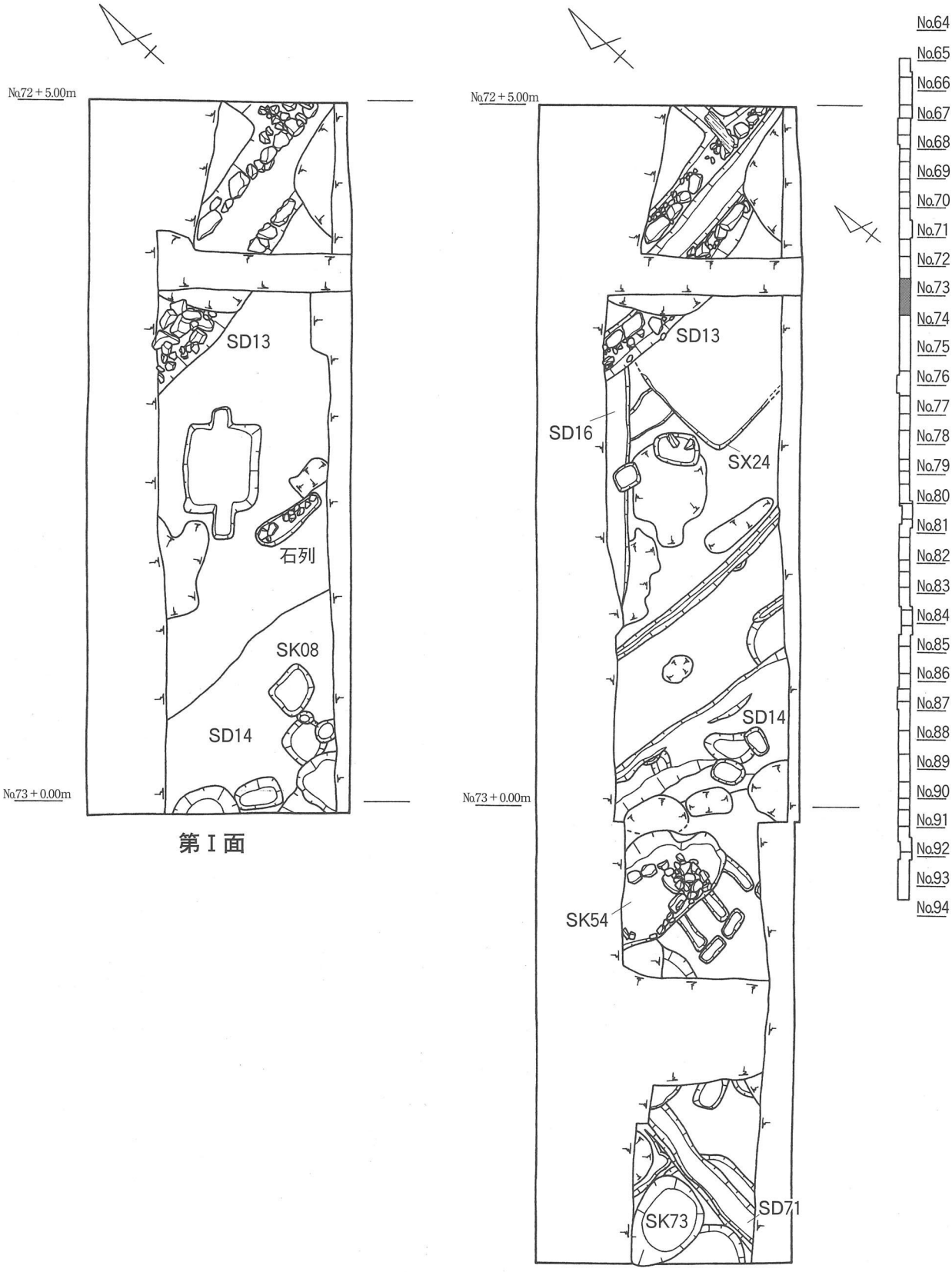


SE01

1　2.5Y　3/2　黒褐色粗砂（炭化粒・黄灰色粘土ブロック少量含む）
2　10YR　3/3　暗褐色粗砂（炭化粒少量含む）
3　2.5Y　7/6　明黄褐色粗砂
4　10YR　3/2　黒褐色シルト質粗砂

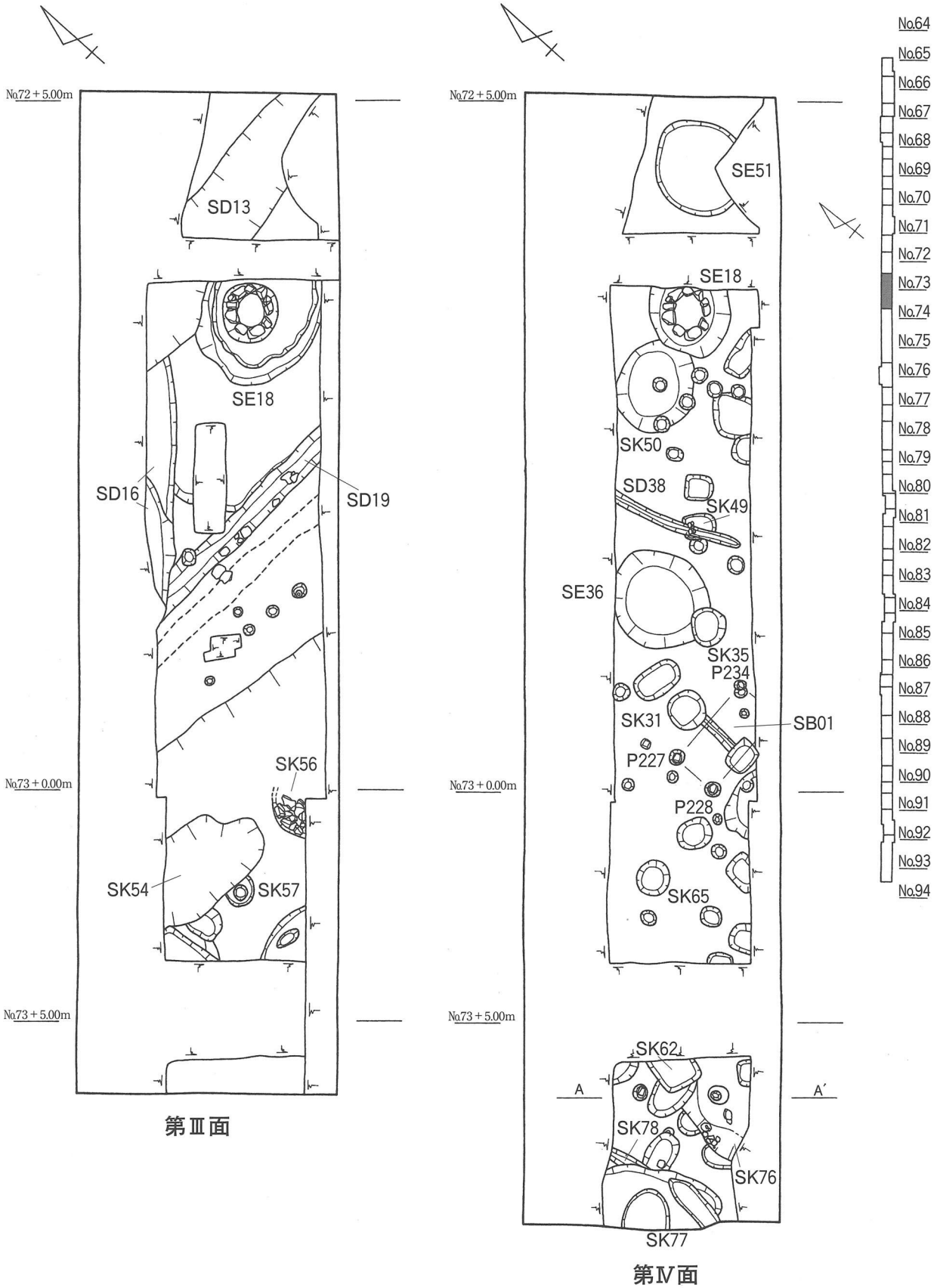
0　2m

12区遺構配置図

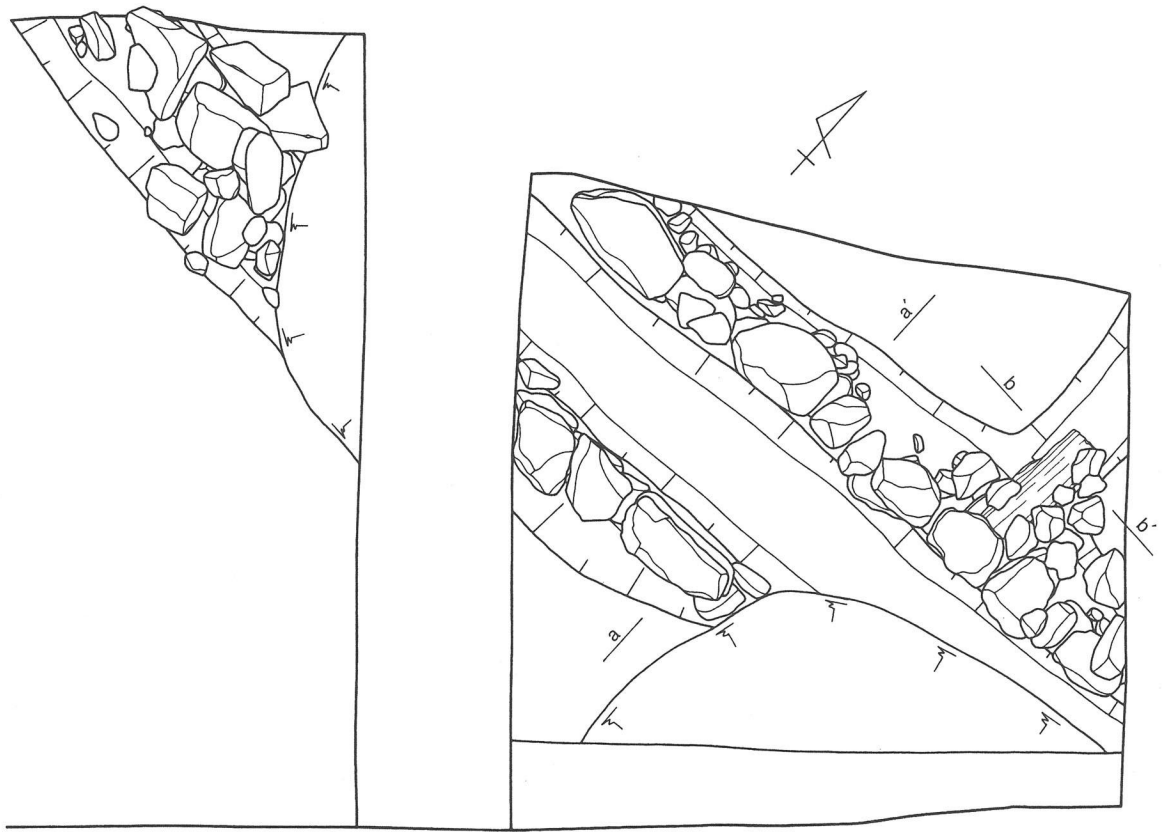

No.72＋5.00m
No.73＋0.00m
SD13
石列
SK08
SD14
第Ⅰ面
No.72＋5.00m
No.73＋0.00m
SD13
SD16
SX24
SD14
SK54
SK73
SD71
第Ⅱ面
No.64
No.65
No.66
No.67
No.68
No.69
No.70
No.71
No.72
No.73
No.74
No.75
No.76
No.77
No.78
No.79
No.80
No.81
No.82
No.83
No.84
No.85
No.86
No.87
No.88
No.89
No.90
No.91
No.92
No.93
No.94
0
2m

13区遺構配置図①

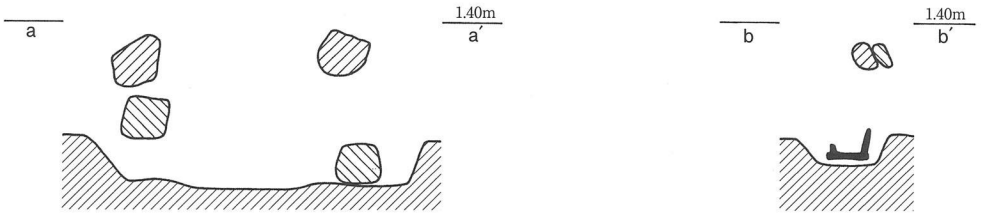
図版20

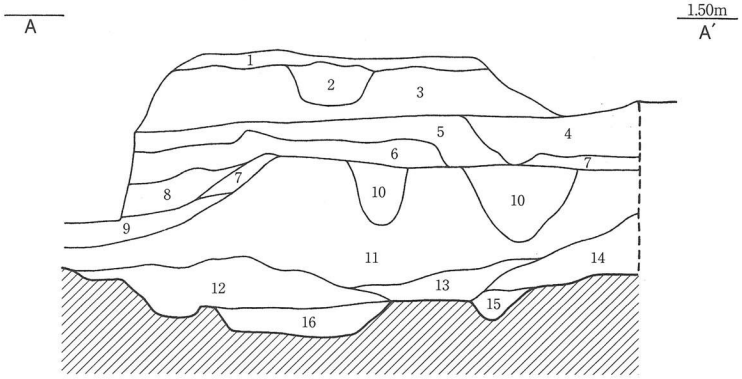


13区遺構配置図②

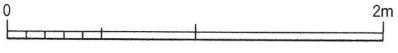


SD13



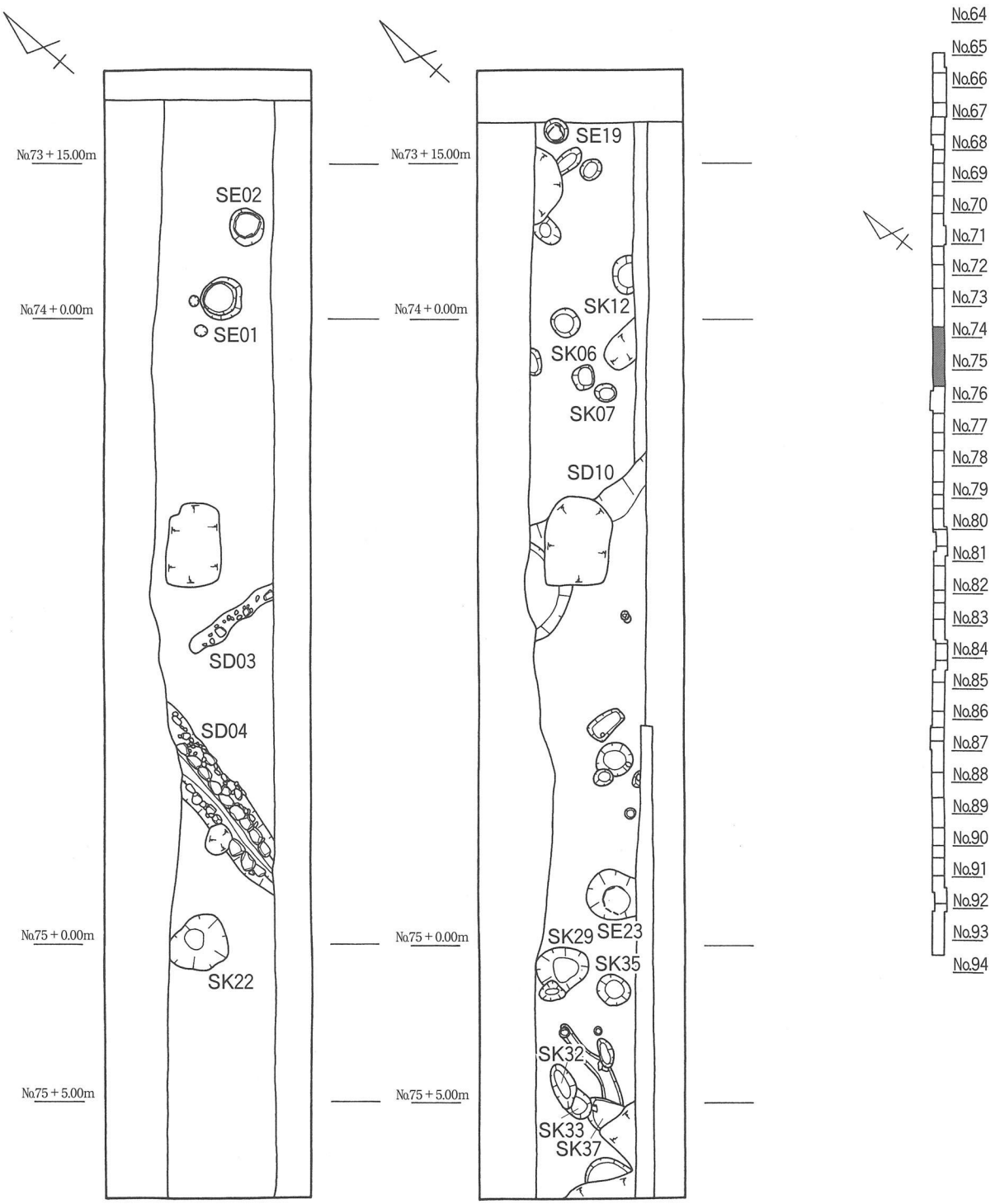


1 明灰黄色粘土（第１整地層か？）
2 黒色細砂
3 明黄白色粗砂（洪水層）
4 褐色細砂～粗砂
5 灰褐色細砂～中砂（炭・明灰色シルトブロック含む）
6 灰黄色シルト～細砂（灰色シルトブロック含む）
7 黄白色粘土
8 灰褐色中砂～粗砂（明黄白色粗砂含む）
9 灰褐色粘土
10 暗褐色中砂～粗砂（黄白色粗砂含む）
11 暗灰褐色細砂～中砂（黄白色粗砂・多量の土器片含む）
12 褐色中砂～粗砂（黄色粗砂含む）
13 暗灰色細砂
14 灰褐色中砂～粗砂
15 暗灰褐色中砂～粗砂
16 黒褐色細砂～中砂

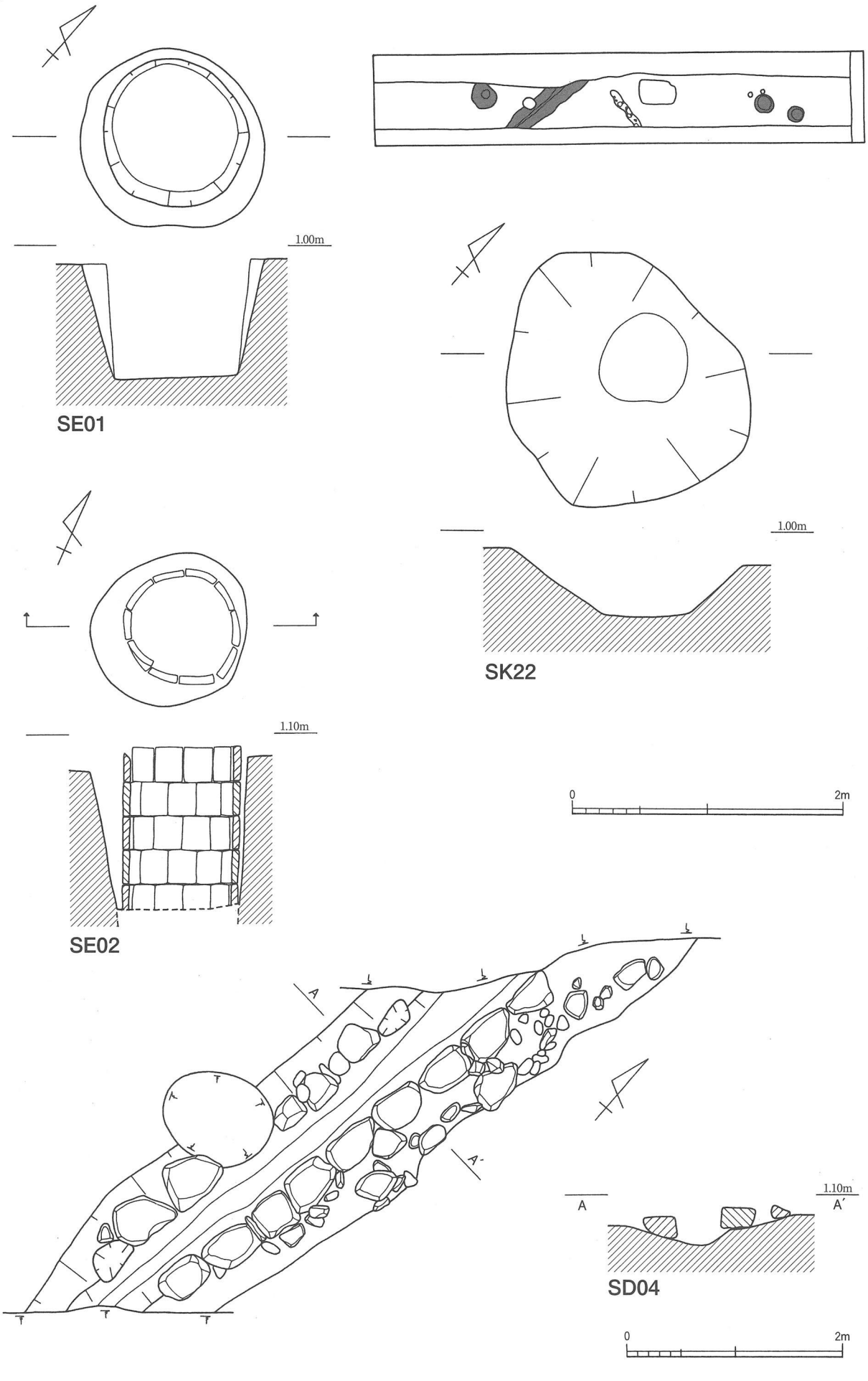


13区遺構平面図

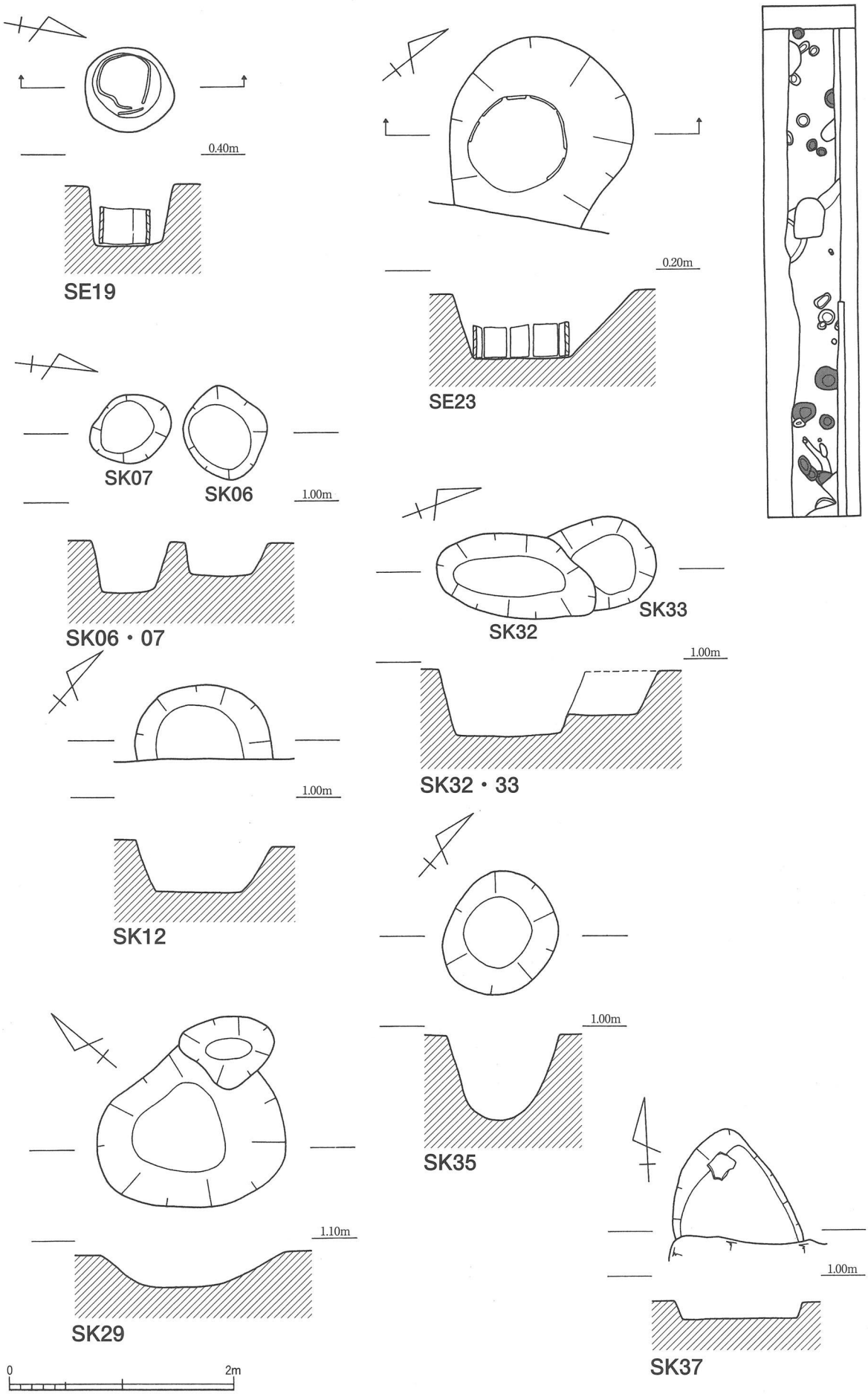
図版22



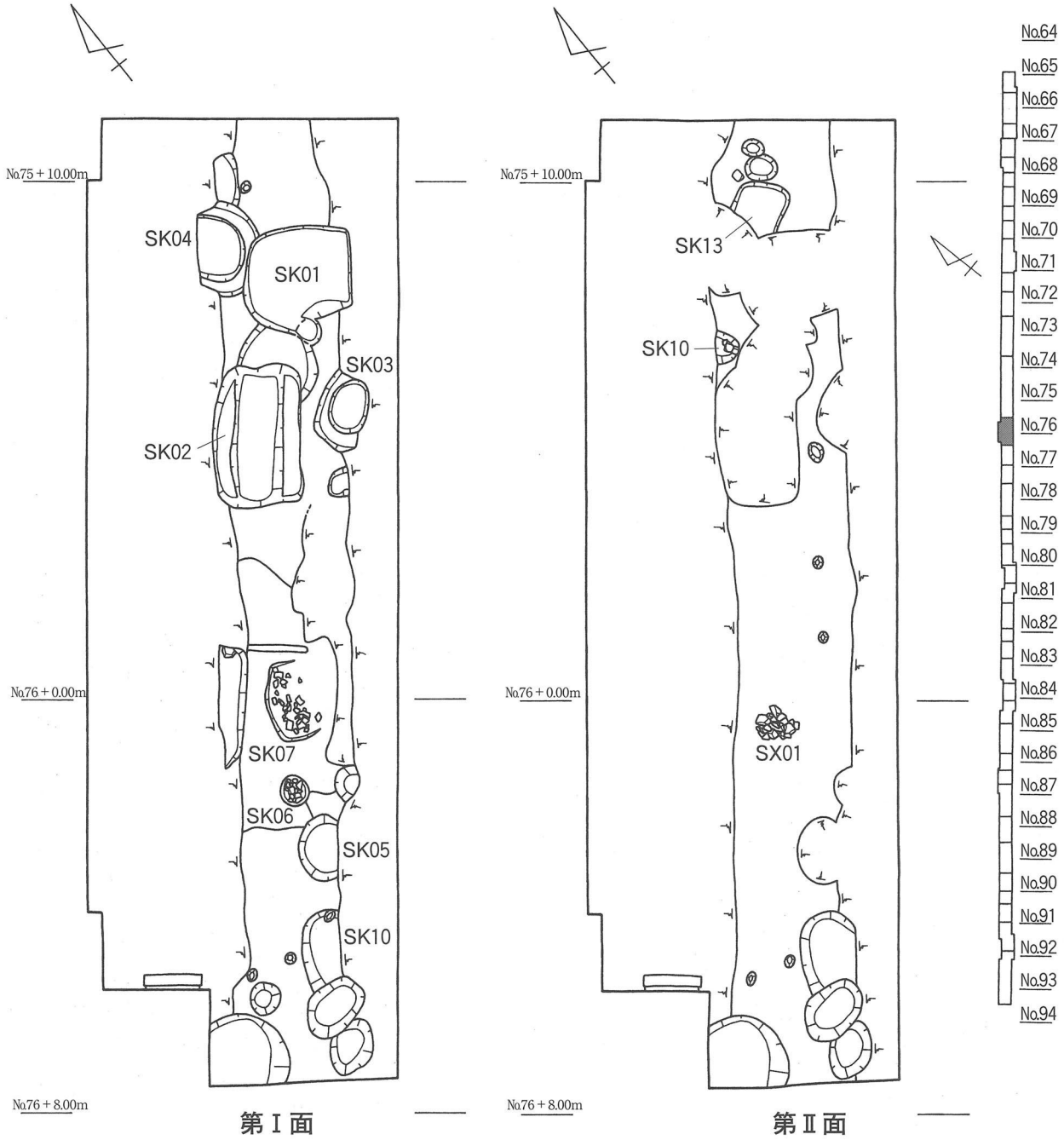
14区遺構配置図



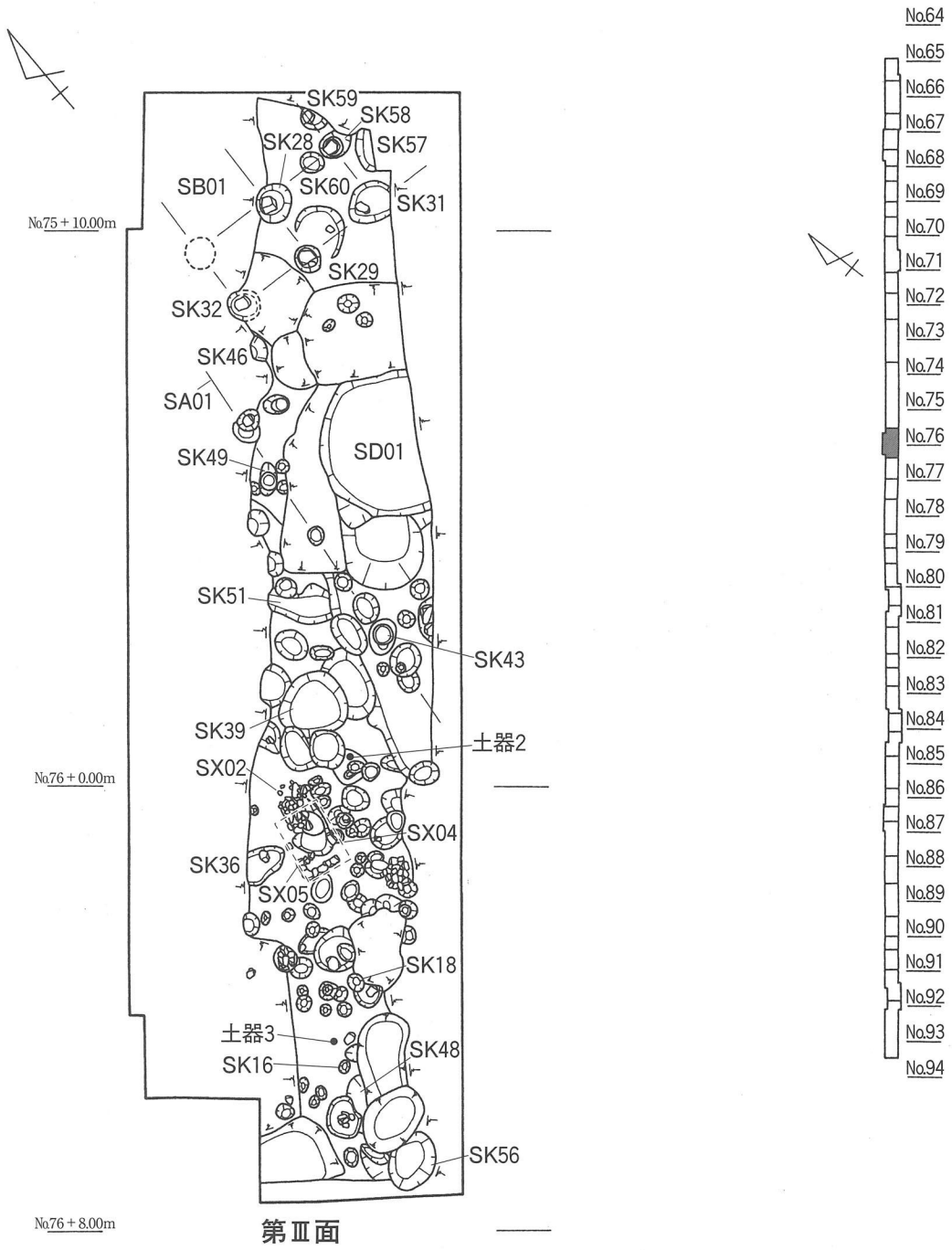
14区第Ⅰ面遺構平面図



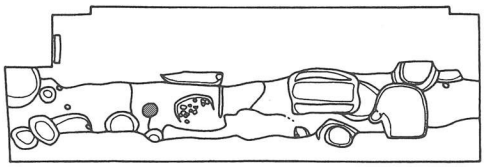
14区第Ⅱ面遺構平面図


No.75＋10.00m
SK04
SK01
SK03
SK02
No.76＋0.00m
SK07
SK06
SK05
SK10
No.76＋8.00m
第Ⅰ面
No.75＋10.00m
SK13
SK10
No.76＋0.00m
SX01
No.76＋8.00m
第Ⅱ面
No.64
No.65
No.66
No.67
No.68
No.69
No.70
No.71
No.72
No.73
No.74
No.75
No.76
No.77
No.78
No.79
No.80
No.81
No.82
No.83
No.84
No.85
No.86
No.87
No.88
No.89
No.90
No.91
No.92
No.93
No.94
0
2m

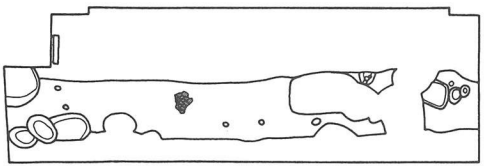
15区遺構配置図①


No.64
No.65
No.66
No.67
No.68
No.69
No.70
No.71
No.72
No.73
No.74
No.75
No.76
No.77
No.78
No.79
No.80
No.81
No.82
No.83
No.84
No.85
No.86
No.87
No.88
No.89
No.90
No.91
No.92
No.93
No.94
No.75＋10.00m
No.76＋0.00m
No.76＋8.00m
SK59
SK58
SK28
SK57
SB01
SK60
SK31
SK29
SK32
SK46
SA01
SD01
SK49
SK51
SK43
SK39
土器2
SX02
SX04
SK36
SX05
SK18
土器3
SK48
SK16
SK56
第Ⅲ面
0
2m

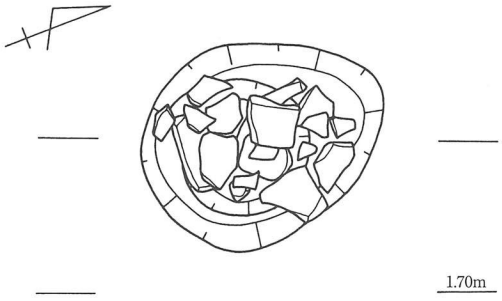
15区遺構配置図②



第Ⅰ面

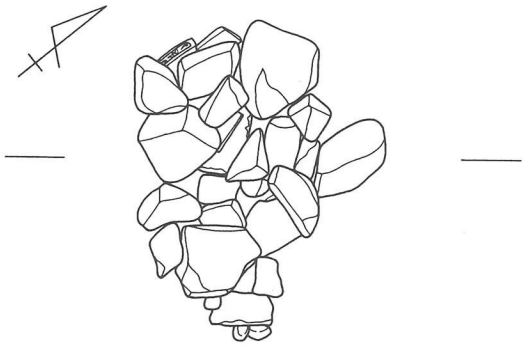


第Ⅱ面

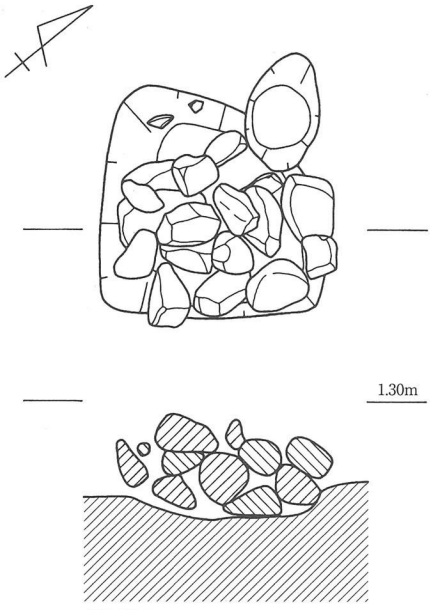


SK06

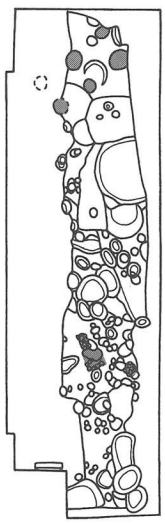
1　灰褐色土
2　黄灰色粘質土と灰褐色土との互層



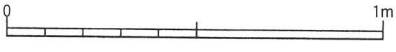
SX01



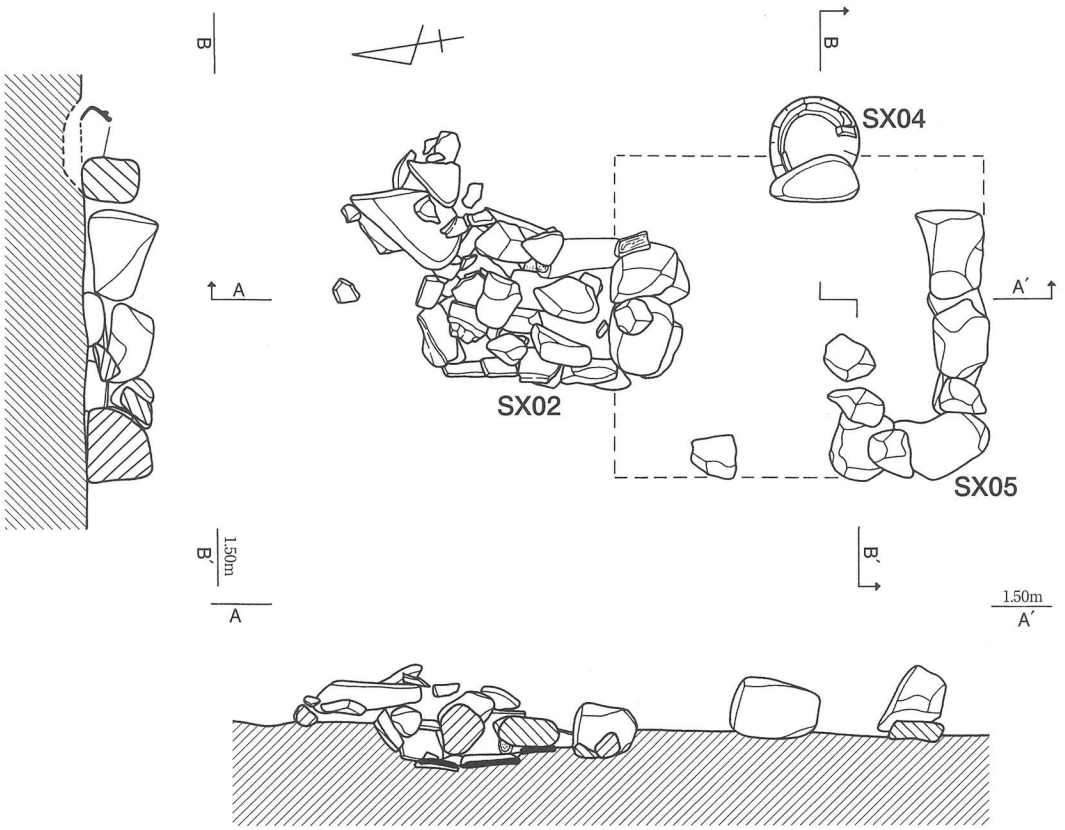
SX03



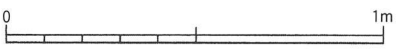
第Ⅲ面

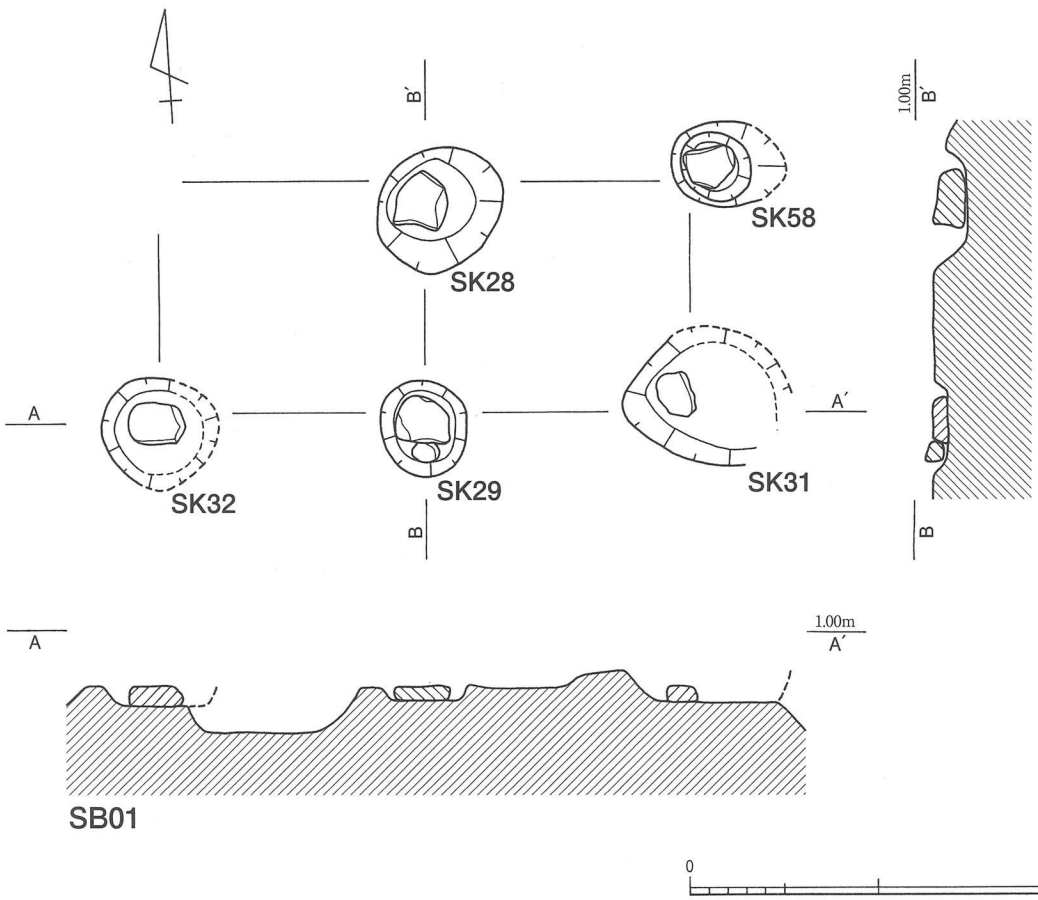


15区遺構平面図①

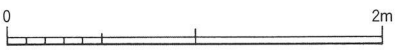


SX02・04・05

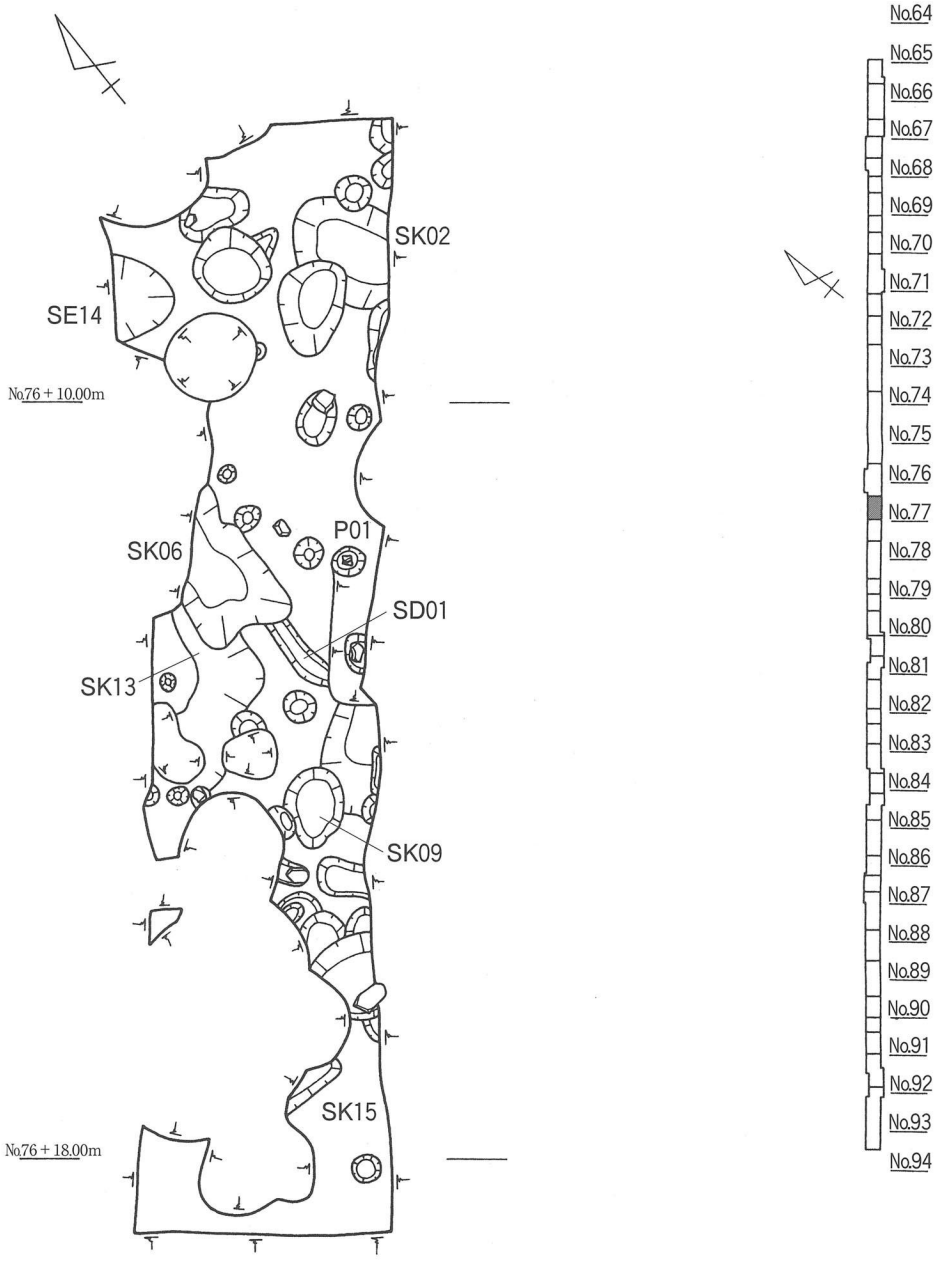




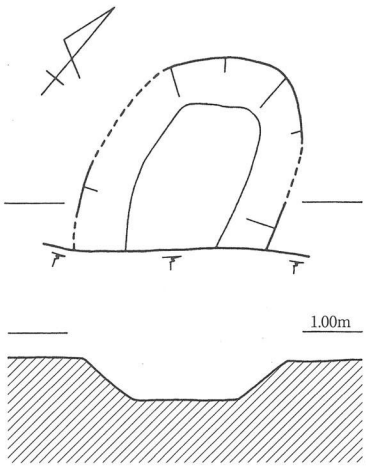
SB01



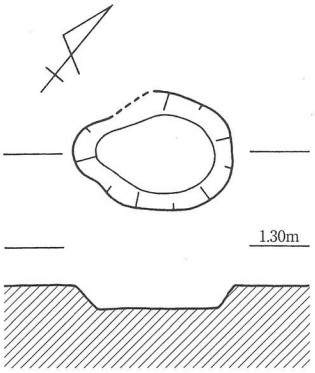
15区遺構平面図②


SK02
SE14
No.76＋10.00m
SK06
P01
SD01
SK13
SK09
SK15
No.76＋18.00m
No.64
No.65
No.66
No.67
No.68
No.69
No.70
No.71
No.72
No.73
No.74
No.75
No.76
No.77
No.78
No.79
No.80
No.81
No.82
No.83
No.84
No.85
No.86
No.87
No.88
No.89
No.90
No.91
No.92
No.93
No.94
0
4m

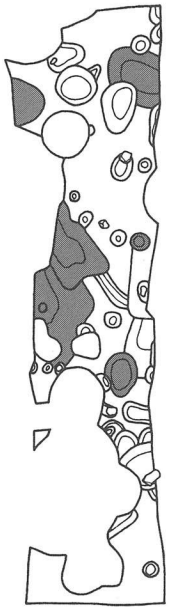
16区遺構配置図

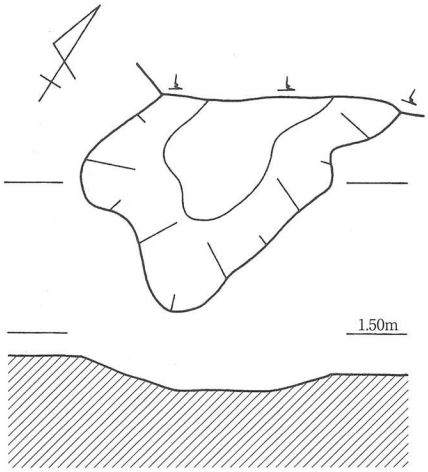


SK02

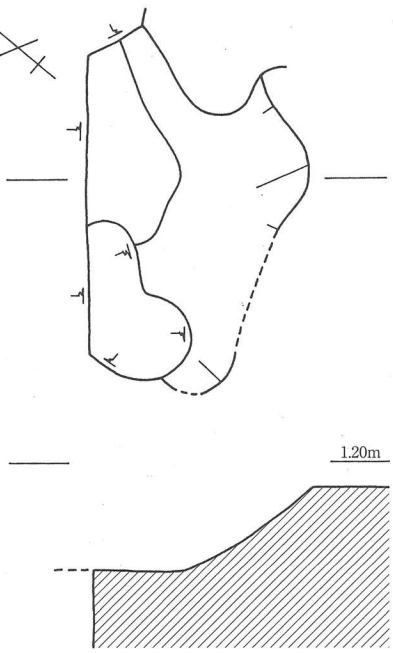


SK09

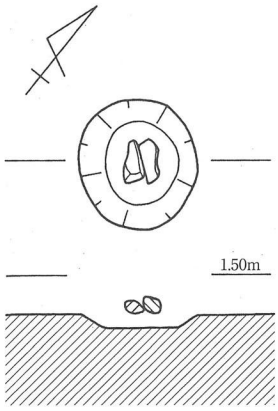




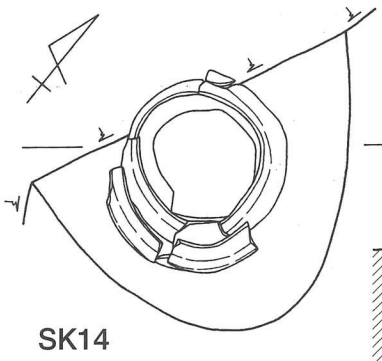
SK06



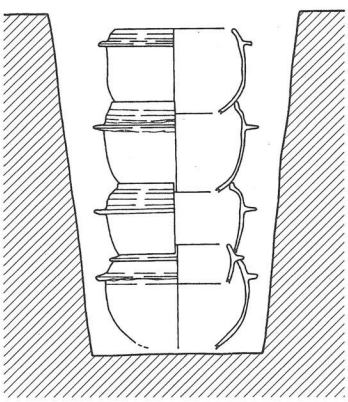
SK13



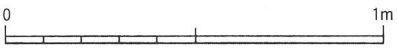
P01



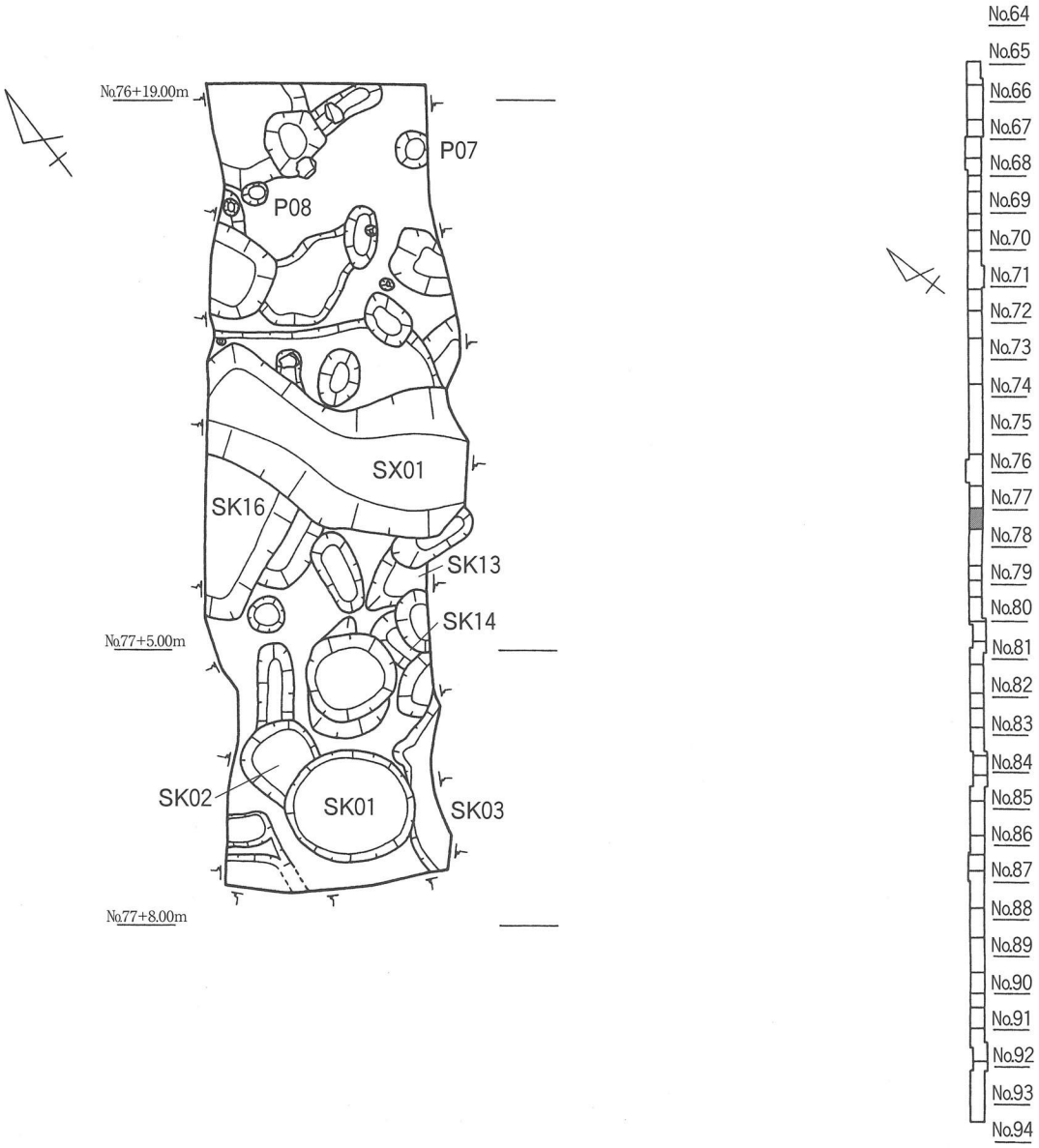
SK14



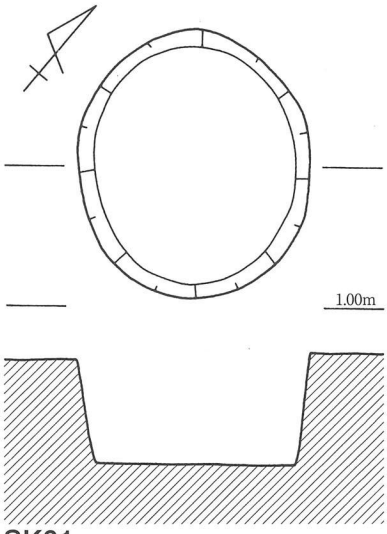
SK14井戸組復元図



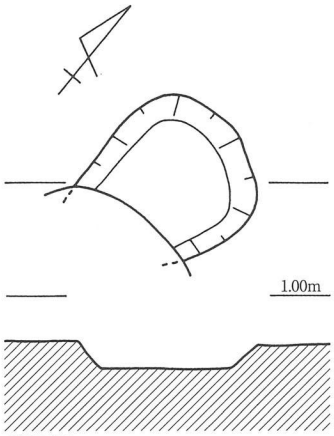
16区遺構平面図


No.64
No.65
No.66
No.67
No.68
No.69
No.70
No.71
No.72
No.73
No.74
No.75
No.76
No.77
No.78
No.79
No.80
No.81
No.82
No.83
No.84
No.85
No.86
No.87
No.88
No.89
No.90
No.91
No.92
No.93
No.94
No.76+19.00m
P07
P08
SX01
SK16
SK13
SK14
No.77+5.00m
SK02
SK01
SK03
No.77+8.00m
No.77+5.00m
No.77+8.00m
西側下層遺構
0
4m

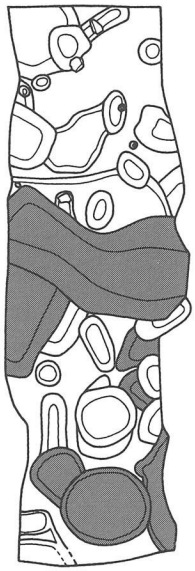
17区遺構配置図

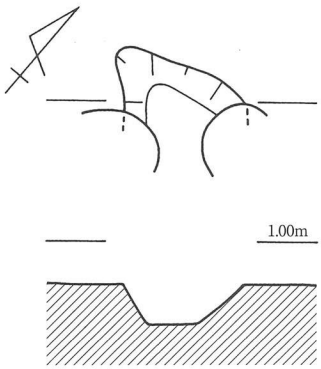


SK01

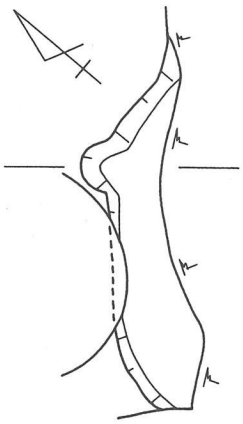


SK02

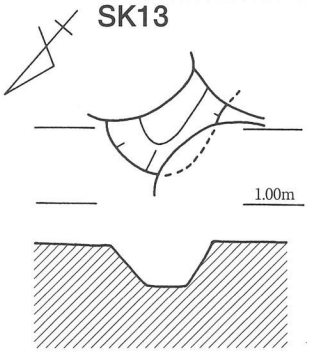




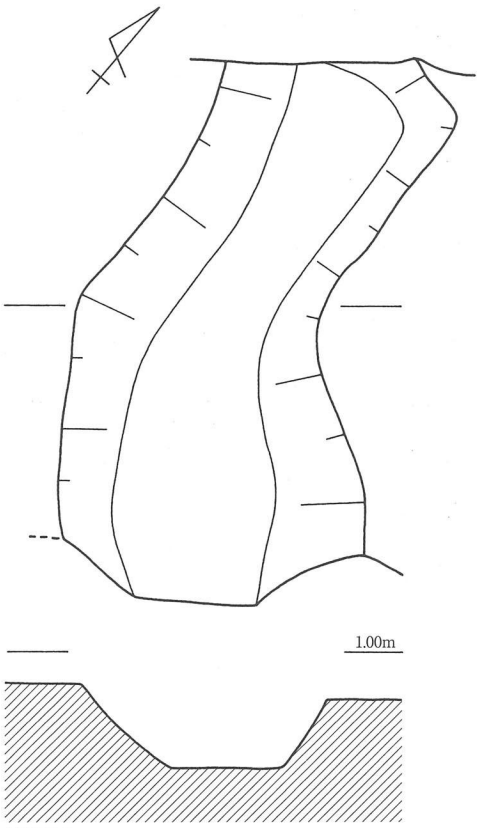
SK13



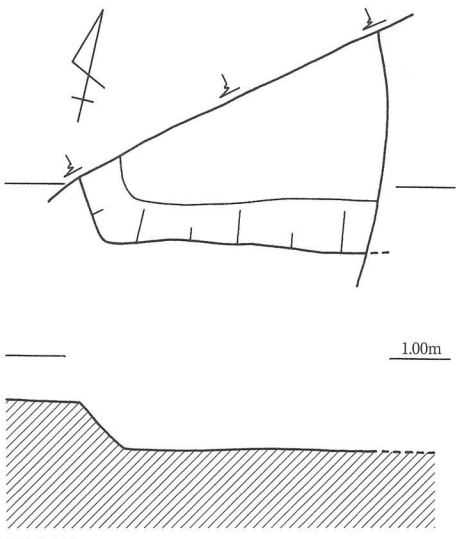
SK03



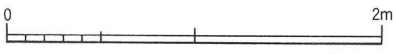
SK14



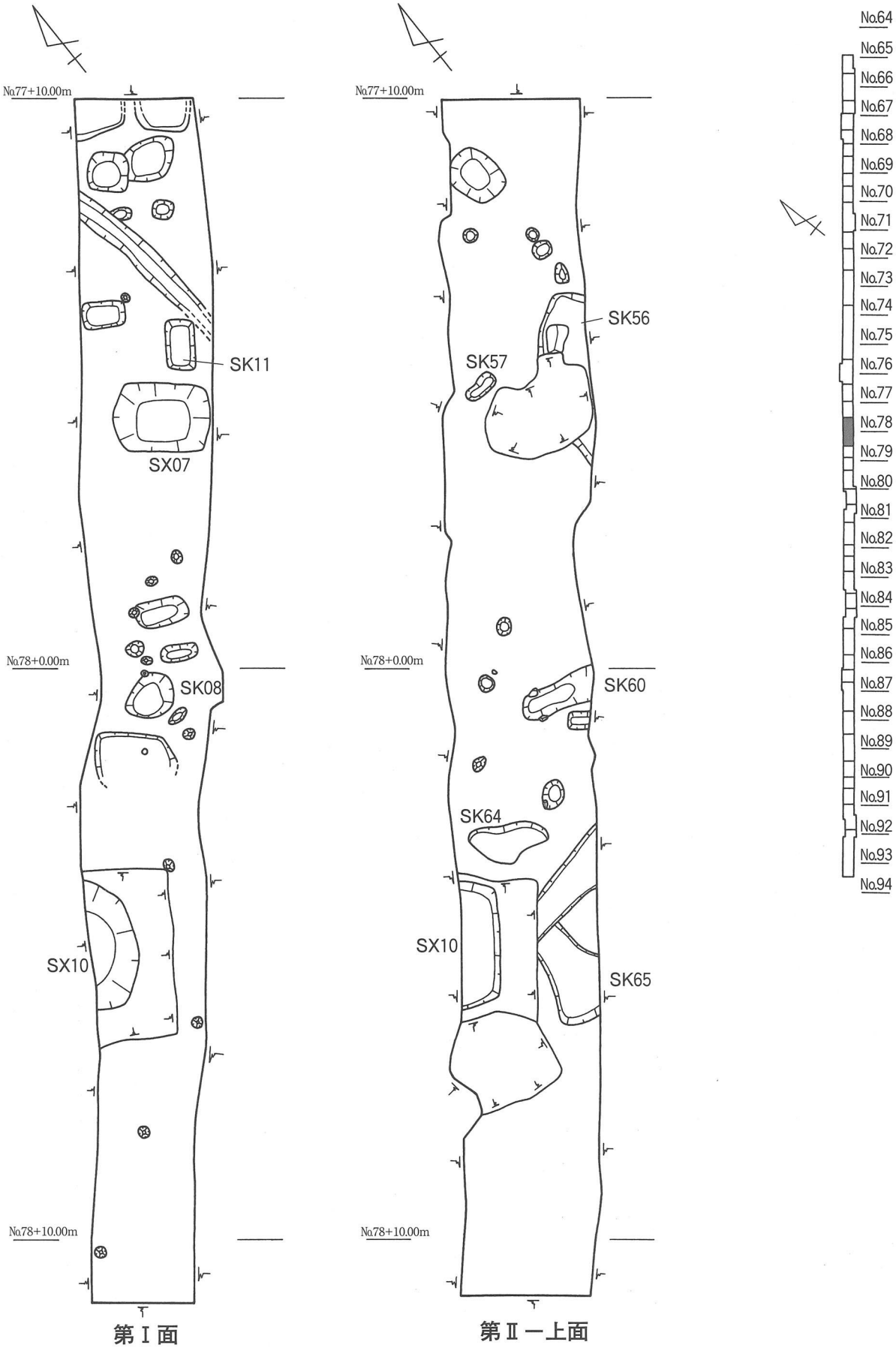
SX01



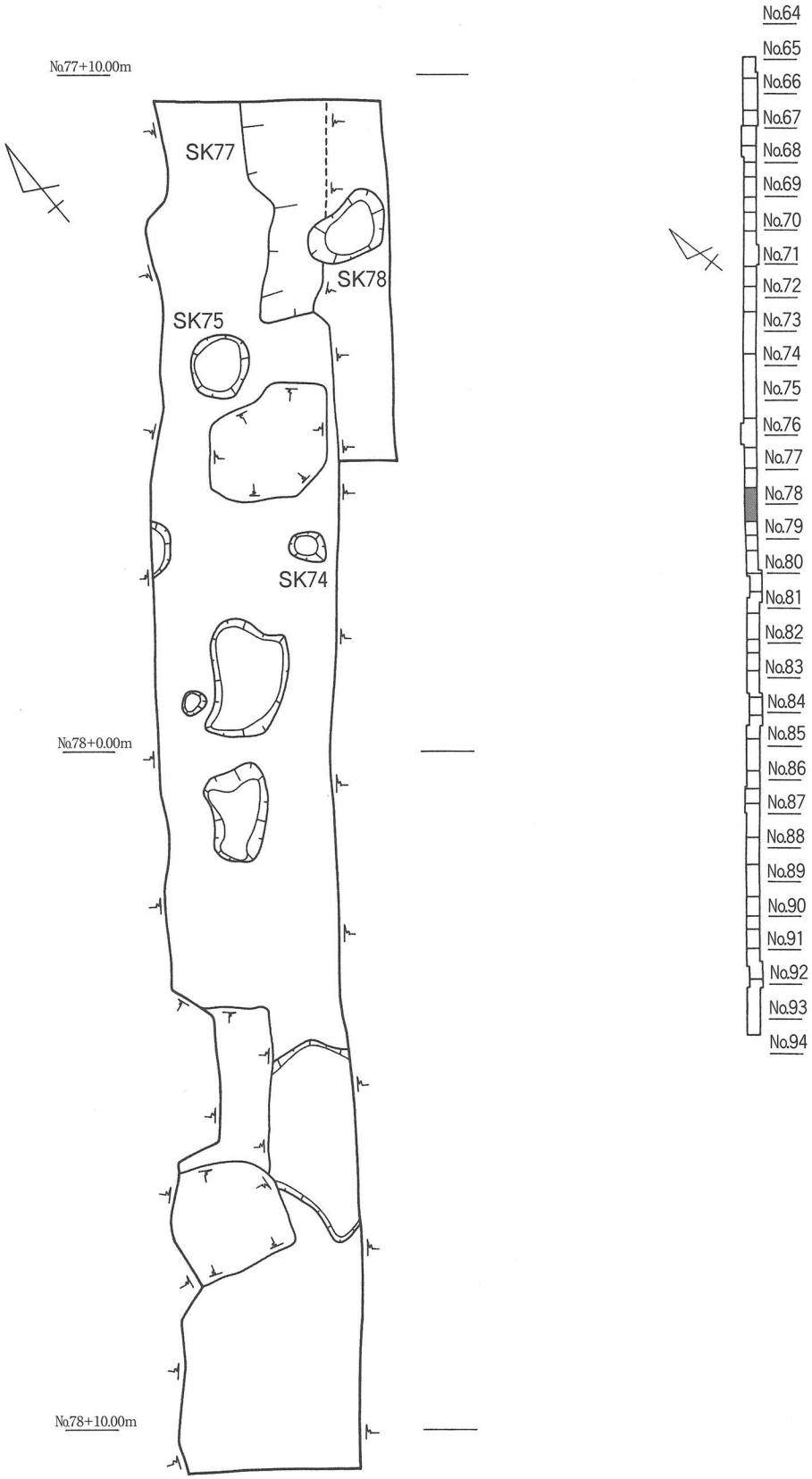
SK16



17区遺構平面図


No.77+10.00m
SK11
SX07
No.78+0.00m
SK08
SX10
No.78+10.00m
第Ⅰ面
No.77+10.00m
SK56
SK57
No.78+0.00m
SK60
SK64
SX10
SK65
No.78+10.00m
第Ⅱ一上面
No.64
No.65
No.66
No.67
No.68
No.69
No.70
No.71
No.72
No.73
No.74
No.75
No.76
No.77
No.78
No.79
No.80
No.81
No.82
No.83
No.84
No.85
No.86
No.87
No.88
No.89
No.90
No.91
No.92
No.93
No.94
0
5m

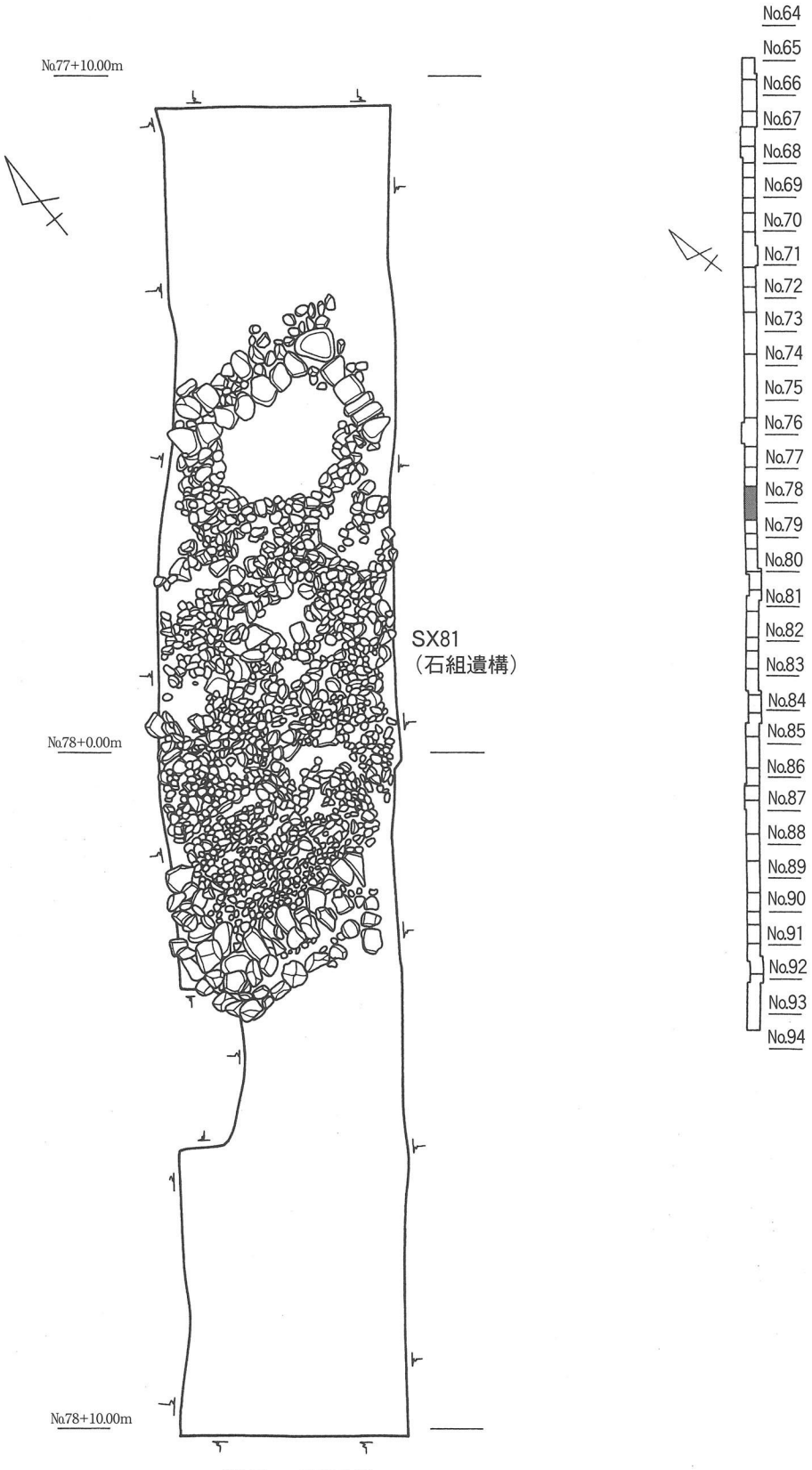
18区遺構配置図①



第Ⅱ一中面

0 5m

18区遺構配置図②

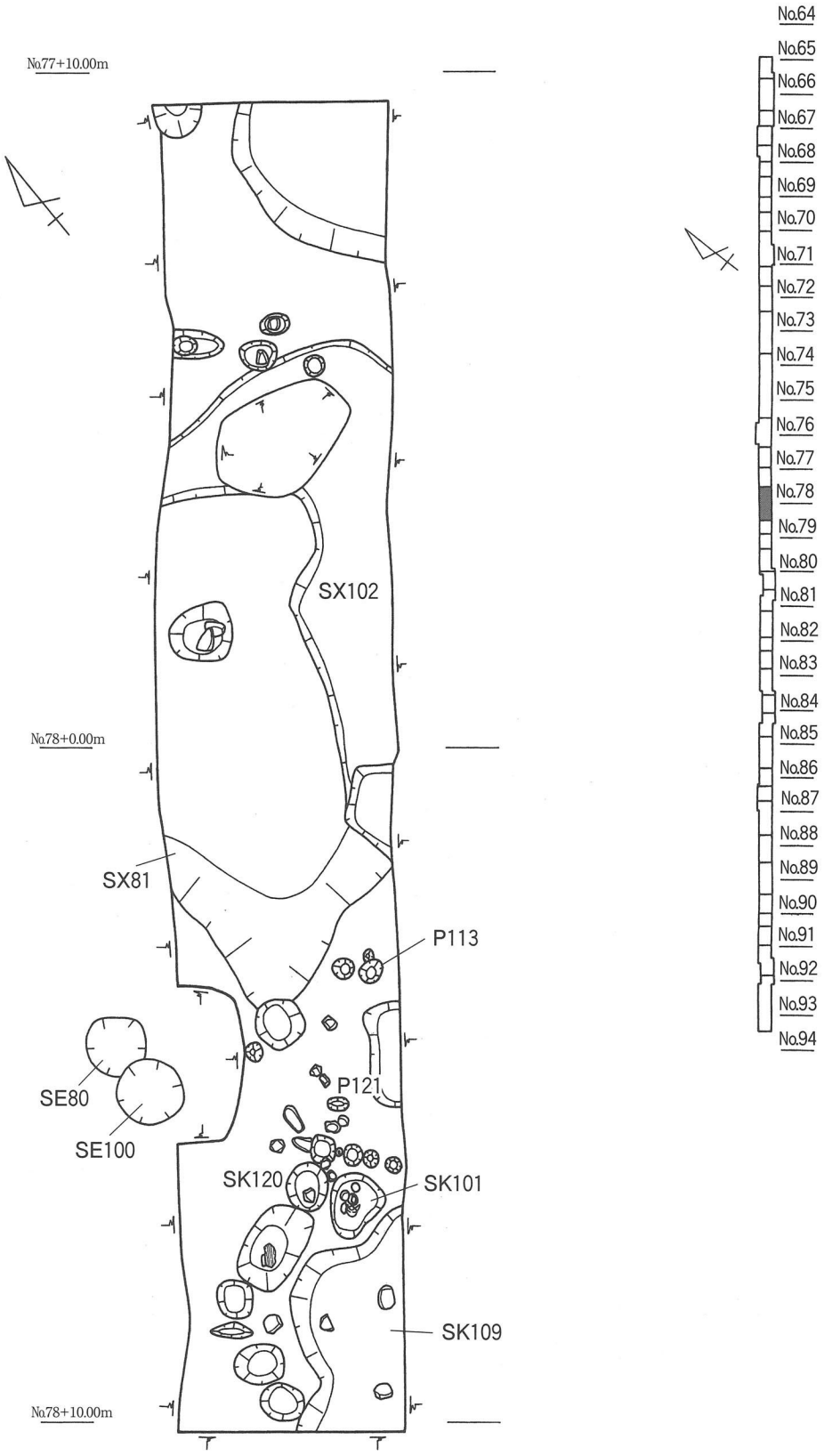


第Ⅱ一下面①

0 5m

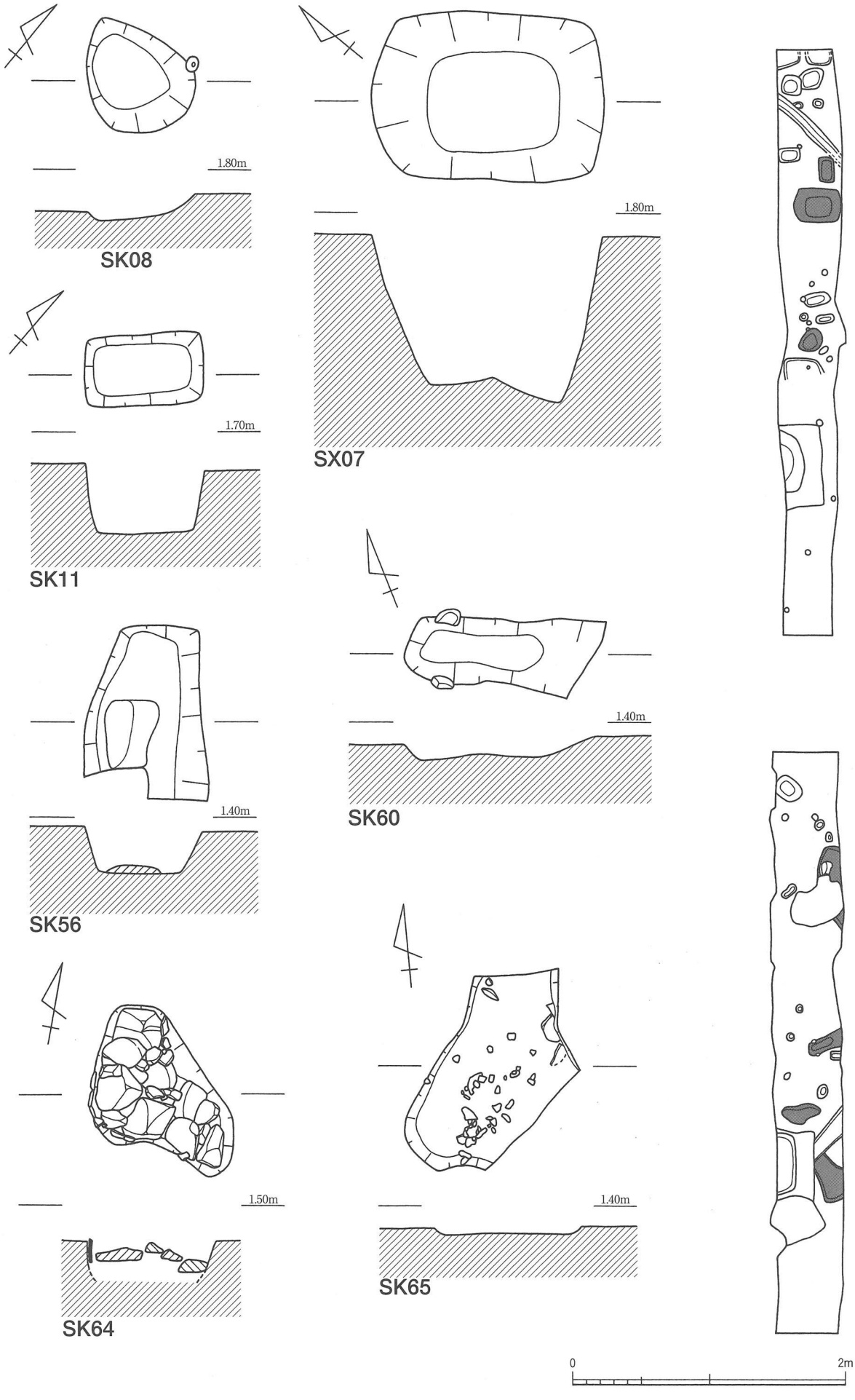
18区遺構配置図③—1

18区遺構配置図③—2・断面図

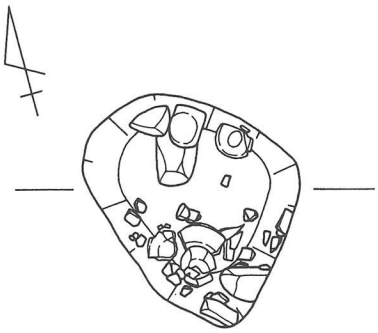


第Ⅲ面

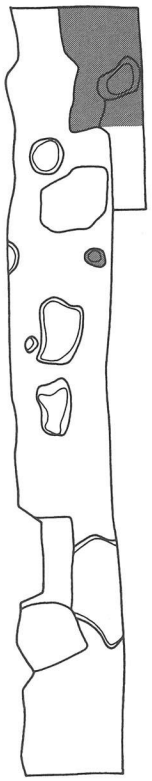
18区遺構配置図④

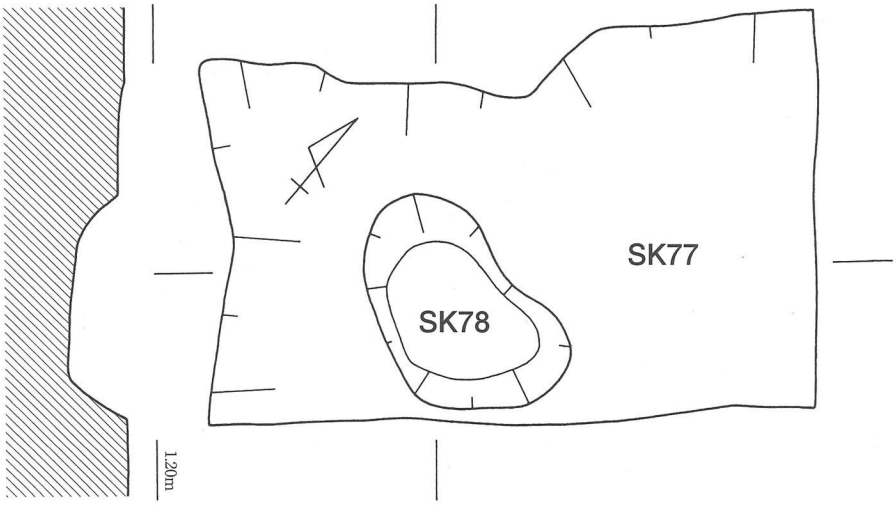


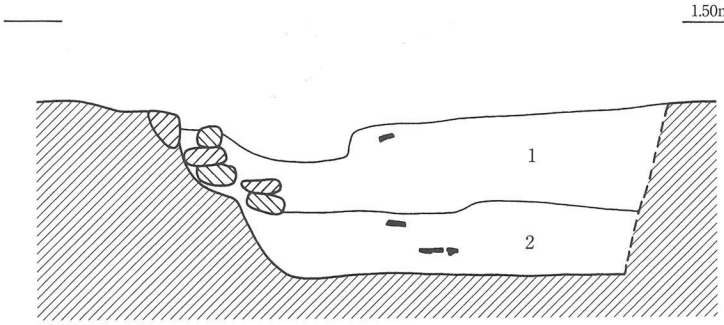
18区第Ⅰ・Ⅱ一上面遺構平面図



SK74

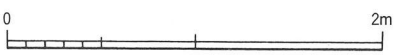




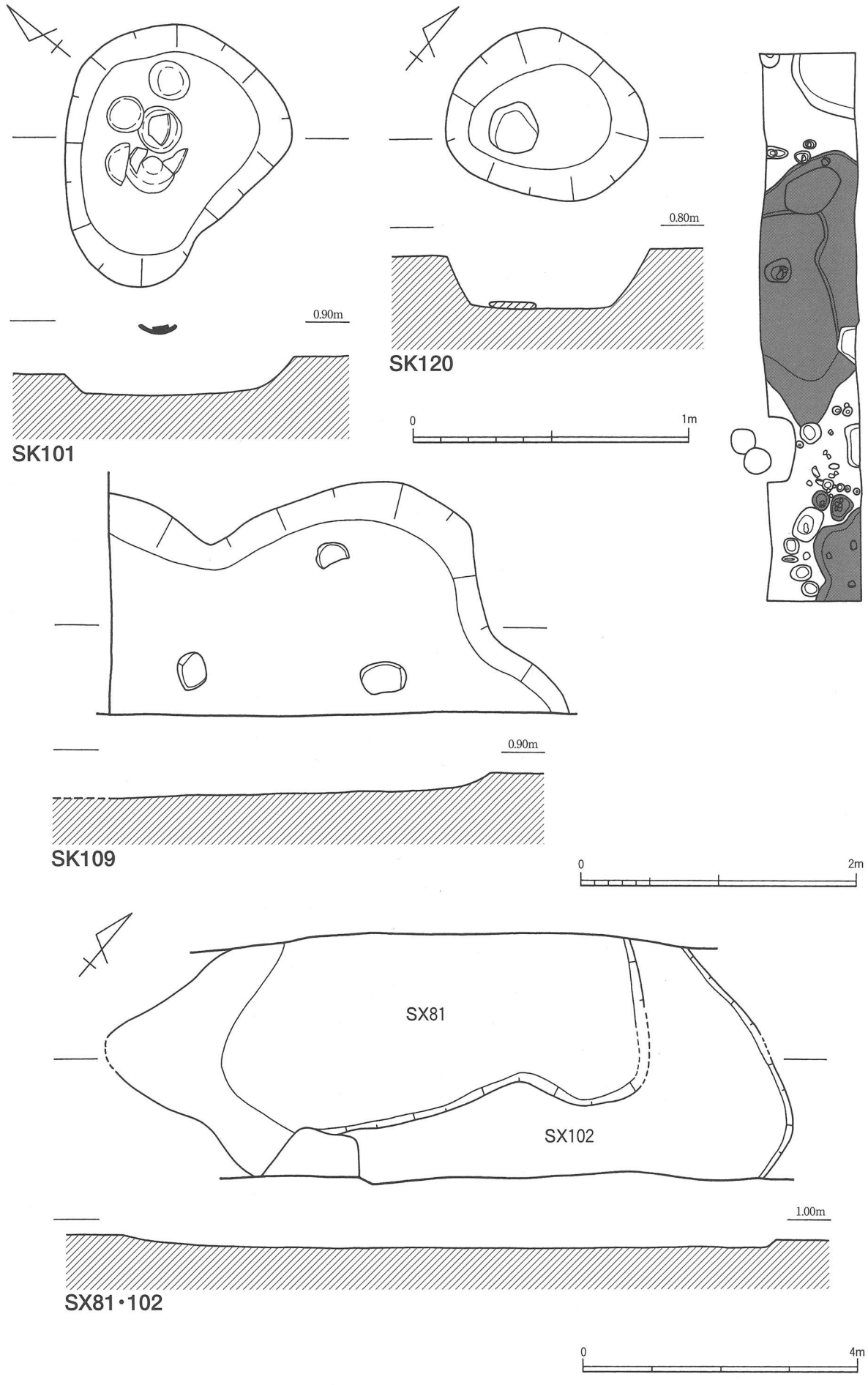


SK77・78

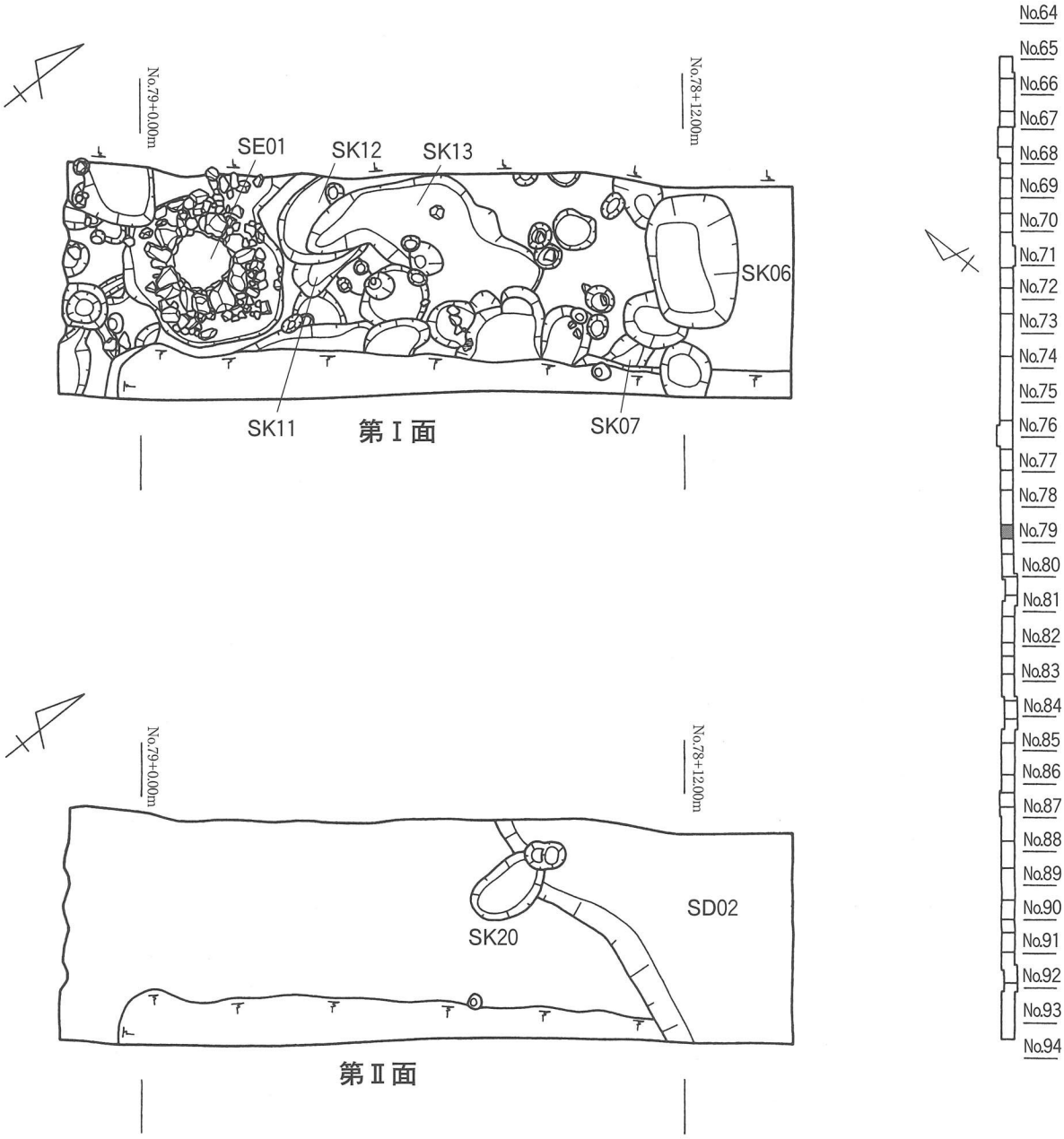
1　10YR　4/3　にぶい黄褐色砂（拳大の石混入）
2　10YR　3/3　暗褐色砂（土器片混入）



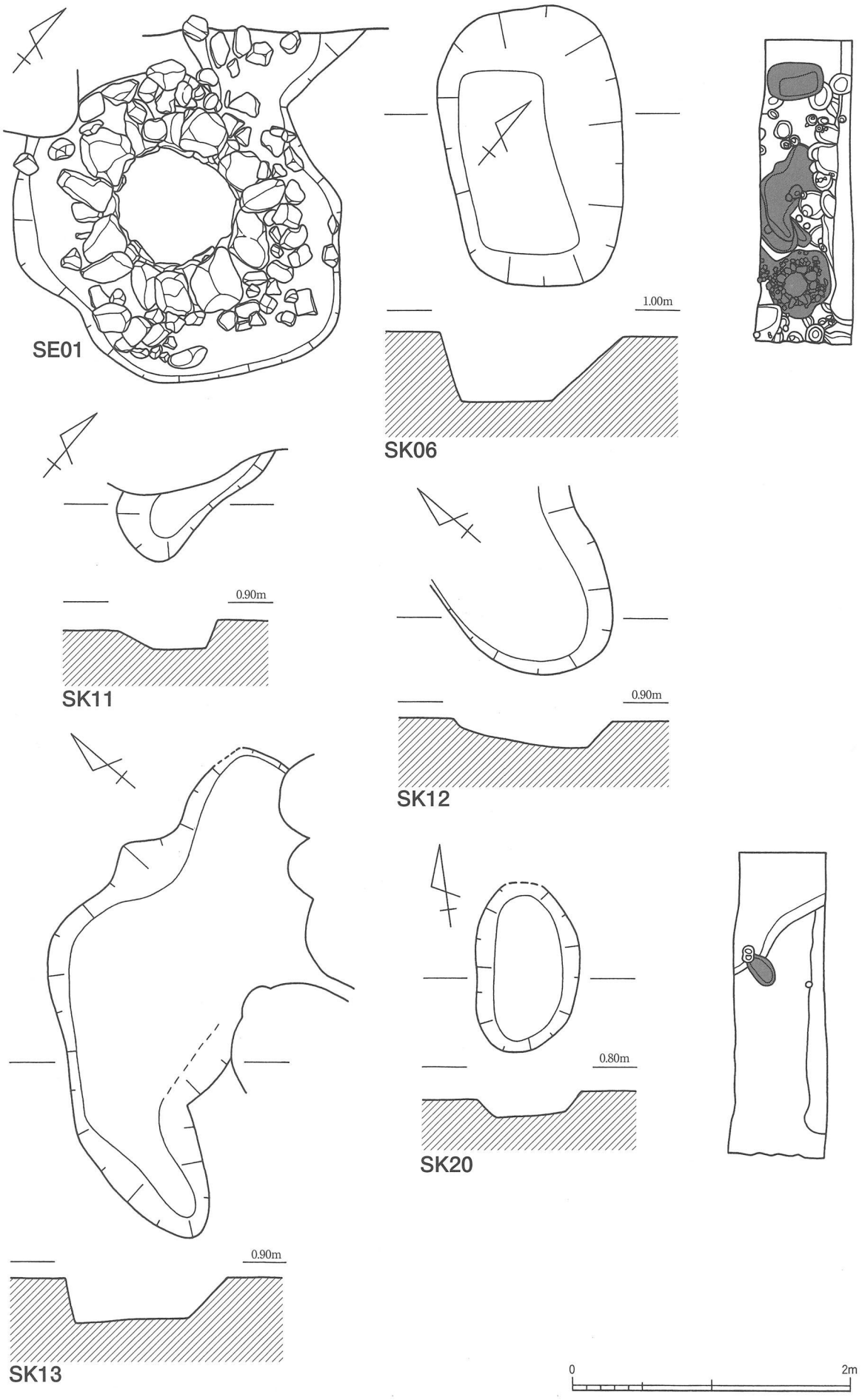
18区第Ⅱ一中面遺構平面図



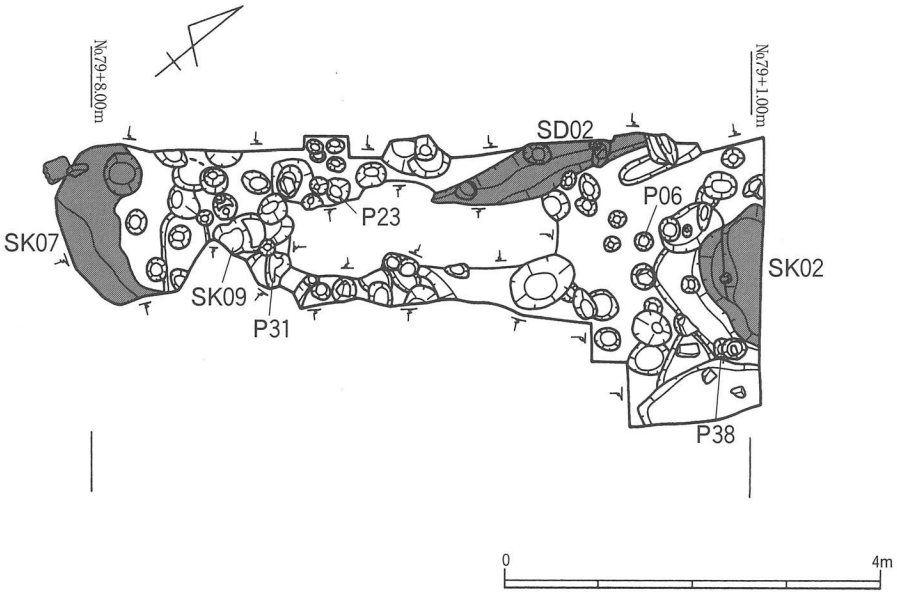
18区第Ⅲ面遺構平面図

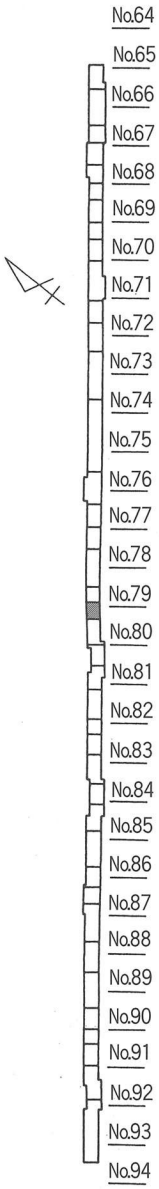

No.79+0.00m
No.78+12.00m
SE01
SK12
SK13
SK06
SK11
第Ⅰ面
SK07
No.79+0.00m
No.78+12.00m
SK20
SD02
第Ⅱ面
No.64
No.65
No.66
No.67
No.68
No.69
No.70
No.71
No.72
No.73
No.74
No.75
No.76
No.77
No.78
No.79
No.80
No.81
No.82
No.83
No.84
No.85
No.86
No.87
No.88
No.89
No.90
No.91
No.92
No.93
No.94
0
5m

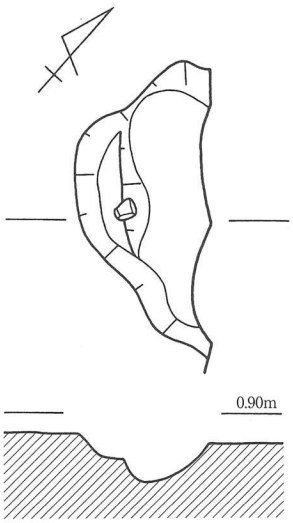
19区遺構配置図



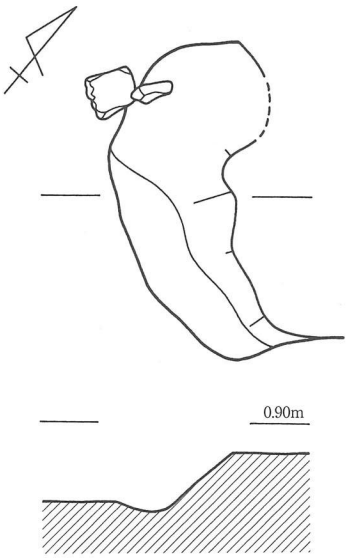
19区遺構平面図



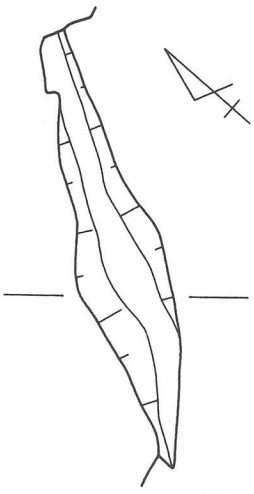




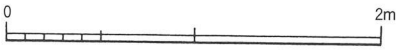
SK02



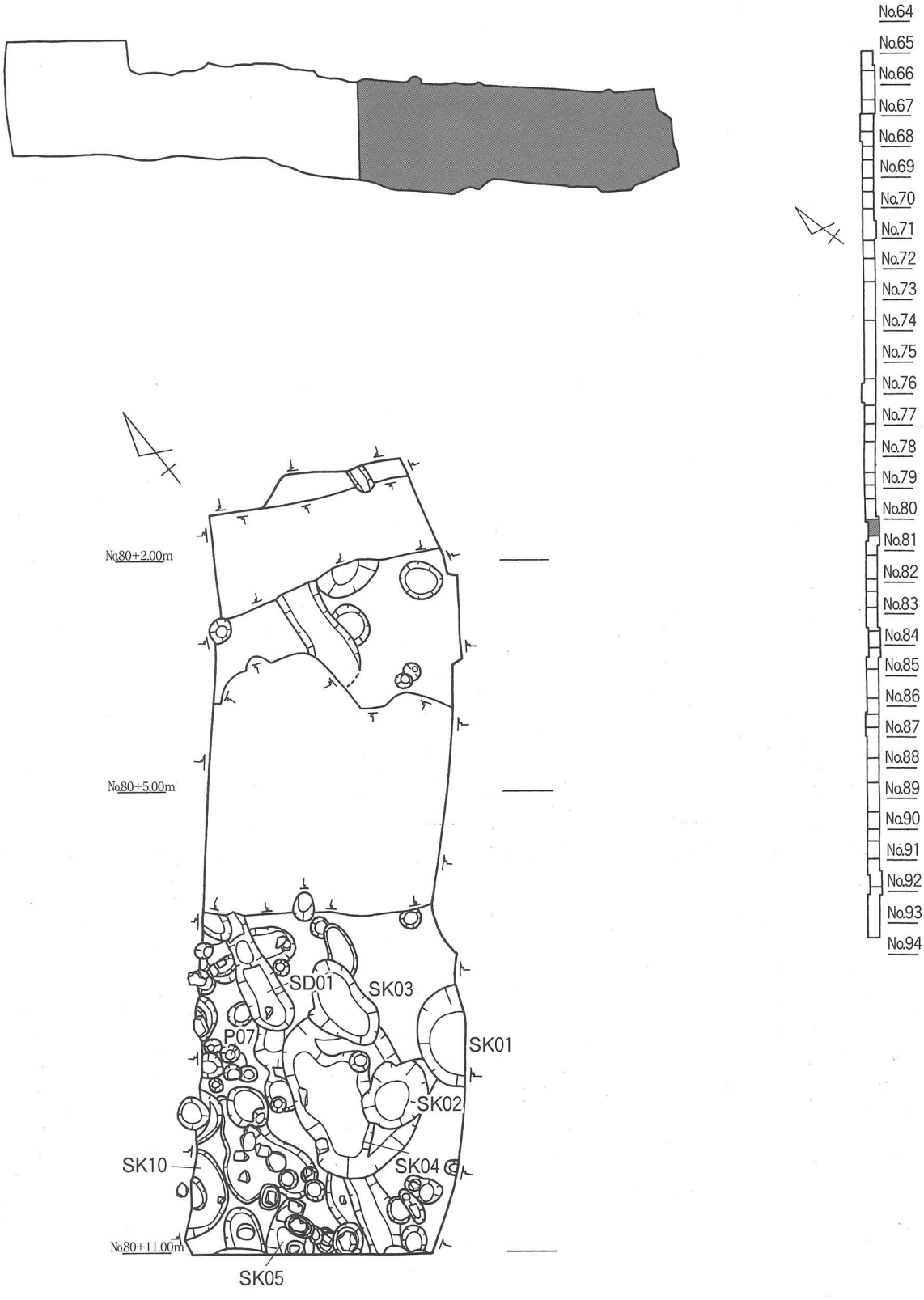
SK07



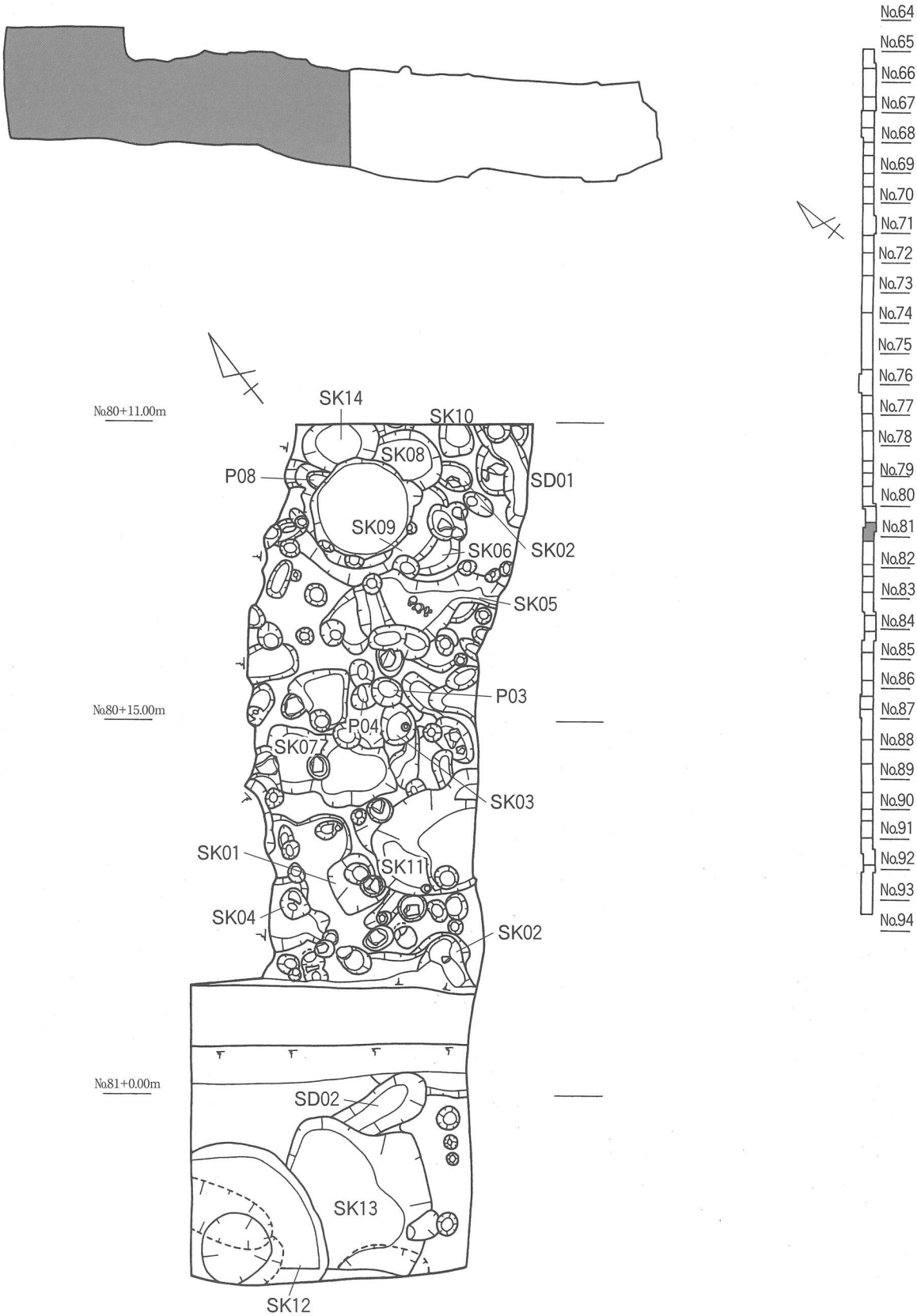
SD02



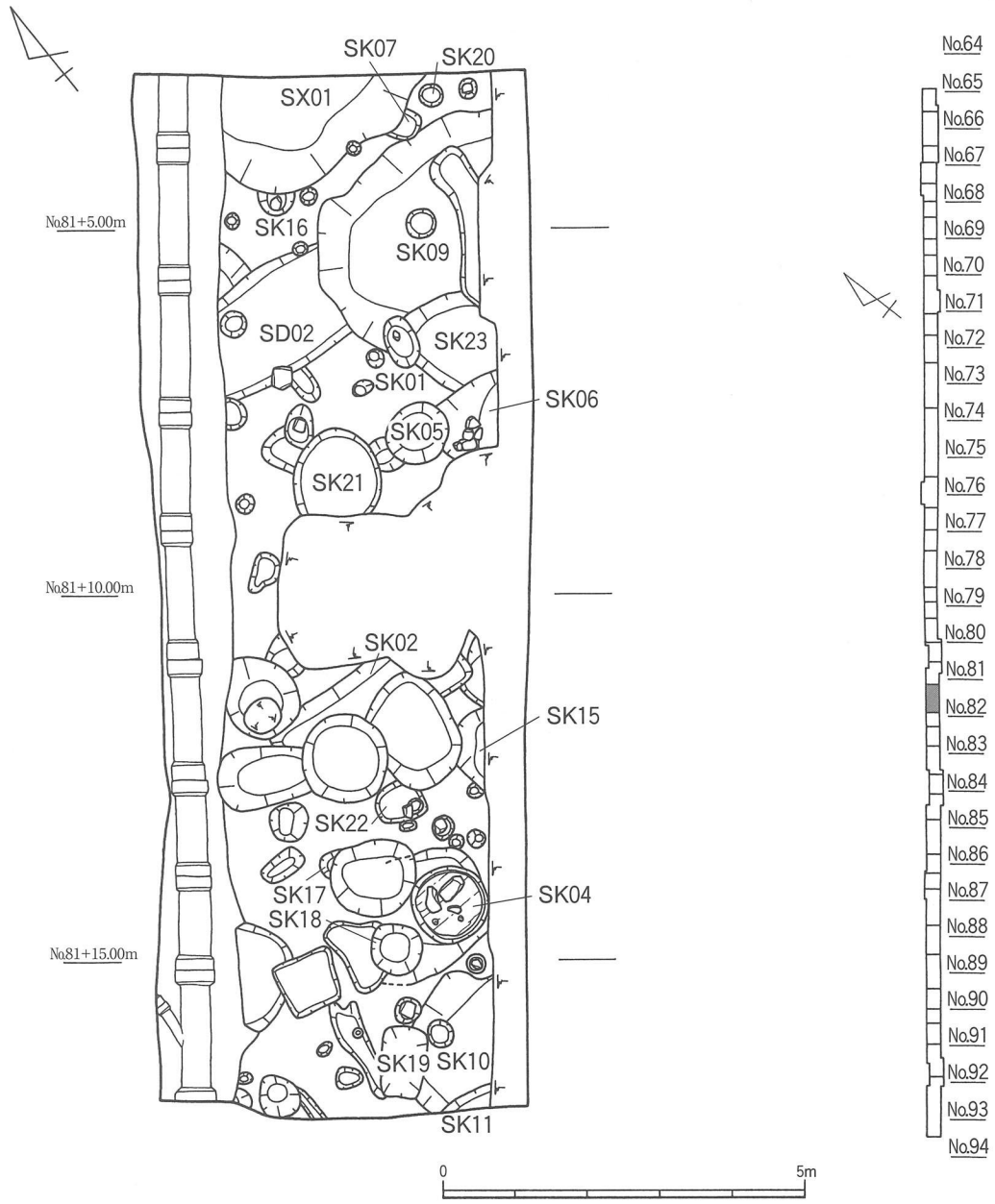
20区遺構配置図・平面図

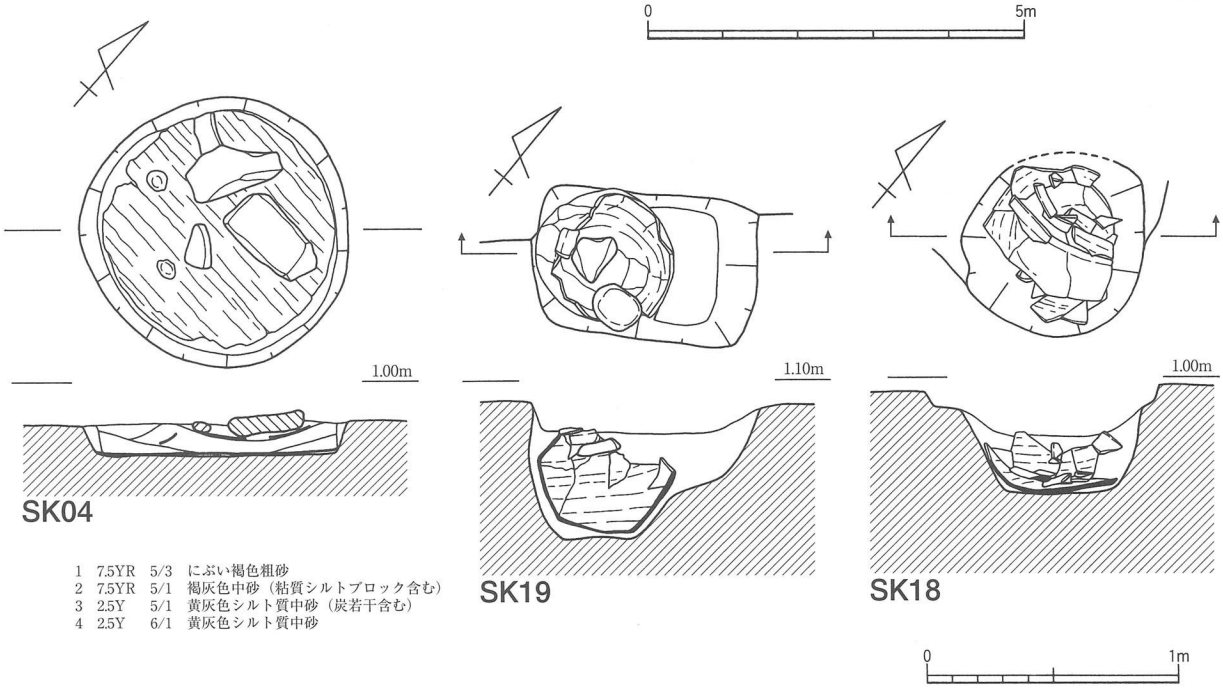

No.64
No.65
No.66
No.67
No.68
No.69
No.70
No.71
No.72
No.73
No.74
No.75
No.76
No.77
No.78
No.79
No.80
No.81
No.82
No.83
No.84
No.85
No.86
No.87
No.88
No.89
No.90
No.91
No.92
No.93
No.94
No.80+2.00m
No.80+5.00m
No.80+11.00m
SD01
SK03
P07
SK01
SK02
SK10
SK04
SK05
0
4m

21区遺構配置図


No.64
No.65
No.66
No.67
No.68
No.69
No.70
No.71
No.72
No.73
No.74
No.75
No.76
No.77
No.78
No.79
No.80
No.81
No.82
No.83
No.84
No.85
No.86
No.87
No.88
No.89
No.90
No.91
No.92
No.93
No.94
No.80+11.00m
No.80+15.00m
No.81+0.00m
SK14
SK10
SK08
P08
SD01
SK09
SK06
SK02
SK05
P03
P04
SK07
SK03
SK01
SK11
SK04
SK02
SD02
SK13
SK12
0
4m

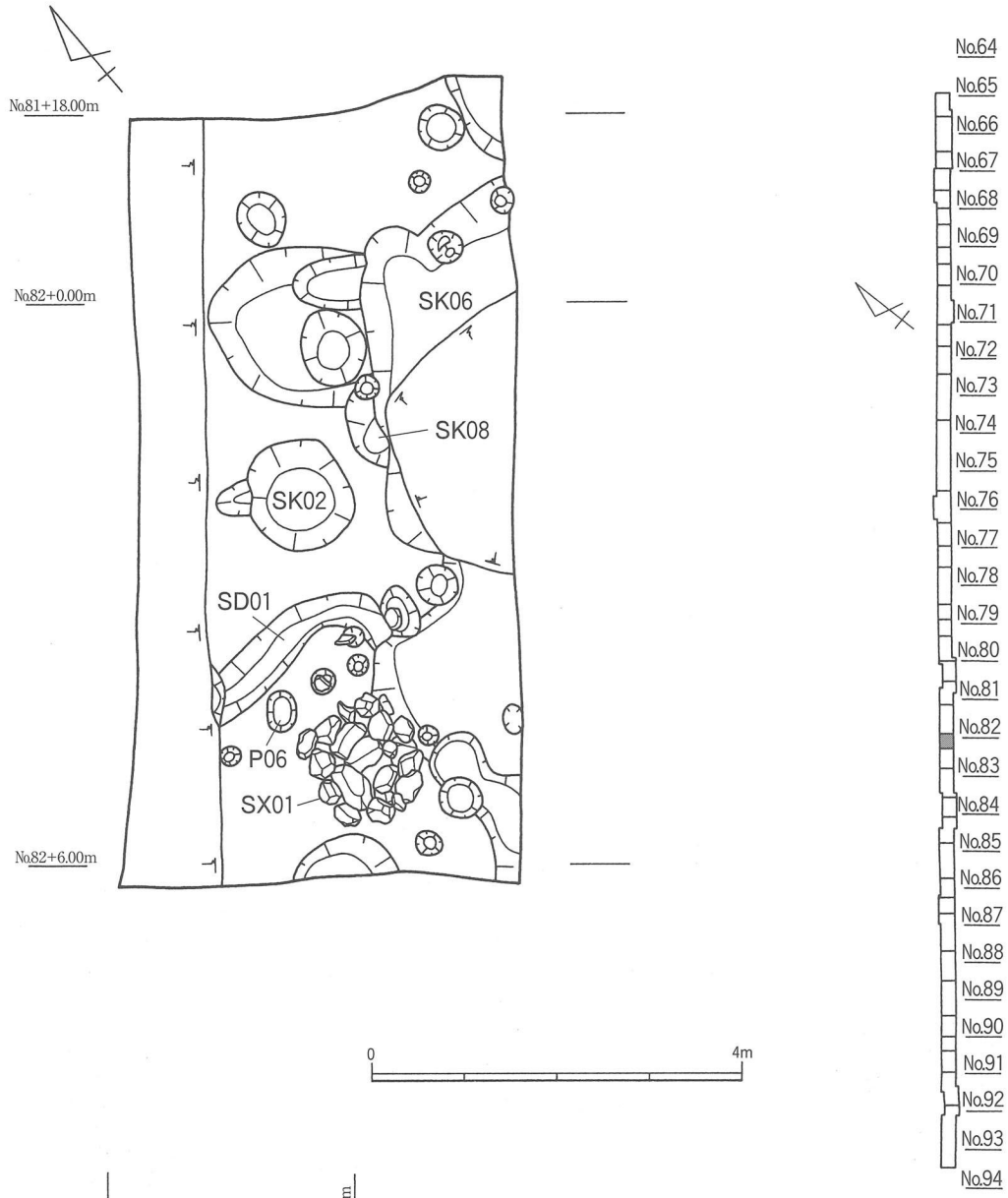
22区遺構配置図

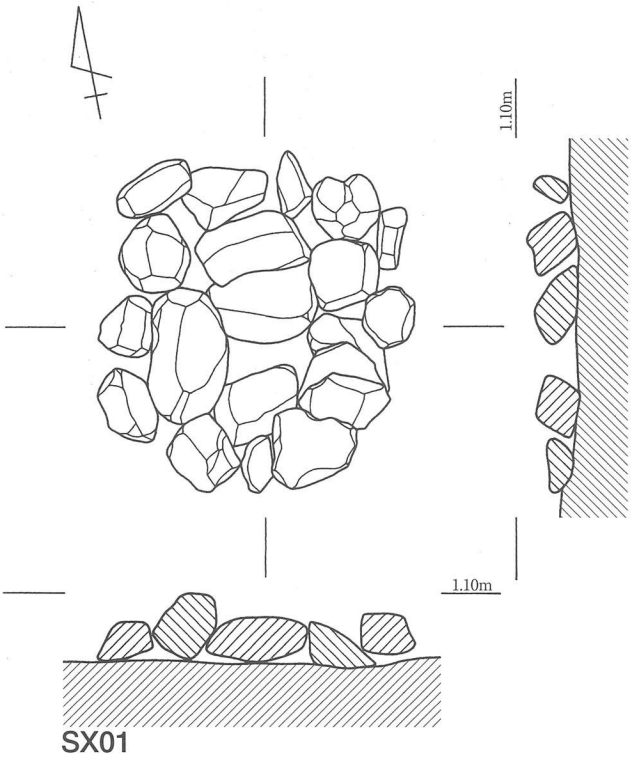




1 7.5YR 5/3 にぶい褐色粗砂
2 7.5YR 5/1 褐灰色中砂（粘質シルトブロック含む）
3 2.5Y 5/1 黄灰色シルト質中砂（炭若干含む）
4 2.5Y 6/1 黄灰色シルト質中砂

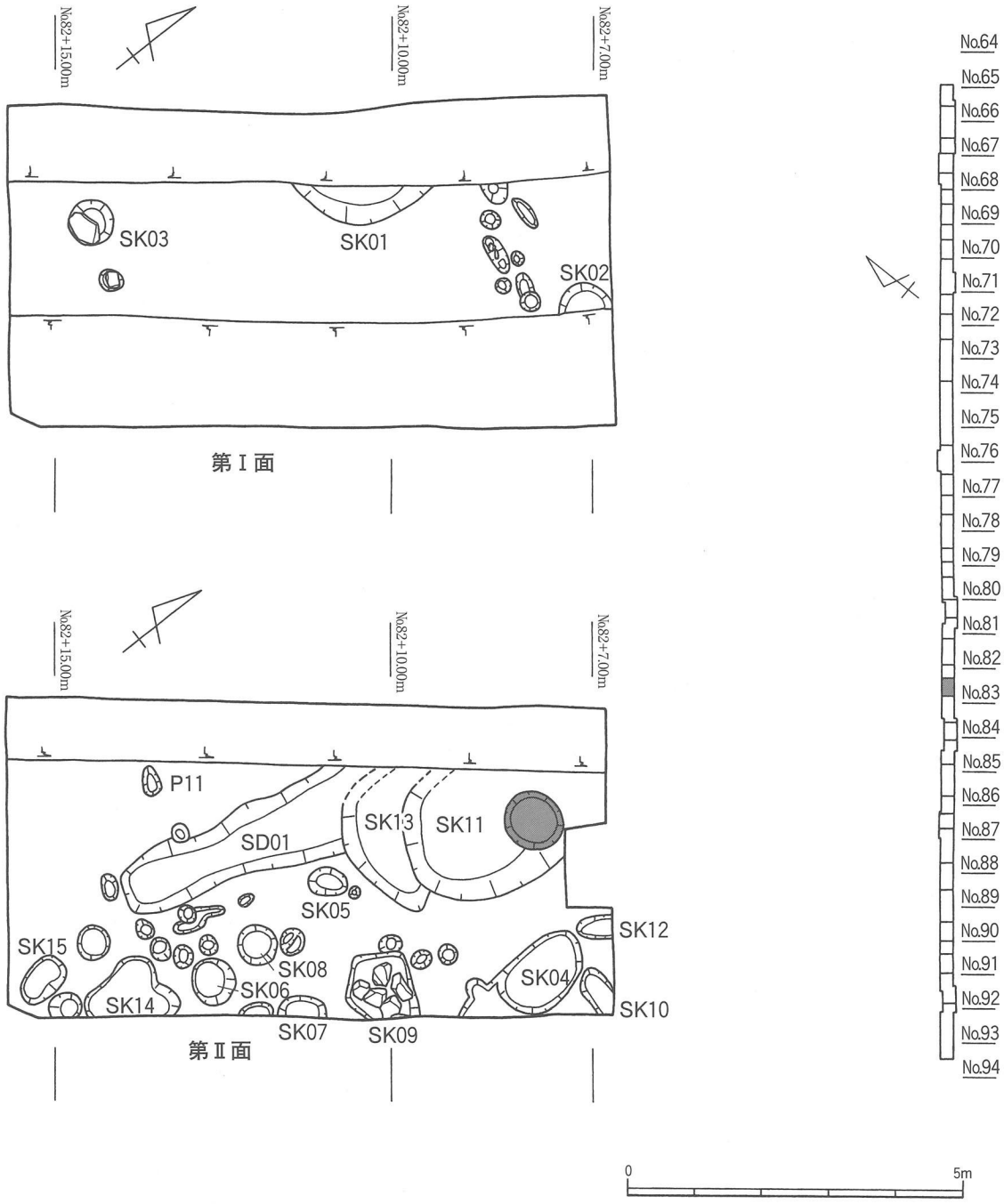
23区遺構配置図・平面図

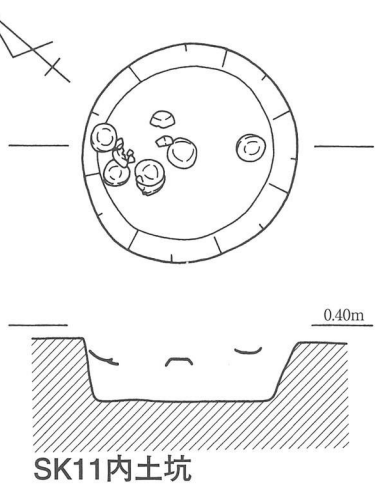




24区遺構配置図・平面図

図版48

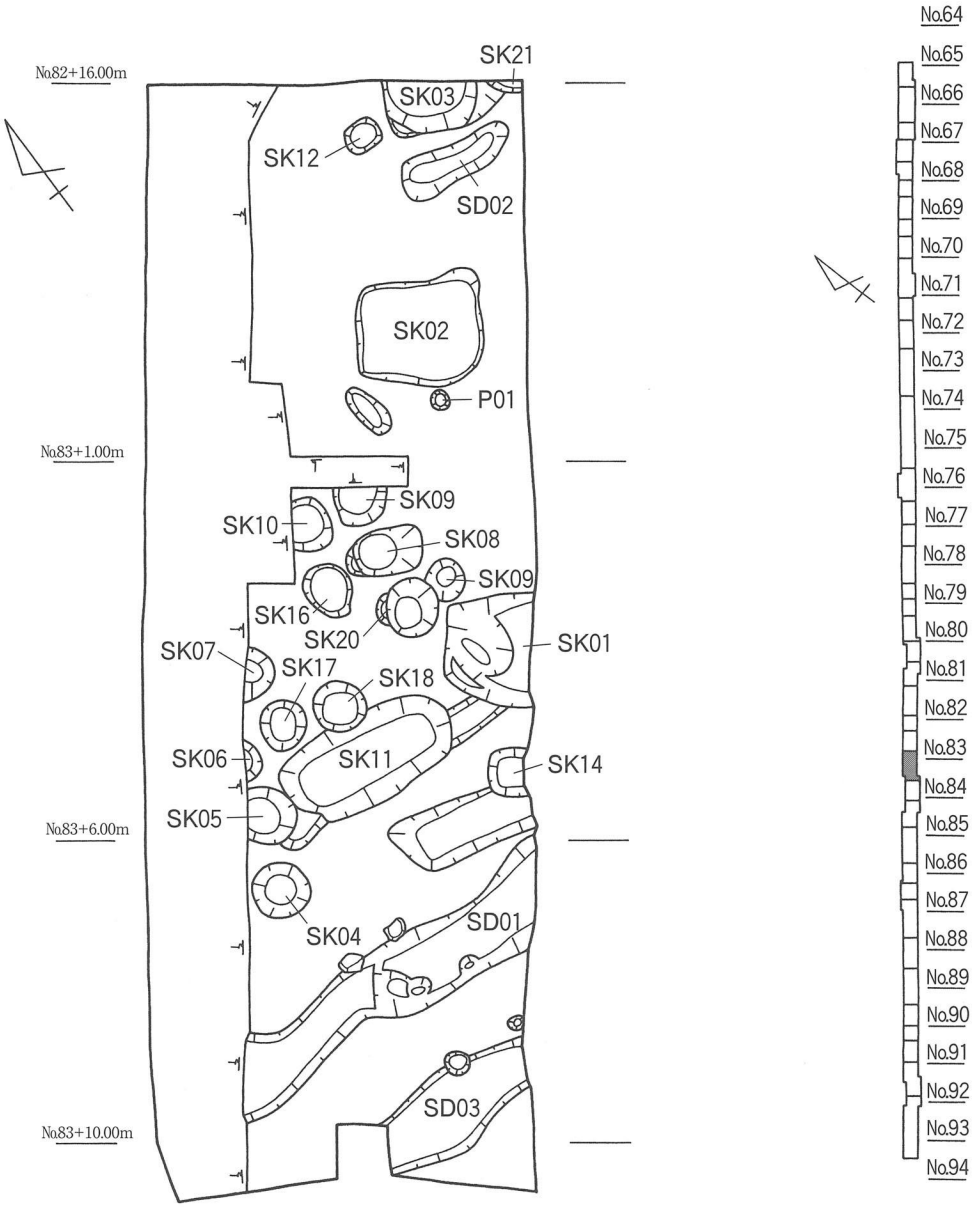




SK11内土坑

0 1m

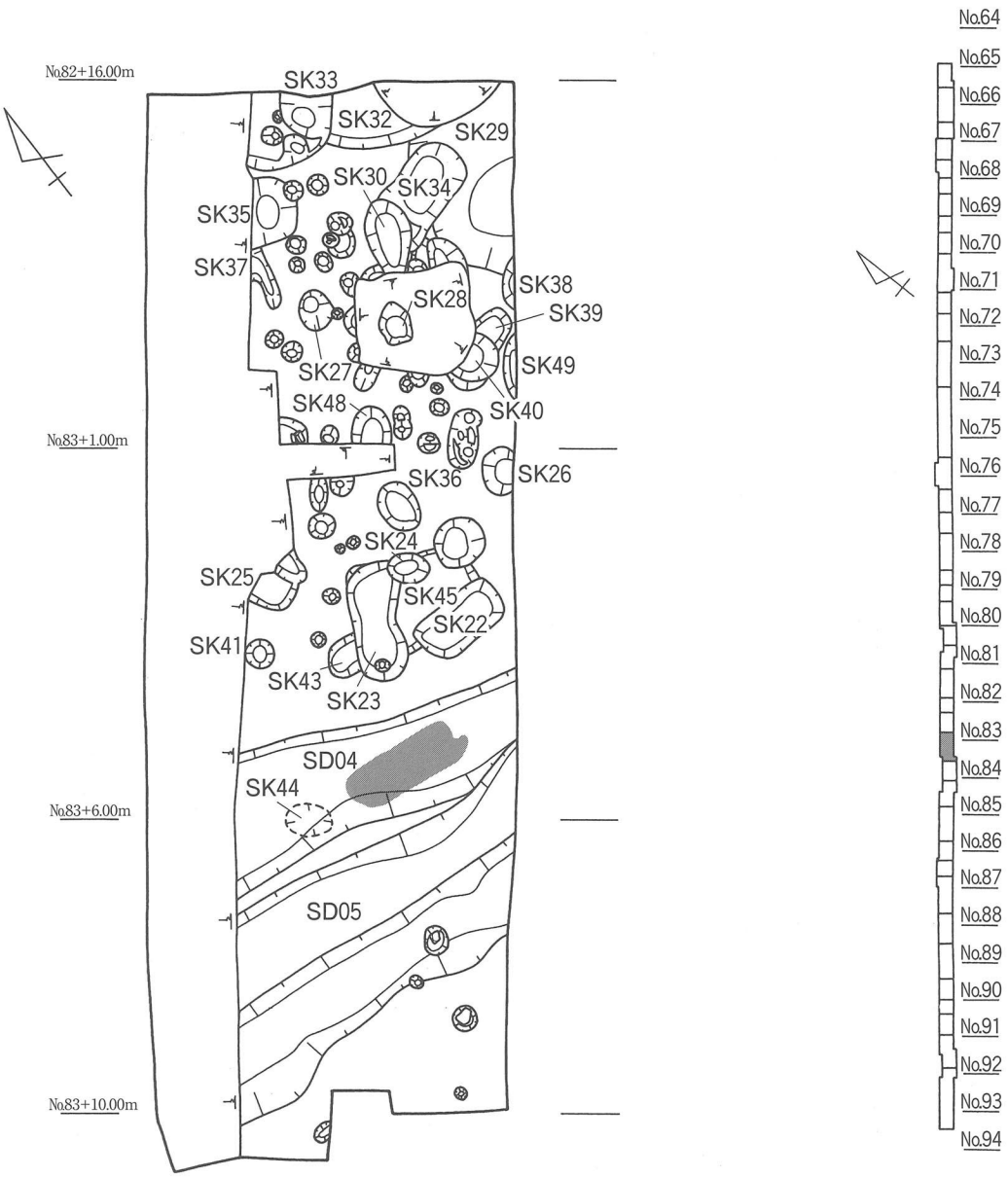
25区遺構配置図・平面図



第Ⅰ面

0 5m

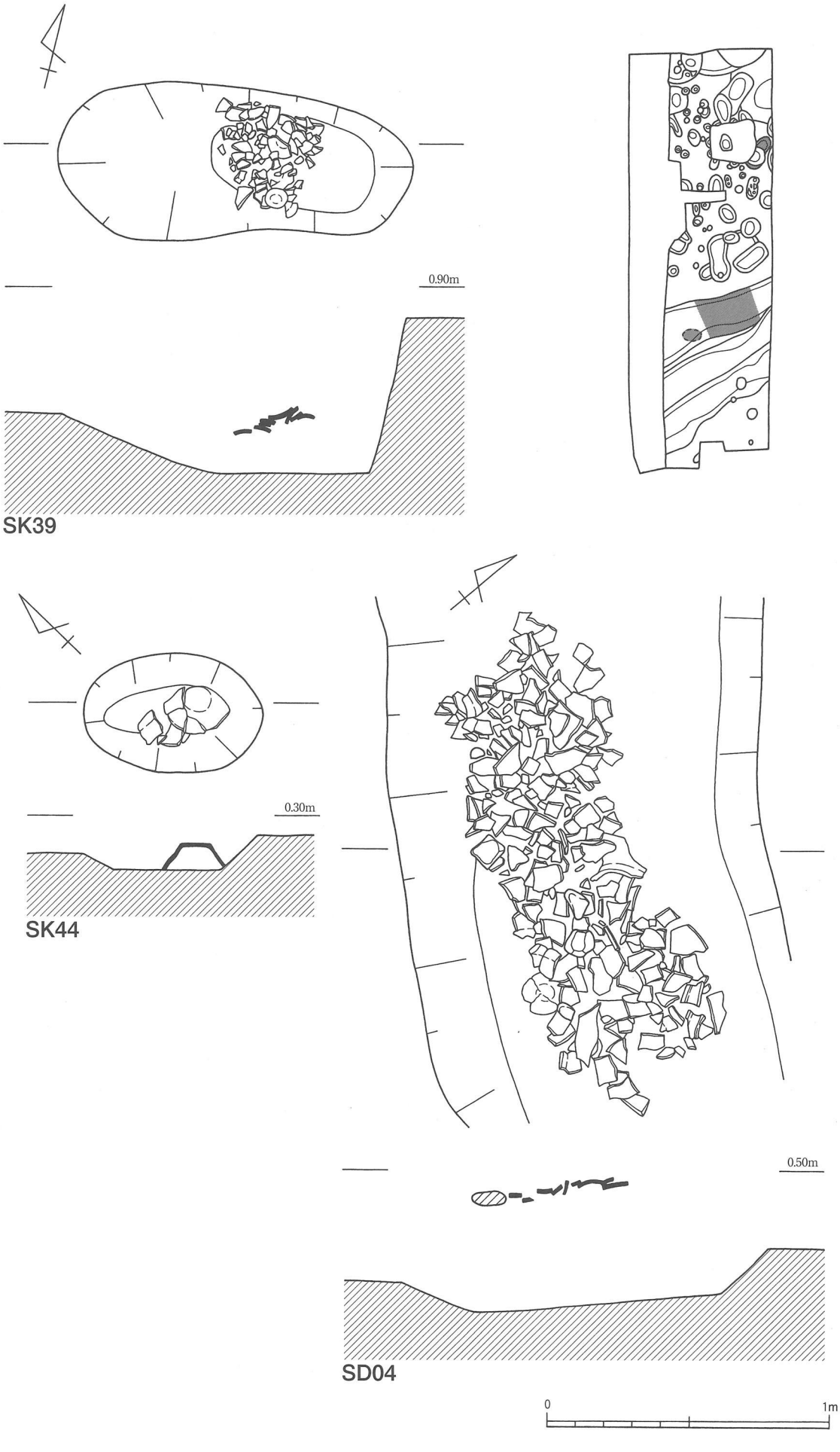
26区遺構配置図①



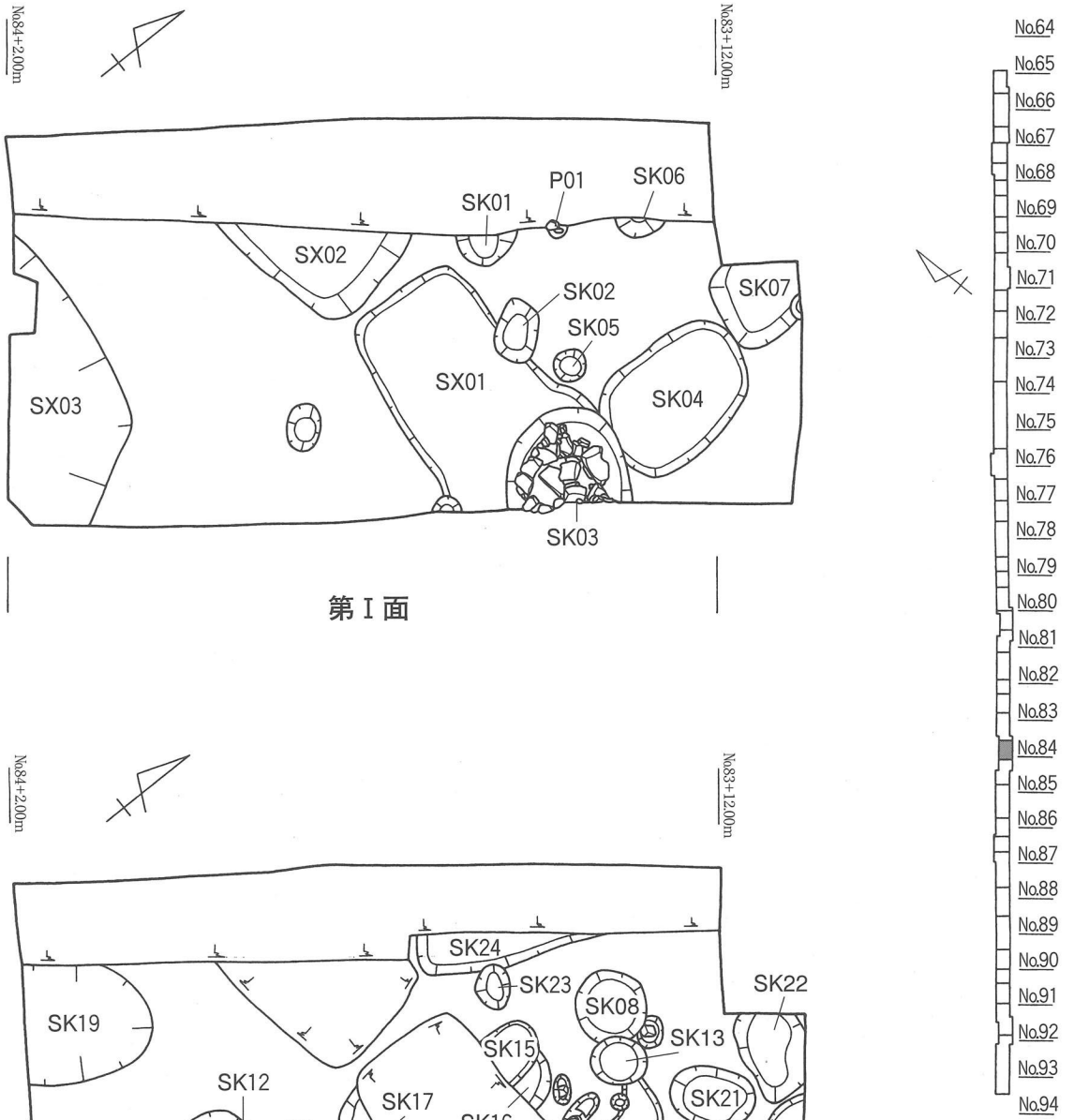
第Ⅱ面

0 5m

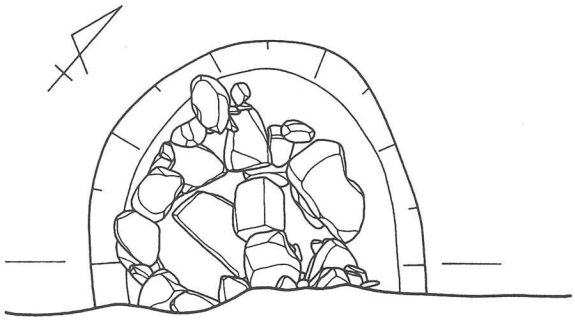
26区遺構配置図②

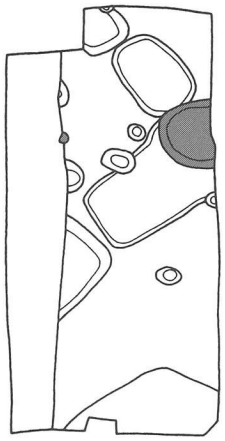


26区第Ⅱ面遺構平面図

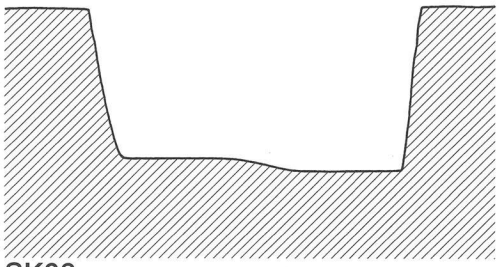

No.84+2.00m
No.83+12.00m
SK01
P01
SK06
SX02
SK07
SK02
SK05
SX01
SX03
SK04
SK03
第Ⅰ面
No.84+2.00m
No.83+12.00m
SK24
SK23
SK22
SK08
SK19
SK13
SK15
SK12
SK17
SK21
SK16
SK14
SK10
SK09
SK18
SK11
第Ⅱ面
No.64
No.65
No.66
No.67
No.68
No.69
No.70
No.71
No.72
No.73
No.74
No.75
No.76
No.77
No.78
No.79
No.80
No.81
No.82
No.83
No.84
No.85
No.86
No.87
No.88
No.89
No.90
No.91
No.92
No.93
No.94
0
5m

27区遺構配置図

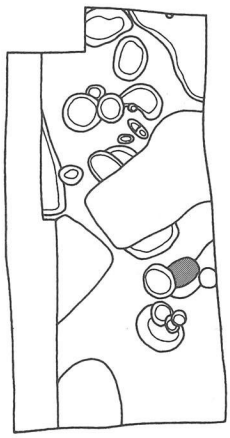




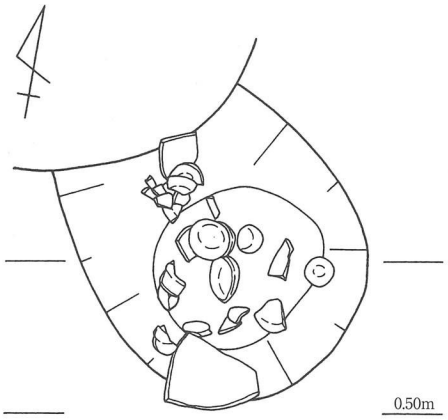
1.20m



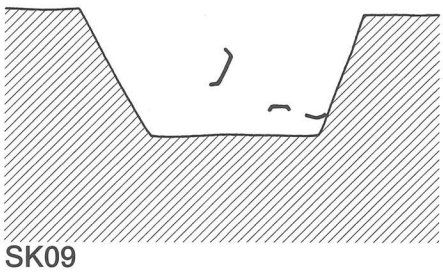
SK03



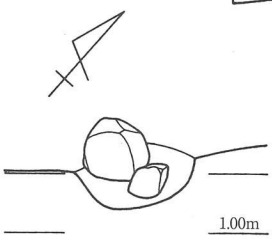
0 2m



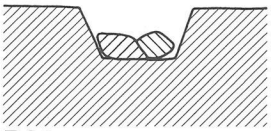
0.50m



SK09



1.00m

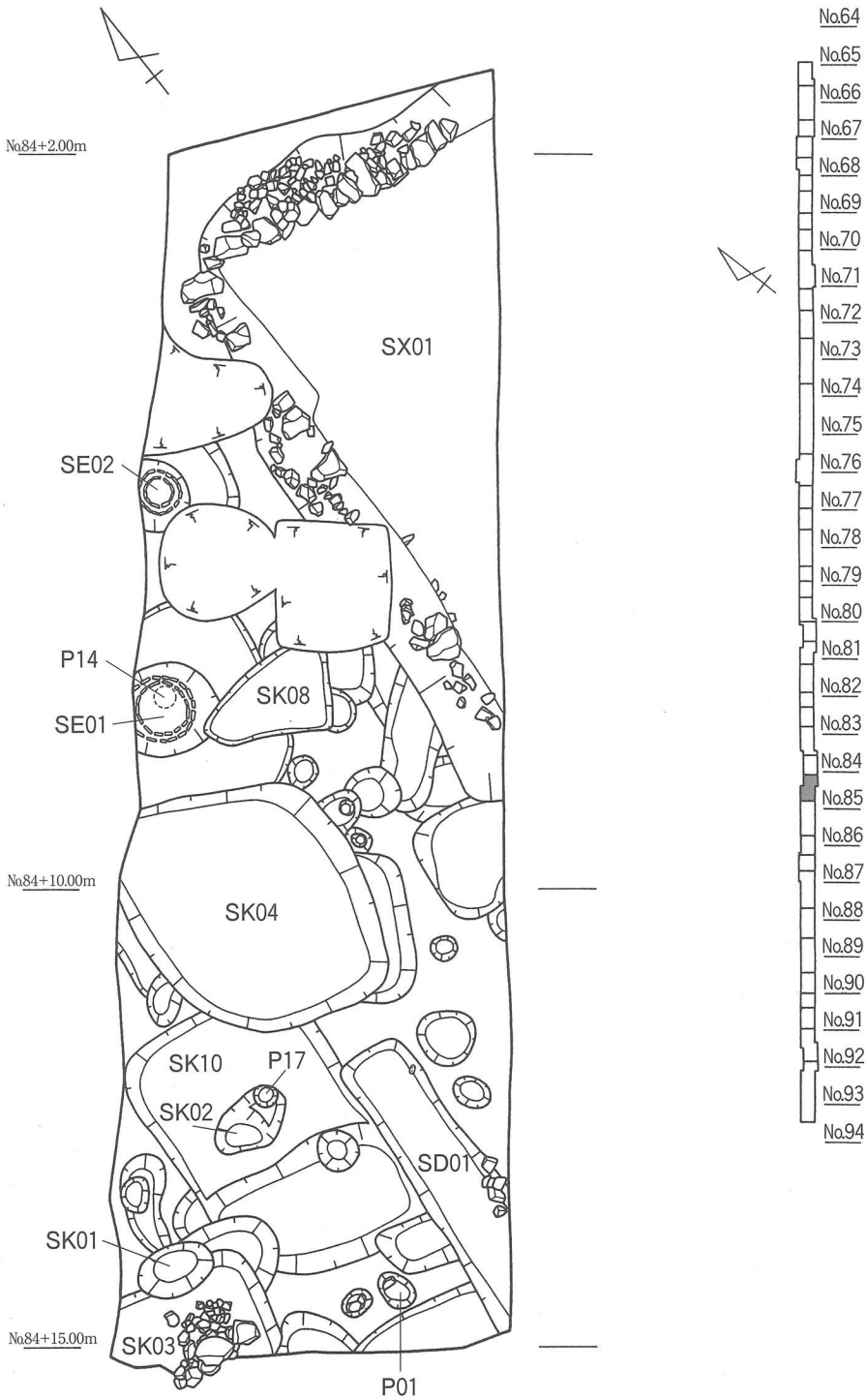


P01

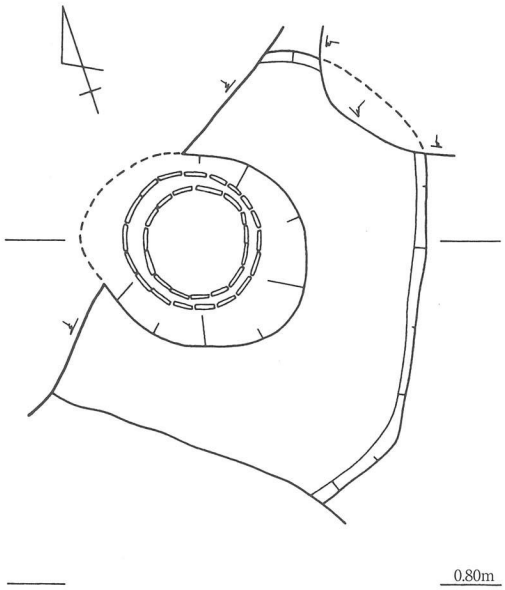
0 1m

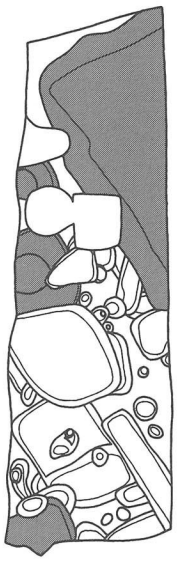
27区遺構平面図

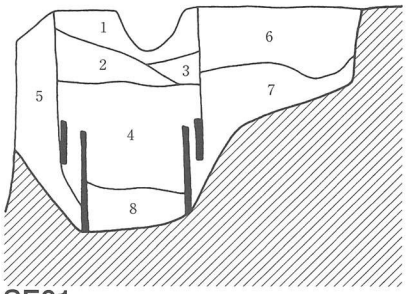
図版54



28区遺構配置図

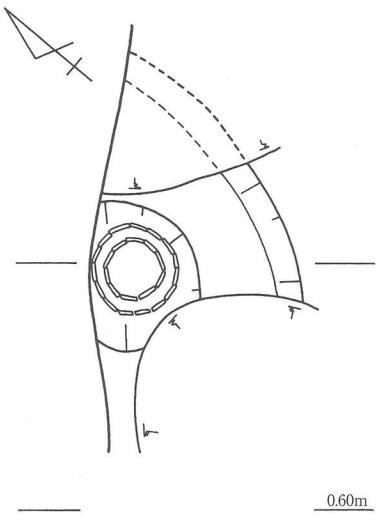


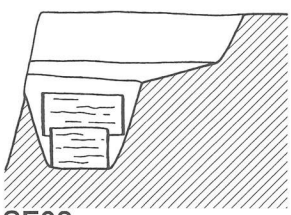




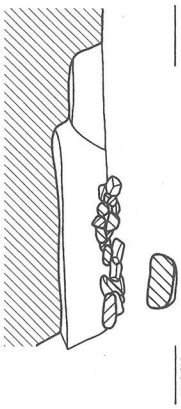
SE01

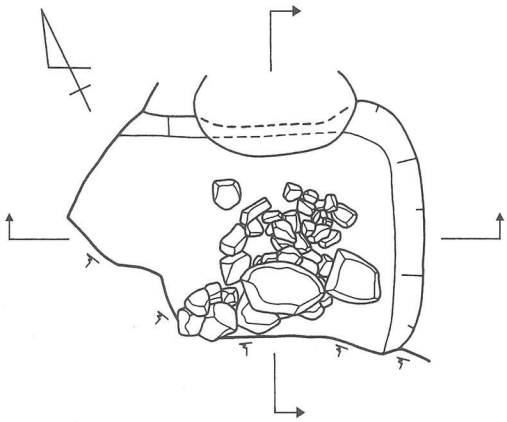
1 2.5Y 5/1 黄灰色砂質シルト
2 2.5Y 6/1 黄灰色粘質砂
3 2.5Y 7/1 灰黄色砂
4 2.5Y 4/1 黄灰色粘質シルト
5 2.5Y 4/1 黄灰色粗砂
6 2.5Y 5/1 黄灰色シルト質砂
7 2.5Y 7/2 灰黄色細砂
8 10Y 6/1 灰色粘土

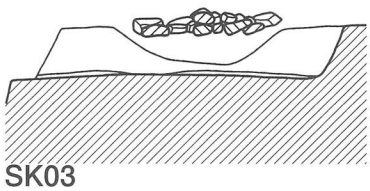




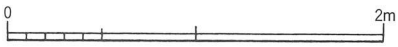
SE02



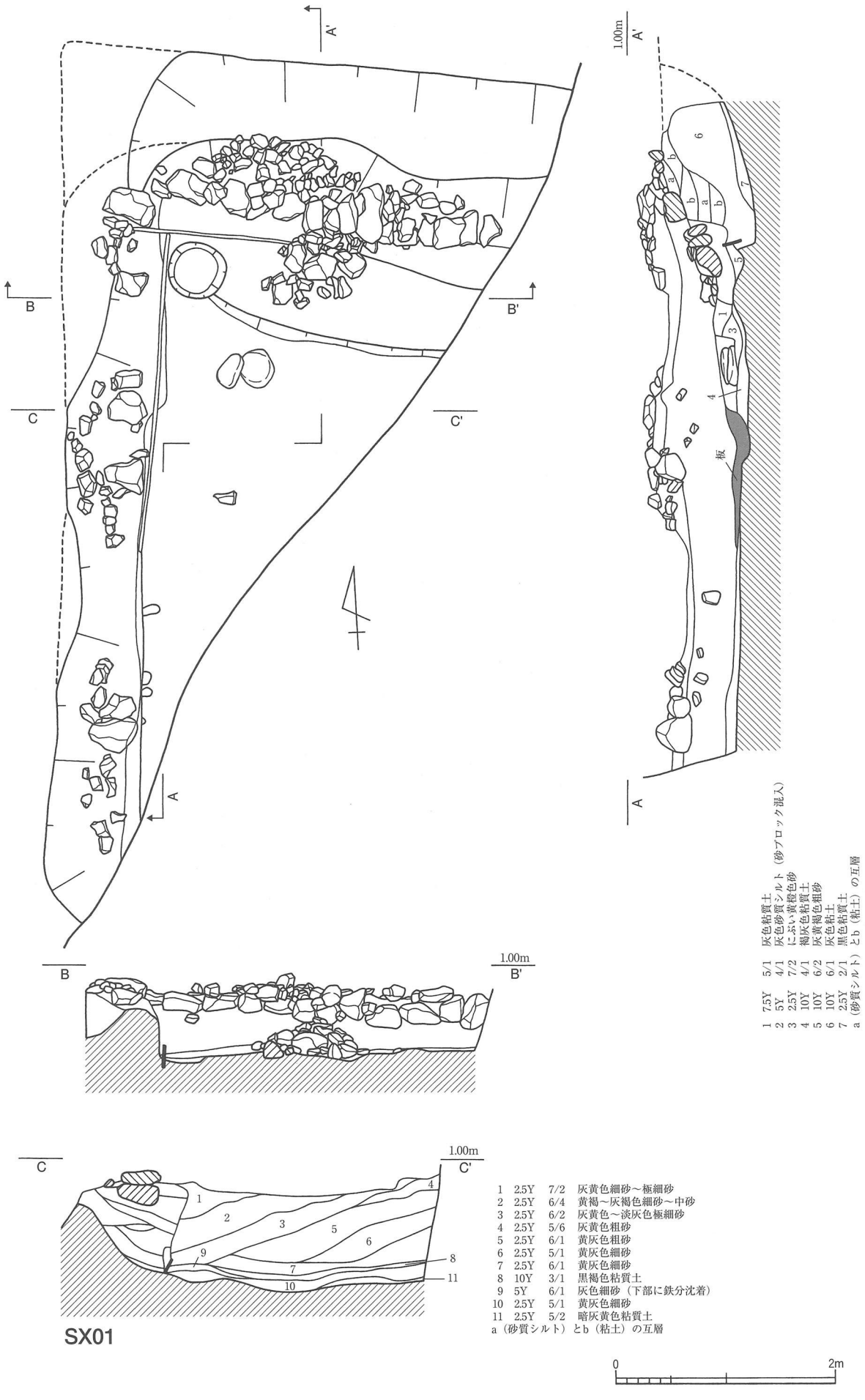




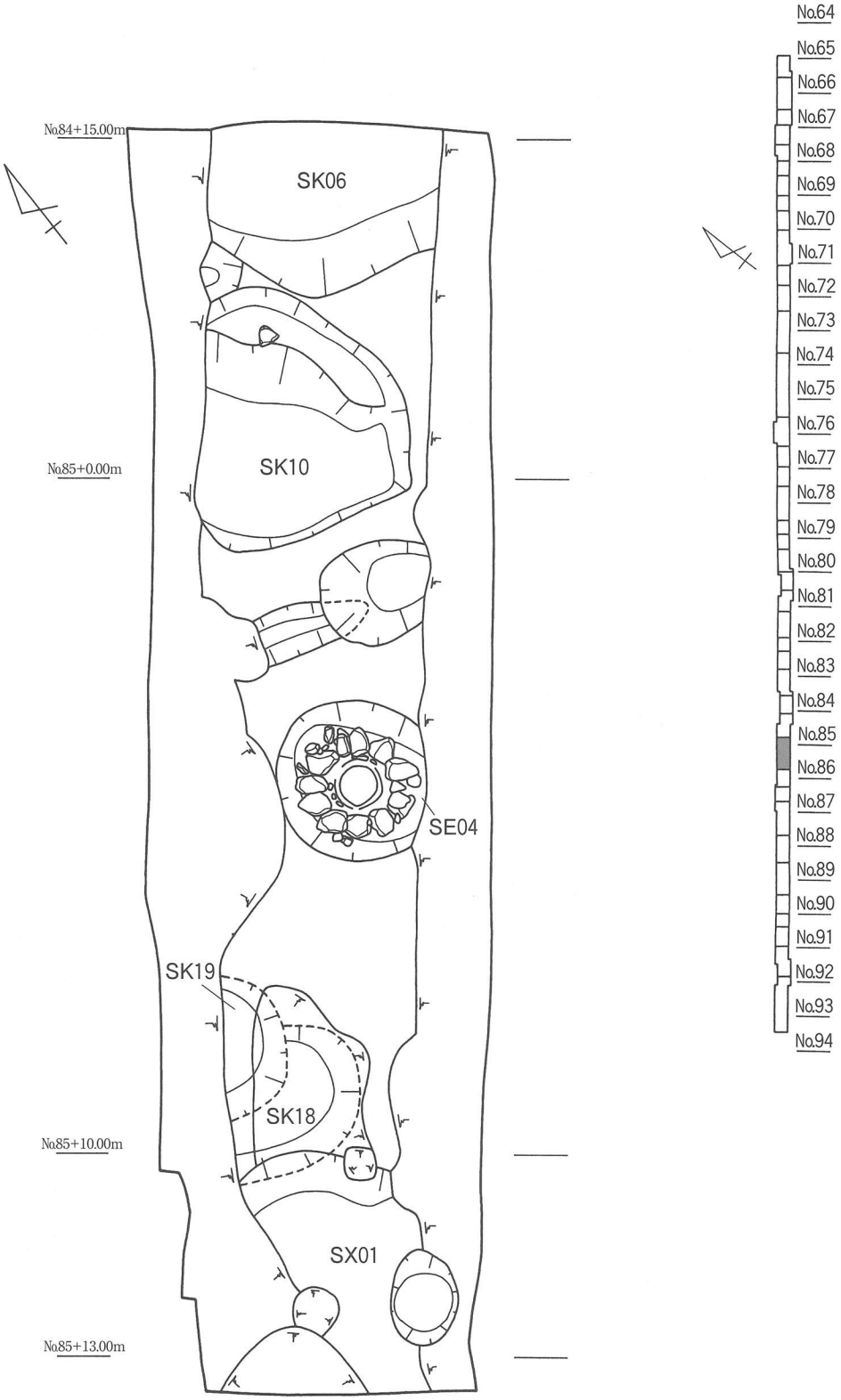
SK03



28区遺構平面図①


A'
B
B'
C
C'
A
1.00m
板
1 7.5Y 5/1 灰色粘質土
2 5Y 4/1 灰色砂質シルト（砂ブロック混入）
3 2.5Y 7/2 にぶい黄橙色砂
4 10Y 4/1 褐灰色粘質土
5 10Y 6/2 灰黄褐色粗砂
6 10Y 6/1 灰色粘土
7 2.5Y 2/1 黒色粘質土
a（砂質シルト）とb（粘土）の互層
SX01
1 2.5Y 7/2 灰黄色細砂～極細砂
2 2.5Y 6/4 黄褐～灰褐色細砂～中砂
3 2.5Y 6/2 灰黄色～淡灰色極細砂
4 2.5Y 5/6 灰黄色粗砂
5 2.5Y 6/1 黄灰色粗砂
6 2.5Y 5/1 黄灰色細砂
7 2.5Y 6/1 黄灰色細砂
8 10Y 3/1 黒褐色粘質土
9 5Y 6/1 灰色細砂（下部に鉄分沈着）
10 2.5Y 5/1 黄灰色細砂
11 2.5Y 5/2 暗灰黄色粘質土
a（砂質シルト）とb（粘土）の互層
0
2m

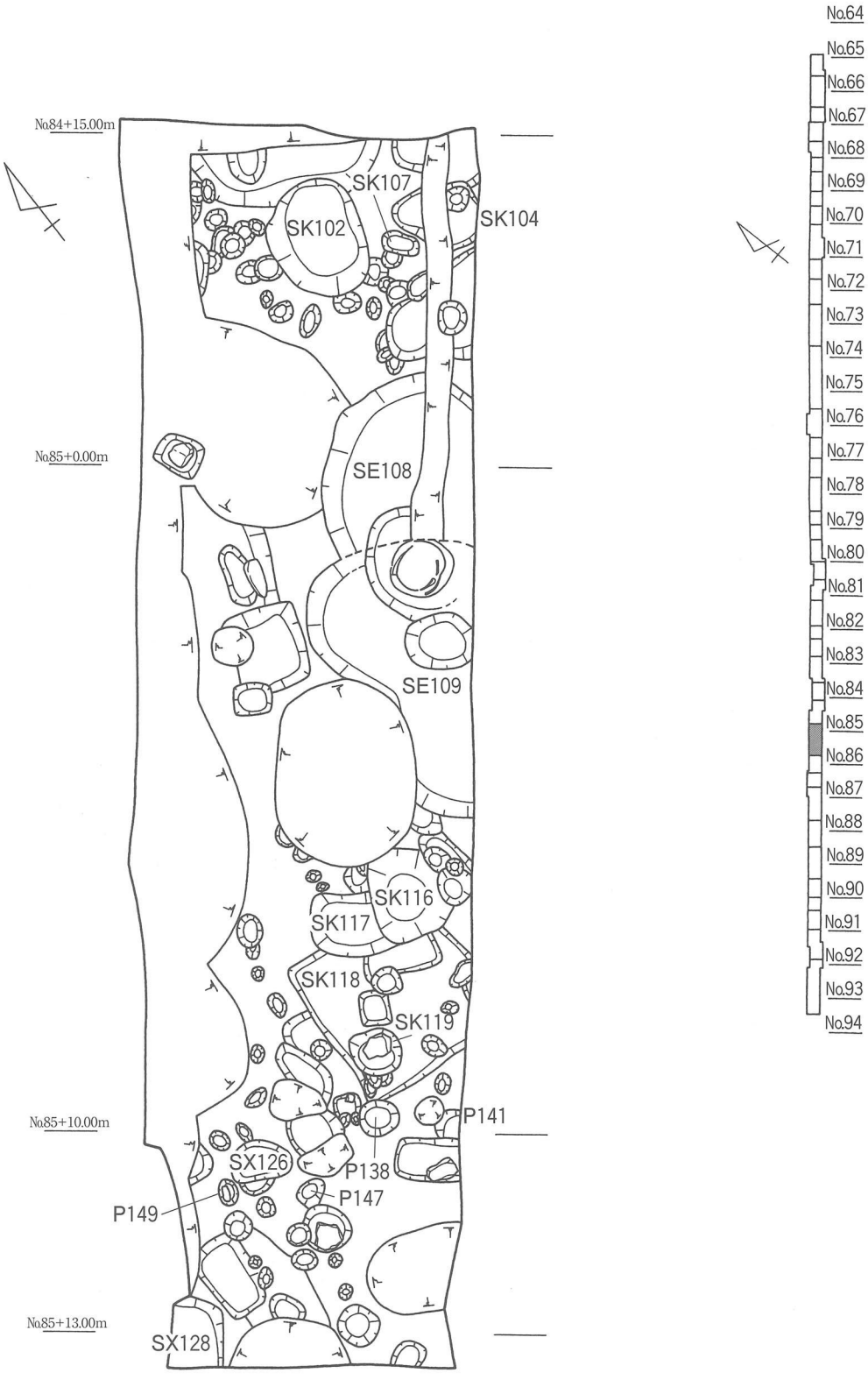
28区遺構平面図②



第Ⅰ面

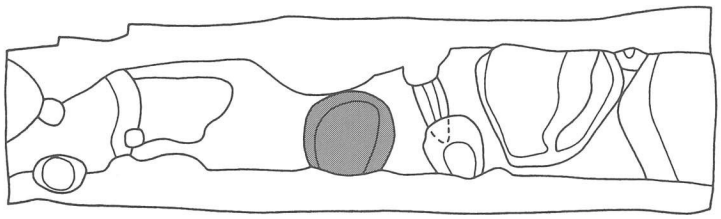
0 5m

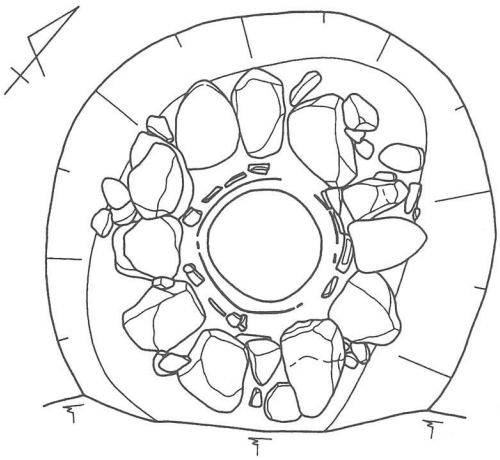
29区遺構配置図①

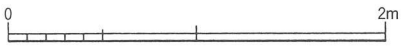


第Ⅱ面

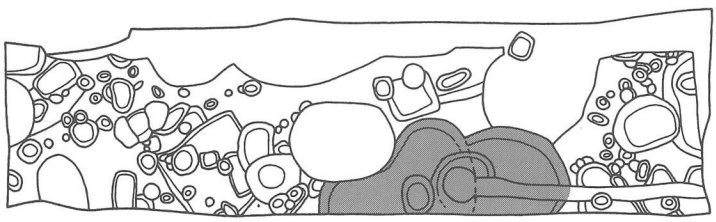
29区遺構配置図②

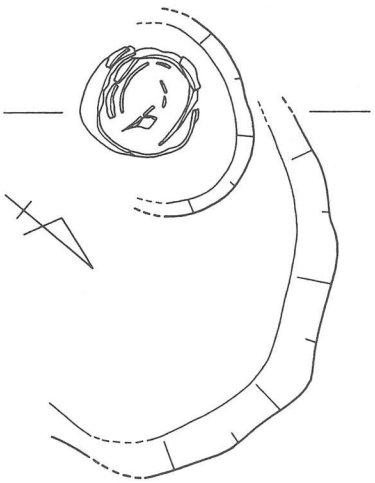


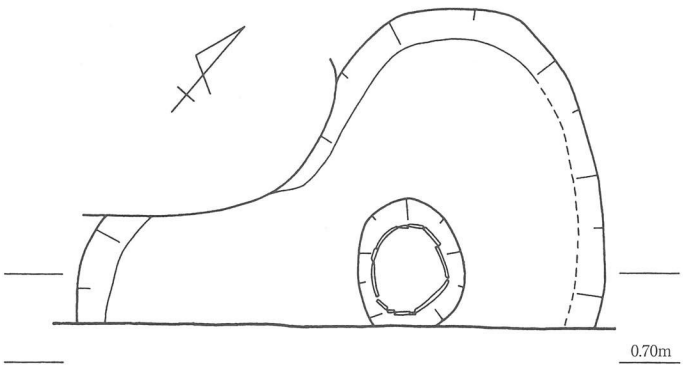


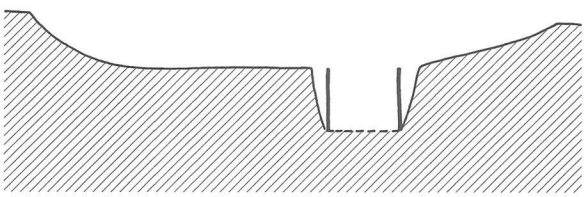


SE04

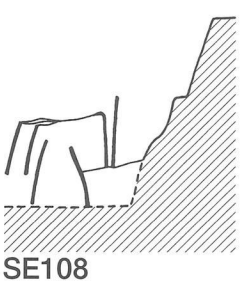








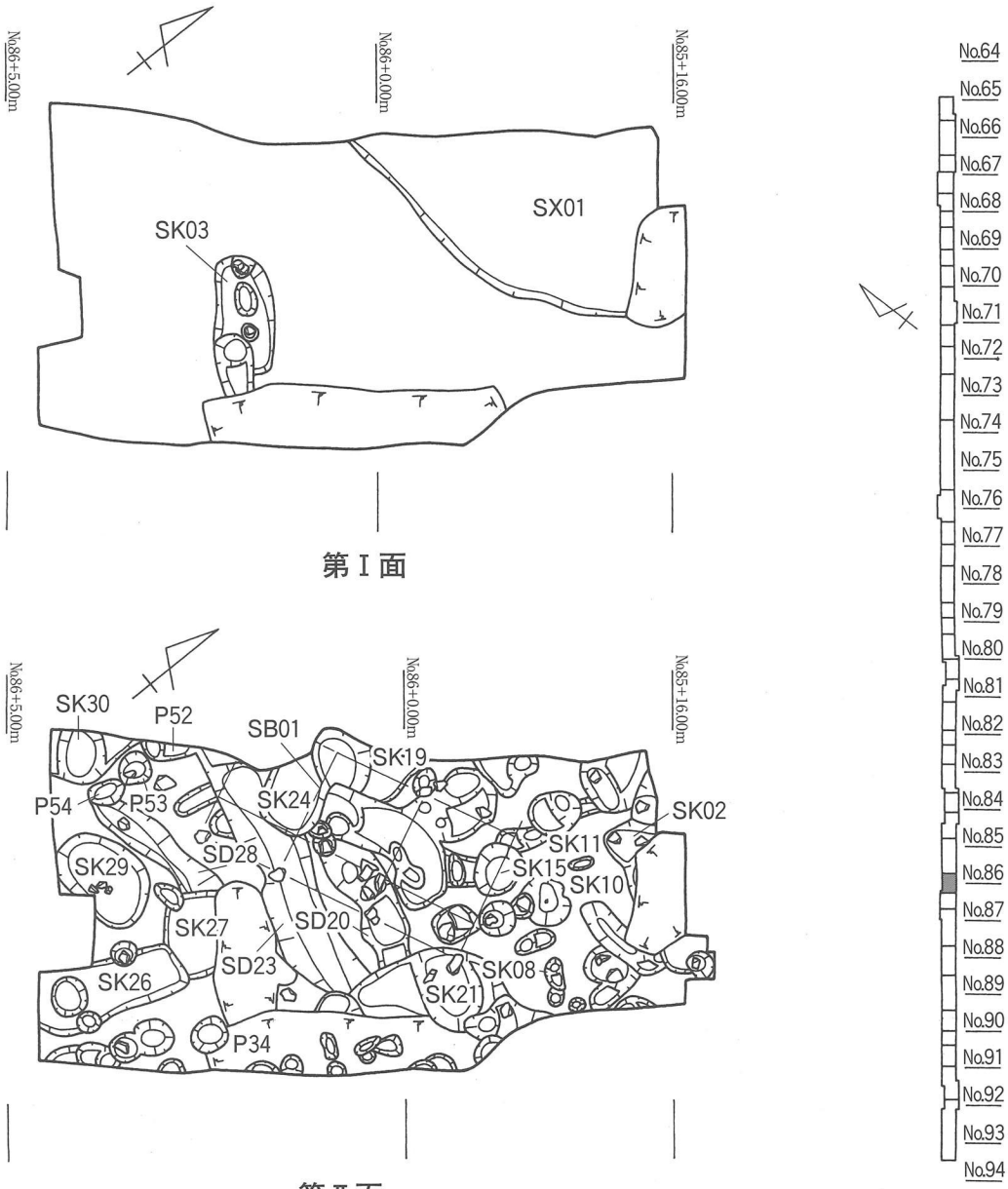
SE109



SE108

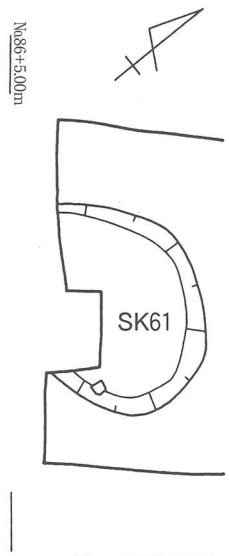
29区遺構平面図

図版60



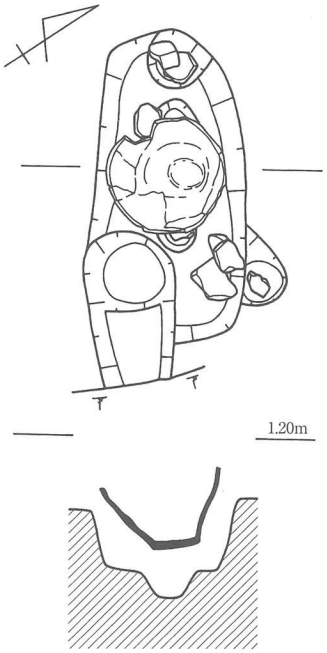
第Ⅰ面

第Ⅱ面

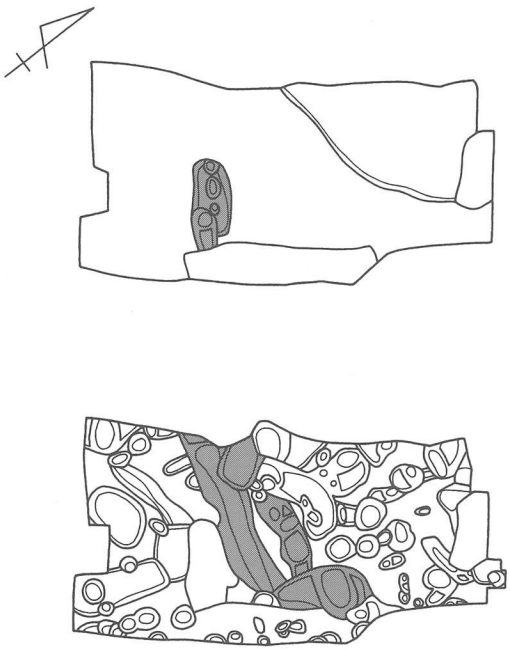


第Ⅱ面下層

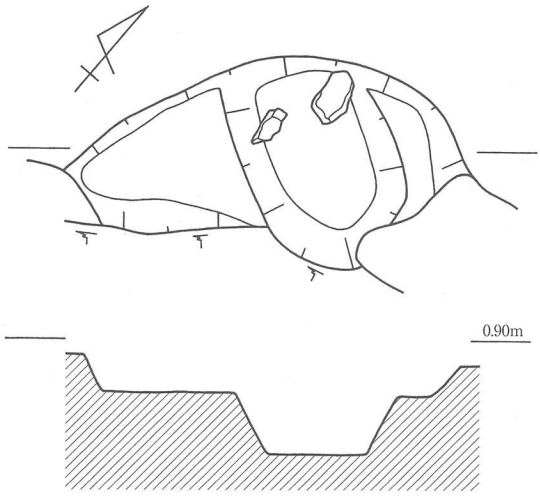
30区遺構配置図



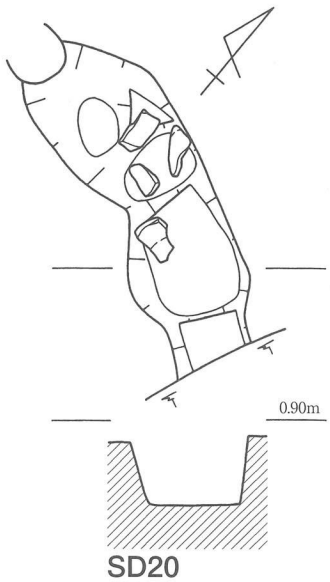
SK03



SK24・SD23



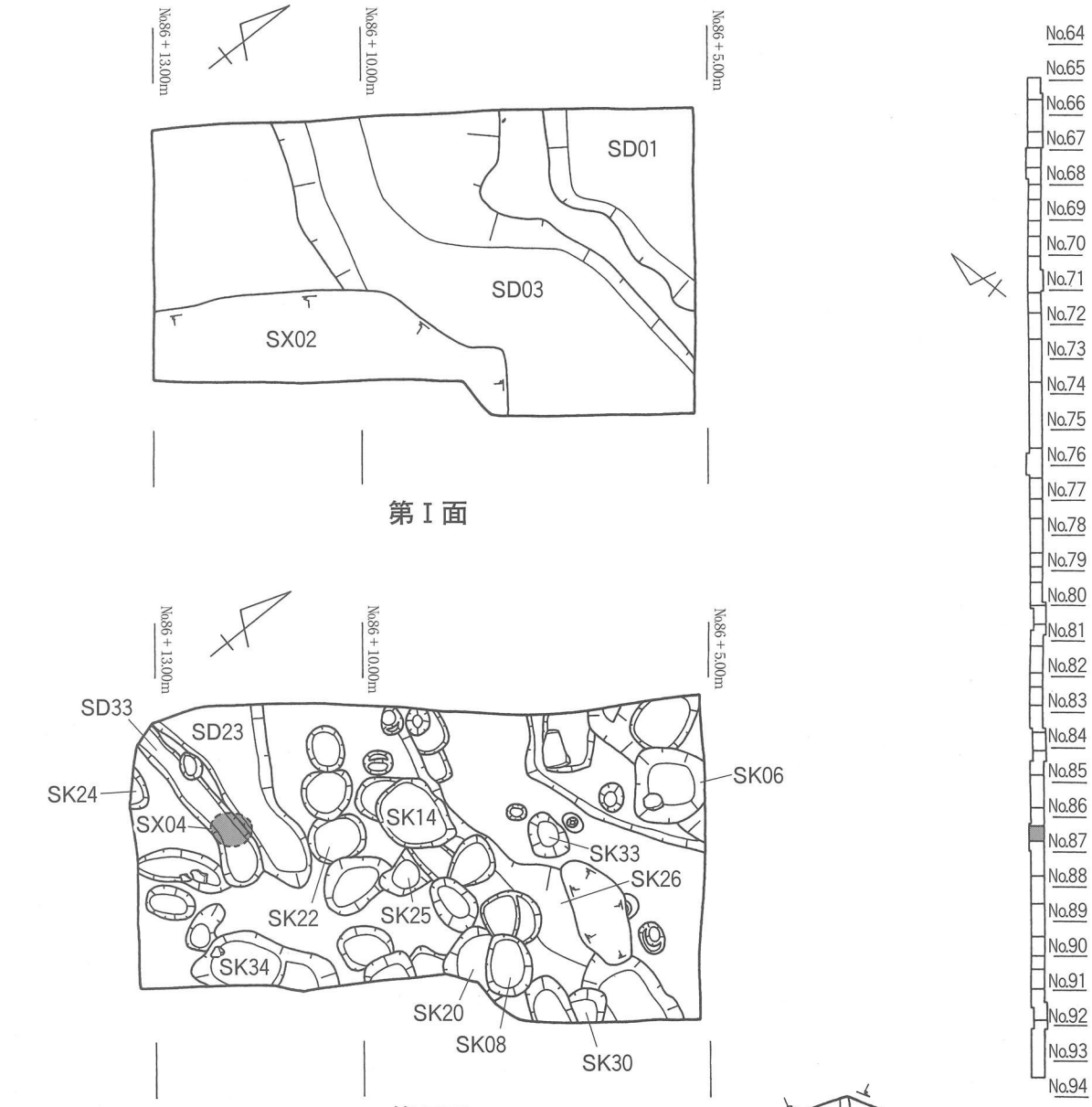
SK21



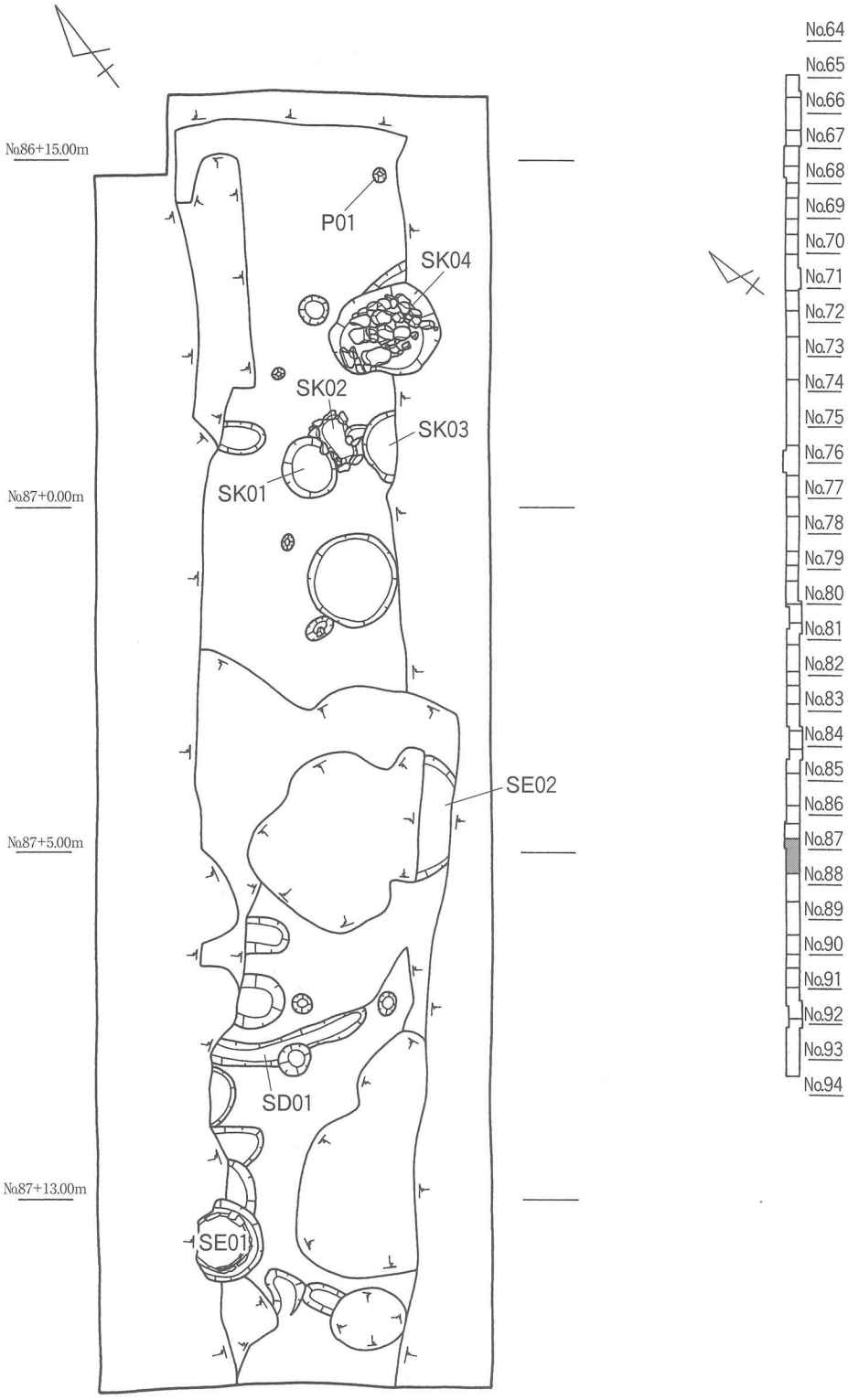
SD20

30区遺構平面図

図版62

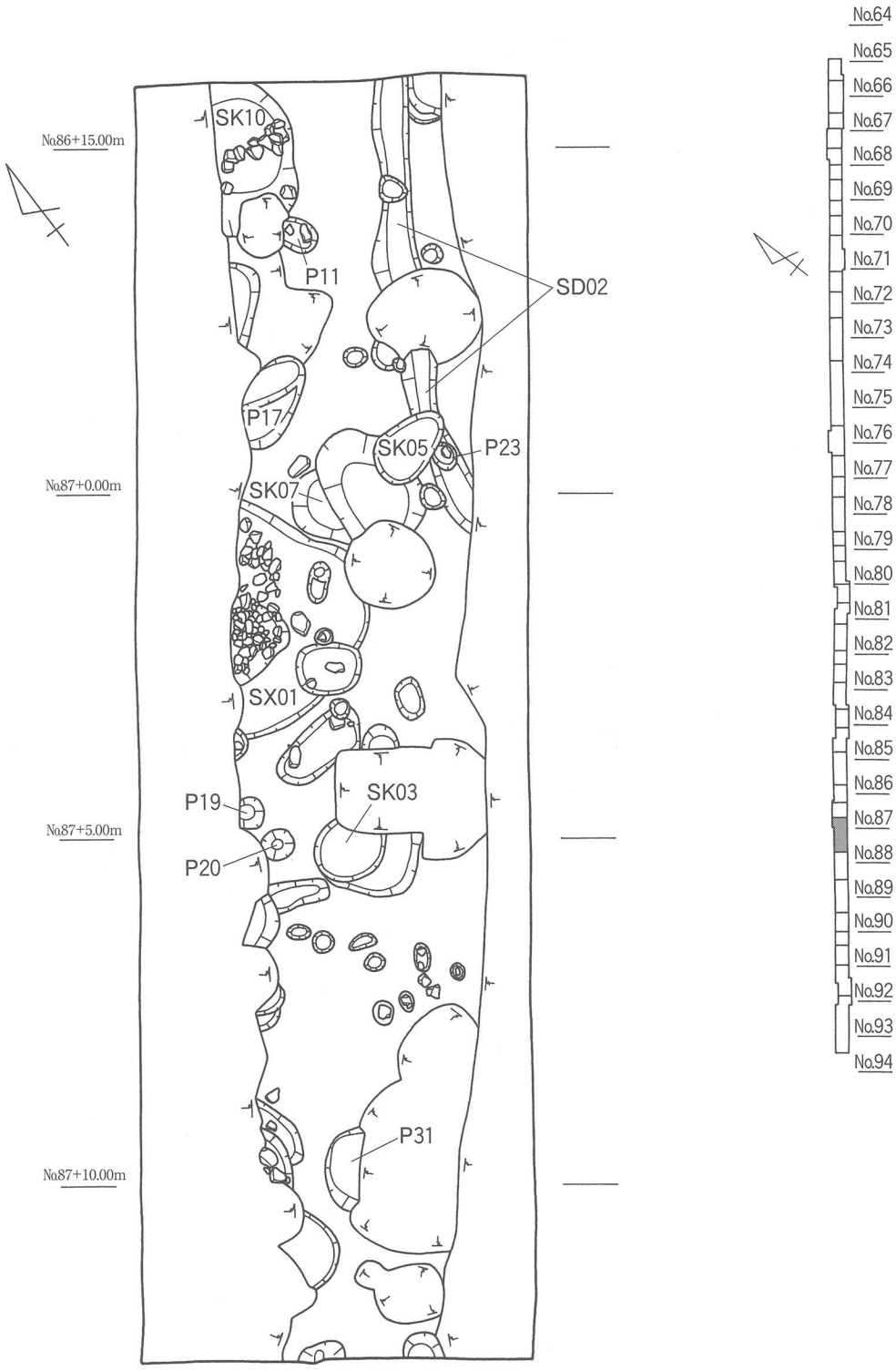


31区遺構配置図・平面図



第Ⅰ－a面

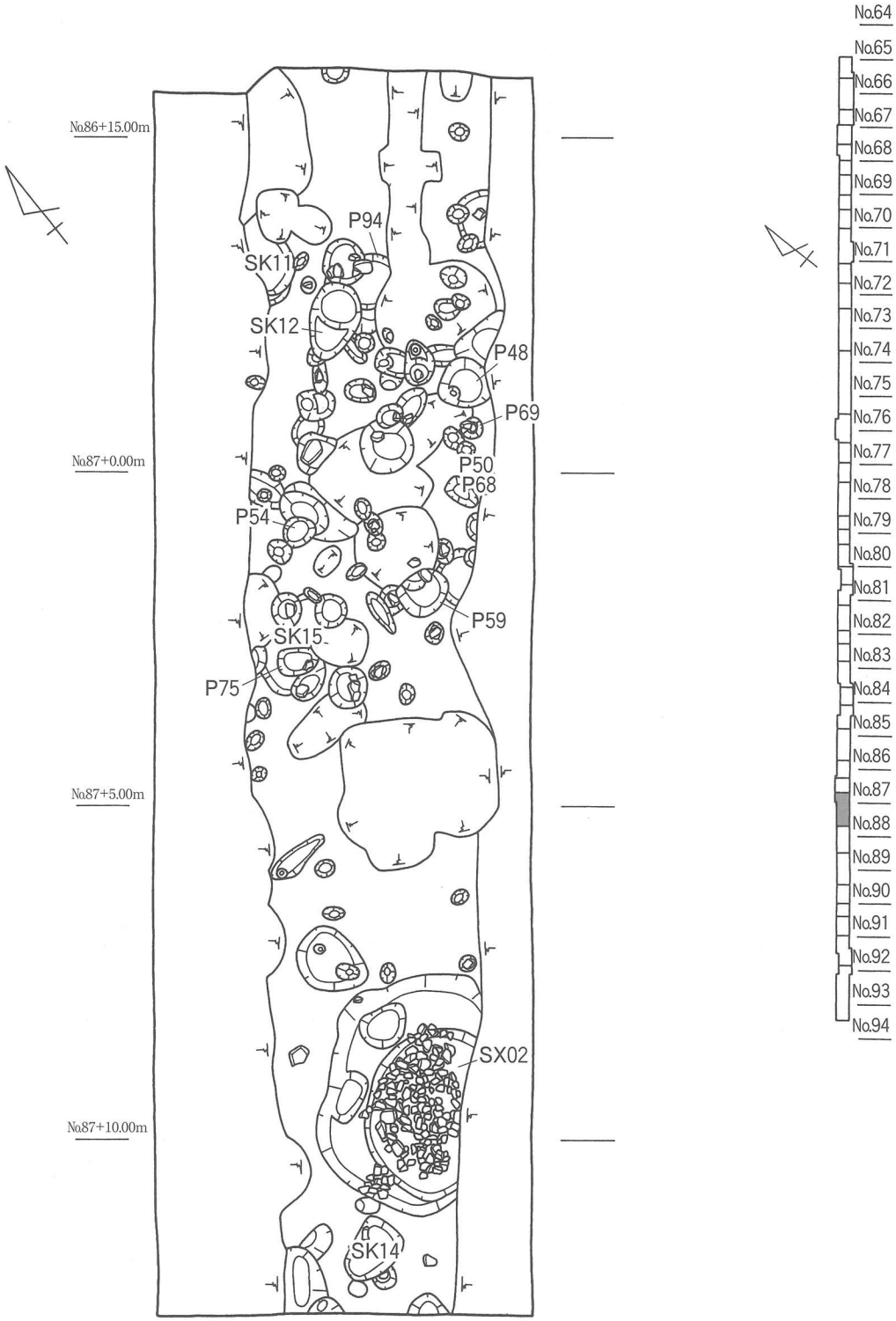
32区遺構配置図①



第Ⅰ－b面

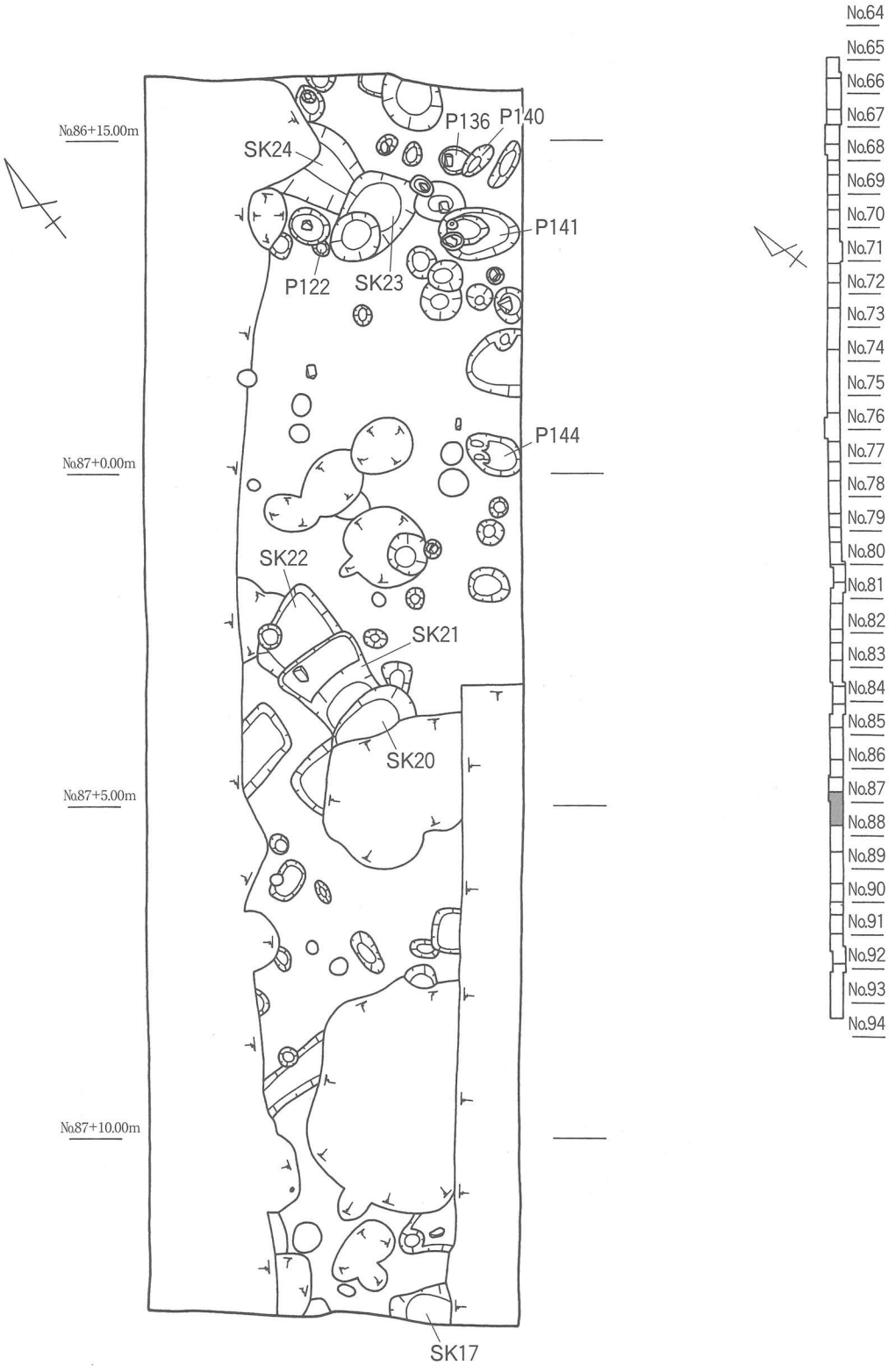
0 5m

32区遺構配置図②



第Ⅱ面

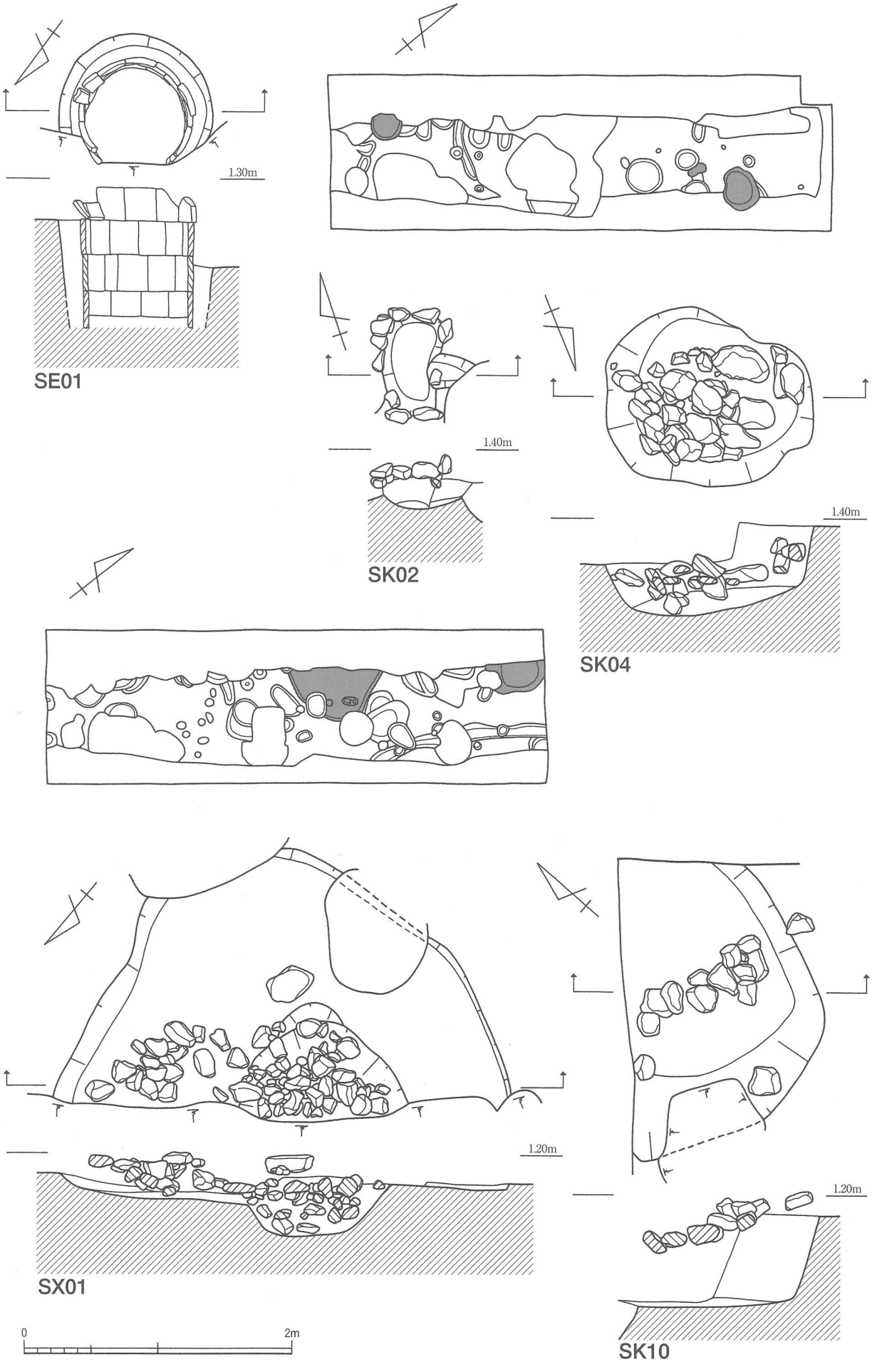
32区遺構配置図③



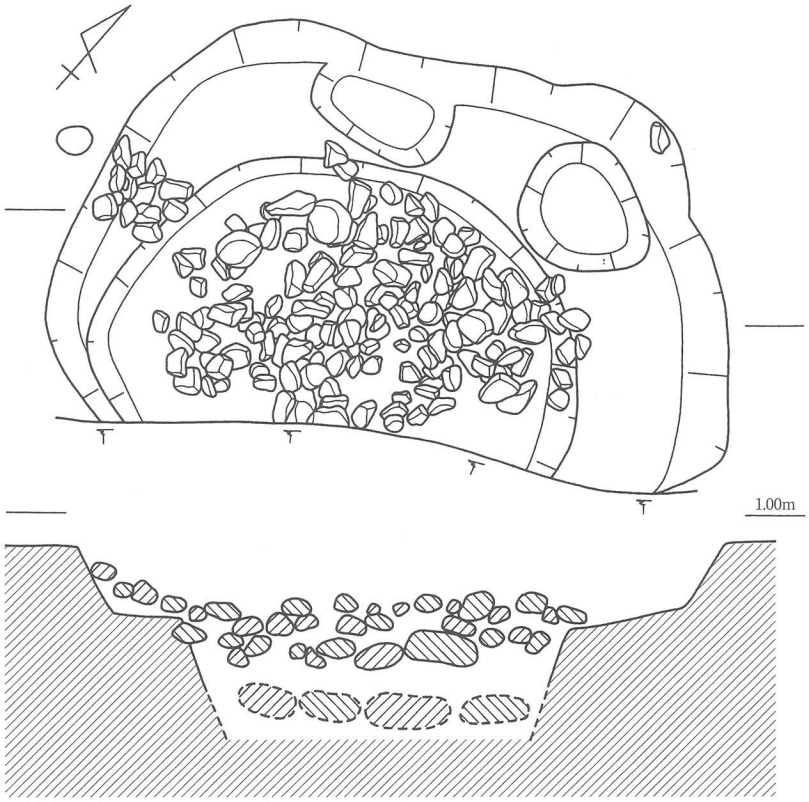
第Ⅲ面

0 5m

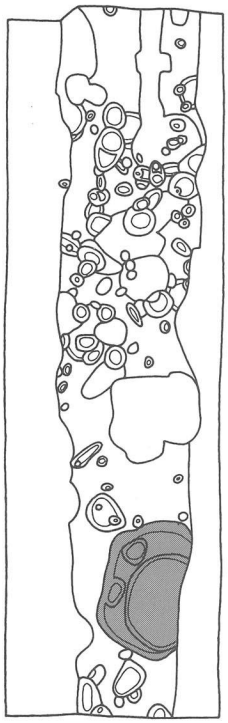
32区遺構配置図④

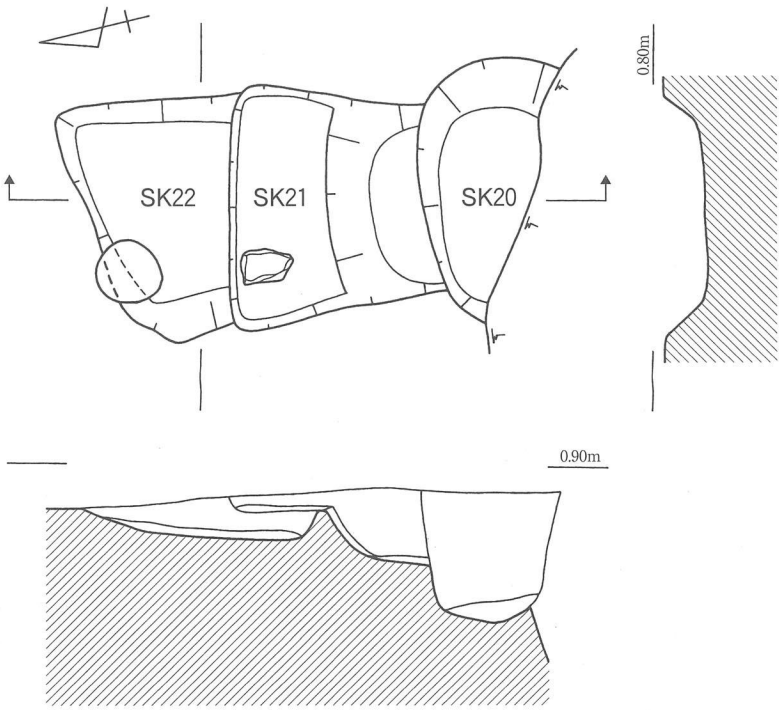


32区遺構平面図①

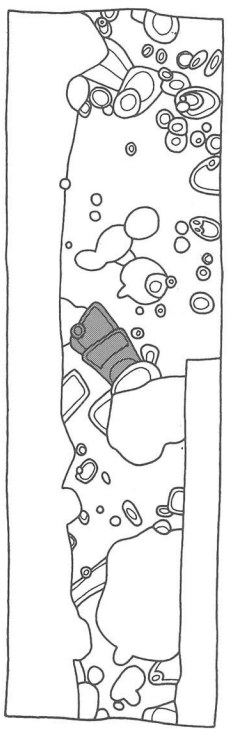


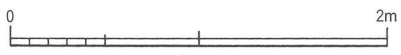
SX02



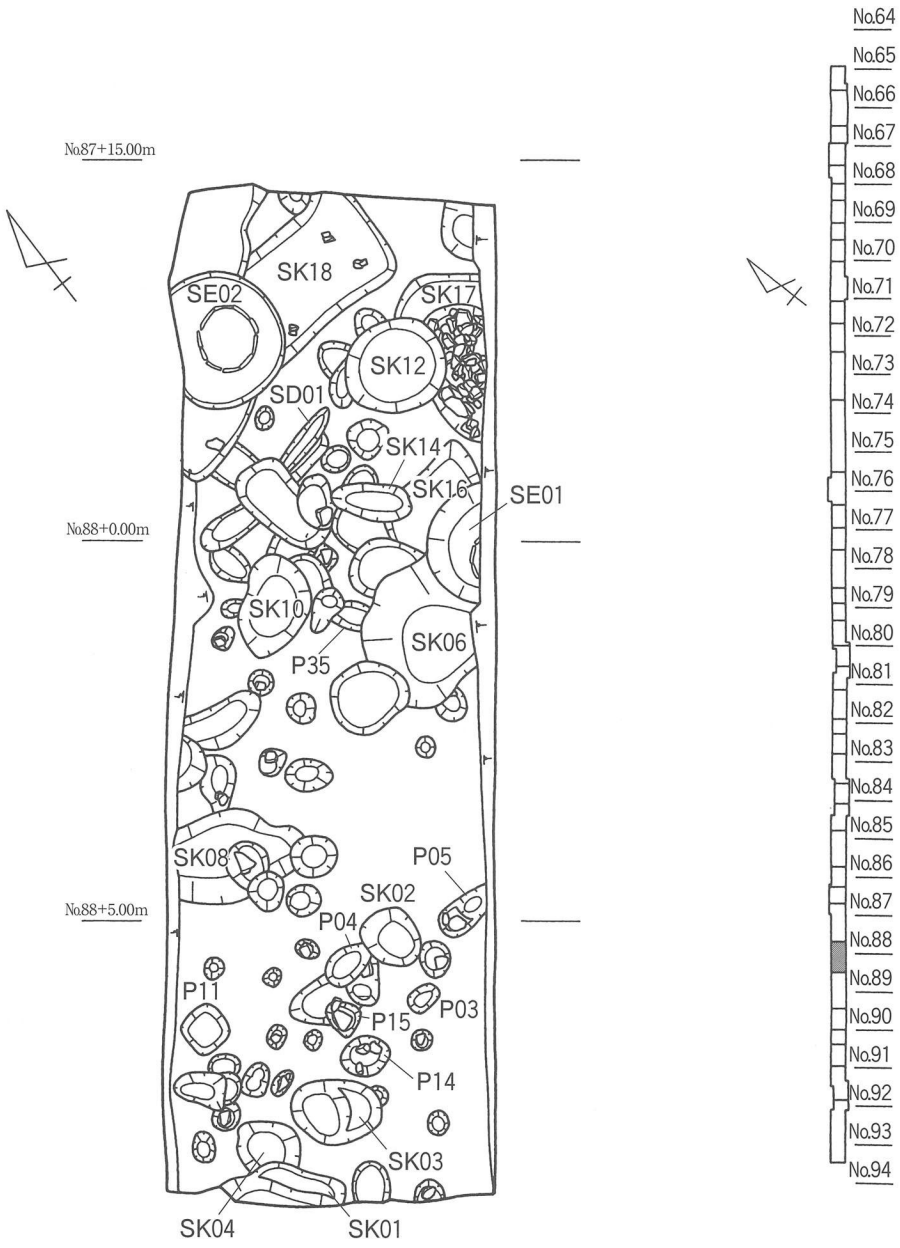


SK22





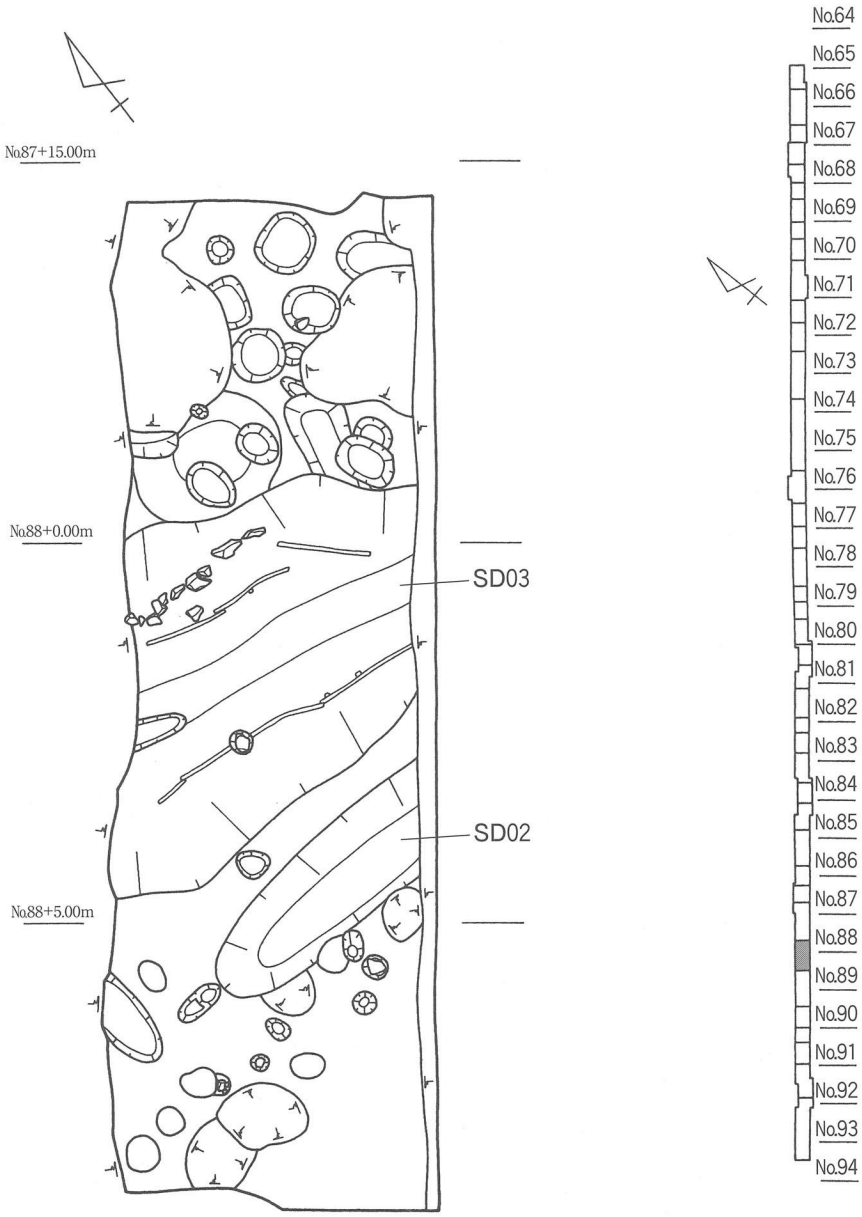
32区遺構平面図②



第Ⅰ面

0 5m

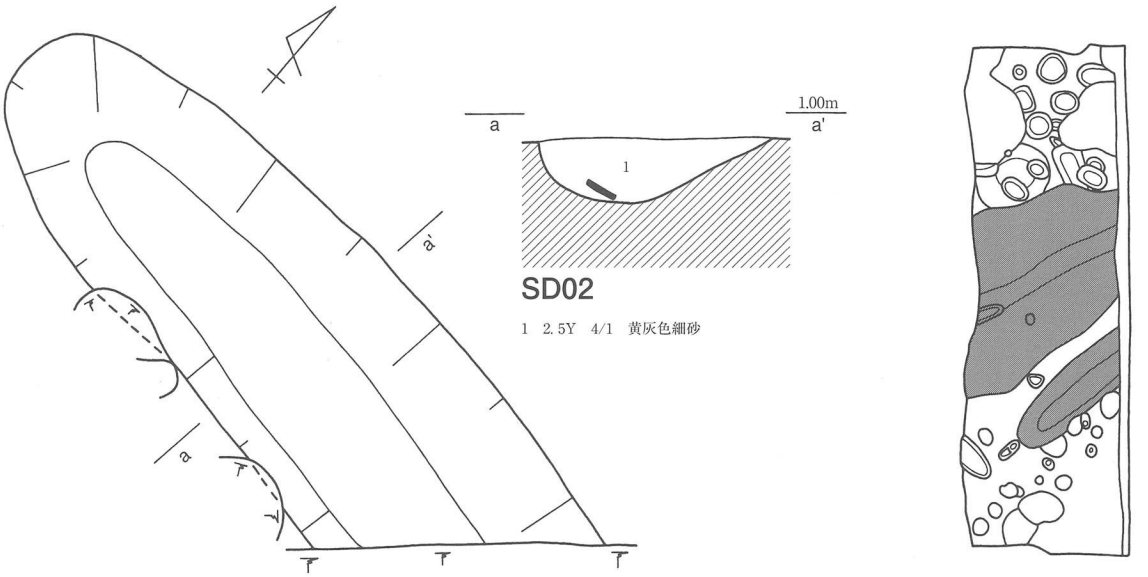
33区遺構配置図①

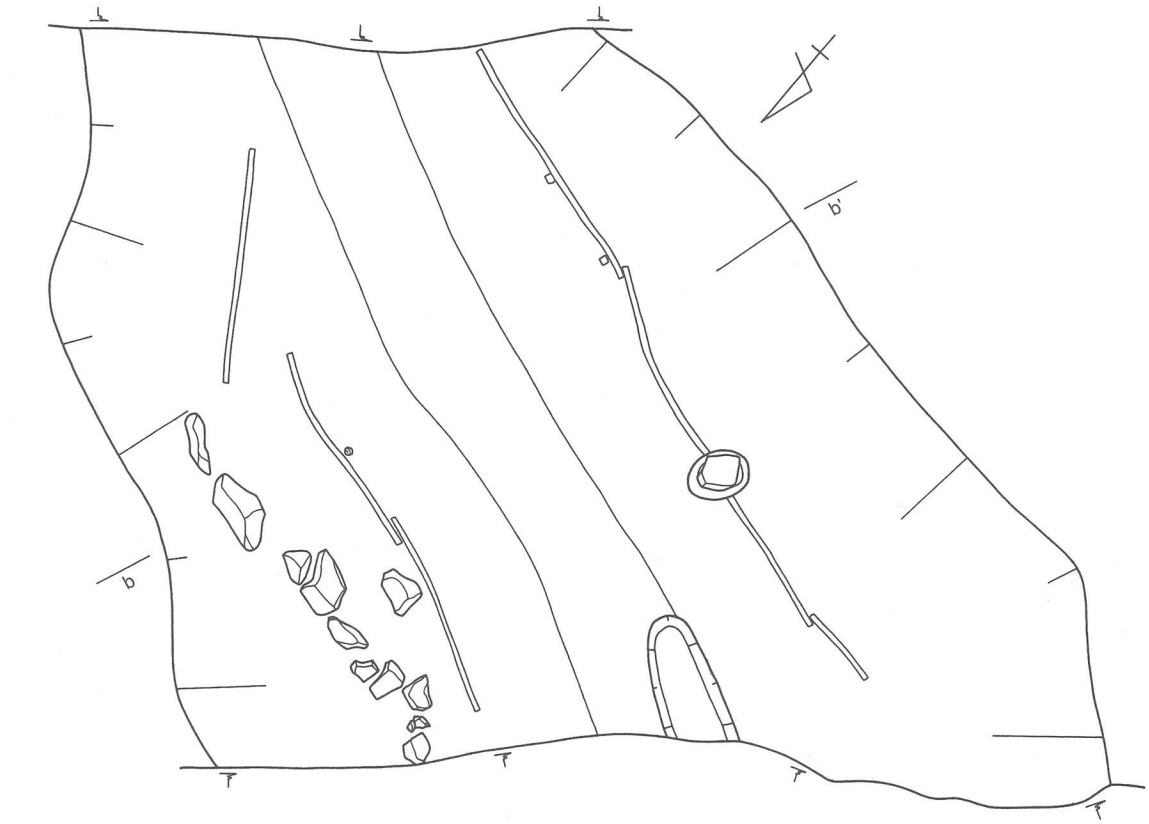


第Ⅱ面

0 5m

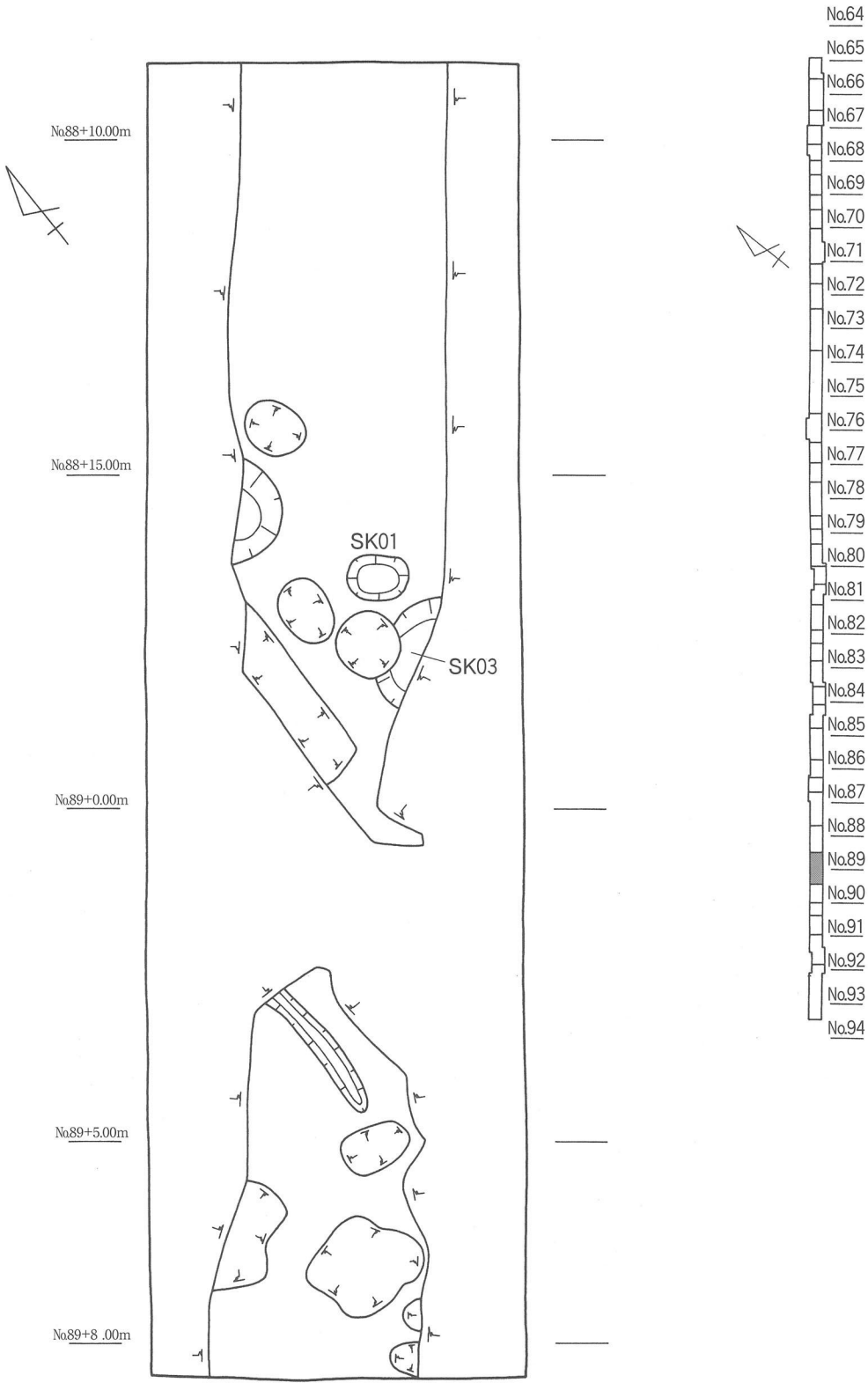
33区遺構配置図②


a
a'
1.00m
1
SD02
1　2.5Y　4/1　黄灰色細砂


b
b'
1.00m
1
2
3
a
b
c
SD03
1　10YR　5/1　褐灰色細砂
2　2.5Y　6/2　灰黄色細砂
3　2.5Y　4/1　黄灰色砂質シルト
a：砂
b（粘土）とc（砂）の互層

0
2m

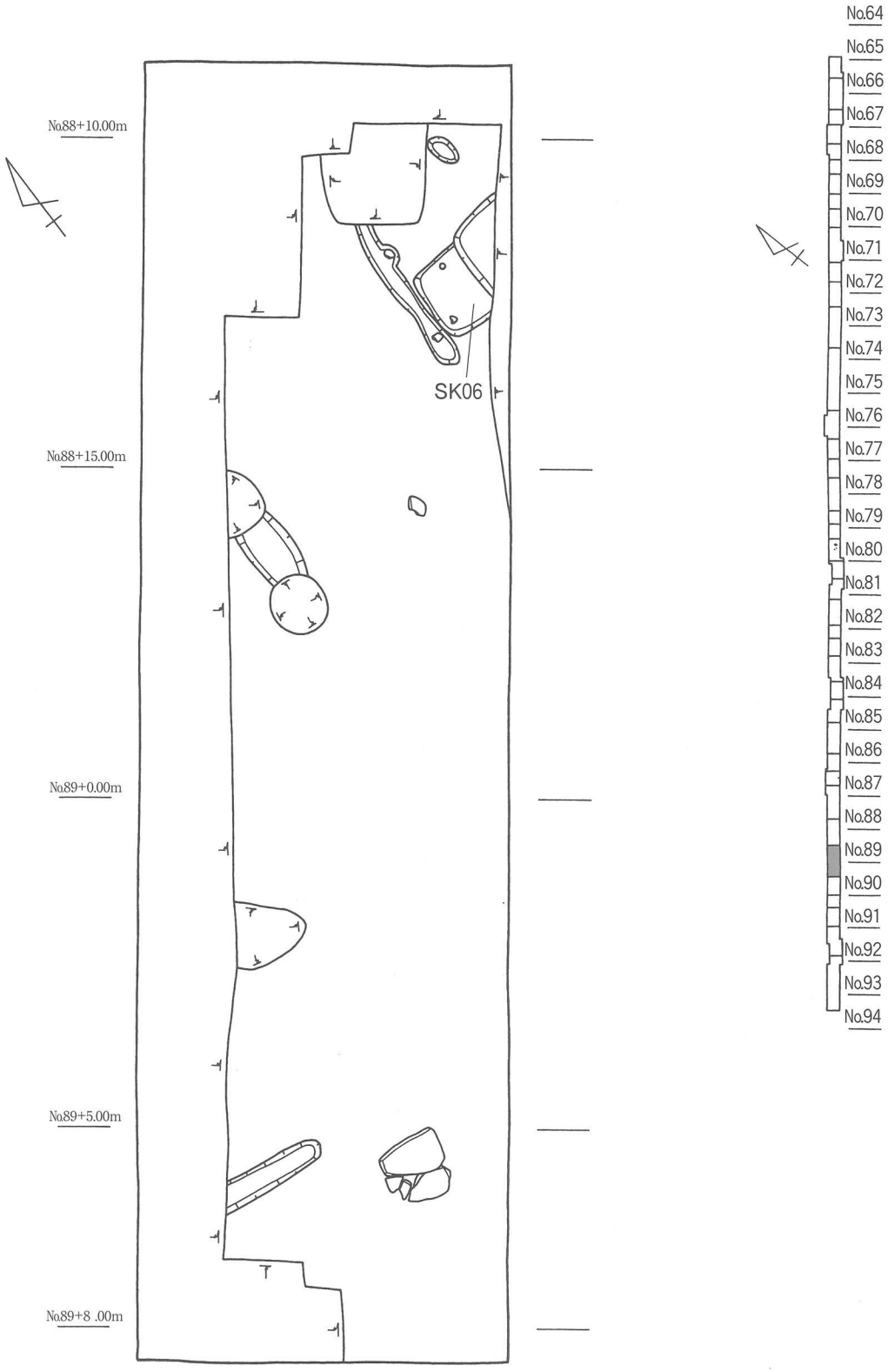
33区遺構平面図



第Ⅰ面

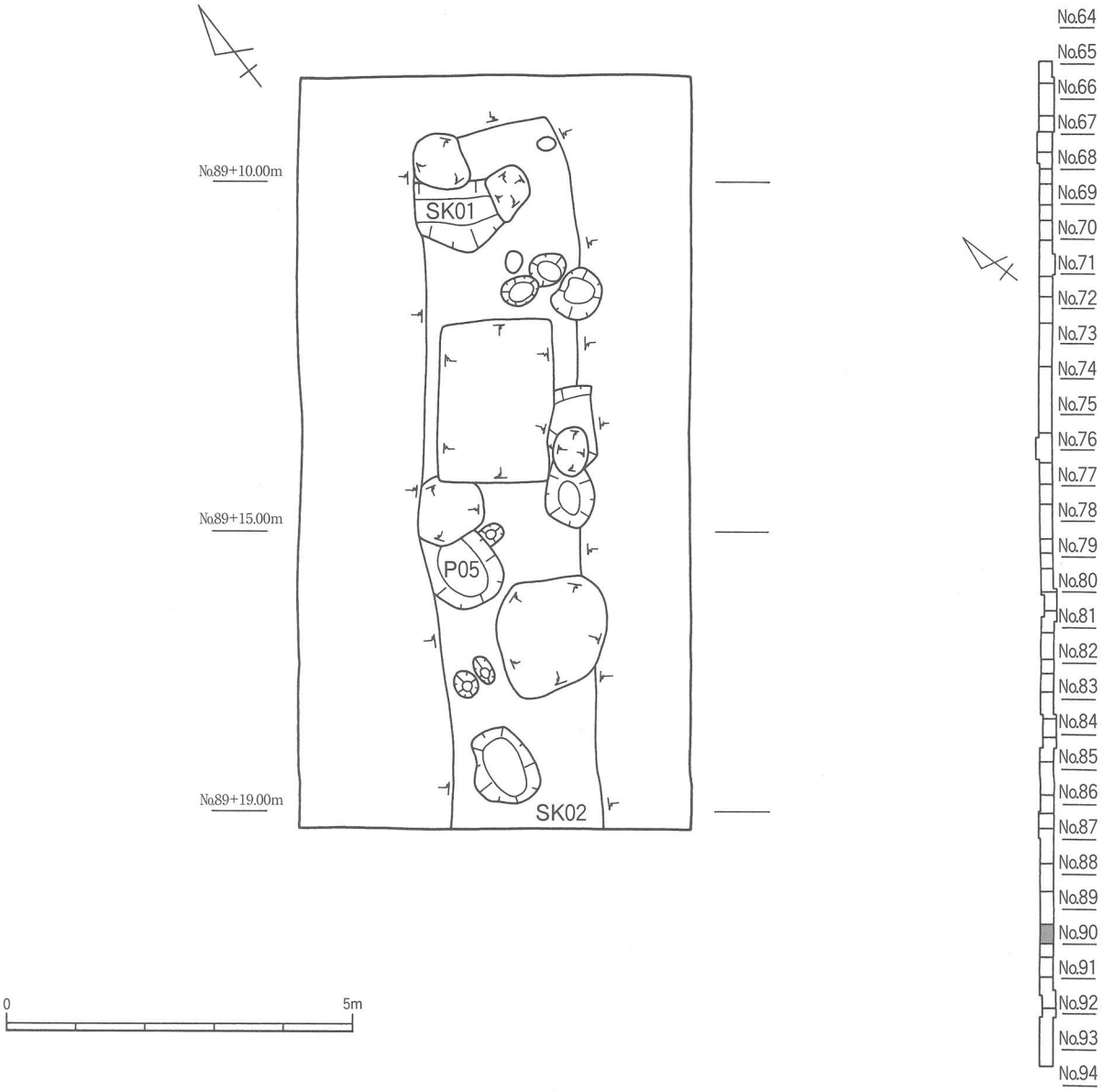
0 5m

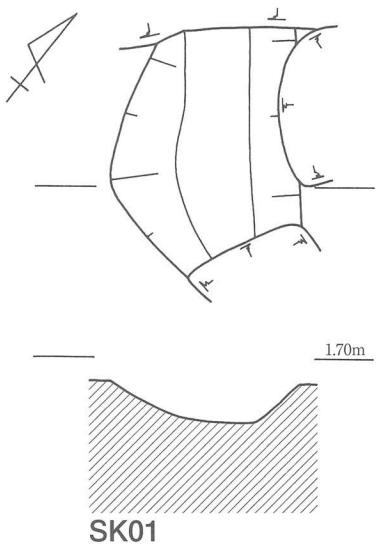
34区遺構配置図①

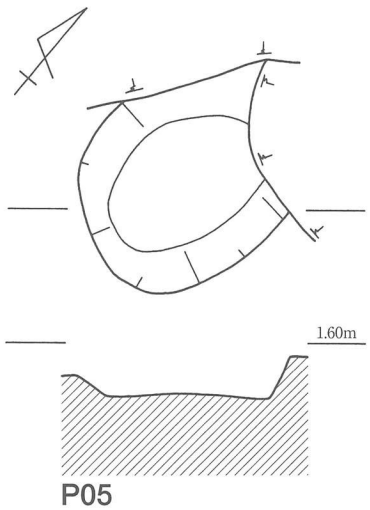


第Ⅱ面

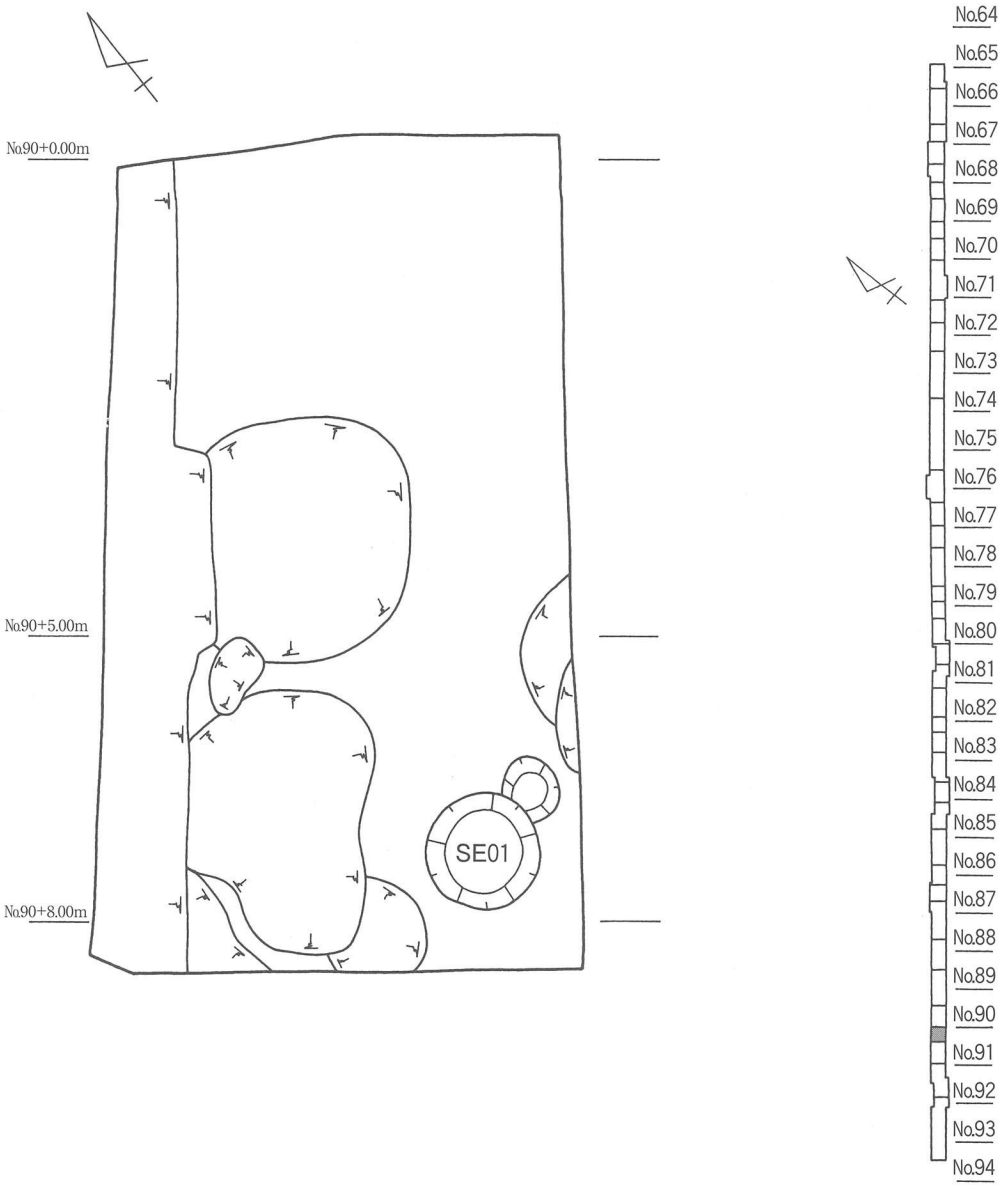
34区遺構配置図②



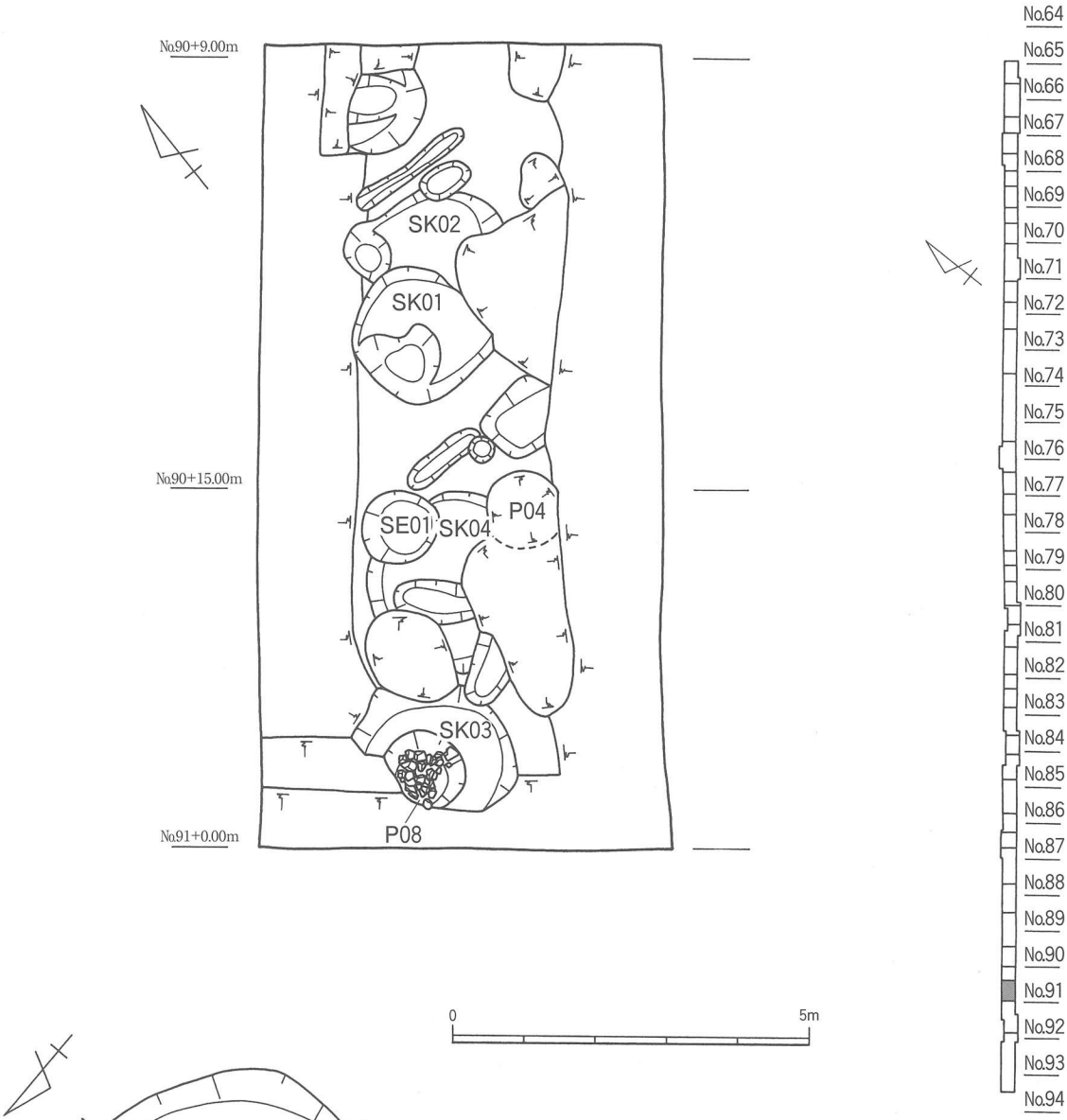


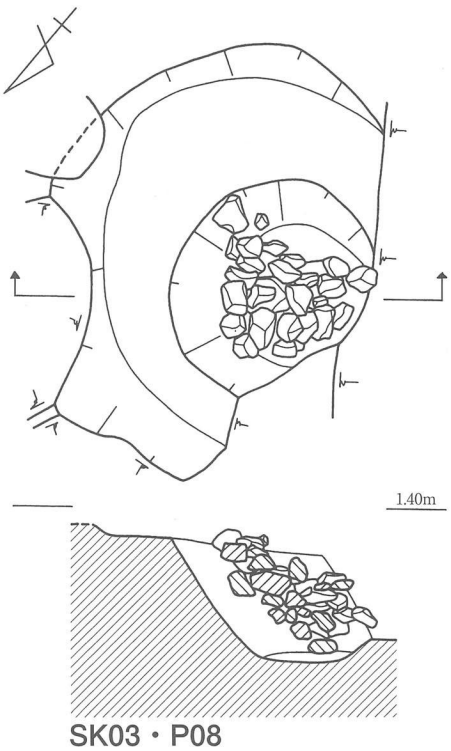


35区遺構配置図・平面図


No.64
No.65
No.66
No.67
No.68
No.69
No.70
No.71
No.72
No.73
No.74
No.75
No.76
No.77
No.78
No.79
No.80
No.81
No.82
No.83
No.84
No.85
No.86
No.87
No.88
No.89
No.90
No.91
No.92
No.93
No.94
No.90+0.00m
No.90+5.00m
No.90+8.00m
SE01
0
4m

36区遺構配置図

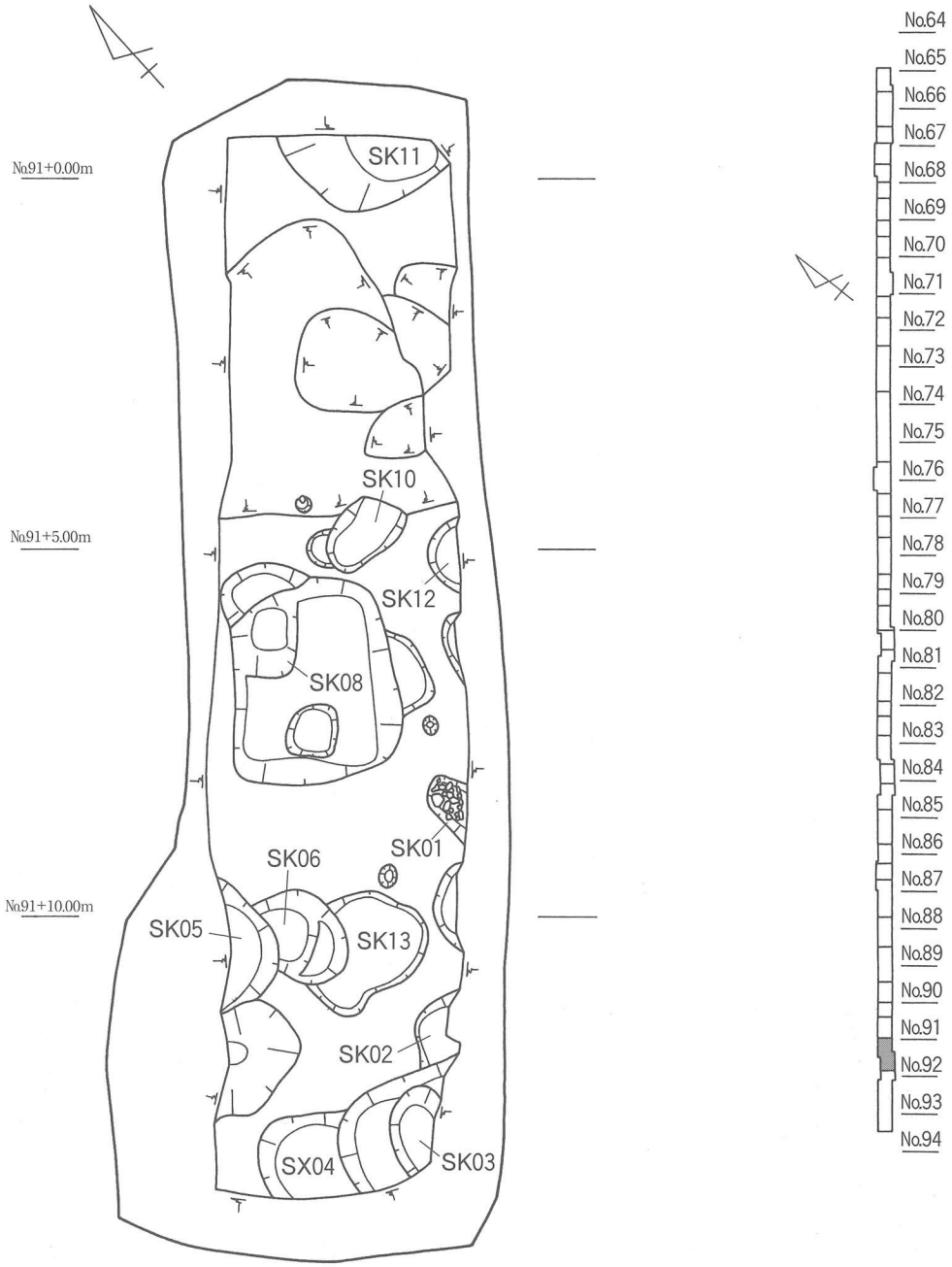




SK03・P08

0 2m

37区遺構配置図・平面図

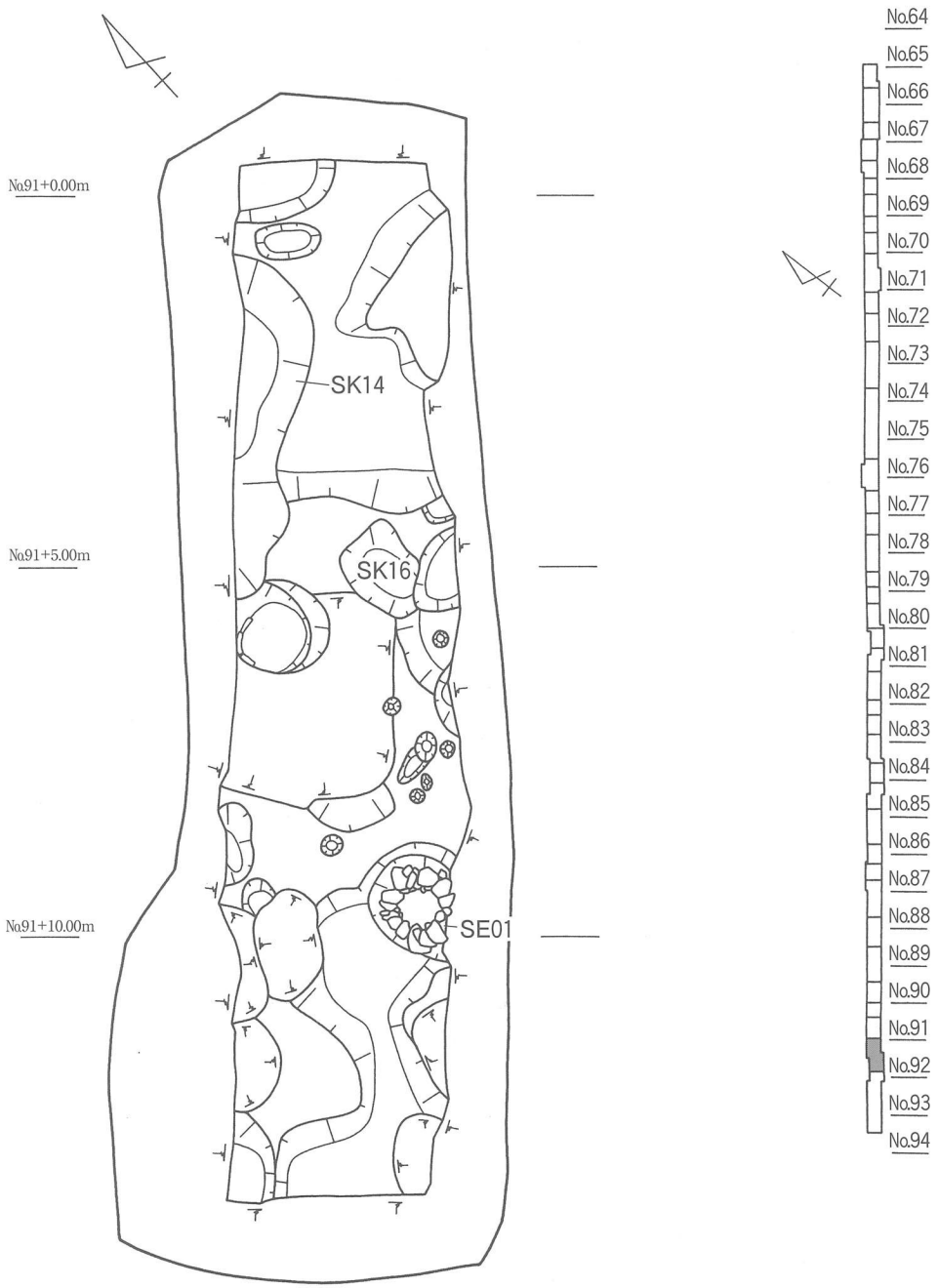


第Ⅰ面

0 5m

38区遺構配置図①

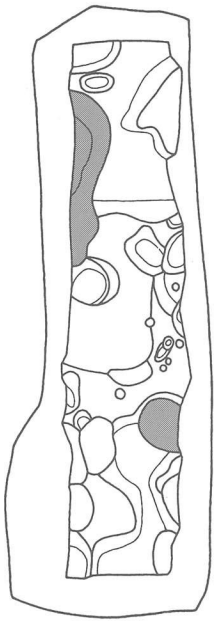
図版78

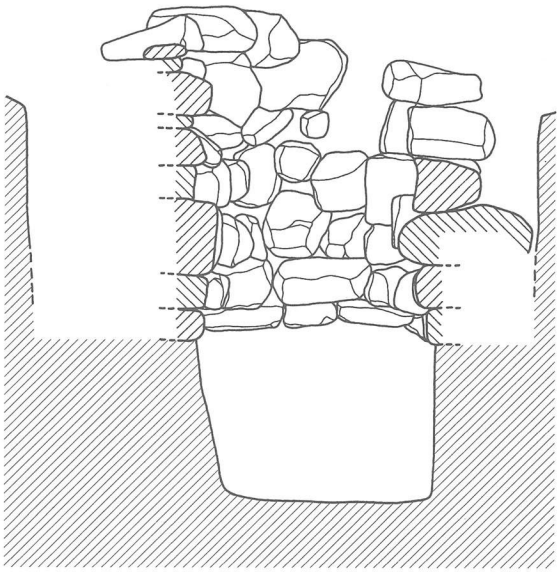


第Ⅱ面

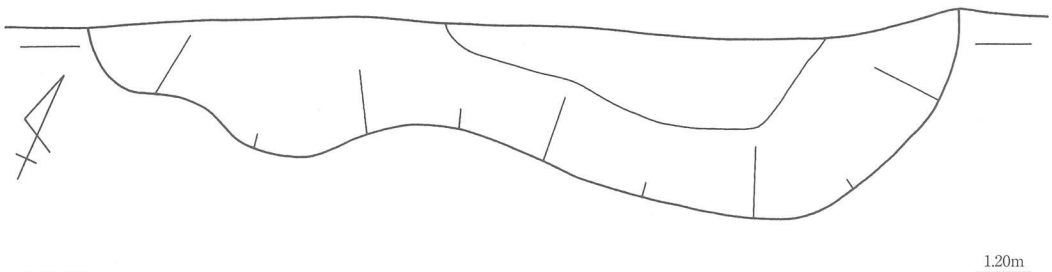
0 5m

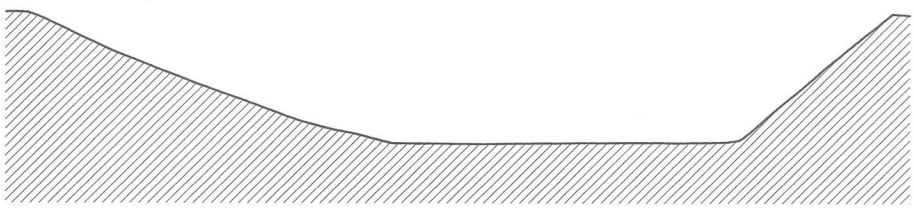
38区遺構配置図②





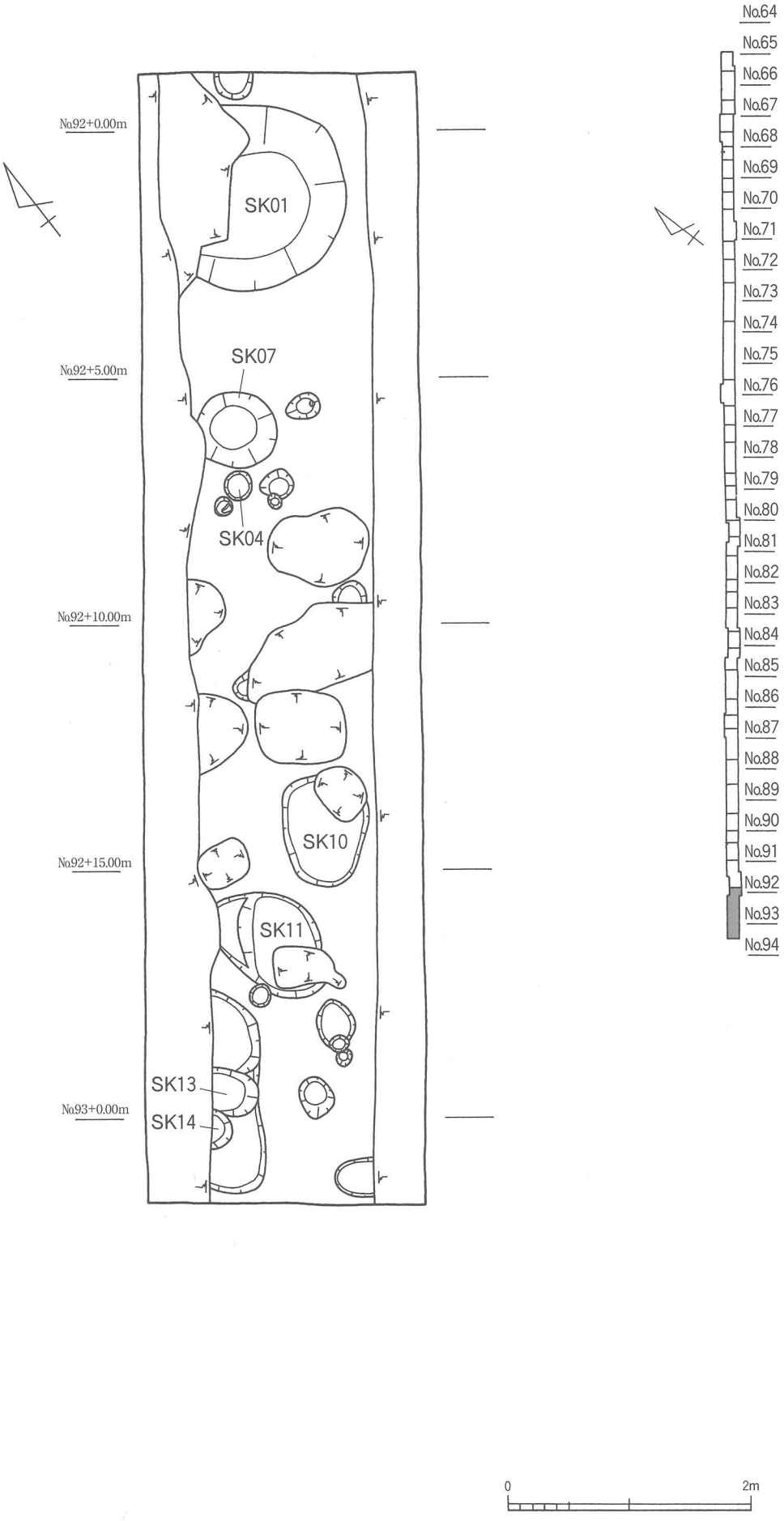
SE01



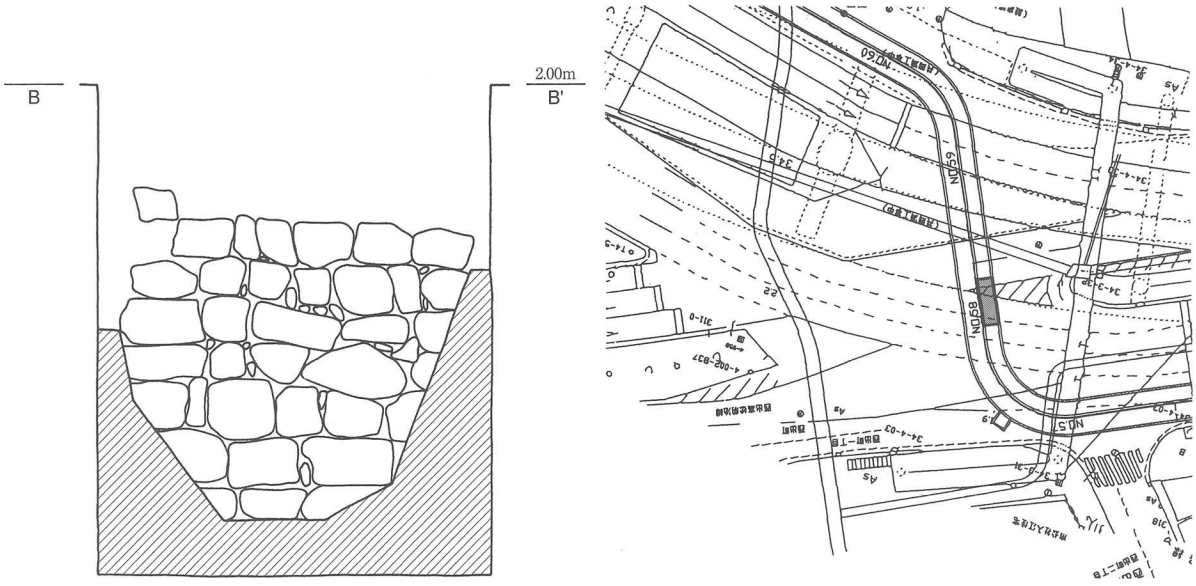


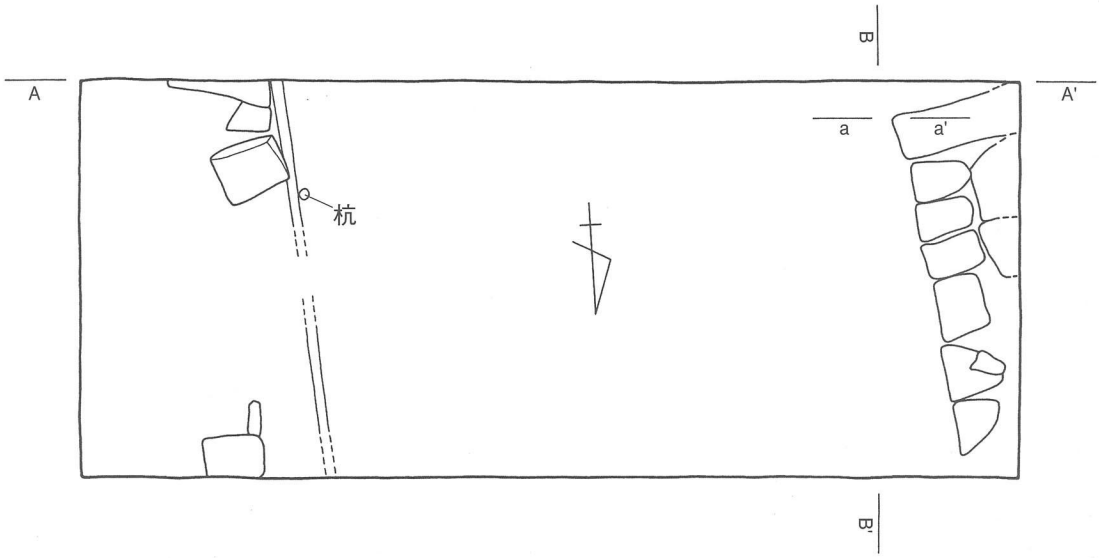
SK14

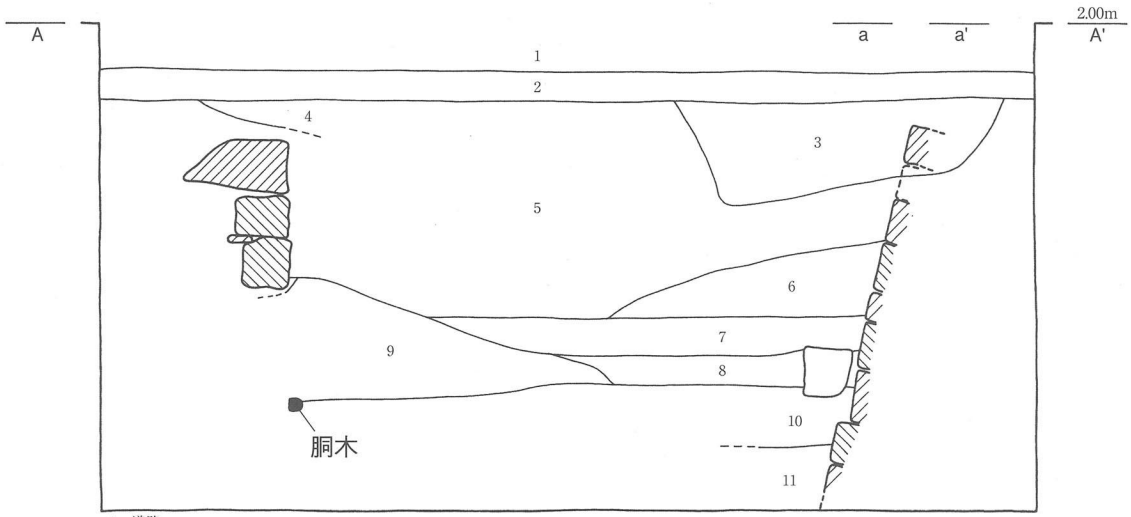
38区遺構平面図


No.92+0.00m
No.92+5.00m
No.92+10.00m
No.92+15.00m
No.93+0.00m
SK01
SK07
SK04
SK10
SK11
SK13
SK14
No.64
No.65
No.66
No.67
No.68
No.69
No.70
No.71
No.72
No.73
No.74
No.75
No.76
No.77
No.78
No.79
No.80
No.81
No.82
No.83
No.84
No.85
No.86
No.87
No.88
No.89
No.90
No.91
No.92
No.93
No.94
0
2m

39区遺構配置図



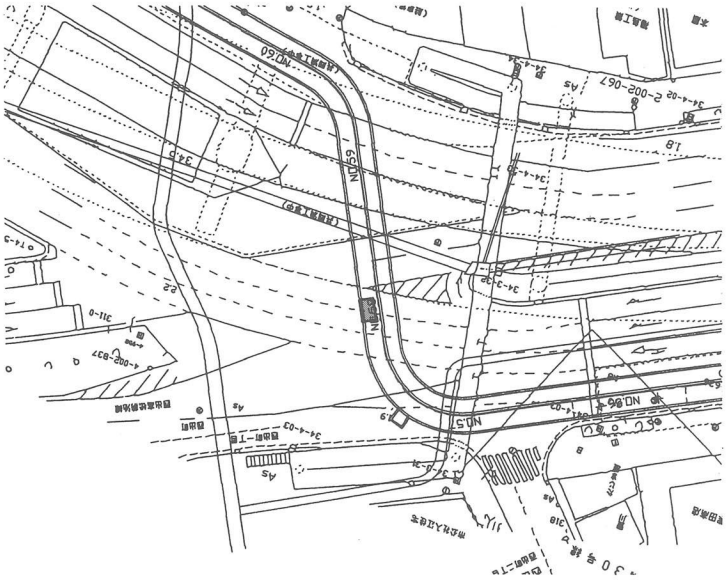


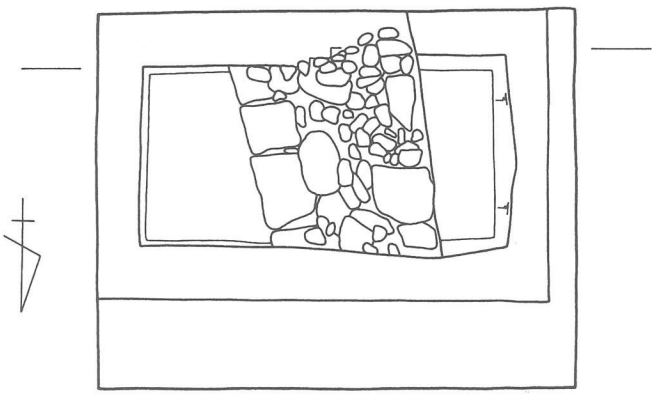


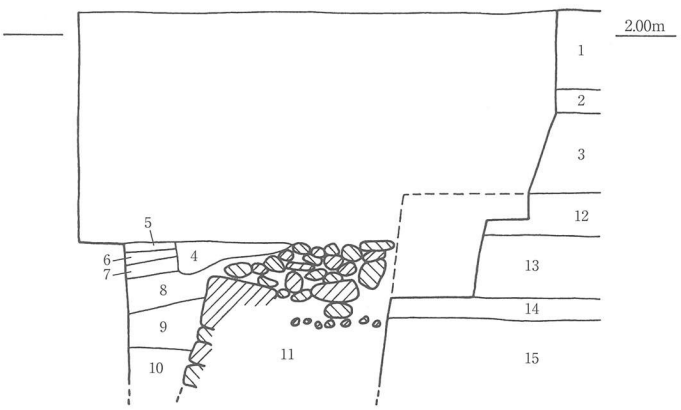
1 道路
2 コンクリート
3 黄色粗砂
4 黒色土
5 埋め土（黒褐色土）
6 焼土
7 黄色粗砂・暗灰色シルト
8 灰色粗砂・暗灰色シルト
9 埋め土（黒褐色土）
10 暗灰色粗砂
11 青灰色粗砂

0 2m

北トレンチ平面図・立面図・断面図



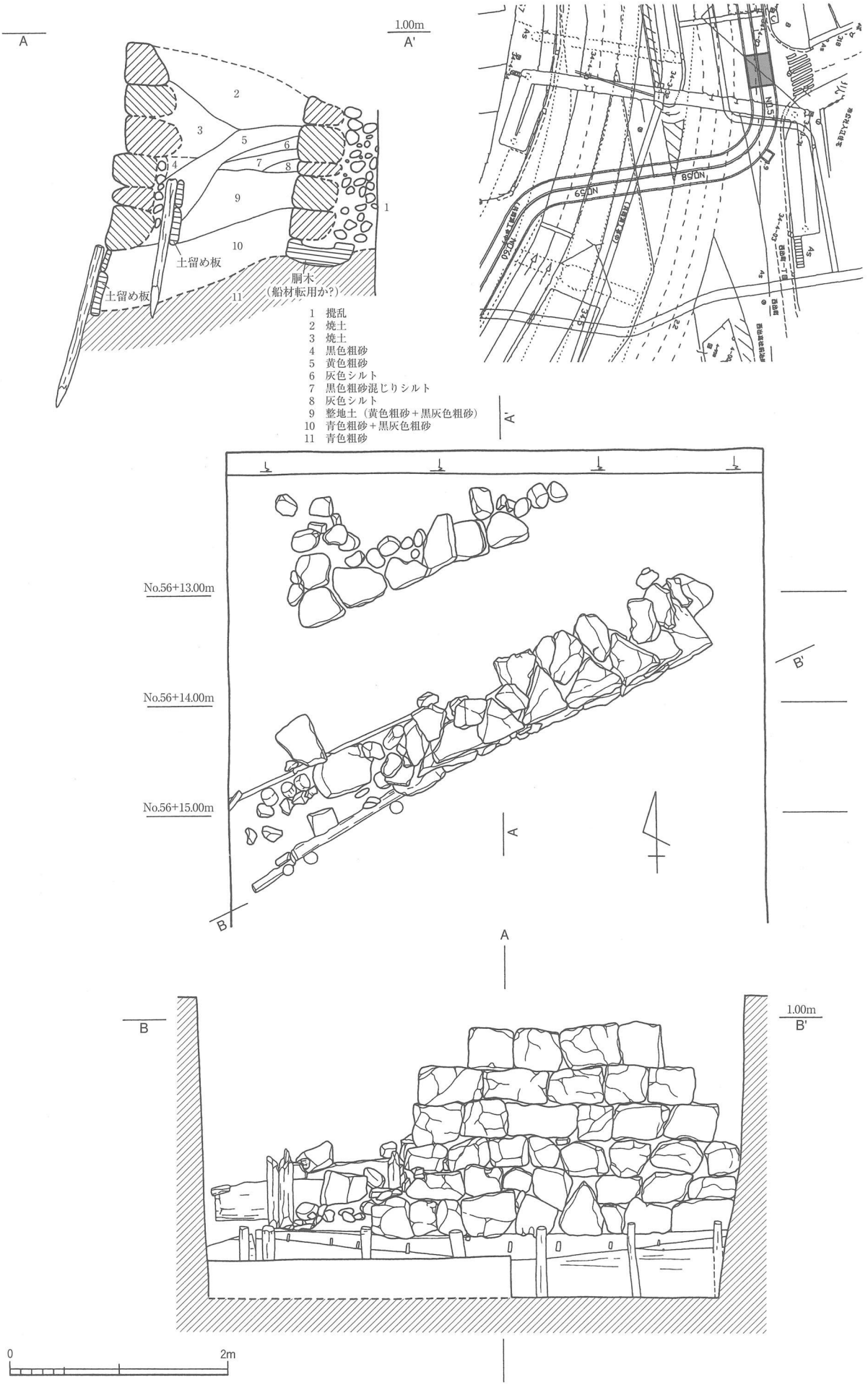




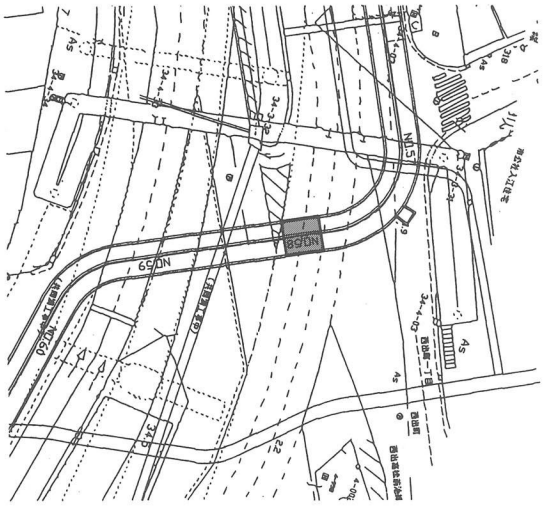
1 道路
2 コンクリート
3 攪乱
4 漆喰混土
5 漆喰混土
6 黒褐色土
7 暗灰色細砂（瓦混入）
8 黄灰褐色細砂
9 焼土（瓦混入）
10 黄色粗砂・暗灰色シルト
11 裏込め
12 整地土（黄色粗砂・暗灰色細砂）
13 整地土（黄色粗砂・暗灰色細砂）
14 黄色粗砂（ベース土）
15 茶褐色粗砂（ベース土）

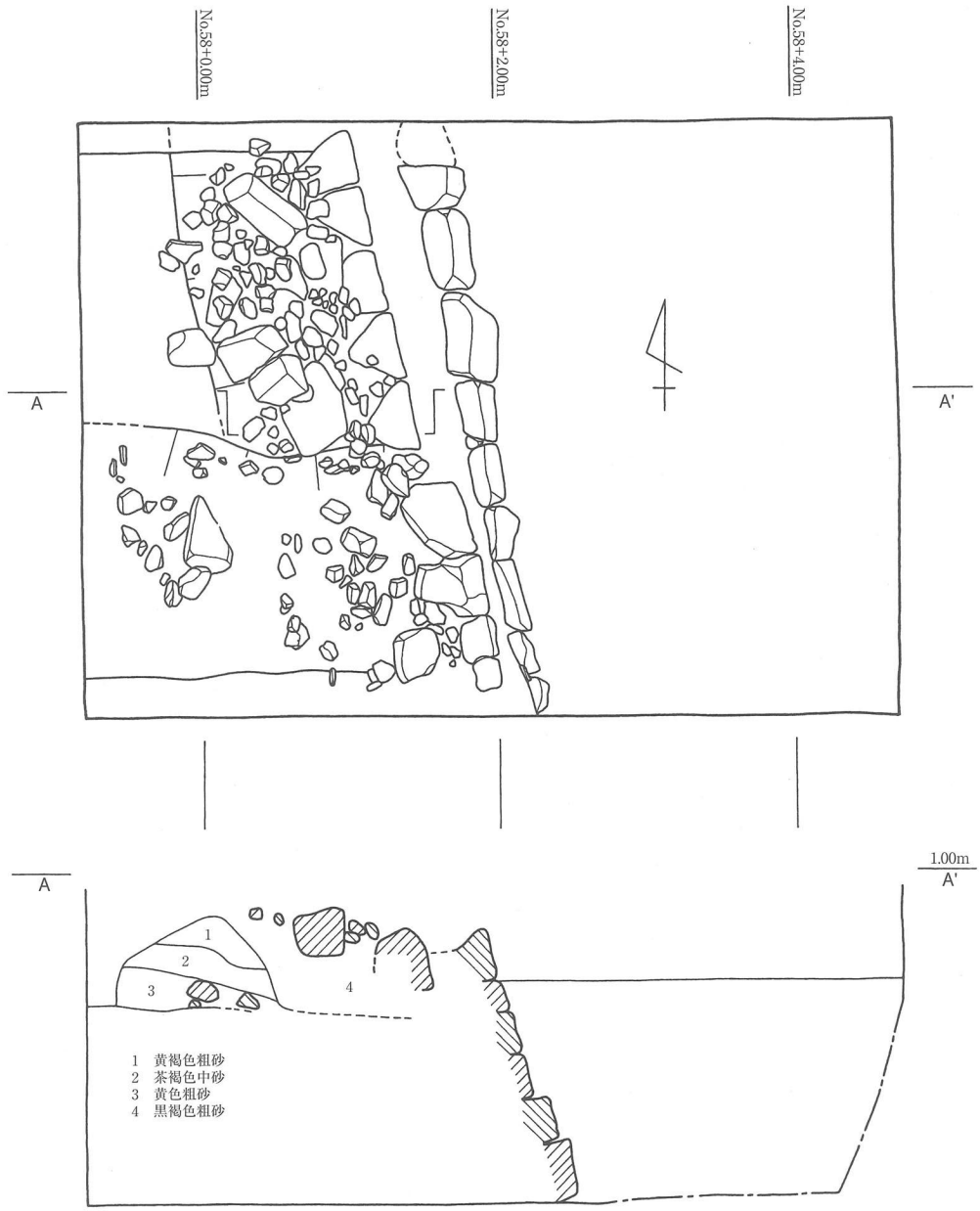
0 2m

南トレンチ平面図・断面図

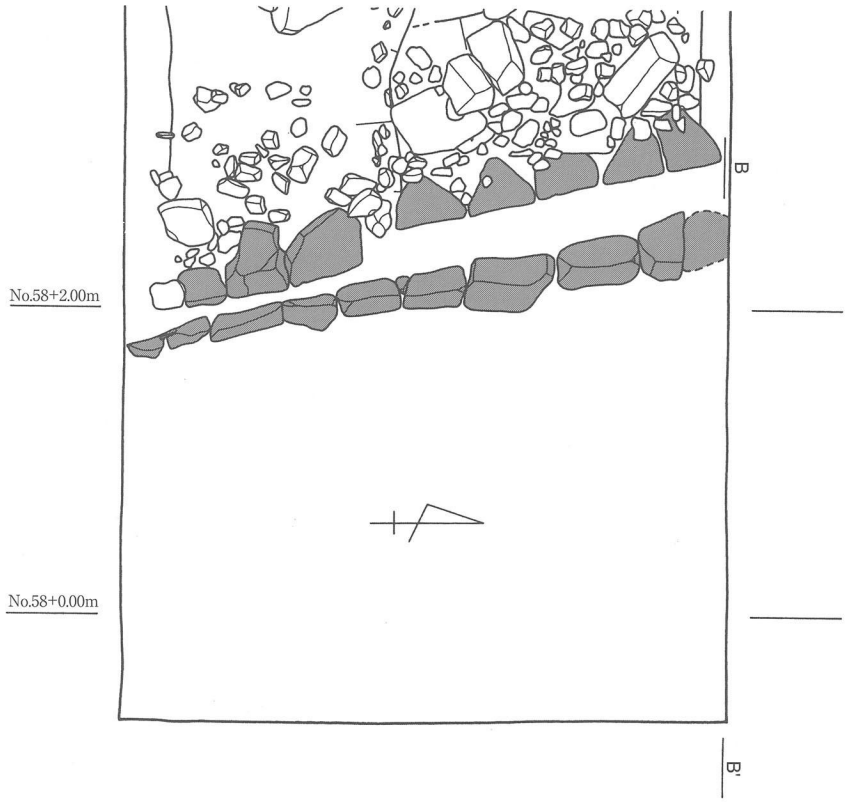


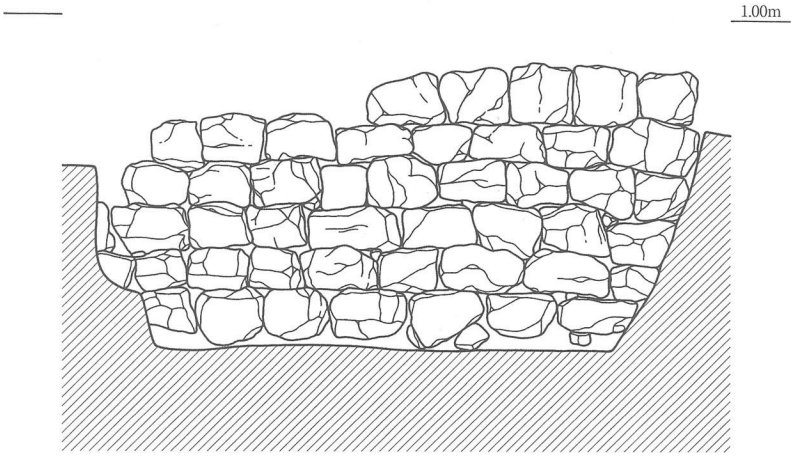
東地区石垣平面図・立面図・断面図　築造工程模式図

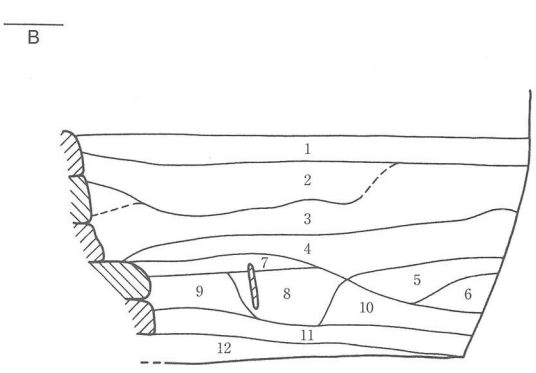




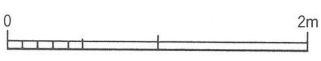
西地区石垣平面図・断面図







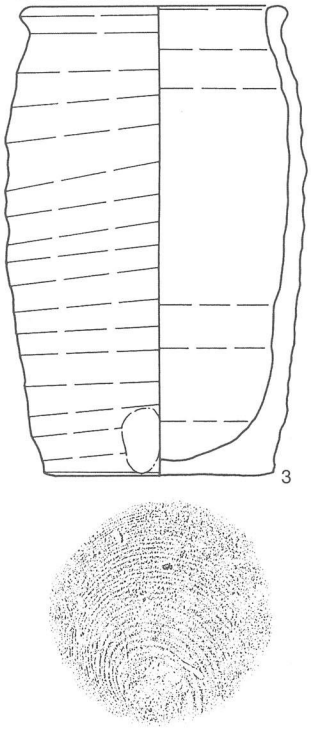
1 焼土
2 攪乱（黒灰色粗砂）
3 埋め土（黄色粗砂＋黒灰色シルト）
4 黒灰色細砂＋青灰色細砂（ラミナ）
5 暗灰色細砂
6 青灰色粗砂＋黒灰色粗砂
7 暗灰色細砂＋黄色粗砂
8 青灰色細砂＋黒灰色細シルト
9 黒灰色粗砂＋暗灰色細砂
10 黒灰色粗砂＋青色細砂
11 黒灰色粗砂主＋青灰色細砂
12 青灰色細砂主＋黒灰色粗砂



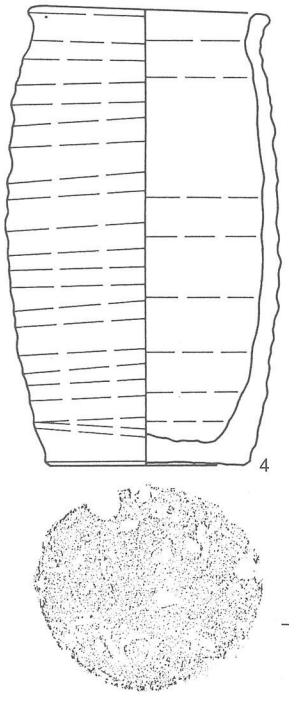
西地区石垣立面図・断面図

1区　包含層中

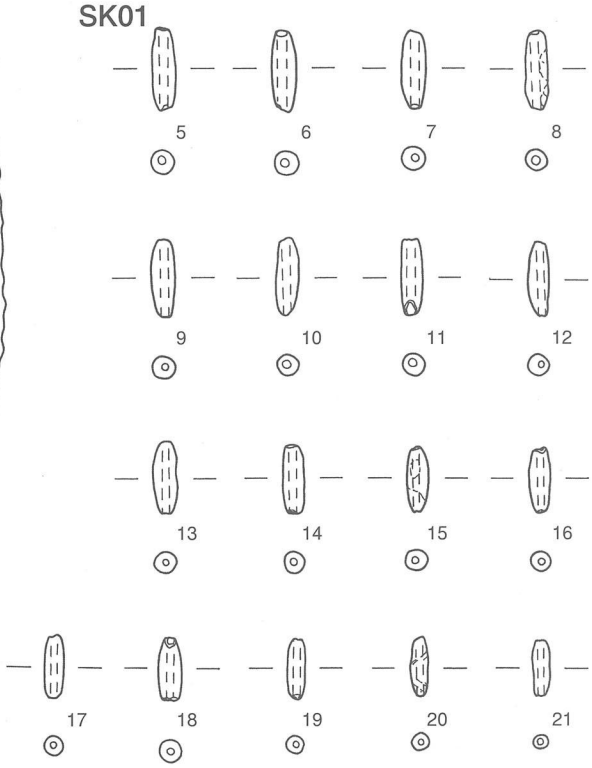
2区　SX01



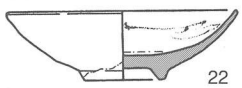
SX03



SK01

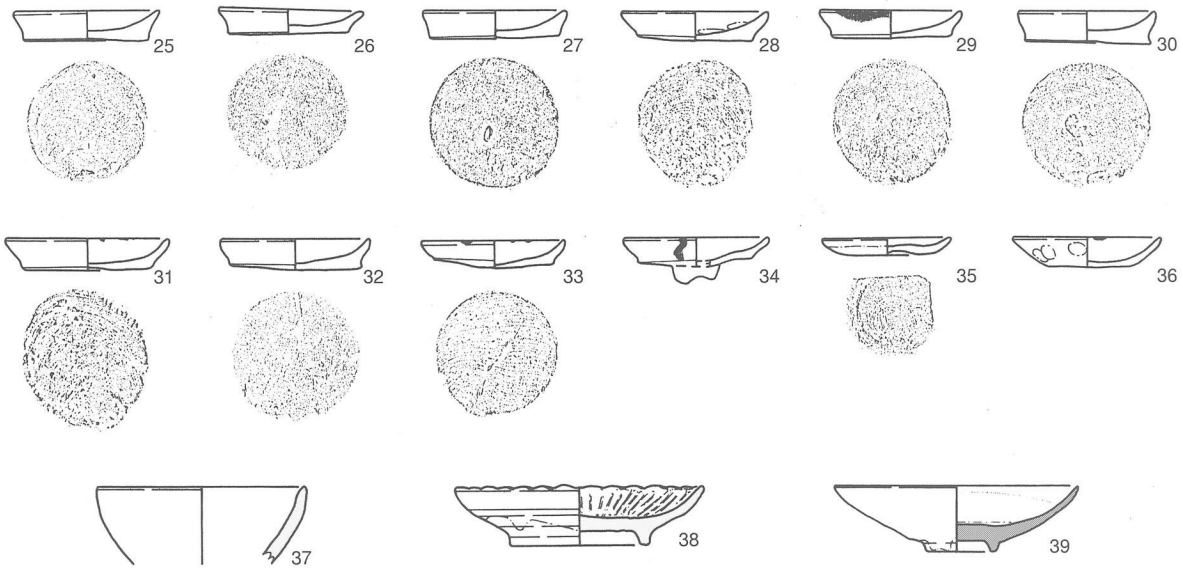


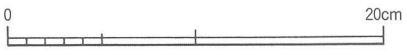
Pit内



建物整地層中

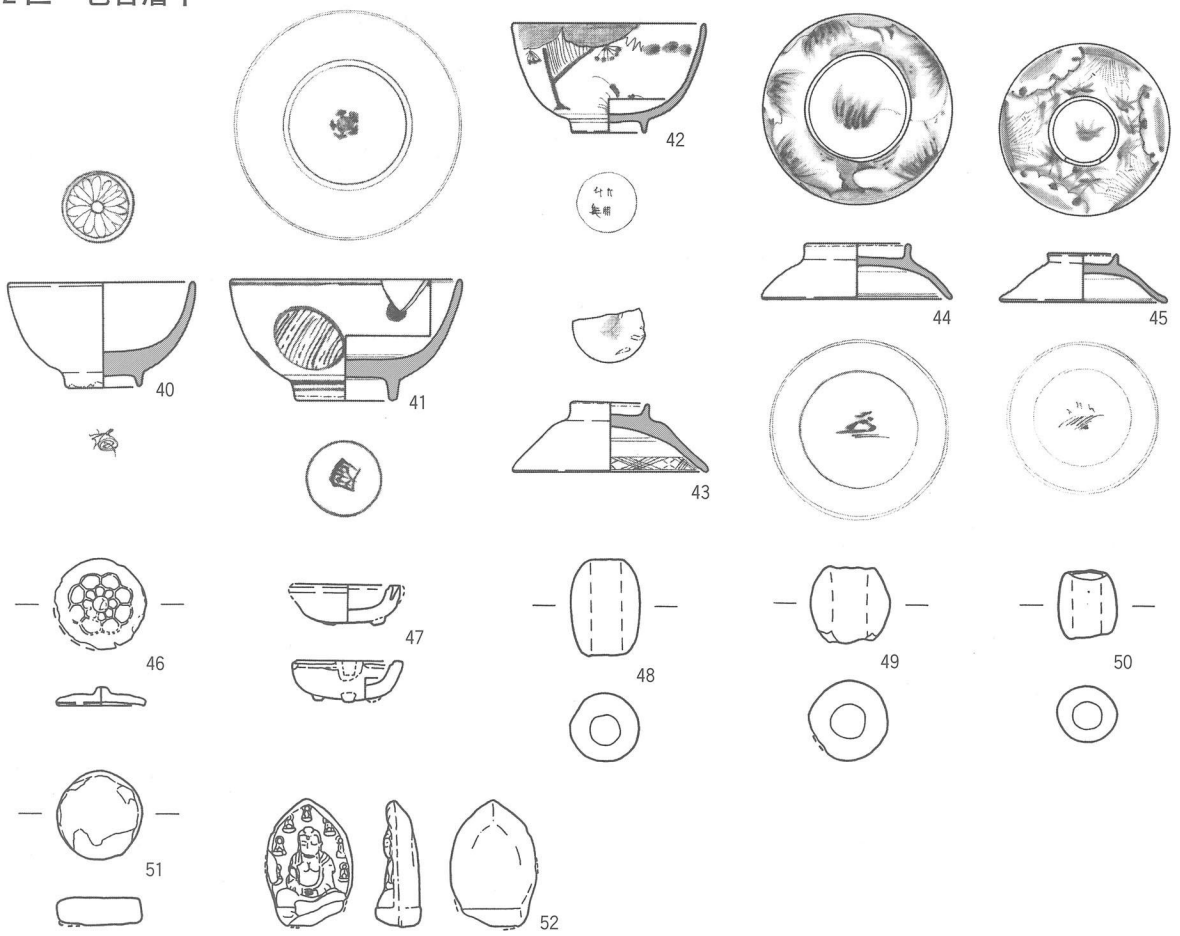
包含層中



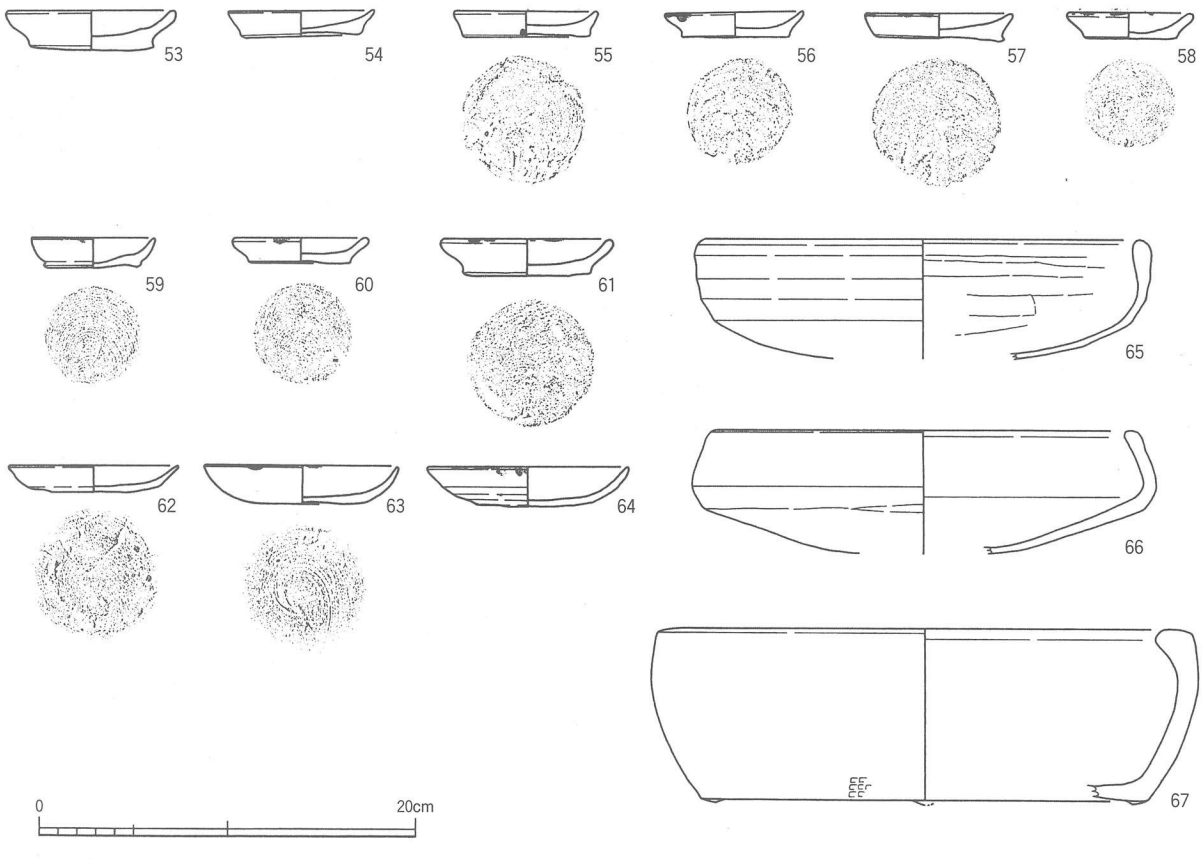


1・2区出土遺物

2区　包含層中

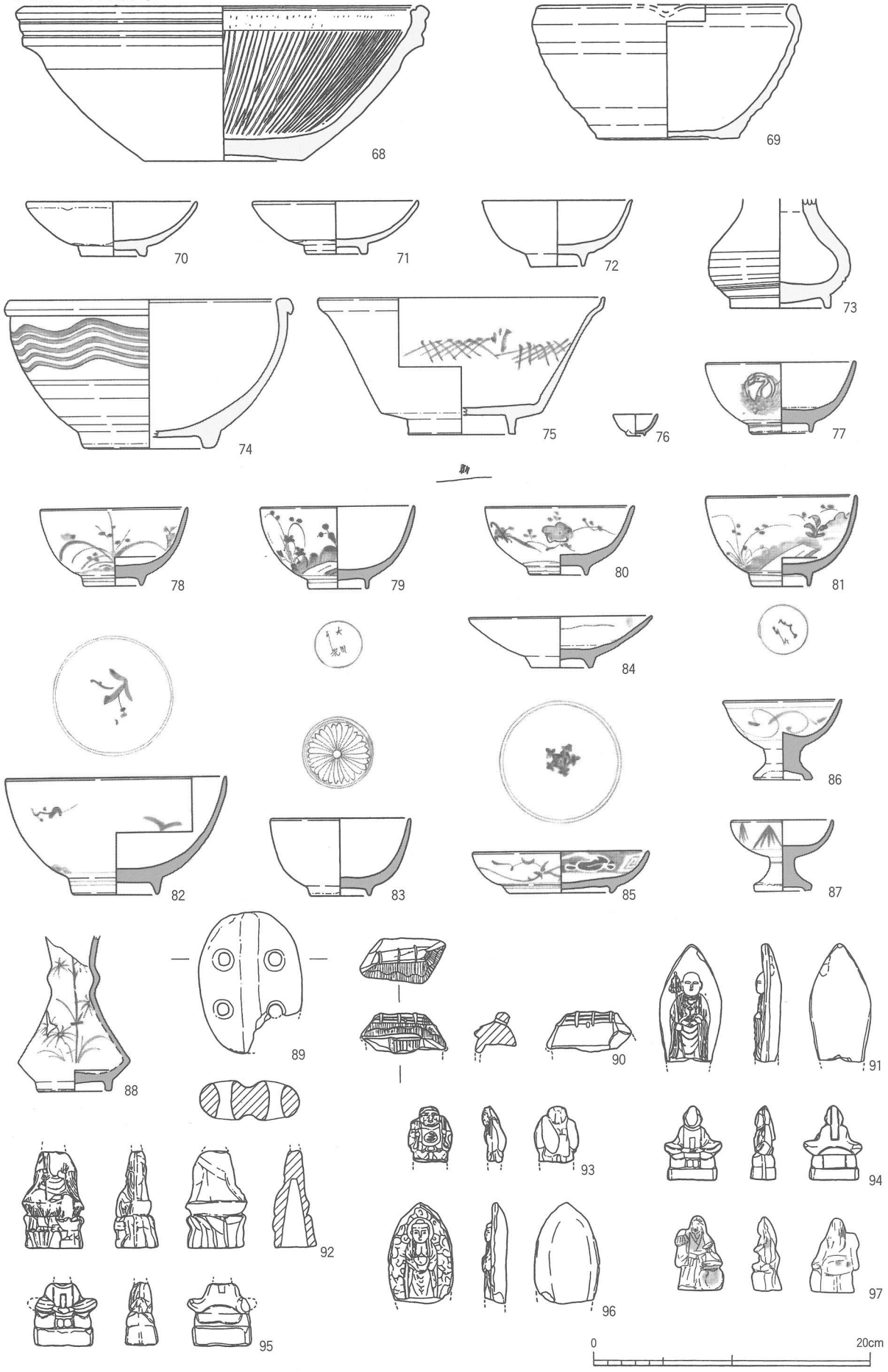


3区　包含層中



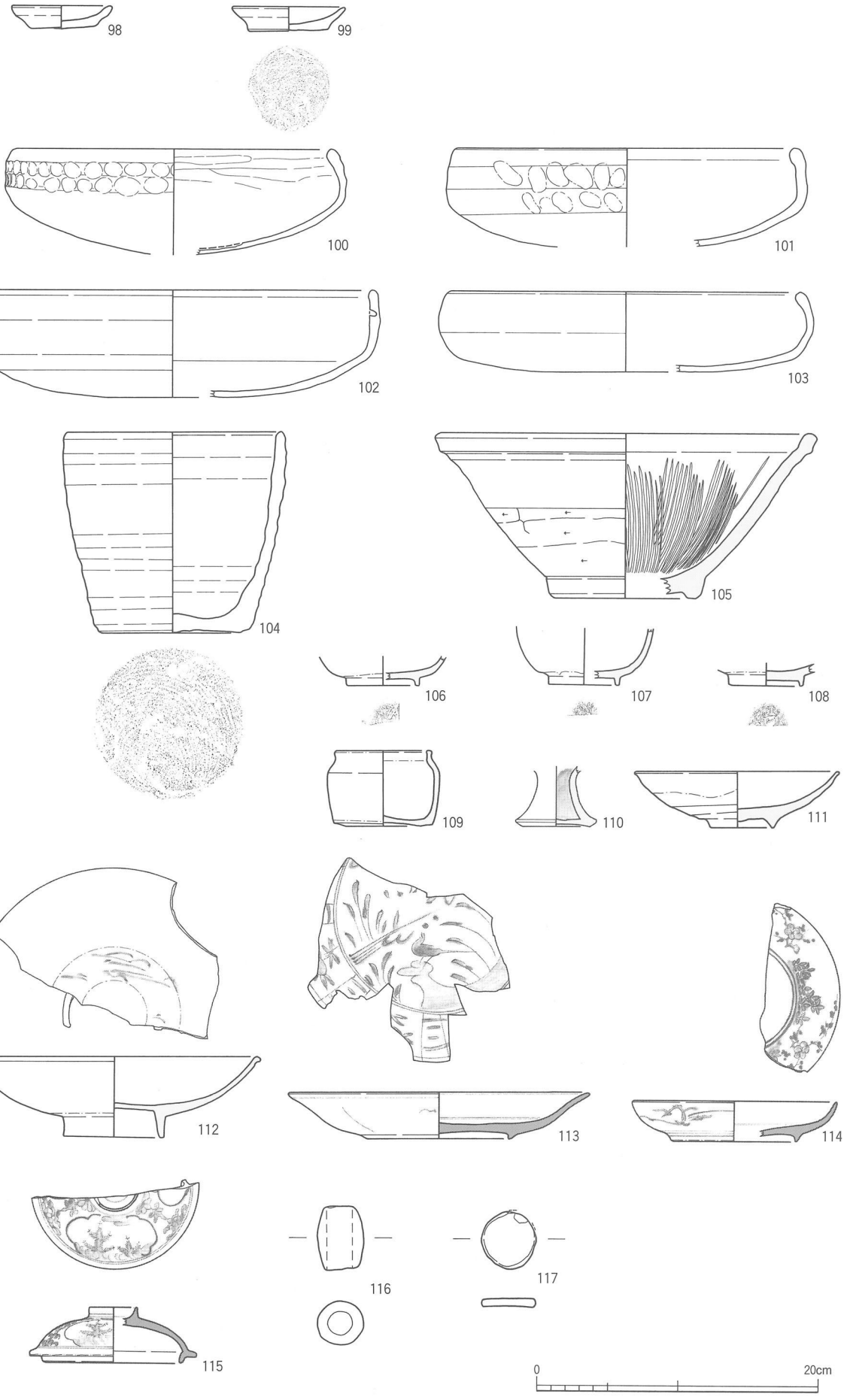
2・3区出土遺物

3区　包含層中



3区出土遺物

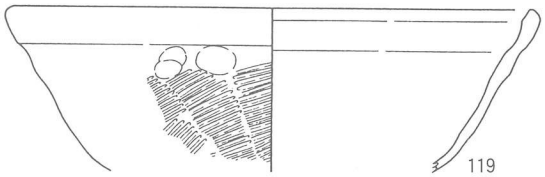
4区　包含層中

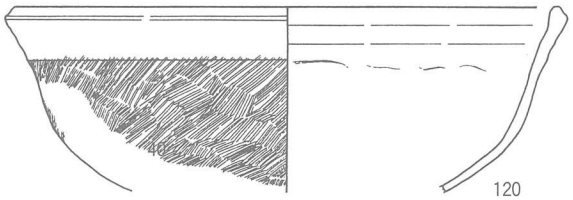


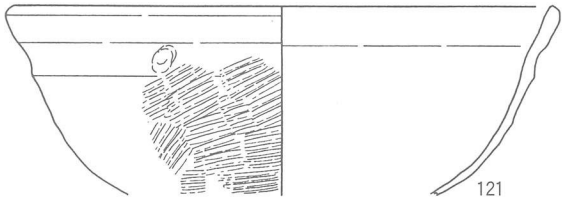
4区出土遺物

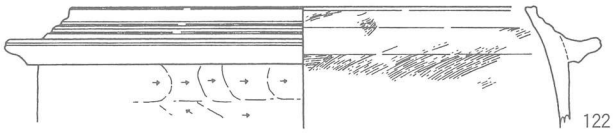
7区　包含層(第3～4層)中

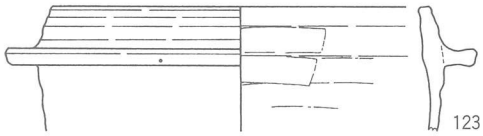
118

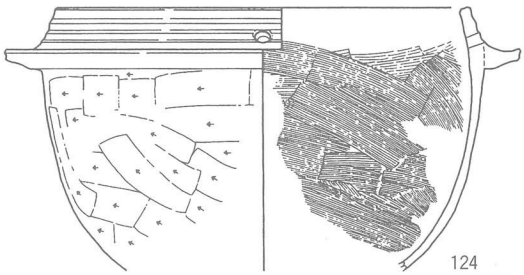

119

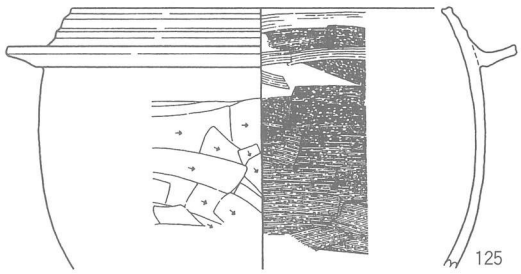

120

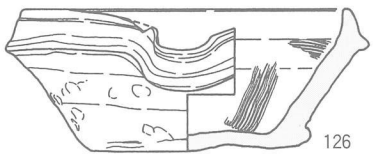

121

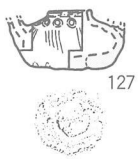

122

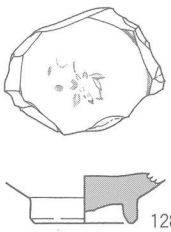

123


124

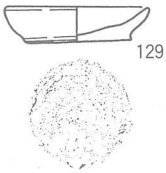

125


126


127

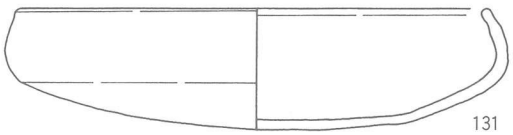

128

包含層(第1層)中

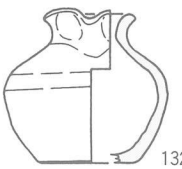

129

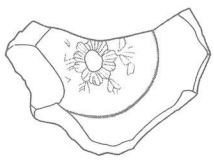
130

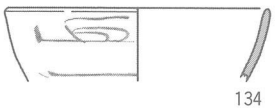
8区　SK03

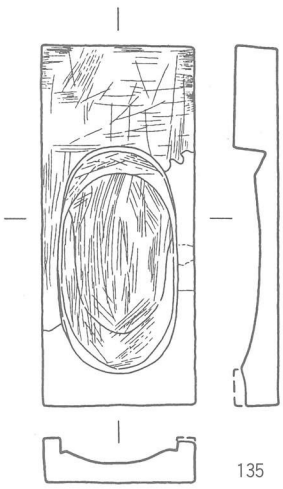

131

SK05


132


133

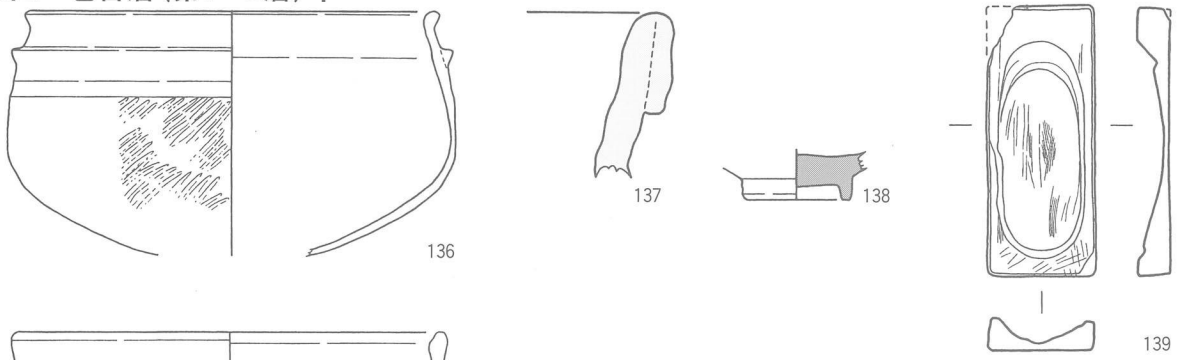

134


135

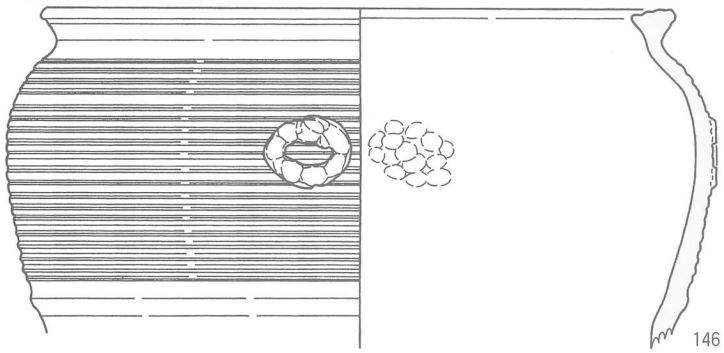
0　20cm

7区出土遺物　8区出土遺物①

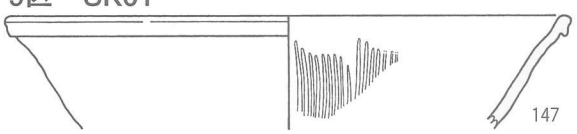
8区　包含層（第1～2層）中



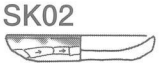
包含層（攪乱層）中



9区　SK01



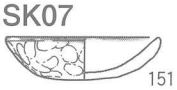
SK02



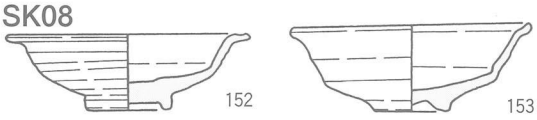
SK03

SK05

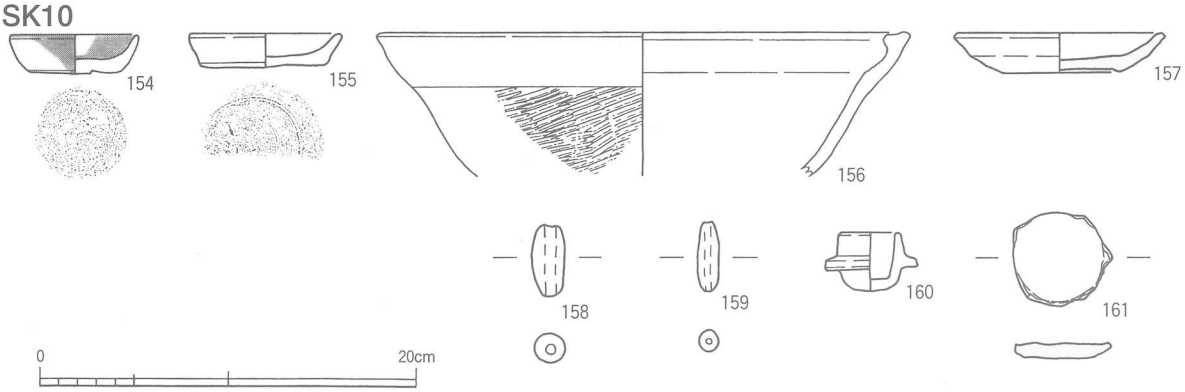
SK07



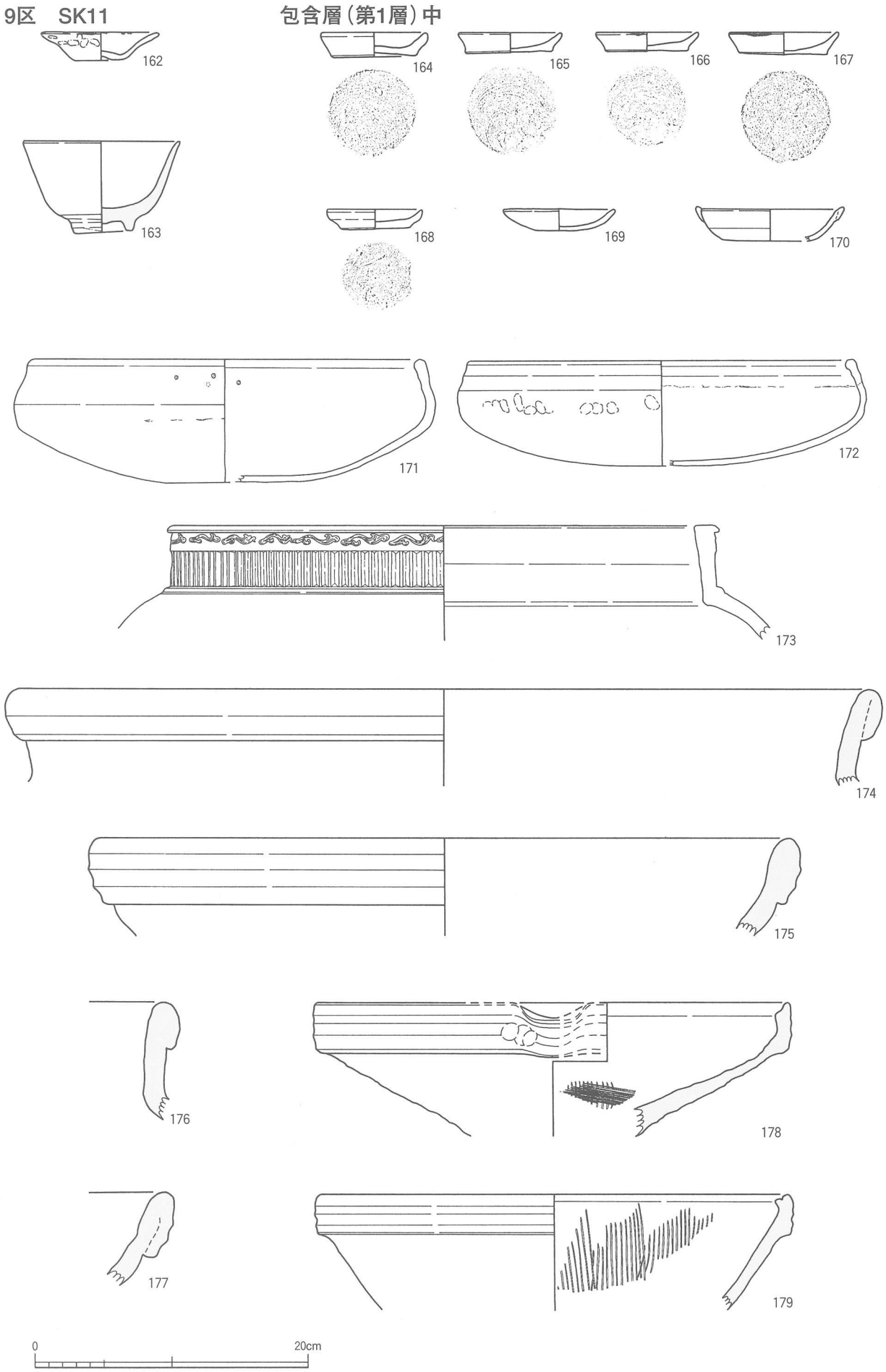
SK08



SK10

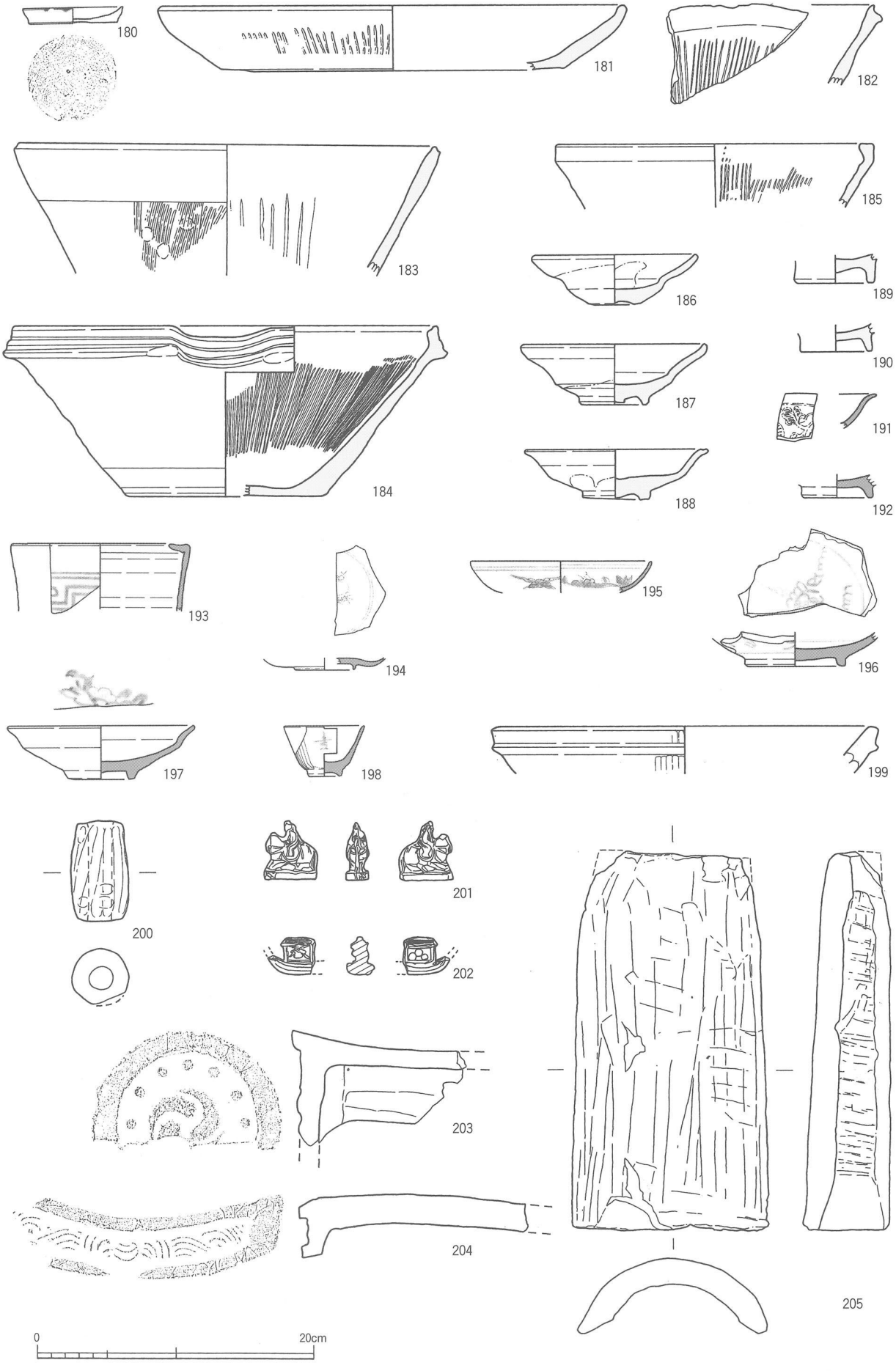


8区出土遺物②　9区出土遺物①

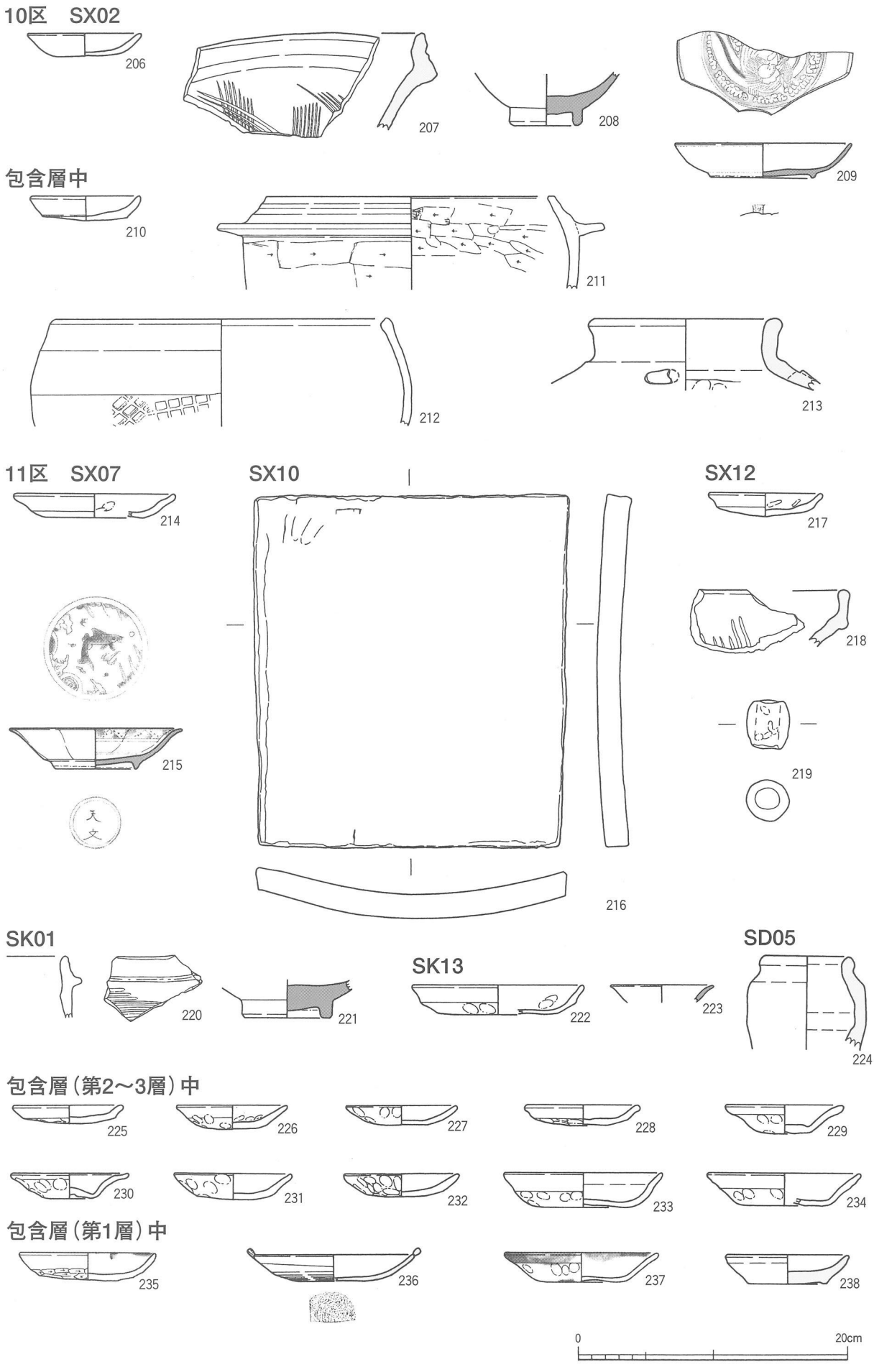

9区　SK11
包含層（第1層）中
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
0
20cm

9区出土遺物②

9区　包含層（第1層）中



9区出土遺物③



10区出土遺物　11区出土遺物①